第百十年（通巻一六八号）

山岳

二〇一五年

山岳　二〇一五年　目次

［記録］

厳冬期黒部横断……澤田　実／中島　健郎……7
東へ350km・知床岬へ……北海道支部オホーツク分水嶺推進委員会……13
山葵四重奏……谷口　けい……57
ザンスカール・P6070（L15）初登頂……学習院大学山岳部インド・ヒマラヤ登山隊2014……77
ムスターグ・アタ登頂……東京農業大学ムスターグ・アタ登山隊……80
ムスタン山群・マンセイル峰初登頂……日本山岳会学生部ムスタン女子登山隊……106
アマダブラムへの挑戦……法政大学体育会山岳部アマダブラム登山隊2014……115

［調査・研究］

原発事故による宮城県の山地および丘陵地の放射線量……柴崎　徹……120
南チベット2014年秋4500km――遠ざかる辺境……中村　保……158

［読物］

アルバータ峰登頂90周年と伝説のピッケル……芳賀　孝郎……183
東ジャワの山　アルゴプーロ山……児玉　茂……204
立山信仰を具現化した江戸時代の布橋灌頂会……五十嶋　一晃……229
山脈・人脈――歩いてきたみち……國見　利夫……257

図書紹介

剱沢幻視行（和田城志）……山本宗彦…275／スキー山岳部の歴史（東京大学山の会）……佐藤文昭…277／田部重治の登山と英文学（五十嶋一晃）……三好まき子…278／アルピニズムと死（山野井泰史）……晝間弘子…281／山　その日この人（斎藤一男）……近藤雅幸…284／真昼の星への旅（水越　武）……財津達弥…288／『登高行』XX（慶應義塾体育会山岳部）……松家　晋…290／Climbing Fitz Roy 1968（Yvon Chouinard ほか）……横山勝丘…293／The Alpine Journal 2014（The Alpine Club）……南井英弘…295

追　悼

古屋学而さん（内藤順造）…303／木下是雄さん（荒川一郎）…306／藤本慶光さん（大貫良夫）…310／村井　葵さん（米本隆夫）…313／尾崎徳郎さん（山本良三）…318／秦野一彦さん（関口興洋）…322／大西　保さん（重廣恒夫）…324／大谷一良さん（三宅　修）…326／吉永定雄さん（水谷弘治）…329／山田二郎さん（田辺壽）…332／池田錦重さん（尾上　昇）…334

会務報告……339
支部の活動報告……372
委員会の活動報告……427
山岳図書目録（2015年）……A16

表紙デザイン＝小泉　弘
表紙画＝田立泰彦

厳冬期黒部横断

新越尾根―岩小屋沢岳北西尾根―十字峡横断―黒部別山北尾根―八ツ峰―早月尾根

澤　田　　実

＊期間／２０１４年12月19日～29日（11日間）
＊メンバー／上田幸雄、成田賢二、中島健郎、澤田実

会社を辞め、10年ぶりに冬の黒部横断を考えていたところ、折良く例年横断を試みている上田さんパーティに混ぜてもらえることになった。23泊24日の、八ツ峰登攀を含む計画となった。

会報「山」８３８号（２０１５年３月号）で中島は「黒部自体は今年で３シーズン連続であるが、八ツ峰を組み込んだ計画は昨年に続き２回目。昨年は黒部別山第１尾根を登り終えた後、ハシゴ谷乗越で３日間停滞している間にチャンスを失った。今年こそは八ツ峰から剱へ立ちたいということで、前半はなるたけ労力のかからないルート採りで黒部横断を行なうこととなった」と記している。

12月19日　快晴

11：55日向山ゲート―14：00扇沢―15：30新越尾根ca.1550mトンネル入り口

10：30大町駅前に全員集結し、最終の装備分けをして入山。荷物は最軽量の澤田のもので32kg、最重量の中島で38kgくらい。重荷にあえいで２時間で扇沢。扇沢から林道沿いに、先頭空身ラッセルで入る。新越尾根下部のトンネル入り口にテントを張る。翌日のために約１時間ラッセルして帰幕する。

12月20日　晴れのち曇りのち雪

5：50出発―10：50後立山連峰稜線―11：50岩小屋沢岳―14：10北西尾根ca.2120m

暗いうちから昨日のトレースを追うが、すぐにラッセルになる。黙々とラッセルを続けて5時間で後立山の稜線へ。このころより風が吹き、雪が舞うようになる。アイゼンに履き替えて岩小屋沢岳へ。北西尾根の入り口は分かりにくいが、視界のあるうちに入ることができた。下りであっても傾斜が落ちると途端に深くて重いラッセルになり、また先頭空身ラッセルで進む。疲れた。

12月21日　雪ときどき曇り

6：15出発―9：45／1583mピーク―11：00　ca.1320m台地

今日は十字峡横断までできればと考えていたが、時間的な余裕がなく、初見で突っ込むリスクを考えて、アプローチだけにする。上田、澤田がテントサイト造りをしている間、若い2人が下降点の下見に行く。幸い十字峡の上流100～200mにあるスノーブリッジも確認できたとのこと。

12月22日　雪

6：45出発―7：40懸垂始めca.1140m―10：00黒部川―11：00対岸ルンゼ上―13：10　ca.1050mテントサイト

急斜面の下りをアイゼンで出発する。すぐに前日確認していた下降点に着く。重荷を背負ってキノコ雪を2段懸垂すると、いきなりの空中気味の懸垂。ザックからもスリングを繋げておいて良かった。そこからシングルで4P下りると、真下のスノーブリッジが見えてきた。ここからロープを繋いで60mで河原のデブリに届く。成田さんが先頭でルートを拓いた。

スノーブリッジは結構しっかりしていた。対岸のデブリを登りつめて右トラバースするが、上部からのチリ雪崩がときどきあり、気を遣った。最後の硬いバーンは上田さんが力で登ってフィックスを張る。皆で登り終えてひと安心。せっかくなので十字峡を見に行った。やはりここはすごい所だと思う。

12月23日　雪のち曇りときどき晴れ

6：40出発―14：10　ca.1610m

テントサイトの上の雪の斜面は、雪崩を考慮してロープで確保して登る。その後も大きな斜面や急なブッシュ尾根などにルート工作をする。手間のかかる登攀。次第に天気が快方に向かい、午後は晴れ間ものぞいた。

12月24日　曇りのち雪

6：45出発―11：00ジャンクション・ピーク―12：00 ca.1980mコル

前日に続いてラッセルしながら面倒な尾根にルートを延ばす。途中、キノコ雪のリッジでピッケルやスコップを埋めたりしてフィックスを張る。ジャンクション・ピークから壁尾根の前半は広い尾根。別山谷のコル手前150mくらいが痩せたキノコリッジになっている。キノコリッジ手前でテントサイトを確保し、翌日に備えて偵察。コルへはクライムダウンもできそうな段々のスノーリッジ。雪が多く、懸垂支点は掘り出す気もしない。

12月25日　風雪

7：00出発―8：00別山谷コル―11：50黒部別山北峰―14：30黒部別山北峰西尾根ca.1750m

別山谷のコルへはアンカーを埋めて懸垂する。全員と荷物が下りた段階で、中島が空身で登り返してアンカーを回収してクライムダウン。残置をセーブ。そうしている間も先頭はロープを着けて黒部別山北峰への斜面をラッセルする。

北峰までの斜面は広く雪崩の危険もあり、前日はその大斜面を抜けるのは厳しいと判断した。今日はさらに積雪が増えていて、ロープを出して樹林を繋ぐように慎重にルートを延ばす。途中、運んできたザックをトレース脇に降ろすと、その刺激で横の斜面が破断面60cmくらいで切れて落ちた。

5P分の斜面を登ると傾斜も落ち、ロープを外す。標高のせいか風雪が強くなる。黒部別山の尾根上も雪は深く、ワカンのままの先頭空身ラッセルは続いた。

黒部別山北峰西尾根への入り口は不鮮明。その後も分かりにくい地形をコンパスも頼りに下る。雪は深いが、急傾斜ではザックを背負ったまま下れるのがいい。うまく思ったとおりの尾根状台地にたどり着いた。

12月26日　風雪

6：00出発―12：00滑り台ルンゼ上―16：20 P4上

現在の冬型が抜けた後、移動高が来て2日間程度持ちそ

うな天気予報があり、このチャンスを生かすべく、今日からはいつもより30分早く起きる。暗いうちに剱沢に向けトラバースぎみに下る。薄明るくなるころ剱沢を渡って、八ツ峰Ⅲ稜に取り付く。この日も風雪が強いが、動けない天気ではない。やがてP1の岩壁に突き当たる。ここは過去の記録どおりに、岩壁に沿って急斜面をブッシュを繋ぐように左にトラバース。細いトレースに荷物が通れるかどうか心配になる。リッジからは急斜面を下って滑り台ルンゼに入る。心配していた滑り台ルンゼの雪質は問題なかった。ルンゼ内を2Pで広い稜上に戻る。

やがて稜は細くなり、P3のナイフリッジの通過になる。ここは1ヶ所、下の岩が出てきてしまい、支点も取れずにいやらしい登攀となる。中島がアイゼンに履き替え、バランスで抜けて行った。スコップを埋めたアンカーで、後続はワカンのままユマーリングする。P4のドームをラッセルして登ると、広いプラトーになる。テントを張りつつも、その先にトレースを着け1P分フィックスする。

12月27日　晴れのち快晴

6：00出発―13：45　Ⅰ峰頂上―17：30　Ⅲ峰中間ピーク

テントサイトから先のP5のナイフリッジは、それほど難しくなさそうであったが、昨日同様、下の岩が出てきてしまう部分が1ヶ所あった。こうした部分ではスタカット・クライミングの動きになって、フィックスが張られるまで皆待つことになる。Ⅰ峰直下の雪の斜面は雪崩が心配であったが、どうにか問題はなかった。晴れ渡ってくると、右にⅣ稜、左にⅡ稜の、キノコ雪をまとった痩せた稜線がうねうねとせり上がっているのが見える。

重たい雪の深いラッセルに苦しみながらもⅠ峰に届いた。Ⅰ峰の先は曲がりくねりながら下る岩稜に雪が載っている感じで、稜通しに下りたかったがやはり難しいのだろう。長次郎谷側の凹状斜面を、確保しながら1Pクライムダウンする。そこから1P懸垂して長次郎谷側の斜面の源頭に下りる。ここから雪崩の起きそうな大斜面（ルンゼ源頭）を60m大トラバース。そこからブッシュでまた1P懸垂。そしてまた60mトラバースを2回でⅡ峰・Ⅲ峰のコルに出る。

Ⅲ峰の下りでわずか5m程度だが、初めての土嚢懸垂。下りた所からすぐにⅢ峰の第2ピークがあり、ここをテントサイトにする。懸垂するころよりすでにヘッドランプでの行動になっていたが、明日以降の行動も考えて、今日無理し過ぎることはやめる。

12月28日　快晴、夕方より曇りのち風雪
6：30出発―14：15池ノ谷乗越―16：30剱岳頂上―19：30早月小屋

好天の中、頑張るべき一日を動き出す。どこがどこだかよく覚えていないが、Ⅳ峰の下りでは土嚢懸垂をした気がする。Ⅴ峰の下りは残置を使った2Pの懸垂。昨日のⅠ峰やこのⅤ峰など、懸垂時には氷化している所もあり、重荷にワカンでは苦労する。

Ⅵ峰の登りはやや急で、岩場が所々出ている。右手のルンゼ状を、雪を使って登るとコルに出る。コルから右手の急斜面に取り付くが、下に岩があって緊張する。

Ⅵ峰はいくつかのピークを重ねているが、どこかで懸垂しただろうか。どこかで中島がクライムダウンして、支点回収という手も使った。Ⅶ峰は距離のあるナイフリッジが続く。Ⅶ峰の下りでは土嚢懸垂。Ⅶ・Ⅷ峰のコルからは、時間も考えて長次郎谷に下り、トラバースぎみにつめて池ノ谷乗越に出た。

池ノ谷乗越から池ノ谷ノ頭へは、中央のクーロワール沿いに登る。八ツ峰はずっとワカンだったが、ここから早月尾根の下りまではアイゼンとなる。丸いドーム状のピークが近づいてきて、やがて夕方の斜光のなか剱岳山頂に着いた。16時30分。

目のいい中島や成田さんが、早月尾根の途中までトレースが来ていることを確認する。明日以降の天気予報に鑑み、また、トレースがあることも手伝って、〝残業〟してでも早月小屋を目指すことにする。

早月尾根最初の岩場の懸垂は、意外ときれいに雪と氷が繋がっていたため、ピックをキシキシ言わせながらクライムダウンでこなす。その後も、ルートを熟知している上田さんの指示に従って岩峰をトラバースしたり、急斜面をクライムダウンしたりして進む。途中で懸垂3回。とにかく上田さんに頼りきった下降であった。久々の冬の早月尾根下降は、やはり厳しい。

12月29日　風雪のち雨ときどき曇り
7：00出発―11：30馬場島―14：00伊折下山

昨夜は今山行中一番の悪天で、テントの壁は大きくたわみ、寝ている間に雪に埋まる夢を何度か見た。

歩き始めはトレースがあったが、すぐに先行パーティに追いつき、トレースのない先頭に出る。ここまで来て、まだザックを降ろしてラッセルをする羽目になる。ルートに

迷いながらしばらく頑張ると、下から上がってきたパーティがちらほらと現れ、ワカンも不要となる。

最後は雨模様のなか馬場島へ。県警でお茶をもらい、林道歩きを2時間で伊折に下山した。

オホーツク分水嶺完全踏査の記録

東へ３５０km・知床岬へ

北海道支部　オホーツク分水嶺推進委員会

はじめに

オホーツク分水嶺とは、北海道の中央分水嶺にそびえる大雪山系の一分岐・三国山（１５４１ｍ）から、北海道最東端の知床岬までの３５０kmに及ぶオホーツク海と太平洋を分ける一大分水界をいう。

この三国山から発する分水嶺は、根室、釧路、オホーツク、十勝管内にまたがるが、そのエリアをひと口で言うと、東大雪の狭い山稜から北見山地のたおやかな森林帯、阿寒・摩周の鬱蒼とした原生林とカルデラ、標津山地から斜里岳（１５４５ｍ）の険しい山稜、そして、根北峠から知床半島に入ると風と氷の世界となり、世界遺産の羅臼岳（１６６１ｍ）を経て地の涯・知床岬へと続いている、魅力の溢れた山岳地帯である。起点の三国山から東へ３５０km先の知床岬へリレー式に歩き繋ぐもので、知床半島や斜里岳、標津山地などの部分的な立派な縦走記録はあるが、オホーツク分水嶺を完全踏査した記録は見当たらない。

日本山岳会創立１００周年記念事業の一環として行なわれた日本中央分水嶺踏査は、北海道支部も宗谷岬から白神岬までの１１３２kmを担当して、会員総力を挙げて踏査を終えたところであるが、その次に浮上したのがこのオホーツク分水嶺であり、北海道支部の課題となった。その後、当時の鈴木和夫事務局長の強力な熱い志によって２００７（平成19）年の総会で決議、実行委員会が結成された。その

年の5月に、大雪山・三国山からリーダー鈴木和夫ら3名の会員により踏査がスタートした。

しかし、同年11月の上ホロカメットク山のトレーニング山行で雪崩により仲間を失うという不幸な事故に陥った。このことから踏査は自粛、実行委員会は企画委員会に吸収されるに至った。

２０１１年に自粛中断していた分水嶺の再開が決まり実行員会を再結成、同年の2月に再開の第一弾として、釧北峠から鹿の子峠の踏査が実施された。

オホーツク分水嶺の前段部分は比較的たおやかな山稜であるが、後半部は険しい山稜が続き、とりわけ知床半島部の山々は困難となるため、経験や技量豊かなリーダーや隊員が求められることから、実行委員会から推進委員会へとバージョンアップして体制強化を図った。なお、踏査方法は三国山からスタートしてリレー式にバトンタッチしていくのではなく、そのときの隊の編成や休暇、あるいは天候などによって踏査できる所からクリアしていくという方向で進めた。最終的に一本の線で結ばれるので「継走」と呼ぶ。

1．三国山から350㎞先の未踏の山稜へ

２００７年5月4日午前9時、鈴木和夫ほか3名が三国山ジャンクション・ピークから分水嶺踏査をスタートした。「ここで中央分水嶺と分かれて東へ３５０㎞続くオホーツク分水嶺が始まるのだ。9時20分、大分水界の最初のピーク三国山（１５４１ｍ）着。ここからの眺めはまさに圧巻だ。南西にニペソツ、西に忠別～白雲・旭岳・黒岳等の大雪の中心部が、北にニセイカウシュッペ、天塩岳、武利岳と武華山、南東に西クマネシリ……等が、陽を浴びて透き通るような青空の中に燦然と照り輝いている。何とも神々しい、豪華な展望である。その昔アイヌの人達が、そこに神々の来往を信じたというのももっともなことだと素直に納得する。」とサブリーダー海川敏雄は感懐を記している。

三国山から細い稜線を進むが１３９０ｍのピークを越えると尾根は広がり、針葉樹林帯となってくる。この日は勝北峠でテントを張る。翌5日は雨、ときおり稲光と雷鳴が轟く中を出発。果てしなく続く針葉樹林を進むが、幸いなことに途中で雨も上がり、クマネシリ山群を横目に１３５２ｍのピークを越える。三等三角点で、点名が「下勝北（しもかつきた）」である。三町界の１２３５ｍピークを越えた先でテントを張る。6日は快晴。尾根はどんどんと芽登

峠へと高度を下げていき、暗い針葉樹の林から明るいダケカンバの林へと変わる。最後は雪も消え、笹藪を漕いで芽登峠に達した。

2. 北見山地の大樹林帯を彷徨

芽登峠から先、分水嶺は北見山地へと展開していくが、鬱蒼とした針葉樹林が続き、山を歩いているというより大原生林の中を放浪しているといった趣で、北海道的な大自然を味わえる所であるといってもよい。

２０１２年３月13日、京極紘一ほか2名が青空の下、穏やかな天気の芽登峠からスタートした。峠から暗い針葉樹の林に突入。エゾマツ、トドマツの中をスキーで進むが、ときおり雪面が割れて沈むので歩きづらい。重荷ながら順調に林の中をたどり、９６１ｍピークに立つと眼下に見える針葉樹は雪を載せて、ツリーのように美しく広がっていた。

しかし、その先にはマツの幼木がびっしりと生えていて、まるでバリケードのように行く手を阻む。急斜面のうえ倒木も邪魔して最悪、スキーを脱いで空身で乗り越える場面もあった。１１２３ｍピークの肩に出たのは13時、荷を置いて三角点を踏む。行く手には広大な針葉樹の海が眼下に展開し、読図の難しさを思わせた。少し下った林の中に14時、キャンプを決める。

３月14日、青空の中を6時20分にスタート。平坦な広い樹林の中は見通しも利かないので、磁石で方向を決めて東へ東へと進む。突然、樹林が切れて送電線に出会う。樹海を断ち切るように切り開かれている。１０４４ｍのコブの頭に鉄塔がある。そこからは樹海の彼方に東三国山と喜登牛山がゆったりと盛り上がり、西にはクマネシリ岳が、北には武利岳が迫力ある姿を見せていた。

送電線と別れてエゾマツとトドマツの樹海を東へ、木々が疎らになってくると岩松峠の林道に到達。峠を越えて東にたどるが、またも視界の利かない樹林となり、分かりづらい。長いたおやかな尾根をたどって１２３０ｍの東三国山頂上着14時45分。平らな頂は樹木が茂っていて、何も見えない。ルートを北に切り、１２５０ｍのコブで15時50分に行動を打ち切り、視界の利かない林の中にテントを張る。

３月15日、６時出発。樹木に覆われた尾根を北上。磁石で確認して北へ取り直すが、樹木に視界が遮られてよく分からず、ＧＰＳに従って北へ進む。幸いに天気も良く、林の中をどんどん北へスキーを進ませる。読図もぴったりで、７９１ｍの三角点を10時25分に確認して、このルート

中での最低コル（６００ｍ）に13時に到達した。林道もあり、植林された若木がここにもバリケードのように密生していたのをうまくかわしてコルに出た。

８５８ｍピークへの長い登りにかかるころから天気が次第に変わり、雪がモサモサ降ったりやんだりする中を登り進んだ。15時50分、８５８ｍピークの薄暗い林の中で行動を打ち切る。今日は一日中、樹林の中を放浪していたような感じであった。

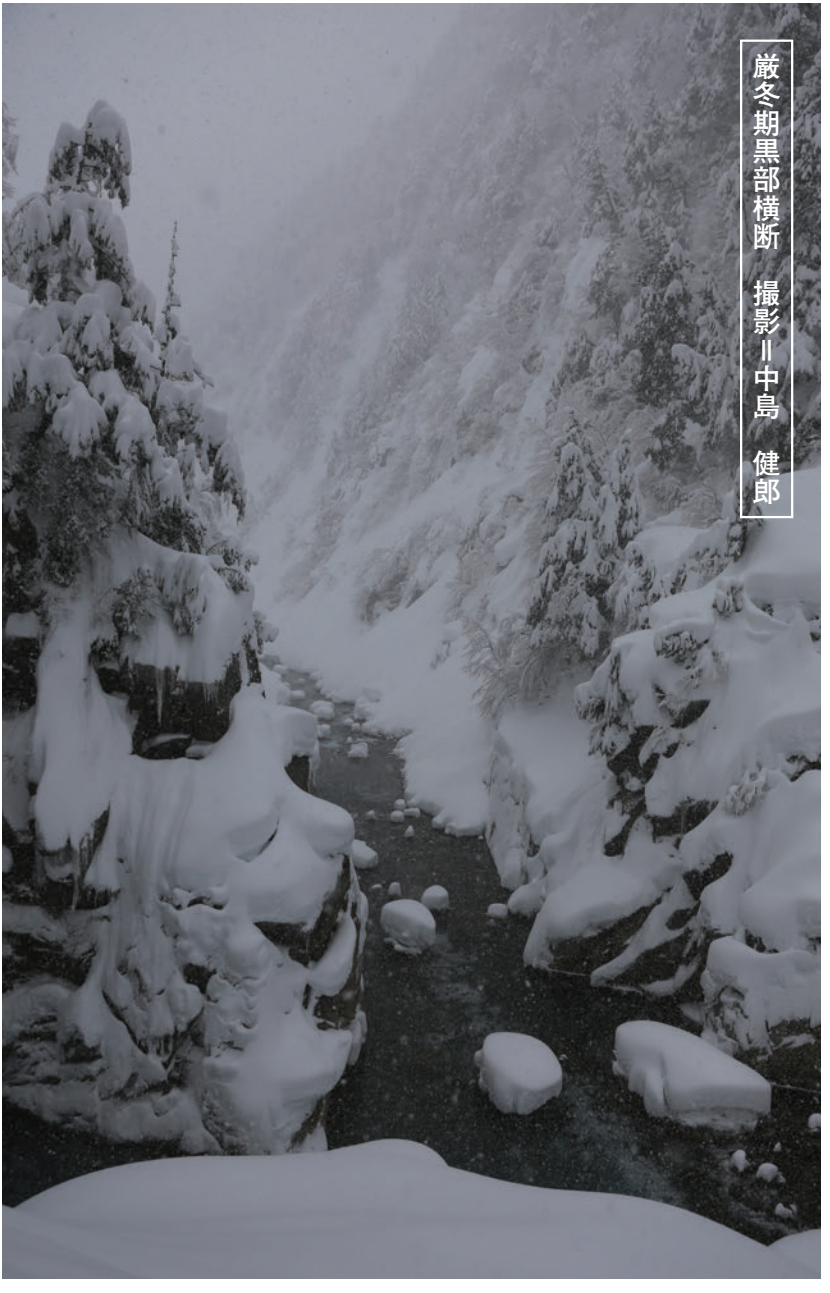
３月16日、尾根がはっきりしており、オレンジ色の朝日に染まりながら雪庇のある稜線を行くのは楽である。△８５６ｍを６時25分に通過。二等三角点の点名は「訓子別」で、ＧＰＳにポイント登録して先へ。７８６ｍの開けたコブに上がると、南には越え歩いて来た丘陵が延々と波打ち、遠くに連なっていた。

東へ樹林の中に向かって行く。全く方向が分からないほど樹木が鬱蒼としている。下るにつれて所々に造林の作業路が現れて、左右に分かれていく。雪も少なく、スキーは雪面が割れて沈むなど歩きづらくなる。磁石で方向を確認しながら行くと突然、目の前に牧柵が現れた。釧北牧場の南西角にぴったりと出た。８時45分である。牧場内の雪に埋もれた道を行く。最後のポイント△４３１ｍの上からは、広々とした牧場の雪原の奥に武利岳が見え、今来た方を振り返ると、黒々とした樹海が展開しているだけだった。10時20分、池北峠着。

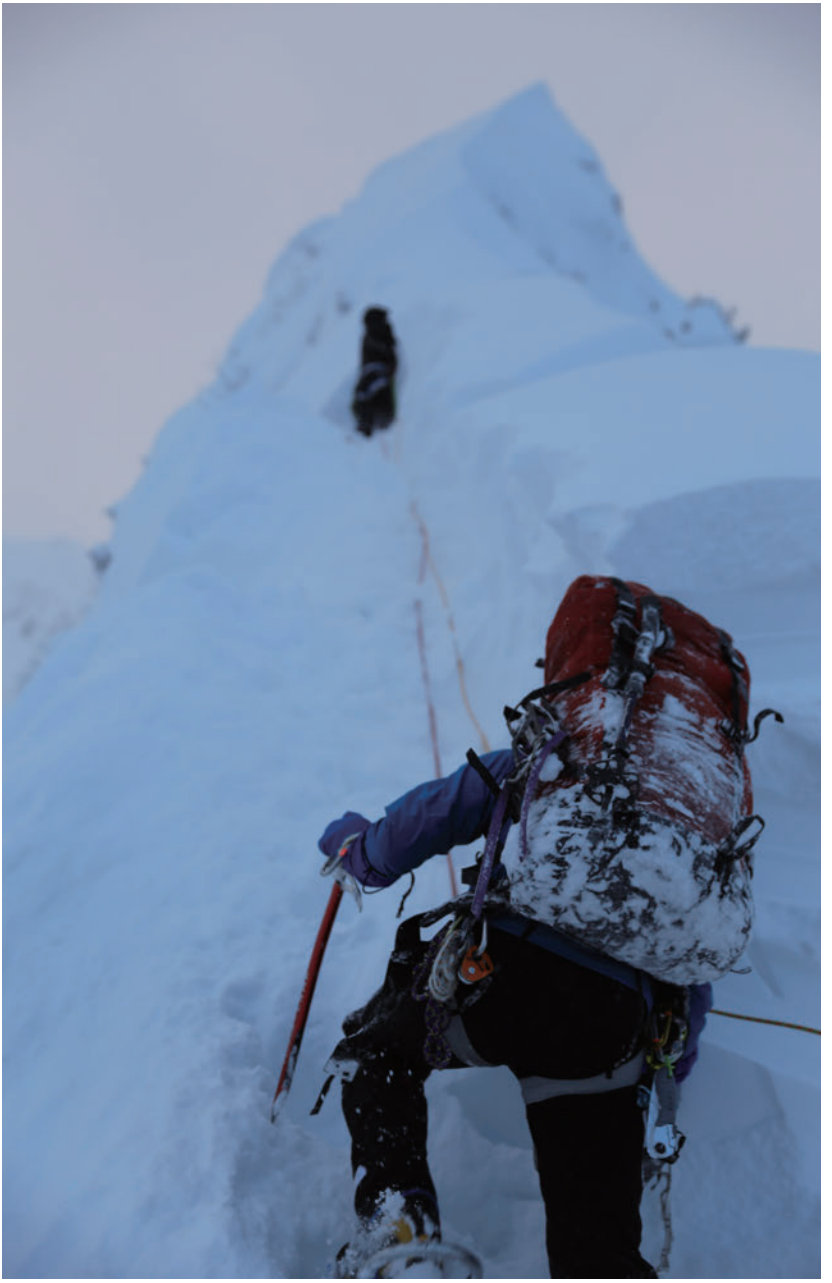
次の池北峠から美園峠の８・８㎞は、たおやかな北見山地の丘陵に釧北牧場や訓子府町共同模範牧場および日産自動車陸別試験場が広がっており、境界のカラマツ林をたどるもので、「これが分水嶺なの？」と踏査した樋口みな子は述懐している。

その先、美園峠から鹿の子峠の24㎞は、中断していた踏査の再開に向けて調査に入った所である。２０１０年４月に鈴木貞信らが実施したが、網走と十勝の境界丘陵をたどるも標高が最高で６００ｍ、最低が３２０ｍと低く、時期的に遅いため雪が融けて稜線の所々で薮が出ており、不明瞭な分水嶺には樹木が密生し、かつ風倒木に遮られて難儀した所である。

鹿の子峠から釧北峠の24・４㎞も相変わらず鬱蒼とした針葉樹林が続くが、その中に浮かぶように山が出てくる。阿寒湖や屈斜路湖、それに摩周湖の周辺に果てしなく続く樹海の中にたおやかに隆起する山は、原始の名残をとどめ、



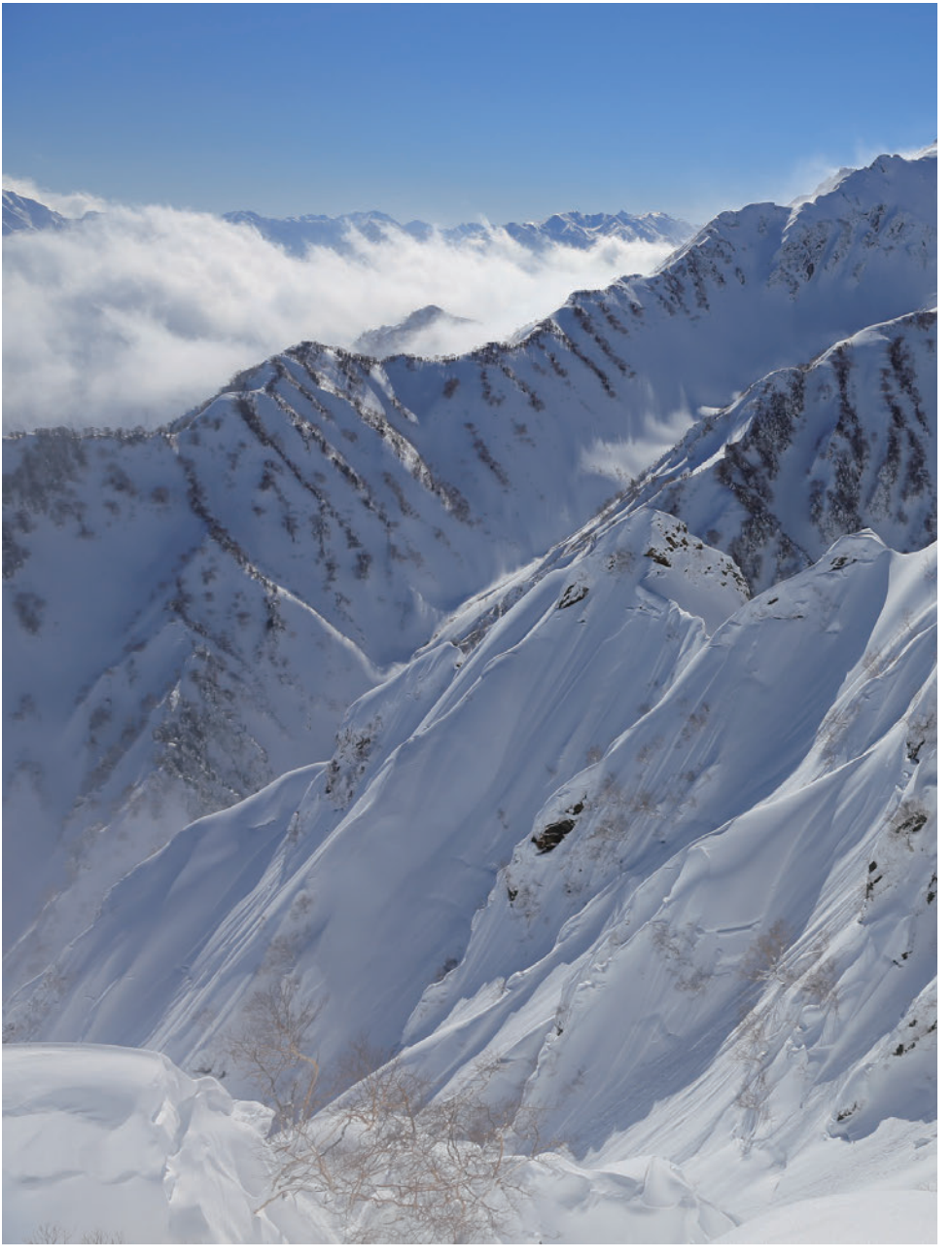
4日目　厳冬期の黒部川・十字峡はモノクロームの世界



9日目　八ツ峰Ⅲ稜の登攀

9日目　八ツ峰Ⅲ稜上部のラッセル。八ツ峰Ⅰ峰はまだ遠い

9日目　八ツ峰Ⅲ稜上部の登り。背後の中景左は黒部別山、遠景は後立山連峰



9日目　八ツ峰Ⅲ稜から見た真砂岳（後景右手前）と立山。中間の雪稜は八ツ峰Ⅱ稜

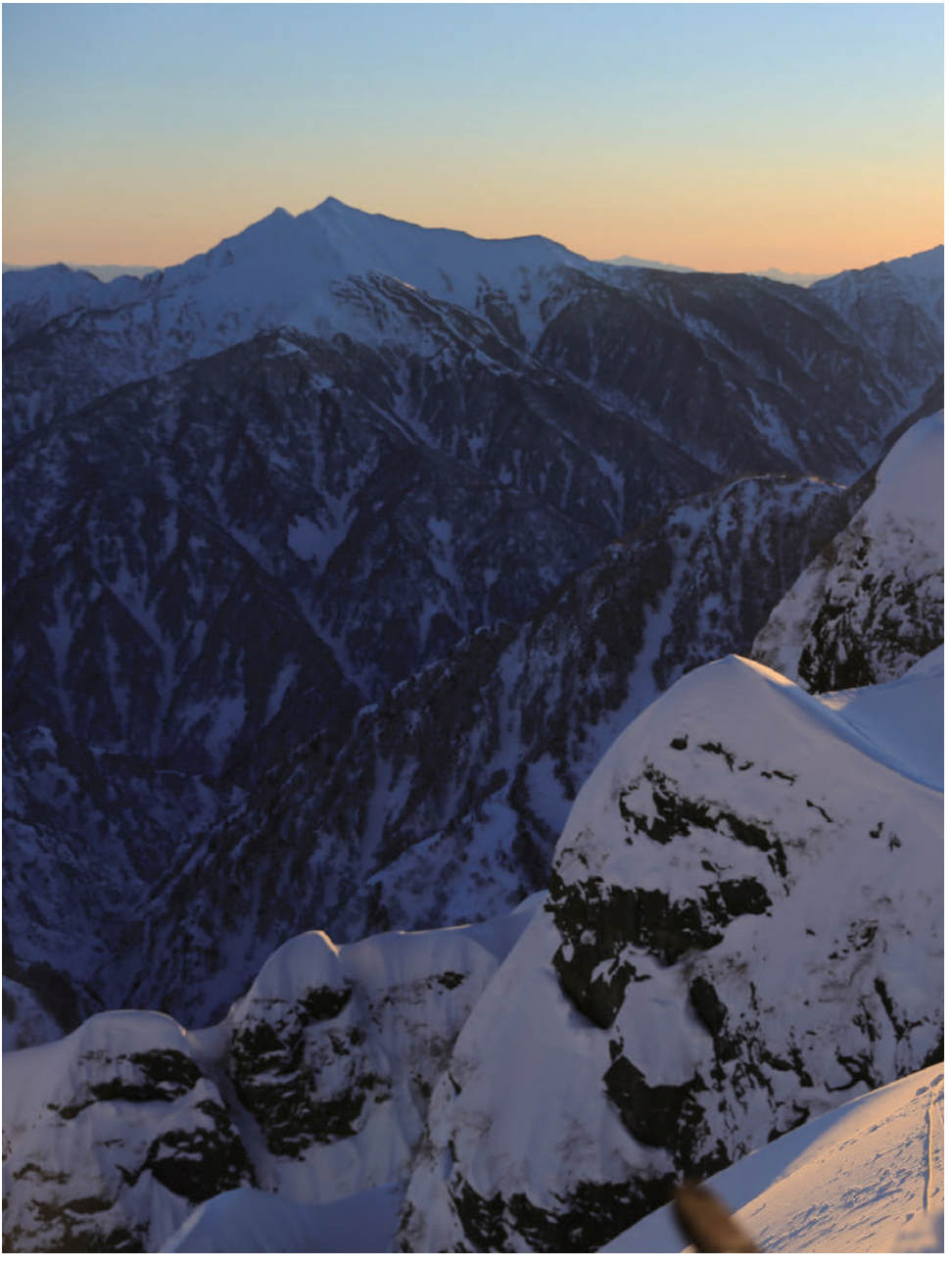
9日目　Ⅰ峰頂上から見た八ツ峰の主稜線と剱岳(左上)。左の谷は長次郎谷

9 日目　八ツ峰Ⅱ峰をトラバースする。左は剱岳と源次郎尾根Ⅱ峰（その左）

10 日目　朝日に輝く八ツ峰Ⅳ峰の登り。右上は八ツ峰上部、左上は剱岳とその北壁

9日目　落日後の寒気のなか八ツ峰Ⅲ峰に向けて登る

爺ヶ岳、岩小屋沢岳



10 日目　後立山連峰から登る朝陽を浴びてⅣ峰を登る。遠景は左より鹿島槍ヶ岳、

10 日目　八ツ峰Ⅵ峰の登り。後方のⅤ峰から 2 ピッチの懸垂下降

10日目　八ツ峰Ⅵ・Ⅶ峰のコルへ懸垂下降。右上の黒い岩峰はクレオパトラ・ニードル

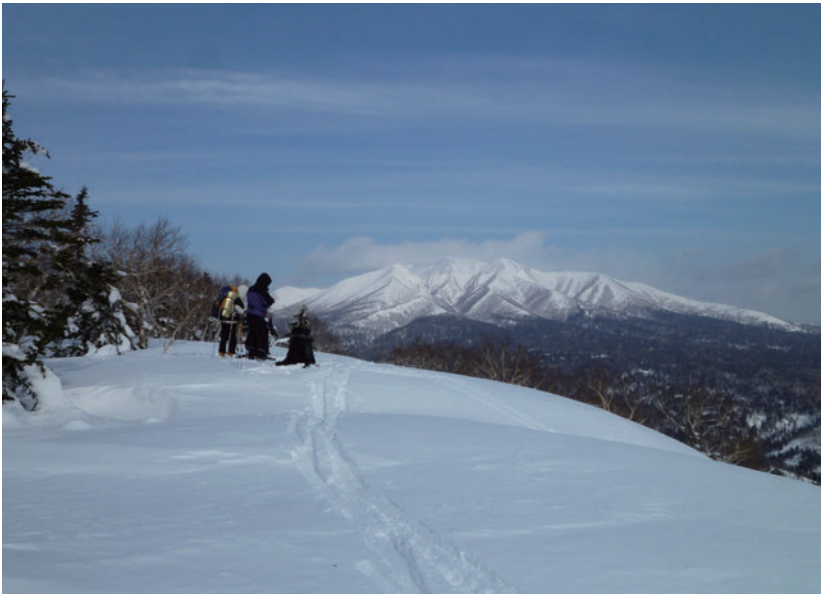
10 日目　夕闇迫るなか、なんとか剱岳山頂に到着

10 日目　夜間、ヘッドランプを点けて早月尾根を下る

東へ350㎞・知床岬へ

阿寒の丘陵地帯をたどる。前方左手は雄阿寒岳

カムイヌプリと摩周湖を眺めながら裏摩周のカルデラをたどる



サマッケヌプリから斜里岳を望む

斜里岳 1508m 峰の南岩稜を懸垂下降する

知西別岳から振り返り見た遠音別岳と海別岳(左奥)

天頂山から知床峠越しに羅臼岳を望む

遠音別岳（左）とラサウヌプリを背に分水嶺をたどる

三ツ峰と羅臼岳（中央奥）を背にサシルイ岳へ向かう

真っ白に輝く硫黄山と東岳を背にトッカリムイ岳分岐を通過する

知床岳分岐のナイフリッジを行く。奥はポロモイ岳

羅臼岳南西岩稜のスラブ帯を下降する

ポロモイ岳から望むウィーヌプリ。その先に知床岬があり、海には流氷が浮かぶ

ついに霙交じりの強風が吹き荒れる知床岬に到達する

方向も分からないくらい暗く鬱蒼と茂るエゾマツ、トドマツの林の中を、ワンダラーのごとく彷徨い歩くのも新鮮であった。この区間は北見山地の様相を象徴するような部分なので、少し詳しく記述したい。

２０１１年２月25日、漆崎隆ほか1名は雨の札幌を出発。十勝地方は晴れていて、足寄道の駅でサポートの車と合流し、鹿の子峠に配車して釧北峠に送ってもらう。峠から針葉樹のエゾマツ、トドマツが鬱蒼とした中を西へ西へと尾根状をたどる。スキーを滑らせて行くと送電線の切り開きに出会う。再度樹林の中を進んで行くと、伐採されて植林された見通しの良い台地に出た。南の樹海の上に雌阿寒岳と阿寒富士が大きく姿を見せ、噴煙を上げている。次第にガスに包まれ、北からの風も冷たく吹き、雪を伴ってきた。７２９ｍピークを越えたコルの林の中で15時25分、テントを張る。

２月26日、寒くてテントの中は真っ白だ。出発は6時半。曇り空の下を小ピークの登りでスキーアイゼンを着用。コブの頭に立つと雄阿寒岳やフップシ岳、雌阿寒岳が見えるが、頂には雲が載っている。越えたコルでは、枯れたマツの木が一定の高さで折れて一帯に広がっており、珍しい眺めだ。一気に登って伊由谷岳の頂上に9時30分に立つ。大きな電波反射板があり、三角点の黄色い標識が雪面から顔を出していた。曇天の下に阿寒の山々や湖が樹海の中に展開するのは、新鮮な眺めだ。

さらに雪庇の続く尾根をたどってイユダニヌプリに立つ。標高は９０２ｍで、アイヌ語の「杵・山」の意である。その先は長い下りだが、針葉樹が密生していてスキーで滑るのがやっかいだ。所々で雪が割れて沈み、まさに悪戦苦闘。次の７８０ｍの大きなピークを越えるが樹林はますます濃く、ＧＰＳに助けられながらコルに出ると林道が横断。さらに尾根らしき所をたどるが、笹に乗っただけの雪は不安定で、ときどき割れて沈む。５０３ｍピークの手前の樹林の中でキャンプしたのは、15時45分であった。

２月27日、晴れた空模様の中を6時半に出発。樹海の中を西へ西へとたどる。鬱蒼としか言いようのないほど深いエゾマツとトドマツの樹林は、私たちをその中に埋め込んでしまい、視界は遮られて地図と磁石だけが頼りである。風倒木が随所で進行を妨げ、それを迂回して進んでいると方向が狂ってしまうからやっかいだ。ＧＰＳに助けられながら進む。三角点のある５５３ｍのコブを10時に通過。この先は相変わらず樹林の中だが、尾根がはっきりしてきたので確認しやすくはかどる。鹿の足跡や小動物の可愛らし

い足跡が点々とあって、疲れた心が和む。しかし、風倒木が行く手を遮り、難儀する部分もあった。

４２２ｍの図根点で鹿山公共草地の牧柵に出た。尾根沿いに電気牧柵が鹿の子峠へと続いていて、それと平行して歩き鹿の子峠着16時42分。３日間25㎞の山旅であったが、山はイユダニヌプリ（９０２ｍ）の低山だけで、後は樹海の中を放浪していた、阿寒の珍しい山行を味わった。

3．阿寒原生林と巨大カルデラを行く

釧北峠一帯を埋め尽くす阿寒原生林は、見事というより鬱蒼としていて、中に入ると薄暗くて見通しも利かず、不気味である。

釧北峠から津別峠の30・2㎞は、津別峠からスタートし、釧北峠からのサポート隊と阿幌岳の南コルで合流した長谷川隊の報告書から要約する。

２０１３年３月26日、長谷川雄助ほか９名が、雪の降る中を津別峠まで上がってキャンプ。３月27日、５時45分出発。コトニヌプリ（９５２ｍ）、オサッペヌプリ（８６０ｍ）、サマッケヌプリ（８９８ｍ）と晴天の中に越え、平坦な原生林をＧＰＳに導かれながらたどり、三町界を越えた先のアカエゾマツの林の中で14時半にテントを張る。28日、曇り空の下を６時出発。すぐに小高い９３１・２ｍのピークに到達。三角点の点名は「本様毛」。ここでＶ字に方向を変え、原生林中を進む。一時小雨が降る。11㎞進んだ阿幌岳分岐の手前で14時キャンプ。29日も晴れ、５時50分出発。すぐに阿幌岳分岐点（８７０ｍ）に着く。時間もあるので、派生尾根の先にある阿幌岳（９７０ｍ）に登る。往復１時間半。雄阿寒岳が見える。戻って南に降り、６９１ｍのコルで時間は早いが９時半に行動を終え、釧北峠からの一鐵巖ほか３名のサポート隊を待つ。13時40分、サポート隊が到着。原生林の中にスノーテーブルを作り、13名が集い春の宴を開催。30日は分水嶺をエスケープ、原生林を抜けて釧北峠に出た。

津別峠から先の分水嶺は、屈斜路湖の巨大カルデラの外縁をたどる。

２０１１年３月30日、晴れ。長谷川雄助ほか13名が津別峠を８時半にスタート。展望台を通過し、サマッカリヌプリ（９７４ｍ）に立つ。右手の屈斜路湖の縁に藻琴山、その奥に斜里岳、はるか彼方に羅臼岳も見える。これをすべて繋いで行くのだ。三町界を過ぎた先で13時半キャンプ。31日晴れ。右はカルデラの壁、左は美幌牧場のゆったりと

した丘陵、その間を緩く下って美幌峠に到着、12時08分。

次の区間である藻琴山から美幌峠をスキーで滑り下ったのは、２０１２年3月の武田一生ほか12名で、前日に標高８００ｍに建つ山小屋「銀嶺荘」に泊まった。翌10日は快晴。北尾根をたどって1時間半で藻琴山に立つ。８時30分、美幌峠に向かって分水嶺踏査の開始。広々とした尾根は木々に樹氷が張り付いて白く輝いているが、左側はカルデラ壁となり、屈斜路湖に落ち込んでいる。その境に雪庇が続くので、際を滑り降りる。立ち枯れの木々が林立する地帯を抜けると平坦になり、スキーも滑らない。見通しの良い緩い尾根をたどって美幌峠に14時50分到着。

標高１０００ｍの藻琴山には登山路がある。長大なオホーツク分水嶺上に登山路があるのは、ここと羅臼岳～知円別岳の区間だけである。

大勢の支部会員が参加できるコースを設定すべき、との滝本支部長の思い入れや会員の希望もあって、藻琴山で貸し切りバスによる分水嶺ツアーを組んだ。

夏道は頂上部分の1・3kmで、その下は小清水峠までハイマツの密生が2・3km続くので、3区に分けてパーティを編成、２０１１年10月1日に36名で踏査を行なった。出発時の札幌は雨だったが、藻琴山登山口では晴れた。札幌から３８０km、さすが北海道は広い。

登山路を歩くA班は、滝本支部長はじめ支部の重鎮や千葉や静岡の会員も参加して、にぎやかに山頂に立った。登山路から分かれて第2展望台までハイマツの海を枝渡りしたB班、その展望台から小清水峠までハイマツとクマザサを漕いだC班。3時間の奮闘の末、出発点の登山口に全員戻り、屈斜路湖・仁伏温泉で汗を流した。弟子屈町在住の写真家・水越武会員の講演に続いて懇親会となり、スピーチでは「藪漕ぎがこんなに楽しいものだと思わなかった」などの発言があり、踏査への盛り上がりを見せ、弾みが付いた。

小清水峠から先は屈斜路湖カルデラの外縁から次第に離れていき、野上峠へと丘陵の分水嶺が続く。２０１１年3月14日、増子麗子ほか3名が小清水峠を9時20分に出発。一帯は風衝地なのか雪が少なく、樹木が疎らにあるだけの丘が波打っている。分水嶺は次第にカルデラの縁から離れていき、針・広混合樹林となり、見通しも悪くなる。鹿の食害が酷く、数kmにわたって樹皮が食い荒らされ、白い肌

を見てせる。いずれは枯死すると思うと心が痛む。14時20分に野上峠に着いて、約10kmの踏査を終えた。

野上峠から先も針葉樹林に埋め尽くされた丘陵がうねるように展開。そして、摩周湖のカルデラを経て清里峠へと20km続く。そこを２０１１年に植田惇慈ほか1名が踏査した。3月19日、清里峠から9時半にスタート。雪に埋もれた車道をたどって裏摩周展望台に出た。摩周湖は結氷しておらず、カムイヌプリを従えて寒々しく見える。カルデラの外縁を進み12時50分、６０５ｍの小丘から北へ取って摩周湖から離れる。森林は深くなり、４４２ｍのポイントを越えた先のコルで16時10分、テントを張った。翌20日、晴れ。出発6時20分。相変わらず樹林は濃く、枝尾根が入り組んで森林伐採の林道が入り込み、複雑に絡んでいて歩行がはかどらない。ＪＲ釧網本線の釧北トンネル上を8時50分に通過。深い森林帯がルートを複雑にしており、分水嶺チェックに手間取る。樹林帯を抜け出し土場に出ると、黒々と広がる針葉樹林の上に真っ白な斜里岳が眺望できた。明るい日射しを浴びて、電波塔を経て13時25分、野上峠に達した。

4．樹海を抜けて斜里岳へ

清里峠からは標津山地に入ると、ようやく山岳らしく険しさを伴ってくる。養老牛岳、標津岳、サマッケヌプリの山々を経て峻険な斜里岳へと続いていく。しかし、その山々の山麓は黒々とした原生林に包まれている。

斜里岳からサマッケヌプリを経て清里峠へ、京極紘一ほか2名が２０１２年に向かった。快晴の道東高速を利用。標津町計根別では標津山地が青空の下に真っ白く展開。清里峠に配車し、清里町の緑清荘に泊まる。

3月1日、暗い中をサポートの車で根北峠に向かう。6時20分、サポートの見送りに手を振って峠を出発。根北峠から斜里岳肩までは漆崎隆ほか3名が２００７年4月に踏査済みなので、省略して１５０８ｍ峰に直接向かう。鬱蒼とする針葉樹の樹海を抜け、パンケニワナイ川を渡って南斜里岳の東尾根に取り付く。途中でスキーアイゼン着用。景色は開け、鈍色の空の下に海別岳やオホーツク海の流氷が白く輝いている。風が強く、斜里岳が雪煙を上げている様は迫力がある。南斜里岳頂上に12時45分着。

そこから分水嶺である１５０８ｍ峰を見てびっくり、なんと南に下る分水嶺は岩塔があり、岩稜やナイフリッジとなっているではないか。ロープなしでは無理で、重い荷と

スキートラーゲンでは厳しいので、今回は回避する。南斜里岳の南尾根を分水嶺と平行するように下降。サマッケヌプリや標津岳が正面に見える。９００ｍ付近で沢を渡り、分水嶺の尾根へトラバース。標高８３０ｍで分水嶺上に乗る。鬱蒼たる針葉樹の海で、方向が分からないくらい難しい。ＧＰＳが力を発揮、南へたどり、７４３ｍコブ山の手前をＣ１とした。

３月２日、６時20分出発。樹海を抜けてサマッケヌプリの登りに入ると、俣落岳や遠くに海別岳、瑠辺斯岳などが見える。サマッケヌプリ（１０６３ｍ）着10時35分。シュカブラの発達した、クラストした尾根をスキーアイゼンを着用して進む。標津岳の登りは氷化したナイフリッジで、スキーをトラーゲンし、アイゼンを着用。標津岳（１０６１ｍ）15時10分着。南にたどり、標高９００ｍのダケカンバ林の中で16時10分、Ｃ２とした。

３月３日、６時10分出発。クラストした尾根を西へ滑り降り、養老牛岳の長い登りでスキーアイゼンを着ける。頂上着が10時15分。風もなく、灰色の天空から羽根毛のような雪がフワフワと舞い落ちてくるのは、不思議な世界にいる心地だった。この先もクラストした細い尾根に小さなコブがあってアップダウンが続き、さっぱりはかどらない。７８８ｍピークに着いたのは13時30分で、今日中に清里峠にたどり着けないので、エスケープして南南西の尾根を滑り下って16時20分、道道に出た。ヒッチハイクで清里峠の車に戻った。

踏査漏れとなった清里峠～７８８ｍピークの区間は、同年４月17～18日に田島祥光ほか２名がトレース、回避した１５０８ｍ峰の南岩稜も同年４月に踏査、次の項に譲る。

5．未踏の１５０８ｍ峰南岩稜

この区間は分水嶺の距離は３km程度であるが、急峻な細い岩稜とハイマツ帯が続いて、踏査を困難なものにしている。また、参考となる過去の記録もなく、未踏と思われる。ここを２０１２年に漆崎隆ほか２名がトレースした。報告書の佐藤守の記述から要約する。

４月29日、根北峠を４時10分に出発。昨夜の冷え込みで雪面が硬い。鬱蒼と茂る原生林を抜けて、８５０ｍ地点からパンケニワナイ沢に下りる。キックステップで快調に高度を稼ぎ、９時35分には１５０８ｍ峰手前の分水嶺上に達した（標高１４４０ｍ）。この位置は南斜里岳、斜里岳、東斜里岳の間にあり、眺めがすばらしい。ここから20分程度で１５０８ｍ峰に達し、３６０度の展望を楽しむ。摩周湖

の中島も屈斜路湖も見える。山頂付近には越冬したコケモモの実がたくさん残っていた。

いよいよ分水嶺の下降であるが、急峻な稜線は下が全く見通せない。ハイマツにつかまって下り、さらに下を確認すると、足元から先は切れ落ちた岩といった具合である。ようやくはっきりした岩が出てきてホッとするが、小さなハイマツが岩場を隠しているため見通しが悪く、その先は靴幅ほどもないナイフリッジが続いている。風があり、身体が左右どちらかに振られると転落は避けられない。

ハイマツに手際よく捨て縄を掛け、50ｍロープで懸垂下降のセッティングをする。佐藤がトップで下るが、ロープがハイマツなどに引っ掛かると回収に時間を要するため、右手にロープの束を抱えながら約25ｍ下降する。３人のコンビネーションは良く、時間ロスは全くない。続く５ｍの岩峰は、真下に立ってみるとホールドもあり、岩のフリクションが効きそうなことから、全員フリーで乗り越える。岩稜で緊張を強いられたのはここまでだが、この後のハイマツ漕ぎは想像を絶するものだった。我々は知床や日高でハイマツ帯を歩くことには慣れているはずだが、幹の直径20㎝という巨大ハイマツの幹から幹へと渡り歩く際に、乗った枝が反発して身体が跳ね上げられ、何度かハイマツの海に投げ出された。忠実に分水嶺をたどってハイマツ帯を抜け出たときの解放感は、言葉にならない。標高９００ｍ付近からは雪の分水嶺上を快適にたどり、前回踏査の到達地点８３０ｍにトレースが繋がったのは14時45分であった。ここから南斜里岳の裾を回って昨日の偵察最終地点に達し、根北峠に帰着したのは、まだ明るさの残る18時35分であった。

6．強風吹き荒ぶ知床山系へ

根北峠～瑠辺斯岳～錐山の区間は、山稜が低いので１月に取り組んだが、やはり山は低くても知床は甘くなく、猛烈な寒気と風雪に翻弄され、かつラッセルも伴って簡単には踏査させてくれなかった。２０１１年１月28日に、京極紘一ほか２名は根北峠から横殴りの吹雪の中をスノーシューで進み、瑠辺斯岳（６５９ｍ）を越えた先の６４９ｍピークでキャンプ。翌29日も風雪の中を錐山に向かうも、膝を没するラッセルに遅々として進まず、錐山の４㎞手前の６３３ｍピークから幾科川にエスケープした。林道も腰まで埋まるラッセルに苦しむ。

残した区間（錐山～６３３ｍピーク）は、同年３月に植田惇慈ほか１名で再チャレンジした。３月31日に瑠辺斯川

から入山。風雪の中をスキーで南尾根をたどって錐山に上がった。吹雪の分水嶺を進んで633ｍピークの手前でキャンプ。翌1日も風雪であったがスキーの利点を発揮し、633ｍピークまで踏査して幾科林道に下った。

知床半島の付け根の低い山域といえども厳冬期の知床の寒さは厳しく、風雪も強烈で、知床の難しさを痛感させられた。

錐山（721ｍ）から先の海別岳までは、網走の伊藤正博ほか1名が2011年4月15日に、晴天の中を瑠辺斯川から錐山に上がり、風が強く吹く分水嶺を北上した。小ピークのアップダウンを繰り返しで通過し、690ｍピークを越えたコルでキャンプ。「三角錐の錐山の姿が素晴らしい」と伊藤は述懐している。翌16日は5時45分出発。視界のないガスの中を幾つもの小ピークを越えて行くとガスが晴れ、海別岳が大きな姿を現す。1082ｍピークから風が強くなり、耐風姿勢で通過。コルから見上げる海別岳は雲に覆われ、風が強く吹き抜けているので、時間が早いがコルの林の中で12時20分、キャンプ。夜になると風とともに雨が降り出す。凄まじい風の音で眠れない。翌日は停滞。18日の朝になって少し風が弱まる。昼になって風が弱まったので出発したが、1193ｍを過ぎた所から強風となって歩行困難のため、後3・3㎞を残して奥藥別川にエスケープ。知床の晴天は2日ともたないことを実感。

その後、伊藤会員は海別岳までの残された3・3㎞を踏査すべく2012年4月に2度リベンジしたが成らず、2013年は2月と3月に入山するも悪天に阻まれた。4月に5度目の執念が実ってようやくクリアした。簡単に記述すると、4月13日、珠円尾根から晴天の海別岳（1419ｍ）に立ち、そこから1193ｍの図根点を目指しスノーシューで広い頂稜をたどるが、無風で暖かい。1276ｍに達すると、1193ｍの向こうに2年前に2人で縦走して来た錐山からの分水嶺が見える。緩く下って10分で1193ｍに到達、これで分水嶺が繋がった。晴天は続かず、吹雪模様の海別岳に戻って海別川に下った。

海別岳～遠音別岳の区間は、2013年4月に京極紘一ほか1名が踏査した。4月10日、晴天に恵まれて遠音別岳西尾根を登り、森林限界でC1。翌11日は曇り。等高線に沿って山腹をトラバースして分水嶺に出た。遠音別岳（1331ｍ）の南コルである。スキーをデポし、アイゼン着用で強く風が吹く中を頂上に向かう。アイスバーンを2時

間で頂上に立つ。曇天の下に知西別岳や羅臼岳がモノトーンのように浮かぶ。数日後にここから知西別岳に向かう植田パーティへのメッセージを赤テープに残す。デポに戻り、強風の中をスキーでクラストした尾根を南下。アップダウンのある尾根を進んで、６０７ｍピークを越えたコルで15時30分、Ｃ２。湿った濃いガスは体を濡らし、風がゴーゴーと走り抜ける。

12日も高曇り。烈風の中を６時20分に出発。スキーをトラーゲンして、アイゼンで岩稜を登る。ラサウヌプリの登りに入ると雲が流れ、青空が出てくる。しかし、烈風は治まらず幾度も耐風姿勢を取りながら進み、すっかり晴れ上がったラサウヌプリ（１０２０ｍ）の頂上に10時50分に立った。眺望はすばらしく、羅臼岳から遠音別岳、海別岳と続き、最高である。風が強く、立っているのもやっとなので早々に頂上を後にする。

岩稜右の垂直に近い凍ったルンゼを下るが、烈風が氷片をブリザードのように巻き上げてきて苦しむ。ルンゼを下り切ると、不思議なことに烈風はぴたりとやむ。春の陽光を浴びながらの稜線漫歩を堪能。６６９ｍピークの先のコルで16時20分、Ｃ３。

13日、真夜中から強風が吹き荒れる。高曇りの下を６時10分に出発。ガリガリに氷化した尾根をスキーで強引に進む。烈風にあおられながら小ピークを越えたが、耐風姿勢も崩れて、スキーを抱えて四つん這いになってジリジリ進む場面もあった。ガスに包まれ吹雪となってきたが、次第に樹木が多くなり、風が遮られて助かる。鉱山道路跡の峠を８時55分に通過。樹林を抜け、海別岳の登りでアイゼン着用。濃いガスの中を風にあおられながらたどる。ナイフリッジを登って海別岳の頂上に立ったのは13時ちょうどであった。風はぴたりとやみ、無風曇天の静かな頂からは、斜里岳や流氷が浮かぶオホーツク海が望めた。歩いて来た分水嶺は雲海に埋まり、残念ながら望めなかった。

珠円尾根をスキーで下ったが、フィナーレを飾る最高の滑降であった。

遠音別岳から知西別岳へは、２０１３年４月に植田惇慈ほか１名が踏査した。４月12日の好天の中、春刈古丹川から入山。遠音別岳の内院にＢＣを設けた。「遠音別岳の東壁は、ヒマラヤやヨーロッパアルプスのように堂々とした姿に気持ちも昂ぶる。」と述懐。

13日に山頂を目指すも、吹雪で引き返し停滞。翌14日は快晴。内院のＢＣを４時40分に出発。遠音別岳の北の稜線

に上がり、ナイフリッジとなった分水嶺を慎重に登って遠音別岳の頂に7時40分に立った。3日前にここから海別岳に向かった京極隊の赤テープのメッセージを回収。皆の力で分水嶺が繋がっていることに感動しつつ、北の知西別岳に向かう。ナイフリッジの難関を過ぎ最低コルまで降りた所で、それまでトップでリードしていたリーダー植田が消耗したためBCに下る。植田拓史が単独で知西別岳（１３１７ｍ）をアタックに出る。小ピークを3つ越え、最後は岩のあるナイフリッジをクリアして13時10分、知西別岳に立ち、踏査済みの知床峠までの分水嶺に繋いだ。

知西別岳から知床峠までの分水嶺踏査は、京極紘一ほか3名で行なった。２０１１年5月5日に、知床横断道路を歩いて峠下の山小屋・愛山荘に入った。5月6日は快晴。4時50分出発。氷化した尾根を羅臼岳を横目に登るのは気持ちが良い。広い台地の天頂平に出て、天頂山の山腹をトラバースして分水嶺に乗り、西に進む。大沼を右下に望み、稜線のコブを2つ通過し7時45分、８９９ｍとのコルをキャンプ地に決める。ブロックを積みテントを張り終え、9時にアタックに出る。知西別岳に続く尾根はハイマツが出ていて、青々としていた。羅臼湖が左下に見える。知西別岳頂上には11時45分に立つ。国後島のチャチャ岳が、海に浮かぶように白く見えていた。ゆっくりと下って14時、キャンプ地帰着。ブルーシートを広げて、知床の山々を見ながら紅茶を楽しむのは最高の贅沢である。

5月7日は曇り空の穏やかな中をテント撤収、6時30分出発。キャンプ地の下にある大沼を経由して天頂山に向かう。沼の東端には、北から尻滑りを交えた熊の足跡が一直線に残っていた。稜線に戻ると霧が湧いて山々にまとわりつき、素敵な景観となる。天頂山（１０４６ｍ）7時40分着。すでにガスの中である。分水嶺を忠実にたどるも、ハイマツ漕ぎでＧＰＳが頼りだ。ガスの合間に小さなカルデラ湖が見える。次第に広い尾根となり、横断道路に出た。作業員に聞くと、本日は開通するとのこと。9時20分、知床峠（７４０ｍ）到着。10時開通なので、車の上がって来るのを待つ。ヒッチハイクでウトロへ。

7. 未踏の羅臼岳南西岩稜

羅臼岳からの分水嶺は岩稜となって鋭く落ち込み、知床峠へと続いている。この岩稜の踏査を目指したのは、２０１４年3月の連休であった。知円別岳から縦走してくる隊と、知床峠から南西岩稜を踏査する隊が羅臼岳頂上でラン

デブーして、一気に踏査をフィナーレに持ち込もうとしたが、爆弾低気圧のため道内は猛吹雪で交通が寸断された。出発を遅らせて実行したものの、低気圧の動きが遅くて風雪に苦しめられた。晴天になっても強風は治まらず、縦走隊は知円別岳から引き返し、羅臼岳南西稜も知床峠から狙ったが、地吹雪の中を引き返した。

そんなリベンジを、同年の4月に京極紘一ほか1名が行なった。4月23日、青空に浮かぶ羅臼岳を眺めながら、サポート隊とともに愛山荘に入った。24日は快晴。5時に出発。青空の中に羅臼岳や天頂山がそびえる。知床峠をカットし、740m台地に上がる。雪面は氷化して埋まらず、行程ははかどる。1100mでアイゼン着用。南西ルンゼの入り口の1230mポコに7時35分着。背後には知西別岳や知床峠が展開、オホーツクの青い海原には流氷がプカプカと浮かぶ。根室海峡にも流氷がびっしりである。目の前には南西ルンゼが、巨大な山塊を断ち割るように真っ白く上へ延びており、両岸には険悪な岩壁が立ちはだかっている。

南西ルンゼの登高に入る。氷化した雪面にアイゼンを快調に効かせ、直線的に登って行く。強い風に舞い上げられた氷片が、カラカラと音を立てて滑り落ちてくる。ときおり落石も伴う。危険はないが、あまり良い気分ではない。ぐんぐん登るとラビーネンツークが2本走っており、硬く締まっているのでそれに沿って登る。両岸の岩壁が狭まり、喉のような所を過ぎるとルンゼは開けてくるが、傾斜は変わらない。出口のすぐ下で、眼下の知床峠にいるサポート隊と9時に交信。ルンゼを抜けると、ボール底のような広い場所に出た。目の前には真っ白くシュカブラに覆われた巨大な岩峰、羅臼岳の頂上があった。右から回り込んで9時40分登頂。もの凄い風が吹き抜けていて、立っているのもやっとだった。岩陰に風を避けて休む。三ツ峰から硫黄山に続く山並みが白く輝いている。

10時に分水嶺である南西稜の下降に向かう。風が強く吹く中を西方の山並みを見ながらフリーで下るが、尾根が細くなってきた標高1470mでアンザイレン。左は南西ルンゼへ垂直に切れ落ちている。1ピッチ、氷化したナイフリッジを確保してのクライムダウン。所々岩場も露出していて懸垂下降の方がベターだが、良い支点がないので、スタンディング・アックスビレーのままさらに2ピッチ下降。ここまではなんとか下れたが、4ピッチ目は岩のスラブとなっており手強い。確保の支点も得られず、微妙な体勢でスラブを下降。5ピッチ目、小さな岩の突起にランニング

を取るも不安だ。濡れたスラブに緊張したクライムダウンを行ない、微妙なトラバースをして雪渓に降り立った。これで難所をクリア。2時、下のハイマツ帯で風を避けて大休止、携帯で通話。ザイルを納めてフリーで尾根を下り、下部の岩稜を少したどった所から20m懸垂下降して、南西ルンゼに降り立った。さらに40mクライムダウンしてザイルを収納。腐り始めた雪面を少し下り、1230mポコに着いたのは13時15分。知床峠から踏査してきた鈴木貞信ほか4名と合流して、山小屋に戻った。

8. 羅臼岳から主要山稜をたどる

二ツ池そばの1351m標高点から羅臼岳の区間は、リーダー工藤嘉高によって2012年のゴールデンウィーク後半に計画したが、予想以上に雪解けが進み中止。2013年は4月末に出かけるも、発達した低気圧による暴風雪のため入山口の知円別を確認して撤退。3度目は2014年3月に向かったが、またも爆弾低気圧に災いされて弟子屈町で通行止め。道の駅の避難所にお世話になった。天気回復を見込んで知円別小学校から入山。風雪の中を知円別岳付近まで進んだものの、風はますます強くなって前進を諦めて撤退した。

担当の工藤嘉高には4度目の正直となる。ルートを変えて岩尾別温泉から入山したのは2014年4月で、西山支部長を加えた一行7名のパーティの踏査を、田中健の報告から要約する。

4月26日は快晴に恵まれスキーで登高、羅臼平にBCを設けた。翌27日も快晴に恵まれ6時20分に出発。羅臼岳を背に三ツ峰本峰（1509m）へ。岩の間を抜けて6時55分、山頂に立った。スキーをトラーゲンして、恐竜のような稜線をサシルイ岳に向かう。下った基部でスキー着用。サシルイ岳西肩へ向かって三重山稜の一番右の尾根をたどる。サシルイ岳の山頂は分水嶺から外れているので寄らず、一気に波打つ雪面を滑り降りる。オッカバケ岳も双耳峰。分水嶺の通る西峰に登るとようやく目指す1351m標高点が見えてくるが、これが全然目立たない。どんどん下って雪に埋もれた二ツ池を通過。少し登ると向こう側に切れ落ちた崖っぷちに出た。そこが1351m標高点だった。時に11時40分。この先は踏査済みで、これで東岳まで繋がった。正面谷越しに硫黄山がそびえ、ここが硫黄山カルデラの外輪だと分かる。

帰路はオッカバケ岳東峰（1460）やサシルイ岳（1564m）の山頂を踏み、スキーを楽しんで15時40分、B

Cに戻った。28日は曇天。朝飯前に羅臼岳をアタック。5時20分出発。空身にアイゼンで直線的に登って行く。雪壁や岩場を縫うように進むと、頂上直下の大きなエビのしっぽに覆われた岩場に遭遇。慎重に越えるが、強風にあおられ苦闘の末登り切る。登頂は午前7時ちょうど。7年近くに及んだ分水嶺踏査はフィナーレを迎えた。その日のうちにBCを撤収して、岩尾別温泉に下山した。

オホーツク分水嶺で夏の踏査は3度しかない。それはハイマツと深いクマザサに覆われているためで、必然的に雪に埋まる積雪期が踏査時期となった。数少ない夏の踏査の一つが、二ツ池そばの1351m標高点から知円別岳を経て東岳の区間で行なわれた。

2011年8月、神埜和之ほか2名が湯の滝の先の登山口から登り、新噴火口でキャンプ。翌8月2日はガスの中、満開の高山植物の中をたどって硫黄山（1563m）を越え、知円別岳分岐で分水嶺に乗る。ウブシノッタ谷の崖縁をハイマツを避けて進み、東岳（1520m）に登頂。分岐に取って返して知円別岳（1544m）に立った。登山路は分岐から南の腹を巻いているので、分水嶺の身の丈を超すハイマツ帯を行く。右は火口壁となって切れ落ちて、外輪山の太いハイマツの枝渡りなど2時間の苦闘の末、1475m横の湿地に出て登山路と合流。後は南岳（1459m）を越えて1351m標高点で外輪山（分水嶺）から離れ、二ツ池に至りキャンプ。翌3日は羅臼岳まで縦走しているが、この区間の登山路は分水嶺を通らないためカウントしていない。

東岳から先、ルシャ山を越えてルサ乗り越しまでは2013年4月に植田惇慈ほか1名により踏査。4月4日、知円別小学校からスタート。広い尾根をスキーで行くも、熊の足跡が先行している。小雨が降り出し、風も強くなる。標高1000m辺りでキャンプ。一晩中強い風が吹き荒れる。5日、晴れ。国後島を背に7時出発。カリカリに氷化した斜面をスキーアイゼンで行く。強風に立ち向かうように進み、東岳に9時30分登頂。分水嶺を北にたどるが、雪面が氷化して硬く、スキーアイゼンが真っ二つに破損。1502mからの下りも雪が凍って硬く、滑れない。意外と時間を食い、ルシャ山の登りに入るも今度はハイマツの海でスキーが使えない。スキートラーゲンして、ズボズボ埋まりながら消耗して14時、ルシャ山（849m）に上がった。その先は幸いにも雪が着いていてスキーで進み、56

4mピークの手前で14時50分、キャンプ。

6日、曇り空の下に知床岳が見える。6時に出発。広い尾根にスキーを滑らして行くが、ガスに包まれる。次第に細い尾根となって笹やハイマツが露出しており、スキートラーゲンで越える。雪があっても腰まで踏み抜き消耗。ガスが流れ、晴れた中をルサ乗り越しに9時50分に着くと、サポート隊の緑の連絡文が待っていた。この先のトッカリムイ岳分岐まで踏査を終え、5分前に下ったと連絡文にあった。ホイッスルを吹くと、沢中から田島祥光ほか2名のサポート隊の姿が現れた。下山中、ガスが晴れた一瞬に稜線上を歩く踏査隊を認めて、登り返して来たとのこと。

嬉しい再会。サポート隊のBCに下り歓待を受けた後、ルサ川の徒渉を繰り返してルサフィールドハウスに到着して終了。「田島隊のサポートがなければルサ乗り越し～トッカリ分岐の分水嶺踏査に時間と体力を使い果たし、下山が翌日になり大荒れの天気につかまっていただろうと考えると、サポート隊に感謝である。」と植田は述懐している。

9. 風雪の中、地の涯・知床岬に立つ

終着点の知床岬へは、2013年3月に京極紘一ほか1名が勇躍向かった。北海道を襲った低気圧は、道東に大きな被害をもたらした。3月6日、低気圧通過後の好天をつかんで入山したが、羅臼町相泊へは、9㎞手前のルサ川の所で雪崩の危険があるために通行止め。カモイウンベ川からの入山を諦め、ルサ河口からトッカリムイ岳（561m）を越えて分水嶺を目指した。3月7日6時17分、トッカリムイ岳分岐（450m）で分水嶺に乗り、硫黄山と東岳の真っ白い姿を背に知床岳に向かう。根室海峡を隔て国後島が逆光の中に浮かぶ。クラストした尾根を進んで1182mの知床岳分岐で15時40分、キャンプ。翌6日も快晴。まず知床岳（1254m）に登頂し、オホーツク海が流氷で埋め尽くされているのを横目に8時、スキーはデポして分水嶺を北にたどる。ナイフリッジをたどって広い知床沼の台地を過ぎ、ポロモイ岳（992m）を順調に越える。ウィーヌプリ手前のコルの針葉樹林の中で13時30分、キャンプ。6人パーティが追いついて来た。明日は知床岬往復と意気上がるも、それから3日間風雪が吹き荒れ、知床岬を目前に無念の引き返しとなったが、帰路も風雪の中を懸命に戻った。

そんな悔しさもあって、翌4月に再度知床岬を目指した。京極紘一ほか2名が今度は東海岸をペキン川河口まで歩

き、そこからペキン川を登ってウィーヌプリ手前のコルに出て、分水嶺を知床岬へと向かう。山登りをするのに海岸を歩くため、潮の干満を調べて登るのはなんとも奇妙な気分である。

２０１３年４月27日は標高６８０ｍでキャンプ。翌日は風雪のため停滞。降雪は１ｍにも達した。４月29日、昨日より吹雪がやや弱まったので、餅入り雑炊を食べてスタート。視界が30ｍくらいの中を標高６００ｍの等高線に沿って１時間ほど山腹を巻き、北緯44度17分、東経１４５度19分で分水嶺に６時57分合流。風雪の中を北へ緩く下ると、３月に引き返した地点を７時45分に通過。いよいよ未踏の部分に入った。

ウィーヌプリ手前のピークは、立ちはだかるようにハイマツの海となって行く手を阻む。先日の雪は砂糖をまぶしたようにハイマツを白く覆い、スノーシューのまま枝渡りで難儀する。悪戦苦闘して前衛ピークに立つが、その先は雪庇状の雪が続いていて、難なく強風吹き荒れるウィーヌプリ（６５２ｍ）の頂上に８時45分に立った。乳白色のガスで視界はなく、三角点の標石が雪面から顔を出しているのが印象的だった。

早々に知床岬に向かう。ハイマツの斜面を下ると細い雪庇の着いた稜線となるが、歩きやすい。６０２ｍを越えると樹木が多くなるが、尾根は新雪の雪庇が着いて崩れやすい。だが、快調に進む。途中ハイマツ漕ぎがあったがそこだけで、樹林の中に稜線が続くので分かりやすく、高度が下がるにつれて雪も少なくなり、腐葉土の上に積もっただけなので歩くのに支障はない。３０３ｍ辺りでフクジュソウが一面に咲いていたが、折からの降雪に黄色い花だけが顔を覗かせていた。小動物や鹿の足跡も見かける。突然に鹿の防護柵が現れ、高さ３ｍもあって越えられない。少し進むと櫓のような梯子があり、スノーシューのまま越える。平らな樹林を進むと灯台に出た。目の前に灰色の海があった。階段を下りて草原台地に出る。ザックをデポして、空身で雪に白く埋まった草原を岬に向かう。

ついに知床岬に立った！　２０１３年４月29日、午後２時50分である。知床岬は強風と吹雪の中に足元から切れ落ち、断崖の下には荒波が岩礁に泡立ち狂い、地の涯てそのものであった。暗いオホーツク海を背に、風にあおられながら支部旗を掲げて写真を撮る。分水嶺踏査が再スタートして３年目にやっと到達したのであるが、なんの感慨も湧かず、逃れるように去った。

草原を戻り灯台の下から東へ回り込み、東海岸を赤岩へ

と歩く。降り出した小雨を避けて廃屋番屋の中にテントを張って、10時間半の行動を終えた。とっておきのビールで乾杯！　しかし、知床の踏査は簡単に終わらせてはくれなかった。

30日は東海岸から戻るため、カブト岩の大高巻き、念仏岩の高巻きをしてクリア、続く近藤ヶ淵では大波が洗っていて通過できない。干潮ではあるが、低気圧が千島に停滞しており高潮のためだ。高巻くが、その先のメガネ岩や剣岩も通過できないと判断し、そのまま等高線沿いにペキン川の標高１００ｍ地点に向かい、そこから尾根を越えてモイレウシ川に下った。熊の真新しい足跡に遭遇。約3時間の高巻きであった。晴れていた空は曇り、そして雨となった。タケノコ岩のへつりでは、海水が渦巻く岩礁を飛び渡り、波に洗われる岩壁をへつるが、1人が波に流され泳ぐ。ロープを使用して通過した。化石浜の廃屋番屋の中に雨を避けてテントを張る。シュラフもベショベショで、悲鳴を上げて潜り込む。この日の行動は13時間に及んだ。5月1日、玉石の歩きづらい海岸を1日遅れで相泊港に戻った。留守本部に連絡を入れた後、羅臼温泉で冷えて疲れた身体を癒した。

おわりに

オホーツク分水嶺は、積雪期にしか踏査できない難易度の高いものではあるが、踏査に関わったのは35隊、延べ１７０人に及んだ。サポート隊や調査に関わった者を加えると延べ２３３人になり、正に北海道支部の総力を挙げての踏査であった。全長３５０kmのうち私が歩いたのは１５９kmと約半分近くになり、踏査回数も全区間32回の踏査のうち、私が参加したのは13回で、そのほかにも数回の調査があり、道東に頻繁に通ったことが成功の一助になったと思っている。

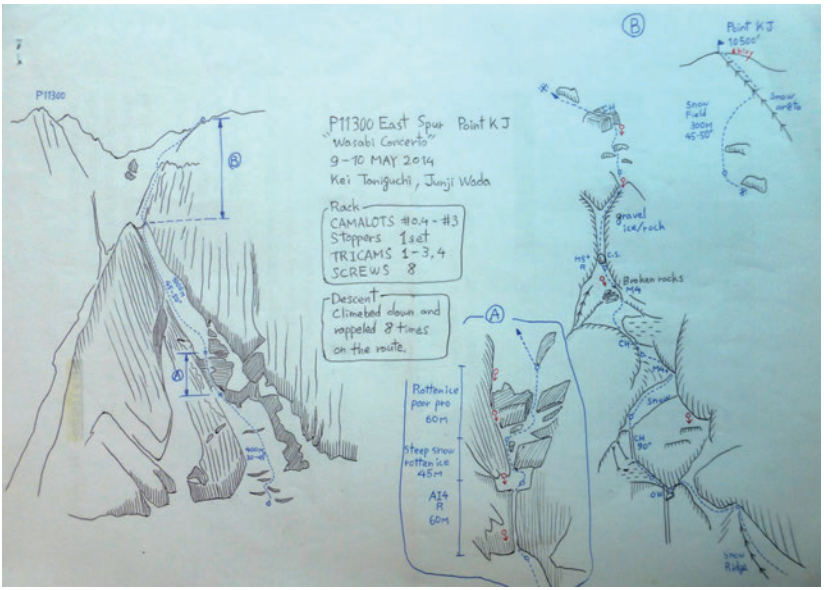
最後に踏査に携わった支部会員、会友の参加や手助け、協力がなければなし得なかったことであり、北海道支部会員の総力を傾注した、すばらしい事業であったと自負している。

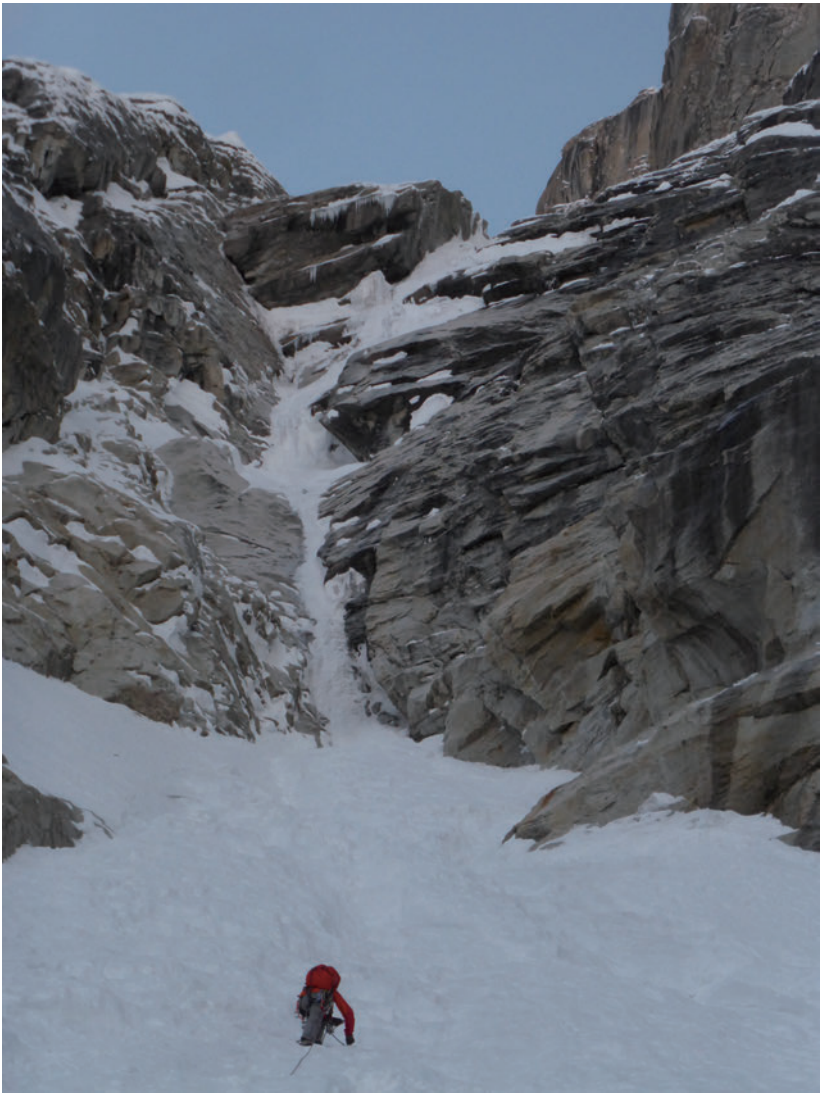
（文責・京極　紘一）

「プレリュード」を拓いたダン・ベアード南壁

「ノクターン」を拓いたダン・ベアード東壁

「コンチェルト」と「ソナチネ」を拓いた 11300 峰東壁





コンチェルト下部の核心部

コンチェルト下部核心部の 3 ピッチ目

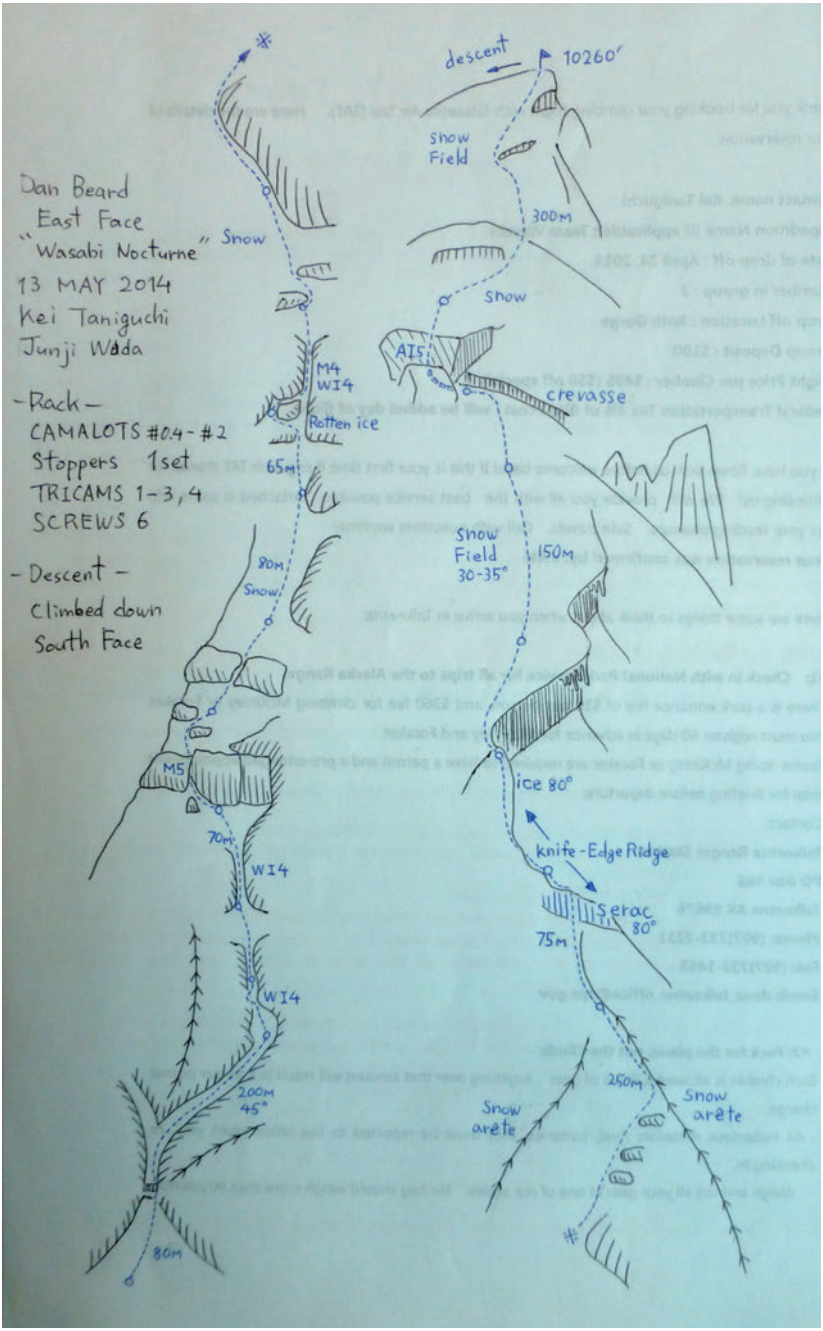
コンチェルト下部核心部の１ピッチ目

コンチェルト上部の核心部 CS

コンチェルト上部の２ピッチ目

ノクターンの 4 ピッチ目。核心部の M5

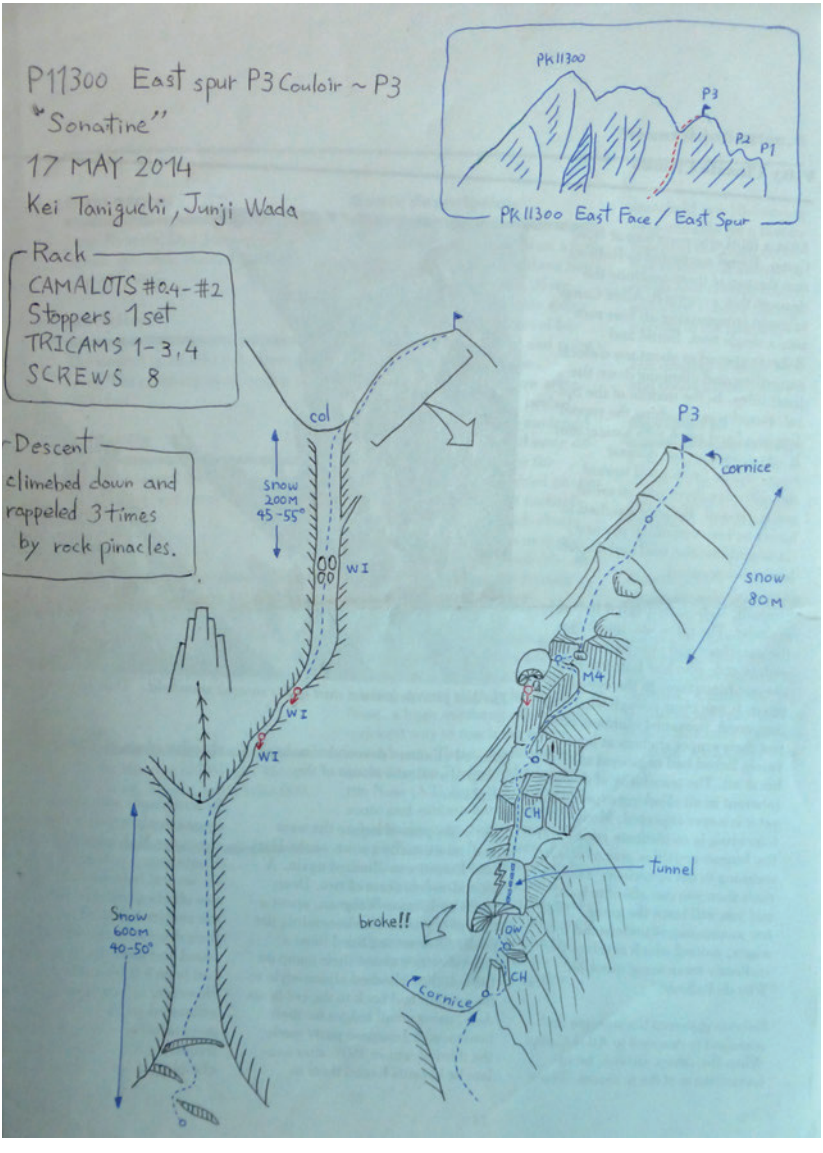
ノクターンの 8 ピッチ目


Dan Beard
East Face
"Wasabi Nocturne"
13 MAY 2014
Kei Taniguchi
Junji Wada
-Rack-
CAMALOTS #0.4 - #2
Stoppers 1set
TRICAMS 1-3,4
SCREWS 6
-Descent-
Climbed down
South Face
Snow
M4
WI4
Rotten ice
65M
80M
Snow
M5
70M
WI4
WI4
200M
45°
80M
descent
10260'
Snow
Field
300M
Snow
AIS
crevasse
Snow
Field
30-35°
150M
ice 80°
knife-Edge Ridge
Serac
80°
75M
250M
Snow
arete
Snow
arete

ノクターン上部の雪稜

ノクターン頂上間近のセラックの登攀

ソナチネ上部の M5


P11300 East spur P3 Couloir ~ P3
"Sonatine"
17 MAY 2014
Kei Taniguchi, Junji Wada
Pk11300
P3
P2
P1
Pk11300 East Face / East Spur
Rack
CAMALOTS #0.4-#2
Stoppers 1set
TRICAMS 1-3,4
SCREWS 8
Descent
climbed down and rappeled 3 times by rock pinacles.
col
snow 200M 45-55°
WI
WI
WI
Snow 600M 40-50°
P3
cornice
snow 80M
M4
CH
tunnel
broke!!
low
CH
cornice

ソナチネ P3 コルより上部岩稜の登攀

ソナチネ上部のキノコ雪に挑む

ソナチネ上部の M4。背後にはムースズ・トゥースやディッキーなどが見える

山葵四重奏（わさびカルテット）

――ルース氷河での38日間と4つの新しい登攀――

谷口けい

パーティ：谷口けい
　　和田淳二
登山期間：２０１４年４月25日～６月１日

２０１４年春に訪れたデナリ（マッキンリー）南麓のルース氷河最上流部で、幾度かの偵察行をしつつ、４つの自分たちらしい登攀をすることができた。何よりも贅沢だったことは、多くの人が集うアラスカの地で、この間まったく他人に会わなかったことかもしれない。そのことは、自分とパートナーと自然（山も空も大地も）とが、純粋に向き合うことができる環境をつくり出してくれたと思うのだ。だから、より雑音なく、自分たちのラインに向かうことができたと思うし、美しくも厳しい自然の姿を受け止めることができた気がする。

前奏曲〝Prelude〟プレリュード

――Dan Beard 南壁バリエーション／V, snow & ice／7時間

我がBCから約1時間半のアプローチ。南壁に向かって右端のベルクシュルントを越えて壁に取り付く。広いクーロワール状から三角岩を回り込んでトラバース、壁のほぼ中央を上部へと向かう。上部ヘッドウォールを右上し、チムニー状の隙間に導かれて頂上プラトーへ。氷と雪の広い頂上に着くころには雪雲に包まれてしまったけれど、氷河

上での生活第一歩としては上々の楽しい登攀となった。

第1楽章

予想より早く上部からの雪崩が始まった。下部雪壁をコンテで延ばし、いよいよガリーに入ってお楽しみのアイスミックスが始まるというころ、でかい雪崩が襲ってきた。志半ばにして、今日もまた諦めねばならないのか……。悔し過ぎてすぐには「下ろう」と言葉を発せられない。しかし、リスクはとれない。逃げるように下降する。恐れていた最後のシュルント越えで、巨大雪崩に追いつかれた。雪崩が先か、自分が飛び降りたのが先か、運良く偶然にもシュルント内に入り込んだ私は雪崩の直撃から逃れ、まるで滝裏から瀑布を見るように、シュルントの内側から視界を真っ白に埋めて流れていく雪崩を見ていた。

ルース氷河 West Fork（西支流）に座す Dan Beard と Peak11,300 に未踏ラインを求めて偵察をしている中で、私たちは4本のラインを描いていた。Dan Beard 南壁、東壁、Peak11,300 東壁（実際は東稜南東壁）に2本。前奏曲として登った Dan Beard 南壁に続いて、どこからもその全景を見ることのできない Peak11,300 東壁に1本の美しいガリー（P3ガリー）を認めてトライするが、ひとたびアラスカの澄んだ大気の中に強い日の光が射すと、ガリーは雪崩のリスクで覆い尽くされてしまうのだった。この自然の脅威に抗うためには、気温の低い夜間に登るか、太陽の出ない曇った日に登るかしかなかった。2本目に登ろうと考えていたこのP3ガリーは、2度の試みののちしばらく保留となり、結局は終章まで封印された。

第2楽章 〝Concerto〟コンチェルト

——Peak11,300 East Spur, 東壁～Point KJ ／ AI4+, M5+ R ／ 18・5時間

4：40下部雪壁の登攀開始。クーロワール内の核心、ボロボロの氷と岩と、スカスカの雪を騙し騙し登る3ピッチ。これを越えるころ、上部に朝陽が射して雪崩が始まる。雪崩のラインを避けつつ、クーロワール上半の雪壁をコンテで登る。12：30クーロワール終了点まで登りつめるころにはガスが濃くなり、視界がほとんどなくなってしまった。ガスの中に見え隠れする上部岩壁帯は、想像したより傾斜がある。「ここから先へ進んだら、もう戻ることはできないね」と話しながらも、戻るという選択肢はどうもないようだった。

ガスの中に次々現れるその姿は、オフウィドゥスあり、チムニーあり、スラブ、チョックストーン、スカスカの雪、そして積木のように不安定に重なり合った岩、砂利の混じった硬い氷と、たっぷり私たちを楽しませてくれた。大奮闘の末に上部雪壁と雪稜を越えて頂上に出たのは23時過ぎ。

トワイライトの中に繰り広げられた３６０度の円形劇場そのもののような景色は、私を幸せで包み込んでしまった。闇にならないアラスカの初夏の夜、少しずつ空と地平線の色が変わってゆく。半月が次第に輝きを増してきた。その月はRooster Combの右肩にあり、その右にHuntington、たどり着けなかったPeak11,300、そしてデナリ。世界が美しいほどに我々は寒く、頂上プラトーの窪みでツエルトを被って座り、眠気と劇的な寒気と闘う。温かいものを食すると身体は温まるが、眠気は増し、足先は凍っていく。宵の空が暁へと移り変わり、地平線が曙色に染まり出すころ、凍った足は下降への一歩を始めた。

第3楽章 〝Nocturne〟ノクターン

——Dan Beard東壁／W14, AI5, M5 ／12時間

頂上プラトーからの懸垂氷河の脅威に触れずに登れそうなラインを、東壁に探る。右寄りのV字ガリー右俣をコンテで登り、どん突きから左上するガリーへ入る。流水氷と岩と雪のミックスを9ピッチ、東岩稜沿いのコーナーから上部スノーリッジへ。アラスカらしい、両雪庇と氷のリッジを高度感いっぱいに登る。上部はセラック帯。氷河の割れ目を繋いで頂上プラトーを目指す。頂上直下で、大きな割れ目（クレバス）に遭遇するが、アイスクライミングで突破。Dan Beardの広い頂上で、またまた雪雲に巻かれて視界は最悪。散々彷徨した挙句、幸運にも広がり出した青空の下に南壁への下降路を見出して、無事に東壁～南壁への縦走を完成させることができた。満月の夜のこと。

終章 〝Sonatine〟ソナチネ

——Peak11,300 East Spur, 東壁～P3 ／ W14, M4 ／10時間

どこからも全景を見ることのできないPeak11,300東壁。ルース氷河上流部を偵察していた中で、遠目に認めた一本の明らかな氷のライン。しかし、取り付きが分かりづらく、また陽が当たるとルートそのものが雪崩の通り道と化するために、なかなか近づけなかったライン。夜中、といってもヘッドランプなしでも大丈夫な自然の明るさがある中、ガリーの登攀開始。闇じゃないのに月が神々しく明

るかった。下部ガリーはコンテで駆け上がる。上部ガリーは流水氷とSNiceとときどき岩。薄い氷の支持力はすべて怪しい。コル（稜線）まで上がると、クラックと雪稜の上部岩稜帯の登攀へ。業務用冷蔵庫くらいの大きなキノコ雪が、アックスのひと刺しで崩壊したりとびっくりの連続の末、３６０度の大景観が頂上で待っていた。

ザンスカール・P6070（L15）初登頂

学習院大学山岳部インド・ヒマラヤ登山隊2014

2009年、インド政府はラダック・ザンスカール地方における104座をオープン・ピークとして発表した。オープン・ピークは外国人登山者を呼び寄せるために登山料が安く、登山申請も簡略化されているものである。それらのピークの№45にあたるP6070（L15）に2014年8月22日、学習院大学山岳部が初登頂した。

登山隊は学生3名、OB1名によって組織され、登頂したP6070（L15）はインド北西部ザンスカール地方レナック谷に位置する未踏峰（6070m）であった。この地域は、京都大学学士山岳会（AACK）の阪本公一氏を中心にここ7年間で探査が進み、未踏峰がまだまだ残されていて、氏によって積極的に情報が開示されている地域である。

氏の記録を見ているうちに私たち学生の力でも登れて、なおかつ見た目も格好の良い山があることが分かった。特に目標としたP6070（L15）は、この地域でもひときわ秀麗な形をしており、どんどんと心を奪われていった。手前に延びる長い雪稜が明瞭だったため、ここに乗れば良いルートになると想定して計画を進めていった。

BCまで

7月31日にデリーの日本大使館とIMFを訪問した。日本大使館では計画書を提出し、IMFではリエゾン・オフィサー（L.O.）と面会した。その後、ラダック地方の中心地

レー（Leh）に移動して2日間登山準備をし、チャーターした車で道路が続く限り、ひとまず目的地へ向かった。

8月9日、道路がなくなりウォーキング・キャラバンを始めて2日目、事件は突然起こった。細い登り坂で馬2頭が崖から50mほど転げ落ち、積んでいた荷物が馬から外れて100mほど下の川に落ち、流されてしまった。馬は奇跡的に擦り傷ですんだが、大きな川に流された荷物はなすすべがなかった。結局、ピッケル8本、スノーバー40本、コッヘル、アイススクリュー20本、カラビナ60個など、登攀に不可欠な金物類などを紛失した。このままでは登山することができないため、一度隊を2つに分け、OBの原田昌幸とL.Oはデリーに戻って買い出し、学生と残りのスタッフはBC予定地にそのまま向かい、登山準備をすることを決めた。

P6070（L15）登山期間

8月12日にBC（4830m）を設置。東面と西面をそれぞれ1日ずつ偵察し、西面は氷河を渡るのに時間がかかることと、ルート上にセラック崩壊の危険性があるため、東面を上がることに決めた。東面は足場の悪い浮石だらけのガラ場が続いていたが、慎重にルートを進めていった。なるべく落石の危険性の少ないルートを探していき、8月17日に5400mまでロープなどを荷揚げした。8月18日に買い出し組がBCに到着して新しいピッケルなどの装備が手に入り、久しぶりの全員集合を喜んだ。

8月20日に5400m付近の急な雪の斜面に50mフィックスロープを張り、5600mまで偵察。メンバー全員の体調も良く、天気が崩れる前に、BCから山頂までをワンプッシュで行くことに決めた。

P6070（L15）登頂日

8月22日（晴れ）

BCから雪に乗る5500m地点まで3時間で上がり、荷揚げした物をザックに詰めてレーションを食べた。2人1組の2ペアでロープを繋ぎ雪稜に上がった。5800m地点の巨大クレバスは、繋がっていた左から巻いた。クレバスを越えた所で小休憩をとり、その後は斜面が急で、氷混じりの雪となってきたためスタカットで上がった。斜面は硬いため、スノーバーが刺さらず苦労した。6ピッチほど上がったところ岩のプラトーとなり、そこがP6070（L15）の頂上だった。頂上はもろく、岩が重なっただけのようで不安定なため、写真を撮りすぐに降りた。

降り始めてすぐに天気が崩れ出した。５４００ｍ地点のフィックスロープを回収し、Ｃ１設営予定地に戻ってきたときに吉田が高山病により体調を崩す。最終的に雪も降り始め、ＢＣ直前で緊張がほぐれたせいか吉田が吐いた。ＢＣに着くとスタッフやL.O.が、これまでにないくらいに祝福してくれた。夕食は豪華でケーキも出たが、疲れ過ぎて食欲が出なかった。登山中にデポした荷物はすべて回収し、残置物はなかった。虚ろな状態でテントに戻り、その日は本当によく寝られた。

ギャルモ・カンリと命名

その後、Ｐ６０７０をラダック語で「王妃の山」を意味するGyalmo Kangri（ギャルモ・カンリ）と命名することにした。この山を初めて探査した京都大学学士山岳会（ＡＣＫ）の阪本公一氏の報告書『季報ヒマラヤ』№４５７に、「……左手の右岸に雪稜の美しい端正な山容のＰ６０７０（Ｌ15）が現れる。……Ｐ６０７０の秀麗な姿はレナック谷の王女にたとえられよう。」とあったところから発想を得させていただいた。Ｌ15というのは、混乱を避けるために阪本氏がLenak谷のＬの頭文字をとって付けた仮称である。

阪本氏には、隊の計画段階から多方面にわたる情報提供にあずかり、非常に強力なサポートをしていただいた。氏のこの地域における精力的な活動には頭が下がる思いで、今回のご協力にも改めて心からお礼を申し上げたい。

また前述したとおり、今回の対象はオープン・ピークの１つであったため、登山申請が簡略化されていたのでスムーズに進めることができた。ただ、登山申請や衛星携帯電話の持ち込みの規制などの情報は年々変化しているので、最新の情報を入手して、正しい手段で登山申請を行なうことが重要である。

（隊長・吉田　周平）

〈付記〉この報告を執筆された吉田周平隊長は本年２月９日、学習院大学山岳部の個人山行として入山した八ヶ岳連峰・阿弥陀岳にて遭難、還らぬ人となられました。図らずも本稿がご遺稿となってしまいましたが、日本山岳会学生部委員長を務めるなど将来を嘱望されていた存在だけに、惜しみても余りある事故でした。謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

（編集委員会）

ムスターグ・アタ登頂

東京農業大学ムスターグ・アタ登山隊

なぜムスターグ・アタだったのか

農大山岳部創部90周年記念を迎える２０１４年に、記念事業として海外登山をできないものか、ＯＢ会の一部から話が出たのが始まりだった。90周年には当然、祝賀会を行なうのだろうと安易に思っていただけに、こうした選択肢を出されて少々戸惑ったのは事実である。農大山岳会（ＯＢ会）は２００３年にエベレスト・ローツェ環境登山隊を派遣し、成功を収めてはいた。しかし、その成果に続く次世代、つまり山岳部自身は、２００１年の学生の遭難事故で部員ゼロとなって、約10年の期間を経てそろそろ最終段階に入っている実感はあったが、まだ山岳部そのものの立て直しの途上にあったからである。いずれにせよ、時期もまだ数年先であったので、登山実現の可能性も含めての議論の場としてＯＢ会内に準備委員会が立ち上がった。

第一候補に挙がった所は、１９８９年に行ったナンガ・パルバットのラキオト東南稜への再挑戦であった。ところが、主力になってもらうべき２００３年エベレストのメンバーは、山岳部再生のために学生指導に全力を注ぎ、月日が経ってしまった結果、齢も重ね、仕事、家庭、社会的地位など、おいそれとは長期海外登山に出かける環境になく、参加できる者は、悲しいかな皆無であった。では、この約10年間に新たにＯＢとなったメンバーはどうだろうか？確かに山岳部活動を4年間全うした彼らではあるが、２００１年の事故以前の合宿内容には及ばない中での活動であっ

て、体力的には十分だが、総合力ではまだまだ以前に遠く及ばなかった。そうしたことから、ラキオト東南稜は時期尚早と判断せざるを得なかった。実はコーチ陣は以前からこんな状況も想像していたし、現有の力で海外登山をと考えると、以前のような形での登山は無理だと思っていた。あえてできる形があるとすれば、海外合宿としての海外登山ではないか。しかし、こうした記念事業に「格」というものがあるならば、海外合宿、またそれに近いものが果たして90周年に見合った海外登山として成り立つのか？　といった疑問は拭いきれなかった。

こうした機会は実際そうあるものではない。思いは同じであるコーチたちや若手の後押しもあり、高所経験者も交えて現有の力で何ができるか、何をしていくかを改めて考える場をつくることとした。その話し合いで、２０１４年の山岳部創部90周年、２０１６年の農大創学１２５周年とイベントが続いてあることから、これらを一つの流れの中に考え、５、６年先に大きな目標を置いて、段階を経ていく長期計画にしていくこととなった。第１弾の創部90周年の２０１４年は、

⑴今までの経験を若手にまず継承すること

⑵若手の高所経験者をつくること

の２つを目的とし計画することになった。当然、メンバーは高所未経験者が大半を占める。また、次回へ繋げる面を考えると、なるべくたくさんの経験者をつくりたい。海外合宿に近い形にはなるが、学生の参加も視野に入れた。そうした構成や今後の展開を考え、より高い８０００ｍ峰を目指すにせよ、６０００～７０００ｍのクライミング要素の高い山を目指すにせよ、まずは高さの経験を積むことが大事であるとし、７０００ｍくらいの山で、技術的な面で比較的困難さが少ないことなどを選定条件とした。また、学生の参加を考えて夏期休暇を最大限利用できる場所、つまりモンスーンの影響の少ない地域、そして、期間的問題からＢＣへのアプローチが短いことも加え、その諸条件に見合った山として、新疆ウイグル自治区のムスターグ・アタ峰（７５４６ｍ）に決定したのである。若手のＯＢにとっても力を発揮できるルートとして、未踏である北峰～本峰への縦走も加えて展開できることも選定理由の一つであった。

準備期間

まず、実行に当たり問題となる大きな点は、高所未経験者が大半であること。実際、高所経験の内容は７０００ｍ

以上は私1人、6000m以上が1人、4500m以上が1人、ほか5名は富士山までといった構成となっている。具体的には現地での酸素の確保、登山タクティクス、一方で国内でのトレーニングなどである。また、学生やOGが参加することから、現地での治安の問題は重要課題であった。

まずは酸素の問題。酸素はあくまでも登山行動に使用することは考えず、緊急用として上部キャンプに上げた。残念ながら軽量の登山用酸素ボンベが現地では手に入らず、医療用の酸素を手配することになった。医療用のボンベは鉄製で1本8kg／3ℓ、荷物になる難物だったが致し方ない。

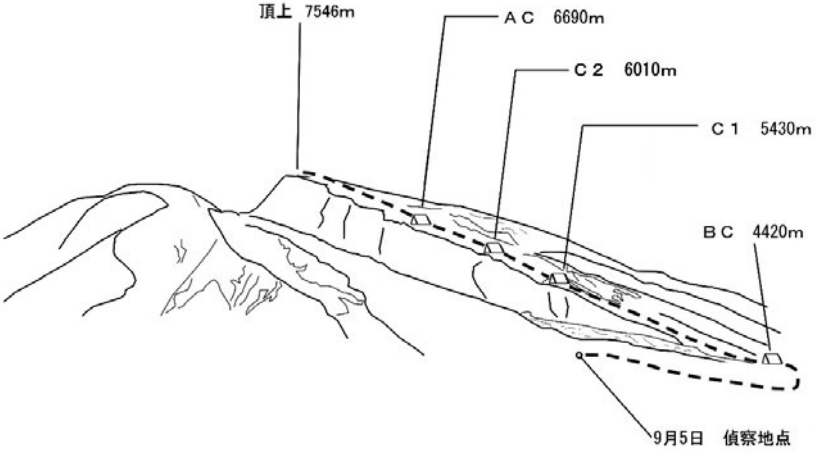
登山のタクティクスは、当然隊を分けるような方法はとらず、全員にての行動を基本として組み立てた。経験という点で不確定な部分があるための措置である。また、全員登頂を目標として掲げた登山であるので、十分な休養と余裕ある日程を組んだ。

トレーニングについては、数度の富士登山を義務付けたことに加え、農大の国際食料情報学部健康科学研究室の樫村修生先生のご協力で研究室の常圧低酸素室を利用させてもらい、出発2週間前から4000～5300m相当の低酸素の中で、エアロバイクでの負荷トレーニングを実施した。

一番の問題となった現地の情勢については、いろいろな所から得た情報からウイグル暴動は対漢人のものであって、街中以外は大きな危険はないという結論に至り、街中での滞在を極力減らし、早々に山に移動する行程とすることで対応した。

出国～BC

8月1日、西出、淀川が出国。現地準備を事前に済ませておくために先発する。2日昼にカシュガルに到着。買い出しについては大型のスーパーが2店舗あり、大概の物はそろった。中国自転車横断旅行を予定していたOBの吉田裕一が日程を合わせてくれ、カシュガルでの準備を手伝ってくれた。経験豊富な彼のお陰で、準備はスムーズに終えることができた。現地の状況は、街中での武装警察のパトロールや空港での執拗な手荷物検査など、物々しい雰囲気はあった。しかし、人々は外国人観光客に対しては一様にウェルカムな対応であったし、全日程を通して危険を感じるような場面は一度としてなかった。逆に日本人と漢人の区別をつけることに慣れていない田舎の方が危険だ、とい



うのが現地での情報だった。余談になるが、ＯＢの吉田は、私たちと別れてから中国自転車横断を無事に終え、12月に帰国している。しかし、ウイグル暴動の影響をもろに受けて、予定のルートを大幅に変更した。田舎町に向かう途中で公安に止められ、追い返されたという。理由は、まさに漢人との区別がつかないので襲われる危険があるためであった。

本隊は8月4日に出国、5日にカシュガルで先発の2名と合流した。

翌6日、早々にスバシ上部の集落（4030m）へ移動。スバシまでの移動では、コングールの北の辺りにパスポートのチェック・ポストがあった。また、カラクリ湖付近に公安があり、そこでもパスポートのチェックと隊荷のチェックがあった。ただ、公安のチェックは2時間以上もかかり、隊荷に関しては執拗にチェックされた。通訳の話では、登山隊は一様にチェックされるが、こんなに時間をかけたのは我々が日本人だからだ、とぼやいていた。日中関係の悪化がこんな所で影響するとは驚きである。お陰で徒歩を予定していたスバシからスバシ上部の集落への移動は、陽も傾いてきてしまったため、車での移動となった。

7日、8日は、予定どおりスバシ上部の集落での順応行

動日とした。これはBC（4420m）まではカラコルム・ハイウェイから車で小1時間、徒歩でも1日弱で入れてしまう距離の有利さが急激な高度上昇を招き、高山病などで体調を崩さないための措置である。予想どおりというか、3年生の岩附とOGの渡邊は頭痛で苦しんでいた。「お爺さんの散歩」のごとく、息を切らさぬようにゆっくりと集落からBCまでの間を散策し、各自順応に努めた。

8月9日BC入り。集落から標高差400m弱をゆっくりと2時間かけて移動。体調を崩す者もなく移動できた。BCにはほぼ同時期の登山活動となるドイツ・オーストリアの合同隊と、すでに登山活動を終了したドイツの隊がテントを連ねていた。また、現地キルギス人の夏の放牧場所ともなっていて、ヤクや羊が闊歩していた。いよいよ山も眼前に迫り、気持ちも高ぶるところなのだが、毎日のバイクや車での物資の荷上げ、気象観測施設の大きな風力発電、ソーラーパネル、また、遠くカラコルム・ハイウェイを行き交うトラックが見える環境に、なんとも山に浸りきれない感じも残った。

C1～AC

8月11日～13日　C1建設と荷上げ

まずはC1（5430m）への荷上げである。標高差1000m、C1はちょうど雪線のすぐ下になる。まるで夏の富士山を思わせるジグザグの道は、ロバによる荷上げでできた道であるらしい。先に入っていた隊は、C1までの荷上げと荷下げにロバを利用していた。大き目の荷物を背負い、新たな高度に慣れていない体で喘ぎながら登っている私たちを見るに見かねてか、ロバ方が20元／kgで運んでやると言ってきた。当然断ったのだが、通訳の話では、C1で彼らポーターによる盗難が相次いでいるという。そんな話を聞いてしまっては、斜に構えてしまう。テントを設営し、荷物をデポしたわけだが、厳重に入り口を締めたのは言うまでもない。お陰で後日、テントを開ける段になってとんでもなく手間がかかってしまった。

BCとC1への順応が全行程の中で特に注意していたところであった。ここで大きく体調を崩すと、この後の行動で挽回するのが難しいと思われたからである。結果的には思いどおりに進んだのだが、これは国内での常圧低酸素室トレーニングのお陰であったと思っている。実際に体に効果があるという点よりも、むしろ自身の体の低酸素に対する反応を理解していたことが非常に大きかった。

8月15日～17日　C2（6010m）への荷上げ

15日を境にして季節が秋に変わったかのように雪の日が増え、気温も下がっていく。C1への移動では、濃霧ときおり降ってくる雪の中での行動となった。ここまで2回の荷上げでみんな体も慣れてきていたし、ルートも理解できていることもあってか、初めての悪天下の行動であったが、みんな余裕が感じられた。C1での初の滞在で頭痛を訴える者も何人かいたが、翌16日は降雪のため停滞としたことで、かえって体を慣らすことになった。

8月17日　C2へ荷上げ

C2への荷上げは薄曇りの中でのスタートになった。C1の上に見えるセラックに向かって、雪の斜面をまっすぐに登って行った。セラックは左に大きく迂回して行くが、ここの斜面には小さなクレバスが幾筋も隠されていた。そして、1ヶ所またぐのがやっとのクレバスが口を開けていて、ここにフィックスロープを張った。セラックを回り込むと、左手に北峰からの尾根を見ながらの大雪面の登りに変わった。晴れ間も見え始め、遥か下には本峰と北峰間の氷河の末端が望める。

雪面を登り切るといよいよクレバス帯の通過になった。全行程で唯一上り下りのある区間である。クラストした急雪壁、その上の小クレバス、大きなクレバスを迂回する所に各々フィックスロープを張った。複雑に起伏したクレバス帯を抜けると、大きな窪地の雪面へ登り着く。右側の斜面を登り切ろうと進むのだが、思いのほか深いラッセルと6000m弱の高度で遅々として進まず時間切れ、斜面を切り崩しC2とした。

下山では一転して猛吹雪となり、大クレバスを迂回するフィックス地点では、風が爆音を上げて吹きすさんだ。局所的な現象であるようだったが、学生もOGも誰一人弱音も吐かずに、淡々と下っていく姿は迫力すら感じられて頼もしい。ここ3日の雪でC1～BCも一面雪景色になっており、BCに降りると登攀隊長・高野の個人用テントが雪でつぶれていた。

8月20日～22日　AC（6690m）への荷上げ

C1、C2への移動は、無風快晴の中、前回の行動が嘘のように快適で気持ちの良い移動となった。今回は6000mでの初めての宿泊である。C1からであったらしいが、3年の小野寺が頭痛と鼻血に悩まされていた。荷上げの朝、本人は行く気だったが、村田が付き添って先にBCへ降ろすことにした。そうこうしていたら、今度は渡邊も高度障害のためか嘔吐してしまった。渡邊も降ろすしかない。

高野以下元気な5名で荷上げに向かう。顔も痛く、手も足も感覚がなくなってしまう、凍りつくような出発。この日は行動中ですら、日が射していたにもかかわらず、終始手足の感覚がないほどの寒さは変わらなかった。14時、6650m地点に荷物をデポし、一気にBCまで降りた。2年生大山は予想以上に消耗し、高野の付き添いの下BCに着いたのは、真っ暗になった21時過ぎであった。ともあれ、これでアタックの準備は整った。

頂上アタック

8月27日〜29日　AC入り

BC休養に入ると天候は雪の日が続き、4日に及ぶ休養となった。ヤマテンの猪熊さんからの予報を基に27日、BCを出発。予報どおり晴天の中でのC1、C2入りであった。29日、いよいよAC入りである。小野寺、渡邊にとっては初めての高度になる。少々の不安もあろうが、ゆっくりと登ろう。

C2から一段上がると緩急の傾斜が続く雪面の登高になったが、思いのほかの起伏に体力を奪われていく。昨日とは変わり、ときおり一面雲の中といった天気で、景色を望むことはできない。ただひたすら雪面を見ながらの登りを6〜7時間、前回のデポ地より一段上がった、昨年の中国隊のテントが残置された隣にACを建設した。夜半から風と雪が強まり、天気は悪化していく。

8月31日　頂上アタック

30日は午前中、風と雪が強く停滞。

31日7時、快晴の中、頂上に向けて出発した。朝日はムスターグ・アタの山体の向こう側だ。手も足先も感覚がなくなるほどの寒さ。事前情報で8000m峰並みに寒いと聞いていたが、冷たいとかいうレベルではない。休むたびに靴を脱いでマッサージしている者すらいる。8時過ぎ、行く手の雪のスカイラインから太陽が昇ってきたときは、ただただありがたかった。

左手には遠くカラクリ湖、その向こうにはコングールの山々。目の前は雪斜面と群青の空。その雪と空の境に、トップでトレースを引いている3年生の小野寺が、そしてそれに続く高野、淀川、大山、西出、岩附、渡邊が、ポツンポツンと並んでいる。やや急斜面、緩斜面を交互に越えながら、景色を見ることもなく、単調で広く延々と続く雪の斜面を登り続けた。気が付くと左手に見えたカラクリ湖もコングールも雪のスカイラインに隠れ、目の前は一段と傾斜が緩くなった雪面と空だけになった。ここまで来ると

1時間で標高差100mも登っていないほどの傾斜だ。

不意に傾斜がなくなり、雪原となった。前を見ると岩の台座が見え、その上にたくさんの旗と竹竿が立っている。7546m、ムスターグ・アタの頂上だ。現地時間14時30分、3年の小野寺が登頂、続いて高野、淀川、2年大山。やや置いて西出、3年岩附、16時に村田、渡邊が登頂し、全員登頂を成し遂げた。

頂上東側は雪庇が張り出し、急雪面で落ち込んでいる。下方には氷河とそれを取り巻く雪を頂いた山々が見下ろせる。7500mの薄い空気の中で深呼吸を何回もして、頭に酸素を回らせた。登頂の感慨は後回し、やることをやってさっさと降りよう。

先に下山に移った淀川、小野寺、大山は、ACにて後から下山した西出と合流しテントを1張撤収、C2まで下りる。岩附の下山ペースがやや上がらないので、高野とともにACへ。渡邊は高度障害がタイムラグで顕著に出てきたのか、ペースが全く上がらない。村田が付いてACへ下山したのは日没後であった。

下山勧告

BCへ下山後、次なる目標である高野、西出、淀川の3名による北峰～本峰の縦走へ向けて準備を進めた。9月4日、北峰へのルート取付に荷上げと偵察を終え、6日から約7日間のアタックと決めた矢先に、留守本部からの連絡で「9月8日までに下山せよ」との下山勧告があったことを知らされる。これは「ウイグル暴動の犯人が同山域に逃げ込んだために、一斉捜索をする。巻き込まれる危険がある」からであった。強引に実行してしまう選択もあったが、学生とOGがいる隊である。危険は極力回避すべきだ。悔しくもあったが6日、BCを撤収し下山。11日帰国となった。

登山を終えて

今回は登山隊が多く入る山、ルートであったので、キャンプ位置の設定にあまり苦労はなかったといえる。強いて言えば、私たちの行動日程が今シーズンで一番最後であったために、C2、AC建設時には他隊のテントはなく、そのためキャンプ地選定はある程度自分たちの判断となった。また、C1～C2間のクレバス地帯の通過も、ほぼ残置のロープはなく、ロープは自分たちで張ることになったし、C2以上の行動はトレースもなくラッセルとなった。すべてのことを自分たちで、という点から言えば好都合

だったと言える。

確かに技術的には困難な部分は少なく、大半は雪面の登降であったが、実際に感じたことは、山の大きさとそれに伴う登降距離の長さによる危険性である。緩傾斜の登降は長時間高い高度で行動することを意味し、不測の事態が起きると高度を下げることが難しいという意味でもある。高所の登山において、引き返す判断をするポイントは常に意識しておくのは当たり前だが、この山は技術的困難さが少ないだけに、特に注意すべきところだった。また、海外登山未経験者が多く、自己管理という点においては特に注意をしていた。海外での解放感で、目的を見失うことが何よりも怖い。隊員相互で注意し合って意識付けをしていたようであるが、注意すべき学生たちであっても、国内の合宿でも目的意識をしっかりと持っているので、ちょっとの助言で理解できたようである。

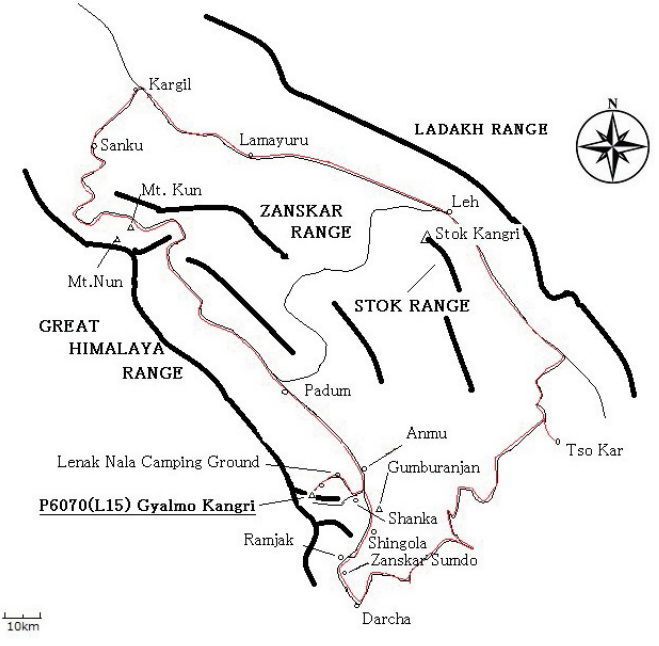
反省と今後に向けて

当初から計画が先に歩き出した中で進んだため、隊員の主体性が薄いという問題があった。エージェントとの交渉から登山に至るまで、すべてを自己完結して行なうスタイル、それがすべて継承できたかは疑問である。例えば、現地エージェントとの交渉が進まず、結局、日本のエージェントにお願いしてしまったことなどは、それが良い悪いということではなく、今までのスタイルを受け継げなかったという意味では、反省点である。

いずれにしても、当初の高所経験者をつくるということに関しては、十分な成果が挙がった。また、７５００ｍ超の頂へ学生を立たせるというチャレンジは、当然ＯＢの力が物を言ったわけであるが、個々の自己管理、今回の登山に対する意識や思い、何よりもチームワークの良さが成果に繋がったのだと思う。それは、日ごろ山岳部合宿で顔を合わせているメンバーだったこともあるし、国内合宿をそのまま海外に置き換えればよかったという点であったことも間違いない。

一方において、若手ＯＢの力を発揮し切れたかという面では、やはり北峰～本峰の縦走を中止したことによって発揮する機会がなかった。今回の高所経験をベースとして、ぜひとも彼らが自身の力を発揮できるルートや山に展開していってほしいと思う。長期計画の中の第１弾として、「次なる高みへの礎となる海外登山」は実践できた。２０１６年の第２弾は今回のメンバーが主体性を持ち、大きな目標を見据えた上で計画をしてくれるに違いない。

6000m 付近のスノーリッジを登る



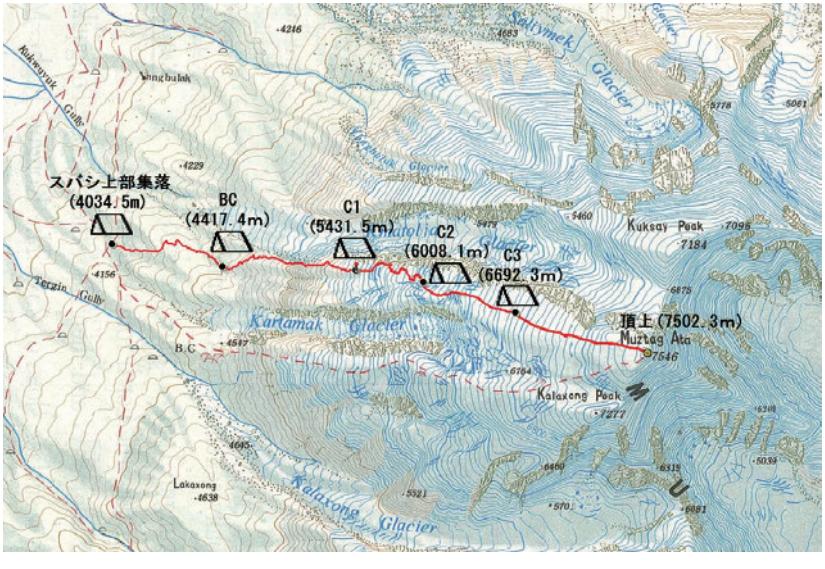
左が P6070（L15、ギャルモ・カンリ）　撮影＝阪本公一

P6070（L15）の登頂ルート

BC にて全員集合

ムスターグ・アタ登頂

ムスターグ・アタの BC


スパシ上部集落
(4034.5m)
BC
(4417.4m)
C1
(5431.5m)
C2
(6008.1m)
C3
(6692.3m)
頂上(7502.3m)
Muztag Ata
7546
Kuksay Peak
7184
Kartamak Glacier
Kataxong Peak
Kataxong Glacier
Lakaxong
Kukewyok Gully
Terzin Gully
B.C
Wingbulak
Kalaymek Glacier
N
U

BC 下部から見上げたムスターグ・アタ

クレバス帯。フィックス終了点から上の斜面を登る

山頂への登りで遠望したカラクリ湖とコングール・チュビエ

C2 手前の大きな窪地

ヒマラヤを越えるアネハヅルの大群

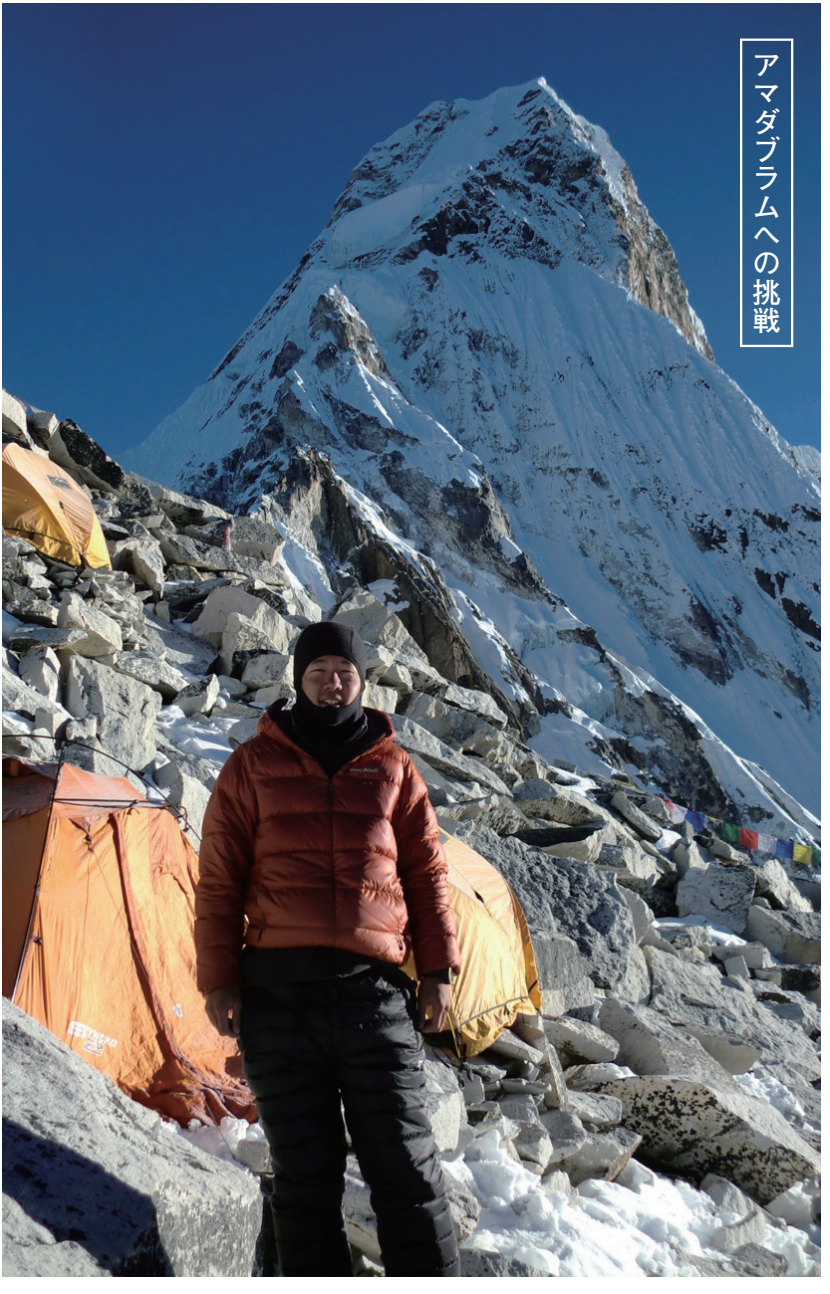
BC にて全員集合

マンセイル峰直下の北面の氷河を行く

マンセイル峰山頂直下を登る

9 月 29 日 13 時、マンセイル峰山頂に立つ

マルファの河口慧海記念館を訪問する



C1 の橋本隊員とアマダブラム

BC から見上げた降雪後のアマダブラム

BC 出発前に記念撮影。左からツァプテ、松本、石井、前田、橋本

C2 手前の核心部、ほぼ垂直のレッドタワーを越える松本隊員

C1〜C2 間のリッジ

今にも崩壊しそうな氷塊のわきをすり抜けて進む。これを越えれば山頂まで後わずか

アマダブラム山頂に立つ前田隊長。バックはエヴェレスト

今回のような、山岳部員も登攀メンバーとして連れて行き、高所登山を実践するといった形は今までにはなかった。今回実践したことによって、山岳部への影響は思いのほか大きく、そういった意味では、90周年記念として見合った登山ができたのではないかと思っている。

（村田　岳）

ムスタン山群・マンセイル峰初登頂

日本山岳会学生部　ムスタン女子登山隊

ベースキャンプのはるか上空を、見事な隊列を組んだ鳥の群れが飛んで行く。ヒマラヤ山脈を越える渡り鳥「アネハヅル」の飛翔に出会ったのは、ベースキャンプを撤収し、バック・キャラバンへ出発する10月3日の朝。「カランクルン」と空を指さし、サーダーが言う。チベットの空から飛んで来たあの一団は、無事ヒマラヤを越えられただろうか。

私たち日本山岳会学生部ムスタン女子登山隊（以下、ムスタン登山隊）は、それぞれ異なる大学に属する女子大学生４人で結成され、２０１４年９月５日から10月13日にかけて、アドバイザーの谷口けい氏とともにネパール・ムスタン山群の未踏峰を目指した。日本山岳会の学生部においては、この10年間に４回未踏峰に挑戦し、それぞれ６０００ｍ峰に初登頂を果たしている。ムスタン登山隊はその伝統を引き継ぎつつも、女子学生のみの構成という点においては、初めての試みであった。

この登山隊が成立したそもそものきっかけは、２０１３年12月、日本山岳会の年次晩餐会の前に行なわれた、青山学院大学山岳部によるヒマラヤの未踏峰アウトライアー東峰（７０３５ｍ）初登頂の講演を聞いたことに始まる。それまで、海外登山に自分が行くなど考えてもみなかったが、学生部でお世話になり、一緒に山にも行ったことのある先輩がヒマラヤを登る映像を見て、強い憧れを抱いた。そして、２０１４年１月の最初の学生部例会で、日本山岳会創

立１１０周年記念事業として学生部海外登山隊を考えている、との話を耳にした。しかし、その話は当時の３年生が中心であり、当時すでに４年生だった自分は参加が不可能であった。留年も考えたが、資金面の問題でどうにもならない。だが、海外の山に行きたいという気持ちは強まるばかりで、なんとか行ける方法はないものかと考えた。そのときに、国立登山研修所の大学生登山リーダー夏山研修会のことを思い出した。私の所属する大学では、いわゆる山岳部的な活動や技術が失われて久しく、活発に登山活動をする部員は少なかった。そのため、すがる思いで最初に参加した大学生登山リーダー夏山研修会の女子６人の班が、初めての同年代の、しかも同性とのテント生活であった。そのときのことを思い出し、国立登山研修所で知り合った女子学生を中心に声をかけて、女子登山隊を組織できないものかとの考えに至った。

最初のころは、近年、登山をする若い女性が増えているというし、募集して集まり過ぎたらどうしようか、などとすら考えていたのだが、現実は厳しかった。興味は持ってもらえるものの、具体的な話になると行き詰まることが多かった。それもそのはずである。募集していた時点では、時期も費用も、行先すら決まっておらず、どうなるか分からないけど、とにかく一緒に海外の山を目指さないか、という調子だったので、誘われた方も困惑して当然だった。そして、山岳系の部活で女子部員の数は男子部員と比べるとやはり少ないものの一定数はいるのだが、その中で海外の山に行きたいという女子部員はとても少なかった。一時はあきらめかけたが、３月に参加した大学生登山リーダー冬山研修会で話は進展し、登山研修に参加したことのある女子部員を紹介してもらったり、連絡先を教えてもらったりすることで、最終的に筑波大学の中村眞理子、創価大学の長谷川理恵、弘前大学の三島夏帆の３名と一緒に海外の山を目指そうということになった。私も含め全員が登山研修所の研修を通してそれぞれ面識があり、共通点も多かった。しかし、一番大きな共通点は、細かいことは置いといてとにかく未知の山に行ってみたいという、勢いと憧れだったように思う。

それから行先に関しては二転三転したが、５月21日、ネパール政府により中国・ネパール国境線上を含む１０４座の未踏峰の解禁が発表されたこともあって、私たちはネパールのムスタンというエリアにある未踏峰を目指すことになった。本来は、このような順序で海外登山に行くのは無粋なのかもしれない。写真を見て憧れたわけでも、強く

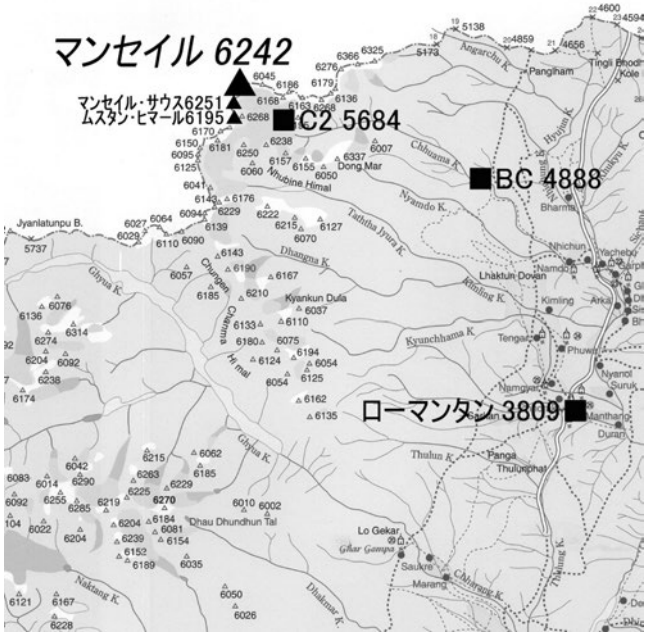
行きたい山があって目指したわけでもなかった。言ってしまえば私たちは、なんだか海外の山に憧れる、未踏峰ってわくわくする、だからその条件を満たし、かつ一番目指せそうな山を探す、といった順序で目標とする山を選んだ。山ありきの登山隊ではなかった。知識も技術も経験も不足し過ぎていた私たちは、正直なところ、行けるならなんでもいいから行きたいという心持ちだったことは否めない。目標の決め方も未熟だったように思う。

しかし、後付けのように思われるかもしれないが、このムスタンというエリアが文化的にもとても興味深い地域だということもあった。２００８年までは、ネパール王国内の自治王国ムスタン王国として成立していた。チベット仏教圏であり、１９９１年10月に解禁されるまで鎖国政策をとっていたため、チベットの伝統や文化が原型のまま残されており「禁断の王国」と呼ばれていた。今はネパール連邦共和国ダウラギリ郡の一部だが、今も人々の生活にはチベット仏教が息づいている。現在でも入域に特別許可と入域料を設けているので、画一的な観光地化は進んでおらず、私たちが日ごろ暮らしている文化とは違った暮らしが、今も息づいている。

また、このムスタンには河口慧海（１８６６～１９４５）という、驚くべき僧侶が訪れている。彼は日本人として初めてチベットに足を踏み入れた人物で、当時の漢語訳された仏典に疑問を覚え、より原型をとどめた経典を持ち帰るべく、現地の人間に扮して鎖国下のチベットに密入国した。見つかったら処刑される時代に、である。彼は数々の苦難の末、２度のチベット入りを果たし、一切経など多数の貴重な資料を持ち帰った。河口慧海がチベットに密入国する準備をしていたのがムスタンで、今も彼の足跡をたどることができる。マルファという集落には河口慧海記念館があり、彼が過ごした部屋も残っている。

そのほかにも決めた理由として、ムスタンが非常に乾燥しているチベット寄りの気候で、なるべく9月の夏休みを利用して行けたということも挙げられる。近年、大学における授業出席へのチェックは厳しくなっており、話に聞くかつての時代より、長期の登山活動と卒業の両立は、難易度を増しているのではないだろうかと思うことがある。そういう事情もあって、なるべく長期休暇を利用できるという点が、私たちにとって大きかったのである。

このムスタンという地域に目を向けて、なんとか目標とする山が決まり、マンセイル（Mansail、６２４２ｍ）、マンセイル南峰（Mansail South、６２５１ｍ）、ムスタン・ヒ



マール（Mustang Himal、６１９５ｍ）の３座の登山許可を申請、取得した。やっとネパール・ムスタンの未踏峰を目指せることになったのだ。ところが、目標の山も決まり順調にいくかと思いきや、私たちはすべてにおいてあまりにも未熟で、うまくいかないことの連続だった。今となっては、なぜ根拠もなく順調にいくと思っていたのか不思議である。青森、東京、茨城と隊員同士の距離があることに加えて、全員が海外登山の経験がなく、日本での登山も十分と言えるほどの経験はなかった。見兼ねた周りの方々に手を差し伸べてもらい、背中を押してもらい、脇を支えてもらうような形で、なんとか準備が進められていくことになるのだが、なかでも大きかったのが、アドバイザーとして参加していただいた谷口けいさんの存在だ。

６月に日本山岳会の会議室に集まって作業をしていると、アラスカ遠征から帰って来たばかりの谷口さんと会った。私以外は、国立登山研修所で谷口さんが講師を務める研修を受けていた経験があり、知った仲だった。そんな縁もあって、日本山岳会副会長の古野淳さんが谷口さんに今回の遠征への同行を依頼したところ、快諾していただいたのである。最初は学生の登山隊として出発したのに、谷口さんに頼るのはずるいのではないか、などとの思いもあっ

たが、その考えについては、身の程を知っていなかったことをネパールで私は思い知ることになる。アドバイザーとしての谷口さんの参加が決まり、8月には剱岳合宿を行なった。

青森の三島は8月の後半は東京へ上京して準備に当たり、9月5日の出発をなんとか迎えることができた。

そしてネパールに入国し、9月10日からキャラバンが始まった。ムスタンの山々は大きくのびやかで、とても乾いていて、すべてが新鮮で驚きの連続だった。広がる台地は見たことないほど乾いていて、不安になるくらい荒涼としている。それでも谷の間に点在する集落には緑があり、ソバ畑やリンゴがなっていた。そこに暮らす人々は水道もガスもなく、電気も止まってばかりだが、なんというかうまいこと暮らしているのである。決して原始的でも粗野でもなく、土地に根差した文化と暮らしが営まれていた。集落ごとに民家にまぎれて泊まれるロッジがあり、宿泊客にはヨーロッパから来たトレッカーが多かったように思う。

しかし、なんとかキャラバンを開始できたものの、すべてが順調にはいかなかった。ほとんどの隊員が海外に出るのも初めてであり、慣れない環境に体調を崩す隊員が続出した。原因不明の感染症に最後まで悩まされた三島は、キャラバン中、高熱が続いて行動不能になり、ヘリでレスキューされた。カトマンズのCIWECクリニックに入院、1週間の治療（原因が特定できず対処療法のみ）・静養ののち、再度ベースキャンプを目指したが登頂は断念することとなった。

三島を欠いたことで、それまで全員で登ろうと漠然と言っていた隊の方針について、登るということについて、何度も話し合った。怒涛の勢いで準備し、おんぶにだっことも言える状態で出発まで漕ぎ着けたので、自分たちが隊として何を大事にしたいのか、どういう風に登りたいのか、ということの共通認識がおざなりになっていた。キャラバンを進めながら、時にはぶつかりながら何度も話し合った。大事な時間だったと思うと同時に、出発前にこういった話を十分にできなかったことを悔んだ。

時には、私たちにはどうにもできない予期せぬトラブルもあった。ローマンタンより北の谷に入るには、地元民とのトラブルを回避する方策が必要との事前情報があり、ローマンタン・コミッティが派遣したリエゾン・オフィサーのパサンが同行することになった。しかし、事前に交渉していた値段の倍の金額をローマンタン・コミッティに求められたのである。トラブルを回避するため、おおよそ向こ

うの言い分に従うこととなった。海外登山ならではのトラブルだろう。しかし、パサンは実に多才な人物で、細密画を描くアーティストでもあり、僧侶でもあるので、ＢＣでは正統なプジャ（祈祷）をしていただいた。

ローマンタンを出て、最後の集落チュムジュンを過ぎると情報のないルートとなり、キャンプ地の選定に苦労した。ＢＣを設けるにあたって水の確保が必須だが、本流のチュマ・コーラの水は濁っていて使えず、支流の流れを探さなければならない。しかし、私たちは未知の高度に想像していたよりもずっと消耗しており、ＢＣ周辺の偵察は谷口さんとスタッフに任せきりとなってしまった。

９月20日、ＢＣを建設することができた。のどかな放牧地で、ヤクやシカ、ウサギ、マーモットがいた、らしい。らしいというのは、私たちは登ることに精一杯で、いくつかの生き物を発見することができなかった。同じ道を歩いているはずなのに、谷口さんは実に多くの発見をする。研修でも「もっと周りを見なさい」と何度も言われた。ついつい目の前のことにかかりきりになってしまい、周りを見られていないことは、登山では致命的だ。谷口さんとは経験が違うのだから仕方ない、と言うことはできない。同じ人間なのだからできるはずだと、自分を鼓舞しつつできることを模索する日々だった。

そんな反省を日々しつつも、偵察を始めることにした。とにかく情報がないのである。上部へは人や動物の歩いた形跡がなく、帰路のルート確保のためケルンを積みながら登る。ケルンの積み方一つにしても、失敗の連続であり、何度も行きと帰りのルートを間違って認識していた。学ぶことの連続だった。高度障害やそもそもスケジュールの余裕不足から、荷上げに関しても自分たちで行なうことができず、大きな荷物を背負う谷口さんの背中を見ながら、何をしに来たのだろうか、と呆然とした気持ちになることもあった。しかし、自分自身は自分の足で運ぶしかない。

なんとか25日にＣ１建設。当初の計画ではここからアタックの予定だったが、思いのほか谷は入り組んでおり、足場が悪いため歩きづらくて距離を稼げず、Ｃ２（５６８４ｍ）を設けることになった。26日にＣ２を建設したが、初めての高度で荷上げに苦労し、結局、サーダーと谷口さんとで大部分の共同装備を荷上げしてもらうこととなってしまった。さらに上部偵察は谷口さんが向かった。

27日、快晴。氷河上５８００ｍまで偵察しに行くが「マンセイルは見えたが、急峻な岩稜で登れそうに思えない。南峰は登れるかもしれない。ムスタン・ヒマールは見えな

い」という結果。デジタルカメラなどで拡大したり、見比べたりし、全員で確認するが、確かに登れそうにない急な岩稜である。しかし、事前に見たグーグル・アースの地形では、見えていない反対側の斜面が緩やかである可能性が高く、アタックし、反対側を見てみないことには判断できないという結論になった。

C2に戻ったが、長谷川と井上は高度の影響で食事が進まない。ところが、中村は最初から一度も体調を崩さずこの高度にもうまく順応している。中村は全行程を通して唯一体調を崩さなかった隊員だ。体質などもあるかもしれないが、彼女はよく水を飲み、ゆっくり動くといった、高山病対策の基本を人一倍しっかり実践していたことも関係していると言えよう。また、長谷川は高度を上げるごとに体調を崩していたが、必ず回復するのである。彼女は体調が悪いときはちゃんと申告し、回復に努めた。ある意味一番強かったと言えるだろう。

28日、晴れ。お昼過ぎにC2到着。谷口さんが再びさらに先へと偵察に行った。5996mの東稜上コルへ到達。その結果、南壁はスラブ、東稜は脆い岩稜、北面に氷河があるが、山頂まで繋がっていない。明日は東稜から北面に回り込んで山頂を狙う、ということになった。この時点で申請した3座のうちムスタン・ヒマールはあきらめ、まずマンセイルを目指し、時間的に可能であればマンセイル南峰も目指すという方針が決まった。

そして29日、いよいよアタックの日である。行程の関係上この日を逃したらもうチャンスはない。朝5時、まだ辺りは真っ暗ななか出発。15分ほど歩き、氷河の上に乗り上げる。氷河上でアンザイレンし、谷口さんを先頭に長谷川、中村、井上の順で1本のロープに繋がる。日が出てくると、しばらくは晴れており、ときおり大きな雲が日射しを遮るが、良い条件で登頂できるように思えた。しかし、時間がたつとともに雲が出て、やがて雪が降り出し視界が悪くなり始める。そして、予想以上に遠い。山が大きく、一面氷河なので近くに思えていたのだが、走れば30分と思えた距離に5時間以上かかった。途中、2回ほどスクリューで支点を取ってクレバスを通過し、ようやくマンセイルの麓にたどり着いた。東稜北面（チベット）側にルートを見つけ、1本のロープで4人がアンザイレン、携行したギア類、スノーバー、カム、ナッツなど、ほぼすべてを活用しての道のりとなった。

マンセイルの一番高い地点はピナクル状となっていて立っていないが、登れる中で一番高い肩の部分を山頂とし

た。ＧＰＳの標高は６１６５ｍを表示していた（グーグル・アースでは最高点は６１４８ｍ）。９月29日13：00（日本時間16：15）、マンセイルに初登頂することができた。

しかし、同時にマンセイル南峰は断念することとなった。登頂したときは、喜びや感動よりも、悪くなった天候と視界のなか、無事に帰れるだろうかという緊張と心配が勝っていた。下山は懸垂下降で始まり、さらに激しい降雪で長い氷河上をヒドン・クレバスに神経を遣いながらラッセル。ＧＰＳの軌跡をたどり、17時15分、なんとかＣ２に帰着することができた。下山中、わずか3時間の間に20㎝ほどの積雪があった。1日アタックが遅れていたら、登頂は不可能だっただろう。

それからも一晩中激しい降雪が続き、30日、曇り空の下、深く積もった雪の上をＣ２よりＣ１へ。さらにキャンプを撤収後、ＢＣまで一気に下った。サーダーとコックが荷下ろしを手伝ってくれた。うれしいことにＢＣでは、搬送された後医師の許可を得た上でＢＣに到着したばかりの三島が出迎えてくれ、再会を喜び合った。一番うれしかったのは、全員がそろったこの瞬間だったかもしれない。

しかし10月1日、三島が急激に高度を上げたこともあってか再び発熱。サーダーほかネパール人スタッフに支えられながらの下山となってしまった。体調は回復していたが、焦るあまり高度順化を急ぎ過ぎてしまった。多方面に迷惑をかけることとなり、隊全体でも深く反省するところである。

それからは馬に乗ったりしつつ、のんびりとローマンタンへ下山。すでに乾季で車道も開通していたため、ジープに乗って1日でジョムソンまで下山できた。翌日はフライトまで日にちがあったため、マルファの「河口慧海記念館」を訪問。調べたところによると、私たちのキャラバン・ルートは１１４年前、日本人で初めてチベットを目指した河口慧海の足跡をたどる山旅でもあった。

振り返れば、私たちムスタン登山隊を説明するときには欠かせない3つの「未」があった。一つは未知。39日間の毎日がすべて未知との遭遇であった。あまりに私たちが知らないことばかりなので、谷口さんは、知らないことにびっくりする姿にびっくりされていた。次に未踏峰。マンセイルに登頂できたこと以上に、目指せたことを深く感謝している。最後に未熟。私たちは決して優秀な隊ではなかった。登山において何が優秀かは分からないが、とにかく優秀でないことだけは明白である。足りなかったものを挙げると体力、技術、経験、知識、資金――と枚挙にいとまが

ない。しかし、憧れと行きたいという気持ちだけはあふれていた。あと根拠のない自信も、だ。

多くの人に支えられて登頂に至ることができた。お世辞ではなく、達成感よりも感謝の方が大きい。

しかし、ここで得た経験は次へ繋げなければ、私たちの中で途絶えてしまう。自分自身のこれからの登山に活かすことはもちろん、何かに繋げていかなければならない。そう使命感のように思うのも、それだけこの登山で得られたものが大きいからだ。登山の先輩に、「登山の技術だけであれば、日本の山を登った方が多くのことが身に付くかもしれないが、人生における学びや発見の塊のようなものが、海外の山を目指す過程にはあるように思う」と言われたことがあった。振り返ってみて、その言葉が身に染みる。海外登山は、登山であると同時に大きなプロジェクトだ。本来であれば学生には難しい。資金の面でも経験の面でも。しかし、私たちは多くの人に支えられて登頂に至ることができた。この感謝の思いをすぐに還すことはできないが、次は私たちも、とにかく行きたいという情熱を持った後輩たちのために少しでも力になれるよう、努力していきたいと思う。

〈メンバー〉

隊長：井上　由樹子（武蔵野大学山岳部4年、24歳）
隊員：中村　眞理子（筑波大学ワンダーフォーゲル部4年、22歳）
長谷川　恵理（創価大学歩こう会4年、22歳）
三島　夏帆（弘前大学探検部3年、21歳）
アドバイザー：谷口　けい（42歳）

（井上　由樹子）

アマダブラムへの挑戦

法政大学体育会山岳部アマダブラム登山隊２０１４

昨年10月、日本山岳会海外登山助成金をいただき、ネパール・ヒマラヤ、エベレスト街道にそびえる秀峰アマダブラムへの挑戦を実現することができた。隊員構成は現役２名、ＯＢ２名の計４名。内２名が高所登山未経験であった。10月５日（日）に日本を出発し、カトマンズに入った。久々のカトマンズは、相変わらず雑然とした独特の雰囲気で我々を出迎えてくれた。ルクラへの飛行機も遅れることなく飛び、エベレスト街道を進んでアマダブラムのＢＣへと入った。

以下、ＢＣから登頂までの詳細を記載する。

10月15日　晴れ　ＢＣ（４６００ｍ）到着

前日の悪天候（雪雷）とは打って変わって雲一つない晴天となった。アマダブラムＢＣは、パンボチェから見える丘の裏側にある。雪の積もったなだらかな斜面をひたすら登って行く。トレースがしっかりとあり、多くの人がアマダブラムＢＣに入っていることが伺えた。ＢＣ到着後はテントを設営し、各々休息した。

10月16日　晴れ　ＢＣ～５１００ｍ地点～ＢＣ

この日は朝食後に登山の安全を祈願するプジャを行ない、高所順応に出かけた。ＢＣからＣ１までのトレースを上がって行く。アマダブラムの南西稜を右から大きく巻いている尾根沿いにルートがある。ＨＣまではヤクも上がれ

るとの情報どおり、なだらかな道が続いている。正午前でストップし、BCに戻る。午後はフィックスロープの通過技術の確認と、明日の荷上げに向けて荷物整理を行なった。

10月17日　晴れ　BC～HC（5400m）～C1（5750m）～BC

荷物は1人当たりおよそ20kg弱だろうか。普段の山行ならば軽々と持っている重量でも、この標高になるとゆっくりゆっくり歩くだけで精一杯である。尾根をひたすら上がって行くとC1に続く尾根に合流し、HCが見える。HCは5400mにあり、少なくとも20張はテントを張ることができるだろう。

HCを越えた所で前田、松本が遅れ始める。C1の直下は岩場になっており、フィックスロープが4ピッチほど張られている。傾斜は緩いのでロープはなくてもよいくらいだが、スリップや落石などの危険があるため、ハーネスを履き、ユマールをセットする。C1では尾根上に所狭しとテントが張ってあり、とても我々のテントを設営するスペースは見つかりそうになかった。岩陰とダワ・シェルパの知り合いのテントに荷物をデポし帰路につく。

前田はどうやら喘息の発作が出ているようで、石井から薬をもらうも歩くのがやっとの状況であった。これにより下りにも時間がかかってしまい、BCに着くころには真っ暗になってしまった。

10月18日　晴れときどき雪　休養

この日は前日の疲労を考え休養日とした。何度か雪がちらつき、3cmほどの積雪があった。

10月19日　晴れ　休養

万全の状態まで回復してから山頂を目指すことになり、この日も休養。荷物整理や洗濯をして過ごした。

10月20日　晴れ　BC～HC～C1

いよいよ登山開始となった。この日の荷物は結局1人20kg強と重くなってしまった。前回以上に慎重に、ゆっくりと歩みを進める。ダワ・シェルパはテントの場所を確保するために先行する。C1に1張分のスペースを確保することができた。隊員は、ダワの知り合いの隊のテントを使わせてもらえることになった。

10月21日　晴れ　C1～C2

Ｃ２までは岩壁が連続する気の抜けないルートとなる。３ヶ所ほど垂直の20ｍの岩壁を越えると、レッドタワーが目前に現れる。核心はリードすれば５級ほどであろうか。下降して来る人とのすれ違いなどもあり、予定の倍ほど時間がかかってしまった。テントは残置の物を利用させてもらうことができた。すぐに水を作り、夕食をとって就寝する。

10月22日　晴れ　Ｃ２～Ｃ３（前田）～アマダブラム山頂（前田）～Ｃ２

いよいよ山頂アタックのときがやって来た。前夜11時に起床、１時15分に全員分の飲み水をテルモスに詰め出発する。深夜にもかかわらず、高所用ダウンが必要ないほど暖かかった。Ｃ２からＣ３までのルートは、60～70度の雪壁である。前田とダワが先行する。７時30分、Ｃ３に到着した時点で前田と石井、松本、橋本の３名の間には、１時間ほどの差が開いてしまっていた。しばらく待っていても一向に姿が見えないので、ゆっくりと先行する。

Ｃ３を越えしばらくすると、高度障害のせいか前田も大幅にペースが落ちだす。６４００ｍ地点で30分待つも、後続の姿が見えないため山頂を目指すことに。６７００ｍ地点での無線交信で、松本さんから石井、松本、橋本の３名は６５００ｍで引き返す旨を伝えられる。

「私は頂上を踏んでから下ります」と返事をし、山頂を目指す。頂上直下２００ｍは50度程度の雪壁が続く。14時50分、なんとか山頂にたどり着き、写真を撮って下降する。下降は多くのピッチでダワとメインロープを繋いで下りた。Ｃ３からは、念のため酸素を使用して下降する。呼吸が上手くできないため一定間隔で止まり、深呼吸をしながらＣ２まで下りた。Ｃ２到着は20時40分となり、ジュースを流し込み眠りについた。

遠征を振り返って

私が初めてヒマラヤを訪れたのは、２０１２年の冬の終わりでした。山岳部に入部当初は、自分がヒマラヤへ行くなど想像もしていませんでしたが、いざネパールに足を踏み入れてみると、そこには見たこともないほど雄大で荘厳な山々がありました。前回のニレカ・ピーク遠征では、惜しくも山頂を踏むことはかないませんでしたが、ネパールで登山隊のメンバーとともに過ごした時間は掛け替えのないものであり、私の人生の転機となるような、大きな意味を持つ遠征であったと思います。

そして今年度、4年生になりもう一度ヒマラヤに挑戦すべく、また、後輩たちに海外の山での経験を伝えるべく、今回の遠征を計画させていただきました。ニレカ・ピークのときは、部員全員が参加する合宿という形で行ないましたが、今回はそうではありません。遠征と山岳部の活動の両立も苦労した点の一つです。

今回登山の対象として選んだアマダブラムは、エベレスト街道を歩けば必ず目に留まる非常に美しい峻峰です。このような美しい山に登ってみたいと選択したアマダブラムですが、登頂は前田1人。その上BC～HC間で高度障害のためヘリ・レスキューされるなど、残念ながらとても成功とは言い難い結果になってしまいました。しかし同時に、多くの経験と今後の人生において糧となるような充実した時間という財産を得ることができました。今後も山岳部の後輩たちが少しでも海外での登山に興味を持ち、私たちの経験を計画に活かしてもらうことができれば、この上ない幸せです。

最後になりますが、このたびの遠征に際してご支援いただいたすべての関係者の皆様に、重ねてお礼申し上げます。

（前田　優樹）

原発事故による宮城県の山地および丘陵地の放射線量

柴崎　徹

Ⅰ．はじめに

1　地震と津波

２０１１年３月11日14時46分、宮城県牡鹿半島沖１３０km一帯を震源とする、マグニチュード９・０の大地震が起こった。観測史上これまでにない巨大地震である。地震のエネルギーは関東大震災（１９２３年）の45倍、阪神淡路大震災（１９９５年）の１４５０倍であった。震度７（激震）の揺れは多くの構造物や自然地形に被害を与えたが、この後に襲った津波によって、沿岸部はさらなる甚大な被害をこうむることになった。

しかし、この大地震は、恐ろしいことにこれだけにとどまらなかった。福島県双葉郡大熊町にあった東京電力福島第１原子力発電所の６基のうち４基の原発の、未曾有の大事故に繋がっていくからである。

2　原発事故

東京電力福島第１原子力発電所の事故は、次のようなものであった。「地震によって鉄塔が倒壊し、電源が失われた。さらに約40分後に襲来した14～15ｍの津波は、敷地高の10ｍを越えて主要建屋に侵入し、安全上の重要な機器や系統に冠水し、損傷を与えた。これによって、１～６号機のすべてでプラントの熱を海に排熱するためのポンプを破損した。また、６号機以外の１～５号機の交流電源が失わ

れ、非常用のディーゼル発電機やその電源盤の浸水によって交流電源がすべて失われることとなった。ただし、5号機のみは電源が失われなかった6号機からの供給によって持ち堪えた。1・2・4号機では直流電源が失われた。この結果、機器の制御やプラントの状態を把握することができなくなった。3号機ではバッテリーからの直流電源が供給され続けたが、これもやがて枯渇することになった。」

「福島第1原子力発電所における事故は、まず1号機で起こった。1号機は炉心損傷に端を発して、3月12日15時36分に水素爆発を起こした。翌々日の14日11時1分には炉心損傷を起こした3号機が水素爆発を起こし、15日6時ごろには2号機の原子炉格納容器が損傷した。さらに当時、定期点検中であった4号機も、15日6時10分、3号機に発生した水素に連鎖すると考えられる水素爆発を起こし、15日には火災も発生した。

このように、3月12日の1号機の水素爆発以降、15日までの間に4基の原発が次々と重大な事故を引き起こし、大量の放射性物質が大気中、海水中に放出されることになった（註1、註2、註3、註4を参考にしてまとめた）。」

3　放射能汚染の広がり

原発事故によって大気や海洋に放出された放射性物質の総放出量（推定値）は、ヨウ素１３１が約16万テラベクレル、セシウム１３７が１・５万テラベクレル、これらのヨウ素換算値（国際原子力指標尺度）は、約77万テラベクレルになるという（原子力安全・保安院、6月6日発表）。また、ヨウ素13万テラベクレル、セシウム１３７が１・１万テラベクレルで、ヨウ素換算値が57万テラベクレルとする推定報告もあった（原子力安全委員会、8月24日公表）。これは、チェルノブイリ原発事故（１９８６年４月26日、総放出量５２０万テラベクレル）の約１／10に推定されている。また、ＩＮＥＳ評価（国際原子力・放射能事象評価尺度）では、チェルノブイリ原発事故の総放出量の約１／６になると推定し、チェルノブイリと同等の最悪な事故を示す「レベル７」に認定した。広域にわたる放射線量のモニタリングは事故直後、米国エネルギー省（ＤＯＥ）によって行なわれたが、3月25日以降は、文部科学省によって航空機を使っての測定が始まり、原発から20㎞以遠の地域に拡大された調査が実施されていった。この航空機モニタリングによって、福島県を中心にした放射能汚染の概要が地図上に示され、汚染のおおよその範囲が明らかになった（註5）。また、この文科省の図面と事故当時の気象を結び付けて解析した『フクシマ放射能汚染ルートとタイミング』

（註6）なども出た。

通常にない放射線量を示した、いわゆる放射能汚染の範囲は、福島県から北の宮城県そして岩手県に及び、南は栃木県、群馬県、茨城県をはじめ埼玉県、東京都など広く関東一円に及んでいたことが明らかになった。日本の地形区分（註7）に照らすとここには阿武隈山地、北上山地、八溝山地、足尾山地、奥羽山脈、上越山地、関東山地、そして北上盆地、仙台平野、および関東平野が該当する。この中には、仙台に住む岳人にとって主要なフィールドをなしてきた奥羽山脈、北上山地、そして阿武隈山地が含まれている。とりわけ原発に近く、極めて高い放射線量を示している阿武隈山地は、私たちにとって春の二次林の新緑、初夏のツツジ、夏の鍾乳洞、秋の紅葉、冬季におけるラッセルの少ない山登りなど、年間を通して訪れるかけがえのない山域であった。

阿武隈山地の各所における避難を余儀なくされるほどの高線量の情報や、宮城県北部栗原市における稲ワラの放射能汚染など、時間とともに事故の重大性と広域性が伝えられるなかで、阿武隈山地北部の山々をはじめ宮城県の山々が、実際にどのような放射線量を示しているのか知らなければならないと考えるようになった。

4　山岳放射線量実測へ

航空機による線量のモニタリングは、上空でカウントしたものを地上1mの高さに換算したもので、地域のおよその線量を知る目安にはなっても、地上のそれぞれの地点の微地形や植生を反映した実測値とは異なる。さらに宮城県の場合、地上における実測値が乏しく、それらはほとんど都市部や主要道路沿いに限られ、山地や丘陵地などの自然ないし半自然に位置づけられる県土の広範な地域の実測値は、皆無に等しい状況であった。私たちはむしろ、この自然の側の放射線量を詳細に知りたいと思ったのである。

宮城支部は創立以来56年の歴史を重ね、登山の啓蒙と山岳自然の保護保全に微力を尽くしてきたが、今回の事故を受けて2013年6月、自然保護委員会を中心として、新たに「山岳放射線量調査特別委員会」を設けて、宮城県の山地や丘陵地の主要な山々や自然を対象として、放射線量を計り、放射能汚染の実態を調査することになった。設立時期が事故後2年ばかり経ているのは、震災によって多くの支部会員が被災し、自分たちの生活の維持と復旧に多くの時間を要したからでもある。

調査特別委員会は、その後2014年12月まで、約1年半にわたって調査活動を続けてきた。長丁場にわたる調査

活動は、次のように期間を分けて行なわれた。

Ⅰ期　奥羽山脈　　２０１３年６月～８月
Ⅱ期　陸前丘陵および阿武隈山地　　２０１３年８月～２０１４年７月
Ⅲ期　北上山地　　２０１４年８月～12月

調査対象地は、大部分が宮城県の山地や丘陵の山々であるが、一部は越境して福島県、山形県、岩手県に及んでいる。調査対象は、これまで１６４座、３５３地点になった。

この調査結果の概要は、２０１４年11月に広島で行なわれた自然保護全国集会の折、発表させていただいたが、Ⅲ期の調査分も含めて報告させていただくとともに、改めていくつかの考察を加えた。

Ⅱ．対象山岳および調査方法

宮城県は東北地方太平洋側のほぼ中心、福島県と岩手県の間に位置する。北緯37度47分から39度00分まで南北距離１４０㎞、西の山形県境から太平洋岸まで平均の東西距離60㎞、面積７２８４・３㎢の広さを持つ。地形はほぼ南北に連続し、西側から奥羽山脈、山地、丘陵と順次低くなり、その東側には仙台平野が開けている、さらに平野の東側には北上山地と阿武隈山地が北と南から張り出してきて、それぞれの東側は海に迫っている。この地形の特徴を簡単に表現すると、宮城県は「西高東低・東々高」となる。西で高いのは奥羽山脈や山地であり、東の端で高いのは北上山地と阿武隈山地ということになる。

調査対象として取り上げた山岳は「宮城県地形分類図」（図１・註８）に準じて示すと次のようになる。

１　奥羽山脈および火山地群

栗駒山、鬼首、鳴子火山、船形山、泉ヶ岳、大東岳、蔵王山、青麻山、二ッ森山、雨塚山、馬頭山ほか。

２　陸前丘陵など

自鏡山、判官森、大土森、大土ヶ森、金田森、王山、八幡山、愛宕山、大森、千本松長根、下一栗村山、三太郎山、薬莱山、達居森、七ッ森、高寺山、石宮、大萩山、白坂山、富山、大高森、番ヶ森、高森山、寺岡山、国見山、弘法山、権現森、蕃山、太白山、戸神山、八木山、大年寺山、愛宕山、外山、三方境、大平山、千貫山、西大森山、愛宕山、雷神山、羽山、

宮城県の地形地域区分

Ⅰ	奥羽山脈	Ⅰa	禿山地
		Ⅰb	面白山地
		Ⅰc	二井宿山地
Ⅱ	奥羽火山地群	Ⅱa	栗駒火山地
		Ⅱb	鬼首火山地
		Ⅱc	鳴子火山地
		Ⅱd	船形火山地
		Ⅱe	蔵王火山地
Ⅲ	北上山地	Ⅲa	北上山地
		Ⅲb	牡鹿半島
		Ⅲc	海岸段丘群
Ⅳ	阿武隈山地	Ⅳa	阿武隈山地
		Ⅳb	亘理地塁山地
		Ⅳc	角田丘陵性山地
Ⅴ	陸前丘陵	Ⅴa	磐井丘陵
		Ⅴb	築館丘陵
		Ⅴc	箆岳丘陵
		Ⅴd	旭山丘陵
		Ⅴe	玉造丘陵
		Ⅴf	加美丘陵
		Ⅴg	大松沢丘陵
		Ⅴh	松島丘陵
		Ⅴi	富谷丘陵
		Ⅴj	七北田丘陵
		Ⅴk	青葉山丘陵
		Ⅴl	高館丘陵
		Ⅴm	角田丘陵
Ⅵ	山間盆地	Ⅵa	鬼首盆地
		Ⅵb	中山平盆地
		Ⅵc	鳴子盆地
		Ⅵd	愛子盆地
		Ⅵe	川崎盆地
		Ⅵf	村田盆地
		Ⅵg	七ヶ宿盆地
Ⅶ	仙台平野	Ⅶa	迫川低地
		Ⅶb	大谷地低地
		Ⅶc	小野田低地
		Ⅶd	大崎低地
		Ⅶe	吉田川低地
		Ⅶf	石巻海岸平野
		Ⅶg	広瀬川台地
		Ⅶh	宮城野海岸平野
		Ⅶi	名取平野
		Ⅶj	槻木低地
		Ⅶk	白石低地
		Ⅶl	角田盆地
		Ⅶm	亘理海岸平野

図１　宮城県地形分類

古峰山、向山、天狗森山、館山、箟岳山、加護坊山、和渕山、旭山ほか。

3

北上山地

駒ヶ峰、東森山、西森山、小屋取山、大六天山、牧山、硯上山、上品山、石峰山、小富士山、ソロミ山、黒森山、櫛田山、大盤峠山、大塚山、大伽藍山、玉山、来京山、杉山、雷神山、高荒神山、大嶺山、蚕飼山、田束山、長の森山、徳仙丈山、熊山、黒森山、大森山ほか。

［以上、宮城県］

高倉山、館ヶ森山、高森山、献上山、高烏兎山（藤沢）、烏兎山、高烏兎山（門崎）、三島山、大峰山、弓折山、丈競山、烏兎ヶ森山、束稲山、室根山、箱根山、氷上山、蓬莱山、阿原山、種山ヶ原（物見岩）ほか。

［以上、岩手県］

4

阿武隈山地

松沢山、権現堂山、斗蔵山、冥護山、毛無山、堂山、次郎太郎山、ツボケ山、和田山、弁天山、犬飼山、夫婦岩、窓倉山、岩嶽、手倉山、百々石山、天明山、羽黒山、鹿狼山、戸花山、深山、四方山、黒森山、愛宕山、三門山ほか。

以上、主要な山岳および丘陵を挙げたが、これらに付属する峰、独標、峠、分岐点、徒渉点、登山口なども随時調査対象地点に加えた。また、栗駒山と蔵王山では、それぞれ岩手県側、山形県側からのコースも加え、山岳横断的調査を試みた。さらに、その地域におけるランドマークとなっている小高い丘状の社寺、史跡なども加えた。また、平野部の中の河川堤防や耕作跡地、都市公園緑地なども、山岳や丘陵との比較対照のためにいくつか加えた。これらの調査対象の選定には、今後の継続的調査のことを勘案して、三角点やランドマークとなる目標物のある山を選んだが、山頂まで薮をこがなければならない所もかなりある。

測定地は、今回の目的から、できるだけ原発事故当時の状態をとどめている場所を選定し、人為によって改変や除染が行なわれたと考えられる場所、エロージョンが進行して自然改変が著しい表土の乏しい場所などはできるだけ避けた。調査地の各位置（図2）と概要は次のようになる。

調査内容は、①測定日、②測定時間、③天候、④測定者および記録者、⑤行政上の位置、⑥緯度および経度、⑦山

図２　各調査地の位置
谷謙二研究室（埼玉大学教育学部人文地理学）の経緯度から地図化したソフトを使用

調査地の概要

区分		山座数	調査地点
1	奥羽山脈および奥羽火山地群	14	74
2	陸前丘陵など	63	118
3	北上山地	60	84
4	阿武隈山地	27	77
計		164	353

名および測定位置、⑧標高、⑨地形、⑩植生、⑪放射線量、の11項目である。

⑥の緯度と経度および⑧の標高はGPSで測定したが、GPSが使えないときは2万5000分の1地形図から読み取った。⑨の地形はあらかじめ区分した地形の中から該当するものを選び、凡例上の番号で示した。また、斜面の場合にはその斜面の方位と傾斜をクリノメーターで計測したが、この報告ではその部分を省略してある。

降下した放射性物質が吸着したり、沈着したりしている環境として⑩植生や土壌を記しておくことは大切なことだが、土壌調査は私たちには困難なので、とりあえず植生について簡単な区分を行なった。植生の区分は「宮城県環境管

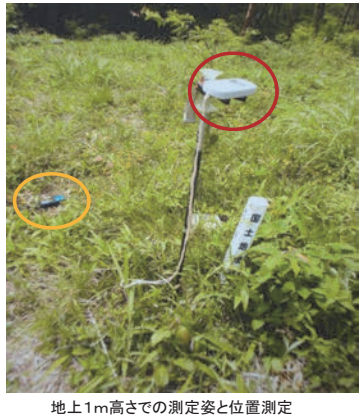
植生凡例

1 屋敷及び市街地など	15 ミズナラ二次林	29 ブナ林
2 短茎草本群落	16 フサザクラ二次林	30 タニウツギ・ヒメヤシャブシ低木林
3 蔬菜畑	17 河辺植物群落	31 亜高山性落葉広葉低木林
4 牧草畑	18 タブノキ林	32 アオモリトドマツ林
5 水田	19 ウラジロガシ林	33 ハイマツ低木林
6 桑園及び落葉果樹園	20 クロマツ林	34 砂浜植物群落
7 伐採跡地	21 アカマツ林	35 海崖植物群落
8 ススキ草原	22 モミ・イヌブナ林	36 ヨシ・マコモ群落
9 クロマツ植林	23 イヌブナ林	37 水生植物群落
10 アカマツ植林	24 シデ及びケヤキ林	38 湿原および雪田植物群落
11 ヒノキ植林	25 ハルニレ林	39 火山および硫気孔荒原植物群落
12 スギ植林	26 ミズナラ林	40 開放水域
13 カラマツ植林	27 キタゴヨウ・クロベ林	
14 コナラ・クリ林	28 スギ・ブナ林	

地上50cm高さでの測定姿

は
放射線量測定機

は
GPS（位置検出機）



地上1m高さでの測定姿と位置測定

理計画」（註9）の基本区分に準じた。その区分は以下のようなものであり、調査票にはその凡例番号が記されている。測定地点の植生が複数にまたがる場合は、2つの番号が並記してある。

⑪の放射線量の測定はHORIBA PA-1000 Radiを用いた。この線量計はシンチレーション式で、電離放射線を受けたシンチレータから出た蛍光をセンサーで捉えて表示するもので、測定線種はγ線のみであ。、したがって、測定の対象となる主な核種はセシウム134とセシウム137に限られる。セシウム134の半減期は2年、セシウム137の半減期は30年であるから、今回測定した核種の大部分はセシウム137と言えよう。

測定はあらかじめ用意した、地表から1mと50cmの目印を付したストックを用いて、2ヶ所の位置に線量計を正確にセットして行なった（写真参照）。測定は1mでは1分間隔で5回測定し、50cmでは1～5回測定した。これらはそれぞれ最高値、最低値、そして平均値で示した。

これらのデータは、本文末尾に「記録一覧表」として掲げた。

Ⅲ. 調査結果

―― 宮城県の山地および丘陵地における放射線量 ――

（ここに示した数値は地上高１ｍでの測定値の平均値、毎時のマイクロシーベルトμＳｖ／ｈである）

1、奥羽山脈および火山地群における放射線量

奥羽山脈および奥羽火山地については、先に示したように次の８つの山岳を調査対象とした。北から栗駒山地、鳴子火山地、船形火山地、泉ヶ岳火山地、大東岳、蔵王火山地、青麻火山地、そして二井宿山地である。これに鬼首の数地点が加わる。

1）栗駒山地

いわかがみ平	０．１１０μＳｖ／ｈ
山頂南斜面（標高１５６２ｍ地点）	０．１５０
東栗駒山	０．０５０
世界谷地下田代	０．０６９
大峰森	０．０９１
須川温泉	０．０４２
昭和湖	０．０４６
鞍掛沼	０．１０４

2）鳴子火山地

潟沼	０．１０２
荒雄湖畔公園	０．０８０

3）船形火山地

旗坂キャンプ場	０．０８６
升沢小屋	０．１３４
色麻コース（小野田分岐点）	０．１５４
大滝キャンプ場	０．０８８

4）泉ヶ岳火山地

芳の平登山口	０．０４１
賽の河原	０．０５４
岡沼	０．１０８

5）大東岳

本小屋登山口	０．０５７
１０１９独標	０．０３０

6）蔵王火山地

旧新滝小屋	０．０５９
剣ヶ峰	０．０６９
１４０８独標	０．０８２
栗駒山山頂	０．０４８
新湯沢	０．１５８
洞萬橋	０．１５５
青笹峠	０．１３８

［以上、宮城県側］

名残ヶ原	０．０４２
天狗平	０．０３６

［以上、岩手県側］

胡桃ヶ岳	０．０７５
三光の宮	０．０６３
船形山頂	０．０６４
湯谷地	０．１３１
水神	０．０５９
泉ヶ岳山頂	０．０４８
スキー場上部	０．０６６
立石沢	０．０５５
大東岳山頂	０．０７０
大黒天	０．０５０
刈田岳	０．０８０

馬の背	0・085	熊野岳	0・062
七日原	0・113	［以上、宮城県側］	
蔵王温泉	0・046	いろは沼	0・034
ワサ小屋跡	0・042	瀧山登山口	0・056
瀧山山頂	0・056	［以上、山形県側］	

7）青麻火山地

登山口	0・121	山腹斜面	0・110
青麻山頂	0・099		

8）二井宿山地

小原大橋	0・170	雨塚山	0・620
下戸沢	0・279	小坂峠	0・778
馬頭山	0・416	厚樫山	0・437
越河	0・407	七ヶ宿・関	0・097

2、陸前丘陵における放射線量

1）磐井丘陵では、栗原市と一関市との県境一帯の丘陵地で周辺より高い放射線量が見られた。この丘陵地の中には火山岩頸のとがった山がいくつか分布しているが、その中の一つ、自鏡山などでは高い線量を示した。しかし、この丘陵を離れてさらに北の磐井川左岸の丘陵では、それらより幾分低い線量が計測された。

一方、築館丘陵では丘陵の西側一帯、奥羽山脈に沿う地域で高い線量を示したが、丘陵の東側一帯、大崎平野に面した地域では、これよりも低い線量を示した。

この磐井丘陵と築館丘陵における高い放射線量を示す2つの地域は、原発事故の直後には今より放射線量が高く、両者は連続した汚染地域をつくっていたものと推測される。

沼倉・駒形根神社	0・204	判官森山麓	0・160
判官森山頂	0・136	岩ヶ崎鶴丸城址	0・168
新山神社	0・301		
自鏡山登山口	0・220	自鏡山山頂	0・170
谷地田峠	0・115	駒形根神社	0・098
三吉山北方	0・070	蘭梅山	0・105
大土森（一迫）	0・162		
大土ヶ森（文字）登山口	0・162	大土ヶ森山頂	0・106
三太郎山	0・011	下一栗村山	0・117
千本松長根	0・087	149・0峰	0・163
大森	0・122	142・4峰	0・139
114・7峰	0・142	117・2峰	0・083

114・6峰	0・088	王山	0・118
118・3峰	0・135	嶋射小山	0・100
212・2峰	0・118	金田森	0・143
八幡山	0・125	123・5峰（台山）	0・129
愛宕山	0・125		

2）加美丘陵、大松沢丘陵、富谷丘陵、松島丘陵、旭山丘陵、箆岳丘陵などの宮城県中央部の丘陵地帯では、通常よりもわずかに高い数値が示されたが、薬莱山（登山口0・130、山頂0・056）を除いて、特に高い所はなかった。

〈大松沢丘陵〉			
大館山	0・051	高寺山	0・067
石ノ宮	0・076		
〈富谷丘陵〉			
高森山	0・071	番ヶ森	0・072
味明山	0・067		
〈松島丘陵〉			
大萩山	0・056	白坂山	0・078
富山観音	0・078	多賀城政庁跡	0・070
〈旭山および箆岳丘陵〉			
旭山	0・061	和渕山	0・055
箆岳山	0・083	加護坊山	0・064

3）七北田丘陵および青葉山丘陵

〈広瀬川以北の七北田丘陵〉			
権現森	0・049	国見山	0・074
弘法山	0・064	長命館山	0・067
瞑想の松	0・076	東照宮	0・080
高松山	0・068	木皿山	0・073
善応寺山	0・062		
〈広瀬川以南・名取川以北の青葉丘陵〉			
戸神山	0・036	蕃山	0・061
太白山神社境内	0・077	太白山山頂	0・036
鈎取山	0・073	八木山	0・086
亀岡八幡	0・085	青葉城	0・084
愛宕山	0・092	大年寺山（二つ沢）	0・088
大年寺参道脇	0・108		
〈仙台市街の都市公園および史跡公園など〉			
小松島公園	0・081	とちのき公園	0・089
水の森公園	0・071	五橋公園	0・093
錦町公園	0・081	勾当台公園	0・095

遠見塚古墳公園　０・０７７

4）高館丘陵

外山（袖山）	０・０７７	外山鞍部	０・１０５
三方境	０・１３９	西大森山	０・１０１
大師温泉跡地	０・１５５	愛宕山（雨乞）	０・１０５
大平山	０・１００	千貫山	０・１４２
羽山（船迫）	０・１２５	上野山	０・１２４
大高山（神山）	０・１３８	頼母山	０・１３２
天狗森山	０・１００	向山（蔵王町）	０・１１５
館山（永野）	０・１０５	岩崎山（遠刈田）	０・１３２
古峰山	０・０８６	村田城址	０・１０５

また、高館丘陵から東に離れた残丘状の雷神山では０・１１０であった。

このように高館丘陵では、ほとんどの地域で０・１を上回る測定値が示されたが、高館丘陵でも南に位置する山々ほど数値が少しずつ高くなる傾向を示し、南端の千貫山では０・１４２であった。

3、北上山地の放射線量

北上山地は岩手県の早池峰山を盟主とする南北に連なる非火山性の山地で、太平洋プレートの圧力によって造られた褶曲や断層の交錯した、モザイク状の地塊から構成され、たくさんの峰を連ねるとともにその南端は宮城県の牡鹿半島となり、金華山島に達している。放射線の影響は宮城県境を越して岩手県にまで及んでいるので、今回は金華山から種山ヶ原（物見岩）まで、最終的には約１５０kmの間の山々を調査することになった。

北上山地には放射線量の高い地域が２ヶ所に認められた。牡鹿半島一帯と北の県境に近い蚕飼山から岩手県平泉の束稲山までの一帯とである。前者では金華山、寄磯半島の東森山や小屋取山、そして、半島基部の大六天山などが高い値を示した。太平洋側に突き出た山や東側斜面での放射線量が高かった。この中には東北電力女川原子力発電所が立地している。後者では、蚕飼山に始まり一関市の高森山、高烏兎山（藤沢）、烏兎山、高烏兎山（門崎）、大峰山、烏兎ヶ森を経て束稲山付近まで、やはり帯状に放射線量の高い地域が分布していた。

また、この２ヶ所の高い地域を結ぶ中間地帯にも、点状に硯上山や大伽藍山などの高い線量を示す山々が認められた。

これに比して、それより北の奥州市の東辺に位置する蓬莱山や阿原山、住田町との境の種山ヶ原（物見岩）では、少なくとも山頂の線量は高くなかった。ただし、このように離れた位置でも事故直後、周辺の牧草地の放射線量が高いために刈り取って廃棄したことがあったと聞いた。室根山は少し高かったが、陸前高田市の氷上山やその東の箱根山も高くなかった。

金華山（清水石）	0.221
金華山（山頂）	0.195
御番所山	0.074
鬼形峠	0.157
186峰	0.219
野々浜峠	0.139
東森山	0.250
小屋取山	0.212
大六天山（山腹）	0.268
牧山	0.102
硯上山（山腹）	0.078
上品山	0.076
石峰山（山頂）	0.056
金華山（水神社）	0.147
金華山（山頂北東端）	0.320
駒ヶ峰	0.107
寺山	0.156
羽山姫神社	0.141
182峰	0.181
西森山	0.199
風越トンネル	0.122
大六天山（山頂）	0.137
雄勝峠	0.094
硯上山（山頂）	0.129
石峰山（登山口）	0.077
小富士山	0.082
ソロミ山	0.100
馬鞍	0.104
大盤峠山	0.080
大伽藍山	0.139
新山	0.066
長谷山	0.072
雷神山	0.070
大嶺山	0.140
蚕飼山（登山口）	0.226
田東山	0.091
徳仙丈山	0.096
黒森山	0.107
七曲峠	0.141
高倉山	0.073
高森山	0.136
献上山（三角点）	0.094
高烏兎山（藤沢）	0.158
高烏兎山（門崎）	0.126
三島山	0.122
弓折山	0.096
黒森山	0.076
櫛田山	0.080
大塚山	0.103
玉山	0.074
来京山	0.072
杉山	0.069
高荒神山	0.083
岩手県境北上川	0.126
蚕飼山（山頂）	0.175
長の森山	0.083
熊山	0.103
大森山	0.104
［以上、宮城県］	
館ヶ森山	0.119
献上山（石祠）	0.100
藤沢館山	0.094
烏兎山	0.136
枯木峠	0.119
大峰山	0.161
丈競山	0.105

烏兎ヶ森(登山口)　0・147　烏兎ヶ森(山頂)　0・127
東稲山　0・220　経塚山(入り口)　0・140
箱石橋(前沢)　0・210　室根山　0・119
箱根山　0・070　氷上山　0・094
蓬莱山　0・058　697・1峰　0・073
阿原山　0・056　立石山　0・072
種ヶ原山(物見岩)　0・070

［以上、岩手県］

4、阿武隈山地および角田丘陵の放射線量

1)　白石川以南、阿武隈川までの地域

館山(船岡)　0・123　大萩山(白石)　0・130
松沢山(角田)　0・174　権現堂山　0・186
斗蔵山　0・246　毛無山登山口　0・415
毛無山山頂　0・280　堂山(大張)　0・399
毛萱館林休耕田　0・191　白石城　0・242

以上のように、この地域では白石川以北に位置する高館丘陵の山々よりもさらに高い放射線量が測定された。同時に、ここでも南に位置する山ほど高い線量であることが示された。

2)　亘理以南の亘理地塁山地およびその周辺地域

安福河伯神社　0・157　三門山　0・129
割山峠　0・191　愛宕山(亘理)　0・157
稲荷山　0・173　黒森山山頂　0・157
黒森山登山口　0・211　四方山山頂　0・156
四方山登山口　0・178　明通峠　0・202
深山登山口　0・207　深山山頂　0・179
山下稲荷　0・202　葉山神社　0・213
高瀬峠　0・168　戸花山　0・216
小斎峠　0・283　冥護山　0・232
福田峠　0・369　鈴宇峠　0・335
鹿狼山登山口　0・304　鹿狼山山腹　0・398
鹿狼山山頂　0・243　大沢峠　0・443
旗巻峠　0・280　羽黒山　0・344
天明山　0・435

このように亘理地塁山地では、北端から順次南に位置する山々ほど放射線量が高くなり、先端の安福河伯神社で0・157、であったものが、約10km南の明通峠で0・202、20km南の福田峠で0・369、30km南、つまり

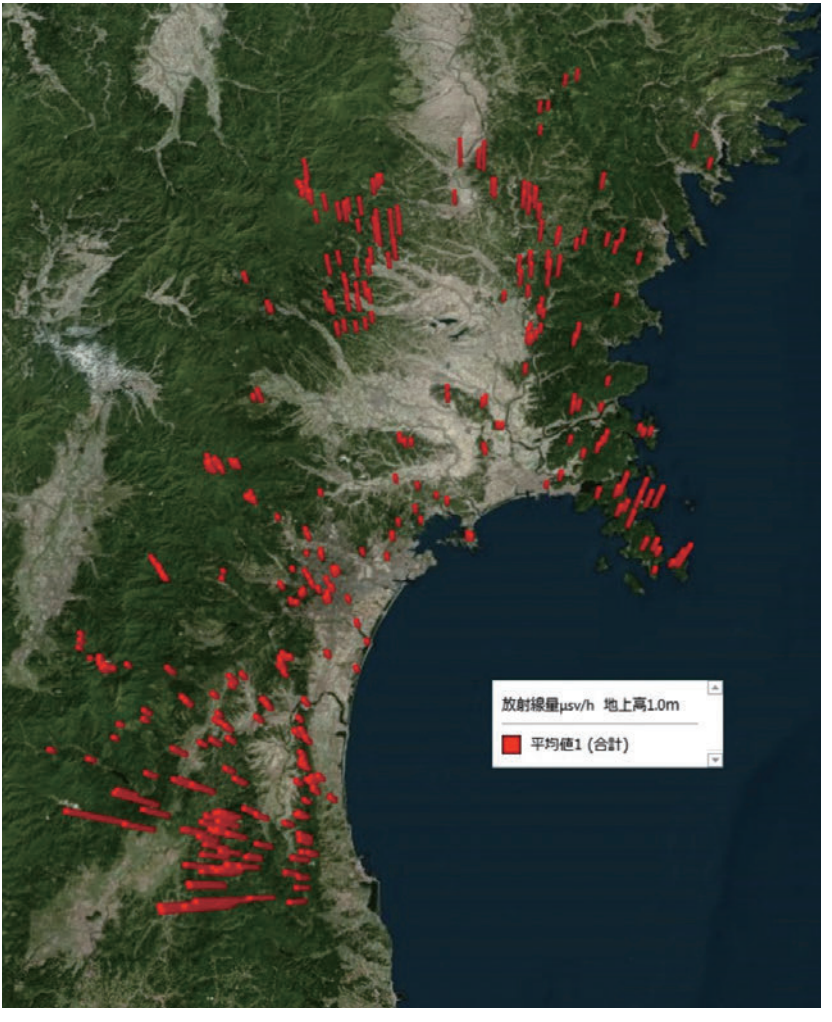


図 3-1　宮城県山地丘陵放射線量図（地上高 1.0 m）

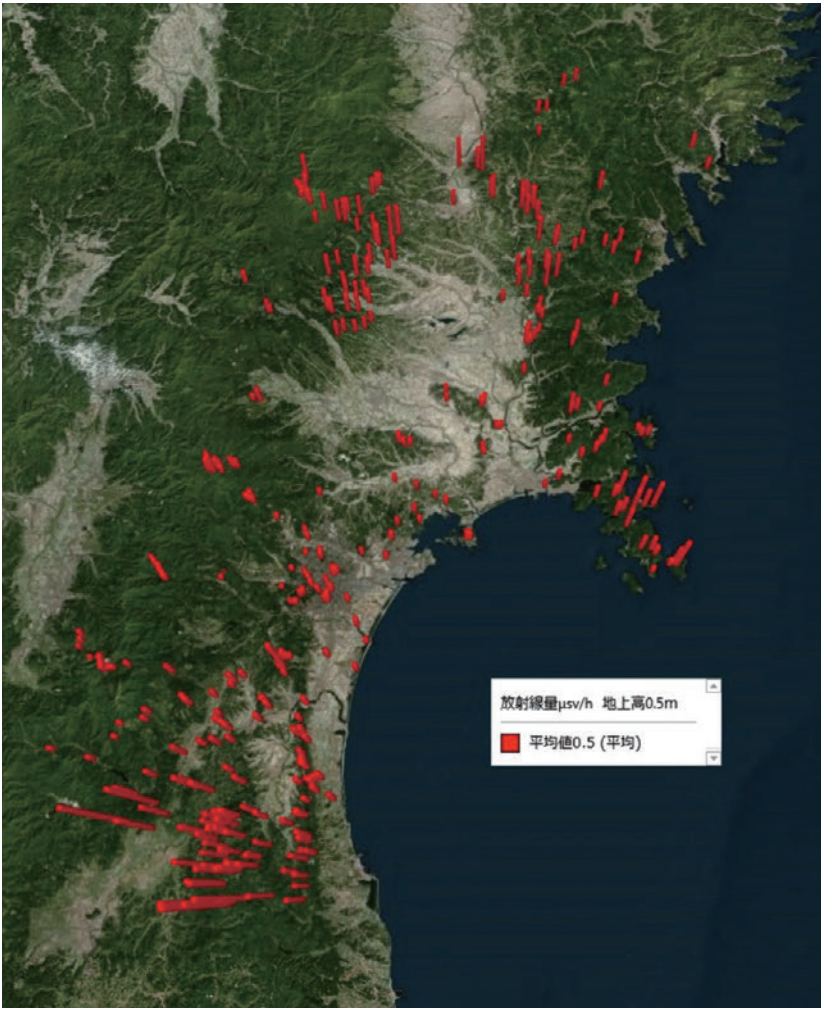


図 3-2　宮城県山地丘陵放射線量図（地上高 50 cm）

亘理地塁山地の付け根にあたる天明山では、0・435の放射線量が測定された。

3）阿武隈山地のうち阿武隈川以南、内川までの地域

百々石山	0・299	丸山城	0・277
次郎太郎山東峰	0・345	次郎太郎山西峰	0・392
段田原峠	0・478	ツボケ山山腹	0・441
欠入薬師	0・368	弁天山山麓	0・362
弁天山山頂	0・323	梁川県境	0・346
和田山山麓	0・397	和田山山頂	0・352
犬飼峠	0・429	犬飼山	0・483
北山	0・395	四重麦	0・368
筆甫(中下)	0・409	筆甫(堂前)	0・425
筆甫(八雲筆神社)	0・459	夫婦岩登山口	0・595
夫婦岩山頂	0・434	松阪峠	0・642
窓ノ倉山(北東斜面)	0・615	平場	0・628

以上のように、阿武隈山地の阿武隈川以南、内川までの地域では全域がかなり高い放射線量を示した、これらの地域の北端に位置する百々石山や丸山城などでも0・3μSv／hに近い放射線量を示すと同時に、福島県境に近づくほど急激に数値が高まり、窓ノ倉山に面した一帯の地域では0・6μSv／hを超す高い線量を記録した。

4）阿武隈山地のうち内川右岸から雉尾川までの地域

不動尊公園	0・351	岩嶽(登山口)	0・337
岩嶽(山頂)	0・263	鷲の平	0・408
鷲の平峠	0・499	青葉	0・324
手倉山	0・542	川平	0・551
八雲神社(川平)	0・922	川平・玉野県境	0・883
玉野	1・121	古霊山東面	0・905

このように、阿武隈山地の中枢部にあたる山々では異常に高い放射線量が測定された。特に福島県側に虫垂状に入り込んだ川平地区では、1μSv／hに近い高い放射線量が記録された。

Ⅳ．まとめと考察

今回の私たち日本山岳会宮城支部による県内各地の山地および丘陵において実施された放射線量調査から、東京電

力福島第1原子力発電所の事故に伴う放射能汚染の宮城県における実態が明らかになってきた。その状況は、宮城県山地丘陵放射線量図（図3）として示した。ここでは、これらの調査結果を踏まえて、放射能汚染の地理的分布状況をまとめると同時に、気象や地形、そして植生との関係について、若干の考察を加えることとした。

1　宮城県の放射線量

初めに宮城県のほぼ全域にわたって指摘されることは、事故以前に測定されていた自然放射能の値、毎時0・03～0・04マイクロシーベルト（高いときでも0・05マイクロシーベルト）に対して、それを超す線量が記録されたことである。ここにはもちろん、位置や地形や植生などの違いによる高低幅が認められるが、明らかに原発事故の影響がほぼ県土全域に及んでいたことが示されている。

事故直後の3月19日に測定された仙台の放射線量は毎時0・20マイクロシーベルトで、県南部の白石では0・81マイクロシーベルトを記録した。また、事故後1ヶ月を経過した4月17日の仙台の最大値は0・147マイクロシーベルトを示した（県保健環境センター測定による）。宮城県の線量は、ヨウ素131などの短半減期核種の減少によって、初期段階より明らかに低くなってきている（註10）が、セシウム134やセシウム137などの長半減期核種の存在によって、放射能の影響が今も全県的に残り、所によっては高い値の線量を継続的に示していると判断されよう。

2　奥羽山脈と放射線量

奥羽山脈脊梁上の栗駒山と蔵王山では、山の東側と西側から同時に登山し、山岳を横断する形で放射線量を測定したが、いずれも宮城県側（東側）で高く、岩手県および山形県側（西側）で低い線量を示した。これは、奥羽山脈が大気中に漂う放射性物質のさらなる拡散を抑える一定の役割を果たして、西側の地域にそれが及ばなかったことを示している。栗駒山や船形山の宮城県側で見られたスポット状の高い線量を示す所も、西側では見られなかった。

3　阿武隈山地・二井宿山地と放射線量

宮城県で最も放射線量が高かったのは阿武隈山地、その支脈の亘理地塁山地、そして二井宿山地など、福島県に隣接する地域であった。ここでは、いずれも放射線量が福島県側の値に匹敵するか、それに準ずる高い値を示している。

3月14日の2号機と4号機の事故に伴って放出された多量の放射性物質は、15日になって南東風にあおられ、沿岸の双葉町から浪江町を経て飯舘村に達し、さらに相馬市西

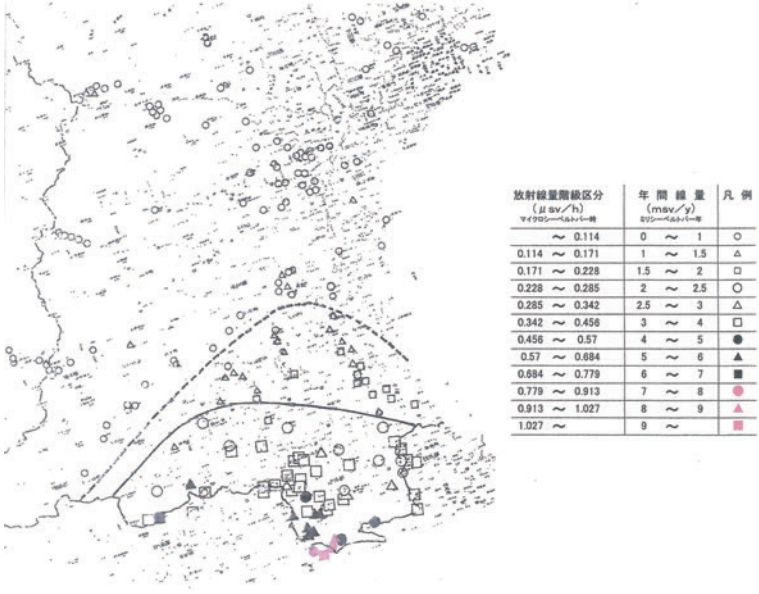


図 4　宮城県南部放射線量図

部や伊達市の内陸部に及んだが、その強い放射能の舌端は県境を容赦なく越して宮城県に達し、汚染地帯を広げたことを示している。

原子力発電所と阿武隈山地との関係を少し詳しく見てみると、原子力発電所の西側には阿武隈川に縁取られるまで約40 kmの幅で山地が広がり、分水嶺は西側に偏っている。このため河川はより東側で発達し、短流ながら太平洋に向かって深い渓谷を形成する。しかも、これらの渓谷は南東に向かって開けている。その典型が原子力発電所の7 km北の位置で太平洋に注ぐ請戸川である。

3月15日の原子力発電所付近の風向を見ると、北から北東、そして東風と時計回りに変化していき、18時には南東風となり、21時以降翌日にかけて、南東風が強まった（註2などを参照）。この南東の風が原子力発電所から放出された放射性物質を請戸川の渓谷の入り口に運び、谷の空間をそのまま直進して、奥の飯舘村のたくさんの山々を抱えた高原地帯に乗り上げて拡散し、一方は福島盆地を覆って北東の二井宿山地にまで達し、もう一方は霊山を越えて宮城県南部に広がった。このとき低気圧に伴う降雨が広くこの一帯に見られたが、これが福島県に連続した宮城県南部の強い放射能汚染地帯の形成に繋がったものと考えられ

る。この地域には手倉山、古霊山、窓ノ倉山、夫婦岩、犬飼山など、阿武隈山地のよく知られた山々が連なるが、そのいずれもが高い放射線量を示している。

これまで見てきたように、宮城県の南西部、福島県側からは福島盆地の北西部になる二井宿山地の山々もまた、高い放射線量を示した。しかし、その範囲は二井宿山地の盆地側に集中し、北側の七ヶ宿町や白石市小原などでは比較的低い値を示した。二井宿山地は標高５００～９００ｍほどの山地だが、福島盆地に達した放射能雲の拡散を抑制し、背後の宮城県側への影響を逓減させる役割を果たしたものと考えられる。

図３を基に宮城県南部地域について、その放射線量との関係を記号で示すと、図４のようになる。図中の実線は、毎時の放射線量０・２２８マイクロシーベルト（年間放射線量２ミリシーベルト）を表すが、これに該当する地域は丸森町のほぼ全域、角田市、白石市、七ヶ宿町、山元町の一部地域となる。また、国の基準としている一般人の年間被曝限度量１ミリシーベルト（毎時０・１１４マイクロシーベルト）を破線で示すと、そこに該当する地域は、前者に加えて亘理町、岩沼市、大河原町、蔵王町の範囲に広がる。実線の位置は福島第１原子力発電所からおおよそ70㎞の距離、破線の位置はおおよそ80㎞の距離にあたる。このように、今回の原発事故に伴う放射能汚染の範囲は、事故の際の避難の対象とされる30㎞圏内に収まるようなものではなく、その範囲をはるかに超えた距離と広い地域に及んでいたことを示している。

調査行の途中、福島県の相馬市から宮城県の丸森町に移動したことがあった。福島県側の道路のわきには、汚染のために集められた放射性廃棄物の黒い袋が、まるで堤防のように延々と積み上げられていたにもかかわらず、県境をまたいで宮城県に入った途端、まるで何事もなかったかのような平然とした風景に変わって驚かされた。線量を測ってみると、福島県側と変わりなく高い。線量を基準にせずに、行政界を境にこれほどまでに対応が分かれていることに、矛盾を感じないわけにはいかなかった。

4　北上山地および築館丘陵・磐井丘陵と放射線量

宮城県（岩手県南部を含む）には、さらに３ヶ所の放射線量の高い地域が認められた。

①金華山・牡鹿半島
②一関東部北上山地
③築館丘陵および磐井丘陵

これらの①②③の地域は、測定点の関係で所々途切れて

はいるが、全体を眺めると、ほぼ連続しているように捉えられる。①と②との間には硯上山や大伽藍山など幾分高い線量を示す山があって、そのことを窺わせる。

この北上山地から北部一帯の放射能汚染をもたらしたのは、3月12日の東京電力福島第1原子力発電所1号機の炉心損傷に端を発した水素爆発であろうとされている（註6ほか）。このとき放出された放射性物質は、北向きの風に乗って仙台湾上を北上、①の金華山・牡鹿半島に達し、13日には北上山地に沿うように北北西に進んで②に達し、さらに西に進んで③の地域に及んだものと考えられている。私たちの実測した調査結果もそのことを裏付けている。

3月12日、日本列島は移動性高気圧に覆われてよく晴れた。翌13日は高気圧が東に離れ、大陸の東部に発生した低気圧に向かって緩やかな東風が吹いた。②から③への広がりは、この風向の変化による。宮城県の北部から岩手県南部一帯は、3日ほど最低気温が零下を記録していた。原発から北に、そして北北東に160㎞も漂ってきた放射能雲は、この辺りで低く垂れ込めて、わずかな降雨や降雪によって地上に降下し、汚染をもたらすことになったのであろう。

ところで、①の牡鹿半島の小屋取浜には、東北電力女川原子力発電所の3基の原発がある。3月11日の地震と津波は、女川が震源地に近いこともあって、想定されていた「基準地震動」を上回る揺れと13mを超える津波に襲われた。これによって主電源が失われ、原子炉の冷却設備の一部破損や火災などの異状事態が発生し、深刻な大事故に繋がりかねない状況に陥った。女川原発の周辺で得られた線量が、どこも高い数値を示しているのは、福島第1原発の事故に由来する放射能雲が、まるで原発同士が邂逅せねばならぬかのようになぞっていったことが主要因だとしても、不自然であることを免れない。地震と津波によって女川原発に起こった今回のことは、十二分に検証されなければならないであろう。

5　山地地形と放射性物質

これまで見てきたように、大気中に放出された放射性物質の移動・拡散には、気象条件が深く関わるのは当然だが、地形的条件も重要な関わりを持っている。特に高い定高性の山々を連ねた山脈や山地は、移動や拡散の制御に大きな役割を担っていると考えられる。「Ⅲ　調査結果　1」ですでに記したように、奥羽山脈は西側（山形県側など）への拡散の抑制にそれなりの役割を果たしたとみなされるし、福島県の中通りと会津盆地での線量の著しい差異も、それらを隔てる奥羽山脈の障壁があってのことだろう。ま

た、前記したように、二井宿山地は北側（宮城県側）への放射性物質を伴う大気の越流を、それなりに防いだとみなされるのである。

さらに3月15日、葛尾村から飯舘村一帯の重なり合った高原状の阿武隈山地が、請戸川を伝ってはい上がってきた放射性雲を抱え込み、放射性物質の受け皿の役割をなしたことが窺える。山々の受け皿的役割がなければ、おそらく人口密集地帯である福島盆地は、今以上の線量を記録することになったであろう。

山脈や山地の連なりに認められるもう一つの特徴は、放射性雲を持つ大気の方向と山々の連なりの方向が一致するような場合、放射性雲の移動速度を早め、より遠くに運ぶ効果を持つのではないか、ということである。亘理地塁山地は、阿武隈山地本体の相馬市・天明山から北にまっすぐ延びた、30kmに達する見事なほど細長い山地だが、私たちの調査結果から見ると、山地に沿って放射性雲がより北に移動し、その先端が地塁山地と向き合う岩沼市の千貫山辺りに達していることが明らかになる。

6　微地形と放射線量

調査を進める過程で気づいたことの一つに、同じ山であっても山頂の放射線量が一番低い場合が多く、山腹ないし山麓の方がはるかに高い場合が多かったことである。いくつかの例を挙げると次のようになる。

	山頂	山麓（登山口など）
夫婦岩（丸森町筆甫）	0・345	0・595
岩嶽（丸森町鷲ノ平）	0・263	0・337
毛無山（白石市上沢田）	0・280	0・416
深山（山元町山下）	0・179	0・207
蚕飼山（登米市米川）	0・175	0・226

このことは、放射線量は事故直後、山頂でも高かったに違いないが、事故後2年有余の時間の経過によって、風化作用による洗滌や放射性物質を沈積したり吸着したりした土壌やリッターなどの下方への、山頂であるが故により速い移動によって、線量を減じたことを示している。

また、山腹の窪状地形（例・泉ヶ岳岡沼）や沢流の近傍、河川の沿岸部で、しばしば高い数値が測定された。これは降雨のたびに放射性物質を吸着した自然物が移動し、集積した場所を示すと考えられる。斜面の方位や傾斜との関係については、いまだ検討中である。

7　植生と放射線量

今回の調査では、調査地の植生も調べた。ほぼ同一の地

点であっても、植生の違いによって数値にそれなりの差異が認められたからであった。これらの詳細は、今後の追調査とその解析を待たねばならないが、調査中に気づいたいくつかの知見について述べると次のようになる。

(1) 裸地、またはそれに近い植生のほとんど見られない所は、それなりの植生が成立している所より低い値を示す。路面よりも雑草の生えた路傍の方が常時高い。同じ公園でも、遊歩道より植え込みの中や芝生の中の方が高い。

(2) 芝草地や牧草地などの短茎ないしは長茎植物群落の場合、密生度の高い群落ほど高い値を示す。栗駒山の山頂斜面の風衝草原もそうであった。密生した多年生植物の場合、放射性物質の下方移動が遅く、残留度が高いのではないか。

(3) 同じタイプの森林であっても、林床の堆積物が厚く見られる所は、貧弱な所よりも高い値を示す。

(4) 低木層の発達したコナラ、クリ林などでは、通常の傾向とは逆に、林床に近い50㎝の位置よりも、それより高い1ｍの位置での値の方が高いことがしばしば観察された。また、これと同じことが伐採跡地群落などでも見られた。このことは、降下した放射性物質が地表ばかりでなく、より上層の樹木の樹冠や樹幹に付着したり吸着していることを示す。また、これらの放射性物質が光合成や呼吸のもとで、植物体内を転流し、さらに森林内部で循環していることも考えられる。森林では放射線量が減衰しにくいことが知られている。

その場所に立地し自生する植物や森林は、この放射性物質から逃れることはできない。たとえ低線量であっても、長期にわたって曝されることになる。そこに生息する動物も加えて、今後なんらかの影響が生じていかないか懸念される。森林内部の除染はほぼ不可能に近い。私たちは放射線量の変化に注意しながら、植生の状態にも関心を払っていかなければならないであろう。

Ⅴ．おわりに

原発事故による宮城県の山地や丘陵などの自然地域を含む、ほぼ全県にわたる放射線量の調査が行なわれた結果、県内には、福島県に続く高線量地帯とその周辺に広がる低線量被曝地帯、さらに北上山地から北部一帯に広がる3ヶ所の低線量被曝地帯が存在することが明らかになった。今後、これらの地域の放射線量がどのように変化していくのか、引き続き調査し、検討していく必要があろう。また、

これらの汚染地から回収された放射性廃棄物について、環境省がその最終処分場として候補に挙げている3ヶ所は、いずれも奥羽山脈の脊梁に近い河川の水源地であり、地滑り崩壊地であったりする。ここには山岳自然の新たな環境問題を引き起こすことが懸念される。

一方、放射線による高線量汚染地帯の主要部分は福島県にある。そこでは、域内に立ち入ることを阻まれる山々もたくさんあるし、周辺一帯はどこも安易に登山することを許さない環境になっている。その地域は、これまでに経験したことのない広大さである。この現実に遭遇すると、原発事故による自然環境に対する放射能汚染は、健全な自然山岳環境の対極にある、著しく悪しき事象なのかもしれない。

これまで私たちの登山は、日本の極上の健全な自然山岳を対象として、その中で存分に行なわれてきた。私たちの自然保護活動も、この極めて健全な自然山岳を十分に継承し、将来にいかに確実に伝えていくかを常に主要なテーマとして追求し、腐心してきたのだと思う。

私たちは放射能汚染という、今までに経験したことのない未曾有の問題に直面して、ただ戸惑うばかりであるが、確かなことは、避けて通ることはできない問題だということである。登山の基礎にある自然保護そのものの概念が、新たに問われている。

今回の放射線量の調査が、紆余曲折を経ながらも目的に向かって進めることができたのは、宮城支部の多くの会員の参加と協力があったからである。なかでもⅢ期までの長丁場、調査行を欠かさず共にしていただいたのは、高橋功、千田早苗、宇都宮昭義、高橋二義の各氏であった。また、調査の過程で二度の中間報告を編んでいただいたのは、前支部長の高橋二義氏であった。さらにデータの解析と図化をご指導いただいたのは、東北工業大学環境エネルギー学科の四ノ宮晴彦氏であった。各氏には心からの感謝を申し上げる次第である。

（宮城県支部・自然保護委員長、同山岳放射線量調査特別委員長）

【脚注ならびに参考資料】

註1　『政府事故調　中間報告書』（平成23年12月26日）
註2　『政府事故調　最終報告書』（平成24年7月23日）
註3　福島原発事故独立検証委員会『福島原発事故独立検証委員会検証報告書』（2012年3月11日）
註4　『国会事故調報告書』（2012年9月30日）
註5　文部科学省『放射線量等分布マップ―航空機モニリ

ング―』（２０１１年11月５日）など

註６　早川由紀夫『フクシマ放射線汚染ルートとタイミング』（２０１１年６月18日）ほか

註７　貝原爽平『日本の地形区分』（『理科年表』所収）

註８　宮城の自然編集委員会『ふるさと宮城の自然　改訂版』（１９８７年）

註９　菅原亀悦ほか『宮城県環境管理計画付図　現存植生図凡例』（昭和56年３月）

註10　佐藤行彦「福島第一原発水素爆発後のγ線スペクトル測定に基づく土壌放射能調査」東北大学医学部保健学科紀要22―２（２０１３年）

放射線測定結果記録一覧表

測定年(西暦) 2013年(西暦) 25年

NO 1

番号	西暦 月日	測定位置 行政区分 (県・市町村)	経・緯度 測定値 N ° ′ ″ / E ° ′ ″	山名	標高 m	植生	測定結果値 放射線量(μsv/h) マイクロシーベルト 上段100cm・下段50cm 最高値	最低値	平均値
1	2013年 6月22日	宮城県	N 38 22 16	泉ヶ岳 旗枠	192 m	2	0.058	0.038	0.050
測定者		仙台市泉区	E 140 46 00		± 5m		0.068	0.058	0.061
2	2013年 6月22日	宮城県	N 38 18 47	泉ヶ岳 芳の平登山口	598 m	14 26	0.052	0.032	0.042
測定者		仙台市泉区	E 140 49 41		± 5m		0.050	0.041	0.044
3	2013年 6月22日	宮城県	N 38 24 15	泉ヶ岳 水神	824 m	26	0.070	0.052	0.059
測定者		仙台市泉区	E 140 42 07		± 6m		-	-	0.062
4	2013年 6月22日	宮城県	N 38 24 07	泉ヶ岳 饗の礎	1103m	34	0.067	0.046	0.054
測定者		仙台市泉区	E 140 42 29		± 8m		-	-	0.063
5	2013年 6月22日	宮城県	N 38 24 41	泉ヶ岳 山頂	1175m	34	0.056	0.040	0.048
測定者		仙台市泉区	E 140 42 35		± 6m		-	-	0.049
6	2013年 6月22日	宮城県	N 38 24 09	泉ヶ岳 岡沼	768 m	38	0.120	0.098	0.109
測定者		仙台市泉区	E 140 42 55		± 5m		-	-	0.127
7	2013年 6月22日	宮城県	N 38 23 54	泉ヶ岳 スキー場上部	774 m	2	0.078	0.063	0.067
測定者		仙台市泉区	E 140 43 04		± 6m		-	-	0.082
8	2013年 6月26日	宮城県	N 38 16 17	大東岳 本小屋	346 m	2	0.049	0.045	0.047
測定者		仙台市太白区	E 140 33 05				-	-	0.053
9	2013年 6月26日	宮城県	N 38 16 22	大東岳 登山口	420 m	26	0.072	0.051	0.058
測定者		仙台市太白区	E 140 32 53		± 8m		-	-	0.063
10	2013年 6月26日	宮城県	N 38 16 41	大東岳 立石沢渡渉点	432 m	29	0.063	0.049	0.055
測定者		仙台市太白区	E 140 32 44		± 7m		-	-	0.054
11	2013年 6月26日	宮城県	N 38 17 02	大東岳 立石沢標識点	625 m	29	0.049	0.042	0.045
測定者		仙台市太白区	E 140 32 18		± 5m		-	-	0.049
12	2013年 6月26日	宮城県	N 38 17 25	大東岳 五合目標識点	901 m	29	0.048	0.042	0.044
測定者		仙台市太白区	E 140 32 14		± 11m		-	-	0.047
13	2013年 6月26日	宮城県	N 38 17 31	大東岳 1019m標柱点	1019 m	29	0.038	0.030	0.034
測定者		仙台市太白区	E 140 31 58				-	-	0.032
14	2013年 6月26日	宮城県	N 38 17 46	大東岳 東清水標柱点	1123 m	29	0.070	0.058	0.063
測定者		仙台市太白区	E 140 31 42		± 21m		-	-	0.062
15	2013年 6月26日	宮城県	N 38 18 07	大東岳 山頂	1365.6m	31	0.075	0.063	0.071
測定者		仙台市太白区	E 140 31 25				-	-	0.069

公益社団法人 日本山岳会 宮城支部 自然保護 委員会
山岳放射線量調査 特別委 員会

放射線測定結果記録一覧表

測定年(西暦) 2013年(西暦) 25年

NO 2

番号	月日	測定位置 行政区分 (県・市町村)	経・緯度 測定値 N ° ′ ″ / E ° ′ ″	山名	標高 m	植生	測定結果値 放射線量(μsv/h) マイクロシーベルト 上段100cm・下段50cm 最高値	最低値	平均値
16	2013年 7月2日	宮城県	N 38 52 14	栗駒山 駒形根神社	91 m	2	0.214	0.197	0.204
測定者		栗原市栗駒沼倉	E 140 56 57		± 5m		0.238	0.199	0.223
17	2013年 7月2日	宮城県	N 38 54 39	栗駒山 玉山涸萬橋	231 m	2	0.177	0.146	0.155
測定者		栗原市栗駒	E 140 52 52		± 4m		-	-	0.184
18	2013年 7月2日	宮城県	N 38 54 45	栗駒山 行者滝	295 m	2	0.154	0.132	0.140
測定者		栗原市栗駒	E 140 52 00		± 7m		-	-	0.158
19	2013年 7月2日	宮城県	N 38 55 58	栗駒山 構英十文字	635 m	2	0.130	0.119	0.122
測定者		栗原市栗駒	E 140 50 06		± 5m		-	-	0.133
20	2013年 7月2日	宮城県	N 38 56 40	栗駒山 いわかがみ平上部	1180 m	31	0.117	0.105	0.110
測定者		栗原市栗駒	E 140 48 08		± 9m		-	-	0.115
21	2013年 7月2日	宮城県	N 38 57 18	栗駒山 1408小ピーク	1412 m	31	0.086	0.080	0.083
測定者		栗原市栗駒	E 140 47 37		± 6m		-	-	0.090
22	2013年 7月2日	宮城県	N 38 59 39	栗駒山 頂上直下東斜面	1562 m	38	0.156	0.141	0.150
測定者		栗原市栗駒	E 140 47 27		± 14m		-	-	0.188
23	2013年 7月2日	宮城県	N 38 59 39	栗駒山 山頂	1626.5m	31	0.051	0.044	0.049
測定者		栗原市栗駒	E 140 47 17				-	-	0.050
24	2013年 7月2日	岩手県	N 38 58 46	栗駒山 須川温泉駐車場	1118 m	2	0.049	0.035	0.043
測定者		一関市須川	E 140 46 10		± 5m		-	-	0.049
25	2013年 7月2日	岩手県	N 38 58 37	栗駒山 名残ヶ原	1161 m	38	0.047	0.037	0.042
測定者		一関市須川	E 140 46 37		± 5m		-	-	0.042
26	2013年 7月2日	岩手県	N 38 58 03	栗駒山 昭和湖	1290 m	39	0.052	0.042	0.046
測定者		一関市須川	E 140 46 46		± 6m		-	-	0.045
27	2013年 7月2日	岩手県	N 38 57 30	栗駒山 天狗平	1549 m	31	0.041	0.030	0.036
測定者		一関市須川	E 140 46 50		± 7m		-	-	0.043
28	2013年 7月2日	宮城県	N 38 57 25	栗駒山 東栗駒山頂	1443 m	31	0.052	0.047	0.051
測定者		栗原市栗駒	E 140 48 04		± 4m				
29	2013年 7月2日	宮城県	N 38 57 06	栗駒山 新湯沢渡渉点	1323 m	31	0.164	0.149	0.159
測定者		栗原市栗駒	E 140 47 52		± 5m		-	-	0.208
30	2013年 7月2日	宮城県	N 38 54 34	栗駒山 世界谷地入口駐車場	642 m	8	0.091	0.073	0.082
測定者		栗原市栗駒	E 140 48 58		± 18m		-	-	0.077

公益社団法人 日本山岳会 宮城支部 自然保護 委員会
山岳放射線量調査 特別委 員会

放射線測定結果記録一覧表

測定年(西暦) 2013年(西暦) 25年　NO 3

番号	月日	測定者	測定位置 行政区分 (県・市町村)	経・緯度 測定値 N ° ′ ″ / E ° ′ ″	山名	標高 m	植生	測定結果値 放射線量(μsv/h) 上段100cm・下段50cm 最高値	最低値	平均値
31	2013年 8月8日	宮城県	宮城県	N 38 27 29	船形山 旗坂 キャンプ場	569 m	2	0.096	0.082	0.088
測定者			大和町升沢	E 140 40 48		±11m		-	-	0.091
32	2013年 8月8日	宮城県	宮城県	N 38 27 27	船形山 大滝 キャンプ場	1034 m	29	0.093	0.083	0.088
測定者			色麻町	E 140 38 41		±9m		-	-	0.092
33	2013年 8月8日	宮城県	宮城県	N 38 27 22	船形山 小荒沢渡渉点	1044 m	29	0.076	0.064	0.070
測定者			色麻町	E 140 38 39		±7m		-	-	0.069
34	2013年 8月8日	宮城県	宮城県	N 38 26 58	船形山 三光の宮	1210 m	27	0.068	0.061	0.063
測定者			大和町升沢	E 140 38 53		±6m		-	-	0.067
35	2013年 8月8日	宮城県	宮城県	N 38 27 01	船形山 升沢避難小屋	1240 m	29	0.142	0.126	0.134
測定者			大和町升沢	E 140 37 53		±10m		-	-	0.179
36	2013年 8月8日	宮城県	宮城県	N 38 27 06	船形山 千畳敷(NO3)	1420 m	31	0.133	0.115	0.124
測定者			大和町升沢	E 140 37 26		±10m		-	-	0.140
37	2013年 8月8日	宮城県	宮城県	N 38 27 08	船形山 へさきの峰	1491 m	31	0.064	0.051	0.058
測定者			色麻町	E 140 37 15		±7m		-	-	0.062
38	2013年 8月8日	宮城県	宮城県	N 38 27 19	船形山 山頂	1508 m	33	0.071	0.055	0.064
測定者			色麻町	E 140 37 11		±8m		-	-	0.072
39	2013年 8月8日	宮城県	宮城県	N 38 27 34	船形山 旗坂平(NO27)	767 m	29	0.086	0.056	0.067
測定者			大和町升沢	E 140 40 23				-	-	0.068
40	2013年 8月8日	宮城県	宮城県	N 38 27 32	船形山 一群平(NO25)	834 m	29	0.099	0.084	0.089
測定者			大和町升沢	E 140 40 12				-	-	0.106
41	2013年 8月8日	宮城県	宮城県	N 38 27 24	船形山 湯谷地	1055 m	38	0.134	0.124	0.131
測定者			色麻町	E 140 38 30				-	-	0.123
42	2013年 8月8日	宮城県	宮城県	N 38 27 31	船形山 小野田 コース分岐	1230 m	29	0.156	0.153	0.154
測定者			色麻町	E 140 37 40				-	-	0.171
43	2013年 8月8日	宮城県	宮城県	N 38 24 42	宮床 測量学校	43 m	2	0.068	0.059	0.063
測定者			大和町宮床	E 140 51 04		±6m		-	-	0.073
44	2013年 8月14日	宮城県	宮城県	N 38 07 33	遠刈田 岩崎山金山	353 m	2	0.141	0.127	0.132
測定者			蔵王町遠刈田	E		±7m		-	-	0.145
45	2013年 8月14日	宮城県	宮城県	N 38 08 07	蔵王山 新滝小屋	1120 m	2	0.067	0.054	0.059
測定者			蔵王町	E 140 29 36		±7m		-	-	0.074

公益社団法人 日本山岳会 宮城支部 自然保護委員会
山岳放射線量調査特別委員会

放射線測定結果記録一覧表

測定年(西暦) 2013年(西暦) 25年　NO 4

番号	月日	測定者	測定位置 行政区分 (県・市町村)	経・緯度 測定値 N ° ′ ″ / E ° ′ ″	山名	標高 m	植生	測定結果値 放射線量(μsv/h) 上段100cm 下段50cm 最高値	最低値	平均値
46	2013年 8月18日	宮城県	宮城県	N 38 07 50	蔵王山 大黒天	1465m	39	0.061	0.042	0.050
測定者			蔵王町	E 140 27 52		±4m		-	-	0.050
47	2013年 8月18日	宮城県	宮城県	N 38 07 50	蔵王山 剣ヶ峰	1565m	33	0.073	0.065	0.069
測定者			蔵王町	E 140 27 35		±4m		-	-	0.072
48	2013年 8月18日	宮城県	宮城県	N 38 07 40	蔵王山 刈田岳山頂	1764 m	33	0.089	0.072	0.080
測定者			蔵王町	E 140 26 56		±5m		-	-	0.096
49	2013年 8月18日	宮城県	宮城県	N 38 08 06	蔵王山 馬の背	1738m	39	0.090	0.081	0.085
測定者			蔵王町	E 140 26 38		±5m		-	-	0.077
50	2013年 8月18日	山形県	山形県	N 38 08 37	蔵王山 熊野岳山頂	1840.5m	39	0.066	0.061	0.063
測定者			山形市	E 140 26 22				-	-	0.065
51	2013年 8月18日	山形県	山形県	N 38 09 42	蔵王山 蔵王温泉ローブウエイ	869 m	2	0.053	0.040	0.046
測定者			山形市	E 140 23 41		±6m		-	-	0.048
52	2013年 8月18日	山形県	山形県	N 38 08 46	蔵王山 いろは沼	1447m	38	0.037	0.032	0.034
測定者			上山市	E 140 25 03		±7m		-	-	0.035
53	2013年 8月18日	山形県	山形県	N 38 08 54	蔵王山 ワサ小屋跡	1711m	33	0.049	0.037	0.043
測定者			山形市	E 140 26 12		±5m		-	-	0.043
54	2013年 8月18日	宮城県	宮城県	N 38 07 50	蔵王山 賽の磧	1248 m	39	0.046	0.040	0.043
測定者			蔵王町	E 140 27 35		±8m		-	-	0.040
55	2013年 11月2日	山形県	山形県	N 38 10 21	蔵王山 瀧山登山口	930 m	29	0.067	0.052	0.057
測定者			山形市 蔵王温泉	E 140 23 50				0.058	0.055	0.057
56	2013年 11月2日	山形県	山形県	N 38 11 00	蔵王山 瀧山々頂	1362 m	31	0.056	0.04	0.048
測定者			山形市 蔵王温泉	E 140 23 42				0.061	0.059	0.060
57	2013年 11月13日	宮城県	宮城県	N 38 04 35	青麻山 登山口	460 m	2	0.125	0.116	0.121
測定者			蔵王町曲竹	E 140 37 08				0.141	0.128	0.137
58	2013年 11月13日	宮城県	宮城県	N 38 04 58	青麻山 中腹	600 m	26	0.119	0.100	0.110
測定者			蔵王町曲竹	E 140 36 40				0.136	0.105	0.123
59	2013年 11月13日	宮城県	宮城県	N 38 05 05	青麻山 山頂	799.5m	2	0.105	0.093	0.099
測定者			蔵王町曲竹	E 140 36 27				0.108	0.097	0.103
60	2013年 11月13日	宮城県	宮城県	N 38 01 00	大萩山 山頂	264.3m	2	0.136	0.120	0.130
測定者			白石市郡山	E 140 39 05				0.148	0.125	0.138

公益社団法人 日本山岳会 宮城支部 自然保護委員会
山岳放射線量調査特別委員会

放射線測定結果記録一覧表

測定年(西暦) 2013年 (前期) 25年　NO 5

番号	測定者	測定位置					測定結果値		
	月日	行政区分 (県・市町村)	経・緯度 測定値 N ° ′ ″ / E ° ′ ″	山名	標高 m	植生	放射線量(μsv/h) マイクロシーベルト 上段100cm値 下段50cm値 最高値	最低値	平均値
61	2013年 11月13日	宮城県	N 38 00 10	白石城 本丸広場	70 m	2	0.285	0.223	0.242
測定者		白石市 益岡町	E 140 36 55				0.250	0.237	0.244
62	2013年 11月13日	宮城県	N 38 03 48	七日原 萩平	609 m ± 8m	2 8	0.120	0.103	0.113
測定者		蔵王町 七日原	E 140 32 27				-	-	0.108
63	2013年 11月13日	宮城県	N 38 00 25	七ヶ宿 スキー場 入り口	449 m ± 5m	2	0.067	0.064	0.066
測定者		七ヶ宿町峠田	E 140 21 49				0.079	0.069	0.074
64	2013年 11月13日	宮城県	N 37 59 35	関 泉禅寺門前	331 m ± 5m	2	0.102	0.094	0.097
測定者		七ヶ宿町関	E 140 26 33				0.107	0.098	0.103
65	2013年 11月13日	宮城県	N 38 01 32	長老湖 下り口	585 m ± 6m	2	0.070	0.058	0.065
測定者		七ヶ宿町 柏木山	E 140 28 55				0.067	0.061	0.064
66	2013年 11月13日	宮城県	N 38 02 43	硯石	684 m ± 8m	2	0.079	0.064	0.070
測定者		七ヶ宿町 柏木山	E 140 29 24				0.070	0.065	0.068
67	2013年 11月13日	宮城県	N 38 03 08	二つ森山頂	717 m ± 6m	15	0.093	0.073	0.084
測定者		白石市 不忘山	E 140 32 13				0.097	0.089	0.093
68	2013年 9月10日	宮城県	N 37 58 14	小原大橋	182 m	8	0.186	0.151	0.170
測定者		白石市小原	E 140 33 42				-	-	0.177
69	2013年 9月10日	宮城県	N 37 55 47	雨塚山 山頂	709 m ± 9m	10	0.638	0.592	0.620
測定者		白石市塩倉	E 140 34 05				0.766	0.689	0.728
70	2013年 9月10日	宮城県	N 37 56 36	下戸沢 ヒダリマキガヤ	223 m ± 9m	2	0.288	0.272	0.280
測定者		白石市 下戸沢	E 140 31 39				-	-	0.316
71	2013年 9月10日	宮城県	N 37 54 12	小坂峠	461 m ± 18m	2 8	0.789	0.760	0.778
測定者		白石市上町	E 140 30 56				0.889	0.833	0.861
72	2013年 9月10日	宮城県	N 37 54 17	馬頭山 山頂	680 m ± 5m	14	0.433	0.402	0.417
測定者		白石市上町	E 140 30 08				-	-	0.409
73	2013年 9月10日	福島県	N 37 53 38	厚樫山 山頂	294 m ± 7m	2 8	0.442	0.431	0.437
測定者		国見町駒場	E 140 33 56				0.552	0.544	0.548
74	2013年 9月10日	宮城県	N 37 54 51	越河	186 m ± 8m	2	0.412	0.388	0.407
測定者		白石市越河	E 140 35 27				0.443	0.425	0.434
75	2013年 12月3日	宮城県	N 38 44 28	大土森 山麓	135 m	2 8	0.171	0.157	0.162
測定者		栗原市一迫 上大土	E 140 51 00				-	-	0.182

公益社団法人 日本山岳会 宮城支部 自然保護委員会
山岳放射線量調査特別委員会

放射線測定結果記録一覧表

測定年(西暦) 2013年 (前期) 25年　NO 6

番号	測定者	測定位置					測定結果値		
	月日	行政区分 (県・市町村)	経・緯度 測定値 N ° ′ ″ / E ° ′ ″	山名	標高 m	植生	放射線量(μsv/h) マイクロシーベルト 上段100cm値 下段50cm値 最高値	最低値	平均値
76	2013年 12月3日	宮城県	N 38 48 28	大土ヶ森 山麓	210 m	14	0.173	0.153	0.162
測定者		栗原市 鶯沢	E 140 51 00				-	-	0.166
77	2013年 12月3日	宮城県	N 38 49 37	大土ヶ森 山頂	579.7m	2	0.118	0.100	0.106
測定者		栗原市 鶯沢	E 140 52 12				-	-	0.112
78	2013年 12月3日	宮城県	N 38 47 34	荒雄湖 湖畔公園	270 m	2	0.081	0.076	0.080
測定者		大崎市 鳴子	E 140 40 10				-	-	0.090
79	2013年 12月3日	宮城県	N 38 44 07	湯沼 湖畔	300 m	39	0.113	0.094	0.103
測定者		大崎市 鳴子	E 140 43 28				-	-	0.113
80	2013年 12月3日	宮城県	N 38 44 10	胡桃ヶ岳 山頂	461.3m	14	0.062	0.052	0.057
測定者		大崎市 鳴子	E 140 43 41				-	-	0.062
81	2013年 11月13日	宮城県	N 38 07 07	城山	54 m	8	0.112	0.102	0.105
測定者		村田町 北塩内	E 140 43 10				0.121	0.117	0.119
82	2013年 8月29日	宮城県	N 38 16 59	高松山 南山腹	70 m	2	0.086	0.077	0.081
測定者		仙台市青葉区 小松島	E 140 53 28				0.091	0.077	0.081
83	2013年 8月29日	宮城県	N 38 17 00	高松山 山頂	86.7 m	2	0.071	0.065	0.068
測定者		仙台市青葉区 小松島	E 140 53 30				0.073	0.070	0.072
84	2013年 8月29日	宮城県	N 38 17 06	小松島公園	27 m	2	0.085	0.078	0.081
測定者		仙台市青葉区 小松島	E 140 53 14				0.082	0.082	0.082
85	2013年 8月29日	宮城県	N 38 17 08	瞑想の松	45 m	2	0.084	0.070	0.076
測定者		仙台市青葉区 小松島	E 140 53 01				0.080	0.079	0.080
86	2013年 8月29日	宮城県	N 38 16 53	とちのき公園	29 m	2	0.092	0.085	0.089
測定者		仙台市青葉区 東照宮	E 140 53 08				0.102	0.089	0.096
87	2013年 8月29日	宮城県	N 38 16 47	東照宮	35 m	2	0.088	0.073	0.080
測定者		仙台市青葉区 東照宮	E 140 53 05				0.082	0.081	0.082
88	2013年 11月23日	宮城県	N 38 34 24	薬莱山 表登山口	208.5m	2	0.139	0.124	0.13
測定者		加美町 鹿原	E 140 43 06				-	-	0.135
89	2013年 11月23日	宮城県	N 38 34 32	薬莱山 山頂	552 m	2	0.062	0.049	0.056
測定者		加美町 鹿原	E 140 42 10				-	-	0.053
90	2013年 11月8日	宮城県	N 38 08 53	三方境 山頂	333 m ± 8m	10	0.146	0.128	0.139
測定者		岩沼市 志賀	E 140 47 48				0.162	0.159	0.161

公益社団法人 日本山岳会 宮城支部 自然保護委員会
山岳放射線量調査特別委員会

放射線測定結果記録一覧表

測定年(西暦) 2013年 (和暦) 25年　NO 7

番号	測定者	月日	測定位置 行政区分 (県・市町村)	経・緯度 測定値 N ° ′ ″ / E ° ′ ″	山名	標高 m	植生	放射線量(μsv/h) マイクロシーベルト 上段100cm値 下段50cm値 最高値	最低値	平均値
91	測定者	2013年 11月8日	宮城県	N 38 08 36	西大森	322 m	14	0.103	0.098	0.101
			岩沼市 志賀	E 140 47 21				0.112	0.105	0.109
92	測定者	2013年 11月8日	宮城県	N 38 08 02	大師温泉 跡地	104 m ± 5m	2 8	0.164	0.147	0.155
			岩沼市 志賀	E 140 47 41				0.167	0.161	0.164
93	測定者	2013年 11月8日	宮城県	N 38 07 18	愛宕山 山頂	292 m ± 5m	2	0.112	0.095	0.105
			柴田町 雨乞	E 140 47 54				0.103	0.096	0.100
94	測定者	2013年 11月24日	宮城県	N 38 08 53	外山 山頂	314 m	14	0.083	0.071	0.077
			名取市 二ッ森	E 140 48 24				0.081	0.079	0.080
95	測定者	2013年 11月24日	宮城県	N 38 08 50	縦走路 鞍部	313 m ± 5m	14	0.113	0.099	0.105
			名取市 二ッ森	E 140 47 57				0.118	0.109	0.114
96	測定者	2013年 11月24日	宮城県	N 38 08 03	蚕糸センター 跡地	200 m	6	0.066	0.058	0.063
			岩沼市 志賀	E 140 47 10				0.071	0.065	0.068
97	測定者	2013年 11月23日	宮城県	N 38 16 21	長袋新田	200 m ± 6m	2 8	0.039	0.035	0.036
			仙台市太白区 秋保町	E 140 39 43				-	-	0.039
98	測定者	2013年 11月23日	宮城県	N 38 17 02	戸神山 山頂	502 m ± 5m	14	0.042	0.033	0.036
			仙台市太白区 秋保町	E 140 39 51				-	-	-
99	測定者	2013年 11月18日	宮城県	N 38 14 01	太白山 駐車場	164 m ± 12m	2	0.068	0.051	0.058
			仙台市太白区 生出森	E 140 48 48				-	-	0.063
100	測定者	2013年 11月18日	宮城県	N 38 14 04	太白山 神社	210 m ± 11m	12 24	0.083	0.073	0.077
			仙台市太白区 生出森	E 140 48 13				-	-	-
101	測定者	2013年 11月18日	宮城県	N 38 14 05	太白山 山頂	320.9m	24	0.040	0.031	0.036
			仙台市太白区 生出森	E 140 48 07				-	-	0.046
102	測定者	2013年 11月18日	宮城県	N 38 15 29	蕃山 見晴台	356 m ± 6m	7	0.046	0.034	0.039
			仙台市青葉区 下愛子	E 140 47 00				-	-	0.033
103	測定者	2013年 11月18日	宮城県	N 38 15 29	西風蕃山 山頂	372, 5m	22	0.069	0.053	0.061
			仙台市青葉区 下愛子	E 140 47 00				-	-	0.057
104	測定者	2013年 11月18日	宮城県	N 38 17 13	権現森 山頂	312 m ± 7m	10	0.051	0.045	0.049
			仙台市青葉区 向田	E 140 48 06				0.053	0.051	0.052
105	測定者	2013年 11月19日	宮城県	N 38 28 57	旭山 参道口	185 m ± 6m	2	0.063	0.054	0.058
			石巻市 北村	E 141 11 03				-	-	0.054

公益社団法人 日本山岳会 宮城支部 自然保護委員会
山岳放射線量調査特別委員会

放射線測定結果記録一覧表

測定年(西暦) 2013年 (和暦) 25年　NO 8

番号	月日	測定位置 行政区分 (県・市町村)	経・緯度 測定値 N ° ′ ″ / E ° ′ ″	山名	標高 m	植生	放射線量(μsv/h) マイクロシーベルト 上段100cm・下段50cm 最高値	最低値	平均値
106	2013年 11月19日	宮城県	N 38 29 25	旭山 山頂	185 m ± 6m	2	0.072	0.051	0.061
		石巻市 北村	E 141 10 52				0.070	0.066	0.068
107	2013年 11月19日	宮城県	N 38 31 35	和渕山 林道入口	5 m ± 8m	8	0.060	0.050	0.055
		石巻市 和渕	E 141 13 11				-	-	0.061
108	2013年 11月19日	宮城県	N 38 31 41	和渕山 山頂	169 m ± 8m	2	0.055	0.047	0.050
		石巻市 和渕	E 141 12 37				-	-	0.050
109	2013年 11月19日	宮城県	N 38 34 18	箆岳山 迫側入口	12 m ± 9m	2 8	0.084	0.065	0.074
		涌谷町 蓬坂小屋	E 141 11 09				-	-	0.081
110	2013年 11月19日	宮城県	N 38 33 53	箆岳山 山頂	242 m ± 9m	8	0.091	0.075	0.083
		涌谷町 箆岳	E 141 10 45				-	-	0.095
111	2013年 11月19日	宮城県	N 38 34 26	加護坊山 南入口	34 m ± 5m	2 8	0.074	0.069	0.070
		涌谷町 上都沢	E 141 06 26				-	-	0.066
112	2013年 11月19日	宮城県	N 38 35 26	加護坊山 山頂	231 m ± 7m	2	0.067	0.059	0.064
		大崎市 加護坊山	E 141 06 22				-	-	0.065
113	2013年 12月7日	宮城県	N 38 22 00	西行戻りの松	100 m	2	0.060	0.053	0.057
		松島町 松島	E 141 03 16				0.080	0.065	0.072
114	2013年 12月30日	宮城県	N 38 18 50	高森山 山頂	104 m ± 9m	2	0.074	0.064	0.071
		仙台市 岩切	E 140 56 23				0.075	0.072	0.074
115	2013年 12月30日	宮城県	N 38 18 23	多賀城 政庁跡	32 m ± 10m	2	0.076	0.066	0.070
		多賀城市 六月坂	E 140 59 18				0.081	0.078	0.080
116	2013年 12月30日	宮城県	N 38 20 18	大高森 里浦登山口	3 m	2 8	0.103	0.092	0.096
		東松島市 宮戸	E 141 08 53				0.108	0.101	0.105
117	2013年 12月30日	宮城県	N 38 20 26	大高森 山頂	105.6m	2	0.081	0.077	0.079
		東松島市 宮戸	E 141 09 08				0.097	0.089	0.093
118	2013年 12月30日	宮城県	N 38 20 16	大高森 南東峰	100 m	9	0.088	0.077	0.080
		東松島市 宮戸	E 141 09 23				0.091	0.085	0.088
119	2013年 12月6日	宮城県	N 38 09 04	雷神山	45.7 m	10	0.117	0.102	0.110
		名取市 植松	E 140 52 46				0.114	0.110	0.112
120	2013年 12月6日	宮城県	N 38 07 46	残存海岸林	2 m ± 5m	9	0.109	0.097	0.102
		岩沼市 相の釜	E 140 56 08				0.135	0.110	0.124

公益社団法人 日本山岳会 宮城支部 自然保護委員会
山岳放射線量調査特別委員会

放射線測定結果記録一覧表

測定年(西暦) 2013・2014 年(和暦) 25・26 年　NO 9

番号	月日	測定位置 行政区分 (県・市町村)	経・緯度 測定値 N ° ′ ″ / E ° ′ ″	山名	標高 m	植生	測定結果値 放射線量(μsv/h) マイクロシーベルト 上段100cm・下段50cm 最高値	最低値	平均値
121	2013年 12月6日	宮城県	N 38 10 19	目和山	7.5 m ±3m	2 8	0.078	0.063	0.073
測定者		名取市 関上	E 140 57 14				0.079	0.075	0.077
122	2013年 12月6日	宮城県	N 38 11 55	名取郡六郷 築堤碑	7 m	9	0.120	0.111	0.115
測定者		仙台市若林区	E 140 56 05				0.134	0.132	0.133
123	2013年 12月9日	宮城県	N 38 20 20	寺岡山	129.2m	14	0.074	0.068	0.071
測定者		仙台市泉区 寺岡	E 140 49 50				0.071	0.069	0.070
124	2013年 12月9日	宮城県	N 38 21 04	紫山	143.1m	14	0.051	0.047	0.049
測定者		仙台市泉区 紫山	E 140 49 26				0.054	0.048	0.051
125	2014年 1月28日	宮城県	N 38 18 26	水の森公園	65 m	14	0.075	0.068	0.071
測定者		仙台市泉区 堤下	E 140 51 30				0.079	0.072	0.077
126	2014年 1月28日	宮城県	N 38 18 53	長命館山	90.8m	14	0.074	0.063	0.067
測定者		仙台市泉区 加茂	E 140 51 27				0.075	0.067	0.072
127	2014年 1月28日	宮城県	N 38 16 49	国見山	234.8m	14	0.076	0.070	0.074
測定者		仙台市青葉区 国見	E 140 49 42				0.071	0.062	0.068
128	2014年 1月28日	宮城県	N 38 16 23	弘法山	152m	14	0.067	0.061	0.064
測定者		仙台市青葉区 弘法山	E 140 50 07				0.071	0.061	0.064
129	2014年 1月30日	宮城県	N 38 15 18	五橋公園	35 m	2	0.098	0.088	0.093
測定者		仙台市青葉区 五橋	E 140 52 58				0.100	0.094	0.097
130	2014年 1月30日	宮城県	N 38 15 18	錦町公園	44 m	2	0.090	0.077	0.081
測定者		仙台市青葉区 本町	E 140 52 51				0.091	0.086	0.088
131	2014年 1月30日	宮城県	N 38 16 00	勾当台公園	44.5m	2	0.099	0.094	0.095
測定者		仙台市青葉区 本町	E 140 52 20				0.094	0.086	0.091
132	2014年 1月29日	宮城県	N 38 15 41	亀岡八幡	110 m	2	0.090	0.074	0.084
測定者		仙台市青葉区 荒巻	E 140 50 34				0.095	0.083	0.090
133	2014年 1月29日	宮城県	N 38 15 01	八木山 三角点	203.2m	10	0.089	0.081	0.086
測定者		仙台市青葉区 荒巻	E 140 49 37				0.086	0.083	0.084
134	2014年 1月29日	宮城県	N 38 14 45	鈎取 野鳥の森	223 m	14 22	0.080	0.068	0.073
測定者		仙台市太白区 鈎取	E 140 49 19				0.086	0.081	0.083
135	2014年 1月29日	宮城県	N 38 20 20	鈎取 野鳥の森沢	110 m	14	0.091	0.078	0.085
測定者		仙台市太白区 鈎取	E 140 59 50				0.083	0.078	0.081

公益社団法人 日本山岳会 宮城支部 自然保護委員会
山岳放射線量調査特別委員会

放射線測定結果記録一覧表

測定年(西暦) 2013・2014 年(和暦) 25・26 年　NO 10

番号	月日	測定位置 行政区分 (県・市町村)	経・緯度 測定値 N ° ′ ″ / E ° ′ ″	山名	標高 m	植生	測定結果値 放射線量(μsv/h) マイクロシーベルト 上段100cm・下段50cm 最高値	最低値	平均値
136	2014年 1月29日	宮城県	N 38 15 09	青葉城 天守台	115 m	14	0.088	0.083	0.084
測定者		仙台市青葉区 川内	E 140 51 22				0.088	0.083	0.086
137	2014年 1月29日	宮城県	N 38 14 14	東北工大 保存緑地	95 m	2 14 22	0.094	0.083	0.088
測定者		仙台市太白区 二ッ沢	E 140 52 14				0.102	0.088	0.096
138	2014年 1月29日	宮城県	N 38 14 16	大年寺 参道上部	107 m	8	0.110	0.106	0.108
測定者		仙台市太白区 茂ヶ崎	E 140 52 36				0.114	0.107	0.110
139	2014年 1月29日	宮城県	N 38 14 43	愛宕山 虚空蔵尊参道	75 m	14	0.096	0.088	0.093
測定者		仙台市太白区 向山	E 140 52 27				0.103	0.095	0.098
140	2014年 2月2日	宮城県	N 38 14 17	遠見塚 古墳公園	11.6 m	2	0.080	0.074	0.077
測定者		仙台市若林区 遠見塚	E 140 54 52				0.080	0.076	0.078
141	2013年 9月28日	宮城県	N 38 23 02	白坂山	122.2m	2	0.083	0.073	0.078
測定者		松島町 芦ヶ沢	E 141 02 36				0.083	0.079	0.081
142	2013年 9月28日	宮城県	N 38 23 50	富山観音	115 m	12	0.083	0.074	0.079
測定者		松島町 三浦	E 141 06 25				0.088	0.076	0.082
143	2013年 9月28日	宮城県	N 38 24 28	萩ヶ森山	89.6 m	14	0.062	0.050	0.055
測定者		松島町 左坂	E 141 05 07				0.066	0.062	0.064
144	2013年 9月28日	宮城県	N 38 21 45	番ヶ森山	210.6m	8	0.079	0.067	0.072
測定者		利府町 春日	E 141 00 35				0.079	0.075	0.077
145	2013年 12月11日	宮城県	N 38 29 49	高寺山	140.1m	12	0.074	0.060	0.068
測定者		大崎市 高寺森	E 141 01 59				0.075	0.072	0.073
146	2013年 12月11日	宮城県	N 38 29 45	絹掛	132 m	14	0.083	0.079	0.081
測定者		大崎市鹿島台 大迫	E 141 01 14				0.088	0.081	0.084
147	2013年 12月11日	宮城県	N 38 30 11	石ノ宮	130 m	14	0.095	0.085	0.090
測定者		大崎市鹿島台 大迫	E 141 00 37				0.107	0.101	0.104
148	2013年 12月11日	宮城県	N 38 30 10	石ノ宮 三角点	134.2m	14	0.083	0.070	0.075
測定者		大崎市鹿島台 大迫	E 141 00 32				0.082	0.081	0.081
149	2013年 12月11日	宮城県	N 38 26 05	丸山 築館城址	43 m	2	0.082	0.070	0.076
測定者		大郷町 羽生	E 141 00 09				0.079	0.075	0.077
150	2013年 12月11日	宮城県	N 38 25 25	味明山	66.1 m	14	0.071	0.062	0.066
測定者		大郷町 味明	E 141 02 49				0.075	0.064	0.070

公益社団法人 日本山岳会 宮城支部 自然保護委員会
山岳放射線量調査特別委員会

放射線測定結果記録一覧表

測定年(西暦) 2013・2014 年(和暦) 25・26 年　NO 11

番号	月日	測定位置 行政区分 (県・市町村)	経・緯度 測定値 N ° ′ ″ / E ° ′ ″	山名	標高 m	植生	測定結果値 放射線量(μsv/h) マイクロシーベルト 上段100cm・下段50cm 最高値	最低値	平均値
151	2014年 2月2日	宮城県	N 38 02 21	大高山 (神山)	100 m	12	0.145	0.134	0.138
測定者		大河原町 金ヶ瀬	E 140 41 54				0.160	0.148	0.155
152	2014年 2月2日	宮城県	N 38 02 43	頼母山	119.7m	10 14	0.134	0.131	0.132
測定者		大河原町 金ヶ瀬	E 140 41 19				0.143	0.133	0.137
153	2014年 2月2日	宮城県	N 38 03 39	天狗森山	212 m	14 2	0.107	0.087	0・100
測定者		蔵王町 宮向山	E 140 40 39				0.108	0.104	0.106
154	2014年 2月2日	宮城県	N 38 03 01	向山	156.6m	14 (クヌギ)	0.126	0.105	0.116
測定者		蔵王町 宮向山	E 140 40 30				0.122	0.105	0.114
155	2014年 2月2日	宮城県	N 38 05 20	館山	148.1m	14	0.113	0.099	0.105
測定者		蔵王町 矢附	E 140 40 01				0.129	0.113	0.121
156	2014年 2月2日	宮城県	N 38 06 14	古峰山	168.7m	11	0.095	0.075	0.086
測定者		蔵王町 円田	E 140 41 53				0.096	0.088	0.093
157	2014年 1月21日	宮城県	N 38 04 18	船迫 薬師堂	43 m	12	0.141	0.128	0.134
測定者		柴田町 船迫	E 140 46 20				0.147	0.142	0.144
158	2014年 1月21日	宮城県	N 38 04 48	羽山 (三角点)	220 m	11	0.130	0.120	0.125
測定者		柴田町 本船迫	E 140 45 42				0.143	0.130	0.137
159	2014年 1月21日	宮城県	N 38 04 52	羽山神社	225 m	11	0.120	0.107	0.112
測定者		柴田町 本船迫	E 140 45 51				0.130	0.123	0.126
160	2014年 1月21日	宮城県	N 38 04 41	上野山 (山頂)	210 m	2	0.132	0.117	0.124
測定者		柴田町 本船迫	E 140 45 22				0.145	0.136	0.140
161	2013年 8月25日	宮城県	N 37 57 55	深山 少年の森 入り口	40 m ± 11m	2	0.216	0.197	0.207
測定者		山元町 山下	E 140 51 58				—	—	0.161
162	2013年 8月25日	宮城県	N 37 57 47	深山 中腹水場	221 m ± 7m	14	0.175	0.165	0.169
測定者		山元町 山下	E 140 51 19				—	—	0.171
163	2013年 8月25日	宮城県	N 37 57 38	深山 山頂	292 m ± 6m	12	0.191	0.166	0.179
測定者		山元町 山下	E 140 50 11				—	—	0.183
164	2013年 8月25日	宮城県	N 37 57 32	深山 NO15	96 m ± 10m	8	0.208	0.191	0.204
測定者		山元町 山下	E 140 51 44				—	—	0.195
165	2013年 8月25日	宮城県	N 37 58 58	四方山 入り口分岐	133 m ± 15m	14	0.187	0.158	0.178
測定者		山元町 八手庭	E 140 50 57				—	—	0.209

公益社団法人 日本山岳会 宮城支部 自然保護委員会
山岳放射線量調査特別委員会

放射線測定結果記録一覧表

測定年(西暦) 2013 年(和暦) 25 年　NO 12

番号	月日	測定位置 行政区分 (県・市町村)	経・緯度 測定値 N ° ′ ″ / E ° ′ ″	山名	標高 m	植生	測定結果値 放射線量(μsv/h) マイクロシーベルト 上段100cm・下段50cm 最高値	最低値	平均値
166	2013年 8月25日	宮城県	N 37 59 31	四方山 山頂	269 m ± 6m	2	0.168	0.143	0.156
測定者		山元町 八手庭	E 140 50 35				—	—	0.169
167	2013年 8月28日	宮城県	N 37 49 40	旗巻峠	201 m ± 10m	8	0.292	0.267	0.280
測定者		丸森町 青葉	E 140 51 16				0.351	0.295	0.377
168	2013年 8月28日	宮城県	N 37 48 50	羽黒山 参道入り口	297 m ± 17m	2 8	0.377	0.322	0.344
測定者		丸森町 青葉	E 140 51 21				—	—	0.381
169	2013年 8月28日	宮城県	N 37 47 44	天明山 山頂	483 m ± 10m	14	0.454	0.416	0.436
測定者		丸森町 青葉	E 140 51 04				—	—	0.502
170	2013年 8月28日	宮城県	N 37 50 01	青葉	111 m ± 5m	2	0.351	0.297	0.324
測定者		丸森町 青葉	E 140 50 05				—	—	0.358
171	2013年 8月28日	宮城県	N 37 48 02	手倉山 山頂	682 m ± 13m	15	0.555	0.526	0.542
測定者		丸森町	E 140 47 36				0.574	0.572	0.573
172	2013年 8月28日	宮城県	N 37 50 27	松阪峠	554 m ± 18m	2 8	0.682	0.621	0.642
測定者		丸森町 筆甫	E 140 41 44				0.825	0.817	0.821
173	2013年 8月28日	宮城県	N 37 49 59	夫婦岩 登山口	365 m ± 6m	14	0.624	0.574	0.595
測定者		丸森町 筆甫	E 140 43 02				0.705	0.682	0.693
174	2013年 8月28日	宮城県	N 37 50 18	夫婦岩 三角点	573 m ± 18m	14	0.445	0.413	0.345
測定者		丸森町 筆甫	E 140 42 42				0.518	0.508	0.513
175	2013年 8月28日	宮城県	N 37 52 15	不動尊公園	76 m ± 5m	2	0.378	0.334	0.352
測定者		丸森町 上滝西	E 140 47 05				0.384	0.375	0.380
176	2013年 10月12日	宮城県	N 37 57 15	毛無山 登山口	170 m	2 8	0.429	0.391	0.416
測定者		白石市 上沢田	E 140 38 25				0.435	0.405	0.420
177	2013年 10月12日	宮城県	N 37 57 30	毛無山 山頂	314.6m	10	0.310	0.265	0.280
測定者		白石市 上沢田	E 140 38 11				0.294	0.275	0.284
178	2013年 10月12日	宮城県	N 37 56 53	堂山 虚空蔵福田堂	353 m	14	0.402	0.396	0.399
測定者		丸森町 大張	E 140 40 19			杜寺森	0.421	0.420	0.421
179	2013年 10月12日	福島県	N 37 53 18	和田山 山腹	200 m	2 8	0.413	0.380	0.387
測定者		保原市 菱沼	E 140 39 36				0.445	0.430	0.438
180	2013年 10月12日	福島県	N 37 53 22	和田山 山頂	336 m	10	0.366	0.345	0.352
測定者		保原市 菱沼	E 140 39 40				0.405	0.385	0.395

公益社団法人 日本山岳会 宮城支部 自然保護委員会
山岳放射線量調査特別委員会

放射線測定結果記録一覧表

測定年(西暦) 2013年(西暦) 25年　NO 13

番号	月日	測定位置 行政区分 (県・市町村)	経・緯度 測定値 N ° ′ ″ / E ° ′ ″	山名	標高 m	植生	測定結果値 放射線量(μSv/h) マイクロシーベルト 上段100cm・下段50cm 最高値	最低値	平均値
181	2013年 10月12日	宮城県	N 37 53 19	欠入薬師観音堂	310 m	2 8	0.405	0.334	0.368
測定者		丸森町 欠入	E 140 42 59				0.423	0.375	0.403
182	2013年 10月18日	宮城県	N 37 54 19	段田原峠	345 m	2 8	0.491	0.470	0.479
測定者		丸森町 曲木	E 140 42 24				0.509	0.506	0.508
183	2013年 10月18日	宮城県	N 37 54 44	次郎太郎山 丸森基地局	529 m	8 10	0.363	0.328	0.345
測定者		丸森町 丸森	E 140 43 24				0.372	0.371	0.372
184	2013年 10月18日	宮城県	N 37 54 45	次郎太郎山 中峰	530 m	8 14	0.391	0.379	0.386
測定者		丸森町 丸森	E 140 43 12				0.382	0.377	0.380
185	2013年 10月18日	宮城県	N 37 54 38	次郎太郎山 西峰	542 m	2 8	0.411	0.369	0.392
測定者		丸森町 丸森	E 140 42 47				0.413	0.407	0.410
186	2013年 10月18日	宮城県	N 37 53 51	ツボケ山 山腹上部	445 m	14	0.459	0.435	0.442
測定者		丸森町 羽出庭	E 140 41 47				0.443	0.426	0.435
187	2013年 10月18日	宮城県	N 37 55 07	百々石山 山頂	177.2m	10	0.307	0.291	0.297
測定者		丸森町 丸森	E 140 45 18				0.316	0.314	0.315
188	2013年 10月18日	宮城県	N 37 57 39	斗蔵山	245 m	2 8	0.258	0.244	0.250
測定者		角田市 小田	E 140 43 52				0.254	0.250	0.252
189	2013年 10月18日	宮城県	N 37 58 39	権現堂山	262.3m	7	0.200	0.173	0.186
測定者		角田市 笠島	E 140 42 26				0.183	0.178	0.181
190	2013年 11月5日	宮城県	N 37 51 12	岩嶽 登山口	280 m	12	0.342	0.335	0.337
測定者		丸森町 鷲ノ平	E 140 46 00				0.341	0.339	0.340
191	2013年 11月5日	宮城県	N 37 51 21	岩嶽 山頂	420 m	21	0.265	0.260	0.263
測定者		丸森町 鷲ノ平	E 140 45 54				0.293	0.268	0.284
192	2013年 11月5日	宮城県	N 37 50 31	鷲ノ平峠	388 m	4 8	0.508	0.485	0.499
測定者		丸森町 鷲ノ平	E 140 45 02				0.512	0.494	0.503
193	2013年 11月5日	宮城県	N 37 50 30	鷲ノ平橋	315 m	4	0.418	0.395	0.409
測定者		丸森町 鷲ノ平	E 140 45 43				0.438	0.426	0.432
194	2013年 11月5日	宮城県	N 37 50 38	中下	283 m	2	0.417	0.400	0.409
測定者		丸森町 筆甫	E 140 44 23				0.428	0.410	0.414
195	2013年 11月5日	宮城県	N 37 50 16	堂前	306 m	2 8	0.434	0.412	0.426
測定者		丸森町 筆甫	E 140 43 59				0.467	0.438	0.454

公益社団法人 日本山岳会 宮城支部 自然保護委員会
山岳地域 放射線調査特別委員会

放射線測定結果記録一覧表

測定年(西暦) 2013年(西暦) 25年　NO 14

番号	月日	測定位置 行政区分 (県・市町村)	経・緯度 測定値 N ° ′ ″ / E ° ′ ″	山名	標高 m	植生	測定結果値 放射線量(μSv/h) マイクロシーベルト 上段100cm・下段50cm 最高値	最低値	平均値
196	2013年 11月5日	宮城県	N 37 48 54	窓ノ倉山 山麓平場	406 m	14	0.643	0.617	0.630
測定者		丸森町 筆甫	E 140 42 13				0.647	0.633	0.640
197	2013年 11月5日	宮城県	N 37 50 07	八雲筆神社	339 m	2	0.471	0.452	0.460
測定者		丸森町 筆甫	E 140 43 47				0.492	0.463	0.478
198	2013年 11月5日	福島県	N 37 47 33	古霊山 山腹	695 m	2 8	0.921	0.895	0.906
測定者		相馬市 玉野	E 140 41 20				0.921	0.909	0.912
199	2013年 11月5日	宮城県	N 37 47 31	川平 県境観測所	444 m	2 4	0.897	0.863	0.883
測定者		丸森町 川平	E 140 43 25				0.910	0.884	0.895
200	2013年 11月5日	福島県	N 37 47 17	玉野 牧場下部	470 m	4	1.140	1.107	1.121
測定者		相馬市 玉野	E 140 42 58				1.157	1.129	1.139
201	2013年 11月5日	宮城県	N 37 47 48	川平 三叉路下	465 m	2 8	0.573	0.538	0.551
測定者		丸森町 川平	E 140 44 38				0.569	0.550	0.561
202	2013年 11月5日	宮城県	N 37 47 53	川平 八雲神社	484 m	2 12	0.933	0.899	0.922
測定者		丸森町 川平	E 140 44 37				0.966	0.941	0.953
203	2013年 11月5日	宮城県	N 37 49 04	窓ノ倉山 東面	423 m	2 8	0.484	0.475	0.479
測定者		丸森町 筆甫	E 140 41 48				0.558	0.537	0.550
204	2013年 11月5日	宮城県	N 37 49 07	窓ノ倉山 東面(湧水点)	415 m	14	0.621	0.608	0.615
測定者		丸森町 筆甫	E 140 41 59				0.673	0.632	0.648
205	2013年 11月16日	福島県	N 37 51 07	大沢峠	155 m	2 14	0.455	0.433	0.443
測定者		新地町 駒嶺	E 140 51 13				0.506	0.487	0.497
206	2013年 11月16日	福島県	N 37 51 38	鹿狼山 鹿狼湯 登山口	130 m	2 (竹林)	0.317	0.291	0.305
測定者		新地町 杉目	E 140 52 10				0.345	0.325	0.334
207	2013年 11月16日	福島県	N 37 51 37	鹿狼山 山腹	310 m	24	0.411	0.386	0.398
測定者		新地町 杉目	E 140 51 53				0.418	0.383	0.404
208	2013年 11月16日	福島県	N 37 51 42	鹿狼山 山頂	429.9m	2	0.254	0.230	0.243
測定者		新地町 杉目	E 140 51 42				0.290	0.273	0.281
209	2013年 11月16日	福島県	N 37 52 35	鈴宇峠	208 m	2	0.348	0.329	0.336
測定者		新地町 福田	E 140 51 26				0.377	0.355	0.363
210	2013年 11月16日	福島県	N 37 53 02	福田峠	185 m	2 11	0.386	0.352	0.370
測定者		新地町 福田	E 140 51 26				0.438	0.408	0.421

公益社団法人 日本山岳会 宮城支部 自然保護委員会
山岳地域 放射線調査特別委員会

放射線測定結果記録一覧表

測定年(西暦) 2013年(平成)25年　NO 15

番号	月日	測定位置 行政区分 (県・市町村)	経・緯度 測定値 N ° ′ ″ / E ° ′ ″	山名	標高 m	植生	測定結果値 放射線量(μSv/h) マイクロシーベルト 上段100cm・下段50cm 最高値	最低値	平均値
211	2013年 11月16日	宮城県	N 37 54 05	冥護山本丸跡	82 m	2 (サクラ植林)	0.247	0.215	0.232
測定者		丸森町伊午	E 140 49 21				0.284	0.265	0.275
212	2013年 11月16日	宮城県	N 37 54 49	小斎峠	155 m	2 12	0.312	0.268	0.283
測定者		角田市小斎	E 140 51 00				0.329	0.321	0.325
213	2013年 11月16日	宮城県	N 37 56 03	高瀬峠	200 m	2 14	0.175	0.162	0.168
測定者		山元町高瀬	E 140 51 09				0.188	0.181	0.185
214	2013年 11月16日	宮城県	N 37 54 47	黒森山山腹	168 m	2 14	0.220	0.198	0.211
測定者		亘理町吉田	E 140 50 28				0.238	0.218	0.228
215	2013年 11月16日	宮城県	N 38 00 07	黒森山山頂	255 m	2 14	0.165	0.149	0.157
測定者		亘理町吉田	E 140 50 24				0.177	0.163	0.171
216	2013年 11月18日	宮城県	N 37 53 59	川田島山津見神社	275 m	2 10	0.413	0.372	0.397
測定者		丸森町丸森	E 140 43 14				0.436	0.417	0.425
217	2013年 11月18日	宮城県	N 37 53 23	弁天山山頂	506 m	10 14	0.335	0.315	0.323
測定者		丸森町欠入	E 140 42 01				0.366	0.354	0.360
218	2013年 11月18日	宮城県	N 37 53 12	欠入	305 m	3	0.377	0.348	0.362
測定者		丸森町欠入	E 140 42 38				0.509	0.424	0.465
219	2013年 11月18日	宮城県	N 37 52 48	福島県境	240 m	2 8	0.349	0.341	0.346
測定者		丸森町峠	E 140 41 02				0.386	0.360	0.375
220	2013年 11月18日	宮城県	N 37 52 07	犬飼峠	375 m	2 8	0.442	0.413	0.429
測定者		丸森町犬飼	E 140 42 12				0.451	0.421	0.436
221	2013年 11月18日	宮城県	N 37 51 20	犬飼山	571.5m	14	0.499	0.472	0.483
測定者		丸森町犬飼	E 140 42 19				0.488	0.483	0.485
222	2013年 11月18日	宮城県	N 37 51 39	北山	245 m	2 (クヤキ林)	0.409	0.383	0.395
測定者		丸森町北山	E 140 43 39				0.411	0.391	0.402
223	2013年 11月18日	宮城県	N 37 53 00	四重麦	340 m	2 8	0.372	0.363	0.368
測定者		丸森町四重麦	E 140 44 10				0.416	0.412	0.414
224	2013年 11月18日	宮城県	N 37 54 38	丸山城本丸	64.9m	6	0.292	0.270	0.277
測定者		丸森町丸森	E 140 46 31				0.291	0.280	0.285
225	2013年 12月3日	宮城県	N 37 59 01	四方山大滝不動尊	150 m	2 8	0.211	0.195	0.202
測定者		角田市藤田	E 140 50 40				0.213	0.201	0.206

公益社団法人 日本山岳会 宮城支部 自然保護委員会
山岳放射線量調査特別委員会

放射線測定結果記録一覧表

測定年(西暦) 2013・2014年(平成)25・26年　NO 16

番号	月日	測定位置 行政区分 (県・市町村)	経・緯度 測定値 N ° ′ ″ / E ° ′ ″	山名	標高 m	植生	測定結果値 放射線量(μSv/h) マイクロシーベルト 上段100cm・下段50cm 最高値	最低値	平均値
226	2013年 12月3日	宮城県	N 37 56 54	葉山神社	75 m	11	0.220	0.209	0.213
測定者		山元町高瀬	E 140 52 08				0.225	0.217	0.221
227	2013年 12月3日	宮城県	N 37 56 14	戸花山山頂	53 m	7 (ヤダケ)	0.221	0.213	0.217
測定者		山元町高瀬	E 140 54 03				0.246	0.236	0.241
228	2013年 12月3日	宮城県	N 37 58 02	山下富護稲荷	30 m	12	0.212	0.197	0.203
測定者		山元町山下	E 140 52 38				0.223	0.216	0.219
229	2013年 12月3日	宮城県	N 38 01 18	稲荷山	35 m	10	0.181	0.166	0.173
測定者		亘理町長瀞	E 140 50 57				0.179	0.172	0.175
230	2013年 12月3日	宮城県	N 38 02 07	愛宕山山頂	151 m	10	0.168	0.142	0.158
測定者		亘理町亘理	E 140 50 19				0.167	0.161	0.164
231	2013年 12月3日	宮城県	N 38 01 51	割山峠	75 m	2 8	0.203	0.176	0.191
測定者		亘理町亘理	E 140 49 49				0.219	0.208	0.214
232	2013年 12月3日	宮城県	N 38 03 12	三門山山頂	204.9m	2 14	0.139	0.118	0.127
測定者		亘理町逢隈	E 140 49 55				0.142	0.135	0.138
233	2013年 12月3日	宮城県	N 38 04 40	安福河俣神社	35 m	12	0.164	0.144	0.156
測定者		亘理町逢隈	E 140 50 34				0.160	0.154	0.157
234	2013年 12月3日	宮城県	N 38 03 12	船岡城跡	142 m ± 5m	1	0.151	0.140	0.148
測定者		柴田町船岡	E 140 45 17				0.162	0.151	0.155
235	2014年 1月21日	宮城県	N 38 06 41	松沢山	183.3m	14	0.178	0.166	0.174
測定者		角田市松沢	E 140 42 07				0.184	0.176	0.181
236	2014年 1月21日	宮城県	N 38 01 18	沢尻峠	150 m	2 8	0.157	0.144	0.151
測定者		角田市松沢	E 140 42 19				0.155	0.147	0.151
237	2014年 1月21日	宮城県	N 38 01 04	館林休耕田	5 m ± 1m	5 (放棄地)	0.202	0.184	0.191
測定者		角田市館林	E 140 40 43				0.194	0.185	0.19
238	2013年 8月2日	宮城県	N 38 51 49	判官森登山口(南)	77 m	2 8	0.168	0.155	0.160
測定者		栗原市沼倉	E 140 57 26				—	—	0.187
239	2013年 8月2日	宮城県	N 38 51 51	判官森山頂(南)	162 m	14	0.148	0.132	0.136
測定者		栗原市沼倉	E 140 57 28				—	—	0.175
240	2013年 8月2日	宮城県	N 38 50 09	鶴丸城址	109 m	2	0.175	0.157	0.169
測定者		栗原市岩ヶ崎	E 140 59 31				—	—	0.187

公益社団法人 日本山岳会 宮城支部 自然保護委員会
山岳放射線量調査特別委員会

放射線測定結果記録一覧表

測定年(西暦) 2013年(平成25年)　NO 17

番号	月日	測定位置 行政区分(県・市町村)	経・緯度 測定値 N ° ′ ″ / E ° ′ ″	山名	標高 m	植生	測定結果値 放射線量(μSv/h) マイクロシーベルト 上段100cm・下段50cm 最高値	最低値	平均値
241	2013年 12月17日	宮城県	N 38 17 42	金華山 船着き場	10 m ± 6m	1	0.083	0.075	0.079
測定者		石巻市 金華山	E 141 33 07			2	0.097	0.087	0.092
242	2013年 12月17日	宮城県	N 38 17 51	金華山 清水石	278 m ± 5m	22	0.229	0.213	0.221
測定者		石巻市 金華山	E 141 33 42				0.236	0.225	0.231
243	2013年 12月17日	宮城県	N 38 17 51	金華山 水神社	344 m	29	0.163	0.125	0.147
測定者		石巻市 金華山	E 141 33 58				0.146	0.137	0.142
244	2013年 12月17日	宮城県	N 38 17 43	金華山 山頂	444.9m	29	0.234	0.179	0.195
測定者		石巻市 金華山	E 141 34 00				0.215	0.208	0.212
245	2013年 12月17日	宮城県	N 38 17 44	金華山 山頂 東北端	446.6m	29	0.330	0.300	0.320
測定者		石巻市 金華山	E 141 34 01				0.359	0.324	0.342
246	2013年 12月17日	宮城県	N 38 24 50	大六天山 山腹	337 m ± 6m	12 24	0.284	0.258	0.268
測定者		女川町 高白浜	E 141 27 27				0.276	0.264	0.271
247	2013年 12月17日	宮城県	N 38 24 37	大六天山 山頂	440.3m	2 8	0.144	0.126	0.137
測定者		女川町 高白浜	E 141 26 52				0.135	0.126	0.131
248	2013年 12月17日	宮城県	N 38 19 20	寺山	50 m ± 9m	14	0.160	0.147	0.156
測定者		石巻市 寺山	E 141 29 51				0.172	0.169	0.171
249	2013年 12月17日	宮城県	N 38 17 03	御番所山	189 m	8 14	0.081	0.066	0.074
測定者		石巻市 鮎川	E 141 31 04				0.079	0.075	0.077
250	2013年 12月17日	宮城県	N 38 25 29	目和山	61 m	2	0.074	0.063	0.069
測定者		石巻市 目和ヶ丘	E 141 18 28				0.073	0.071	0.072
251	2013年 11月19日	宮城県	N 38 28 35	真法寺 入り口	45 m	2	0.092	0.083	0.087
測定者		石巻市 真野	E 141 23 04				0.096	0.091	0.094
252	2013年 11月19日	宮城県	N 38 29 09	雄勝峠	424 m	8	0.100	0.090	0.094
測定者		石巻市 水沼	E 141 24 50				0.101	0.100	0.101
253	2013年 11月19日	宮城県	N 38 29 54	硯上山 山腹	385 m	14	0.088	0.072	0.078
測定者		石巻市 雄勝	E 141 25 27				0.079	0.079	0.079
254	2013年 11月19日	宮城県	N 38 30 10	硯上山 山頂	520.2m	2	0.134	0.122	0.129
測定者		石巻市 雄勝	E 141 25 51				0.139	0.126	0.133
255	2013年 11月19日	宮城県	N 38 30 02	上品山 山頂	466.8m	2	0.083	0.063	0.076
測定者		石巻市 三輪田	E 141 21 32				0.084	0.071	0.078

公益社団法人 日本山岳会 宮城支部 自然保護委員会
山岳放射線量調査特別委員会

放射線測定結果記録一覧表

測定年(西暦) 2013年(平成25年)　NO 18

番号	月日	測定位置 行政区分(県・市町村)	経・緯度 測定値 N ° ′ ″ / E ° ′ ″	山名	標高 m	植生	測定結果値 放射線量(μSv/h) マイクロシーベルト 上段100cm・下段50cm 最高値	最低値	平均値
256	2013年 12月14日	宮城県	N 38 33 33	ソロミ山	340 m ± 5m	14	0.108	0.091	0.100
測定者		石巻市 北上	E 141 22 43				0.112	0.103	0.107
257	2013年 12月14日	宮城県	N 38 34 19	黒森山	378 m ± 10m	14	0.082	0.071	0.076
測定者		石巻市 北上	E 141 22 10				0.081	0.080	0.081
258	2013年 12月14日	宮城県	N 38 33 14	馬鞍	27 m ± 17m	4	0.107	0.100	0.104
測定者		石巻市 北上	E 141 21 55				0.102	0.095	0.099
259	2013年 11月26日	宮城県	N 38 51 43	大森山	759.9m	2 8	0.115	0.095	0.104
測定者		気仙沼市 川上	E 141 27 07				—	—	0.089
260	2013年 11月26日	宮城県	N 38 50 54	徳仙丈山	711.1m	2 8	0.099	0.091	0.096
測定者		気仙沼市 羽田	E 141 28 11				—	—	0.090
261	2013年 11月26日	宮城県	N 38 44 59	田束山	512.0m	2	0.095	0.083	0.091
測定者		南三陸町 種の口	E 141 28 01				—	—	0.091
262	2013年 11月26日	宮城県	N 38 51 42	新山神社	133 m ± 8m	12	0.308	0.297	0.302
測定者		栗原市 鳥矢崎	E 140 59 12				0.336	0.324	0.330
263	2013年 11月26日	岩手県	N 38 53 15	自鏡山 登山口	178 m ± 7m	24	0.225	0.209	0.219
測定者		一関市 市野々	E 140 59 57				0.224	0.221	0.223
264	2013年 11月26日	岩手県	N 38 53 04	自鏡山 山頂	323 m ± 18m	24	0.176	0.157	0.168
測定者		一関市 市野々	E 141 00 02				0.215	0.213	0.214
265	2013年 11月26日	岩手県	N 38 57 29	烏独ヶ森 登山口	155 m ± 7	6	0.161	0.141	0.147
測定者		一関市 舞川	E 141 12 30				0.184	0.167	0.176
266	2013年 11月26日	岩手県	N 38 57 48	烏独ヶ森 山頂	350.9m	2 14	0.139	0.120	0.127
測定者		一関市 舞川	E 141 12 13				0.141	0.117	0.129
267	2013年 11月26日	岩手県	N 39 00 46	東稲山	595.7m	2 8	0.238	0.211	0.220
測定者		平泉町 長島	E 141 11 04				0.281	0.236	0.259
268	2013年 11月26日	岩手県	N 39 01 02	経塚山 入り口	463 m ± 7m	2 8	0.145	0.136	0.140
測定者		平泉町 長島	E 141 10 24				0.153	0.152	0.153
269	2013年 11月26日	岩手県	N 39 01 17	箱石橋	25 m ± 7m	2	0.222	0.202	0.210
測定者		前沢町 白鳥館	E 141 07 56				0.224	0.206	0.215
270	2013年 11月19日	宮城県	N 38 20 25	利府中 インター	15 m	2	0.084	0.079	0.082
測定者		利府町 春日	E 140 59 58				0.084	0.083	0.083

公益社団法人 日本山岳会 宮城支部 自然保護委員会
山岳放射線量調査特別委員会

放射線測定結果記録一覧表

測定年(西暦) 2014年(和暦) 26年　NO 19

番号	月日	測定位置 行政区分 (県・市町村)	経・緯度 測定値 N ° ′ ″ / E ° ′ ″	山名	標高 m	植生	測定結果値 放射線量(μSv/h) マイクロシーベルト 上段100cm・下段50cm 最高値	最低値	平均値
271	2014年 8月31日	宮城県	N 38 36 10	大盤峠山	376 m	8	0.089	0.073	0.080
測定者		石巻市 北上	E 141 26 27				0.095	0.084	0.090
272	2014年 8月31日	宮城県	N 38 33 27	橋浦 追波川	5 m	2	0.072	0.065	0.069
測定者		石巻市 北上	E 141 25 29				0.078	0.065	0.070
273	2014年 9月8日	宮城県	N 38 44 41	高荒神山	210 m ± 10m	12	0.089	0.079	0.083
測定者		登米市 米川	E 141 18 23				0.092	0.081	0.088
274	2014年 9月8日	宮城県	N 38 44 02	雷神山	88 m	12	0.076	0.065	0.070
測定者		登米市 米谷	E 141 18 03				0.076	0.069	0.073
275	2014年 9月8日	宮城県	N 38 43 34	杉山	210 m	10	0.072	0.065	0.069
測定者		登米市 米谷	E 141 18 36				0.083	0.074	0.079
276	2014年 9月8日	宮城県	N 38 40 40	玉山	110 m	14	0.077	0.070	0.074
測定者		登米市 浅部	E 141 16 54				0.085	0.075	0.081
277	2014年 9月10日	岩手県	N 39 12 04	種山ヶ原 (物見岩)	875 m ± 5m	2	0.073	0.067	0.070
測定者		奥州市 種山ヶ原	E 141 24 06				0.087	0.068	0.076
278	2014年 9月10日	岩手県	N 39 11 21	立石山	750.9m	14	0.076	0.065	0.072
測定者		奥州市 種山ヶ原	E 141 22 25				0.080	0.076	0.078
279	2014年 9月10日	岩手県	N 39 08 13	阿原山	782 m	14	0.059	0.052	0.056
測定者		奥州市 伊手	E 141 19 58				0.066	0.058	0.060
280	2014年 9月10日	岩手県	N 39 07 55	697.1峰	702 m ± 5m	2	0.076	0.065	0.073
測定者		奥州市 伊手	E 141 18 50				0.094	0.071	0.081
281	2014年 9月10日	岩手県	N 39 05 10	蓬莱山	792 m	8	0.063	0.052	0.058
測定者		奥州市 田原	E 141 18 49				0.057	0.055	0.056
282	2014年 9月16日	岩手県	N 38 49 09	七曲峠	284 m	2	0.146	0.138	0.141
測定者		一関市 藤沢	E 141 19 15				0.158	0.138	0.149
283	2014年 9月16日	岩手県	N 39 03 32	氷上山	786 m	31	0.098	0.086	0.094
測定者		陸前高田市	E 141 39 38				0.102	0.091	0.096
284	2014年 9月16日	岩手県	N 38 58 30	室根山	900 m	2	0.123	0.110	0.119
測定者		一関市 室根	E 141 26 51				0.135	0.124	0.131
285	2014年 9月16日	岩手県	N 39 00 59.5	箱根山	459 m	15	0.077	0.064	0.070
測定者		陸前高田市	E 141 41 28				0.083	0.068	0.076

公益社団法人 日本山岳会 宮城支部 自然保護委員会
山岳放射線量調査特別委員会

放射線測定結果記録一覧表

測定年(西暦) 2014年(和暦) 26年　NO 20

番号	月日	測定位置 行政区分 (県・市町村)	経・緯度 測定値 N ° ′ ″ / E ° ′ ″	山名	標高 m	植生	測定結果値 放射線量(μSv/h) マイクロシーベルト 上段100cm・下段50cm 最高値	最低値	平均値
286	2014年 9月18日	宮城県	N 38 30 47	石峰山 登山口	10 m	2	0.081	0.075	0.077
測定者		石巻市 雄勝	E 141 30 35				0.083	0.075	0.079
287	2014年 9月18日	宮城県	N 38 31 24	石峰山	352 m	29	0.057	0.055	0.056
測定者		石巻市 雄勝	E 141 30 13				0.065	0.052	0.06
288	2014年 9月18日	宮城県	N 38 30 51	小富士山	306 m	14	0.090	0.076	0.082
測定者		石巻市 雄勝	E 141 31 26				0.091	0.078	0.086
289	2014年 9月18日	宮城県	N 38 26 18	牧山	227 m ± 7m	8	0.118	0.092	0.102
測定者		石巻市 渚	E 141 20 11				0.107	0.095	0.101
290	2014年 9月24日	宮城県	N 38 47 12	蚕飼山 登山口	91 m	2	0.237	0.216	0.226
測定者		登米市 米川	E 141 19 15				0.280	0.250	0.263
291	2014年 9月24日	宮城県	N 38 48 14	蚕飼山	427 m	2	0.185	0.167	0.175
測定者		登米市 米川	E 141 20 39				0.205	0.177	0.192
292	2014年 9月24日	岩手県	N 38 51 59	新地峠	364 m	14	0.114	0.108	0.112
測定者		一関市 藤沢徳田	E 141 24 06				0.116	0.103	0.109
293	2014年 9月24日	宮城県	N 38 52 10	熊山	664 m	8	0.112	0.095	0.103
測定者		気仙沼市 川上	E 141 29 07				0.113	0.099	0.103
294	2014年 9月24日	宮城県	N 38 52 22	黒森山	645 m	10	0.116	0.092	0.107
測定者		気仙沼市 川上	E 141 20 50				0.127	0.112	0.120
295	2014年 9月24日	宮城県	N 38 49 46	長の森山	496 m ± 4m	8	0.098	0.074	0.083
測定者		気仙沼市 上金取	E 141 31 13				0.104	0.084	0.093
296	2014年 9月24日	岩手県	N 38 51 21	保呂羽山	420 m	12 14	0.104	0.074	0.083
測定者		一関市 藤沢	E 141 23 08				0.091	0.076	0.084
297	2014年 10月4日	宮城県	N 38 41 15	新山	71 m ± 8m	12	0.071	0.064	0.066
測定者		登米市 東和新山	E 141 17 33				0.075	0.066	0.071
298	2014年 10月4日	宮城県	N 38 41 56	来京山	100 m ± 5m	10	0.076	0.065	0.072
測定者		登米市 米谷	E 141 18 12				0.075	0.066	0.071
299	2014年 10月4日	宮城県	N 38 42 01	長谷山	67 m ± 7m	12	0.076	0.065	0.072
測定者		登米市 中田浅水	E 141 16 52				0.086	0.075	0.080
300	2014年 10月4日	宮城県	N 38 45 56	荒神山	101 m ± 6m	14	0.095	0.087	0.090
測定者		登米市 錦織	E 141 16 40				0.103	0.090	0.097

公益社団法人 日本山岳会 宮城支部 自然保護委員会
山岳放射線量調査特別委員会

放射線測定結果記録一覧表

測定年(西暦) 2014年(平成26年)

NO 21

番号	月日	測定位置 行政区分 (県・市町村)	経・緯度 測定値 N ° ′ ″ / E ° ′ ″	山名	標高 m	植生	測定結果値 放射線量(μsv/h) マイクロシーベルト 上段100cm・下段50cm 最高値	最低値	平均値
301	2014年 10月4日	宮城県	N 38 40 48	大嶺山	111 m ± 5m	14	0.149	0.136	0.140
測定者		登米市 錦織	E 141 16 29				0.154	0.136	0.149
302	2014年 10月8日	岩手県	N 38 51 52	藤沢館山	224 m ± 5m	12	0.096	0.091	0.094
測定者		一関市 藤沢	E 141 20 36				0.109	0.101	0.105
303	2014年 10月8日	岩手県	N 38 52 24	高鳥兎山	324 m ± 10m	11	0.171	0.151	0.158
測定者		一関市 藤沢	E 141 18 27				0.206	0.181	0.194
304	2014年 10月8日	岩手県	N 38 55 29	鳥兎山	339 m ±	14	0.146	0.124	0.136
測定者		一関市 薄衣	E 141 16 58				0.157	0.142	0.150
305	2014年 10月8日	岩手県	N 38 56 16	高鳥兎山	288 m	12	0.132	0.118	0.126
測定者		一関市 門崎	E 141 16 17				0.155	0.142	0.149
306	2014年 10月8日	岩手県	N 38 56 55	枯木峠	299 m ± 5m	2	0.126	0.107	0.119
測定者		一関市 松川	E 141 17 46				0.127	0.122	0.124
307	2014年 10月15日	宮城県	N 38 47 14	岩手県境 北上川	19 m ± 6m	2	0.130	0.120	0.126
測定者		登米市 東和錦織	E 141 15 43				0.145	0.128	0.139
308	2014年 10月15日	岩手県	N 38 48 43	高森山	173 m	10 12 14	0.143	0.126	0.136
測定者		一関市 黄海	E 141 15 36				0.150	0.129	0.140
309	2014年 10月15日	岩手県	N 38 49 42	献上山 (石祠)	270 m ± 5m	14	0.107	0.090	0.100
測定者		一関市 黄海	E 141 17 03				0.117	0.105	0.110
310	2014年 10月15日	岩手県	N 38 49 47	献上山 (三角点)	279 m	14	0.100	0.088	0.094
測定者		一関市 黄海	E 141 17 00				0.103	0.094	0.099
311	2014年 10月15日	岩手県	N 38 48 12	館ヶ森山	207 m	2	0.124	0.111	0.119
測定者		一関市 館ヶ森	E 141 17 06				0.136	0.119	0.128
312	2014年 10月15日	岩手県	N 38 45 29	高倉山	142 m ± 5m	10	0.081	0.059	0.073
測定者		一関市 花泉高倉	E 141 13 34				0.078	0.073	0.076
313	2014年 10月15日	宮城県	N 38 37 27	櫛田山	160 m	2 (14)	0.085	0.075	0.080
測定者		登米市 豊里山根	E 141 16 08				0.081	0.077	0.079
314	2014年 10月20日	岩手県	N 38 57 38	弓折山	439 m ± 9m	14	0.102	0.092	0.096
測定者		一関市 東山松川	E 141 17 03				0.106	0.092	0.100
315	2014年 10月20日	岩手県	N 38 57 45	たけくらべ 丈競山 (武競山)	431 m ± 5m	10	0.110	0.099	0.105
測定者		一関市 東山松川	E 141 16 24				0.119	0.106	0.112

公益社団法人 日本山岳会 宮城支部 自然保護委員会
山岳放射線量調査特別委員会

放射線測定結果記録一覧表

測定年(西暦) 2014年(平成26年)

NO 22

番号	月日	測定位置 行政区分 (県・市町村)	経・緯度 測定値 N ° ′ ″ / E ° ′ ″	山名	標高 m	植生	測定結果値 放射線量(μsv/h) マイクロシーベルト 上段100cm・下段50cm 最高値	最低値	平均値
316	2014年 10月20日	岩手県	N 38 56 10	大峰山	358 m ± 7m	14	0.176	0.150	0.161
測定者		一関市 千厩大峰	E 141 17 51				0.187	0.171	0.177
317	2014年 10月20日	岩手県	N 38 54 53	三島山	347 m ± 4m	2 8	0.131	0.112	0.122
測定者		一関市 千厩	E 141 18 20				0.151	0.123	0.140
318	2014年 10月27日	宮城県	N 38 46 23	三太郎山	123 m ± 5m	2 杉大木	0.117	0.103	0.110
測定者		大崎市 岩出山	E 140 53 21				0.111	0.090	0.102
319	2014年 10月27日	宮城県	N 38 41 36	下一栗村山	163 m	4 8	0.122	0.114	0.117
測定者		大崎市 岩出山	E 140 52 25				0.130	0.119	0.122
320	2014年 10月27日	宮城県	N 38 42 00	千本松長根	123 m ± 6m	11	0.094	0.081	0.087
測定者		大崎市 岩出山	E 140 54 44				0.115	0.092	0.101
321	2014年 10月27日	宮城県	N 38 42 02	149.0峰	149 m	11	0.106	0.096	0.103
測定者		大崎市 岩出山	E 140 53 16				0.106	0.097	0.103
322	2014年 10月27日	宮城県	N 38 44 04	大森	234 m	14 12	0.127	0.118	0.122
測定者		栗原市 一迫	E 140 51 38				0.138	0.131	0.134
323	2014年 10月27日	宮城県	N 38 44 20	142.4峰	142 m	12 14	0.155	0.125	0.137
測定者		栗原市 一迫大川	E 140 53 40				0.159	0.138	0.150
324	2014年 10月27日	宮城県	N 38 44 20	114.7峰	115 m	12 7	0.146	0.133	0.142
測定者		栗原市 一迫長崎	E 140 54 59				0.169	0.150	0.159
325	2014年 10月27日	宮城県	N 38 43 05	117.2峰	117 m	14	0.088	0.076	0.083
測定者		栗原市 一迫柳目	E 140 56 43				0.088	0.081	0.086
326	2014年 10月27日	宮城県	N 38 42 20	114.6峰	115 m	14 12	0.097	0.076	0.088
測定者		大崎市 岩出山	E 140 55 56				0.104	0.091	0.099
327	2014年 11月4日	宮城県	N 38 45 14	おおやま 王山 (保呂羽)	97 m ± 12m	12	0.126	0.114	0.118
測定者		栗原市 一迫	E 140 56 24				0.129	0.120	0.124
328	2014年 11月4日	宮城県	N 38 45 50	118.3峰	118 m	12	0.141	0.128	0.135
測定者		栗原市 一迫	E 140 55 50				0.150	0.139	0.146
329	2014年 11月4日	宮城県	N 38 46 10	鳩躰小山	148 m	12	0.104	0.097	0.100
測定者		栗原市 一迫	E 140 54 41				0.118	0.106	0.112
330	2014年 11月4日	宮城県	N 38 46 5⑧	212.2峰	212 m	10 11	0.124	0.112	0.118
測定者		栗原市 一迫	E 140 53 07				0.142	0.126	0.131

公益社団法人 日本山岳会 宮城支部 自然保護委員会
山岳放射線量調査特別委員会

放射線測定結果記録一覧表

測定年(西暦) 2014年(平成26年)　NO 23

番号	月日	測定位置					測定結果値		
		行政区分	経・緯度測定値	山名	標高	植生	放射線量(μsv/h) マイクロシーベルト 上段100cm・下段50cm		
測定者		(県・市町村)	N ° ′ ″ / E ° ′ ″		m		最高値	最低値	平均値
331	2014年 11月4日	宮城県	N 38 48 16	金田森	154 m	2 8	0.150	0.137	0.143
測定者		栗原市 鶯沢	E 140 54 41		± 6m		0.171	0.166	0.169
332	2014年 11月4日	宮城県	N 38 48 30	八幡山	108 m	12	0.127	0.121	0.125
測定者		栗原市 鶯沢	E 140 56 08		± 5m		0.151	0.138	0.146
333	2014年 11月4日	宮城県	N 38 49 41	123.5峰 (台山)	124 m	14	0.133	0.126	0.129
測定者		栗原市 鶯沢	E 140 56 25		± 4m		0.164	0.154	0.160
334	2014年 11月4日	宮城県	N 38 49 12	愛宕山	93.8 m	12	0.127	0.123	0.125
測定者		栗原市 岩ヶ崎	E 140 58 44				0.149	0.140	0.146
335	2014年 11月14日	宮城県	N 38 53 26	大峰森	398 m	10	0.102	0.077	0.091
測定者		栗原市 須倉	E 140 54 35				0.117	0.088	0.101
336	2014年 11月14日	宮城県	N 38 55 23	青笹峠	321 m	8	0.144	0.133	0.138
測定者		栗原市 玉山	E 140 54 49				0.159	0.144	0.149
337	2014年 11月14日	岩手県	N 38 55 45	鞍掛沼	530 m	26	0.111	0.101	0.104
測定者		一関市 本寺	E 140 53 12				0.112	0.102	0.105
338	2014年 11月14日	岩手県	N 38 57 50	谷地田峠	245 m	8	0.123	0.106	0.115
測定者		一関市 本寺	E 140 56 26				0.132	0.124	0.126
339	2014年 11月14日	岩手県	N 38 58 38	駒形根 神社	245 m	2	0.107	0.092	0.098
測定者		一関市 本寺	E 140 56 57				0.118	0.101	0.111
340	2014年 11月14日	岩手県	N 38 59 08	三吉山北峰 (林班界124)	290 m	14	0.085	0.061	0.070
測定者		一関市 本寺	E 140 57 23				0.088	0.077	0.081
341	2014年 11月14日	岩手県	N 38 56 39	蘭梅山	156 m	2	0.109	0.100	0.105
測定者		一関市 一関	E 141 07 13				0.114	0.097	0.105
342	2014年 11月16日	宮城県	N 38 22 42	羽山姫神社	58 m	12	0.145	0.139	0.141
測定者		石巻市 荻浜	E 141 27 01				0.164	0.158	0.162
343	2014年 11月16日	宮城県	N 38 23 10	野々浜峠	88 m	8	0.146	0.132	0.139
測定者		石巻市 荻浜	E 14 127 55				0.149	0.146	0.148
344	2014年 11月16日	宮城県	N 38 24 39	小屋取山	112.3 m	8	0.223	0.201	0.212
測定者		女川町 小屋取	E 141 29 57				0.242	0.221	0.232
345	2014年 11月16日	宮城県	N 38 23 36	182峰	182 m	14	0.193	0.168	0.181
測定者		女川町	E 141 29 21				0.202	0.183	0.193

公益社団法人 日本山岳会 宮城支部 自然保護委員会
山岳放射線量調査特別委員会

放射線測定結果記録一覧表

測定年(西暦) 2014年(平成26年)　NO 24

番号	月日	測定位置					測定結果値		
		行政区分	経・緯度測定値	山名	標高	植生	放射線量(μsv/h) マイクロシーベルト 上段100cm・下段50cm		
測定者		(県・市町村)	N ° ′ ″ / E ° ′ ″		m		最高値	最低値	平均値
346	2014年 11月16日	宮城県	N 38 23 39	東森山	154 m	12	0.258	0.244	0.250
測定者		女川町 寄磯	E 141 31 38				0.296	0.278	0.285
347	2014年 11月16日	宮城県	N 38 23 37	西森山	124 m	12 14	0.204	0.189	0.199
測定者		女川町 寄磯	E 141 30 32				0.202	0.193	0.197
348	2014年 11月16日	宮城県	N 38 19 18	鬼形峠	120 m	2 8	0.166	0.149	0.157
測定者		石巻市 鮎川	E 141 31 05				0.168	0・162	0.165
349	2014年 11月16日	宮城県	N 38 18 46	駒ヶ峰	323 m	10	0.112	0.101	0.107
測定者		石巻市 鮎川	E 141 31 32				0.118	0.113	0.115
350	2014年 11月16日	宮城県	N 38 21 34	186峰	186 m	14	0.224	0.210	0.219
測定者		石巻市 小積浜	E 141 28 14				0.243	0.232	0.238
351	2014年 11月16日	宮城県	N 38 24 29	風越トンネル	75 m	2 8	0.127	0.117	0.122
測定者		石巻市 折浜	E 141 24 38				0.132	0.129	0.13
352	2014年 12月6日	宮城県	N 38 40 30	大塚山	406.9m	10	0.109	0.096	0.103
測定者		南三陸町	E 141 22 24				0.122	0.106	0.116
353	2014年 12月6日	宮城県	N 38 41 17	大伽藍山	401.2m	14	0.144	0.130	0.139
測定者		南三陸町	E 141 22 51				0.164	0.159	0.160
354	月日	県	N ° ′ ″ / E ° ′ ″		m				
測定者									
355	月日	県	N ° ′ ″ / E ° ′ ″		m				
測定者									
356	月日	県	N ° ′ ″ / E ° ′ ″		m				
測定者									
357	月日	県	N ° ′ ″ / E ° ′ ″		m				
測定者									
358	月日	県	N ° ′ ″ / E ° ′ ″		m				
測定者									
359	月日	県	N ° ′ ″ / E ° ′ ″		m				
測定者									
360	月日	県	N ° ′ ″ / E ° ′ ″		m				
測定者									

公益社団法人 日本山岳会 宮城支部 自然保護委員会
山岳放射線量調査特別委員会

ブルースカイ・エクスペディション

南チベット　2014年秋4500km――遠ざかる辺境

中村　保

昨秋（2013年）、不用意にも哲古錯を見下ろす500m地点で高山病に倒れたため断念した踏査の雪辱、再挑戦である。今年は高度順化がうまくゆき、好天が続いて「晴れ男」であることが実証された。

10月11日に成都を発って東チベットの林芝空港に着いてから、ラサからシガツェに向かった10月25日までの間、肝心の所で快晴に恵まれた。

快晴の日

10月14日：ヤルン・ツァンポー南岸の山塊踏査
10月16日：マクマホン・ラインの山々に接近
10月17日：哲古錯と打拉日山塊から錯美
10月20日：普莫雍錯とクーラ・カンリ山塊とブータン国境
10月23日：念青唐古拉山西部・窮母崗日
10月24日：念青唐古拉山西部・納木錯
10月25日：青蔵高原鉄道（ラサ――シガツェ）

これほど終日ブルー・スカイを楽しんだのは珍しい。「ブルースカイ・エクスペディション」と冠する所以である。短期間にランド・クルーザーで4500kmを走破した効率的な踏査行だった。

1．はじめに――許可問題

2008年北京オリンピック、ラサ暴動以降東・南チベッ

トへの外国人の入域は年々難しくなっている。今年（２０１４年）は統制・検閲が一段と厳しくなった。

メンバーはいつもの老年探検隊、中村保（79）、永井剛（82）、新谷忠男（70）である。ガイドは信頼のおける有能で英語の達者なチベット族のアワンである。不確定な状況のなかで成果を収めることができたのは、いつものことながらアワンの人脈、調査・交渉能力と機転のお陰である。

８月には20年来の付き合いである四川大地探検公司を通じて早目に許可申請を始めたが、一筋縄ではいかなかった。当初の目的である未踏の郭格拉日居山群（ラサの東、東西約２７０㎞）とヤルン・ツァンポー南岸の知られざる６０００ｍ峰の３つの山塊をターゲットとし、打拉日（６７７７ｍ）東面の写真撮影、あわよくば中国・インドの実効的な国境であるマクマホン・ラインへの接近を視野に入れた。

林芝地区の州都、チベット自治区第３の都市、チベット軍区最大の基地でもある八一鎮を起点にしてヤルン・ツァンポー沿いに４つの県（米林、朗県、加査、桑日）を西に進み、探査を行なうルートを想定した。しかし、早めの手配にもかかわらず、第１回の申請が却下されたのは10月８日、出発予定の10日ほど前である。即座に第２回申請を指示し、エージェントの工作により最終的に許可証が航空便で届いたのは成都を発つ前日であった。土壇場で出発できた。許可証がないと、成都空港でチベット行きのチェックインはできない。かくして慌ただしく林芝空港へ飛び立った。入手した許可証は、左記の４種で西蔵軍区の許可が最終的な効力がある。

①　西蔵自治区旅游局

②　西蔵公安辺防総隊――外国旅游団隊入出境許可

③　西蔵軍区軍事施設保護委員会弁公室

④　西蔵自治区外事弁公室――外国人非開放地区入域許可

（名簿付き）

東チベットについて言えば、波密から然烏（カンリガルポの入り口）までの川蔵公路は外国人に開放されているが、横道にそれることは許されない。また、林芝空港の近くには５つ星の豪華ホテルが建設中で、中国人観光客には宣伝しているナムチャバルワの見えるツァンポー大峡谷観光スポットに外国人を入れないのは不可解である。理解しがたいのが中国である。

今年の統制の厳しさは異常とも言えるだろう。林芝空港でまず許可証が調べられ、八一鎮の公安局にアワンが出頭し、上記の書類を提示、通行許可証をもらった。以後、通過、滞在する県の公安には必ず出頭した。それだけでなく、

幹線道路沿いには公安・警察のチェック・ポストが随所にあり、そのたびに許可証を提示せねばならなかった。踏査が終わるまでに、数十ヶ所のチェック・ポストで検閲を受けた。アワンは許可証のコピーを数十セット用意して公安に渡していた。外国人の検閲とは別に、幹線道路では通行車のスピード・チェックが頻繁に行なわれていた。諸事厳しい規制、統制が実施されている。

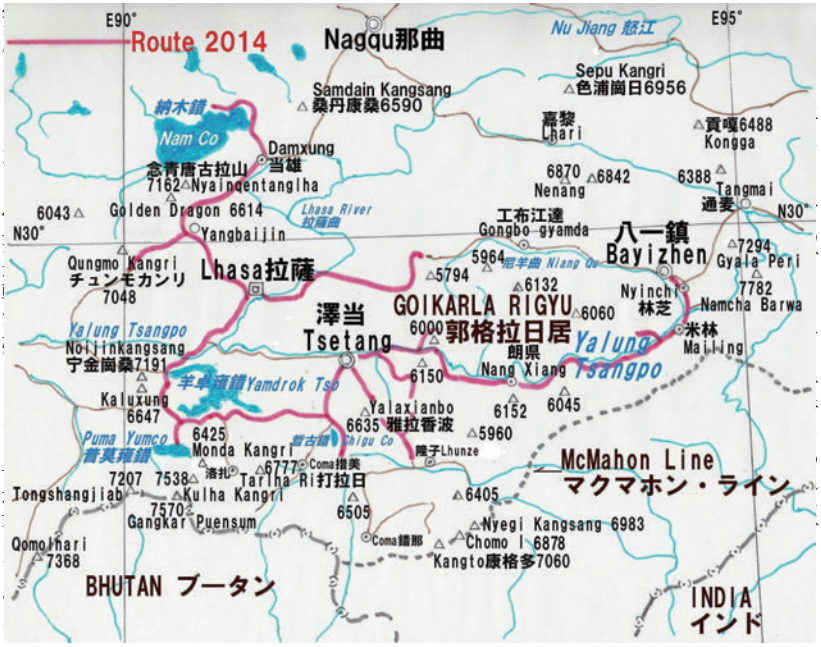
神戸大・武漢地質大学のことを触れておこう。神戸大山岳会創立100周年記念事業として来年（2015年）に打拉日（6777m）登山を計画し、中国登山協会から内々の許可をもらい、今年、我々の踏査と同じ時期に偵察隊を派遣する準備をしていた。しかし、西蔵軍区の許可が取れず、打拉日は諦めざるを得なかった。代わりに開放地区にある念青唐古拉山西部の6000m峰の許可が下り、こちらに転進することなり、偵察隊は11月15日に出発した。

2. 遠ざかる辺境、建設ラッシュ、チベット人への締め付け

ブータン国境、マクマホン・ライン（実質的なインドとの国境）に接するすべての県（洛扎、措美、隆子、錯那）は、外国人オフリミットである。打拉日山塊のある措美県もその対象である。2005年にはNHKが「天空の湖」として紹介した普莫雍錯（Puma Yumuco　4980m）も、現在は外国人に対する非開放地域に入っている。

9月末から外国人のカイラス・ツアー、巡礼が突然禁止となった。チベット族でも特別の許可が必要である。その理由は西蔵軍区の幹部は知っているだろうが、一般には誰に聞いても分からない。アワンに訊いても首を傾げる。例えば、こんな根拠のない噂があると言う。曰く、アメリカで政府高官とダライ・ラマ14世が密談し謀議を謀ったとか、阿里の西で人民解放軍とインド軍が緊張状態にあるからとか、である。こんな風聞の一方で、中国政府とインド政府はインド人のカイラス巡礼を容易にするための交渉をしている。現在、インド人巡礼はネパール経由でないとカイラスに行けないが、インド・中国の国境を越えれば行程は短くなる。その便宜を図るために両政府が交渉をしていると言う。

今回の踏査の後、ネパールに立ち寄るにあたり、アワンを同行させるつもりだった。しかし、パスポートの更新ができない。4ヶ月前から県・州に申請していたが、却下された。チベット族のパスポート取得は難しくなっている。



聖山・沃徳貢杰雪山(6000m)北面

聖山・沃徳貢杰雪山(5725m)北面

米拉山峠の南東に位置する 5700m 峰西面

米拉山峠の南東に位置する多妹田子(5794m)西面

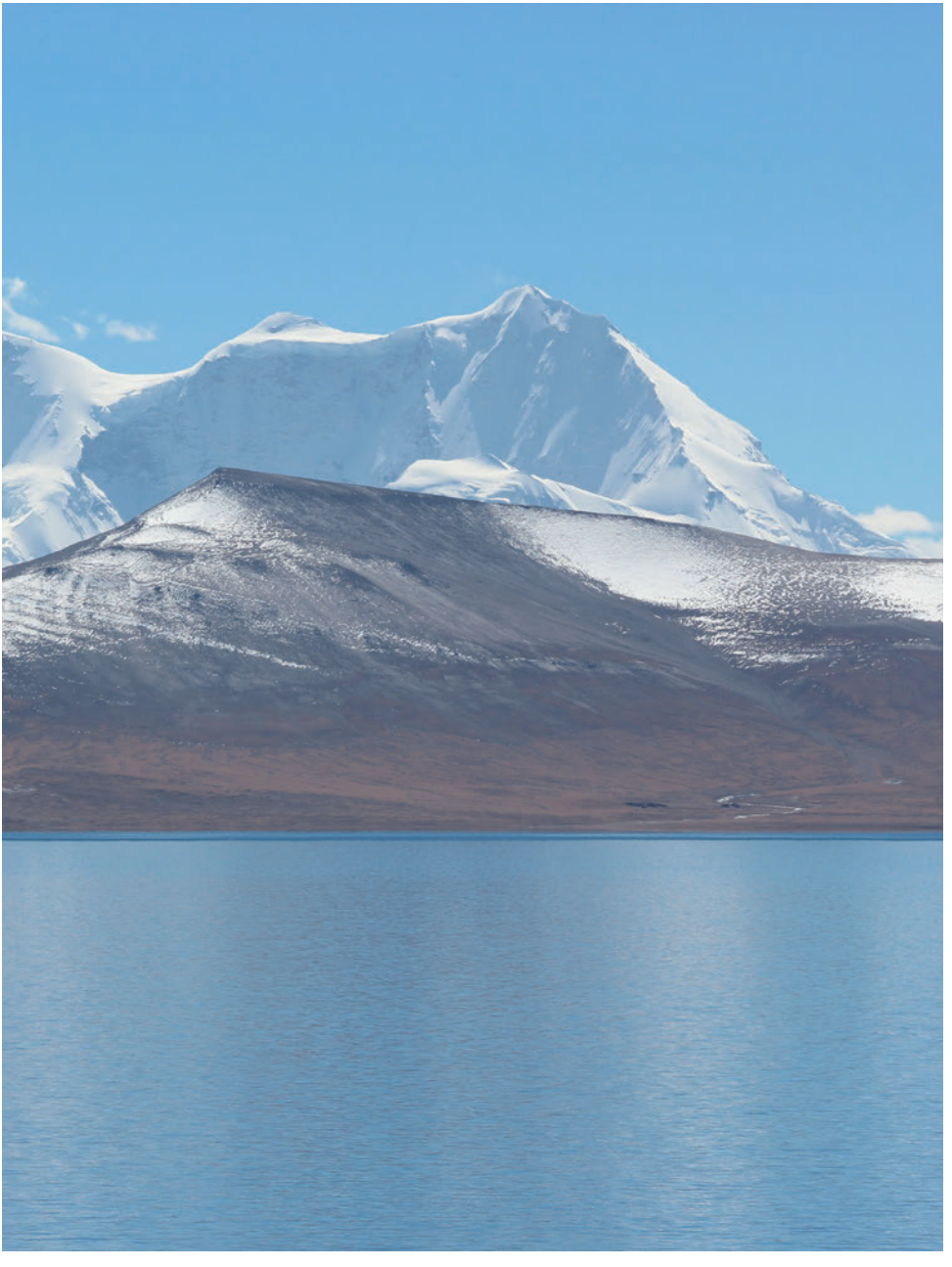
川蔵公路・巴河鎮から見た 6060m 峰北面

ヤルン・ツァンポー右岸(南側)の岩峰群

6150m 峰北面。未踏峰

チプラ山塊の 6045m 峰西面。未踏峰

朗県の南に位置するボボナム山塊の 6152m 峰西面。未踏峰



湖は普莫雍錯（5000m）

カレジァン主峰(7221m、左)北西面とクーラ・カンリ主峰(7538m、右)北面。

禁断の東商夾布(7207m)北面。未踏峰

世界最高の未踏峰であるガンカー・プンスム(7570m、左)北面とリャンカン・カンリ(7535m、右)

モンダ・カンリ(6425m)北面

ノイジンカンサン(7191m)東面

慶応大隊が初登頂したカルシュン(6647m)東面

聖山・雅拉香波主峰(6635m、左)と南峰(6495m ／ 6542m、右)西面

吉尔拉(5130m)から見た、左から下拉拉崗(6682m)、打拉日主峰(6777m)、6542m 峰東面。すべて未踏峰

マクマホン・ライン上のカント(7060m)と推定されるピークの北面。同峰は同志社大隊が初登頂

錯那の北に位置する 6505m 峰北面

マクマホン・ライン上の未踏峰、チョモⅠ峰(6878m、左)とⅡ峰(6733m、右)北面

ブータン国境に近い未踏の 6000m 峰

同じくブータン国境に近い未踏の 6000m 峰

踏峰

羊八井付近から見たチュンモ・カンリ(7048m)東面

ブータンの北 16km に位置する 6100m ＋峰(右中央)北面と ca6000m 峰(右端)。すべて未

ゴールデン・ドラゴン(6614m)西面

念青唐古拉山Ⅰ峰(7162m)北東面

桑丹康桑(6590m)東面

片道3時間の快適な汽車の旅だった。締め付けられているチベット族に多大な利便性を提供している事実も書かないと、バランスを欠くことになろう。ネパールのインフラが一向に整備されないのとは対照的である。

3．踏査地域

郭格拉日居山群

ラサの東、ヤルン・ツァンポーの北側、支流のニアン・チュ（尼洋曲　Niang Qu）と川蔵公路の南側に東西２７０㎞の大きな山系、郭喀拉日居（Goikarla Rigyu）が存在する。未探査の山域で、踏査の記録はない。数座の未踏の６０００ｍ峰があるが、氷河は発達していない。幹線道路からはほとんど見えない。地味な山系で注目されてこなかったが、「ヒマラヤの東」全域踏査を補完するために、今回のターゲットにした。しかし、公路から内部に入るアプローチが難しく、谷と尾根が輻輳して視界を遮り、山容の把握は断片的に終わってしまった。それでも幾かのピークを写真に収めることができた。２００６年に川蔵公路の巴河鎮付近から６０６０ｍ峰の北面のプロファイルは捉えている。今年はヤルン・ツァンポー側から桑日の東の谷に入り、聖山・沃徳貢杰雪山（Mt. Worde Konggye　旧ソ連20万分の1地形図では５７２５ｍ、６０５３ｍ、５９６４ｍのピークが示されている）を探り、一方、北側からは川蔵公路の米拉山峠（５０２０ｍ）付近から、中国の地図に載っている多妹田子（５７９４ｍ）とその北の５７００ｍ峰を捉えた。しかし、成果は不十分だった。

ヤルン・ツァンポー南岸の山塊

長く気にかかっていた山塊である。情報としては全く空白部である。米林から桑日までの間に3つの山塊が、旧ソ連20万分の1地形図に載っている。うち、朗県の南と東寄りの2つの山塊には氷雪と氷河が示されていて、興味がそそられる。東の山塊には６０４５ｍ峰と柯馬干布（５８６１ｍ）があり、南の山塊は、４つの６０００ｍ峰を擁するボボナム・チプラ山塊である。両者とも辛うじて写真に収めることができた。桑日の東、新道からヤルン・ツァンポー越えに見上げる６１５０ｍの岩峰の連なりは壮観である。予期しない発見であった。

中国・ブータン国境――普莫雍錯（Puma Yumco）からの遠望

普莫雍錯（Puma Yumco　プマ・ユム湖、４９８０ｍ）から南に望む大パノラマは、国境上の未踏の東商夾布（Tongshangjiabu　７２０７ｍ）、６８３３ｍ峰、韓国隊（POSCO Alpine Club）が無許可で２００２年９月に初登頂したカンプーカン（Kangpu Kang　別名 Shimokangri　７２０２ｍ）、１９９９年に日本隊が初登頂した良崗崗日（リャンカン・カンリ　Liangkang Kangri　７５３５ｍ）、世界最高の未踏峰・崗嘎普松（ガンカー・プンスム　Gangkhar Puensum　７５７０ｍ）からさらに東へ６６００～７０００ｍ峰が連なり、中国領内のジェシアン（Jiexian　６８７５ｍ）、クーラ・カンリ（Kulha Kangri　主峰７５３８ｍ、中央峰７４１８ｍ、東峰７３８１ｍ）、カレジァン（Karejian　主峰７２２１ｍ）、モンダ・カンリ（Monda Kangri　６４２５ｍ）まで見渡せる。壮観である。なお、１９９４年からブータンでは６０００ｍ以上のピークの登山は地域の宗教信仰に反するとして禁止され、２００３年以降、登山は完全に禁止されている。

ラサ／ヤルン・ツァンポーの南、「山南」の山塊

ラサとクーラ・カンリの間、およびその東の顕著な山塊と主なピークも視野に捉えることができた。

宇金崗桑（Nojinkangsang　７１９１ｍ）は１９８６年４月に中国西蔵登山隊が初登頂、カルシュン（Kaluxung　６６４７ｍ）は２００５年９月に慶応大隊が初登頂している。聖山・雅拉香波（Yalaxianbo　６６３５ｍ）の主峰は２００７年10月に山形県山岳連盟が初登頂、わずかに低い、鋭角的で顕著な南峰は未踏である。

打拉日（Tarlha Ri　６７７７ｍ）山塊は２０００年に日本ヒマラヤ協会隊が西面を偵察し、６４８０ｍのピークを登ったが、主峰（６７７７ｍ）とほかの５つの６０００ｍ峰は未踏である。打拉日山塊の北の雪尖傾日（Xojian Qeri　６１０６ｍ）山塊も未踏である。今回写真に収めることができた打拉日山塊から南にブータン国境に連なる６０００峰はすべて未踏である。

マクマホン・ラインへ

西蔵軍区と公安辺防隊の許可が取れず、隆子県の解放軍のチェック・ポストの手前から引き返さざるを得なかったので、マクマホン・ラインの至近までは行けなかったが、康格多（カント　Kangto）、チョモⅠ峰、Ⅱ峰（Chomo I, II）、ネギ・カンサン（Nyegi Kangsang）の遠望を写真に収めた。

この山域について解説しておこう。１９１３、14年に中国、英国、チベットの三者で行なわれたシムラ会議が、中国・インド国境問題の発端となった。英国全権のマクマホンが、ブータンから東の地域の国境を主にヒマラヤ主脈に画定する提案をした。このときに地図上に書き入れた線がマクマホン・ラインである。インドはマクマホン・ラインまでアルナチャル・プラデッシュ州の一部として実効支配しているが、中国はこれを国境とは認めず、ブラマプトラ川平野部の北辺沿いを国境と主張している。マクマホン・ライン上には25座を超える６０００ｍ峰が連なる。かつてアッサム・ヒマラヤと呼ばれていた。

西のゴリチェン（Gori Chen　６４８８ｍ）は１９３９年にビル・ティルマンが探査、１９６６年にインド隊が初登頂した。現在ではポピュラーな山塊となっている。盟主カント（康格多 Kangto or Kanggardo Rize　７０６０ｍ）は１９３９年に英国隊が失敗（1人遭難死）、１９８８年3月に同志社大隊がチベット側から北西稜経由初登頂に成功した。ゴリチェンとカント以外はすべて未踏峰である。カントの東ネギ・カンサン（Nyegi Kangsang　中国名 Tui Kangri　６９８３ｍ）の間に秀麗なチョモⅠ峰（Chomo I　６８７８ｍ）、Ⅱ峰（Chomo II　６７１０ｍ）がある。

ネギ・カンサンは物議を醸した山である。１９９５年にインド隊がインド側から初登頂したと公表したが、後に頂上には到達していないことがヒマラヤンクラブの名誉会長、故ナナバティ氏により検証された。チベット側からは２０００年に英国アルパインクラブのジュリアン・Ｆ・アトウッドが偵察を行なったが、以後、登山許可は下りず未踏である。ネギ・カンサンから北東に大きな氷河を擁する６８０１ｍなど未踏の６０００ｍ峰が連なる。写真はほとんどない。

念青唐古拉山西部と納木措

長大な念青唐古拉山西部は、西から北東に4つのグループに便宜上分類される。

窮母崗日（Qungmo Kangi　７０４８ｍ）

念青唐古拉山（Nyainqentanglha　７１６２ｍ）

ラガエン（Lagaen）グループ　念青唐古拉山と桑丹康桑の間

桑丹康桑（Samdain Kangsang　６５９０ｍ）

今回の踏査の対象ではなかったが、開放地域であること、晴天に恵まれたこともあって、窮母崗日（７０４８ｍ）の南面に入り、また、当雄から５１９０ｍの峠を越えて聖湖・

納木錯（４７１８ｍ）の北岸に行って、すでに雪に覆われた念青唐古拉西部連山が、紺碧の納木錯に映える美しい姿に感動することができたのは幸運であった。

踏査旅行日程

10月８日：成田／広島――成都
10月11日：成都――林芝空港―八一鎮
10月12日：八一鎮３０２５ｍ（曇06：00　12℃）―郭格拉日居の谷へ―米林
10月13日：米林２９４５ｍ（曇07：00　10℃）―ツァンポー南岸の谷へ―朗県
10月14日：朗県３１１０ｍ（快晴07：00　11℃）―南の谷へ―加査（曇）―桑日―澤当
10月15日：澤当３５７０ｍ（曇）―雍布拉康―澤当
10月16日：澤当（快晴07：00　15℃）―雅拉香波―隆子の手前28㎞―松曲―澤当
10月17日：澤当（快晴08：00　10℃）―哲古措―打拉日展望５１４２ｍ―措美の手前―澤当
10月18日：澤当（曇08：00　10℃）―桑日―雪巴村・郭格拉日居―澤当
10月19日：澤当（曇08：00　9℃）
10月20日：澤当（快晴05：00　6℃）―羊卓雍錯―普莫雍錯―ラサ

［日記より引用］

澤当を早朝05：00、暗いうちに出発。蔵王墓ルートで南へ。ここからは現在、外国人オフリミットの非開放地区である。魯古拉（４８９０ｍ）を越えて、チェック・ポストのある哲古鎮の手前で西への道を行く。平均４５００ｍの高地にチベット族の村落が点在、さらに西に進む。寒い。凍りついている。マイナス７～８℃だろう。やがて羊卓雍錯（Lake Yamdrok）の南東の「サソリの尾」に至る。公安のチェック・ポストを避けての行動である。コバルト・ブルーとターコイズ・ブルーの羊卓雍錯は、表現できないほど神秘的で美しい。将来の湖一周観光ルートになろう。宁金崗桑（７１９２ｍ）とカルシュン（６６４７ｍ）の東面が映える。南下して目的の「天空の湖」普莫雍錯（４９８０ｍ）の北岸に至る。眼前に大パノラマが展開する。静謐、無風快晴！　モンダ・カンリ、クーラ・カンリ山塊、ブータン国境の山々が果てしなく続く。ガンカー・プンスム、トンシャンジアブが遠望される。まさに至福の時である。――午後７時にラサに着く。ラサ市に入るための検閲が厳

しい。

10月21日：ラサ3660m（晴、07：30　7℃）

10月22日：ラサ（晴後曇07：30　6℃）―米拉山峠5020m（郭格拉日居）―ラサ

10月23日：ラサ（快晴08：00　5℃）―雪格拉5300m（窮母崗日）―ラサ

10月24日：ラサ（快晴05：00　5℃）―当雄―5190m峠―納木錯―ラサ

10月25日：ラサ（快晴07：00　5℃）―青蔵鉄道―シガツェ

10月26日：シガツェ3840m（晴08：00　2・5℃）―青蔵鉄道―ラサ

10月27日：ラサ（晴後曇08：00　5℃）

10月28日：ラサ（曇08：00　5℃）――カトマンズ

11月4日：カトマンズ――成都

11月6日：成都――成田／広島

アルバータ峰登頂90周年と伝説のピッケル

芳賀孝郎

日本山岳会初の海外遠征は1925年、カナディアン・ロッキーで唯一の未踏峰であったアルバータ峰（3619m）登山であった。

本年はアルバータ峰初登頂から90年を迎える。アルバータ峰初登頂とその登山史は、頂上に立てられた伝説のピッケルとともにスイス、アメリカ、カナダ、英国などとの国際的交流を果たした記録であり、日本山岳会の歴史の一つである。

アルバータ峰登山の起こり

1924（大正13年）12月末、槇有恒は赤倉温泉にある細川護立侯の別荘に泊まり、秩父宮様のスキーのお供を務めた。

その帰路のことである。汽車が浅間山の山麓を登ぼりつめているとき、細川侯が槇に一冊の本を示した。それはパルマー、ソリントン著のカナディアン・ロッキー登山案内書であった。

細川侯は、カナディアン・ロッキーについて熱心に語り始めた。そこにある、幾多の氷河に覆われてそそり立つ高い峰々と森林、湖の壮大な原始の自然を物語った。そして、案内書の巻頭の山岳写真を示した。それは、針葉樹の彼方の上に氷河からそびえ立ち、下方に縞模様のように雪をまとった黒々とした岩峰であった。

カナディアン・ロッキーの十指を数える山は、第1位の

マウント・ロブソン（３９５３ｍ）をはじめとして、皆その頂は登頂されていた。高度順位６位のアルバータ峰のみが唯一残されていた。案内書の説明では、「恐るべき未踏の山・アルバータ峰」とあった。

槇の目にも、なんともいえぬ怪奇な山容に見えた。しかし、細川侯は「日本遠征隊が登攀可能な山だ」という。細川侯の話に耳を傾け、その黒い岩峰に見入っているうちに、槇の心に「登りたい」という希望と夢が膨らんでいった。さらにそれは、「登れる」という確信に繋がっていった。槇の頭の中にはこの数年、ロッキーではなくヒマラヤが住み続けていた。それは、夢のように実現し難い、遠く高い世界であった。ロッキーはすべてにおいて、手近で実現可能な所にある。この細川侯の詳細にわたる熱心な説明は、槇の心を捉えた。１９２３年１月、槇の心は立山・松尾峠の遭難で板倉を失った悲しみから立ち上がるために、ヒマラヤに向いていた。むしろ遠くを憧れていた自分の愚かさを痛感した。

この登山計画は急速に進み、細川侯の話からわずか半年後に、槇有恒隊長のもと慶応義塾の橋本静一、早川種三、三田幸夫、学習院の岡部長量、波多野正信の隊員が決まった。大阪毎日新聞、東京日々新聞が後援となり、日本山岳会が主催となった。

１９２５年６月19日、ＯＳＫパリ丸で遠征隊が出発することになった。登山道具や装備、食糧その他の調達と準備は並々ならぬ仕事であった。その実現においても、全く細川侯に負うところが大であった。

細川侯はアルバータ峰への出発にあたり、細川護立のイニシャル「ＭＴＨ」を金で象嵌した一本のピッケルを槇に手渡した。登頂の際このピッケルを頂上に立ててもらいたい、と頼んだ。

１９２５年、アルバータ峰初登頂

槇隊長の率いる遠征隊がジャスパー・パークロッジに到着した。そこで偶然３名のスイス人山岳ガイドと会い、ガイドの希望を聞き入れて隊に合流させた。一行はアサバスカ河に沿って７日間のキャラバンをして、途中、山火事に遭遇したりして、ようやくアルバータ峰山麓にベースキャンプを設営した。

槇はこの地域が国立公園のため、倒木などを焚くことを禁じている場合を考え、登山中の炊事は石油を使用すると準備した。しかし、現地では石油ストーブを使用しなかった。食糧については、海外生活の経験ない５人の隊員は日

1925年、初登頂隊が撮影したアルバータ峰

1925年、出発前の登山隊一行。左からフーレル、槇、波多野、橋本、岡部、三田、早川、コーレル

本食が必要とのことで、米、味噌、醤油、漬物、乾物などを用意したが、カナダ人のコックの食事に満足し、日本食は1回のみ使い、重たい荷物は無用であった。

周到な登攀ルート偵察後、1925年7月21日午前3時30分、2000m地点のテントを出発した。落石やもろい岩に苦しみ、2つのオーバーハングを乗り越えるのに時間を要し、体力と技術、そして日本とスイスの協力が発揮された登山であった。

この隊は3組のグループに編成されていた。トップグループはスイス人のフーレル、コーレルと早川の3名、ミドルグループは槇、橋本と三田の3名、ラストグループはウエバー、岡部と波多野の3名であった。しんがりの岡部は、この遠征隊の後援者・細川護立侯のピッケルを背負っていた。

厳しい16時間の苦闘の末午後7時30分、アルバータ峰の頂上に全隊員9名が立った。頂上では日の丸の旗を振ることもなく、万歳を叫ぶこともなく、隊員たちはただ無言のままお互いに感激の握手を交わして、初登頂の喜びを味わった。槇は外国の山に登らせていただいたという感謝の気持ちを、胸に秘めていたのである。

頂上は雪に覆われていたが、西側の少し下がった所に岩

1925年、アルバータ峰山頂での登山隊一行

が露出していた。その岩に小石を集めて細川侯の「ＭＴＨのピッケル」を立てた。この日は快晴に恵まれ、頂上から日没に映えるカナディアン・ロッキーの景観を満喫して下山した。

一行は下山途中に暗くなりビバークをしたが、無事下山して初登頂に成功した。

１９４８年、アメリカ隊の第２登

アルバータ峰は１９２５年以降、多くの登山隊が登頂を試みたが成功しなかった。第２次世界大戦後の１９４８年、アメリカ隊のオバーリンとアイレスの２人によって23年ぶりに第２登に成功した。彼らは頂上で23年間、風雪と孤独に耐えて立っていた日本隊の残したピッケルを見つけた。さらにそこに埋められていた缶も見つけた。その中には英語で書かれた槇のメモがあった。

登頂日と隊員たちの名前に続き、「私たちは、はるか東の日本からこの山に魅せられてやって来ました」と英文で記されていた。

彼らは登攀中にピッケルの１本を確保用に使用していたので、下山には頂上の日本隊のピッケルが必要であった。ピッケルを引き抜き、ピッケルと初登頂の記録が入った缶を持ち帰った。その後、ピッケルはニューヨークのアメリカ山岳会博物館に展示された。

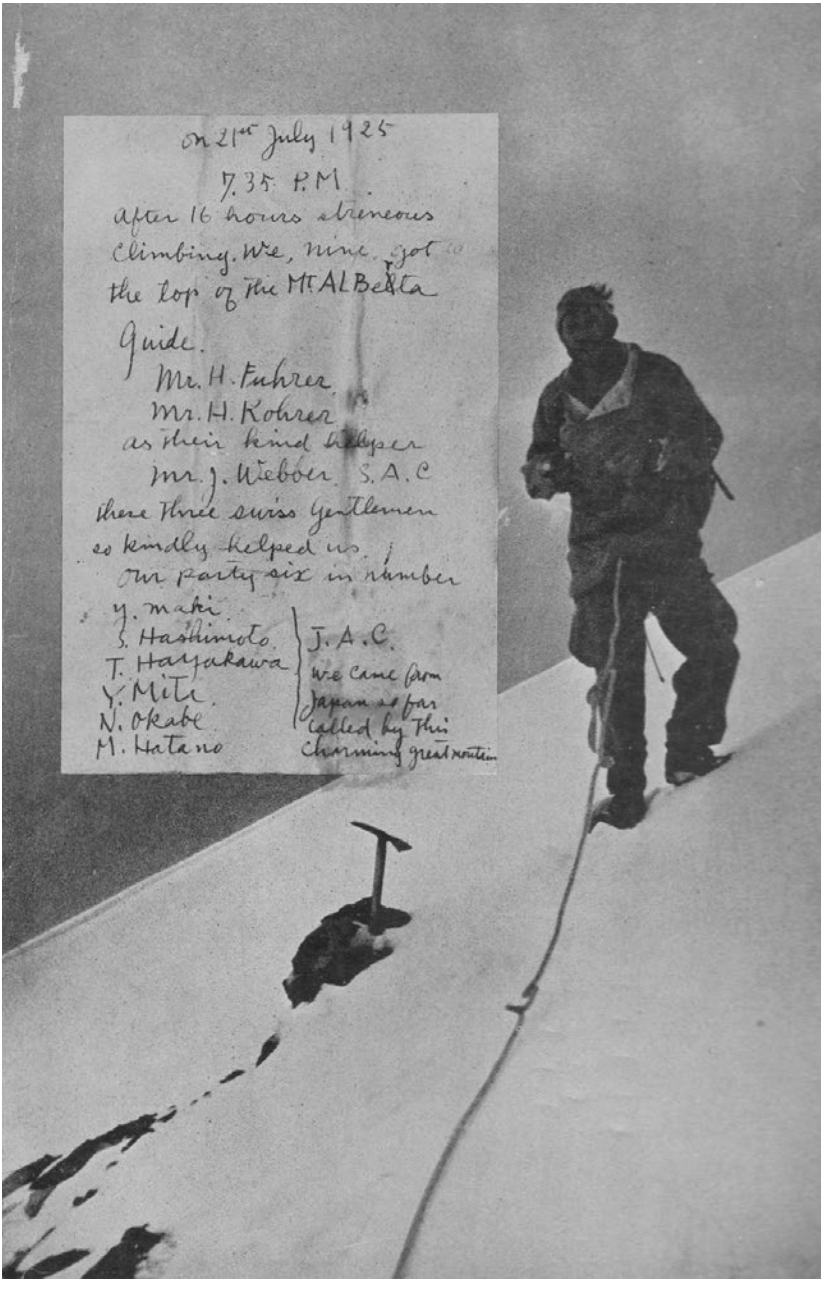
オバーリンは登頂後、23年前の日本隊の登山記録について、自然保護への配慮から石油ストーブを持参したこと、頂上での日の丸の旗を振らず、万歳を叫ばない登山マナーに対して、高い敬意を表している。

伝説の「銀のピッケル」

第２登頂者とアルバータ峰のピッケルに関しての日米間の文通については、三田幸夫によりアルバータ峰後日談として『わが登高行』に記載されている。その中からピッケルについて興味ある所を抜粋してお伝えする。

１９４８年９月24日、アルバータ峰第２登頂者Ｊ・Ｃ・オバーリンは、戦後、進駐軍として東京に駐留していた叔父Ｂ・Ｇ・オバーリン大尉へ、アルバータ峰のピッケルについて下記のようなことを手紙に書いている。

「（前略）日本の連中が残したケルンは雪の中に埋もれていましたが、一本のピッケルがその中に立っていました。それは風雪にさらされ錆びてはいましたが、その頭部には大きくＭＴＨの金の頭文字がありました。これは現在のヒロヒト天皇、すなわち当時の皇太子が登山隊長・槇に、頂



1948 年、第 2 登したアメリカ隊の登頂者・アイレスと頂上に残されていた槇のメモ

上へ残してくるように与えられたものと聞いています。私たちは山稜を戻るための必要から、また、山頂に残しておいたのでは、さらなる年月は保たないだろうという懸念から、そのピッケルを持ち帰りました。そして、アメリカ山岳会の博物館で保存すべきと思いました。（中略）ヒロヒト天皇の頭文字はＭＴＨなのでしょうか？　これが判れば非常に興味深いことと思います。（後略）」

さらに１９４８年10月18日、オバーリンはピッケルについて叔父へ手紙を送っている。

「（前略）物語では、例のピッケルはヒロヒト天皇から登山隊に与えられたことになっています。もっとも、この物語は当時、隊員であったスイス人のＧ・ウエバーの書いたものを見ただけであります。私の想像では、ウエバーもこの話は日本人隊員から直接聞いたことだったでしょう。彼はこう言っています。『エクストラのピッケルについては謎であった。そして、登攀が始まるまで発表されなかった。』（後略）

しかし、日本人の肩書とか尊称の最初の一字を頭文字の一つとして使用するのでしょうか。あなたは何か確かな解釈をお持ちではないでしょうか？（後略）」

三田幸夫は、この細川侯のピッケルについて次のようにコメントをしている。

「ＭＴＨのピッケルは、登攀の際しんがりの隊、すなわちウエバー、岡部、波多野のうち最後まで岡部に背負われていた。その登攀中に岡部か波多野によって、そのピッケルについて何か説明されたと想像される。そして、それはその後だんだん誤り伝えられ、アルバータ山頂には銀のピッケルが残っているという伝説となってしまった事と思われる。」

１９４９年3月21日、Ｆ・アイレスは三田幸夫に下記のような手紙を出している。

「貴君は、会報『山』の中でＭＴＨなる頭文字について記述されていますが、私もまたこの頭文字について少し申し上げさせていただきます。アメリカあるいはカナダにいる多くの登山家は、あのピッケルは天皇（当時の皇太子）から貴君たちの隊に贈られたという噂を思い出したのです。真相を掴もうとして、オバーリンは彼の叔父のオバーリン大尉に手紙を書き、その問題を明瞭ならしめるため、ＭＴＨなる頭文字について問い合わせした次第なのです。

私はようやく天皇に関する問題が多分貴殿を驚かせ、また当惑させたに違いなかったろうということが判りました。（後略）」

前記のとおりピッケルのＭＴＨの頭文字ついては、日米間の手紙の交流によりアメリカ隊は了解した。しかしこの時点では、アルバータ山頂でピッケルをケルンから引き抜くとき、石突き部分のシャフトが折れたことは、日本隊に知らされなかった。

その後、アメリカ山岳会からは日本山岳会へアルバータ峰のピッケルのレプリカが送られてきた。

１９５７年、英国山岳会１００周年記念祝賀会

世界最初の山岳会・英国山岳会（ＡＣ）の創立１００周年記念祝賀会が１９５７年11月、ロンドンで開催された。日本から槇有恒と松方三郎が招待された。

ＡＣ会長は、１９５３年の英国エヴェレスト隊隊長のジョン・ハントであった。ホストのハント会長は正装のタキシードに白タイで、ビジターの槇と松方を迎えた。ビジターは略装に黒タイであった。ハント会長の挨拶の中で、遠い極東の日本から参列した槇と松方の２人に、特別の歓迎と感謝の言葉が述べられた。ＡＣ会員のほかに世界20ヶ国の山岳会の代表が参列していた。

ハント会長の客として、シェルパ・テンジンの顔もあった。総勢４００名に及ぶ男性ばかりの晩餐会は賑やかであった。その当時、ＡＣは女性会員を認めていなかったばかりか、正式な集会には夫人同伴もなかったのである。

槇と松方にとって印象に残ったことは、祝賀会でＡＣの長老であり、ヒマラヤ登山のパイオニアの一人であるトム・ロングスタッフ（当時82歳）に出会ったことであった。彼のＡＣ入会の推薦者が、日本アルプスの開拓者・ウェストンであったことは奇遇である。彼はウェストンから日本の山々についての話をよく聞いたことを語り、槇と松方に特別の親しさで話をした。

彼の最初のヒマラヤ遠征は１９０５年（日本山岳会創立年）、インド・ヒマラヤのナンダ・コットであった。６４５０ｍまで登り、ナンダ・デヴィを偵察している。１９０７年にはトリスルＩ峰（７１２０ｍ）に初登頂、人類初の７０００ｍ峰登頂の記録である。

ナンダ・コットはその後の１９３６年、堀田弥一の率いる立教大隊により初登頂された。これが日本人初のヒマラヤ登頂の記録である。ロングスタッフは元ＡＣ会長であり、日本登山界と縁の深い登山家であった。

祝賀会でのさらなる出会いは、カナディアン・ロッキーの案内書の著者・ソリントンが槇の席にやって来て「私がアルバータ峰を案内書に紹介したことが失敗であった。も

し紹介しなかったら、私たちが登ったでしょう」と言葉をかけ、不思議な出会いを祝って握手を交わした。続いてアルバータ峰第2登のオバーリンと初顔合わせをした。彼はアメリカ山岳会会長として出席していた。お互いに登頂を祝い、ピッケルの話を交わし固い握手をした。

槇はAC100周年記念祝賀会後、スイス山岳財団に招待され、36年ぶりにスイスを訪問した。スイスではアイガーの東山稜初登攀の仲間・ブラバンドをはじめ、多くのスイスの友人の歓迎を受けた。スイスで『マナスルに立つ』の映画を上映した。その会場で、アルバータ峰の仲間たち、フーレル(83歳)や同じ仲間のコーレルとウエバーに出会った。フーレルは齢をとったが、昔と変わらずの元気な姿で再会を喜び合った。コーレルとウエバーは立派な紳士の姿で現れ、再会の握手を交した。

1965年、長野高校山岳班OB隊によるアルバータ峰第5登

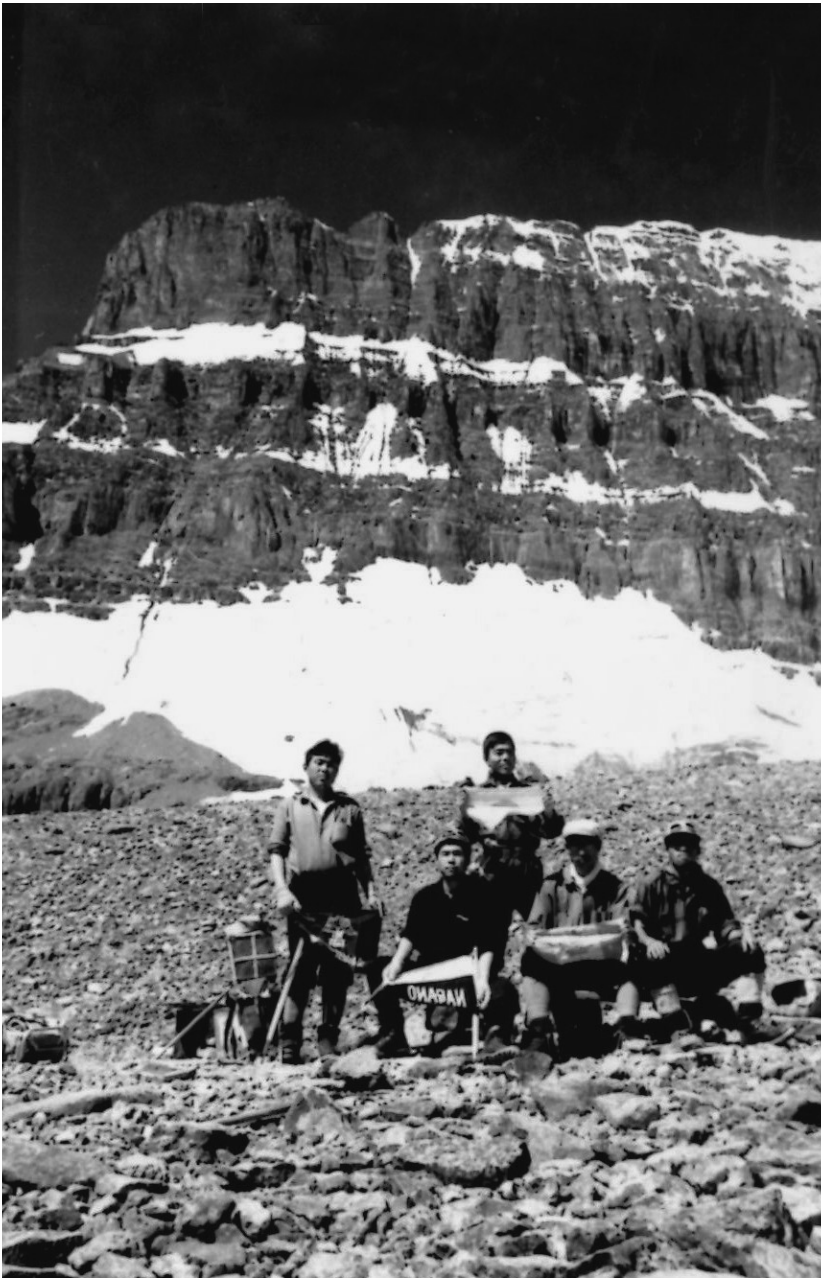
1965年7月29日午後3時40分、長野高校OB隊の田島守隊長、渡邉一、下平和範の3名は、十数時間に及ぶ氷壁と岩壁を乗り越えての登攀の末、アルバータ峰の頂上に立った。この年は雪が少なく、頂上のケルンの下に第2登のアメリカ隊の遺留品と思われる錆びた缶が転がっていた。その中には濡れてぼろぼろになった2枚の紙片と茶色に濡れていた1枚の名刺が入っていた。頂上での30分間の滞在は、あっという間に過ぎ去った。遺留品をまとめてザックに入れた。自分たちの記録を用意した缶に入れてケルンの下に置き、4時10分、下山を開始した。

厳しい下降の続きとなり、主稜線からはアプザイレンの連続で下った。前日ビバークした岩棚のツエルト設営地点に到着し、再度この地点でビバークした。翌日、原と中村に迎えられてキャンプに帰った。登山後、国立公園監視事務所を訪問し、登頂の報告といろいろ便宜を図ってくれたお礼を述べ、頂上の遺留品について説明し、それを日本に持ち帰る許可を得た。

遺留品の記録をなんとか判読した。1958年7月、カナダ隊が第3登で、同年8月に英国隊が第4登であった。そのことから、長野高校隊は第5登であることが判った。

アメリカ山岳会博物館への訪問

この山岳会博物館には1960年、元日本山岳会副会長・吉沢一郎が訪問して、そこでアルバータ峰のピッケルを見ている。また、1962年には同じく元日本山岳会副



1965 年、長野高校山岳班 OB 隊の一行。左から田島、原、中村、渡邉、下平

会長・織内信彦が同博物館を訪れている。その年の日本山岳会会報「山」365号に、ピッケルのことが記載されている。吉沢も織内もピッケルの姿については報告していない。

私がアメリカ山岳会博物館を訪問したのは、長野高校山岳班OB隊が、アルバータ峰の第5登を果たした翌年であった。1966年3月、ヨーロッパ視察旅行の帰路ニューヨークに立ち寄った。そのときJALに勤務していた松方三郎の長男・松方峰雄の案内で同博物館を訪問した。

登山用具の展示場に、天井から吊り下がっていた1本のピッケルがあった。それが「MTHのピッケル」であったことに驚いた。そのピッケルは哀れにも木のシャフトが折れ、石突きの部分を失っていた。どうして折れているのか、と疑問を持って博物館を去った。

第2登頂者F・アイレスと会う

ニューヨークからの帰途、岳父・三田幸夫の計らいで札幌市と姉妹都市であるオレゴン州・ポートランド市に立ち寄り、F・アイレスの招待を受けた。彼はアルバータの第2登頂者の一人であり、そのときリード大学の化学の教授であった。

私は彼の家に弟とともに泊まり、お世話になった。私は早速、折れたピッケルをニューヨークの山岳会博物館で見てきたことを話した。彼は、アルバータの山頂で岩に凍りついたピッケルを抜くとき、石突き部分が折れてしまったこと、その折れたピッケルは、下山時に大いに役立ったことを話てくれた。

「石突きの部分は、現在も頂上のケルンの中に埋もれていることと思う。いつか君がアルバータ峰に登り、探し出すように」とのアイレスの言葉があった。

私はアイレスの案内でマウント・フッドの山麓を散策した。さらに世界一大きい丸太山小屋・ティンバーロッジを見学した。私はそのお礼に、1958年のチョゴリザ登山のスライドを上映した。アイレス夫妻の「日本のすき焼き料理を食べたい」という要望にも応えた。お別れのとき、アイレス夫人から三田幸夫へのお土産として、焼いたパウンドケーキをもらい帰国した。

1975年、アルバータ峰登頂50周年

この年、日本山岳会ではアルバータ峰登頂50周年記念祝賀会が開催された。この会には初登頂者の槇隊長、早川、三田（当時75歳）ほか山岳会会員と、1954年にアルバー

タ峰を目指した川口市山岳連盟の池田、長野隊の面々が出席してお祝いをした。このときも「MTHのピッケル」が折れていたことは、全く話題にならなかった。すなわち両隊のメンバーは、頂上のピッケルが抜き取るとき折れたことを知らなかったのである。

三田幸夫は、アメリカ隊の第2登の次がカナダ隊であったこと、第4登は英国隊で、長野隊は第5登であったことをアルバムのメモに書き残している。

1975年は国際婦人年で、妻・淳子（三田幸夫の娘）は、研修のためニューヨークとワシントンへ行く途中にカナダを訪問した。バスの車窓からカナディアン・ロッキーの山々を見上げていたとき、父の登ったアルバータ峰のことを思い出した。案内役のカナダ政府の女性に父の話をすると、彼女は運転手に言ってバンフの図書館の前にバスを停車させた。図書館に入ってみると、アルバータ峰登頂50周年記念の展示会が開催されていた。

槇隊長はじめ当時の若い隊員とともに父の写真が飾ってあった。初登頂に使用したシルクのロープや登山道具が展示されているのを見て驚き、感動した。同行の研修仲間とカナダ婦人グループの人たちはこのハプニングに大喜びし、祝福してくれた。カナダ山岳会は、1925年のアルバータ峰初登頂を称賛し、日本とカナダの友好を深めるため登頂50周年記念行事として開催していたのであった。

1996年、学習院隊による登頂

私は妻とともに1996年8月の学習院アルバータ峰登山隊に参加した。ベースキャンプから眺めるアルバータ峰は、威容を誇る岩壁と氷河に覆われた山で、その姿に圧倒された。71年前にこの岩壁を登攀した、勇気ある先輩に敬意を表した。

登頂隊の棚橋と2人のカナダ人ガイドはスコップを持って、頂上の石突きを見つけてくると出発した。私たちは、岩壁をゆっくり登る様子を双眼鏡で眺めていた。彼らは22時間のアルバイトののち登頂し、帰還した。この年は雪が多く、頂上のケルン近くを掘り起したが、石突きは見つけることができなかった。

棚橋は「71年前に当時、ロッキー山脈の中で最も困難な岩峰の一つと言われたアルバータ峰に挑み、見事初登頂を成し遂げた日本人がいたことを思うと、僕はなんだか誇らしい気持ちになった。」と登頂後の感想を述べた。

下山の途中、カナダ人ガイドから新しい事実を聞かされた。ニューヨークの山岳会博物館に48年間展示されていた

「ＭＴＨのピッケル」が、この春、カナダ山岳会の強い要請で１９２５年、アルバータ峰を目指して出発したジャスパーの町に戻った。現在、ピッケルはジャスパー・イエローヘッド博物館に展示されている、とのことであった。

ピッケルの安住の地、ジャスパー・イエローヘッド博物館

私たちは早速、学習院登山隊とともにジャスパー・イエローヘッド博物館を訪問した。

私は30年ぶりにニューヨークから戻ってきたばかりの「ＭＴＨのピッケル」に再会した。博物館の一角がアルバータ峰の展示コーナーになっていた。ピッケルは特別なガラスのケースに収められていた。当時の隊員や登攀中の写真、登山道具、アメリカ隊が頂上でピッケルを見つけたときの写真、さらに「伝説の銀のピッケル」の説明文がパネルで展示されていた。

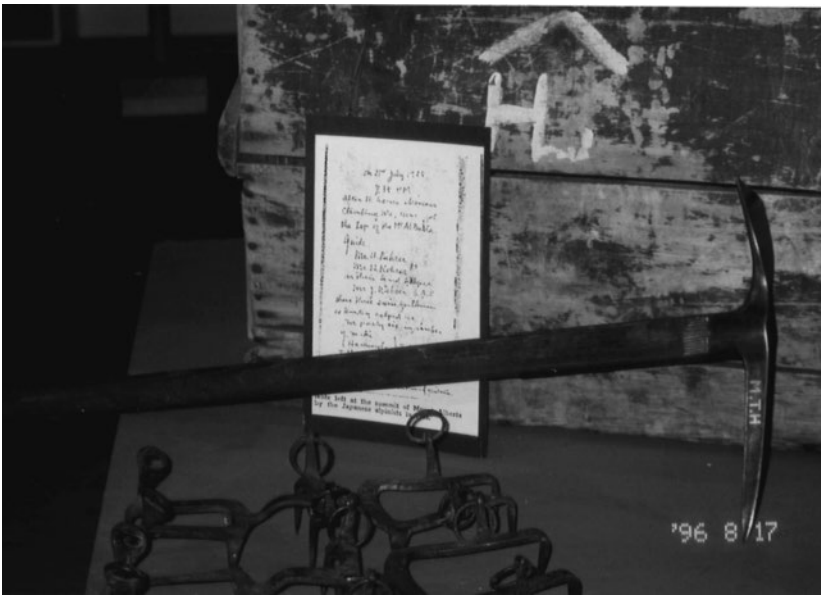
これを見て、私はこの博物館がピッケルの安住の地であると思った。

博物館からこのアルバータ峰のコーナーをさらに拡大し、展示内容を充実したいという計画を聞いた。私は博物館長から「初登頂に関する資料を探して欲しい」と依頼された。帰国後、三田幸夫の書斎でアルバータ峰に関する写真アルバム、資料ファイルを探し出した。アルバムの中に封筒があり、その中を見ると長野隊の写真があった。その写真の中に、折れた石突き部分が遺留品とともに写っている頂上での写真を見つけた。拡大してみると、１９２０年代のピッケルのようであった。

私は、いまだに山頂にピッケルの石突きが眠っているのか、長野隊かその後の登頂隊の誰かが持ち帰っているのか想像してみた。そこで１９９７年3月号の会報「山」に、アルバータ峰のピッケルを一本の元の姿にしたいという願望を込めて、下記のように寄稿した。

「ＭＴＨのピッケルはスイスに産まれ、熱いインド洋を経てはるばる日本にやってきた。その後日本の登山隊と共に北太平洋を渡りカナダに到着し、１９２５年からアルバータ峰の頂上に立てられた。23年間厳しい自然の頂で風雪に耐えていた。

１９４８年から48年間は、ニューヨークの山岳会博物館で石突き部分を欠いた姿で天井から吊り下げられた状態で展示された。１９９６年ようやくアルバータ峰への登山基地・ジャスパーに帰った。そこで元の姿のピッケルにしてジャスパーイエローヘッド博物館に展示したい。」



1996 年、ジャスパー・イエローヘッド博物館で再会した MTH のピッケル

1965 年、長野高校山岳班 OB 隊が持ち帰ったピッケルの石突き

長野高校山岳班ＯＢ隊からの知らせ

「山」に私の記事が掲載されてから1ヶ月ほど経過したある日、長野高校山岳班ＯＢ会長・原健一（１９６５年、アルバータ峰登山隊員）から「ピッケルの石突きは長野隊が持ち帰って、長野にあります」との電話があった。

原会長の話によると、１９６５年の長野隊が見つけたとき以来、ピッケルの石突き部分はアメリカ隊の物と思っていた。しかし、会報「山」の記事を読んで当時の隊員と話し合いをした結果、これは間違いなく１９２５年の日本隊初登頂時のピッケルと確信したという。この年は雪が非常に少なく、頂上の遺留品は雪の中から掘り出すというのではなく、地面に出ていたのを拾った、ということであった。

私は、石突きをすぐに見せて欲しい旨のお願いをした。

長野隊が、石突き部分はアメリカ隊のものと思って持ち帰ったことは当然と思える。アメリカ隊がアルバータ峰の山頂から「ＭＴＨのピッケル」を持ち帰ったという新聞報道は、戦後の一大ニュースとなった。しかし、日本山岳会およびアルバータ峰登山隊員にも、ピッケルが折れていたことは伝えられなかったのである。

私がニューヨークの山岳会博物館で折れたピッケルを見たこと、第2登頂者・アイレスから聞いた話をしたとき、三田幸夫は初めてピッケルが折れていることを知った。

テーブル上の主賓は「折れた石突き」

１９９７年5月31日、日本山岳会のルームでささやかなアルバータ峰のピッケルの会合が開かれた。主賓はテーブルの上に置かれたピッケルの先、石突き部分である。その日、長野高校山岳班ＯＢ会長・原健一と登頂者の渡邉一によって長野から運ばれてきたのである。

アルバータ峰登山に縁のある者が取り囲み、ためつすがめつ眺めては手に取って感慨を新たにした。前もって写真では確認していたが、実際に見ると、あのジャスパー・イエローヘッド博物館のピッケルと、折れた角度がぴったり一致するのではないかと確信を深めた。

折れたピッケルの2つの部分をいつ、どこで、どのように出会わせ、一本の姿にしてやれるか考えた。土曜日の午後、私たちの語らいは楽しく、尽きることなく続いた。

原、渡邉の2人の話によると、この石突き部分を見つけたのは、登頂した下平和範であった。彼は2年後、金沢大学山岳部のリーダーになったが、１９６７年3月、惜しくも大天井岳で滑落し、亡くなった。葬儀のとき、折れた石突きをお棺に入れようと探したが、見つからなかった。今

回の記事を読んで再度探したところ、前ＯＢ会長の倉庫に保管されていたのを見つけた。なんと運の強いピッケルであることか。

この会の出席者は以下のとおりである。長野隊からは原、渡邉、日本山岳会からは織内、伊藤、熊崎夫妻、慶応登高会からは河野、山田、西沢、学習院山桜会からは石川、贄田、高野、藤大路、藤井、永田、芳賀夫妻とカナダ山岳会の益田の計18名であった。

ピッケルに寄せる思いはその後、次のように広がっていった。

２０００年のアルバータ登頂75周年記念を、カナダ・日本の両山岳会合同で、ジャスパーで開催する計画が検討された。

長野高校山岳班では2年後の１９９９年、同校の創立１００周年記念を迎えるので、その祝賀会の際、「アルバータ峰登山とそのピッケルについて」のイベントを計画したい旨の意見があった。7月に入ってから、カナダの山岳ガイド・益田からの手紙を受け取ったカナダ山岳会は大変驚き、早急に広報委員会が開かれ、今後の対応が検討された。

益田は、長野隊の作製した石突き部分のレプリカを持ってカナダに向かった。カナダ山岳会副会長・サンドフォードと同行してジャスパー・イエローヘッド博物館へ行き、ピッケルの本体と石突き部分との結合を試みた。ピッケルが合体した、との連絡があった。

１９９７年、日本山岳会年次晩餐会

日本山岳会は、海外連絡委員会から次のような計画をカナダ山岳会へ伝えた。

「本年度の日本山岳会年次晩餐会に、ジャスパー・イエローヘッド博物館にあるアルバータ峰のピッケルをお借りして、日本に持ってきていただきたい。長野からは石突き部分を持ってきていただき、晩餐会の席上でピッケルの合体セレモニーを行ないたい」と提案した。早速カナダ山岳会から、この計画に積極的に参加したい旨の返事があった。

12月6日の晩餐会に、カナダ山岳会会長マイク・モーティマー夫妻、副会長のボブ・サンドフォードとジャスパー・イエローヘッド博物館館長ロリー・アン・バーリンの4名が出席した。館長はピッケルを宝物のように大事に持って来た。長野高校山岳班ＯＢ会長・原健一は、喜びの顔で石突き部分を持ってきた。

晩餐会にご出席された皇太子殿下をはじめ７６５名の会員と、特別ゲストの槇有恒のご子息、三田幸夫夫人が見守

るなかで、ピッケルは49年ぶりに見事に合体した。会場は喜びの拍手にあふれ、祝いの盃が交された。

折れたピッケルのアッシュ材シャフトの木目と木目とが、細かい部分まで見事に一つになった。私がニューヨークの山岳会博物館で折れたピッケルに会ってから、31年の月日が経っていた。

1999年7月10日、長野高校創立100周年記念

私は名門・長野高校創立100周年記念委員会から「アルバータ峰のピッケルについて」の講演を依頼された。日本、スイス、アメリカ、カナダの山仲間の友情から、夢のようなピッケル物語が誕生した経緯を講演した。

講演後、長野高校山岳班OB隊から日本山岳会会長・大塚博美へ、ピッケルの石突き部分を贈呈する式典が行なわれた。その後、カナダ山岳会会長モーティマーが持参したピッケル本体との合体式が、カナダ流に楽しく、賑やかに執り行なわれた。

この記念式典には、1965年のアルバータ峰・長野高校山岳班OB隊全員が出席した。故下平隊員の代理として兄が出席していた。

ジャスパー・イエローヘッド博物館に、ピッケルとともに長野高校の名前が末永く記され、展示されることになった。隊員はもちろんのこと、長野高校関係者全員が誇りと喜びに満ちていた。

8月には長野高校山岳班およびOB会は、長野高校校歌に「山また山の　はるかにそびゆる白馬の　雪の峯」と歌われている白馬岳登山をした。山頂で100周年を祝い、カナダ・アルバータ峰に向かってエールを送った。

記念式後、2000年の日本とカナダ両山岳会の開催するアルバータ峰登頂75周年記念行事が成功することを祈願した。両山岳会は合同で、1925年のルートであるアサバスカ河を遡り、槇ルートでアルバータ峰を登り、頂上で再びピッケルの合体イベントを行なうことが、両国山岳会会長によって合意書が作成され、署名された。日本山岳会と慶応、学習院、長野高校などの山岳部OB、そしてカナダ山岳会とのアルバータ峰登頂75周年記念の計画が始まった。

2000年、アルバータ峰登頂75周年記念

2000年8月19日14時、ジャスパー・アクティビティ・センターでアルバータ峰登頂75周年記念式典が開催された。

壇上にはカナダ国立公園長官、カナダ山岳会会長・モーティマー、日本山岳会会長・大塚博美、長野高校山岳班OB会会長・原健一が立った。ジャスパー・イエローヘッド博物館から紹介された女性は、行事の主旨とアルバータ峰のピッケル・ストーリーを説明した。日本山岳会から80名の会員とカナダ山岳会会員、地元ジャスパーの人々百五十余名の前で、ピッケルの合体式が賑やかに行なわれた。

19時には式典に続いて75年前、日本アルバータ登山隊が出発したジャスパー・パークロッジで盛大な祝賀会が開かれた。カナダからはアルバータ州知事、カナダ環境庁長官、国立公園会長ほか多くのカナダ山岳会会員、日本山岳会会員および地元ジャスパー市民も大勢参加した。その中には、当時の馬方やコックなどの子供と孫たち三世代も出席していた。私たちの子供と孫も出席していたので、75年の歳月を経てお互いの家族との再会を喜び合った。

アルバータ州知事のお祝いの挨拶の中で「75年前は、未知未開であったこの領域のアルバータ峰を目指してやって来た槇隊長率いる日本登山隊の、勇気ある行動に賛辞と敬意を表する」との言葉が印象的であった。カナダ政府はアルバータ登頂75周年の記念コインを作成した。地元ジャスパーの大通りの街灯には登頂記念の旗が飾られ、町を挙げての大歓迎であった。

カナダ山岳会はモーティマー会長はじめ多くの会員が、日本から参加した山岳会員へロッキー登山の準備とお世話をしてくれた。カナダ山岳会の山小屋泊まりで4つの楽しい登山コースを企画し、案内してくれた。

各コースで、山小屋での食事と山の案内のお世話になった。そこでロッキーでの自然保護運動に関すること、特に森林と川に対する汚染対策について多くを学んだ。山小屋で食器洗いは熱湯を使い、洗剤は極力使用しないこと、使用後の水は濾過装置を付けた排水路へ流すこと、川での石鹸の使用禁止、歯磨き後の水は川に流さないことが登山者のマナーであると知った。

今回、日本とカナダの優秀な会員で構成された日本山岳会・カナダ山岳会のアルバータ峰合同登山隊は、天候悪化で成功しなかった。しかし、合同登山隊は無名峰を登り、記念としてその山を「トモダチ」と命名し、日本とカナダの絆を深めた。

伝説のアルバータ峰のピッケルは一本の姿になり、安住の地ジャスパー・イエローヘッド博物館のスマートなガラスケースに収まった。その両側には詳しいピッケル物語の説明文、隊員の写真、シルクのロープやアイゼン、寝袋、

2000年、アルバータ峰登頂75周年を記念して編成された日本山岳会・カナダ山岳会合同登山隊

テントなど、当時の登山道具と資料が展示された。

ようやく私の目的は終了した。

あとがき

私はアルバータ峰のピッケルとの出会いで、アメリカ、カナダ、スイス、英国、そして多くの日本山岳会会員との交流の場を持つことができた。半世紀にわたる国際的な素晴らしい巡り合わせは、私の人生を豊かにしてくれた。「MTHのピッケル」に感謝している。

アルバータ峰は、毎年1パーティか2パーティが槇ルートで登攀していると報告されている。アルバータ峰登攀の困難さは、昔も今も変わらずそこにある。これからもアルバータ峰を目指してもらいたい。この山を通して、日本とカナダとの交流を続けてもらいたいと願っている。

〈文中の敬称は略させていただきました〉

【参考資料】

槇　有恒著『わたしの山旅』（岩波書店）
三田幸夫著『山なみはるかに』（白水社）
三田幸夫著『わが登高行』（茗溪堂）
日本山岳会『山岳』第29年1号・3号（1934年）
日本山岳会『山岳』第93年（1998年）

日本山岳会会報「山」622号（1997年3月）
サンドフォード著『この山に呼ばれて』（カナダ山岳会）
『岳人』1967年6月号
『岳人』1996年12月号

アルバータ峰登山と「MTHのピッケル」に関する年譜

1924年　12月暮れ、赤倉での秩父宮様とのスキー行の帰路、細川侯がパーマー、ソリントンの著書からアルバータ峰の写真を槇に見せて、登山を薦める。

1925年　7月21日19：30、槇、橋本、早川、三田、岡部、波多野の6名とスイス人のフーレル、コーレル、ウエバーがアルバータ峰初登頂。細川侯から託されたスイス製MTHイニシャル入りピッケルを山頂に立てる。

1948年　7月30日、アメリカ隊アイレスとオバーリンが第2登に成功。山頂のピッケルと槇の登山メモを持ち帰った。ニューヨークのアメリカ山岳会博物館に展示。

1957年　11月、槇は英国山岳会100周年記念祝賀会で、カナダ山岳会会長ソリントンとアメリカ山岳会会長オバーリンに会い、アルバータ峰初登頂の祝福を受ける。

1958年　7月、カナダ隊が第3登に成功。8月、イギリス隊が第4登に成功。

1965年　7月29日、長野高校山岳班OB隊の田島、渡辺、下平が第5登に成功。山頂の登頂記録が入った缶とピッケルの石突き部分を持ち帰る。

1966年　3月、松方峰雄の案内で芳賀がニューヨークにあるアメリカ山岳会博物館を訪問、「MTHのピッケル」が折れていることを知る。帰途、ポートランドで第2登頂者のアイレスと会い、石突き部分が山頂に残っていることを聞く。

1967年　3月、石突き部分を持ち帰った長野隊の下平が大天井岳で滑落死。

1975年　国際婦人年、芳賀淳子はカナダ・アメリカ研修旅行中、バンフ図書館を訪問、そこでアルバータ峰登頂50周年の記念展示会に遭遇。東京ではJACで槇・早川・三田と長野高校OB隊などで登頂50年記念祝賀会を開催。

1996年　8月、学習院アルバータ登山隊の棚橋とカナダ人ガイド2名が登頂に成功。山頂で石突き部分を発見できず。この3月、アルバータの「MHTのピッケル」がニューヨークからジャスパーに帰ったことを聞き、ジャスパー・イエローヘッド博物館を訪問、芳賀は30年ぶりにピッケルに再会。

1997年　三田幸夫のアルバムから長野隊の写真が出てきて、その中に古い石突き部分を持った人物の写真があった。芳賀はJAC会報3月号で、折れたピッケルを一本の姿にしたい旨を記載。5月、JACルームにて石突き部分について会合。12月、カナダ山岳会会長がピッケルを持参し、JAC年次晩餐会で合体式を挙行。

1999年　7月、長野高校創立100周年記念行事として、カナダからの本体と長野高校の石突き部分との合体のセレモニーを行ない、芳賀は記念講演をする。

2000年　8月、カナダ山岳会と日本山岳会の共催でアルバータ峰登頂75周年記念イベントを開催。日本山岳会会員80名が参加し、盛大な記念式典、ピッケの合体式が行なわれ、伝説のピッケルは、ジャスパー・イエローヘッド博物館に永久に展示されることになった。登頂75周年記念誌『この山に呼ばれて』を発刊。日本・カナダの精鋭登山隊はこの年、残念ながらアルバータ峰の登頂はならなかった。

東ジャワの山　アルゴプーロ山

児玉　茂

90年前と変わらないジャワの山

今から90年ほど前の、大正期の古い『山岳』第15年3号と17年1号の本欄には「爪哇メラバブ登山記」と「南国の山」が載り、雑録欄にも「爪哇登山の感想」が載っている。筆者はジャワ滞在6年の武田信氏で、大正9年「思わぬ成行から住所不定の風来坊となって、結局暇の出来たのを幸いに、且つ爪哇の勝手もどうやら少し判明した故、此機会を利用して豫て狙った山を二つ三つ征服しやうと決心」したとある。文面から察すると、ジャワの高峰を西から東まででできるだけ登ろうと企て、ジャワの山の情報を集めていたようである。しかし、いざ登ろうとすると「第一の手頼りとなる地図がないのだから詮方がない」。50万分の1地図は販売されているが「度々バタヴィアの知人に懇願しても、遂に手に入らなんだ始末である」とあり、そうとなれば直接目当ての山の麓まで行き、道々土地の人に情報を聞き継ぎ、案内者を探し当てて登り始めることになる。その案内者というのも経験は乏しいようで、散々迷ったあげくに頂上に続く道を見つけて、山頂に達したというものである。

興味深いことに、同様の話は１９９０年代のジャワ登山にもほぼそのまま当てはまる。ジャカルタに駐在中の若松林治氏はジャワで登山を始めたころの様子を、「まったく知識も資料もないまま、道路地図のみを頼りに、登山道探しのため休日毎に車で山麓をうろうろし、山道を見つける

と次の週には〝ジャングルに入る探険家気分〟で、日本から持参した防虫スプレーをぬたくってマラリヤ蚊等にそなえ、虎や蛇や蛭、はては首狩族の心配までして、ターザン映画を連想しながらおそるオソル入山したのであった。」と『インドネシアの山登り』（１９９７年）の中に記している。ジャワの山の詳しい登山情報は、その土地の人以外にはほとんど知られていないということであり、その一方、登山道はしっかり付けられていて、良く登られてもいるということである。

武田氏は90年も前に西ジャワのパンランゴ山とグデ山、中部ジャワのムラピ山とムルバブ山、東ジャワのアルジュナ山とウェリラン山という３０００ｍクラスの山々に登頂している。若松氏は3年間の滞在中にジャワの３０００ｍ峰全12山に登ったほかに、バンドゥン周辺の山々の登山を楽しんでいる。ジャワでの生活に慣れ、情報の得方さえ分かれば、ジャワの山の多くは考えるているよりも登りやすい。

武田氏はまた次のようにも書いている。「南国の高山は、奇怪的神秘的の想像をさえ逞しうせしめて、好奇的惝怳の的となり得ると共に、自然美を賛仰し山岳を愛好する程の人に取っては、これを熱国美の殿堂たるべしと仰ぎ眺めて、思慕憧憬の思を寄せるも無理ならぬ程の美しさを其中に秘めてゐるのである。爪哇に遊むで此殿堂に上らなければ、未だ以て南国の自然を語り美を談ずべき資格はないと余は思ふ。」そして、「然るに過去に於て此美の殿堂は、爪哇に遊むだ総ての日本人から殆ど顧みられずして過ぎ来った。在留の邦人は生活の戦闘に寧日なしと云ひ得やう。商用又は事業の視察に渡来したる人々の如きは、為すべき仕事に追はれるものと察せらるゝ。」とあり、この点でも90年前と現在とでほとんど変わるところがないように思える。

３０００ｍ峰が集中している中部ジャワ

ジャワ島の山々を中部ジャワ、西ジャワ、東ジャワの3地域に分けて、大まかに特徴を記すと以下のようである。登山の対象となる山はすべて火山であり、それだけでも充分に興味深い対象となるが、そのなかでも３０００ｍを超えた登りでのある高い山が登山意欲を満たしてくれる。その一方で、現在のジャワ島に残る森林はほとんどが山の斜面だけにしかないことから、森林、すなわち山地多雨林の多く残る山こそがより興味深いということである。３０００ｍの山であっても、森林の失われた山は展望が良いだけで風趣が乏しい（地図１）。

先進地域としてジャワ文明を創り上げた中部ジャワには３０００ｍ峰が集中しているが、早くから山麓の開拓が進んで、すでに自然林がほとんど失われている。２０１０年のムラピ山の大噴火が示すように火山噴火もしばしば起こり、山麓の住民に被害が及ぶと同時に、植生にも大きな影響を及ぼす。２０００ｍ以上で見られる植生は火山活動や乾燥による野火の影響を受けて改変されており、ツツジ科スノキ属の *Vaccinium valingiaefolium* などの単調な灌木林が中心であり、それ以下はマメ科の樹木（大部分がオーストラリア原産のアカシア類）が燃料として植林されている場合が多い。そのような中部ジャワの山の中で、標高３４００ｍとひときわ高く大きいスラメット山の周囲だけには多雨林が広く残されていて、登山ルートもその森の中を通っている。この山の東側の多雨林で、私は鈴なりに密集して実るマテバシイ属のドングリ各種をたくさん拾った。このスラメット山も２０１４年８月から中規模の噴火が続いており、森林を抜けた火口周辺には近づけなくなっている。

中部ジャワの山に比べ、西ジャワの山は標高の高い山はごく少なく、侵食が進んで山脈状に連なり、個々の山自体が小さい。バンドゥンの南にある山地は谷が複雑に入り組

地図１　山岳の分布と残存する多雨林

み、近付きにくい斜面には比較的良い森林が残されているが、断片的なものも多い。ジャカルタからほど近い３０００ｍ峰のパンランゴとその隣のグデ山は国立公園になっており、西面を除きオランダ時代からその多雨林が保護されてきた。その西にあるハリムン山周辺は登山的には興味が乏しいが、尾根筋には見事な多雨林が残されている。ただし、ここも周囲はすでに大きく開発が進んでいる。西ジャワでは最も東に位置する孤峰チェルマイの山麓にも多雨林が見られる。この山は２００４年に良好な自然が見直され、スラメット山やディエン高原続きの森林と西ジャワの森林との連絡回廊としての可能性が期待されて、ジャワで９番目の国立公園に格上げされた。

東ジャワはジャワ島の中で最も開発が遅かったこともあって、山麓部にまとまった森林が見られる。なかでもブロモ・スメルー、アルゴプーロ・ヤン、ラウン・イジェンの３つの山塊はいずれも広大な広がりを持ち、多様な地形が見られ、どこから登るにしても日数を要する、登り甲斐のある山である。この３つはそれぞれタイプの異なる火山で、あえてそれぞれを日本の火山に当てはめてみると、ブロモ・スメルー火山は浅間火山群のように一列に連なる火山群である。北端は巨大な複合カルデラ景観で知られるブ

ロモ山、南端にそびえるスメルー山が浅間山に相当しようが、３６７６ｍの円頂丘は常に噴煙を上げ続けている。その東のアルゴプーロ火山の裾野の広がりも巨大である。乗鞍火山群のような複合した火山体で、山頂部には平坦面（ヤン高原）が広がり、小ピークが幾つも並び立っている。北面と南面は侵食が進んでいるが、頂上は複数の旧火口と小さい円頂丘からなっており、そのうちの１つに弱い噴気活動がある。東端に位置するラウン火山は、阿蘇の大カルデラにも匹敵する旧期の巨大なイジェン火山のカルデラの縁に噴出した新期火山の一つであり、その中にはカワーイジェンと呼ばれる草津白根山に良く似た火口湖もある。ラウン山が最も大きくて標高も高い火山で、頂上に大きく荒々しい火口を持っており、複数の中央火口丘は盛んに噴気を続けている。断面形は御嶽山によく似た台形型をしている。

ジャワでエクスペディシを試みる

２０１１年３月、私はあるきっかけから18年ぶりにジャワへ山登りに出かけることになった。二十数年来のジャワの友人ココ（Koko、本名Joko Glemboh Puriadi）と登山対象などのやり取りを通して新しい考え方が浮かんできた。すなわち、ジャワ登山においても登山の新しい展開があっても良いのではないか、ということである。私も何度か経験したが、スマトラやスラウェシの未開地域での登山の多くは、それ自体がエクスペディション（インドネシアの表現ではExpedisi）であり、日数が掛かり、ガイドやポーターも必要とする本格的な登山になる。それに対しジャワでの登山は、登山道もはっきり付けられており、特に一般向けの山の場合は、登山というよりも身軽に行けるハイキングと言えるほどである。ジャワの山全体を改めて見直してみると、山の大きさ、森林の存在、多様な火山地形の複合、登山者の数やルートの少なさなど、東ジャワにある３つの大火山がその可能性を残している最後の山であることが分かる。そこで今回は、アルゴプーロ山とラウン山の両山に新ルートを作りながら登る、すなわちジャワでエクスペディシを試みようということになった。

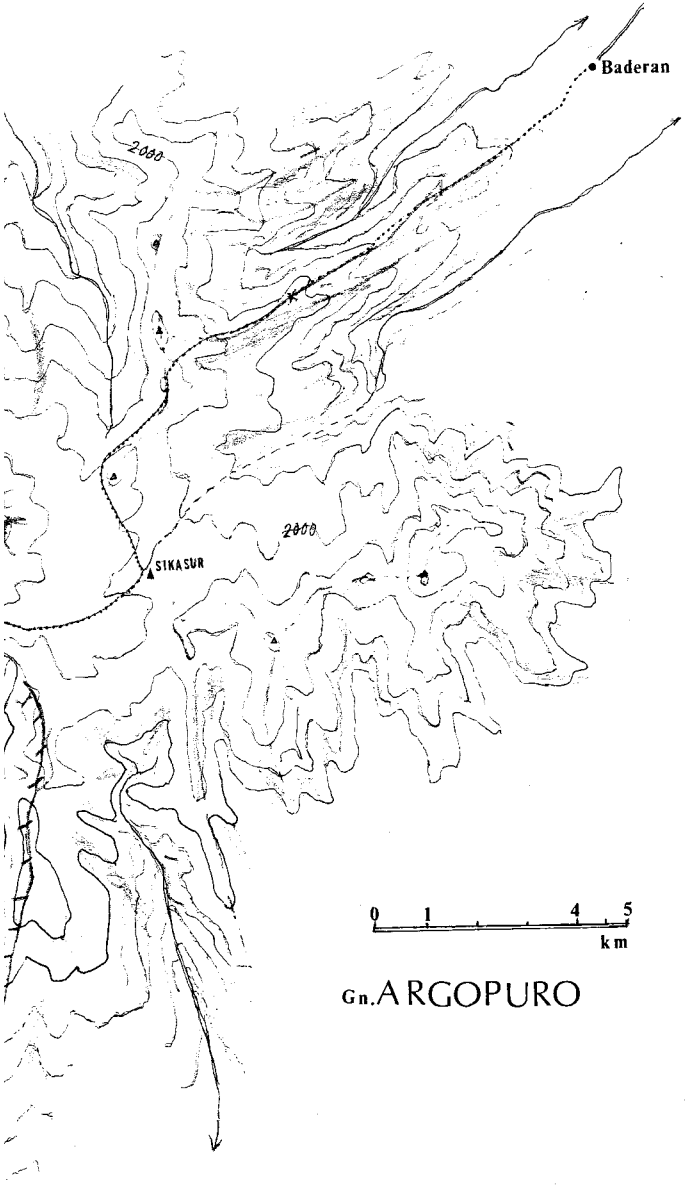
この両山は二十数年前、武田、若松両氏と同じように私も山麓部で時間を費やしてしまい、時間が足りなくなって頂上を踏むことを諦めざるを得なかった山である。それから二十数年間のうちに登る人の数は多くなり、情報も簡単に得られるようになった。当時は山に登る人はごく限られ、情報は何もないに等しかったので、ジャワの山を紹介

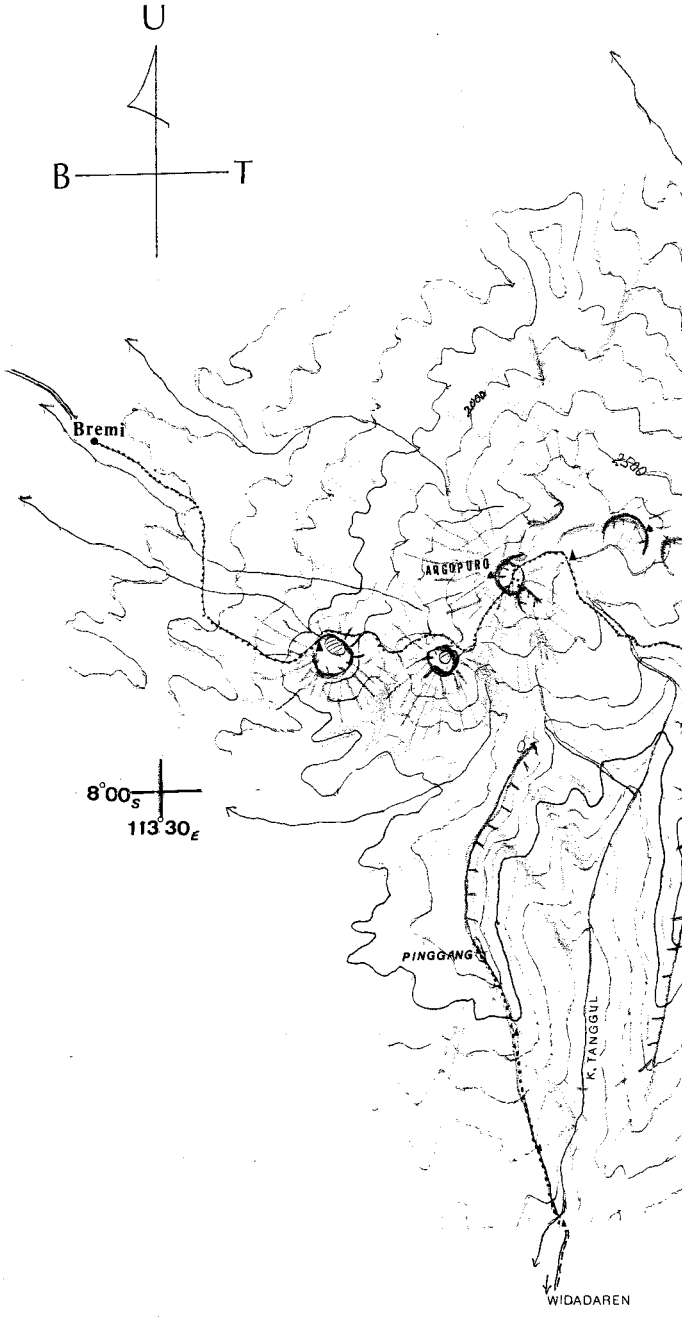
しようと私とココはインドネシア語の「登山ガイドブック」(Mari Mendaki Gunung di Jawa〈1990年〉)を作ることを思いついた。その結果としてジャワでの登山は少しは普及したかもしれない。これらを踏まえて今回再び登りに行くのだとすれば、ジャワ登山の段階をもう一段引き上げたものにすること、新ルートの開拓で新たな面白さを創り出すということでなければならない。

もう一つ二十数年前の登山と大きく異なることがある。それはテクノロジーの進歩とそれによる登山方法の変化である。まずGoogle earthであるが、居ながらにして空中散歩と地形の映像的確認が可能となり、森林についても位置だけでなく植生のタイプ、密度、場合によっては樹種さえも特定ができそうである。アルゴプーロ山をGoogle earthで見てみると、南側と西側山麓に大きな森林が残っていることが分かる。そして、南側に2本直線状に細く長い尾根が延びている。左側の尾根は頂上に近い辺りまでたどることができそうだ。画像からは、この2本の尾根それ自体が馬蹄形の巨大な火口壁の稜の部分をなしていることが見て取れる。現在のアルゴプーロ山の山頂部の南側に、より古い円錐形の大きな火山の痕跡が地形としてはっきり残っている。この2本の尾根のどちらかを登って頂上に達せられれば、アルゴプーロ山の新ルート開拓として十分興味深い。

ラウン山については、西側を除いて周囲に人工的なものが全く見当たらない、広大な森林が原始の空間として続いていることが見て取れる。3300mの山頂部では火口壁が切り立っていて、そこまでたどり着けるルートは限られており、現在は北西側に登り口があり、北の端の火口壁の一角に立つことができるが、最も標高の高い地点には行き着けない。火口壁をなす稜が険し過ぎ、危険なためである。そこで考えられるルートとしては、南側から広大な森林を真っ直ぐに突き抜けて、火口壁の最高点を目指すというものである。あるいは北東側、すなわち旧期のイジェン大カルデラ側から森林に覆われた涸れ谷をたどって頂上に突き上げるルートも興味深そうである。

このようなわけで、アルゴプーロ山とラウン山の新ルートからの登山の計画ができ上がったが、なにしろ全体の日程が2週間と限られているので、今回はどちらか一方の山を諦めざるを得ないことになった。そればかりか、一つの山に費やせる時間は長くても5日という条件の中で考えねばならない。エクスペディシの可能性をジャワの山で見つけることはできたが、それを実現するとなると、ほかの目的を犠牲にしなければならなくなるという矛盾に突き当


Baderan
2000
2000
STKASUR
0 1 4 5
km
Gn.ARGOPURO


U
B
T
Bremi
2000
2500
ARGOPURO
8°00S
113°30E
PINGGANG
K. TANGGUL
WIDADAREN

たってしまった（地図2）。

ボンドウォソ通りに面して登山用具を扱う間口の広い店があり、そこに私たちのジープは横付けした。店の名はCARTENZといい、イリアンジャヤ（現在はパプアと呼び名が変っている）の最高峰から名をとっているらしい。扉を開けたばかりの様子だが、店の前にはバイクが並んでいて、すでに仲間が集まっていることを示していた。ココが頼んでくれていたのはガイドとポーターを務めてくれる人であったが、集まっていたのは全員がジュンブル大学の同じ登山クラブ（MAHAPENA　ジュンブル大学経済学部山岳部）に属する学生であった。経験のある上級生2人がガイド、下級生2人がポーター役を引き受けてくれるようだ。私が持参したGoogle earthの印刷画像でルートの説明をすると、彼らもやおら地図を取り出して広げ、説明を始めた。その地図はフォトコピーではあったが、2万5000分の1のバコスルタナール（BAKOSURTANAL日本の国土地理院にあたる役所）発行の地形図であった。

私が日本で考えたアルゴプーロ山への新ルート、南側に延びる直線状の長い尾根は、すでに彼ら自身が昨年（2010年）夏に踏破しており、地図上にはGPSを利用した細かいルートが赤く記入され、全行程の断面図まで作成していた。2本ある尾根のうち直接頂上付近に繋がる西側の尾根を最初に登ったのは、バンドゥンの最古の登山クラブWANADRIの連中で、3年前のことだという。続いて彼ら自身が登っている。東側の尾根の方は、地元の利を生かしてMAHAPENAが一昨年初めて登ったそうだ。

この説明を聞いて、私は二十数年の時代の流れをより明確に感じた。登山の進展に伴う必然的な方向である。若い彼らは当然ながらパソコンを使いこなし、最新のテクノロジーと情報をすでに手にしていたのである。バコスルタナールの地形図も、ごく最近になってコピーしたものが購入できるようになった。この地図は登山者の間では存在を知られていたが、禁断の地図として部外者は手にすることが許されなかったものだ（オリジナル地図は発行部数が少ないため、依然として入手は困難である）。

そうと分かれば、後はどちらの尾根を登るかの選択だけが残されている。頂上までの日程は、同じ尾根を登って下るとしても往復で7～8日を必要とするという。私の見立てはもっと甘いもので、西側の尾根ならば5日で往復できると考えていた。Google earthでは急な尾根を登り切ると後は尾根は緩やかになり、展望の良い快適な稜線歩きをす

るだけで、半日もかからずに通過できるだろうと思えたからだ。後の日程もあり、なんとか往復5日でジュンブルへ戻ることができないかと考えていた。5日間と7日間とでは、食糧の量にも大きな違いが出る。東側の尾根は幅が途中から広がり、かなり登った辺りにも緩い斜面がある。この部分には水の得られる谷があるという。しかし、頂上までの距離はさらに遠くなり、その分時間もかかる。西側の尾根の方は水場は全くないので運び上げねばならず、頂上までの一方的な登りがあるのみである。

アルゴプーロ山の南側の尾根ルートについては、彼らの話から以上のようなおおよそのことが分かったので、ラウン山についても確認してみた。なんとMAHAPENAはラウン山の最高地点に直接登るルートも試みており、こちらも昨年（２０１０年）５月に登ったそうである。途中の森林の中のナビゲーションが難しいそうだが、往復６日間で登れたという。帰国後に彼らからこのときのラウン登山の様子を写した写真を電送してもらった。

私にはとても感慨深い話し合いであった。山好きならば、山を見て同じようなことを考えるものなのだということを改めて思った。今回選んだルートは、アルゴプーロ山の南に延びる尾根のうち直接頂上に向かう西側の尾根で、5日をかけて頂上往復を試みるというものである。学生たちのやる気や実力も分かり、私も久しぶりの登山への意欲が湧いてきた。

果てしなき熱帯雨林と豪雨との格闘

アルゴプーロ山の南麓一帯はオランダ時代に開発された広大な茶園が広がり、現在もジュンブル県県営の大規模農園として多くの労働者を包含している。畑地が点在し、バナナが植わりマスジッドがあり学校がある普通の村のように見えるが、これらは労働者の居住区である。現在は茶よりもコーヒーとカカオの栽培面積が広く、コーヒーは急斜面を切り開き標高１０００ｍ付近まで栽培されている。

ジープはコーヒー栽培地の限界近くの仕事道の尽きる所まで登り、ここで荷を降ろしテントを張った。標高７００ｍ、眼下には幅十数ｍとなったタングル川が望める。この川は東西の大尾根の間を流れ出てくる。盛り上がった２本のそれぞれの尾根は深い森林に覆われ、上部は霧に包まれている。目の前には急な尾根の末端があり、斜面全体にコーヒーの樹が植えられている。この場所からは陰になって見えないが、この尾根を掻き登って稜線に出て、コーヒー樹の尽きた所から森林に入るらしい。

昨晩の雨は長くは降らず、川の水も今は濁っていない。密に植えられたコーヒーの樹と樹の間に付けられた仕事道をたどり、汗をかきつつ一番上の出作小屋まで2時間ひたすら登った。人影は全くなく、ヤケイ（Gallus varius）の良く通る声だけが聞こえた。森林に入るともう踏み跡もなく、いきなりパラン（山刀）で枝を払いながら進まねばならない。尾根は極端に細く、幹を抱きながら体重を移して上の斜面の下枝を掴み、灌木を押し込んで登らねばならず、このまま登って行けるのか心配になる。靴の中も濡れてきて、小さなヒルが入り込んでいるが気にしてはいられない。先頭を元気の良いアナン君が切り開きを作りながら前進し、私とココが続いて道を広げ、学生リーダーのアフィフ君がポーター役の2人の下級生との間に立って調整をしている。

尾根の両側斜面は森林が覆っているが、尾根上の樹林密度もかなり高い。ただし、大木は多くはなく地衣類や様々なタイプの着生シダをそれぞれに付着させている。１３００m付近ではシロダモに似たクスノキ科の樹木が多いように見える。低層はシダやヤシ類と葉の厚い多年草が占め、落ち葉の堆積は厚くない。中層は葉を密生させた灌木、トゲのある長い葉のパンダナスが行く手を阻む。日が当たっている間は2種以上のセミが良く鳴いているが、翳ると急に鳴き止む。

尾根は次第に太くなり、ときどき足を揃えられる傾斜に変ってきたが、依然として腕力を必要とする登山であり、正面に壁のように生い茂った灌木のどの部分から中に突っ込むか悩ましい。明るい光が尾根に届いて視界が開けるが、傾斜が強まり、巨大なパンダナスが尾根上一杯に立ち塞がった。見上げるような30mはあろうかという巨木で、空中から何本も気根が下りており、ひと抱えもある気根の束の間をすり抜けたり潜ったりせねばならない。海岸ばかりか山にもパンダナスはけっこう多く、急な岩の露出地や崩壊斜面などによく現れるが、これほど巨大なものは今まで見たことがない。

午後になると霧がときどき湧き出して、さらに上部はすっかり雲の中に入ってしまっている。昨日も上部は低い雲に隠れて姿を現さなかったが、麓ではすでに雨は降らなくなっているので、そろそろ雨季が明けるころだと期待している。日が当たったり曇ったりの繰り返しの後、とうとう雨が降り出し、次第に雨脚が強くなった。初めのうちは高層木の所で雨が受け止められ、ほとんど濡れることがなかったが、激しさを増した雨は雨具を通して一瞬の間に濡

巨大なパンダナスに行く手を阻まれる（2011年3月22日）

れ鼠になった。さらに雷も鳴り出して、痛いほどの雨脚に身の危険を感じるほどになった。トップが道を切り開いている間は動けずに待っているが、雨に打たれるままなすすべを知らずの態である。再び岩場が出てきてパンダナスの厄介な登りとなる。パンダナスの太い幹の下側に空間を見つけ体を押し付けて雨を避けようとしたが、首筋からも雨が通り、背中のザックの中も濡れてしまった。後続の3人は今はどこを登っているのだろうか、なかなか追い付いてこないので心配になる。

少し上に傾斜しているがテントを張れそうなスペースがあり、まずフライシートを手早く張って雨の当たらない空間を作った。冷えて寒くなり、手がかじかんでいる。全身がぶるぶると震えるのが分かる。テントを張り終えたころ、後続の3人が登ってきたが、彼らは雨具も着けず全身濡れ鼠になりながらも元気が良い。私とは違って激しい雨には慣れており、ザックの中身さえ濡らさなければ問題ないことを知っているのだ。雨脚はさらに強さを増した後、次第に雷鳴が遠ざかり霧が薄くなって雨は止んだ。15時から16時40分までの間に、いったいどのくらいの量が降ったっただろうか。日本でならば被害を免れない、局地的集中豪雨と看做されたことだろう。

19時40分の気温15・7度、標高１６８７m、雲が消えて快晴になってきた。街の明りが見える。紐に吊るした濡れ物からは止めどなく水が落ちている。明朝、それらを身に着けるのかと思うと憂鬱になる。ごく近くの樹上で奇妙な鳴き声が響き出した。数ヶ所から同じ声が聞こえる。これはカエル（Tree frogs）たちの鳴く声である。

翌朝はすばらしい快晴で、5時を過ぎたころから鳥たちが鳴き出した。7時前、セミが賑やかに鳴き出した。8時25分に出発。尾根を巻いて木の根を頼りに再び尾根に戻る。太くてまっすぐな大木はアガティスである。細かいツゲのような葉を持つ灌木、羽状の葉を持つ高木もある。トウも出てきて、ときどき袖を引っ張る。標高１８００mを超えて、尾根が再び細くなった。マツのような葉（ではない）を持つチェマラ（被子植物・モクマオウ科 *Casuarina junghuhniana*）が出てきた。細い尾根上の、ほかの樹木が生えない所にチェマラは生える。そして、チェマラに特有の下草（Trebulanという現地名）がセットとして生える。この密集した下草を刈り開きながら進むのはパンダナス地帯を進む以上に時間を食い、アナン君が奮闘するが遅々として進まない。ここをようやく抜けると明るい一年草の見られる平坦な尾根道となり、しばらくは快調に進んだ。

その先からまたチェマラが現れ、Trebulanの難渋が待っていた。茎の直径は太いものだと10㎝もあり、幸いトゲはないが成長が早く、刈っても刈ってもすぐに密集状態に戻ってしまうらしい。尾根の西側に出ると、そこに生えているのはカシの仲間であった。この高さになってようやくブナ科の樹木が出てきた。コケも付着して雲霧林の様相である。２０００mを超えた辺りで斜面にササが生えていた。ここまで３００mを登るのに4時間もかかってしまった。ここで初めて尾根は下りとなり、岩が重なった平地が現れた。ここは前回キャンプ地として使われた所だという。急な登りは終わったようだが、この先にはずっとチェマラがあり、Trebulanの難儀が続くらしい。

雨が降り出したのは14時過ぎで、早めに雨具を着けたが、雨脚はそれよりも早く激しくなった。雷がすぐ近くで鳴って首をすくめた。雨は私たちに一切の容赦をせず、試練を与えているかのようだ。ここでまたTrebulanが現れた。ここはチェマラもごくまばらで、雨を遮る何物もない。15時40分、ピンガン山（２２８１m）に到着。太いチェマラの下に草地が少しあり、テントを張るならここしかなさそうだ。テントを張り終えたころに雨は小降りになったが、今日も後続の3人は30分以上遅れて、濡れ鼠になって登っ

ピンガン山よりアルゴプーロ山頂部を望む（2011 年 3 月 24 日）

てきた。展望は少しだけ開けてきて対岸の尾根が見えるが、ルートの上部を見通すことはできない。このピークから先は平坦になるはずで、アルゴプーロの山頂部に続いてゆくはずだ。Google earth 上では難場を越えたことになるが、実際にはここから先もずっと Trebulan の生い茂る尾根であり、頂上の往復に3日はかかることが理解できた。ピンガン山に達しただけとはなんとも情けない結果だが、日程をこれ以上延ばすことができない。

翌朝も快晴。紐に吊るした濡れ物が日射しを受けて湯気を上げている。ウグイスに似た鳥が近づいてきた。10時20分下山開始。谷からは霧がときどき上がってくる。コケの多い山地多雨林をスピードを上げて下る。登りには気付かなかった、地上性のエンジ色のランを見つけた。12時過ぎ、だいぶ下りてきて暑さを感ずるようになった。セミがよく鳴いている。今日こそは雨の降り出す前にテントを張ろうと決めていたが、早くも13時過ぎに雨が降り始めた。激しい降り方で、昨日、一昨日の雨を上回り、しかも長く降り続いた。もしもこの雨をもっと上部で受けていたならば、かなりのダメージを蒙っていただろうと思う。2時間後、雨音は遠のき始めたがまだ薄暗い。夕方と間違えてセミ（夕方ゼミ）がけたたましく鳴き始めた。だが、しばらくす

るとまた雨になった。今度の雨は経験のないものすごい降り方で、テントが雨に共鳴して唸っている。強烈な積乱雲の中に入ってしまったのだろうか。いったん止んで、また断続的な雨に変わり、20時過ぎにやっと止んだ。外に出てみると、驚くことに葉も林床も良く乾いている。降った雨はたちどころに流れ去ってしまうらしい。気温は19・2度と暖かい。街の明りが輝き、テントの中で寝るのがもったいないよう夜の森であった。

ヤン高原からアルゴプーロ山登頂

ジャワ島東端の北側海岸部はジャワで最も乾燥する地方で、10月の終わりはまだ乾季の最中であり、山の斜面の木々はすっかり葉を落とし、冬枯れたようになっていた。一方で沿海部には喬木のマングローブが良く育ち、緑濃い森がどこまでも続いている。ブスキの街から山に向かい、アルゴプーロ山の北東麓のバデランに到着したのは日が沈む18時過ぎで、保護区の管理事務所があり、登山者用の宿泊施設があった。アルゴプーロ山の登頂だけを目的にするには遠過ぎるが、5日をかけて山上に広がる平坦地「ヤン高原」を経由し山頂を目指すことになった。２０１４年10月、私とパートナーのアリック、彼の後輩２人も加わった。アリックはかつてこのルートの一部を踏破したことがある。

バデランは標高７８０ｍの谷間に位置し、周囲に狭い耕作地が張り付くように広がっている。東も西もヤン高原から下りてくる長大な尾根に取り囲まれている。まずはこの尾根に取り付いて、その稜線に抜け出さねばならない。村の乗り合いモーターバイク（オジェック）で尾根上まで上がれるというので、大きなザックを積んで一人一人がバイクにまたがった。展望は開けて対岸の尾根の直下の荒々しい崩壊斜面と、その赤茶けた斜面を伝う細い大きな滝が見えた。谷の奥には森林が見える。アルゴプーロ火山の北東側に流れた膨大な噴出物は、削られて何本もの細い尾根を造った。麓の村々は源頭部のU字型に崩壊した急峻な斜面に囲まれ、その堆積物の上に載っているのが見て取れる。ひとたび崩壊が起れば甚大な被害に見舞われる危険な場所だ。急峻な細道を約1時間、振り落とされそうなスリルを味わいながら１８００ｍまで一気に登った。

村人は尾根の上にも上がってきて小さな焼畑耕作地を作っているが、標高１８００ｍ以上は鳥獣保護区（Suaka Margasatwa）の範囲に入り、伐採や採集はもちろん耕作も許されない。しかし、明瞭な一本の道が村人の活発な山への出入りを物語っている。特に乾季はモーターバイクを

走らせるために、火山灰土が巻き上げられて粉塵のようになり、それが十数cmも積って一歩ごとに舞い上がり、全身埃だらけになる。雨はおそらく半年以上降っていないのだろう。

尾根の下部から見えた森林は山地多雨林の残存林で、30mを超すコケむした大木もあったが、林冠部が密閉した森林ではない。そこを抜けると明るいチェマラ林に変った。灰緑色のマツ葉のように見えるのは細かい枝先なのだが、樹形はちょうどカラマツのような感じで、下層も乾いた灌木や陽性シダの混じる草本に置き換わった。チェマラ林を縫う埃だらけの道をたどって細い尾根を登り切ると山上部の緩斜面になり、チェマラ林分の中の所々に草丈の低い草地が現れ始めた。標高は２０００mを超えており、ヤン高原の一角に登り着いたらしい。ここから３０００mのアルゴプーロの山頂部までは、緩やかな登り下りが続くだけである。このように山上に緩傾斜面や平原ができているのは、西側の山頂部から溶岩が緩やかに流れ下り、さらに火山灰が厚く覆ったからであろう。ヤン高原をGoogle earthで確認すると小さな草地空間が多数あり、広大な草地も数ヶ所広がっているのが分かる。中央部の最大の草地と北西部のそれに次ぐ草地には名も付けられている。

このアルゴプーロ山には特異な歴史がある。オランダ時代にはこの山は個人の借用地であった。山上の広い草原はシカ（*Cervus timorensis*）たちの楽園になっていたからである。１８４０年代にこの山を訪れたF・ユングフーンの記述によれば、シカの数はおよそ数万頭と記録されている。この山が個人の所有物となったのもこのシカの数の多さの故で、シカ猟の猟場として確保され管理された。借用主は大農園主で熱狂的な狩猟家でもあるレデブル兄弟で、プロボリンゴ側とブスキ側から登る道を整備し、山上の平坦な草地を利用してロッジを建て、さらに簡易飛行場を造成した。狩猟場としてのヤン高原には多くの客が招待されたようで、日本の占領時代には高級将校が訪れたといわれている。

乾季の現在は〝緑の草原〟ではなく〝冬枯れの草原〟のように白茶けているが、モザイク状に点在する草地には２つのタイプがあるようである。一つはほぼ平坦なもの、もう一つは傾斜したもので、チガヤ属の草本の種類はどこも似ていて、多くは株状に生えている。成因としては、小火口群や噴気孔群の活動が終わった跡地に形成されたのではないかと考えた。特異な植物しか育たない土壌条件があり、耐火性のある草本類の種数も多くはなさそうだ。灌木

はあるがこちらも種類が少ない。木本化したキク科の *Anaphalis spp.* は、チェマラの下草となって生えていた。

もう一方の主役であるチェマラが山上一帯を広く覆い尽くしているのは、何に因るのだろうか。生えているチェマラの大部分の表皮には黒く炭化した焦げ跡がある。たび重なる噴火による降灰や火災によって元の植生が絶えて、二次林のパイオニアとして生育していると考えられようが、むしろこの山の主要な火山活動が終わってからの時間がまだ短く、火山灰から土壌が形成されるまでの充分な時間に達せず、よって森林を形成する樹種の定着まで至っていないとも考えられる。人工改変による森林の焼き払いをすべての原因とする説もあるが、開けた草地とチェマラ林分とのモザイク状の組み合わせは、安定しているように見える。かつて見られたシカの大群は今はいないが、草原の状態は維持され、大きく遷移する現場は見られない。

一気に広がる大きな草原に出た。ここがアランアランクチル（小草地）と呼ばれる草原らしい。荷を置いて休んでいると、上空に数羽の猛禽の飛翔が見られた。ときどきかなり低空までも下りてきたので双眼鏡で確認すると、全身暗褐色をしたジャワクマタカ（*Spizaetus bartelsi*）らしい。草地で動くネズミなどを探しているのであろう。途中のチェマラ林では何度も黒いルトゥン（*Trachypithecus auratus*）を見ているし、イノシシが草の根を掘り返した跡もたくさんあり、乾いた道には獣の足跡も少なからず印されていた。しかし、かつてあれだけたくさんいたシカは、今では密猟の結果姿が見られない。山の静寂の中に大きな声を響かせて鳴くのはクジャク（*Pavo muticus*）で、わがもの顔で人を恐れず、チェマラの太い枝の上で鳴いていた。チェマラ林の奥からはヤケイの鳴き声もする。

アランアランクチルからは草地が次々に現れるようになる。道は歩きやすい草地と草地をを繋ぎながら付けられているようだ。一面に黒く焼け焦げた野火の跡が広がる草原もあった。延焼は何によって止まるのであろうか。一つの低い尾根を越えると緩く傾斜した細長い草原となった。そこを下ってゆくと緑色に縁取られた小さな流れが見えた。灌木の密に生えた斜面の下から泉となって流れ出し、およそ２００ｍばかりの川になっている。地表水など全くない、乾いて白茶けた平原の中に突然現れたオアシスであるが、流れは叢林の中に再び潜って見えなくなる。透明な清い流れにはクレソン（*Nasturtium*）などの瑞々しい浮葉植物が一面に生えており、驚くことにカラー（*Zantedeschia*）の白い花が数株あった。カラーもクレソンも明らかに外来

アランアランブサールへの草原の道（2014 年 10 月 27 日）

種であり、人間が持ち込んだものである。この泉はシカスールと名付けられていて、「シ」は水、「カスール」はマットレスの意味だという。

この小さな流れを越えた先が、ヤン高原で最も広い草原アランアランブサール（大草原）である。この草原の広さは１km×１・５kmほどもありそうで、しかも平坦である。先ほど考えたこの高原の草地の成因をただちにこの大草原に当てはめられるのかどうか、いささか自信がなくなった。見渡す限りの大草原であり、確かにここならば小型飛行機の離着陸も可能かもしれない。この草原の北の端にあたる位置に、かつてのロッジ跡を示す高さが１・５ｍほどの土台が残っていた。草原に面する土台の延長は40ｍ、幅は８ｍあって、６つの仕切りがあり、テラスの張り出しもあるかなり立派な建物だったようである。現在はこの土台石の東端の一角にトタン葺きの三角屋根を被せてあり、ここまでやって来た登山者や村人のキャンプ地になっている。屋根は錆びて穴が開き大きく空が見えるが、私たちもここでキャンプした。標高は２２３０ｍ。

食事を終えシュラフに潜り込んでしばらくすると、積み重ねたままにしておいた食器や食料袋のあたりでゴソゴソと音がする。何かが来たらしい。それも複数いるらしい。

ライトを照らすと確かに獣がいる。大きさはイタチくらいで、茶褐色、顔に模様があり白い帯が頭部から背中に延び、尾の端も白い。シュラフから這い出してしっかり確認したところ親子らしい2頭がいて、小型のアナグマのようでもある。写真を撮り、後で確認したところフェレットバジャー（*Melogale orientalis*、文字どおりイタチアナグマという和名）であった。完全な夜行性で、ジャワ種は西部のみに分布するとされていた。今回の発見は、分布域が東部のアルゴプーロ山まで広がることを証明したことになる。

翌朝は良く冷えて地表温度は0・4度まで下がり、草原は一面白く霜に覆われた。登り始めは草地とチェマラ林のモザイクを繰り返したが、次第に草地が見られなくなり、次々に小山が出てきてそれを一つ一つ乗り越えてゆかねばならない。道々小さな鳥たちの気配は結構感じられるが、種を特定するまでには至らない。傾斜も出てきて藪っぽい急なチェマラ林の登りがどこまでも続くようになると、やがて今まで見られなかった岩石が点在する斜面や、分水界の南側の斜面に入って巻きぎみに進み、赤茶けた溶岩の露出した崖下を通ってゆく。この辺りからはヤン高原を抜け出し、アルゴプーロ山本体の登りとなるようだ。標高差にして300mほど登った所で下り道となり、谷が現れた。少々濁った幅2mほどの流れを渡る。ここにもクレソンが見られ、岸にはトクサが生えていた。小さな甲虫がたくさん泳いでいる。

対岸の小さな段丘には羽目が壊れた小屋があり、ここで昼食をとった。ここはチセントールと呼ばれる地点で、この流れに由来する名であるらしい。地図から判断すると、櫛形に抜け落ちた溶岩の崖が続く辺りからチセントールは流れ出ていて、やがて深い谷を穿って南に流れ去る。この流れこそは、2011年に登った2本の大きな尾根の間を流れる川の源流であろうと思われる。また、チセントールは西からの登り口ブレミからアルゴプーロ山頂を目指す道が合流する地点でもある。

谷を隔てたチェマラの疎林にルトゥンの家族3頭がいて、1本の倒木の上を何度も巡りながらその場を去る様子がない。ルトゥンはジャワの多雨林には珍しくないが、2500mの高さで見かけたことは一度もなかった。主に葉を食べるサルだが、この付近にはチェマラしかなく餌にはならない。おそらく斜面を下れば餌となる広葉樹があるのだろう。この高さになって初めて姿を現したのは、アイランドスラッシュ（*Turdus poliocephalus*）と呼ばれるツグミである。インドネシア各地の高い山の山頂近くでは決まっ

て見かける人見知りをしない鳥で、体は地味なグレー、腹部がオレンジで嘴が黄色い。地域ごとに体色変化が大きく、この山の鳥は色が薄い。

道はチセントールの谷の右岸に沿って登るが、やがてそこから離れて、焼け焦げ跡の全くない樹齢の揃った下草の少ないチェマラ林を登ってゆく。なんの音もなく、とても静かで眺めも美しい。天気は曇りがちになり霧も流れる。大きなイノシシが斜面を登ってゆく姿が見えた。さらに、あまり地面に下りないルトゥンの十数頭の群れが四つんばいで走り去るのも見た。訪れる人が少ないこの山は、なかなかに獣の密度が濃い。再び谷が現れて、わずかな溝のようになった流れのかたわらに小さい草地があり、ここを今日のキャンプ地とした。ラワエンビックという地点である。「ラワ」は湿地、水場、「エンベック」はヤギあるいはその鳴き声の意味であるが、何か謂われありげな名である。標高２７５０ｍ。17時過ぎの気温は７・４度、チェマラの枯れ枝を集めて焚火をする。火力も強く良く燃える。空には三日月と満天の星。

山上に残る「最高所の宮殿」遺跡

翌朝５：20の気温はマイナス０・１度を示した。草には真っ白く霜が下りている。この地点はすでにアルゴプーロ山の頂上部に近く、ほんの１時間も登ると頂上を形造る２つの小山が見え出した。３０８８ｍのピークがアルゴプーロの頂上で、全山がチェマラで覆われたなんの変哲もない山である。一方の２９４７ｍのピークは頂上部が白い岩に覆われ、まだ噴気活動がある山でウェリラン（硫黄の意味）、またはレンガニスと呼ばれる。測量地図の最高点にアルゴプーロという全体名が冠せられただけで、アルゴプーロ山の本来の意義はレンガニス山の方にあるらしい。

私がアルゴプーロ山に登ろうとしたのは、ジャワ島で最も高い場所にある遺跡が頂上に残されているからで、それを確認するのが目的であった。遺跡の存在は古くから知られているのに、それがこの山のどこに、どのように残されているのかを具体的に示したものがない。今回は簡単な測量用具を持ってきて、位置と大きさを図化したいと思っていた。

ジャワ島の中部から東部にかけて、ジャワ・ヒンドゥー時代の世界遺産を含む多数の遺跡群は良く知られているが、信仰の対象であった山の上にも寺院や墓所などが建てられた。スラバヤの南にあるプナングンガン山は聖山として崇められ、山中の至る所に遺跡化したヒンドゥー系建造

物が存在する。最高峰スメルー山の北に連なるブロモ山には、現在もヒンドゥー教を信仰するトゥングル人の村々があり、祭儀がしばしば行なわれ、観光的にも有名である。アルゴプーロ山はブロモ・スメルー火山のすぐ東にあり、同じく信仰の山であったことが山上の遺跡から分かる。

１９８１年にＦＡＯによる何度目かのインドネシアの国立公園化のプロジェクトが施行され、その一つとして「ヤン高原」が調査されて報告書が出ている。この中に頂上の遺跡に触れた次のような記載がある。

「遺構は４箇所に分かれていて、もっとも上部のものは山頂にあり、小さな建造物は２、３の方形の部屋に分かれている。山頂の下には別のより大きな部屋に分かれた建物が２つあり、さらにその下にも大きな正方の遺構がある。壁の厚みは50センチ程あり、高さは１メートル以内である。飲料水を供給するための小さな石造の井戸が２つ水路の辺りにある。方形に石積みされ隅に平滑な石を立てた墓所と思われる遺構も頂上の周囲にいくつか見られる。

レデブル兄弟は数体の石像彫刻を山頂近くの岩の下から見つけているが、さらに複数の石像が山頂部には散在していたようである。現在は例えば巨大な仏像がブレミのゲストハウス近くに置かれている如くに、その多くが元の位置から移されており、多くが盗まれてしまった。ユングフーンがドゥルガー女神とみなした石像は、１９７９年までは確かに残っていたが、今はもう見当たらない。」

アルゴプーロ山頂域は前記のように２つの小山に囲まれた、園地のような明るい火口原である。右手にアルゴプーロ山頂があり、周囲を囲むように少し低いピークが連なり、ともにチェマラ林に覆われている。左手には緩やかな道がはっきり付いていて、レンガニス山頂に登れるらしい。中央は平坦な、広々とした草原が奥（南）に向かって広がっている。

疎らなチェマラ林をレンガニス山の方にしばらく登ると、硫黄臭がする。足元は白く変色した火山岩が荒々しく散乱して様子が一変する。正面にはいかにも脆そうな頂上岩壁が現れて、噴気活動中の火山の様相を呈する。このような条件の所に遺跡群があるというのは全く予想外であった。山頂の北東側は、硫気作用で広い面積にわたり岩石が白化した崩壊斜面になっている。歩くたびにガサガサと崩れるような風化した岩質である。現在の硫気孔は１ヶ所だけだが、かつては斜面全体から噴気があったのだろう。山頂の南側には南東に開いた巨大な火口跡があって、半円形に大きく抜け落ちている。直径は３００ｍくらい、深さは

レンガニス山頂北東斜面の遺構（2014 年 10 月 29 日）

２００m以上ある。この山頂の特徴はさらにもう一つあって、チェマラに代って今までどこにも生えていなかった植物が見られることである。高さが２mもある *Vaccinium* などの常緑灌木が密植し、そこにマキのような針葉樹（*Podocarpus spp.*）も混ざった特異な植生である。

さて、ヒンドゥーの遺構であるが、山頂下の斜面にあるものは狭い段ごとに複数作られているが、連続的ではっきりとグループ分けはできない。石積みはどこも片側２辺しか残っていない。高さは１m以下で不ぞろいの部分が多い。大きさはいずれも10m四方で、二重構造になっている。何かの建物の土台というよりも、建造物を囲んでいた石囲いのようにも見える。積まれた石は運び上げたものではなく現地のもので、ほかに人工的加工物はない（火口原の南側にも別の構造物があるが、時間が足りず訪れることができなかった）。

山頂部で最も目立つ遺構は硫気活動の盛んであった北東斜面にあるもので、そこへ下ってゆく手前にも石積みは中途半端に幾つもあるが、囲いや段を作るために積み上げたもののようだ。かなり広い「賽の河原」のような平坦地（硫気孔原）には最大の遺構が残っているが、その後に手を加えたか、誰かがいたずらに積み重ねた石積みも含まれてい

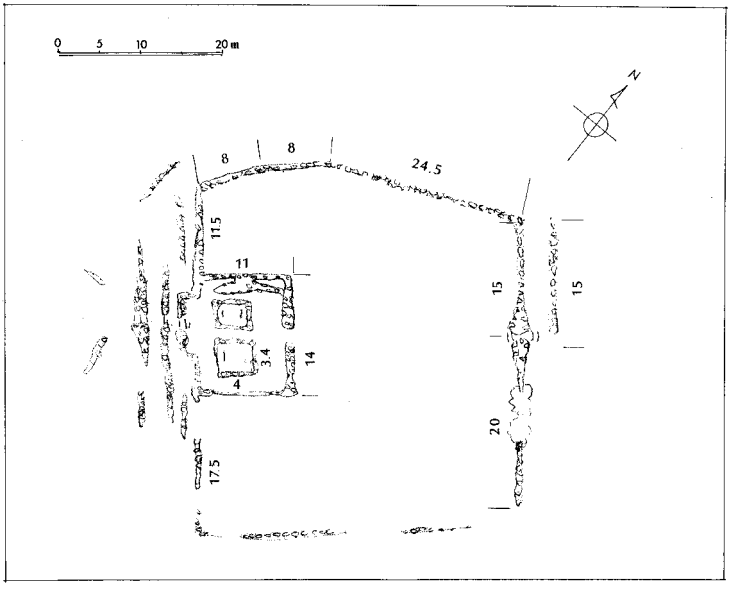


図3　アルゴプーロ山北東斜面の遺構

そうである。外周は少しゆがんだ形の30m×40mの石囲いで、中央にこの囲いを二分する低い石積みがある。上から見て左側に石積みに囲われた2つの4m×3mの大きさの墓らしきものが並んでいて、それぞれに2つずつ平たくて細長い石が立ててある。

石囲いの下側に回ってみると、白灰色の頂上岩壁を背景にして、墓の上の緩い斜面に崩れかかっているが石積みの構造物があるのが見える。測量図（図3）に示したように、囲いの下側には入り口があり、2つの墓の間を通り凸型の囲いにも入り口があり、そして階段が付けられている。その上の構造物は、神を祭る祭壇状に段になっているように見えてきた。プナングンガン山にあるヒンドゥー遺跡の多くがこのような祭壇状の遺構であることから、この山にも同様のチャンディー（祭儀所）が作られたものと考えられる。

アルゴプーロという山名は「最高所の宮殿」という意味であると言われている。地元の言い伝えでは、この遺構群をマジャパヒット最後の王プラウィジャヤが寵愛した姫、デウィ・レンガニスの宮殿跡だとされていて、墓もあるとしている。しかし、噴気活動域という条件から考えて、少なくとも山頂部は皇女が生活できるような環境ではなく、

信仰篤い人々の祈りの場所であっただろうと思われる。ユングフーンもこの遺構を調査して、火山活動の活発化によって放棄され、破壊が進んだものだと考えた。山麓からはるか遠い３０００ｍの山上に建てられたチャンディーは長らく忘れられたようであるが、ヤン高原の地形条件と特異な植生を考えると、ヒンドゥー時代にも多くの人（デウィ・レンガニスも含めて）がこの山に出入りしていた可能性は否定できない。

頂上で長く時間を使い過ぎ、火口原に戻ったのは15時を過ぎていた。次に水の得られるキャンプ地はタマンヒドゥップと呼ばれる火口湖のほとりであるが、かなりの距離があるので日没（18時）前には到着できそうにない。火口原を奥（南）へ進むと、左手に浅い盆状の火口跡があり、気持ちの良さそうな草地になっている。直径は１００ｍ以内だろうか。その先は一気に落ち込んでおり、三角錐状の山頂部の縁辺にあたる。道というよりも踏み跡が２０００年代になってこの急な斜面に付けられた。従来の登山道は登ってきた道を引き返し、チセントールにあった小屋から山頂部を巻くように下ってゆくのだが、距離も長く時間がかかる。新しいルートは、山頂部の縁から斜面を一気に５００ｍ下ってしまう。このルートを登りに採るとしたら、相当に難儀な登りとなろう。

山頂直下の南斜面は特殊気候条件下にあるのだろうか、この部分には針葉樹ポドガルプスの大木が疎林状に林立していた。急斜面で上部は岩場になっているとしても、この急激な違いには驚かざるを得ない。それに続いてしばらくは常緑樹の森になっているが、間もなくチェマラ林に代った。どこまで下ってもチェマラ林は続き、今度はそのチェマラ林が焼け爛れている。山火事が消えたばかりの状態だが、これがまた延々と続いた。乾ききり、灰だらけ炭だらけの殺伐たる光景である。

標高２５００ｍ辺りまで下った所で、浅い谷が現れた。乾季の今は乾ききって全く水がないが、ここから山体を巻き登ってチセントールの小屋に行ける分岐点である。この谷を越えると、正面に見える台形の山（円錐形の火山体で山頂に火口がある）の裾を巻いて進む。この部分も同様に焼け爛れたチェマラ林であるが、アリックによれば、以前通ったときには焼け跡ではなかったそうだ。延々と続くチェマラ林の焼け跡が終わった所で、再び驚嘆させられる。ここから先は山地多雨林に突然変わるのである。一体どちらが本当の姿なのだろうか？　チェマラ林は山火事の後に成立したのか、それともチェマラ林の故に山火事になった

のか。なぜ突然、山地多雨林に変わるのか。山地多雨林は山火事にならないのか？　チェマラ林以前は多雨林であったのか？　なんとも不可思議である。

この山地多雨林がまたなんともすばらしい大木、巨木の森なのである。ジャワの森の中でもトップクラスの豊かさを持ち、しかも面積が大きい。標高差にして３００～３５０ｍ、歩行時間にして４～５時間は連続する森である。先の台形火山とほぼ同様の規模の台形火山が連続して西側に並ぶ。この火山の火口湖がタマンヒドゥップ（「秘密の園」の意味）である。タマンヒドゥップはまだ多雨林中にあり、さらに低所までこの森は連続する。湖は長径５００ｍくらいの大きさで、景観は美しく、キャンプはできるが水はきれいとは言えない。

幸運なことに、私はこの森でもう一つの発見をした。それはジャワテナガザル（*Hylobates moloch*）の分布域の拡大である。テナガザルの仲間のうち最も絶滅が危惧されているジャワテナガザルの分布東限は、中部ジャワのディエン高原北側の多雨林とされていた。今回のアルゴプーロ登山の直前に、私はその東限とされる森でジャワテナガザルの観察をしてきた。朝と夕方に鳴き交わされる、その特徴ある鳴き声はまだ耳に残っていた。タマンヒドゥップを取り囲む森で、間違えようもない彼らの鳴き交わす声を聞くことができたのである。次回はぜひその姿を見るために登りたい。

立山信仰を具現化した江戸時代の布橋灌頂会

――女性「癒しの儀式」として現代的復元――

五十嶋　一晃

はじめに

立山にかかわる江戸文化が、平成によみがえった。立山連峰は、北から毛勝三山・剱岳・雄山・薬師岳などが、黒部峡谷に足元を洗われながら立ち並んでいる。そこは登山の対象として、あるいは雄大な景観のなかで散策を楽しむ観光の対象として大変にぎわっている。１９７１（昭和46）年には立山黒部アルペンルートが開通し、歩くことなく雲上の山々を間近に観賞できる時代である。

しかし、江戸末期までの立山は、信仰の山として崇められていた。江戸時代の立山信仰を具体的に現した女人救済儀式「布橋灌頂会（ぬのばしかんじょうえ）」は、平成に入って現代的に復元した。復元の中心となった地元、立山山麓・芦峅寺（あしくらじ）（寺名が集落名となった。当リポートでは集落名を一般的な呼び名である「芦峅」とする場合がある）の人々の、行事を通して立山の「こころ」を少しでも多くの人に知って欲しい、足を運んで欲しいと願う熱意が実を結び、現在、布橋灌頂会を3年に1度、定期開催している。ただし、その「こころ」は江戸時代の「女人救済」から、現代は「女性の癒し」へと変わっている。

昔日の日本人は、立山をどのように捉えていたのであろうか。登山の文化面である山岳宗教を追うことで江戸時代の立山を想い描き、永遠に輝く「立山のこころ」に浸ってみた上で、現代人が自分自身を見直してみる儀式を調べてみたいと考えた。関係する文献・資料および取材を基に、

筆者の目線でまとめてみたが、山岳宗教に興味のある方はもちろん、広く女性の皆さんに関心を持っていただければ幸いである。

なお文中、人物の敬称は省略する。

1　江戸時代に成立した「布橋灌頂会」

日本三霊山の一つ、越中國「立山」は、平安後期から江戸後期までのおよそ700～800年に及ぶ長い間、山中に地獄と極楽浄土を併せ持つ〝あの世（死後の世界）〟の山として、全国の人々からその特異性に注目され、崇められてきた。そこで、まず江戸時代の布橋灌頂会から解きほぐし、現代へと進める。

立山信仰の特徴

立山は地獄・極楽を有していることが大きな特徴であったが、それは火山活動によって所々に不気味な火山ガスの噴煙を吹き出し続けている地獄谷があり、その景観が地獄に見立てられたことが大きな要因である。平安末期に書かれた仏教説話集『今昔物語集』には、「日本国ノ人罪ヲ造テ多ク此ノ立山ノ地獄ニ堕ツト云ヘリ」とあるように、立山は地獄のある山として全国の人々に認知されていた。

民俗学者の五来重は「山を他界とする山岳信仰の根本理念は地獄であって、贖罪と減罪の苦行を課せられる聖地である」と捉えている。地獄信仰は立山のみならずほかの霊山でも見られるが、とりわけ立山が注目されたのは、地獄谷のほかに立山山中には「血の池」があったからである。地獄谷より室堂寄りに、池という感じのものではなく、噴火口の湿地帯様の窪みに水が溜まった所が点在しており、その色は酸化鉄を含んでいるため赤味がかった色をしている。この血の池の存在は、血の池地獄の思想および血盆経（けつぼんきょう）信仰（血の穢れゆえに血の池地獄へ堕ちた女人を救済せんがための仏教経典）に一層現実味を帯びさせた。

立山は女人禁制で女性が登れない山ではあったが、女性には人気があった。それは江戸時代の人々の考え方が現在とは大きく異なっていて、月のものやお産による経血は忌み嫌われたり、石女（うまずめ）といって、子供を産めなかったり、産まなかった女性が堕ちる石女地獄は、女性専用の血の池に堕ちるというものであった。つまり、すべての女性が死後、必ず血の池地獄に堕ちるとされた。しかし、女性は布橋大灌頂の法会に参加することによって救済されるということが、立山が人気のある大きな要因であった。それを芦峅寺

や岩峅寺の衆徒（僧侶）たちが、女性たちの救済願望を満たそうとして全国各地に布教したので一層人気が高まった。

そしてもう一つの地獄、剱岳は針の山で恐ろしくて登れない山として、立山曼荼羅（立山信仰の内容が網羅的に描かれた掛軸式絵画）にも描かれている。つまり、江戸末期までは、この剱岳は地獄の一つで「針山地獄」とされていた。しかし、奈良末期から平安初期の制作と推定される銅錫杖頭と鉄剣が、１９０７（明治40）年、柴崎測量隊によって剱岳の頂上で発見されている。

一方、雄山の南側に浄土山があり、この山が極楽浄土に見立てられ、雄山の北にある別山は仏教の守護神である帝釈天に見立てられていた。南北朝中期の説話集『神道集』巻四に「越中國立山権現事」が書かれており、１３５５（文和４）～73（応安６）年ごろまでには阿弥陀如来を本地とする立山山中浄土の思想が完全に確立していた。

加賀藩前田家の立山信仰保護

地獄と極楽を併せ持つ立山信仰に、加賀藩の絶大な保護があった。特定の宗教・寺院などを特別に保護することを「外護」というが、聞き慣れない言葉であり、ここでは宗教用語の外護ではなく、一般的に使われている「保護」と表記して論を進める。

立山信仰を保護する加賀藩は、江戸時代、金沢城に居城し、加賀、能登、越中の三国の大半を領地とした藩で、１８６９（明治２）年６月、版籍奉還後には藩名を金沢藩と定められた。外様大名ではあるが、大名中最大の１０２万５０００石を領し、徳川御三家に準ずる処遇であった。

加賀藩は、１５８８（天正16）年、富山城主・佐々成政が失脚後、越中の新川郡が預かり領となり、翌年所領となる。したがって、芦峅寺は加賀藩の支配下となり、立山信仰は加賀藩前田家の祈願所としての役割を果たすこととなる。藩祖・前田利家は早速、芦峅中宮寺媼堂に対し１００俵の寺領を寄進し、諸堂舎の造営・修理や諸役・山銭の免除など絶大な保護を加えた。もっとも１５８５（天正13）年８月、豊臣秀吉は芦峅衆徒が佐々成政の沙羅沙羅越え（ザラ峠越え）の案内をしたり、修験忍者として佐々成政に協力したことから芦峅寺の神社・仏閣を焼き払っており、再興を必要としていた。

以後、立山信仰は加賀前田家一門の武運長久・国家安全・病気平癒・安産・五穀成就などに対する祈祷所の役割を果たしていくことになる。つまり、加賀藩の公的寺社として、

しかも修験道寺院としてではなく、前田家との特殊な関係を強調する所として、藩の寺社支配の体制下に完全に収められた。

加賀藩が立山信仰を保護した主な事例は次のとおり。

＊1590（天正18）年、藩祖・前田利家は中宮寺の荘園の租を復す。中宮寺媼堂（うばどう）、布橋、帝釈堂、閻魔堂を修理。

＊1596（文禄5）年、加賀藩は中宮寺の衆徒・社人の諸役免除、立山に登拝する人々に対しては、関守（関所を守る役人）という特権を持たせた。

＊1602（慶長7）年、二代目藩主・前田利長は媼堂に100俵寄進。

＊1606（慶長11）年、利長は中宮寺媼堂の橋（後の布橋）を架け直す。

＊1611（慶長16）年、利長は媼堂、帝釈堂を修理。

＊1612（慶長17）年、前田利光（利長の四男・利常の初名）は芦峅寺の社壇を修理し、護摩修業の新米を寄進。

＊1614（慶長19）年、加賀藩祖前田利家夫人・芳春院、二代目藩主利長夫人・玉泉院は、媼堂の前の橋に白布を敷く。この年以降、毎年、加賀藩主の奥方が灌頂会に使う白布を明治維新まで寄進。

＊1615（慶長20）年、利光は媼堂に100俵を寄進。

＊1617（元和3）年、利長夫人・玉泉院は、室堂小屋を再興。

＊1624（寛永元）年、三代目藩主・前田利常は立山中宮寺保護のため禁制五ヶ条を示す。立山中宮寺制札を下附。媼堂、布橋を修理し、布橋の擬宝珠（ぎぼし）（橋や寺社の欄干に取り付けられたネギの花に似た装飾金具）を寄進。

＊1661（寛文元）年、五代目藩主・前田綱紀は媼堂、閻魔堂を修理。

＊1787（天明7）年、八代目藩主・前田重熙は1785（天明5）年に焼失した中宮寺媼堂を再建。

＊1851（嘉永4）年、十四代藩主・前田慶寧は芦峅雄山神社の神輿を2基寄進。寄進

2基は、現在、立山博物館の山岳集古未来館に展示されている。大祭に使用しているものは昭和40年代（1965～）に複製された三代目の神輿である。

＊1864（元治元）年、『布橋灌頂勧進記』（宝泉坊文書）に布橋灌頂会への寄進者が記されている。その文書には徳川幕府十三代将軍家定夫人・天璋院篤姫や、十四代将軍家茂夫人・皇女和宮ら大奥の女性たちの名前が記されている。

なお、雄山頂上にある峰本社は、歴代の藩主が造営し、220年間に10回建て替えている。

以上であるが、細かいものまで取り上げると際限がない。

女人救済儀式の始まり

日本の仏教が女性を明確に排除し始めた時期については諸説あるが、有力な一つに、平安仏教が確立されたころで、霊山への女人禁制も全国的には平安初期の末ごろから中期（900～1060年）にかけてであろうと考えている説がある。そのため日本各地の修験の霊山は、鎌倉時代から江戸時代までは女人禁制であった。寺院や霊場などの宗教行為を行なう場所を聖域とし、その場所への女性の立ち入りを禁止する制度で、霊場である立山も女人禁制であった。

男性は〝あの世〟の立山へ禅定登山（霊山に登り修行すること）をすることによって擬似的に死者となり、地獄の責め苦に見立てられた厳しい登山に耐えることで、生前の罪や穢れを浄める。この禅定登山によって生まれ変わった状態になり〝この世（現世）〟の安穏や死後の極楽往生が約束されると考えられていた。つまり、擬似再生である。

女性は女人禁制によって霊山立山への登拝が許されなかったので、死後の極楽浄土に往生する願いがかなわない。そこで立山への登拝拠点である芦峅寺宿坊の衆徒（僧侶）たちは、禅定登山が許されなかった女性のために、立山へ登拝できなくとも禅定登山と同一視されるものとして、毎年、秋の彼岸中日に、布橋大灌頂という女人救済の法会（多くの僧侶が集まって仏の教えを説く会合）を執り行ない、女性はこの法会に参加することで、死後の極楽浄土に往生することがかなえられるとした。この女人救済という立山信仰を具現化した儀式が、「布橋灌頂会」である。つまり〝この世〟から〝あの世〟への境界である布橋を渡って、〝あの

世〟で一度死んだ世界に入った擬似体験をし、〝この世〟に戻ると、それは再生した女人である、という儀式である。

この布橋灌頂会には、閻魔信仰や芦峅寺固有の媼尊信仰のほか、「橋」の信仰、「布灌頂」「橋灌頂」といった「灌頂」儀礼、引導師（僧侶）や来迎師（僧侶）によって此岸から彼岸への白布の道を歩むという儀礼に、浄土教の二河白道（にがびゃくどう）思想の影響が見られるなど、多様な日本の仏教文化が凝集されている。

橋は神を迎えたり送ったりする祀りの場と考えられ、霊魂も橋を渡って移動すると信じられている考えが芽生えたことや、女人禁制が始まったと考えられている時期などから、布橋灌頂会の原型は、中世（鎌倉・室町時代）に始まったと考えられている。

布橋灌頂会としての始まりは、１６７４（延宝２）年の『一山旧記扣』（芦峅寺文書）によると、江戸初期の１６１４（慶長19）年８月、加賀藩初代藩主・前田利家夫人・芳春院（名は松）、二代目藩主・前田利長夫人・玉泉院（名は永、織田信長の四女）が、芦峅中宮寺媼堂へ参詣に訪れ、滞在中に媼谷川（媼堂川ともいい、仏教でいう「三途の川」と見立てている）に架かる橋に、白布を掛けて渡る宗教行事を行なったことが布橋大灌頂の起源とされている。その際の記録に「御宝前之橋ニ布橋ヲ御掛、大分之儀式被為成」と『加賀藩史料』にあるが、この記載が、布橋に白布を敷き渡して行なった儀式の、文献上の初出であろう。

この時点での閻魔堂は、布橋灌頂会と無関係に存在しており、後に橋と媼堂が組み合わさって、閻魔堂・布橋・媼堂が布橋灌頂会の舞台となり、布橋灌頂会は回を重ねるごとに、多様な仏教文化や考え方を加えながら成熟した法会となり、芦峅寺の最も重要な年中行事に発展した。

布橋灌頂会の参加者は、実際には男女の両方が参加していたことが、芦峅寺の古文書に書かれている。ところが、「布橋大灌頂は、女性の極楽往生をかなえる法会である」と芦峅衆徒がことさらに強調したことにより、男性は布教の中では除かれてしまった。実際には、少数ではあるが、禅定登山に耐えられない老人や病弱な男性の信者たちが参加していた。また、信者だけではなく、一般庶民も死後の極楽浄土への往生を願って参加していた。ただし、当リポートでは女性の参加、つまり、参加者は女人衆に集中させて論を進める。

儀式への勧誘活動

江戸時代に立山信仰は、日本古来の、山の中に死者の霊

が集まる他界があるという山中他界観に、仏教の地獄思想と浄土思想が融合した信仰観が盛んになり、それが立山曼荼羅として掛け軸式の絵図に描かれた。芦峅寺や岩峅寺の衆徒は、全国の信者へ定期的に訪問して立山曼荼羅の絵解きによって禅定登山を勧めるとともに、血の池地獄の思想は民衆の間ですでに浸透しており、「布橋灌頂会」には最も力を入れて勧誘した。つまり、立山が女人救済を実現する類まれな霊場であることを強調し、誇らしげに説いた。そして、血の池地獄から救われるための血盆経や月水不浄除（月経の不浄を除ける）の護符（人間を災厄から守る力があるという神仏の札）を積極的に頒布した。

このように芦峅寺衆徒の廻檀配札活動（全国の信者のいる布教先を回って災厄から守る力があるという札などを配る）による布橋大灌頂への勧誘によって、布橋灌頂会という儀式が全国に知れ渡り、悩める女人が大勢、布橋灌頂会に参集した。特に文政末期（１８２０年代）に急増している。

勧進活動を一層効果的に行なうため、衆徒の教具である立山曼荼羅にも、血の池地獄の図柄が真紅の強烈な色彩で描かれた。そこには血の池地獄に堕ちた女人たちが、血でできた池に首までどっぷりと浸かり、苦悶の表情を浮かべている様子や、そこへ女性たちを救うために、池の中から蓮の葉と蓮台に坐した如意輪観音菩薩が現れた様子などが描かれている。芦峅寺系の立山曼荼羅は、立山地獄の様子と布橋灌頂会の行事の様子を詳細に、信者の心に強く訴えるように描かれていた。衆徒たちは、その立山曼荼羅の絵解きによって布橋灌頂会への参加を勧めた。

江戸時代の布橋灌頂会

後に述べる「復元・布橋灌頂会」に儀式の形式を中心にした模様を詳しく述べたいと考え、ここでは江戸時代の事前準備状況と布橋灌頂会の原点的な面の一部を描く。

江戸時代後期の天保期（１８３０～44）ごろに行なわれていた布橋灌頂会の模様は、秋の彼岸の中日が近づくと、全国から多くの参加者や見物人を迎える三十八宿坊（１８０１・享和元年、加賀藩は芦峅に衆徒三十三坊五社人、岩峅に二十四坊という仏教的に意味のある数に達したとき、当時の内外的理由から衆徒・社人の数を固定した）などでは、衆徒や門前の庶民は受け入れ準備を整える。

まず、会場となる閻魔堂や媼堂、布橋、およびその界隈を大掃除し、閻魔堂から布橋を経て媼堂まで、白布を敷き流して３列の白道を造る（復元した現在は布橋のみ）。そ

れには衆徒が勧進活動で各地の信者や加賀藩から得た３６０反の白布が使用される。この白道は法会の舞台なので、一般見物人が入れないように両側を竹垣（行馬竹）で囲む。次に布橋の上では、両側の欄干に6本の幡（仏や菩薩などを荘厳・供養し、その威徳を標示する旗のこと）や68本の桜の造花、１０００挺のロウソクを立てて飾り付ける。このほか、閻魔堂や媼堂の軒先に、加賀藩前田家の家紋入り大提灯を下げ、閻魔堂手前の玉橋から媼堂までは３８０の万灯（灯籠型提灯）と小灯を灯す。日中でも薄暗い杉林の会場には、火の光が幻想的な効果を現す。媼堂内では、本尊に対する仏布施や丸餅などのお供えのほか、須弥壇上に小袖や帯（北側の須弥壇上）、白布1反（南側の須弥壇上）を掛け供える。こうした準備を整え、開催日当日、衆徒や社人が沐浴した後、正午から布橋灌頂会が開始される。

その特徴的な面は、まず、女人衆は閻魔堂に入る。堂内で引導師が懺悔戒文という文句を唱える間に、女人衆は各自の罪を懺悔する。次に、引導師が三昧耶戒文（密教における誓約文）という文句を唱えるが、これは女人衆が灌頂を受ける前に授かるべきもので、そこには女人衆に対し、各自が持つ仏性（一切の衆生が具えている仏になれる本性）に目覚めさせるといった意味がある。さらに、仏の金剛界大日如来を讃える詩文を唱え、法華経を読み、諸真言を唱える。

閻魔堂での法要がひと通り終わると、女人衆は引導師や式衆に導かれ、声明（日本の伝統的な仏教聖歌）や楽器の音に包まれながら、ロウソクの万灯の光の中を、白布の上を歩いて布橋へ向かい、この法会の主体である布橋の上での灌頂行道、すなわち「行渡講」が行なわれる。

女人衆は式衆たち総勢百十数名に白道の両側を囲まれ、楽器の音が響く中、2人の手引きの小僧に導かれて、布橋上の白道を渡る。

布橋での行渡講が終わると、女人衆は媼堂に入る。堂内では式衆が天台系の四箇法要を勤める。さらに、来迎師が女人衆に血脈（正しい密教の秘法が伝授された証明となる護符）を授与し、最後に説法を行なう。女人衆は、この法会に参加することで死後の極楽浄土への往生が約束されたか、あるいはその場で即身成仏（人間が生きたままで仏になること）したのだといわれている。

参加費は言い伝えによれば、行列の先頭が1人75両、現在の約３００～５００万円相当で、列の後ろになるにしたがって60両、50両、35両と下がり、最後尾は5両（資料によっては10匁とあるが、金1両＝銀60匁であり、現在の6

～７００円からで、感覚的には妥当であろう）であったという。旅費と合わせるとかなりの出費となり、布橋灌頂会の参加は、かなりの負担を背負っていたようだ。

布橋灌頂会の途絶および女人禁制の解禁

明治維新の一大変革は、霊山に大きな影響をもたらす。明治新政府は祭祀と政治の一元化を図る祭政一致、王政復古を断行する立場から神道教化の方針を採った。そのため神と仏が渾然一体となって創り上げた神仏習合の慣習を禁止し、神道と仏教、神と仏、神社と寺院を明確に分離するように命ずる太政官布告、神祇官事務局達、太政官達など一連の通達が順次出された。１８６８（慶応４）年３月、太政官布告による神仏判然令（一般的には神仏分離令）が布告され、翌１８６９（明治２）年３月、加賀藩より芦峅寺と岩峅寺の一山会へ神仏分離の申渡書が届き、仏・菩薩の立山権現の呼称を神道の雄山神社に改め、雄山山頂の祭神は阿弥陀如来、不動明王から伊邪那岐命（イザナギノミコト）、天手力雄命（アメノタヂカラオノミコト）に変わった。

神仏判然令による廃仏毀釈（はいぶつきしゃく）が実行され、立山信仰も廃仏毀釈によってその根幹を激しく揺さぶられた。堂塔伽藍（どうとうがらん）（寺院の堂や塔と僧侶たちが修業する場所。寺院の建物の総称）は徹底的に破壊されて仏堂・仏像・仏具・経巻（けいかん）（聖人の著わした書物。経書、経典、経籍）は移遷や破壊・破棄・散逸が進んだ。

廃仏毀釈によって芦峅に残ったものは、雄山神社峰本社（雄山山頂神社）と閻魔堂、開山堂、雄山神社祈願殿（中宮寺講堂の改称）、峰本社の末社である大宮、若宮、それに岩峅の雄山神社前立社壇（遥拝所として）の７つだけであった。媼堂などの宗教施設は取り払われた。

江戸時代の「室堂」が堂という仏教的名称を消すため「室所」と改められた。そのほか、地獄谷を炎高山、賽ノ河原を再栄河原、千手ヶ原を千樹原、断罪坂を断材御坂、称名ヶ滝を勝名之滝とするなど、仏教臭をできるだけ薄めようとした努力の跡が顕著である。しかし、この無理な改称は好まれず、明治期のうちに徐々に旧名に戻った。そして芦峅・岩峅両寺の全衆徒を復飾させ、昨日の衆徒たちは法衣・袈裟を捨てて、今日はとりあえず浄衣に笏を執り、祝詞を奏する神官に早変わりした。

このような状況のなかで布橋灌頂会は途絶えてしまった。

一方、１８７２（明治５）年３月、太政官布告「神社仏閣の女人結界の地廃止・登山参詣自由たるの件」によって

登山の女人禁制が解禁された。全国の山々で女人禁制が解かれたが、解かれた時期は霊山によって異なる。立山や加賀の白山（石川・岐阜）、天台宗・比叡山（滋賀・京都）などは布告の年にいち早く解禁され、誰でも立山へ登ることが許される。その後、間もなく日本へ近代登山が移入され、立山も明治中期より山へ登ることのみが目的である遊びの登山（スポーツ登山）が押し寄せたことにより、立山への登拝・登山状況が一変した。

2　女性「癒しの儀式」復元・布橋灌頂会

途絶えていた布橋灌頂会は、百三十余年の時を経て、1996（平成8）年、国民文化祭・立山フェスティバル開催を機に、他に類を見ない女性「癒しの儀式」として復元した。もちろん女人禁制ではなく、時代背景は江戸時代とほとんど異なっている。したがって、執り行なう儀式の趣旨や多様な仏教思想の取り込み、あるいは媼堂は廃仏毀釈によって取り払われているので、新しい施設である遙望館（ようぼうかん）を媼堂と見立てていること、布橋渡りの形式がイベント性を重んじた構成になっているなどで、すべてが往時の再現ではないが、法会全体の流れを俯瞰すれば、形式は江戸時代の行事にほぼ沿っているといえよう。

現代的復元の意義

復元した布橋灌頂会は、厳密な意味で宗教儀式ではない。その精神は、往時のように多様な仏教思想を取り込むなかで極楽往生を願うことに重きを置くのではなく、大自然の中で自分の心と向き合い「自分を見つめ直す」行事である。つまり、儀式の精神性の中心は「極楽往生を願う」ことから「心を癒す」ことに重きを置く行事として平成によみがえったといえよう。

復元した「布橋灌頂会」に参加することで心が洗われ、畏敬の念を抱き、生きている喜びと感謝を感ずると同時に、未来に向けて素直に生きるとか、精気があふれる生き方を志すとか、温和な生活を継続するなど女人によって異なるが、いずれにしても、生きることに前向きな姿勢を志し、それを誓う行事に変わった。

そういう意味で、芦峅寺集落は「心の時代」と言われる現世において、「心を癒す」ことを志向する女性へ、異次元で、経験したことのない立山信仰の世界に浸りつつ、自分を見つめる絶好の通過儀礼（イニシエーション）を復元布橋灌頂会として提供している。

１９９６（平成８）年９月に行なわれた立山フェスティバルの『報告書』には、布橋灌頂会のコンセプトをこう表現している。「擬死再生というキーワードに象徴されるように、現世の生きざまを、目隠ししたまま橋を渡るという行為の中で自覚することであった。すなわち、目隠しをすることにより、外部の諸々の景観に惑わされず、ひたすら自己の内面を直視し、社会的倫理観とインビィジィブルな超人間的なもの『仏』によって地獄か浄土かに裁かれるという恐れにかられる瞬間を味わい、儀式の終了の後、改めて生きることに対する真摯な気持ちをもち、以降、こころに物的執着心が取り除かれた状態で素直に生きることができるというのである」とある。

日本では１９８０年代（昭和55～）から「心の時代」と言われて久しい。ＮＨＫのテレビとラジオで、同時間に同一内容を放送する、サイマル放送による番組で、「こころの時代」と題する長寿番組がある。放送を始めたのは１９８２（昭和57）年で、このころから盛んに「こころの時代」と言われるようになり、この放送は現在も続いている。まさに現代人が求めている「こころの時代」が継続していることを示す。

また、「癒し」という言葉が１９９９（平成11）年の新語・流行語大賞のトップテンに選ばれ、現在では相当幅広い意味に使われている。この「癒し」については、いろいろな解釈が論じられ、癒しグッズまで登場した。

「癒し」という言葉の創始者であり文化人類学者で、『癒しの時代をひらく』（１９９７・平成９年　法蔵館刊）の著者、現在は東京工業大学リベラルアーツセンターの教授である上田紀行は、「癒し」とは「傷つくこと」からの回復ではない。成人式、イニシエーション（通過儀礼のこと）において、どの文化にも見られるのは「死と再生」のシンボリズムである。「子供は死んだ。そして大人として生まれ変わった」。つまり、子供が大人になり過去との関係を断って、その上で世界との一体感を再創造することこそが、今求められている「癒し」なのである、と説く。つまり、自分を癒すということは、過去の自分と別れて新しい自分になる、ということであろう。

したがって、復元布橋灌頂会は現代人の「物の豊かさ」ではなく、幸せになるために本当に必要な「心の豊かさ」を求める儀式であり、あの世の立山で「擬死再生」し、この世に戻って、生きていることを実感する非常に意義深い儀式でもある。つまり、現代人の生き方にかなった「癒しの儀式」であろう。

筆者は、「癒しの儀式」が自身と向き合うことではあるが、それを一歩進めて、「人間は自己実現に向かって絶えず成長する生き物である」と仮定し、「自己実現欲求とは、自分の能力を引き出し、創造的活動がしたいなどという欲求である」というアメリカの心理学者マズローの自己実現理論が、ここでも生きていると考える。第2次世界大戦後の高度成長期に「動機づけ理論」として盛んに学んだ理論の一つで、癒しの儀式を終えて次に進もうとする「こころ」は、山へ登ったときに享受する充実感・達成感のように、すがすがしい気持ちで、誠実で、前向きな自己を築こうとしている「こころ」ではなかろうか。

復元・布橋灌頂会の形式

1996（平成8）年の第11回国民文化祭とやま、「96立山フェスティバル」という全国的な行事の一環として行なわれた布橋潅頂会は別として、2005（平成17）年からの会を主催する布橋潅頂会実行委員会は、地元の芦峅寺集落を中心に立山町、立山町商工会、立山町観光協会、立山山荘協同組合、日本旅行業協会富山地区、富山県［立山博物館］、㈱北日本新聞社、丸新志鷹建設㈱、立山黒部貫光㈱、富山地方鉄道㈱で構成されている。会長は常に地元の芦峅寺集落から選出され、2005（平成17）年の当初から2014（平成26）年までは芦峅寺総代の佐伯信春が担い、エネルギッシュな活動で、永続的開催の原動力になっている。

秋の彼岸の中日が近づき、布橋灌頂会が開かれる日を前にすると、芦峅寺の住民は、朱色の布橋を雑巾やタワシを使い、橋の欄干に付いた土やコケなどの汚れを入念に洗い落として周辺を浄める。観覧者で埋め尽くされる道路や女人衆が通る明念坂の石段周辺の草刈りを行ない、県道富山・立山公園線からも布橋が見えるように、視界を遮る樹木の枝打ちもする。参加する女人衆や観衆を気持ちよく迎えたいという気持ちの表れだ。

開催当日は芦峅集落の人々はもちろん、関係者挙げての取り組みとなる。儀式そのものにも住民が深く関わる。女人衆には毎回、地元の年長者らが参加して先導する。地元の子供たちは伝統衣裳に身を包み、僧侶とともに持幡童として2人が女人衆を先導する。女人衆が身に着ける小物や食事の準備なども芦峅の女性たちが行ない、着付けの手伝いなどで住民総がかりとなる。

布橋潅頂会に併設して行なわれる「芦峅ごっつぉ祭り」は、かつて立山登拝者に宿坊で提供していた郷土料理をこ

の祭りでも提供し、儀式を盛り上げる。佐伯照代・芦峅寺婦人会会長は「参加者の『良かったよ』という声を励みに頑張っている。文化遺産として理解が広まっているのでうれしい」と喜ぶ。

全国から集まる女性の多くは、癒しを求めてやって来る。立山古来の文化に地域の人々の包容力が掛け合わさることで、改めて現代版の女性のための儀式が生まれた、と芦峅の人は言う。回を重ねるごとに、それぞれが自主的に役割を発展させ、今では準備そのものが楽しみであり、生き甲斐となっている。

復元した布橋灌頂会は、毎回同じ形式であるとはいえないが、２０１４（平成26）年９月21日に開催された模様を示すと次のとおり。

女人衆は85名、一般募集の応募者１８８名のうち当選者59名（富山県31名、東京都11名、千葉県３名などのほか海外から２名）。応募者は富山県１２８名、東京都23名、神奈川県が７名などの中から抽選による。ＪＲ東日本・大人の休日倶楽部から19名の参加で、全員富山県以外の人。参加者の年齢は最高齢者86歳（80代２人）、若年者19歳（10代２人）。60代が一番多く24人。ほかにゲスト参加者４人、芦峅寺女人衆（先導役）３人であった。ただし、開催日間際で、東京の80代１人と休日倶楽部からの１人が参加を取りやめているようだ。

声明は、真言声明が迦陵頻伽（かりょうびんが）聲明研究所の僧侶10人、および天台声明が七聲会の僧侶７人。雅楽は、富山県高岡市の洋遊会（ようゆうかい）15人。

声明とは日本の伝統的な仏教聖歌。雅楽とは、１０００年以上前から主に宮廷音楽として伝承されてきた、現存する世界最古のオーケストラと言われている。富山県高岡市福岡の洋遊会は、江戸時代以来１５３年（２０１４・平成26年時点）続く雅楽団体。明治の初めに福岡町へ行幸された明治天皇の賛辞にあずかったことから会が発展したという歴史があり、演奏・舞とも宮内庁のやり方に倣っている。富山にとどまらず、洋遊会の会長は全国組織「雅楽協議会」（事務局・東京）の結成に、発起人としてかかわっていた。

布橋灌頂会の一般募集応募者の当選率は31％である。応募者が開催ごとに増えており、一度参加した人は再び参加したいという希望もあり、今後は参加希望者が増えると十分予想される。この現状に鑑み、これからは当選率を上げる方策を考え、実施すべきである。１回の開催に参加できる女人衆の数には施設のスペースから制限があると考えられるので、それを解決するには開催数を増やすべきであろ

う。その方法として、3年に1回ではなく毎年開催する。あるいは、今まで開催日に1回行なっていたものを、1日に2回行なう。あるいは、数日連続して行なうなど、開催回数を増やす行事を構築すべきであろう。

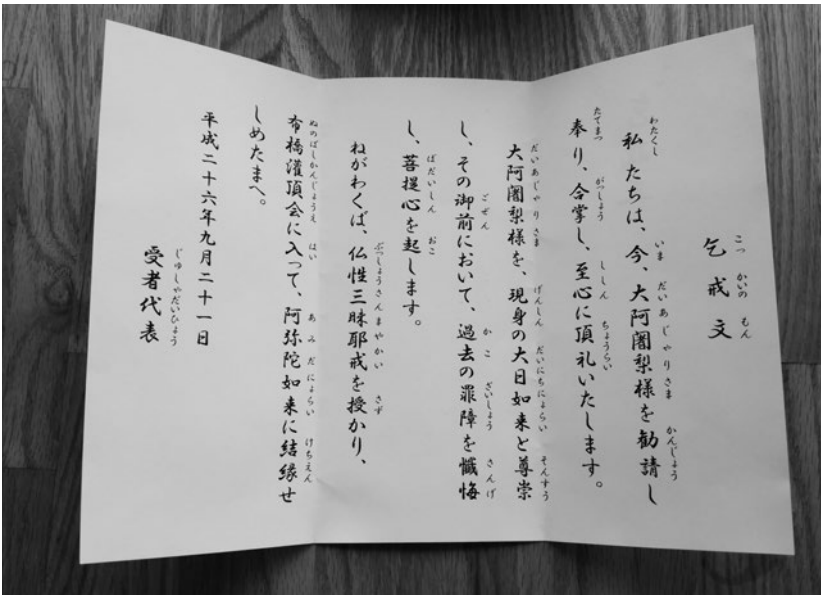
しかし現在、多額の費用がかかっており、幅広い公共機関・企業・団体・個人からの寄付や協賛金で賄ってはいるが、江戸時代に倣って女人衆の参加費を上げる、あるいは前列と後列の参加費が異なる、など工夫できないだろうか。この行事こそ参加することに意義があるので、主催者はまず、参加女人衆を増やすことができる行事に照準を合わすべきである。

以下、今後女人衆として参加する方々の参考のため、その形式を詳しく述べる。

全国から集まった女人衆は、まず宿舎で死者の衣裳である白装束を身にまとい、10時に布橋の里側にある、この世の閻魔堂へ入堂する。

閻魔堂では「閻魔堂儀式」を執行。三礼の後、引導師作法（塗香・護身法・酒水・草々念誦法・驚覚鈴）が行なわれ、続いて女人代表者が「乞戒文（こつかいのもん）」（仏の教えに帰依する証として戒律を守る宣誓文）を読誦、次に引導師作法（阿闍梨答辞・仏名・懺悔・三帰・発菩提心真言・啓白・羯磨・三昧耶戒・諸真言・十念・三礼）が行なわれる。つまり、「懺悔の儀式」によって自分のこれまでの罪を懺悔し、閻魔王の裁きを受けてあの世へ旅立つ準備を整え、10時30分に出堂。

閻魔堂を出て草履を履き、菅笠をかぶり、目隠しをして整列し、手を合わせ、引導師（僧侶）・引導衆（真言僧侶）に導かれて、対岸のあの世へと行道（ぎょうどう）（おねり）を開始する。仏教音楽の声明や雅楽が響く中を、閻魔堂から明念坂を下り、布橋の手前でいったん停止し、整列する。整列の順序は、布橋に向かって会奉行・持幡童2人（地元の少年）・楽人・橋の両脇に引導衆、中央に引導師・供奉人・女人衆と続く。「橋渡り儀式」の開始にあたり、引導師作法（瓶水灌頂によりまず橋を浄め、次に職衆・楽人・女人衆を浄める）が行なわれる。朱塗りの橋には3筋の白布が敷かれている。11時、「開橋の儀」（引導師作法）によって橋渡り開始。東方賛（賛頭作法・上段鈸）、渡橋（引金2打・四ツ鈸）執行。会奉行の引金2打で、楽人は奏楽を開始。会奉行・持幡童は右足・左足・右足と3歩進んで立ち止まり、以下交互に3歩進む。引導衆は歩きながら散華を行なう。女人衆は白布の上を3列でしずしずと歩を進める。橋の中央より少し手前で停止。停止後、一度散華、奏楽停止。あの世（布



乞戒文

私たちは、今、大阿闍梨様を勧請し奉り、合掌し、至心に頂礼いたします。

大阿闍梨様を、現身の大日如来と尊崇し、その御前において、過去の罪障を懺悔し、菩提心を起します。

ねがわくば、仏性三昧耶戒を授かり、布橋灌頂会に入って、阿弥陀如来に結縁せしめたまへ。

平成二十六年九月二十一日

受者代表

閻魔堂儀式で女人代表者が読誦する「乞戒文」

僧侶らに導かれて布橋を渡り、あの世へと行道する女人衆

橋の山側）から出向いた来迎衆（天台）が橋の中央へ進み、「迎えの賛」（四智賛・真鈸上段）。引導師は「渡しの賛」（四智賛・上段鈸）を行ない、来迎師・引導師は橋の中央で合掌、相互に礼拝する。来迎師は大音声にて「お迎えに参り候」続いて引導師も同じ文言を繰り返す。女人衆は来迎衆と引導衆の間に入り、11時15分、会奉行の引金を合図に進列を開始。この間、四ツ鈸（来迎衆のみ）、奏楽続行。

江戸時代では、悪事を働いた者は敷かれてある白布が蜘蛛の糸のように細く見え、橋をうまく渡ることができず、大蛇が口を開けて待ち受ける媼谷川へ転落したと言われていた。

布橋を渡り終えると11時45分、あの世の媼堂と見立てた遙望館へ歩を進め、奏楽（洋遊会）が響く真っ暗な中を入堂し「媼堂儀式」が行なわれる。念仏を唱え、引導師の振鈴で奏楽・念仏・真言を同時にやめる（笛のみ残る）。引導師の振鈴の間に、女人衆が目隠しを解くと室内の大きなガラス壁の幕が開き、眼前に立山連峰が浮かび上がる。女人衆が最も感動する瞬間で、自然に手を合わせ、霊峰立山を見つめるに違いない。そこには生まれ変り、再生された女人衆の明るい姿があった。

12時10分、「帰りの進列」は会奉行を先頭に奏楽に合わせて布橋を通り、閻魔堂へと進む。12時20分、閻魔堂前に到着、整列・解散、バスにて着替えの宿舎へ戻る。

女人衆の一連の儀式が終わると、観覧者（男女を問わない）の「一般橋渡り体験」が行なわれ、普段着ではあるが、目隠しして両手を合わせ、声明の先導でゆっくりと布橋に敷かれた白布の上を歩く。

なお、布橋灌頂会の女人衆の衣裳である肌襦袢・白足袋・草履・目隠し・菅笠・白檀数珠は女人衆に進呈のほか、希望者には白衣・襦袢（上下）・兵児帯・腰紐・伊達締めをセットで販売している。

女人衆の体験記

開催ごとの各新聞では、復元された立山信仰のこころを彷彿とさせる「布橋灌頂会」に感動した、と伝えている。また、参加者も非日常的な体験にこころに響くものがあったようだ。

ここに体験談の多くを載せたいが紙数に制限があり、筆者が紹介したいと思った体験談のみに絞って紹介する。

【1】1996（平成8）年に参加の上野れつ子

女人衆の一人として。

その時、私は「布橋灌頂会」の最後の儀式の場である遙

望館に正座して、居並ぶ大勢の高僧のひびき渡る読経の声に包まれて居ました。その声は、あたかも天空からふりそそぐ、百千の御仏の声のように私には聞こえるのでした。

百数十年ぶりに再現されたこの儀式に参加することが出来、「女人衆」の一人としての朝からの体験が走馬灯の如く頭の中をかけめぐります。とりわけ、あの布橋の来迎衆に迎えられ、白布を踏んで中央あたりに進んだ時の感動は忘れることが出来ないものとなりました。

橋の両側に控えた引導衆の前を来迎衆に従って歩を運ぶと、それまで聞こえていた典雅な楽の音も、周囲を埋めつくした観衆のざわめきも一瞬、消えてしまいました。目に見える風景は全て白一色となり、音は全く聞こえない世界をただ一人となって歩いている自分を見たように思いました。

そして、目の前に威儀を正して並ぶ僧侶の読経の中に身も心も包まれて時を忘れて合掌しているのでした。

（遙望館では）大きな波が引くように読経が終わり、前面のスクリーンが静かに上がるその正面には、くっきりと立山の雄姿が仰がれるのでした。

得難い感動を体験させて頂いたことを、心の底からうれしく思った一日でした。

【2】２００５（平成17）年に参加の川崎市　石山絹子

拝啓　「布橋灌頂会」に参加させて戴きました事を心より感謝致しております。

とても貴重な体験でした。至福の体験でした。会場のあちこちで、一生懸命動いていらっしゃる方々をみて胸があつくなる思いでした。

十八日、すばらしい天候で、大勢の観客が、女人衆を見守って下さり、盛会を祝う洋遊会の皆様の雅楽を楽しませて戴き、誠に有難く、厚く厚く御礼申し上げます。

翌朝一番に手に配られた北日本新聞の一面の写真、思いがけずの御配慮に再感動の声が天狗平山荘の玄関に響きました。ほんとうにありがとうございました。

貴重な体験を得て、閻魔様の前で約束した三つの誓いをこれからの人生の指標として生活して参りたいと存じます。人は支えあって助け合って、和顔愛語で生きるようにと、周りの人からも教わりました。

山ガイドをして下さった方々の優しいお心遣いも嬉しく思いました。いろいろ、ほんとうにありがとうございました。

立山町の御発展を祈って、右御礼を申し上げたく乱筆乱文でお許し下さい。感謝のうちに。　石山絹子拝

【3】2010（平成22）年に参加の高橋せつ子

日一日と秋も深まってまいりました。先日は布橋灌頂会に参加させていただき、いろいろお世話になり、本当にありがとうございました。

あの時の言葉では言い表せない感動は未だに忘れられません。と同時に沢山の方々の御尽力、御苦労のあった事とあらためてお礼を申し上げます。次に又この企画がありましたら、ぜひもう一度体験したく思って今から楽しみに待つ事にします。

それから誠に恐縮でございました。私の方、忘れ物をしまして黒田様にはお手数をかけてしまいました。確かに「数珠」が届きました。おわびとお礼を申し上げます。

さて、あの時私は生まれ変わりました。黄泉の国の御先祖様にも何とか、今の平穏無事を報告出来ました。今日から日一日を大切に生きて行きます。

皆様方には何かとおいそがしい事と思いますが、これからもこの様に楽しませていただきたく御縁を願っております。先づは言い尽くせない程のお礼を伝えたく、つたない文をさしあげる次第です。皆さま方どうぞ御身大切に。本当に素晴らしい感動を、ありがとうございました。

【4】2010（平成22）年に参加の人々（「女人衆の感想」集より）

＊念願叶い行事に参加できたことをうれしく思っています。今までしてきた事に対し、懺悔の気持ちでいっぱいになりました。手を合わせて心が晴れてとてもすがすがしい気持になりました。

＊2度目の参加で70歳の節目と、主人が亡くなり3年目なので主人の写真と一緒に参加させていただきました。天気もよく、とてもよい思い出になりました。

＊善道坊で着替えた時から自分が自分でなくなる緊張感につつまれました。閻魔堂では、極楽往生を願い、何故か涙が頬をぬらしました。遙望館での儀式もありがたく、生まれ変わっていく自分に満足感と感謝をしました。

＊この度は参加させていただきまして、ありがとうございました。現世よりあの世へと一歩一歩橋を渡りながら、日常を考えさせられました。一人の女性としてこれから歩んでゆくことへの考えを知ることへのよい機会でした。暗闇から解き放され眼前の景色を見たときは本当にこみ上げるものがありました。目隠しをして歩いた階段、橋、道は不安と怖さ、一人では生きていけない、でも何かに導かれ助けられているような、という気持ちを強く感じました。

＊初めての参加で何も分からず、ただ皆さんの後についていきました。無我夢中の中、自身がずっと念仏を唱え続けていることに気づき、周囲のすすり泣きが聞こえると同時に立山の御光の中、身も心も照らされてすがすがしい気持ちになりました。

＊閻魔堂で身も心も清めて目隠しをして布橋をわたるときなんともいえない清らかな心境になりました。遙望館では暗闇の中で声明や雅楽が響く中、念仏を唱え続けた時に、亡き夫と歩いた人生を振り返り涙が流れ、真っ暗な中目隠しを取り外した瞬間は目の前に映るすばらしい山を眺めながら今健康でいられる自分が本当に幸せだと思いました。何回参加させていただいてもこみ上げるものがあり、改めて自分を見つめ反省したりできたことはとてもよかったです。

＊初めての応募で当選し、当選葉書を手に幾度も葉書に「ありがとうございます」と幾度も頭を下げました。稲刈りなどで忙しく参加をあきらめかけていたのですが、夏に手術をし入院中の母の言葉に背中を押され迷いが消えました。当日は自分が自分ではないような「無」になれた思いでした。遙望館では闇の中から光を感じ感謝の気持ちで涙があふれました。

＊毎日立山を眺めながら過ごしていますが、現代に生きる私には昔の女人たちの気持ちに触れることは難しいとおもっていましたが、終わってみてすがすがしく心豊かな気持ちになれました。信仰心など失われている時代かと思っていましたが、若い方達もたくさん参加されていてとてもうれしくなりました。

【5】２０１４（平成26）年に参加した福島県郡山市（浪江町から避難中）の佐々木雅子（68歳）

女人衆の一人・佐々木雅子さんは、２０１１（平成23）年3月の東日本大震災前は福島県浪江町に住んでいた。福島第1原発事故で浪江町が避難区域となる。佐々木さんが今回の布橋灌頂会に参加した経緯については、立山で雷鳥荘を経営し、立山山荘協同組合の理事長であり、立山・剱岳方面の遭難対策の要職にある志鷹定義が関わっていることを耳にして大いに関心を持ち、佐々木さんが布橋灌頂会に参加することになったいきさつを、志鷹定義の紹介で佐々木さんに電話でインタビューを試みた。

佐々木さんは、震災の後の5月から立山町坂井沢へ避難し、現在も浪江町の自宅には帰ることができないので郡山市に住んではいるが、立山町の人々の優しさにほだされ、立山連峰の雄姿を拝みに、ときどき坂井沢の借家に来てい

る。

立山山麓へ避難したきっかけは、雷鳥荘で１９８８（平成10）年４月から２００７（平成19）年11月末までの10年間、働いていたことによる。働いていた縁で、雷鳥荘の主人・志鷹定義から震災後９日目に電話があり、避難先として立山山麓を推薦された。佐々木一家は親子ともども山が好きで、なかでも雅子さんは剱岳と槍ヶ岳を好む。立山町役場の紹介で夫婦と男女２人の子供は、避難先を剱岳の見える立山町坂井沢の空き家に選んだ。立山連峰の眺めや近隣の人々の優しさに第二の故郷と考えるようになり、ここで長く暮らすことも考えたが、浪江町にも強い郷愁があり、現在は郡山の借り上げ住宅で暮らしている。

佐々木さんは、「立山町に避難中、友人と布橋灌頂会を見学して心を打たれ、次の機会に友人とともにぜひ参加したいという約束をしていました。今回、それをかなえることができて気持ちが晴れやかになり、力が湧いてくるのを感じました。参加する前には、布橋灌頂会に関する本を読んで勉強もしました。参加して強く印象に残っていることは、とても厳かで、自分に響くものがあったことであります。それは復興を信じる前向きな思いであり、この布橋で生まれ変わったと感じました。真っ暗な遙望館で復興を祈りましたが、目隠しを解くと正面のガラス壁の覆いが上がり、立山連峰が神々しく見えて、とても感動しました」と話した。復興を信じ、未来を前向きに生きる力になったようだ。

3　「布橋灌頂会の法場（舞台）」の故事来歴

復元した「布橋灌頂会」は、すでに述べているが、秋の彼岸の中日前後に、現在は３年に１度、立山山麓の富山県立山町芦峅寺で開催されている。最近では２０１４（平成26）年９月21日（日）に開催された。

霊峰立山の山麓・芦峅寺は、立山連峰が眼前にあって常に立山を拝むことができる所であり、立山に抱かれていることが実感できる場所でもある。そこで、布橋灌頂会が展開されている法場（舞台）を取り上げ、その由来や歴史などの要点をまとめた。

立山信仰の拠点「芦峅寺」

芦峅寺は古来、立山信仰の基地で神仏習合の宗教集落であった。立山山麓の常願寺川右岸にあり、標高４００ｍ前後に広がる段丘地で、立山三山が拝める宗教集落として絶

好の地である。

かつては立山禅定登山者の宿とする宿坊が道沿いに立ち並んでいて、禅定登山の基地でもあった。立山へ入山する際の最後の集落でもあり、立山連峰を越えて越中から信州へ抜ける道の関所の役割も果たしていた。

宗教集落の芦峅寺は、明治維新の神仏分離による廃仏毀釈が激しく行なわれ、貴重な仏教的文化財が散逸・破棄・消滅してしまい、坊家の宿坊が半減した。そして、芦峅集落に住む人々は、布橋から先をあの世と考えていたので、墓地をあの世である布橋の立山側に造った。

現在は室町時代の媼堂基壇や閻魔堂、閻魔堂に安置されている仏像、明念坂六地蔵や鎌倉時代の石仏群、あるいは芦峅の入り口にある庚申塚など、およそ８４０基の石仏群が現存しており、復元した布橋や、わずかに残っている旧宿坊の家や門や石塀・燈籠などと、芦峅寺集落にある富山県［立山博物館］の展示物、平安中期に起源を持つ雄山神社境内の祈願殿および立山大宮・若宮、立山開山廟などによって昔日の面影を偲ばせており、宗教集落としての独特の歴史を感じさせるが、集落の中央を東西に走る富山県道・立山公園線に沿って今風の家が立ち並んでいて、新旧が混在している。

この芦峅寺は、衆徒（僧侶）・社人（神官）の組織であった一山会の古記録によると、一千年有余の歴史が知られており、その氏族は山岳宗教を中心に特殊な気風を根づかせ育てた。

立山の開山は、縁起では７０１（大宝元）年から説き起こしており、２００１（平成13）年７月１日には「立山開山一千三百年大祭」が雄山頂上の峰本社で行なわれた。ただし、歴史家の間では開山が２００年前後下っている。

明治時代の中ごろから立山に近代（趣味・スポーツ）登山が移入され、立山登拝登山の案内人である中語が立山案内人へと変質し、近代登山の黎明・隆盛期には多くの名ガイドを輩出したのが芦峅寺集落である。１９５７（昭和32）年１月には、日本の第１次南極観測隊の設営隊に芦峅５人衆が参加し、南極大陸初上陸を果たしている。つまり、芦峅は立山信仰の村から立山ガイドの村へと生まれ変わった。現在は山岳ガイドはほんのわずかで、立山・剱岳・黒部方面の山荘・山小屋経営者が多くなっている。

１９６５（昭和40）年に「風土記の丘」の設計計画が開始され、１９６９（昭和44）年に雄山神社から閻魔堂・布橋・媼堂址などを含めた一帯の「立山信仰遺跡」を、文化庁が「立山風土記の丘」と選定した。全国４番目である。

「風土記の丘」とは、遺跡および歴史資料の保存および活用を目的として設置された史跡などの遺跡を中心とする野外博物館・公園である。従来、指定されている風土記の丘は、古墳を中心としたものであったが、「立山風土記の丘」は、山岳信仰を眼目とした異色の風土記の丘の誕生であった。1972（昭和47）年5月、一般に開所している。

「立山風土記の丘」をベースに、「立山における人と自然のかかわり」をテーマとし、その後の社会的要請に対応した博物館として、富山県［立山博物館］が1991（平成3）年3月設置、同年11月開館した。かつての立山信仰の歴史的遺構などを有機的に結びつけた広域分散型の博物館であり、芦峅寺集落のかなり多くの部分が博物館の施設に覆われており、3つのゾーン、すなわち「教界ゾーン」にはメイン施設の展示館、教算坊（旧三十三宿坊の一つ）、山岳集古未来館。「聖界ゾーン」にはメイン施設として遙望館（3面大型スクリーンあり）、閻魔堂と石造物群、布橋、媼堂基壇。「遊界ゾーン」にはまんだら遊苑、善道坊（旧宿坊）、嶋家（江戸時代の商家・国指定重要文化財）、有馬家（江戸時代の農家・立山町指定文化財）、かもしか園（国指定の特別天然記念物・ニホンカモシカの飼育）がある。つまり、芦峅寺集落に10以上の展示施設が集まっている。近代登山に関わる企画展も開催されていて、登山の行き来に見学する人が多い。

懺悔の儀式はこの世の「閻魔堂」

閻魔堂は、かつての中宮寺堂舎の一つで、芦峅寺集落の東端に位置した高台にあり、按摩王以下冥宮らを祀っている。江戸後期の資料には「閻魔堂」ではなく「集会所」と記され、布橋大灌頂の法会における橋や媼堂とは無関係に存在していた。しかし、布橋灌頂会は、後に閻魔堂を取り込み、布橋と媼堂に組み合わさって徐々に成熟し、完成度の高い法会となっていく。

1466（文正元）年6月、越中守護代・神保長誠が葦峅の祖母（うば）堂（のちの媼堂）・地蔵堂・炎魔堂（後の閻魔堂）の造営のため10貫文を寄進し、これによって閻魔堂が造営された。また、1590（天正18）年、加賀藩祖・前田利家が媼堂・布橋・帝釈堂などの諸堂とともに閻魔堂を修理させている。

明治初期、神仏分離政策によって媼堂をはじめ諸堂も廃棄するように加賀藩から命ぜられたが、閻魔堂は辛うじて破却を免れた。現在の堂舎は1928（昭和3）年に建て替えられたもので、間口4間・奥行5間の桟瓦葺・流造向

拝付きの堂で、堂内には壇上に本尊の木造閻魔王坐像を中心として、木造初江王坐像・木造司命半跏奇倚像・木造観音菩薩立像・木造大勢至菩薩立像が残されており、これらは杉材寄木造で南北朝時代の作とされている。ほかに木造泰山王坐像、不動明王坐像、不動明王像（頭部のみ）、6体の媼尊像（うち4体は媼尊像とは異なるようだ）が安置されている。これらの「芦峅閻魔堂の仏像群（13体）」は、1968（昭和43）年6月18日付、富山県が有形民俗文化財に指定した。なお、媼尊像は立山博物館にも9体（1体は閻魔堂の媼尊像のレプリカ）が展示されている。

媼尊は大きなものでも高さ50㎝程度だが、1体の底部に1375（永和元）年12月付で「しきふ阿闍梨」の墨書銘が見られ、これが最古のものとされており、南北朝時代から江戸時代にかけて作られたという。媼尊は山の神で、豊作と多産を願う女性神として畏敬されてきた。芦峅では昔からこの山の神「媼尊」に親しみを込めて「おんば様」と呼んでいる。

1829（文政12）年の当山古法通諸事勤方旧記や1842（天保13）年の諸堂勤方等年中行事により、江戸時代の芦峅寺一山における年中行事の種類と、その際の諸堂の飾付・行事次第・勤行作法などの詳細が分かるが、うち閻魔堂では年間に12度の縁日と5度の節句が行なわれていた。このほか毎年秋の彼岸の中日に布橋大灌頂の法会が執行されたことは言うまでもない。後に述べる「媼堂（遙望館）」を参照願いたい。

芦峅の女性にとっては「閻魔様」も「おんば様」も身近な心のよりどころで、閻魔堂は昔からの行事の場であり、女性同士が集う大切な場所である。したがって、閻魔堂の行事は年間を通じて女性が担う行事が多い。

現在は毎月24日の月参りから、「地獄のふたが開く」という2月10日のお参り。3月13日には閻魔堂の媼尊6体と立山博物館の9体のお召し替え、3月15日には堂内で団子まき。春彼岸の21日は三千仏法要後、数珠繰り行事を営み、無病息災と長寿を願う。4月8日の花祭り、4月22日の還暦祝い、8月のお盆供養、9月の戦没者供養と続く。芦峅の若い世代の女性は仕事で出られないことが多いが、これらの伝統行事が住民同士の絆を育んでいる。

このうち3月13日に行なわれる「芦峅寺のおんば様のお召し替え」は、2004（平成16）年7月16日に、富山県が無形民俗文化財に指定した珍しい行事である。媼尊は女性を成仏に導き、衣食の恵みを与えてくれる豊穣な女神であり、この女性の守り本尊に感謝と祈りをこめる行事であ

る。婦人会の役員が3月9日に晒し木綿の白布を裁断する。以前は麻布で、栽培から織り上げまで芦峅で行なわれていた。3月13日、集落の女性が早朝から閻魔堂に集まり、白装束を一針ずつ縫って次の人に回す。死者の旅立ちに着せる経帷子と同じように、縫い玉は作らずに縫い上げる。縫い上がると、雄山神社・開山堂の慈興上人にお参りし、お祓いを受けた後、新しく縫い上げた白装束に着せ替えて行事を終える。立山博物館の9体の着せ替えは博物館で行なう。この行事は江戸時代以前から受け継がれており、立山信仰の姿を偲ばせる貴重な行事である。なお、布橋灌頂会は閻魔堂から布橋へ明念坂を下るが、坂の両側に並ぶ石仏・石塔中、ひときわ大きな浮彫の「六地蔵石仏」に江戸初期、1685（貞享2）年の銘があり、庚申塚および媼堂跡の六地蔵と同一石工の作と考えられている。

この世とあの世の境界「布橋」

布橋は、媼谷川（媼堂川・媼ヶ谷ともいう）に架かる、自然地形を巧みに活かした丹塗の木橋で、「媼堂御宝前の橋」、「天の浮橋」などと呼ばれていた。芦峅寺の人々は、山仕事、畑仕事、猟などの日常生活では常にこの橋を渡っていた。また、立山登拝者たちも山への往復にはこの道1本であり、この橋を渡って立山へ向かい下山していた。

橋は『越中立山古記録』によると単純に「媼堂の前の橋」と呼ばれていたが、1747（延享4）年に芦峅寺衆徒・社人中から加賀藩寺社奉行に宛てた祭礼布橋の由緒書よると「天の浮橋」という神道的な名前で呼ばれており、それが一般的となってその後も長く続く。

長い間、布橋を「天の浮橋」と呼んでいたのは、布橋を神々の降り立つ橋として崇める信仰があったからであろう。神が降り立つとされた磐座（いわくら）（古神道における信仰の対象となる岩）が、媼堂の近くに祀られていた。その磐座は「影向石（ようごうせき）」（神が一時姿を現したとする石）と呼ばれ、柵で囲って大事にされてきた。その様子は立山曼荼羅にも描かれているが、「天の浮橋」や「影向石」には、芦峅寺における仏教以前からの神道的な世界を見出すことができる。

現在のように「布橋」と呼ばれるようになったのは、江戸後期の文政期（1818～30）からである。名前が「天の浮橋」から「布橋」に変わったのは、江戸前期には、芦峅寺一山の宗教者は、神道的な社人が仏教的な衆徒よりも断然多かった。それが江戸中期ごろに逆転し、衆徒が圧倒的に多くなり、次第に衆徒を中心とした仏教的世界が優勢となったことが一つの要因として考えられる。それに影響

芦峅寺布橋より霊峰立山を拝む

され、布橋大灌頂の法会が神道的性格の強いものから次第に仏教的性格の強いものに変化していった。さらに衆徒たちによって、日本各国の布教地で布橋大灌頂の法会が強力に宣伝されたことにより、それが次第に認知され、橋の名前も「布橋」が一般的になったといわれている。

「布橋」という呼称は、１６１４（慶長19）年、加賀藩主夫人・芳春院と玉泉院が芦峅中宮寺媼堂を参詣に訪れ、その折の記述に「御宝前之橋ニ布橋を御掛、大分之儀式被為成」とあり、これが「布橋」という言葉の初出であり、橋そのものを「布橋」と呼称したのは、１８２０（文政３）年の橋札銘文に「媼堂前布橋」とあるのが初出である。橋に布を敷いて布橋を渡り、媼堂へ参詣するという「布橋」と「媼堂」が一体化した宗教行事が行なわれたが、立山曼荼羅の初期のものと考えられるものには、媼堂と橋を描き、一筋の白布で結ばれている図柄がある。

橋の成立については、１６７４（延宝２）年の一山旧記控に、１５９０（天正18）年に中宮寺媼堂・同橋などの修理が行なわれたという記載が見られ、１８２０（文政３）年の布橋再建の橋札銘文に、１６０６（慶長11）年に造営されたと記載されていることから、安土桃山時代にはすでに架けられていたと考えられる。

布橋灌頂会は布橋の行道を中心とする儀礼であるので、布橋は不可欠の施設であった。そして、布を敷くのは神道的には神事に塩や米をまくのと同じく、貴重な品々の霊力によって神聖化する方法のひとつでもあり、仏教的には、浄土思想に基づく二河白道の思想を写したものである。

布橋は独自の意義深い特異性を有している。それは橋を構成する各部分は、仏教思想に基づくさまざまな数字に合わせて造られており、そこを渡った人々の罪は消滅するものと考えられていた。橋の長さ25間は二十五菩薩（媼堂御拝より橋詰めまでの距離が25間で、二十五菩薩とする説もある）、高さ13間は十三仏、幅2間のうちの実質幅9尺は九品の浄土、桁の数48本は阿弥陀如来の四十八願、敷板の数108枚は百八つの人間の煩悩の数、欄干の擬宝珠の数6個は「南無阿弥陀仏」の六字名号あるいは六地蔵菩薩、釘・鎹（かすがい）の数3万8008本は法華経の文字数などの意味が込められている。

橋を渡る際の赤い橋は、それぞれ次元を異にする世界を渡る橋であり、奈良・平安時代には神を迎え祀り送る場であり、鎌倉・室町時代では「迎え講」（念仏行者の臨終にあたって阿弥陀如来が諸仏とともに極楽より来迎する様を演ずる儀式）を行なう場でもあった。「迎え講」の代表的なものとしては、奈良の当麻（たいまでら）寺の「迎え講」と立山の布橋灌頂会が挙げられる。この布橋灌頂会における橋は、此岸と彼岸を隔て、かつ結ぶだけでなく、悪人は目がくらみ墜落すると言われるように、ここを渡る人を聖化する神聖な橋でもあった。また、布橋灌頂会は、神迎え・神と人の交歓・神送りという日本の伝統的な祭祀形式を基本に据えた儀式であり、橋は聖の象徴として、生と死という肯定と否定の両性質を合わせ持っている。

橋に敷かれている三筋の白布は浄土へ至る白い道を表現しており、浄土思想に見られる「二河白道」をイメージしたものである。浄土に往生できるのは、努力を重ねた末に、初めて到達できるということを比喩的に表現した。

1820（文政3）年に破損の著しかった布橋を掛け替えたことと、諸国配札活動が相まって多くの参詣者を迎え、行事が大規模なものとなっていった。そして、天保期（1830～44）にピークを迎える。

布橋は和歌山県、高野山奥の院の御廟川に架かる御廟橋（無明の橋）、三重県、伊勢の五十鈴川に架かる宇治橋とともに日本三霊橋の一つとされている。ただし、伊勢の宇治橋の代わりに「日本三古橋」とも呼ばれている京都府、山城国山崎の淀川に架かる山崎橋（奈良時代の僧・行基が架

けたと伝えられる）や「日本三大奇矯」とも呼ばれている栃木県、日光の大谷川に架かる神橋（しんきょう）があてられる場合もある。

布橋の遺物としては、1614（慶長19）年の棟札および1624（寛永元）年の擬宝珠（加賀三代藩主・前田利常が寄進）が現存する。

明治初期に加賀藩の神仏分離政策で廃絶したが、1970（昭和45）年、立山風土記の丘整備に際し、文化庁によって復元架設された。

あの世の極楽往生が約束される「媼堂（うばどう）」（現・遙望館）

媼堂は媼谷川の左岸、閻魔堂から布橋を渡った所に位置し、祖母堂などとも記されていた。江戸時代末までは中宮寺の中核的な堂としての存在であったが、明治初期の神仏分離政策によって取り払われ、大部分が田畑または、北側は芦峅寺の共同墓地とされた。

1970（昭和45）年に「立山風土記の丘」の建設にあたって、媼堂の基壇（媼堂の基部に一段高く築いた基礎）が発掘され、往時の媼堂の建築様式は入母屋造・唐様であったことが分かる。また、富山県高岡市の国宝瑞龍寺を建立した加賀藩御用大工・山上善右衛門の手による堂の設計図が残っており、それによると「柿葺行六間　梁五間　奥の間弐間通し、四各間下表内弐間にて半ゆるぎ」であった。

江戸時代までは堂内には主尊3体の媼尊像が須弥壇上の厨子に祀られ、その両脇壇上には江戸時代の国数にちなみ66体の媼尊像が安置されていた。媼尊像は木造の坐像で、その姿は、容貌が醜悪で、髪が長く、目を見開き、乳房を垂らし、片膝を立て、なかには口を開けたものや般若相のものもある老婆で、南北朝時代から江戸時代にかけて作られたようだ。

芦峅寺権教坊本「立山略縁起」などによれば、媼三尊は天地開闢（かいびゃく）（天と地が初めてできたとき）のとき左手に麻の種、右手に五穀の種を持って高天原から芦峅に天降し、衆生に衣食を与え、万物の母となり、寂滅後は冥界を主宰し、人の死をつかさどったという。また、芦峅寺の諸縁起から、媼三尊はそれぞれ大日如来（金剛界・胎蔵界）や阿弥陀如来・不動明王に習合されていたことが分かる。

現存する遺物として、1547（天文16）年、越中國守護代・神保長職の家来・寺嶋職恵が媼堂に寄進した黄銅製仏餉鉢（雄山神社祈願殿蔵、立山博物館展示）がある。この鉢に刻まれた「葦峅媼御本器」の刻銘は、資料的には媼

尊の仏名の初見である。

芦峅寺の諸堂のなかでも媼堂は際立って年中行事が多く、媼堂信仰がいかに村民に浸透していたかを知ることができる。「天保十三年度　諸堂勤方等年中行事」により諸堂の年中行事を一覧にすると次のとおり。

	縁日	節句	祭礼	法要
御媼堂	60	5	40	3
帝釈堂	12	5		
大宮	36	5		
若宮	12	5		
講堂	12	5		
焔魔堂	12	5		
開山堂	12	5		

媼堂が加賀藩に保護されながら芦峅寺の人々に親しまれ、いかに多くの行事が行なわれていたかが分かる。

芦峅寺の人々はもとより、越中國主・佐々成政や加賀藩初代藩主・前田利家らの戦国武将たちも、この異形の媼尊を芦峅寺では最も重要な尊体と位置づけ、信仰してきた。

加賀藩藩主・前田家も芦峅寺における祈念はこの媼堂を対象とし、その夫人も参詣していただけに、媼堂の解体は中宮寺の廃寺にも等しく、芦峅衆徒たちの存在の否定ともなった。

むすび

調査の結果、「布橋灌頂会」は、かけがえのない無形文化財であり、文化遺産でもあると思えるようになった。公益社団法人日本ユネスコ協会連盟は、地域の文化・自然遺産を未来に伝える市民活動を「プロジェクト未来遺産」として登録し、応援している。「布橋灌頂会」が２０１１（平成23）年12月26日、第３回「プロジェクト未来遺産」に富山県では初めて登録された。女性の救済を目指す儀式の独自性や、地域ぐるみで伝統を受け継いでいる姿勢が高く評価されたもので、登録の団体名を「布橋灌頂会実行委員会」、プロジェクト名を「現代の癒し『布橋灌頂会』を永遠に語り継ぐために！」となっている。

布橋灌頂会実行委員会は、２０１４（平成26）年度、サントリー文化財団の第36回「サントリー地域文化賞」も受賞している。受賞理由は「１３０年余り途絶えていた女人救済の儀式を現代に復活させ、立山信仰の象徴的イベントとして新たに発展させてゆこうとする取り組みが高く評価された」とある。

［緑爽会講演　再録］

山脈・人脈――歩いてきたみち

國見利夫

かつてこの緑爽会会報に「山脈・人脈」と題して、山と先輩岳人について連載したが、不覚にも体調不良で連載は6回で中断してしまった。今回の機会に、続編という訳ではないが、そういう流れで山と人を併せて、私の山を回想してみたい。

なぜ山だけでなく、人が大事なのか。

ほかのスポーツ、特に競技スポーツで考えてみる。例えば野球。出場選手は9人だが、巨人軍の例でいえば選手は90人もいる。投手も捕手も10人以上いる。試合のとき9人のメンバーに選ばれるためには、同じポジションに属するほかの仲間は、ライバルでしかない。

ところが登山は違う。一緒に登る友人はライバルではなく、ザイル仲間だ。ザイルを結び合ったとき、命は相手に託す。仲間が私と同じ技術を持っていることを信じているし、相手が私より能力が優れていれば、一層いい。

そんなことで、山と人について併せて話を進める。「山脈・人脈」と題する所以である。

少年期の登山

父親に連れられて大山・丹沢国定公園の大山に登ったのが、初めての登山。1941（昭和16）年のことで、16歳だった。旧学制で言うと中学4年、今の高校1年生にあたる。学生帽、詰め襟の学生服に、足元は朴歯といって、天狗様が履いているような台座が厚く、歯が太くて高く、鼻

緒が白くて太い下駄で、いわゆるバンカラ・スタイルだった。

山歩きが気に入って、その後も数回、大山に単独で登った。ルートは男坂と女坂があった。聞いてみると、家内もそのころ大山に登ったというから、神奈川県の人は、阿夫利神社のある宗教登山の山として、多くの人が登っていたようである。

先日、墓参で小田原に車で出かけた。厚木・小田原自動車道に入ると、まず目に入るのがこの大山。どっしりと裾野を広げて座る大山は、本当に大きく、見事な山だ。だから私は年に数回、初めての山である大山に接している。

続いて丹沢だ。このころから同じ中学の同窓に2人の友人が現れ、一緒に登ることになった。また、この中学には英語教師として石渡清先生がいて、一緒に登ることはなかったが山に詳しく、いろいろ助言をもらって登った。後で知ったことだが、この石渡先生は戦後の１９４９（昭和24）年、日本山岳会に入会されている（会員番号４１５５）。そして、１９５０年から60年ごろに、雑誌『山と溪谷』に山岳の古典文献の解説や蒐集の苦心談を長く連載しており、私も毎号これを楽しみにして読み、その影響で以来、山の書物の蒐集にも手を染めることになる。そんな訳で、私にとって二重の意味で山の先輩だ。

今日はその一編「烏水著作の蒐集」の直筆原稿を持って来たので、後でご覧いただきたい。この直筆原稿は、山学同志会の斎藤一男さんのお宅にお邪魔した際に、同氏が蔵

書とともに所蔵されていた原稿で、「この石渡さんは私の中学時代の恩師です」と伝えたところ、気軽に「それじゃ、君にあげる」と言って手渡してくれたものだ。

斎藤一男さんについては、また後で紹介することになると思うが、同氏も高名な山岳書の蒐集家で、私と同年だから戦中派。戦争と水害で蒐集した山の文献のほとんどを失ってしまったが、その後も蒐集を続け、ついに自宅に置き切れず、奥多摩に山荘を建て書庫にしたという蒐集家だ。

元金沢文庫館長の熊原政男さんが、山の書誌家としてこの斎藤さんと石渡さんの2人を挙げている。

山の話に戻る。大山から丹沢に目を向けるようになったのは、この石渡先生の助言からだが、丹沢の大倉尾根や表尾根までは、大山と同じように、相変わらず履き物は高下駄で登っていた。友人2人とともにやがて沢登りを目指すようになると、さすがに高下駄では駄目で、女性の駒下駄の使い古しで、歯のほとんどすり減った、赤い鼻緒の下駄に替った。

沢登りでは、どうせ沢の出合で草鞋に履き替えて、それまでの履き物はザックに納める訳だから、登山靴や大きな高下駄ではザックが膨らみ、ザイルさばきの邪魔になる。街を草鞋がけで歩く訳にはいかないから、このスタイルが流行った。

すり減った歯の赤い鼻緒の女物の下駄を履いて、肩にザイルを下げて――というのが当時の丹沢スタイルで、得意になって街を闊歩したものだ。まだ麻ザイルの時代だから12㎜の太いもの。今の8㎜のナイロンザイルのように、スマートではなかったと思う。古い女物の駒下駄など売ってはいない。幸い私の所は妹が3人と母親で、古い下駄がたくさんあった。戦時下、最後は下駄も配給だったから貴重品。これに便乗して、友人に古下駄を高価で譲り、丹沢通いの交通費に充当した。

この丹沢スタイルはその後、戦後も長く続いたが、これは神奈川県だけだったのか、東京ではどうだったのか。もし神奈川県だけだったとしたら、高下駄から女物の古下駄の元祖は、私だったのかもしれないと自負している。

丹沢の沢登りは、登り尽くせないほどあった。オバケ沢や女郎小屋沢など、変わった名前の沢にも入った。しかし、中学を終えるころまでに入れた沢は、わずかだった。

戦時下の登山

1943（昭和18）年、中学は卒業したが、大学受験に失敗し1年間の浪人生活。この年はもう大威張りで山に登

れる環境ではなかった。2年前に始まった大戦はすでに敗色が色濃く、各海戦はすべて敗北、次々に若者が戦死していった。10月には出陣学徒壮行会が明治神宮外苑で華やかに行なわれたが、これは従来、大学・高等専門学校生徒は徴兵年齢の20歳になっても卒業まで徴兵を猶予されていたが、この日をもって理科系を除き文科系の学生はすべて徴兵されたのだった。12万人の学生が動員され、すべて最激戦地に配属されてほとんどが還ってこなかった。

この浪人中、一度だけ我慢できずに丹沢に出かけた。このときは下駄ではなく、編上靴に木銃を担いで出かけた。木銃は集落の外れに隠しておいて、大倉尾根から鍋割峠まで往復、隠しておいた木銃を拾って帰った。

なぜ木銃なのかというと、戦時中、敗戦まで登山は禁じられていなかった。ところが、登山者の方が遠慮して、東京近県の岳人は行軍登山と称して各県から木銃を肩にして山を伝い歩き、明治神宮を目指して戦勝を祈願することが流行った。なかには九州からはるばるやって来るパーティもあった。この神宮行軍は、この年から始まったのだが、明治神宮参拝のほか、併せて日光白根山などにも登っている。翌20年には高等専門学校行軍山岳訓練大会が開かれ、7校が1泊2日、立山で速さを競っている。

いずれも戦時下、登山の生き残りを考えて登山関係者が考え出した山行だが、この現象を私の尊敬する岳人、織内信彦さんは「行軍登山は登山に非ず」と警鐘を鳴らしている。織内さんは、時代に流されない、権力に屈しない明治人の気骨を持った立派な人だった。織内さんについては、日本山岳文化学会の機関誌２００３年第1号に、想い出を書いたことがある。

１９４４（昭和19）年、明治大学に入学した。大先輩の斎藤さん（名前を失念）が明大山岳部ＯＢで、「そんなに山が好きなら山岳部に入れ、俺が手続きをしておく」ということで、私は山岳部に入ったつもりでいたのだが、なんの連絡もないうちに8月には学徒通年動員が発令された。中学・高等女学校生徒以上が、兵役に召集された若者に替る補充労働として動員の指令が出て、私も数ヶ月の大学生活だけで工場勤務に、そして引き続き軍隊にとられてしまった。大学山岳部は閉部の措置があった訳ではなかったようだが、もう機能できなかったのだろう。何かの自己紹介に「山岳部入部」と書いたような気がする。これは錯誤とはいえ経歴詐称で、気になるところだ。

軍隊時代のエピソード

後年、村井米子さん（会員番号３００１）から聞いた話。戦中のこと、娘さんが戦時下の食糧不足で結核に冒され、病床にあった。その娘さんが、米軍機がしきりに秩父連峰や赤城山上空を飛ぶのに気付いた。「お母様、今日の飛行機は霧ヶ峰や菅平よ」「あら、清水峠の上だって」「今日は八ヶ岳だの上高地だのと、山の上ばかり飛んでいるわ」。病でもう山に登れなくなった娘さんが、しきりにラジオの防空情報を聞いて気付いていた。

ある日、応召した山仲間から村井さんに電話が来た。どこにいるのかと聞くと、東部軍司令部で情報係だという。「それじゃあ、あなたがラジオ放送の原稿を作っているんでしょう。米軍機が八ヶ岳だの上高地だの、山ばかり飛んでいる」「アッハッハ、気が付きましたか。少数の敵機に自由に飛ばれるといやになる。峠巡りは勿論、スキー場巡りもやっています」と高らかに笑ったという。

この人が名誉会員の中屋健�式さん（会員番号１２４７）で、旧制高校・東大でともに山岳部。日本山岳会では副会長も務められた。東大名誉教授でもあった。

なんでこんなことを話したかというと、昭和20年春ごろから私も東部軍の作戦室にいた。所属は中屋さんとは違うが、皇居北の丸・竹橋の東部軍の地下壕で同室だった。このルーム（注・ＪＡＣ集会室）の10倍はある広さで、部屋一杯の日本地図が山も川も立体で再現され、敵機の位置はライトで表示される。後日、戦後になっての中屋さんの話では、「軍は国民に敵機の行動を逐一知らせることを作戦上、喜ばないことがあって『敵は八ヶ岳東方を北進しつつあり』というような表現になるのだが、軍幹部は八ヶ岳を知らない。場所を教えたら『ならば甲府北方八ヶ岳にしろ』という。甲府は山梨県で、八ヶ岳は長野県だからまずいと言うと、やっと八ヶ岳でＯＫが出た」という。

中屋さんは日本陸軍の閣下の無能さにあきれていた。

一方、私の任務は同じ地図を見ながら、東京防衛に当たる東部軍第１戦隊、第２戦隊との交信だから「敵１機小田原上空東進中」とか「敵２機平塚上空、第１戦隊出撃せよ」と正確に伝える必要があったから、好きな山に米軍機を飛ばせることはできなかったし、仮に中屋さんと任務が逆であったにしても、道楽の山を戦闘中に洒落で楽しむ余裕は、私にはなかっただろう。中屋さんは陸軍中尉、私はまだ幹部候補生で、半人前の軍人だったから……。

村井米子さん、中屋さん、私とで、そのうち村井さんの娘さんの思い出を含めて３人で一緒に話をしましょうと、

折を見ているうちに村井さんは１９８６（昭和61）年、続いて中屋さんもその翌年の３月、相次いで亡くなられてしまった。

１９４５（昭和20）年８月15日、日本が敗れて戦争が終わった。待ち望んでいた平和がやって来たが、敗戦の翌日から食糧は姿を消し、インフレで物価は毎日のように上がったから、紙幣は紙くず同然。物価は戦中の90倍になり、国民生活は壊れてしまった。

そんなある日、久しぶりにサブザックを背に、愛用の高下駄で家を出た。しかし、目指す所は神奈川県中部にある国府津。ここに叔父夫婦がいて、２人とも教師だが兼業農家だった。背にしたサブザックには山道具は入っておらず空で、帰りに野菜や米のヤミ買い食糧で一杯になる。

しかし、田畑の中に立つと、遠くにそびえる大山が眺められた。〝国破れて山河あり〟で、大山はその姿を変えていなかった。山への回帰の瞬間だった。当時まだ乗車制限があり、遠距離の乗車券は手に入らなかったから、やはり丹沢・奥多摩の範囲から出られなかった。相変わらず高下駄と赤い鼻緒の駒下駄スタイルだった。

登山活動を再開

１９５０年代に入って旧山小屋倶楽部に入会し、我流登山から抜け出す。この会は代表が中村謙さんで、１９３５年に日本山岳会に入っているから、会員番号１６１０という古い会員で、その山行回数は１１２３回。ガイドブックも多数出していた。この倶楽部で南・北・中のアルプスを体験することになる。

この倶楽部で一人の友人ができて、この人が谷川岳を目指していることを知り、会山行とは別にしばしば谷川岳を訪れた。初めは南面のヒツゴー沢、オジカ沢、鷹ノ巣沢その他で、南面の沢は丹沢の延長線上にあり、楽しい遡行だった。

いよいよ一ノ倉沢正面に対峙した。勿論その前にマチガ沢にも入った。一ノ倉沢は眺めているだけだと勇壮な姿だが、いざ登る目で見ると、正に地獄の門に見えた。多くのクライマーがここで墜死している。初めてのルートは２ルンゼ上部のＢルンゼ。烏帽子のスラブは逆層だから、岩につかみどころがない。掌を岩に叩きつけて、摩擦面を作って攀じる。足は地下足袋に草鞋を着ける。

雪解け時は特に落石が多い。小銃弾のようなスピードで目の前のスラブに叩きつけられて、火花が散る。当時はヘ

ルメットなどないから、頭にはハンチングだけ。落石に当たったら一巻の終わりだ。Bルンゼに入ると落石はなくなったが、ここからは垂直の岩壁登りだ。トップは私、ラストが友人の浅利君、そしてミッテルには新人の若者。ラストの浅利君が助言を与える。「右足、もう少し上に上げろ。スタンスがある。右足だ。箸を持つ方の足だ。今度は左足のスタンス。左足だぞ。お茶碗を持つ方の足だ。」

みんな極度に緊張しているから、右足で箸を持ち、左足でお茶碗を持つという助言の誤りに気付かない。

谷川岳ではA・B・C・Dの各ルンゼ、α（アルファ）ルンゼ・β（ベータ）ルンゼを登っている。後年、衝立岩正面壁やコップ状岩壁が登られるようになるが、私のころはまだヘルメットも埋め込みボルトもなく、ザイルは12㎜の太い麻ザイルで、衝立岩など思いも及ばなかった。

ここに当時使ったハーケンとカラビナを持って来ている。こんな重い物を10本、20本と持っての登攀だから、条件も悪い。

後年のことになるが、岳友のどんぐり山の会の出口隆好君が一ノ倉沢・衝立岩正面壁で墜落、宙吊りになっていると新聞の朝刊に大きく報じられた。昭和35年9月のことだ。この日、出口君が正に登攀を終え、早朝一番で帰宅、背広に着替えて仕事場に着くと、所長が出口君の顔を見るなり「出口君、君が谷川岳で宙吊りになっていると新聞に出ている。早く行って助けてこい」と言う。出口君は確かに昨日、正面壁を登ってきた。それがなぜ遭難なのかと思ったが、所長が急き立てるので仕事をやめて家に帰ると、まだ手も付けていなかったザックを肩に家を出た。とにかく土合山の家の中島喜代志さんに会えば分かるだろう、と。

中島さんの届けでは、当日この岩に取り付いたパーティは「どんぐり山の会」と「蝸牛（かたつむり）山岳会」で、遭難発見者にこの2パーティの名を示したところ「どんぐり山の会だ」と答えたので、「ならば遭難者はどんぐりの出口だ」ということで記者発表したのだと言う。発見者が東京の人で「どんぐり」の印象はあったが、神奈川の「蝸牛」の印象が薄かったのだろう。

谷川岳の遭難といえば、すぐ緑山岳会を連想する。遭難救助に欠かせない山岳会だ。寺田甲子男率いるこの会の救助隊が、遺体を担架に載せて旧道を下るのをよく見かけた。一ノ倉沢の墜落事故は警察や自衛隊では手に負えず、緑山岳会に頼るしかなかったのだ。救助が終わるとメンバーは水上の料亭に入り、芸者を挙げて盛大な〝お清め〟をする。

蛮勇の集団と見られ、その是非にいろいろ意見もあった。

しかし、緑山岳会の寺田甲子男代表は「ロクオロシの甲子さん」の虚名が先行しているが、根は親切な、友情に篤い男だった。私は彼の主宰する「高度登山家集団ＯＹＧ（おやじ会）」でお世話になった。私より1歳上の大正13（１９２４）年生まれで、一昨年、平成22年に亡くなられた。87歳。

緑山岳会の幹部の一人、半沢稔氏とは東京都山岳連盟の行事の山行に役員として一緒に参加したが、彼も訥弁だったが、善良な青年だった。「鬼の伊助」と恐れられていた坂口伊助氏もいい青年だった。脳がはみ出てしまった谷川岳での墜落遺体を無造作に背負い降ろしたり、喧嘩上手で、身近にあるバケツや洗面器をいきなり相手にかぶせ、一撃を加えると早々に姿を消す。小柄だから決して四つに組まない。自分を知っての喧嘩上手。「鬼の伊助」の異名も、こんなところからきたのだろう。

ある日、衆議院事務局の私の所に参議院事務局の青年が訪ねて来た。伊助さんら緑山岳会のメンバーが中心になって、一般市民を対象に登山教室を開いていて、その講習生だった。今日はその修了式で、坂口先生が修了証書を渡す際「衆議院に國見という男がいる。俺の山仲間だ。挨拶しておけ」と言われて来たという。坂口先生の山仲間なら立派な登山家だ。身近に立派な登山家がいて嬉しい、と言って大きな土産を持って現れた。このころ「鬼の伊助」は「仏の伊助」になっていたらしい。伊助さんのお陰で私まで立派な登山家になってしまった。

１９８８（昭和63）年、ソウル山岳連盟の招きで雪岳山（ソラクサン）に登った。20名近い集団登山だったが、伊助さんと私は最後の、さらに離れた後尾を二人で語りながら歩いた。当時、もう体調が弱っていたのか、途中から下山してしまった。その4年後の１９９２（平成4）年、彼は本当の「仏」になってしまった。まだ60歳だった。

再び谷川岳のこと

１９５８（昭和33）年5月、友人と二人で残雪期の谷川連峰縦走を試み、三国峠から平標小屋に1泊。ところが、翌日は降雪しきりで、やがて吹雪になった。ラッセルもきつくなった。谷川岳に登っても登頂の喜びもあるまいと、万太郎山から吾策新道、万太郎谷を下ることにした。持参した地図は「四万（しま）」だけで、エスケープ・ルートの「越後湯沢」は持っていなかった。ガイドブックのかすかな記憶を頼りに下ったが、ここで相棒が滑落、立木に激突して膝を強打してしまう。

私たちはその前に、万太郎山の稜線で捜索活動中の高波吾策さんに会っていて、「今から土樽小屋に行くところだ」と話すと、「ならば家内に伝えてくれ。遺体を発見したので夕方までに降ろす。遺体焼却のための燃料伐採の許可を営林署に連絡してほしい」と託されていたので、ゆっくり下っていられない。相棒は後で下らせることにして、独り小屋を目指す。相棒は大分遅れたが幸い独りで下ってきた。

この日は遭難者の遺族もやって来て、通夜、告別式が行なわれた。邪魔になることを恐れて早々に小屋を後にした。しばらく下った所で、吾策さんの打つ土樽の鐘が鳴った。私たちへの「さようなら」の挨拶なのか、通夜の開始を告げる鐘なのか。私たちは無言で山の家に向かって頭を下げた。

このコースは昨年の同じ残雪期、単独の女性が遭難した場所で、幸い彼女は生存して救助されたが、後日、山と溪谷社か朋文堂か忘れたが、私はガイドブックの誤りに厳しく抗議した。後で丁重な謝り状が届いた。

この縦走コースをその後、１９６２（昭和37）年の同時期、別の仲間と歩いたが、このときは雪が全くなく、アイゼン・ピッケル・ワカンの完全装備は全く無駄な持ち物で終わった。この順序が逆だったら大変なことになるはずだ。谷川岳はやはり魔の山だ。

梅雨どきの雨が降りしきるなか、いつもの相棒と一ノ倉沢出合にテントを張った。初めから登るつもりはなく、テントの中で寝ているつもりだったから登攀用具は全く用意せず、仕入れた古本と民謡集、それに炊事用具だけ。本を読み飽きるとドラ声で民謡を歌う。そこへ土合山の家の中島喜代志さんが現れて、テントの中を覗き込む。雨中の岩登りを監視するパトロールらしい。一ノ倉沢に寝に来たと言ってもなかなか信じられないらしく、雑談的に濡れた岩場の危険をさりげなく話して帰っていった。

このころの私たちは、登れなくても一ノ倉沢出合にいるだけで心が安らいだ。一ノ倉沢の直立する８００ｍの岩壁は穂高のそれ以上で、切り立つ壁を見上げていると首が痛くなる。寝て見るに限るが、登るときは寝て見る訳にはいかない。こういうときこそシュラフに入って終日、岩壁を仰ぎ見ることができるのだ。

後年の１９７６（昭和51）年、谷川岳にゆかりの数名の岳人を誘って、中島喜代志さんの土合山の家で終日、谷川岳談義に花を咲かせ、翌日、旧道巡りをやろうと提案した。一人は杉本光作さん。徒歩渓流会の創立者で、谷川岳に3

００回以上登った人。山口清秀さんは日本山岳会会員（会員番号１１５１）で、同じく徒歩渓流会の創立者。ひたすら谷川岳に登り、一ノ倉沢の黎明期をつくった人で、山行は４００回近く。一ノ倉沢奥壁や二ノ沢左俣など、単独でひたすら谷川岳に登る。山ばかり登っていてビルの一つも建てられなかったと言っていたが、１９７７（昭和52）年に訪ねたら、渋谷駅前に立派なビルを建設中だった。著書『軌跡』は死後完成した。単独行が多く、この日も私たちはマチガ沢から一ノ倉沢へ向かったが、山口さんは独りマチガ沢本谷を遡行していった。70歳だった。

その他の参加者は山岳巡礼倶楽部の高橋定昌さん（注・高橋さんについては私が日本ネパール協会「会報」〈１９８８年12月号〉に想い出と弔辞を書いている）。ほかに竹内辰儀さん（辿路山岳会）で、いずれも大正ひと桁生まれの、昭和初期の谷川岳に情熱を傾けた人たちだった。谷川岳登攀のよき先輩だった。

職場に山岳会誕生

１９６１（昭和36）年に若者が職場に山岳会をつくった。衆議院山岳会。当然のように入会の申し込みに出かけた。ところが、発起人のその友人は「大丈夫ですか、そのお歳で」ときた。私のそのときの年齢は36歳。当時はまだ中高年登山ブームの前だったが、36歳はまだ老人とは思っていなかった。「入れろ」「入れない。そのお歳では」の問答が、当時の職員組合の機関誌の「雑報欄」に面白おかしく創作され、以後、会う人ごとに「大丈夫ですか、そのお歳で」とやられてしまった。勿論入会を果たし、委員の一員となったが、翌年の本格年度から会長制をとることになり、文句なく私が会長職に就いた。

以降、１９８２（昭和57）年まで20年間、会長職にあった。役員には大学のワンダーフォーゲル部でリーダーだった者、地域で小さな山岳会を持っていた者、川崎山岳会など老舗の山岳会などの経験者がいたから、運営はスムーズにできた。職場山岳会のいいところは、コミュニケーションが取りやすく、リーダー会、委員会を職場の休憩時に所内の喫茶店で済ませたり、会員集会は所内の集会室が使えて集まりやすいこと。反対に困ることは、春山合宿、夏山合宿などの際は、右隣や左隣の相棒も休暇届けを書くという状況で、気の弱い者は合宿に参加できないことになる。当時は5月の祭日は3日と5日くらいで、その間に日曜日が入って3日間。昭和の日（4月29日）、みどりの日（5月4日）などなかったし、土曜日も休日ではなかった。

春山合宿は、世間並みに北アルプスや谷川岳が多かったが、昭和46年の越後駒ヶ岳、昭和48年の飯豊連峰が良かった。なにより残雪がどこよりも豊富で、ほかのパーティの数が少なく、存分に雪上訓練ができた。

職場で認定されたサークルは年に1～2回、全職員を対象とした行事を行なうことが望まれており、そのために実施した行事には補助金が出た。夏に公開山行として北アルプス縦走、尾瀬などを実施した。南アルプスは参加者が少なかった。

尾瀬は木道がまだ単線だったから、燧ヶ岳からのパーティと鳩待峠からのパーティが対面すると、ジャンケンで負けた方は木道を降りて湿原に立つことになる。湿原は今は乾燥しているが、当時は水量豊富で、山靴がすっぽりと沈んでしまう。30人のパーティを湿原に立たせないために、トップのジャンケン担当者の責任は重い。

鳩待峠から燧ヶ岳に向かって、ひたすら木道を踏み外さないように、あるいは水草を眺めながら歩いていると、左手の大きな山を見過ごしてしまう。この山は景鶴山。私たちはこれに登った。貴重な自然の宝庫だった。この山は私たちが登った翌年から、自然保護のために登山禁止となった。だからこれ以降、誰も登ってはいないはず。貴重な体験だった。

ある年の春山合宿、谷川岳・マチガ沢出合でテントを張った。そこへほかのパーティが現れ、我々のテントを見て「お坊さんの山岳会が来ているぞ」と叫んで通った。当局が作ってくれたこのテントには、大きく「衆議院」と書いてある。霊寿院などお寺の「院」から連想したのだろう。衆議院と山岳会はなじまないのだろうか。

１９７６（昭和51）年7月4日、衆議院事務総長の藤野重信さんが、前穂高岳・重太郎新道を下山中に転倒、滑落遭難死され、これが新聞に大きく報道された。併せてザックの中から拾い集めたゴミが出てきたことも、美談として強調されていた。このＪＡＣルームの右隣一帯は衆議院の用地で、今はビル街だが、当時は衆議院宿舎数戸があって、藤野さんも私もここに住んでいた。一度訪問したことがあったが、そのときも山に出かけて留守。私より多く登っているようだった。

この遭難死と、この遺体収容作業を山岳会が行なったことを知って現れたのが、遥か昔、帝国議会の書記官長（今の事務総長）を務められた大木操さんだ。大木さんは初期の日本山岳会会員（会員番号３１５）で、神代の人と言われた人。旧制一高旅行部の創設者だ。大木さんについては

緑爽会会報の「山脈・人脈・思い出の人」の第1回で取り上げたので重複を避ける。吉祥寺の大木さん宅へ、会員数名と一升瓶をぶら下げてたびたびお邪魔した。酒好き豪放で、議会談、山の話が尽きなかった。「ウェストンに叱られた話」の仕掛け人は、実は私である。

こんな次第で、衆議院事務局にも登山愛好者はいた。さらに議員では橋本龍伍氏（文部大臣、厚生大臣）は会員だったし、子息の橋本龍太郎氏（内閣総理大臣）も会員で、ヒマラヤ遠征隊の隊長として出かけている。今の自民党の大幹部、谷垣禎一氏は東大スキー山岳部所属、参議院議員の田英夫氏は学習院大のスキー山岳部員。所属はなかったが山好きで、後に環境庁長官として尾瀬の林道工事の中止を決断、尾瀬の自然を守った大石武一氏もいる。このうち田英夫、大石武一さんとは後に尾瀬を守る懇話会の立ち上げで一緒に仕事をした。大石さんについても会報の「山脈・人脈・思い出の人」で述べている。

東京都山岳連盟のこと

都岳連は1948（昭和23）年に発足、25年後の1973（昭和48）年には、やや〝金属疲労〟を起こして問題を抱えていた。一部の団体の独走、非民主的人事、それに理事長による選挙違反事件までであった（注・昭和41～42年、当時の会長・平井義一氏は衆議院議員。その選挙にあたり、当時の理事長・石田君が加盟各団体に投票依頼をした選挙違反事件）。

これに対し安川茂雄、杉本光作氏らが刷新の会を立ち上げ、当時の執行部に改革を求めた。その提案が認められ、新会長に東京白稜会の鎌田久氏が選任された。某々日、その鎌田氏から電話があり、「あなたに常務理事をお願いしたい」ということであった。岳連活動皆無、岳連に知名度のない私が理事になるためには、2つの機関の選挙に立候補し当選する必要があるので本気にしなかったが、その後の加盟団体による常任委員選挙で最高点で当選、続いてその新常任委員による理事選挙でも最高点で当選してしまった。後で聞いたところ、刷新同盟が役員候補をあらかじめ決めていて、その100％が当選したのだという。

小さな山岳会でこつこつ登っていた一登山者が、急に大海に放り出されたような気持ちだ。当時の都岳連加盟団体は250団体。大所帯だった。担当は財務、総務、広報といろいろ受けたが、今までと違う登山の体験だけを紹介する。

都民体育大会というのがあり、各区で競技を競うが、山

岳は非得点競技で参加していた。１９７７年の第30回大会では大会委員長を命じられた。会場は八ヶ岳、小屋泊まり自炊方式で、計画書、装備、歩行、安全対策、生活技術などをチェックする。都区内からチームが出ていた。併せて、こちらからは道々観天望気や高山植物の講習も行なった。私を補佐するリーダー諸君として、気象庁山岳部のリーダー氏、高体連登山部の教師などが講師を務めてくれた。

また、国体都予選会が丹沢で行なわれた際は審判長を務めるなど、今までにない登山を経験した。

１９７８年は都岳連30周年記念で、都境一周の計画立案をし、実施した。南コースは多摩川河口から世田谷、八王子の街中を行き、陣馬山、鴨沢、七ツ石山、雲取山。北コースは江戸川河口から新荒川大橋、青梅、棒ノ嶺、雲取山。この雲取山で集中、企画で作成した地図は5万分の1で30枚だった。稜線歩きで「お前の右足は埼玉だ。左足の都側に合わせろ」などと冗談が飛んだ。

１９８９（平成元）年の40周年記念の主行事は、海外登山だった。東マレーシアのマウント・キナバル、韓国の雪岳山、台湾の玉山の3隊。私はこの3隊全部に参加したが、玉山では団長を務めた。記念行事は一部精鋭による高峰登頂ではなく、みんなを対象とした海外登山の実施だった。

都岳連の仕事は、監事を含めると30年在席した。だから私は、現在も都岳連顧問の肩書をいただいている。

日本山岳協会の常務理事に

１９７５（昭和50）年、日山協の松方三郎会長が現職のまま亡くなられて、副会長の渡辺公平さんが代行を務められていたが、この年、改めて正式の会長に選任された際、私に常務理事を命じられた。担当は自然保護だったが、その後、会長のお世話役が必要ということで、会長と同じくＪＡＣ会員である私が会長付きとなり、肩書に総務が加えられた。

会長とともに１９７６年の31回佐賀国体で脊振山系、32回の青森国体で八甲田山、33回の長野国体で戸隠山を登ることができた。全日本登山大会では17回の秋田駒ヶ岳、18回の奈良・大峰山、19回の宮城・蔵王山を回った。国体はＪＡＣが所管していて、公平さんはそのころから国体競技を体験しているから、国体が初めての私などが役に立ったのかどうか。

一つだけ全日本登山大会第18回・大峰山の話を。今に残る女人禁制の山。このコースはハードなので、公平さんは

「俺が留守番するから、君が会長役として登ってこい」と言う。喜んで参加した。女人禁制は江戸時代に早くも緩和されていて、この時期「女人不許入」の表示を立て、女人の入山を拒んでいる山はここだけだ。その夜は山頂の宿坊を借り切り、各地の岳友が背負い上げた銘酒に酔い、男子万歳を叫んだ。

翌日、ガイドに覗岩に案内され、絶壁３６０間の深淵にザイルで結ばれ、逆さ吊りにされる。ザイルを握る先達に「親を大切にするか」「女房を大切にするか」「女性を騙さないか」と誓わされて、昨夜の男子万歳の酔いは一度に醒める。考えてみると、女人禁制という縄を張って神々しさを装っているが、女人結界は、男だけになって女の幸せを祈る、男の照れ隠しではなかったか。

11月の末だから、下山した洞川（どろかわ）は冷たい雨からやがて雪になった。雪のちらつく街道に公平さんが待っていて、迎えてくれた。「君、おいしいコーヒーを飲ませる所を探しておいた。すぐ行こう」。私と公平さんはコーヒー仲間だった。

１９７９（昭和54）年5月10日の理事会で私の任期2期4年が終わり、公平さんはなお1期、会長職を続けることになった。次期執行体制だけの会議だったので早く終わり、みんなは早々に会場を後にして、公平さんと私だけになった。雑談の最後に「君、これからどうする」と。私は「ＪＡＣに帰って、自然保護委員会の仕事に専念します」と答えた。「それがいい。そうしてくれたまえ」。これが公平さんとの最後の会話だった。翌日はＪＡＣの昭和54年度総会。私学会館で会議を終え、懇親会が始まった。そのとき、公平さんが亡くなったとの報が伝わって、ざわめきが広がった。亡くなったのは11日の午前3時45分という。私と会話して別れた数時間後のことで、私が最後の会話の相手だった。心不全だった。

再び日本山岳協会へ

今までが1回目の日山協だが、１９８９（平成元）年、再び日山協常務理事に選任された。当初は自然保護担当だったが、翌年、事務局長となった。このころ私は職場を退職していた。協会はアマチュア登山の最高の団体だが、あくまでもアマチュアだから、会長も副会長もアマチュア。ところが、事務局長は専任で有給、日給が出る。日給や手当をもらって好きな山に登れるのはありがたいが、忙しさも猛烈だった。国体は、

１９８９（平成元）年　北海道・ニセコ、羊蹄山

1990（平成2）年　福岡・脊振山系
1991（平成3）年　石川・白山山系
1992（平成4）年　山形・飯豊連峰
1993（平成5）年　徳島・祖谷山系
1994（平成6）年　愛知・奥三河山系

全日本登山大会は、

1989年　広島・宮島弥山、三倉山
1990年　岐阜・穂高連峰

この2回は大会委員長を務めた。

1991年　山梨・甲斐駒ヶ岳、北岳
1992年　熊本・五家荘山域

忙しかったけれど、個人ではなかなか登れない山にも登れた。

中高年登山がブームになり、その事故も多くなった。そのため中高年安全登山講習会を各ブロックで開催するよう要請した。平成3年、神奈川岳連で開催した講習会に出席したのをはじめ、各ブロックを回り、主官者として挨拶し、講評するのが役目だった。

スポーツクライミング・ワールドカップ・ウィーン大会（1991年）、スポーツクライミング・アジア・チャンピオンシップなどにも参加したが、これは私の経験内容にない体験だった。UIAAのアジア山岳連盟の会議で、日本代表として韓国・仁川（1994年）、カトマンズ（1995年）に出席したのも初めての体験だった。

事務局長をやっていると、公式ではない会合にもお招きを受ける。仙台の伊達篤郎さんを中心に自然を守る伊達の会などにも幾度もお招きを受け、仙台に行った。また、新野地温泉で一杯飲む会（1991年）は、近県岳連の幹部十数人が集まっていた。北野良一・聖峰山岳会会長を祝う会に招かれて甲府に出かけ、挨拶を頼まれたが、何を祝う会なのか全く分からず、挨拶の中味に苦労した。

70歳を過ぎたら一切の公的な仕事を辞めるというのが、東洋の教えと聞いている。これに従って1995（平成7）年3月、日山協事務局長を辞任した。

ところが、そんなに格好よく結末は来なかった。私の退任を待っていたように、HAT―J（日本ヒマラヤン・アドベンチャー・トラスト）の代表・田部井淳子さんから書簡が来て、多忙でてんてこ舞いをしている。ルクラの焼却炉の担当をして欲しいという。HAT―Jはエドモンド・ヒラリー卿から要請されて、田部井さんがネパールでの環境活動を目的とした団体を日本に作ることを約束したもの。田部井さんは知名度はあっても組織を持たないので、

日本の山岳4団体（日本山岳協会、日本山岳会、日本ヒマラヤ協会、日本勤労者山岳連盟）が田部井さんを支えることで発足したのだった。支援団体の一つの責任者だったので私も理事の職を受けたが、日山協が多忙で、あまり実務には手を出せなかった。

問題を整理してネパールを訪れた。焼却炉問題は解決したが、引き続きリンゴの植樹も引き受け、数回ネパール行きをしているうちに、事務局次長、事務局長になり、すっかり協会の人になってしまった。14年間、役職を離れておらず、今は顧問になっている。

老いの暴走はなお続く

２００２年に、斎藤一男さんの提案で山岳文化学会の設立を準備、発足させた。近藤信行さんも加わっている。山岳文化に関する研究・保護・保存と振興・普及を目的に発足し、私は事務局長に選任された。

私の研究テーマは宗教登山。富士塚、富士講で23区内の東大久保富士、文京区の音羽富士、白山富士、浅草富士など20ヶ所くらい回ったが、都内の藤塚は１００近く、前途はまだ長いのに病で中断してしまった。

長い登山生活の最後が宗教登山であることに、私は心の安らぎと満足を覚えている。「鬼の伊助さん」が「仏の伊助さん」となって人生を終えたことと思い合わせ苦笑した。

２００５（平成17）年、肺気腫で倒れてから7年になる。この間に日本オリンピック委員会委員長と日本体育協会会長の連名で、永年にわたりわが国のスポーツ振興に貢献したとして表彰状を、また、日本山岳協会会長から日本登山界の発展に尽力した功により表彰状、さらにＨＡＴ―Ｊの田部井淳子代表からは、ヒマラヤン・アドベンチャー・トラストの理念を深く理解し、積極的に活動に参加した功績により感謝状をいただいた。

実際の登山では、２０００年に緑爽会の大山恭司さんと梅本知榮子さんが、元老の織内信彦さんと、準元老として私の二人を、立山・室堂と剱岳・馬場島に車で案内してくれたことが忘れられない。その後も若干のハイキングをしてはいるが、剱・立山の登山基地参りは、私の登山のフィナーレとして思い出深いツアーだった。額に汗して歩いた室堂は観光化されていたが、剱の岩場の基地は観光化がなく、静かだった。佐伯郁夫・邦夫兄弟や佐伯文蔵の子息との語らいも楽しかった。昔、若いころ、歳とって登れなくなったら、若い者に駕籠を担がせてでも山に登るぞと言ったが、その現代版で、駕籠ではなく車で若い二人に、懐か

しい山々に案内してもらったことを感謝している。

緑爽会はいいサークルである。先輩を労り、尊敬することを忘れていない。

（2012年2月11日開催）

〈國見利夫会員　略歴〉

1925（大正14）年、小田原市に生まれる。明治大学法学部卒。衆議院事務局で司法・地方行政などの立法事務を担当。衆議院参事。のちに議会運営の功により勲4等旭日小綬章を受章。日本山岳会評議員、同自然保護委員長、東京都山岳連盟常務理事、日本山岳協会事務局長、日本ネパール協会理事、日本ヒマラヤン・アドベンチャー・トラスト事務局長、日本高山植物保護協会理事、日本山岳文化学会事務局長などを務める。2014年9月13日、肺不全のため逝去。

図　書　紹　介

和田城志 著

『剱沢幻視行　山恋いの記』

東京新聞　２０１４年３月刊
Ａ５判　３６８ページ
１７００円＋税

この本は山行記録というよりは、和田さんの独り言のようであり、その独り言の向こうに「人は何故山に登るのか」という問いへの答えがあるように思う。この問いは古くて新しく、哲学的な響きもある一方で陳腐な響きもある。ある人がその答えを「永遠の未踏峰」と表現したのは秀逸だと感じたが、この本を読むと、その答えは遙か彼方にあるかもしれない幻の峰ではなく、実は足元の普遍的な感情なのではないかとさえ感じてくる。

この本の副題は「山恋いの記」とあるが、この本を一読して、そのひと言がすべてではないかとさえ感じた。恋に理屈はいらないだろう。かつて山の中で和田さんから「山は女に惚れるのと一緒や」と聞いたがことがあったが、私も全く同感だ。そして、和田さんは剱岳に恋をし、ナンガ・パルバットに恋をし、惚れて、好きな対象に一途にアプローチしたに違いない。

年末の唐松岳の頂上付近で、風雪に叩かれながら和田さんと剱岳の話をしたとき、「30歳から60歳まで毎年正月に剱岳に行けたとしても最大30回で、ときには冠婚葬祭その他で行けない年もあるだろうし、半分は計画どおりにいかないとしたら、うまくいくのは最大でも十数回か。こりゃあ仕事をしている場合ではないし、とても浮気はできないな。」という結論に達して大笑いしたことがあったが、ここにはそれを淡々と実践した重みと、まるで剱岳の暴風雪を思い出させるような息苦しさと、同時にある種の潔さがある。

一つ一つの山行は決してスマートでも爽やかでもないが、剱岳に一途に行き続けたことは、〝生き続けた〟とも表現できるだろう。それは、この本の帯に書かれている「～最後の〝怪物登山家〟～」ではなく、逆に非常に繊細で自分に正直な、そして、愚直な人間の姿だと思う。その愚直さは、子午線の長さを知りたいというたった一つの疑問の解決のために、日本中を一歩ずつ歩いた伊能忠敬を彷彿とさせる。そして、忠敬の問いは自分自身の心から発した自分自身への問いだった点に価値があるよ

うに、著者も自身の価値観を拠り所として、自身の意思のままに一歩を積み重ねた。一歩は小さいが、その愚直な積み重ねが巨大な記録を生んだ。「私の一歩は小さいが、人類の巨大な一歩」という言葉は有名だが、それは結果として一歩であり、到達点であるゴールとしての一歩を示す。しかし、著者の一歩も小さいが、その一歩は私たちが当たり前に生活する日常世界から異界へ踏み込むスタートしての一歩だったのであり、それをやり続けたことに対して、これ以上付け足す言葉は今さらないだろう。

しかし、読む者はむしろ著者の葛藤にも惹かれるのではないだろうか。参加したヒマラヤ登山では、成功した隊においてすべてサミッターになっている輝かしさから想像するスポーツマン的な明るさとは裏腹に、その実績に対して投げかけられた「できないことへの共感」というひと言に思い悩む和田さんの姿が、私には深く突き刺さるし惹かれる。そして、遭難後に再開した登山の後半、一人でブナグラ谷を下って途中下山する描写があるが、そのとき心に去来したものはなんだったろう。私は、たった一人の冬のブナグラ谷の情景が目に浮かんで、心に染みた。

登山は生身の肉体を自然の中に暴露する行為であり、山は人を選ばない以上、思いどおりにならない極致のようなものだが、その世界を五感で感じるためには生身の心と労力が不可欠で、自ら出向かねばならず、出向くことは捨て方の問題だと著者は語るが、私のような凡庸な人間には、捨てることは難しい。しかし、生身の心が実物に触れたときに惹かれる何かが人を山に向かわせるとしたら、その何かは著者の一つ一つの山行の中にあり、この物語はその何かに近づけるきっかけを与えてくれるかもしれない。

和田さんは多くの人と山行をともにしたが、一緒に登りながら和田さんより先に山を去った人は少なくない。和田さん自身は歩み続けた中で、多くの者がやめていった。やめるということは、そのために時間を割かなくなるということだ。多くの者は、私など足元にも及ばないほどの情熱を山に傾けていたはずだったが、あるときを境にして、山のための時間を作る努力をしなくなる。すなわち、それは「人は何故山登りをやめるのか（やめられるのか）」とでもいうことになるだろうが、それを和田さんはどう考えるのか、もう少し知りたかった気もする。

最後に和田さんは「アルピニズムの洗礼を受けて以来、山と戦ってきたような気がする」と書いた。私は闘った対象は山ではないのではないかと邪推したが、本当はなんと闘ったのだろう。それを云々する資格は私にはないが、賢明な読者なら、その答えを見つけることができるかもしれない。

（山本　宗彦）

東京大学山の会 編
『スキー山岳部の歴史』

東京大学山の会
２０１４年５月刊
Ａ５判　１４２ページ　非売品

創立当初の様子が「先輩後輩を意識するほどの縦の関係はなく横一線、しかもそれぞれが入学時既に登山界に名を知られた豪の者達の群雄割拠となると、上下意識とか統制とかが生まれる筈がない。部はサロンであった」と書かれている。

輝ける時代だった。

新制大学となり、大量の素人新人を限られた年限で育成せざるを得ない、戦後大学山岳部に共通した行き方をとることとなる。それはリーダー制の確立、未経験入部を前提とした訓練プロセス、個人の山行より合宿山行、ポーラー方式中心などである。

そして、昭和34年に滝谷遭難があり、「滝谷のそれは戦後大学山岳部的行き方の当然の帰結という性格を持っていたから、傷が深かった。そして、あまり楽しくない山岳部という翳で長く部を苦しめることになった」と報告されている。

しかし、遭難からの立ち直りは早かった。

海外遠征の成功がすぐ続いたから、長く苦しんだとは見えない。遭難から4年後、昭和38年に東大スキー山岳部（ＴＵＳＡＣ）初の海外遠征で、カラコルム・バルトロカンリに初登頂した。

「バルトロ遠征は大成功であった。この成功がＴＵＳＡＣにとって新しい時代を開いたことは間違いないでしょう」

ＴＵＳＡＣの若いＯＢたちが、日本山岳会隊の隊長として昭和51年のナンダ・デヴィ縦走とドウナギリ登頂、昭和59年のカンチェンジュンガ縦走を成功させている。そして、ＴＵＳＡＣ単独隊も、昭和55年のインドヒマラヤ・シブリン登頂、昭和59年のカラコルム・Ｋ7初登頂に成功している。

「シブリンおよびＫ7の初登頂は、世界の登山界でも話題となった。ヒマラヤ未経験の学生だけの登攀隊であったことを考えると、当時のＴＵＳＡＣの水準の高さが窺える」

「現役学生によるシブリン、Ｋ7の初登、ＯＢのアコンカグア南壁登攀、ヨセミテ・エルキャピタン・アトランティックオーシャンの日本人初登攀などは登山界に大きな話題を呼んだ」

「手痛い遭難がなかったことも幸いし、旺盛な研究心と切磋琢磨、帝大時代から続く上下差のない自由闊達な雰囲気で、当時

の部員達は山を楽しんだようである」と輝ける時代の再来が誇らしげに報告されている。

この輝ける時代は、昭和49年から始まった小窓合宿にも拠るところが大であった。

合宿は遭難の反省から見直されたが、必要な合宿はやられていたのだ。この合宿はワークショップであり、大規模ポーラー、集中登山のそれとは違う。小窓合宿にはしっかりとしたカリキュラムがあり、雪渓・岩稜・岩登りで個人の判断力を高めるようなやり方に重点を置いていた。小窓はそのための理想的なベースキャンプであって、ここから育った世代が、その後さまざまなところで活躍した。

この小窓合宿は始まって以来20年以上、活動パターンはほぼ変わることなく受け継がれていた。大学山岳部の成功モデルだろう。

ＴＵＳＡＣに輝ける時代が再び訪れたものの、部員数の減少、フリークライミングしかやらない部員の存在など、部は変質を深め、合宿、合同トレーニング、仲間との対話、ルーム日誌、山の歌、山岳部の山小屋との結びつきなどは消えてしまった。

輝いている部といえども、入部希望者がなくなれば消滅する。そのことは差し迫った可能性となっていたが、幸い数名の新部員が入り、部は再建のスタートを切ることができた。輝ける時代を取り戻してほしいと願う。

ＴＵＳＡＣでは、ＯＢは学生の活動に口を挟まないという伝統・不文律がある、と繰り返し書かれている。世代を超えた友情、経験を積んだ年長者からの助言はあるが、上下差のない自由闊達な雰囲気で、先輩・後輩型の力関係がないという意味だろう。

このことは、遭難からの早い立ち直り、海外遠征の成功をもたらし、輝ける時代を取り戻すことになる大きな要因だったと思われる。

（佐藤　文昭）

五十嶋一晃　著

『田部重治の登山と英文学』

五十嶋商事　２０１４年８月刊
Ａ５判　４４５ページ
２５００円＋税

人は心に故郷の山を持っているとよく言われる。著者の五十嶋一晃氏にとっての心の山は、富山の南に白く連なる剱岳・立山、そして薬師岳の山々であることは、これまでの氏の著書『山案内人　宇治長次郎』『越中　薬師岳登山史』『立山ガイド史』などからも伺い知ることができる。

その著者が、同郷の田部重治の研究をライフワークとして心血を注いでいることは周知であり、『山岳』第93年（１９９８年）と第94年（１９９９年）に、２回に分けて「田部重治の登山と英文学」と題した論文を発表している。本書の前半「第Ⅰ部・田部重治の登山および英文学の概要」は、その論稿を修正・加筆したものである。さらに後半には田部重治研究会の編集による「第Ⅱ部・田部重治研究会編『鶴のやうに』」を加え、田部重治生誕１３０年記念として刊行されたのが本書である。

まず著者が執筆した第Ⅰ部から紹介しよう。「1．田部登山の一般的とらえ方」「2．田部登山の本質」では、田部の登山が「静観的登山」と一方的にカテゴライズされることへの危惧を語っている。ここでは明記していないが、昭和初期に田部が浦松佐美太郎から『山岳』誌上で批判を受けたことなどが本稿に影響していると思われる。伝統的な日本の山歩きと、西洋から入ってきたアルピニズムの間に微妙な緊張感があり、時として軋轢を生じていた当時の時代背景が伺われる。著者はそれを受けるように「3．冒険的であった頃の主な登山実績」の中で、田部のパイオニア精神の表われともいえる山行である「槍ヶ岳から立山温泉間をガイドレスで縦走、つづいて剱岳別山尾根初登」や「笛吹川東沢の初遡行」などを紹介している。

「4．日本山岳会名誉会員」「5．海軍経理学校に山岳部『梓曾』を創設」「6．法政大学山岳部初代部長としての21年間」の項では、それぞれの山の会に関わり、誠実に活動する田部の姿が語られる。「梓曾」創立時のユーモアあふれるエピソードも微笑ましい。また「7．田部の山岳著書」から「8．雑誌『山と溪谷』の名は田部の著書名から採った」「9．秩父を讃える田部の歌碑」「10．郷土の想いを詠んだ校歌と歌碑」では、著者が掘り起こした詳細なデータが続き、「11．薬師岳展望場所にある《天の夕顔》碑に関する提起」「12．独立した価値をもつ登山として「瀑（滝）」を加えたい」は、単行本にするこの機会に、著者の見解として新しく加えたという。

さらに、これまで語られることの少なかった、登山を離れた英文学者としての田部重治の人生に触れているのが「13．英文学者としての研究領域」「14．教壇の履歴」「15．学者の系譜」である。

田部重治が生まれた南日家は、加賀藩時代に苗字帯刀を許された郷士であり、豪農であったという。兄弟は5男7女。中学生のときには、長兄の南日恒太郎（後の英文学者・日本山岳会草創期会員）はすでに東京・芝の正則中学の教師になっており、

田部は『文庫』『明星』などに親しむ文学少年だったという。卒業後に進学した金沢の第四高等学校では、次兄の田部隆次が教授となっている。彼もまた英文学者であり、日本山岳会の草創期会員である。その後、田部自身も東京帝國大学の英文科に進むのは自明のことだったといえる。著者が指摘するように、田部の家族や親戚には学者が多い。

考えようによっては、大学を卒業して教鞭を取るという生き方は、田部が生まれ育った時代の、地方都市の旧家に生まれた二男・三男のひとつの典型であったと言えなくもないし、田部家に養子に入ったことも、家同士の間に暗黙のレールが敷かれていたと考えるのは、私の余計な詮索であろうか。「家」の意向が何より優先された、あの時代の北陸の地方都市である。人は時代や環境と切り離して生きることはできなかったであろう。

その後、田部は英文学者として東洋大学や法政大学で50年以上にわたって教壇に立ち「ウォルター・ペイター」「ワーズワース」の研究者として学者人生を送る。そして、１９７２（昭和47）年、88歳で没する。亡くなる半年前まで、法政大学大学院に出講していたという。

著者は、24歳（大学卒業4ヶ月後）での明治大学の夜間部英語講師職を皮切りに、その他の大学や旧制中学、海軍経理学校などでの、田部の教師・学者としての履歴を丁寧に調べ出しているが、それでもまだ完璧ではないという。想像以上に多くの学校で、そして長い年月にわたって教壇に立っていたことに驚かされる。

さて続く「第Ⅱ部　田部重治研究会編『鶴のやうに』」は、本書の発行者である田部重治研究会によるもので、その会報『鶴のやうに』から転載した原稿で構成されている。作家として、そして英文学の研究者としての田部重治への敬意がそこここに感じられ、私たちの知らない田部の違った面が見えてくる。

「1．はじめに」「2．田部重治研究会の趣旨」に続く「3．田部重治　山岳文学に関わる論考2篇」は、文学者としての田部重治の内面に近づくことで、「登山行為と自然」「山岳文学」「文章表現」を考察した論考であるが、田部重治研究会主催者の、文学者としての田部重治に向けた熱い想いが語られている。

「4．〝A Little Story of My Heart〟」「5．英語でよむ田部重治の随想」「6．田部重治　英文学に関わる論考」「7．田部重治和歌英訳」は、英文学者としての田部の翻訳に対するさまざまなアプローチ（日本語から英語、英語から日本語）が試みられており興味深い。田部の『日本アルプスと秩父巡礼』に収録された「新録の印象」の英訳や、和歌（たとえば「奥秩父はるか眺めて雲取に立ちたるわれは若人なりし」など）の英訳、そして、田部とほかの翻訳家の訳文の比較に取り組むなど、どれもが門外漢には新鮮である。そして、何より興味深いのは、田部が書いた英文のエッセイ〝A Little Story of My Heart〟を掘り

起こして、日本語に翻訳し直していることである。田部への敬意を持ちながら、その文章のエッセンスを損なうことなく、見事に田部らしい文章世界が表現されている。

そして「8．田部重治　偲び草」「9．フォトグラフエッセイ」で最後を飾るのが、教え子や孫弟子、レリーフが立つ雲取山荘の関係者が語る田部の思い出である。

田部重治の文章のファンは多い。その文章世界に触れて登山を始めた人もあれば、山から帰って田部の本を読み返す人や、雨の一日に何度も繰り返してページを開く人もいるだろう。田部の山の本は、多くの岳人に読み継がれてきた。そんな読者にとっては、第Ⅱ部はあまりに土俵が異なるため取り付きにくいかもしれない。しかし、英文学者として全うし、多くの教え子に慕われ、そして、没後なおファンによる研究会が存続し続ける、私たちの知らない彼の別の人生がこの第Ⅱ部から立ち上がることで、私たちは初めて田部重治の全体像を結ぶことができたといえる。

ただ残念なことに、第Ⅰ部と第Ⅱ部が個別に編集されているため、全体を通してのバラバラ感はぬぐえない。全編を通しての最終的な編集作業があれば、もう少し読者に理解されやすかったのではないか。

（三好　まき子）

山野井泰史 著
『アルピニズムと死』

ヤマケイ新書　2014年11月刊
新書判　192ページ
760円＋税

「今日、僕の話を聴いて……何か学ぼう……とか思って来られたとしても……何もありません……」、静まり返っていた会場が一気に和み、講演者と一体になった瞬間だった。

多摩支部主催の山野井氏の講演は、いきなり発せられた彼らしいとも言うべき、気取らない、型にはまらないそのひと言から始まった。山野井氏に出会い、話をした人は、彼の持つ当たりの柔らかさと、山の話になると、楽しさが隠せない子どものような笑顔と、どこか洗練された繊細さに惹き付けられるだろう。

だが著者は、その雰囲気からは想像もできない壮絶な登山人生を、40年間続けてきた。

これまでも多くのクライマーが、厳しい登攀の結果、または

雪崩や落石など自然の脅威の中で命を落とすという現実を見てきたが、近年、山行をともにした若い友人を、国内の山で失うという悲報を受けた。30代、将来有望な、若さ溢れた友人の死を、著者はかなりの衝撃を持って受け止めたに違いない。

しかし、その友人の馬力ある、タフな行動の中に、どこか一抹の不安があったことを、著者は覚えていた。

「自分に何かできなかっただろうか」、無念な思いと、悔やまれる思いが、時が経つにつれ次第に膨らみ始めていた。

本書は、20代から苛酷なフリーソロ・クライミングにのめり込み、「天国に一番近い男」と言われるような、命を削るような登攀をし続けてきた著者が、今日まで死なずに生きて還ってきたのはなぜなのか、友人の死をきっかけに、その激しい40年間を振り返り、山との向き合い方を語った一冊である。

著者が選ぶ山は、苛酷であること、誰も登っていない未踏ルートであること、そして、たった一人で登るフリーソロであることが条件であった。そこにこそ至福を感じるという。しかもその条件は、子どものころから何も変わっていない。

ロック・クライミングは、知識や技術がなければ最も危険な遊びであり、命に関わる行為である。だが、その遊びに夢中になり、山岳関係の本を読み漁り、大人の目を盗むように岩に通ったという著者。時には、骨折した手首を隠すようにして帰ったこともあった。岩場で隣のルートを登っていたクライマーが、目の前で墜死するという衝撃的な場面に遭遇するなど、すでに10代から事故と死のまつわる状況にあって、これほどに冷静でいられるというのは、いったいどこから来るのであろうか？

ひたすらビッグウォールを登りたいという夢への情熱と、何事にも怯まない行動に、究極のフリーソロ・クライミングは、必然的かつ宿命的なものであったと思えてならない。

そんな強さと冷静さを持っている著者だが、自分は恐怖心が強く、大変臆病であるという。

著者は、日々岩を登るためのトレーニングを欠かさないが、目標の山が決まると、アルパイン・クライミングに適した体を作るためのメニューに変更、その自主トレの厳しさは、生易しくない。完璧さを求めている。その上、著者の得意分野だというが、ルートを思い描き、自分が登っていく状況と、想定外の場面、天気の変化さえも想像して、冷静な判断と対処さえイメージ・トレーニングする。すでに自宅にいて、生きて還るための能力が培われている。

登山家・山野井氏は、自身の研ぎ澄まされた五感、才能だけでなく、ここまで肉体的改造をし、完成させて山に向かっていたことを改めて知るところだ。それは単なるこだわりではなく、自分を山に合わせていく謙虚さであり、生還の根幹の一つではないだろうか。

ところで、一般登山者の私も、山行時の装備は常に悩むとこ

ろだ。できるだけ万全で、かつ余裕が欲しい。重量オーバーを気にしながら、雪山には手袋一つ迷う。だが著者は、どんな登山にも当てはまるとして、軽量化を勧めている。身軽であること、それは素早い動き、バランスを崩さないなど、安全登山に繋がるからだ。チョー・オユー登攀時の著者の装備品が列記されている。食料が最も軽量化の対象であり、快適さ、安全さなどは二の次だという著者に比べて、何かと膨れる私たちのザックの中はどうであろうか。軽量化、それは私たちがすぐにも実施できる大切な課題かもしれない。

山野井氏は、登山家で妻の妙子さんを、第二章「パートナーから教えられたもの」の中で取り上げている。

その強靭な体力に加えて物事に動じない冷静さと、心の広い人間性の持ち主であることを評価している。だが、一方で恐怖感を持たないという性格が、著者が最も恐れている弱点だという。まさに二人三脚、これほどの最強のパートナーは、二度と存在しないことを誰もが知るところだ。加えて言えば、実物の妙子さんは、料理も野菜作りも上手い家庭的な女性だが、どこか秘めたる強さを感じさせる人だといつも思う。

数多い登攀の中には、成功だけでなく失敗、敗退もある。その最強パートナーと登ったギャチュン・カン北壁からの生還は、壮絶な危機脱出として、取り上げないわけにはいかない。著者とパートナーの冷静さは、生きて還るための、生き延びるためのパワーそのものだということを教えてくれる。

凍傷で何本かの手足の指を失った著者だが、山への想いは限りなく、不死鳥のごとく、クライマー山野井氏の復活の挑戦が続く。近年登ったアンデスの山々、それは本書を書くきっかけとなった友人との感動の登攀であり、後輩への温かな賛辞が、より無念さを感じさせる。

アルピニズムを追求し続けてきた著者も49歳。山における自分自身を知り尽くしている。近年、苛酷な登攀に耐えてきたその体に変化を感じ始め、著者の登山スタイルにも、これまでとは大きく変化を求められたようだが、困難を乗り越えてしか得ることのできない限界への挑戦は、いまもなお山野井氏を惹き付けて止まない。

住み慣れた自宅の裏山で遭遇した熊との格闘は、その後の高所登山における鼻呼吸の影響など、肉体的条件を悪くさせたが、熊は著者の命を奪わなかった。これは実に意義深いことではないだろうか。

「山が与えてくれる全てのものがこの世で一番好きです」という締めくくりの一行に、著者の人柄と山との特別な関係を感じるのは、私だけではないと思う。

（畫間　弘子）

斎藤一男 著

『山　その日この人』

論創社　２０１５年１月刊
四六版　上巻４１６ページ
下巻３３４ページ
上下巻とも２８００円＋税

日本山岳会のある集まりでのこと、何かの拍子で会の歴史に話が及んだ。そこで小島烏水、木暮理太郎、武田久吉の名前を出したら、誰もその３人を知らない。それではさすがにこの人は知っているだろうと思い、深田久弥のことを尋ねた。すると全く知らない人、知ってはいるが「ふかだひさや」だと思っていた人が複数いた。結局、ロビーに掲かっている歴代会長の写真を見せながらこれは誰、これは誰と解説する羽目になった。

これは山の経験が浅い若い人たちの集まりだったから、こんなこともあるのかと納得はできたが、別の場所で山のベテラン連中と歓談していたとき、当然知っているものと思って木暮、武田の話題を出したら、２人の名前を知っているのが、その場にいた会員の半数もいなかったのには正直なところがっかりした。日本山岳会を日本山岳会たらしめ、ほかの山岳会との違いをもたらしているアイデンティティは、その歴史から生まれ出ているものと思っていたのだが――。

現在、山を楽しんでいる人たちの間で、「登山史」や「山の文化」に興味を持っている人はどのくらいいるのだろう。いま挙げた例がたまたま極端なものだったとしても、残念ながら私が見渡す限りでは、それに興味を持つ人はもはや少数派になってしまったのではないかと思う。

山を登るときに地図の読み方を知らないのはまずいが、登山史やその山域の歴史や人文に関する知識を知らなくても遭難することはないし、なんの不便もない。必要があるとすれば、人を山に案内するときに歴史や文化を解説しなければいけなくなった場合だが、これさえも付け焼き刃で勉強する程度で足りてしまうことが多い。

必要がない知識だから多くの人が興味を持たない。考えてみれば至極当然の話である。

しかし、登山はほかのスポーツとは違い、思索的な要素が大きな位置を占める行為である。山に行けば新緑・紅葉に心を洗われ、山頂での展望に感動し、登山道の傍らに咲く小さな花に癒される。山から帰れば、出会った一つ一つの場面に思いを馳せ、感慨にふける。そのすべてが深い思索につながり、さらに山を好きになっていく。おそらく山の愛好者で、何も感じず何

も考えずに体を動かしているだけという人は、珍しいのではないか。

たくさん山に行くようになると、そこで感じたり思索していることにもっと厚みと深みがほしくなってくる。そんな欲求を満たしてくれるのが、山にまつわる知識なのである。花や動物、地学などの自然科学。美しい風景を切り取るための撮影や描画のスキル。なかでも登山史や民俗、文学など人文に関する知識は、登山という行為に確かな裏付けをもたらし、深みを与えてくれる。

いま登ろうとしている山を、これまでにどのような人がどのようにしてたどったのか。そのときにいったい何を感じ、どんな思いを巡らせたのか。それを知ることで、山登りが平板なものから豊饒で潤いと深みに満ちたものになっていく。同じ山でも、登山史を知っているのとそうでないのとでは、楽しみの深さが全く違うのである。

今回、日本の登山史を概説した、読みごたえのある本が出た。それがここで紹介する『山　その日この人』（論創社、上・下巻）である。これまでにも多くの泰斗が日本の登山史を研究し、多くの著作を書いているが、登山史や文化に対する興味が希薄になっている昨今の世情のせいか、ここしばらくは、ほとんど日本の登山史をその始まりから現在まで解説する本は出ていなかったように感じていた。その間にも登山そのものや登山界はどんどん変化し、以前出版された登山史本の前提となっていた世界とは、大幅に様変わりしてしまった。そのため比較的近い時代のことや、現在の登山の風潮などが盛り込まれた登山史が必要とされていたのである。

さらに百名山ブーム、登山のスポーツ化などを見るにつけ、登山から文化的なにおいが希薄になっているのを強く感じる今日このごろだが、それだけに文化社会的な観点という切り口から登山史の解説を試みるような本がほしかった。

そういった意味では、我々登山愛好者にとってこの本は待ちに待った一冊といえるのかもしれない。

著者の斎藤一男氏は若いころクライマーでならし、いまや伝説となった革新的・先鋭的な登山家集団、山学同志会を設立した。山学同志会は独特のアルピニスト育成システムやハードな登攀を通じて多くの世界的なアルピニストを輩出し、日本の登山を牽引してきた。その後は日本山岳協会の設立に関わり、会長まで務めることになった。さらにその後は、これも氏が設立した日本山岳文化学会を主宰し、日本の山に関する文化の振興に大きく寄与している。このように著者は、日本の登山を語る上で外すことのできない人物なのである。

一方著作も多く、山に関するものから歴史ものまで50年の長きにわたって多くの書籍を著している。現在は90歳の高齢だが、それにもかかわらず、疲れを知らないかのように活躍を続

けているのには驚きを禁じ得ない。

まず、本書の「まえがき」で著者はこの本のコンセプトを明らかにする。

――全スポーツ分野の中で「山」ほど社会の全面にわたって関係し研究され、書かれて文献の豊富なものは、ほかにない。しかしそれらは学術書の類を除くと、山岳紀行文や感想文など、つまり個人の登高記録や回顧録的なものが多い。私たちはなぜか山を平たく、文化社会の面で広く取り上げる地道な一冊には、なかなか出会えないでいる。

そこでいささか力不足と思うがあえてこの一角に踏み込むこととした。本書が少しでも「山の日本」を理解し、明るい将来のため何かの参考になるならば幸いである。――

まずは歴史における富士山の文化的な捉えられ方から書き起こし、次にそのほかの日本の山々に話が及ぶ。

現在につながる「登山」を始めたのは日本に駐在していたアーネスト・サトウらイギリス人たちである。フォッサマグナを発見し命名したドイツ人、ナウマン博士とその日本人の弟子たちは、地学的な興味から日本アルプスを跋渉し、明治21年にはいよいよウォルター・ウェストンが来日する。

一方、志賀重昂の『日本風景論』に触発された小島烏水は、明治35年に岡野金次郎と槍ヶ岳を登るが、自分たちが初登頂だと思っていたのに（実際は播隆上人が江戸時代に開山している）、岡野がたまたま見つけたウェストンの著作『日本アルプスの登山と探検』に、すでに10年前に彼が登っているとあるのを見つけて、このイギリス人の自宅を訪問することになる。そこで勧められたのが、英国アルパイン・クラブに倣う「山岳会」の設立である。そして明治38年、日本山岳会が誕生する。

ここまではどの登山史の本にも書いてある、よく知られたエピソードである。特に日本山岳会の会員であれば、ウェストン・小島・岡野のくだりは、どこかで一度は聞いたことがあるかもしれない。

明治末から大正時代にかけて登山は大衆化し、山岳会が次々に設立されて、マスコミも登山をこぞって取り上げるようになる。学校山岳部が台頭し、積雪期やアルピニズム的な登山が登場してくるのもこのころである。

本書ではこの辺りから著者が目論む「山を平たく、文化社会の面で広く取り上げる地道な一冊」という性格が強くなる。山の本、地域の山岳会、温泉、山の案内書、山岳地帯の測量、山岳映画、スキーなど山にまつわる文化や事象、さらに上越、越後、黒部における山登り、谷歩き。単なる「表面的な登山年表や人名や山名の羅列ではない」文化社会現象としての登山が様々な側面から語られていくのである。

上巻の締めは「山の文化を考える」という一節。とくに登山が著しく普及発展した昭和5～6年ごろ、山岳雑誌が続々と創

刊され、《いままでの単一的な「登山」という概念から多くの概念を分化し、やがてそれらの近代的な諸傾向が漸くにして独立のスポーツとしての地位を取得し始めた》という時代。静観的登山、スポーツ的登山、パイオニアイズム、ハイキング、単独行など、そういった時代背景をバックに、いまに続く様々な登山の方法が確立した。

下巻は戦後の登山の様相を描いた「国破れて山河在り」から始まる。そんな時代でも屏風岩や鹿島槍北壁の開拓は地道に続けられ、クライマーは健在であった。

そして日本隊による８０００ｍ峰、マナスルの初登頂。「極地法、大遠征中心のヒマラヤ絶対登山形式は次第に少数精鋭主義に移行され、一方で学校山岳部絶対時代は去って、先鋭的な社会人登山家たちの台頭を迎える。」著者が主宰していた山学同志会をはじめとする社会人山岳会の活躍によって後立山、甲斐駒、越後のバリエーション・ルートが次々に開拓される。さらにその延長としてヨーロッパ・アルプス三大北壁や、ヒマラヤのバリエーションにも日本人クライマーの足跡が印されることになる。

そして、クライミング競技草創時の話、日本山岳協会設立のいきさつなど、日本の登山界の仕組みを理解するためにぜひ知っておきたいことが語られる。実際それらに深く関与していた著者だからこそ書けた話題である。

さらに本書は、いま登山界にはびこる風潮、中高年の登山や名山ブームに著者ならではの見解を示し、「山の日制定」に言及する。

最後に著者は現在の登山に対して、

「山はかつてあったような信仰や尊敬、冒険の対象ではなく、都会人がストレスを発散するためのアスレチック・フィールドに成り下がってしまったのである。今、登山者の中心になっている中高年者はいずれも老い、山を去る日がくる。そしたら山に見向きもしなくなるだろうと心配でならない。」と悲観するが、その危惧は否定のしようもない。「登山を山に登ることだけで終わらせないでほしい。山の歴史や自然、脅威を知り、山の奥深く文化を体験させたい。」と読者に語りかける著者の気持ちは、いかばかりかと思う。

日本山岳会の会員でも、登山史や文化に興味を持つ人が少なくなってしまった現状だが、それだからこそ、少しでも多くの人が本書を繙くことを願うばかりである。

美文調の言い回しが多く、そういった文に慣れていない若い人は読むのに苦労するかもしれない。ただ、取り付きは難しいが、いったん取り付いてしまえば延々と楽しいピッチが続くルートのようなもので、読み進めれば次々と新しい発見があり、自分の山登りがより豊かなものになることは確かである。

（近藤　雅幸）

水越　武 著

『真昼の星への旅』

新潮社　２０１５年３月刊
Ａ３変形判・上製函入　１４４ページ
３０００円＋税

自然写真家・水越武の半世紀に及ぶ撮影行の集大成となる写真集である。Ａ３変形判（３００㎜×３０５㎜）という大冊に、99点のモノクローム作品が掲載されている。１９８０年代半ばから第一線で活躍し続けている著者のライフワークは、自然界の摂理や地球規模の生態系をマクロ的な視点から捉えようという壮大なものである。日本列島を南へ北へ何度も行き来し、さらには海を渡って地の果てまで、まだ見ぬ風景を追い求め続けた半生。序文、あとがき、各章の文章から、その長く険しい道のりを知ることができる。

本書のタイトル『真昼の星への旅』は、「切り立った険しい山の岩壁には、一日中、日差しが巡ってこない所がある」。そんな場所では「真昼でも星が見られる」という、かつて水越が伝え聞いた話が元となっている。眼に見えなくても確かに存在しているものがある。孤独と闘いながら、自分だけの何かを掴もうと極寒の山中を彷徨い続けた日々が重なる。

水越は過去に全編モノクロームの写真集を2冊発表している。『穂高・光と風』（１９８６年、グラフィック社）と、『HIMALAYA』（１９９３年、講談社発行）である。『穂高・光と風』は、「今はモノクロの時代ではない」と出版社に断られながらも、モノクロームで撮影した穂高のシリーズを世に出すことに執念を燃やし、「印税も要らない、売れ残れば自分で買い取る」とまで言ってようやく出版にこぎ着けた。この写真集は出版社の予想に反し、数ヶ月で売り切れになったという。2作目の『HIMALAYA』は、この成功によって『穂高・光と風』では果たせなかった２９７×３６０㎜という大冊となった。水越の足跡については、２００７年に東京都写真美術館で開催された写真展「大地への想い」の図録に掲載されている「自然へのパスポートをもった写真家」（杉本誠筆）と「水越武年譜・書誌」（関次和子編）に詳しくまとめられているので、そちらをご覧いただきたい。

この『真昼の星への旅』は、「白い風　日本アルプス」、「天空への道　ヒマラヤの氷河」、「極地の山　パタゴニアとアラスカ」、「水の華　雪と氷の造形」、「いのちの聖域　原生林」と5つの章で構成されている。章ごとにゆっくり作品と向き合う

と、自然に対する感受性が研ぎ澄まされ、喜び、驚き、寂しさなど、水越の想いがひしひしと伝わってくる。

本書の中で大きな共感を覚えたのは、「雪」への憧れ、愛着の念である。著者と同じく、雪のほとんど降らない地で育ったためか、私も大いなる神秘を感じる。二十余年の信州での生活を経た今では、雪が全くない季節は寂しさを感じるのである。この雪への憧れは「わび、さび」に見るように、朽ち果ていくものへの同調、朽ちては再生するプロセスそのものへの馴染みなど、古来よりの日本人が抱き続けている美意識が基調になっているとも考えられる。水が蒸気になり、空気中で凍り、結晶（雪）となって辺り一面を真っ白く覆う。色彩に溢れた世界も、魔法をかけられたかのように、無彩色の世界に一変する。この魔法がより北へ、より高山へと向かわせるのだ、と水越は語る。すべての生命体にとって不可欠な水は、気体、液体、固体と、色や形を変える。摩訶不思議で、この上なく美しい物質である。第4章の「水の華　雪と氷の造形」には、水越の自宅から程近い屈斜路湖で撮影されたものなど、秀逸な近作が数多く掲載されている。

我々は日々、カラー映像の渦の中で生活している。映像や音声の世界の技術革新は目覚ましく、白黒からカラーへ、静止画から動画へ、アナログからデジタルへと、大きく様変わりした。人はより簡便に、新しい技術を入手し活用できるようになった。また、インターネットによるＩＴ（情報技術）革新が、様々な分野のプロ・アマの垣根を曖昧にした。写真界においても然りである。撮影機材は飛躍的に進歩し、驚くべき自動化が遂げられ、写真家の関与できる余地を奪った。フリーの自然写真家という立場で、高いレベルの活動を続けていくことは、誠に困難なことで、強い意志と並外れた忍耐力が必要である。

激変する文明社会の中で、本書所載の作品一点一点が、膨大な時間と想像を絶する労苦の末の産物であることは、誰の目にも明らかであろう。細心の注意を払いながら完成したオリジナル・プリントを原稿としたモノクロームの作品群。色彩の最も純化した色である「白」と、あらゆる色彩が含まれる究極の色である「黒」のみの世界。しかし、この2つの色の広がりは実は無限である。眼に見えぬもの、例えば雪の冷たさ、岩の重み、霧の幽玄、神秘性の表現、感動、心眼したものの表現、余白による山の高度感、傾斜性の表現は、モノクロームの世界に勝るものはない。それは水墨画がすでに証明済みである。すべての作品が白、黒、中諧調の濃淡の配置が絶妙で、格調高く、美しい。

本書は５００部限定ではあるが、すべてのテキストに英訳が併記されている。師田淵行男がこの世を去ってからすでに四半世紀が経過したが、水越は謙虚に今なお師との対話を続けている。受け継いだ自然観、撮影哲学を頑なに守り、全編モノクロー

ムで挑む氏の姿は、写真家としての反骨精神の表象のように思える。

（財津　達弥）

慶應義塾体育会山岳部 編

『登高行』XX　一〇〇周年記念号

慶應義塾体育会山岳部
２０１５年４月刊
Ｂ５判　２６８ページ　非売品

慶應義塾体育会山岳部が創立一〇〇周年を迎えたのを機に、その年報である『登高行』の記念号を刊行した。

その内容を紹介する前に、まず慶大山岳部の歩みに簡潔に触れておくことにする。

慶大山岳部（当初は山岳会）の創設は大正４（１９１５）年、まだ学生であった槇有恒、内田節二、橋本靜一らが、鹿子木員信教授の助言によって創設した。日本山岳会は明治38（１９０５）年にすでに創立されていたが、学校山岳部の設立としては早い方であった。当時日本の山登りは、草鞋、脚絆の探検時代が終わり、近代登山へと移行している時期であった。

慶大山岳部でも無雪期の登山から、ピッケル、ロープ、スキーなど新しい道具を取り入れ、積雪期の山を目指すようになっていた。

大正10（１９２１）年、渡欧していたＯＢの槇有恒が、アイガー東山稜の初登攀を成し遂げ、新知識を携えて帰国し活気づく。ちょうど開拓期を迎えていた日本の登山界に新しい知識や用具が導入され、槍、立山、穂高、剱など厳冬期の山々が初登頂されるようになる。また、岩登りなどの技術も取り入れられていった。一方、大正12年１月、立山で槇、三田、板倉が暴風雪に遭遇、板倉（学習院ＯＢ）が死亡するというルーム初の遭難事故が発生する。

このころ、山岳部内には海外の山への関心が生まれていた。大正14（１９２５）年夏、槇、三田らは学習院の仲間たちと合同で、カナディアン・ロッキーの未踏峰、アルバータ（３６１９ｍ）の初登頂に成功する。わが国初の海外遠征であった（日本山岳会登山隊として実行）。

昭和の初期を中心に、日本の山々の開拓が急速に進み、慶大山岳部は高所露営や雪洞の研究を意欲的に進め、その登山活動は抜きん出ていて、他校の追随を許さないものであった。

戦中、戦後の混乱期を経て、登山界の目は一挙にヒマラヤへと向けられていく。

日本山岳会のマナスル（8125m）初登頂（昭和31〈1956〉年）は、戦後の快挙であったが、これを成功へと導いた槇有恒の功績は大きかった。3次にわたるマナスル遠征に、慶大山岳部は延べ12名の優秀なメンバーを送り込んでいる。

山岳部独自のヒマラヤへの夢は急速に拡大していき、ヒマルチュリ初登頂へと繋がっていくのである。

ここまで、慶大山岳部の主要な歩みの一部に触れてみたが、そのどれをとっても、日本の登山史に残る、先駆的な挑戦であったことが理解できるのである。

一方、日本の山の先達、木暮理太郎、田部重治への精神的な傾倒に注目してみたい。

両氏とも山岳会の講演会に招かれているが、なかでも田部の「山は如何に予を影響しつゝあるか」（大正8年、第5回大会講演）は、年報『登高行』の創刊号に収録され、さらに第5号（十週年記念号）でも再録している。先人のその講演内容から、限りなく新鮮なものを感じ取っていた様子が伝わってくる。

逸材、大島亮吉が『登高行』誌上に流麗な文章を発表していくのも、このころのことである。どの紀行、記録にも山のロマンが漂う。

木暮や田部を敬慕して止まなかった大島は、あの涸沢の岩小屋を拠点に集まった仲間たちとともに、岩登りやスキー登山といった先鋭的な近代登山の洗礼を受けながらも、なお秩父や上信越の峠や山村を、また北海道の森林や平原をさまよい歩くという気風、精神を持ち続けていた。

昭和56年、日本山岳会の第9回山岳史懇談会で、講師の三田幸夫は大島のことにも触れ、「大島の文章だけしか知らない人は、どんな文学青年かと思うだろうが、全然違う。野性的で、乱暴で、紳士的でなかった――」と語っている（会報「山」435号、大正時代の積雪期登山）。

このことは大島が友人たちに書き送った手紙の数々からも読み取ることができ、当時のルームの豊かな、自由な雰囲気が伝わってくるのである（『登高行』11号、「登高会会報」7号）。その精神や伝統は、今日まで受け継がれている。

今回刊行された記念号は、部・会報類には珍しくハードカバーで、高雅な装幀で仕上げられている。登山の黎明期から現在まで、慶大山岳部100年の軌跡を、主として年報『登高行』、「登高会会報」の記録を基に編纂したもので、3部門から構成されている。

第一部　通史と写真記録

本書の主体となる部分で、創設から100年の歩みを、10年ごとに分割し、その時代の主な出来事や活動内容を、写真とと

もに系統的にたどるものである。見て、読んで、解かりやすいをモットーにした編集になっている。要領を得た解説が読者の理解を深めてくれる。

使用している写真は、現代に至るまですべてモノクロで統一、そのどれもが活動の記録を主眼としたもので、景観写真はない。それが誌面を一層引き締めている。

第二部　寄稿「一〇〇周年に想う」

かつて山岳部の中枢にあって、隊長、監督、リーダー、コーチなどの経験者が、その活躍した時代を回想し、体験や所感を綴ったものである。

今年（平成27年）は、太平洋戦争が終結して70年だという。戦後再興の第一歩を奔走した山田二郎氏が、本書を手にすることなく逝去されたことは悔やまれる（本欄に遺稿）。

第三部　資料編

慶大山岳部は、OB組織である登高会と一体となって、戦前から記録保存の重要性を踏襲してきた。これによって、今回の記念号の編纂においても、幅広い資料の活用が可能であった。

以下、列挙されている主要な資料について、順次触れておく。

(1)　詳細記録「一〇〇年の歩み」

本書の大部分を占める部分で、過去100年の軌跡が、各年度別に集積されている。内容は「年度の要約」「山行と活動」特記事項の「抄録」から成っている。

年度別の詳細記録であるため、第一部の通史は勿論、あらゆる資料の基本となるものである。

(2)　原点抜粋・抄録

「山岳会設立の檄文」および「設立時の会則」、「涸沢の岩小舎を中心としての穂高連峰」など重要な記録、研究、随想などから16点が抜粋、抄録されている。

(3)　軌跡「一〇〇年史の事柄事典」

「高所露営」（雪洞利用の歩み）、「山岳部の歌」（「守れ権現」）など18項目の解説。

(4)　『登高行』1～18号の詳細一覧。本書刊行の基本資料となったもので、『登高行』の各号について、目次のほか編集者、発行年月日、ページ数などの詳細が一覧に。

(5)　登高会会報　発行年月一覧表

戦前（昭和9年～16年）、戦後（昭和28年～）の登高会会報の発行年月と、その主な内容が記録されている。

(6)　登高会在籍者一覧（創設～2014年）

(7)　慶応山岳部・登高会　年表

慶大山岳部は、先に見たように日本の近代登山の黎明期に誕生し、常に先駆者として日本の登山界をリードし、その発展に

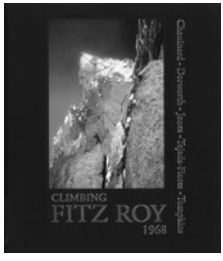
大きく貢献してきた。この100年の軌跡は、また日本の近代登山の歩みでもある。

本記念号のような地道な出版を、時間をかけて確実にやり遂げるところにも、また慶応山岳部の伝統と堅実さが見て取れるのである。

この記念号は、日本の近代登山史の研究に欠かせない第一級の貴重な文献として、今後多くの人に広く活用されていくことと思う。

（松家　晋）

Yvon Chouinard ほか 著
『Climbing Fitz Roy 1968』



patagonia books　2013年10月刊
235㎜×210㎜　138ページ
日本語版4835円（税込）

2012年からの3シーズン、私は南米・パタゴニアのフィッツロイ山群に通った。フィッツロイはもちろん、周囲に広がる山々はどこまでも険しく、そして、クライマーの登攀意欲を掻き立てる姿だった。それがこの地に通い続けた理由である。

パタゴニアを訪れる以前に私が持っていたフィッツロイ山群のイメージは、「凶暴な風や嵐と戦う」というもの。登攀そのものよりも、どうやって嵐をかいくぐって山頂に立ち、そして無事に逃げ帰ってくるか？　というのがクライマーに課せられた命題だと思っていた。

ところが、いざ現地に赴いてみて初めて、それがある意味では間違いだということに気がついた。たしかに、ひとたび天気が悪くなれば、とてもじゃないけど山に入るなんて考えすら起こらない。そして、時としてその悪天は2週間以上続く。それはまさに、私の抱いていたパタゴニアのイメージそのものであった。

しかし、現代に生きるクライマーたちは、それに対抗する大きな武器を持っている。快適な街をベースキャンプにして、詳細な天気予報をインターネットで簡単に入手することができる。したがって、そもそも悪天が訪れるタイミングで山に入るなんて「愚行」は起こり得ない。山が悪天のときは、街の裏でロック・クライミングをして過ごし、天気が良くなったら軽装で山に向かう。正直言って、それは非常に楽しい。登攀そのものに集中できて、何度でも現地に足を運びたくなるというものだ。

そこで、この物語である。いまから半世紀近く昔に行なわれた、「あくなき冒険者たち」によるフィッツロイ第3登の記録写真集。ここで語られているのは、現代クライマーから見れば一種の愚行かもしれない。いつ来るかも分からない好天を待ちわびながら、むさくるしい男たちが雪洞の中で1ヶ月以上も過ごす。食糧が底をつき、一度は下山を余儀なくされる。下山しても便利な街があるわけではない（麓のエル・チャルテンが発展したのは、ここ15年ほどの間である）。車を数時間走らせて最寄りの交易所まで行き、食糧を調達する。重荷とともに数日間かけてベースキャンプに戻る。再び訪れる悪天。その先のフィッツロイ登頂である。彼らの言うところの、「忍耐と根気と、そして少しの運」。

本書を読み進めるうちに、便利というものに対する疑問が生まれてきた。正確な天気予報やルート・コンディションの詳細、そしてまた、そういう情報を得るための発達した手段。現代に生きる私たちがそういうものを否定することはもはや難しいし、登山のリスクを減らし、成功に導くという意味では、得られるメリットの方が大きいのもまた事実だろう。

だけどそれは、登山本来の姿からはかけ離れてしまっていないか？　「良く分からないけど、とてつもなく大きなもの」というのが山であって、登山というのは、それを自分たち自身の力で解決し、山頂を目指すという行為である。本書が教えてくれるのは、登山の本質とその魅力そのもの。そういうものにコミットする男たちの、なんと潔く美しいことか。

本書では写真がふんだんに使われ、要所に5人の当事者たちの回顧録が挿入される。ユーモアにあふれ、時として示唆に富む。

彼らのフィッツロイ第3登は、半年にも及ぶロードトリップのフィナーレでもある。カリフォルニアから始まったその旅は、南下を続けながらサーフィンをし、山を登り、時には命からがらのハプニングに見舞われながら続いた。その6ヶ月の時間そのものが、大冒険だったに違いない。彼らの帰国後すぐにこの旅の模様は映像化され、伝説的な一大ストーリーとなった。さらに２００９年、この旅をモチーフにした映画が製作上映されたこともあり、再び脚光を浴びることになった。

メンバーのダグ・トンプキンスはノースフェイスの創業者、イヴォン・シュイナードはパタゴニアの創業者である。世界的企業にまで発展した2つの衣料メーカーの創業者がこの旅を経験していることに、何かしらの意味を見出そうとするのは自然な流れかもしれない。この旅から何を学び、それをどのようにその後の人生に発展させたのか？　読み進めていけば、なんらかカギは見つかるかもしれないし、その部分に興味を抱く人も多いだろう。

「多くの伝説が物語に織り込まれ、記憶の端々は曖昧になり、逸話が語られて飾り付けられて、もとのストーリーはいつの間にかある種の壮大な冒険ドラマになっていた。だから本当に起こったことだけを語ろうとすると、読者をガッカリさせるかもしれない。」（ダグ・トンプキンス）

私は彼らのフィッツロイ登攀そのものを称賛したい。これは、もしかしたらクライマー的感覚によるものかもしれないが、やはり本物の冒険は、フィッツロイ登攀の中に存在すると思うのだ。当時の『アメリカン・アルパイン・ジャーナル』に載ったダグによる手記が、本書にも転載されている。そこに描かれているのは、彼ら自身の山に向かう純粋な思いである。無償の行為としての登山であり、山とがっぷり四つに組んで行なわれた本物の登山である。大きくて険しい山に翻弄される、彼ら自身の心的描写には深い同意と大きな感銘を受けざるを得ない。

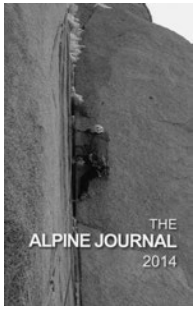
ダグの言うところの「責任のない大冒険」に、理由などを後付けする必要はない。私たちはただ、写真や文章からその一端を垣間見ることができればそれでいい。

「いま素晴らしい旅路を振りかえり、運命という神秘の手がそこへ導いてくれたことに心から感謝する。私はこれまでの人生で悔いを感じたことは一瞬もない。もしもう一度やり直すチャンスがあったとしても、でこぼこ道まで全部含めて、まったく同じ行程をたどることを選ぶだろう。あの旅の最後、バリローチェからフィッツロイの谷までのでこぼこ道を１４５０キロ走ったときのように、ずっと穏やかだというわけではないとしても、その経験をおおいに楽しみながら。」（ダグ・トンプキンス）

（横山　勝丘）

『The Alpine Journal 2014　Vol 118』

The Alpine Club　２０１４年刊
435 pp.　£26 net in the UK



世界で最も古い英国山岳会の機関誌である。綺麗な写真も随所に見られるが、細かな文字で４３０余頁、その上、目次だけでも２頁あり内容は盛りだくさんだ。創刊１５０年を経た本誌に、どのような事柄が報告されているのか。今回はご理解の一助になればと、目次に掲げられた全題目について簡単に内容を紹介する。

1．巻頭言

昨年号は機関誌『アルパイン・ジャーナル』発行１５０周

年、エベレスト初登頂６０周年など、クラブとして記念すべき事業の多い年だった。本号は第１次世界大戦勃発１００年目でもあり、当時を回顧するなど地味な内容が多い。

2. アジアの高地

① Kishtwar Kailash：前年までのMick Fowler前会長たちが初登頂したインド・Kashtwar Kailash（６４５１ｍ）の報告だ。氷をまとった岩峰に５ヶ所でビバークを重ねて登頂している。

② An Invitation to Zanskar：英国隊・ザンスカールのPensilungpa氷河流域と４ヶ所の支流域の探索とともに５８０２ｍ峰と５８２５ｍ峰の初登頂報告もある。

③ Life Wish：３度目のアンナプルナ南壁。フランス隊。道中はロッジ利用で荷物を減らし、途中で無名峰５６０５ｍに登るなどして高所順応を行ないＢＣ入り。10月16日から11日間、ビバークを繰り返しながらアルパイン・スタイルでのアンナプルナ南壁登攀報告、

④ Tharang I：インド・ヒマラヤ。９月から10月にかけてTharang I（６０６６ｍ）、TharangFang(別名VishalDant（５４９０ｍ）とJasminka（５４０１ｍ）の初登頂の報告であり、この周辺にはまだ未踏峰があることを示唆している。

⑤ Across Tibet With a Broken Neck：13年６月14日から１ヶ月近くかけて、障害者用車椅子３台と自転車によるサポート・チーム20名の大部隊がチベット・ラサから10の峠を越え、エベレストのＢＣ（５２００ｍ）にも立ち寄り、カトマンズまでチベット高原を走り抜けた。ラサは高度障害が発症する高所だ。しかも、そこからまだ高度を上げてのサイクリングの困難さは計り知れない。また、この機会を利用して脊椎傷害研究費の基金集めも実施している。

3. 論評・回顧録

① Snakes & Ladders：２０１３年、ベルニナで開催された45ヶ国代表が集う国際登山協会の雰囲気や検討内容などの報告。なかでもシェルパたちによるエベレストのヒラリー・ステップへのラダー設置の良否が討議されたが、報告書が出る前の14年４月、ラダー設置作業に向かうシェルパたちを大量に失う大惨事が起きてしまった、と。

② Who Owns The Mountains?：13年はスイス山岳会創立１５０周年だった。温暖化の影響で氷河が縮小し、アルプスでは氷河への取付部分に急峻な岩壁がむき出しになり、危険な状態の山が出てきた。

③ Mountain Wildness–Responsible Alpinism：悪魔の住処と思われたスイスの山は、いまやヨーロッパのプレイグラ

ウンドに変わった。登山、岩登り、スキー、トレイルランニング、トレッキング、観光地と様変わり。今後の行方はいかに、と探っている。

④ The Golden State Revisited：１９７０年代、ヨセミテのクライミング黄金時代に登りまくったベテラン・クライマーが、スコットランド代表として米国山岳会から招待され、ヨセミテで開催の国際クライマーズ集会に参加。エル・キャピタンの頂上で思い出に浸るなど、再訪を堪能している。

⑤ Patagonia-Winds of Change：セロ・トーレのコンプレッサー・ルートの登攀や、風雪と戦いながらの垂直の氷壁の登攀など。

4. 踏査

① Exploring The Alichursky Mountains：猟師や牧人の映画撮影隊に同行して東部タジキスタンを訪問。登山は手つかずの山々を歩き、７つの谷を踏査した。洞窟で考古学的な発見をし、ウラニウム汚染の谷に偶然に入り込んだ報告。

② Nyainbo Yuze：副題に将来のクライミング・パラダイス？　とある。中村保氏の『Japanese Alpine News』２０１４年に発表した縮小版である。「年保玉則」は青海省にあり、７つの顕著なピークを有し最高峰は５３９６ｍ。１９８９年８月、京都山岳会が最高峰より少し低いⅡ峰に初登頂している。中村さんたちは中国のウェブサイトで「09年、中国隊は主峰に挑んで失敗したが、11年７月、再度３人で出かけ北東面から初登頂した。13年８月、別の中国隊８人が第２登に成功した」と知った。しかし、中国登山協会（北京）、青海登山協会（西寧）はともに中国隊の初登頂、第２登のことを把握していない、とのこと。当山域は急峻な稜線とゴルジュが発達し、１６０もの湖水もある。現地の狩猟民は年保玉則を聖なる山と崇めており、山は荘厳で優雅だ。薬用ハーブ類も豊か、野生のロバやヤク、熊たちもおり、魚の種類も多い。中心地「久治」は青海省西寧から陸路８７５㎞の遠隔地だ。副題の意味が解けた。

5. アルプスほか

① Key Moments on The Peuterey Ridge：合せて１２７歳の２人がアルプスで一番長いリッジに挑んだ。２０１３年７月、６日間かけて岩棚でビバークを重ねながらモン・ブラン山頂に立った。10枚の写真からその凄さを推し量ることができる

② Dent d'Hérens：１８６３年８月12日、ウッドマスが初登頂した。１５０年後の当日にオアスタの谷経由で５人の仲間が４１７１ｍのピークに登頂した。マッターホルンの

頂上は指呼の先だった。１５０年前に存在した氷河が消えているが、アオスタ谷の自然の豊かさと温かい人情は変わっていない、と。

③Four Valleys, Five Summits：14年6月、10名のＡＣ会員がペルー・アンデスのブランカ山群に出かけた。４つの谷に入り、イシンカ、ウルス、ヤナパチャなど5峰の登頂に成功、アルパマヨ、キタラフなどにも挑戦したが、不安定なコンディションのためあきらめた。

6. 寒冷地の登攀

①The Last Great Climb：13年1月、南極クイーン・モード・ランドのUlvetanna（１７５０ｍ）北東稜からの初登頂と写真撮影の記録。アプローチこそ雪上を歩いているが、ほとんど垂直の岩壁登攀である。頂上付近ではマイナス35℃、風雪吹きすさぶ岩壁でのビバークなど、13枚の写真がすべてを物語っている。

②Wall of Paine：13年10～11月、パタゴニア・パイネのサウス・タワー未登の南東壁への挑戦。18日間ＡＢＣに滞在。その間2日しか晴れず。悪天候の中、頂上に迫るも敗退。

③Ice Cold in Canada：14年1～2月、カナディアン・ロッキーのクライミング。垂直に近い氷ばかりを登っている。気温はマイナス30℃以下になっているが、登攀は快適なようだ。バンフの40℃の露天温泉プールで、濡れた髪の毛がマイナス20℃の外気に触れた瞬間に凍り付いた。得がたい体験をした、と読者に勧めている。

④The Really Northern Playground：14年4～5月、東部グリーンランド。スキーを履き、荷を積んだ橇を引きながら雪原を歩いてＢＣ建設。Kuldefjeld（９８０ｍ）の初登頂に成功するなど周辺を歩き、滑りまくっている。

7. 科学

①The Rise of Tibet：チベットは南をヒマラヤに、西はカラコルムとパミールに、北は崑崙とアルタイ山脈に囲まれた標高５０００ｍを超す広大な高原。降雨をもたらすモンスーンは南のヒマラヤに遮られ、恵みも少ない。チベット高原の成り立ちなど、カラー写真で詳しい解説がある。チベットは１９８０年代に初めて外国人地質学者に入域を許可したが、まだまだ手つかずの地域が残っている。

②Summit Archaeology：未完成の学問だ。考古学研究は人類が生活拠点にしていた海辺、川辺、山麓、高原や平地を対象にするものと思っていた。ところが近年、クライマーと考古学者のコンビが活動している。アンデスでは「山頂考古学」、中央ヨーロッパでは「プレ・アルピニズム」と名付けている。アメリカの高山やアンデスの６０００ｍ

峰の山頂付近、イラン・ダマバント、日本の噴火口内、モロッコのツブカル山の山頂などに、人類の住居、見張り台、信仰などとは無関係と見られる立派な遺跡があるので、研究が始まっている。

8. 芸術

① Painting Mountains：絵を描くことは習慣的になり熱中させられるが、時には失望させることもある。しかし、上手くできれば満足度も大きい。油絵による空、光線、雪、稜線や岩などの表現方法を記している。

② Filming Mountains：戦前、１９２４年のエベレスト遠征で、マロリーとアービンが雲間に見えた映画をご存じの方は多い。寒さのためにフィルムや現像液が凍結したなど失敗を繰り返した。それが時を経て電池やレンズが改良され、カメラの軽量化が進み、ＩＴ技術を駆使し、テープに代わるメモリーカードも使われる今日だ。しかも、誰でも手軽に動画や写真が撮れる時代になった。

③ Painting Rock：油絵で景色を描くのは一般的だが、大きな岩を上手く描き上げるヒントを披露している。

9. 歴史

① The Brenva Feud：１９２７年、グラハム・ブラウン（45歳）はＦ・スマイス（20歳、その後英国エベレスト隊にも参加）とモン・ブランのブレンバ・フェースの初登攀に成功し、翌年、同フェースのルート・メジャーを登攀したが、その後二度と一緒に登らなかった。しかし、25年後にグラハムがその真意を書いた。筆者がその後の両者の成文化した言い分を披露している。

② The Pocket Hercules：１９４４年、英国山岳会の会長に就任したレオ・アメリイ氏のポートレート。インドで生まれ、英国の学校ではＷ・チャーチル氏と懇意だった。マッターホルンに登頂するなどアルプスで実力を磨いた。英国統治インド軍幹部だった１９０７年、ロングスタッフに招聘されたエベレスト遠征は、軍部の反対で実現しなかった。やがて国会議員として閣僚の重責を担うなど、広範囲に活躍しながら終生登山を続けた。

③ Mount Robson–1961：１９６１年、カナダ・ロブソン（３９５４ｍ）登頂は最も厳しい登山だった、と筆者は回顧している。

④ One Hundred Years Ago：１００年前、１９１４年の話題。元旦、ビバーク後シンプロン峠を経てフレッチホルン冬季初登頂あり。ブリーク～グレッチュ間の鉄道が完成。コーカサスではガイドレス隊も探検を続行。カラコルムでもイタリア隊などが活躍。インド・ヒマラヤでは、高所で

酸素ボンベ使用テストも始まった。南アやＮＺでも新ルートが開発されるなど、登山界にとって記憶すべき年であった。年末の年次総会で会長は「この事態に至って夕食は提供しないが、皆さんはアルパイン・クラブが末永く続くことを願っていると確信している」と述べた。第１次世界大戦に突入したのだ。

10. 各地域の登山情報

①アルプス・ドロミテ２０１３年、②冬のスコットランド２０１２～14年、③アフガニスタン２０１３年、④中国・チベット、⑤ネパール、⑥アルゼンチン・アンデス２０１３年、⑦パタゴニア２０１３～14年、⑧南極２０１３～14年、⑨エベレスト基金登山（25件）。報告が68頁にわたり記されている。邦人仲間の活躍も随所に記されているが、誌面の都合で割愛させていただく。

ちなみに２０１３年5月の1ヶ月間でエベレストにネパール側から22ヶ国・５３９人、中国側から21ヶ国・１１９名が登頂している。

11. 書評

Mont Blanc：P. Batoux 著、Vertebrate Publishing（１９７５年発行のG. レビュファーの名著『モン・ブラン』に次いでモンブランの岩、雪、氷とミックス・ルート情報が豊富だ）。

A Long Walk With Lord Conway：S. Thompson 著、Signal Books（１２０年前にカラコルムを探索したコンウェイ男爵の人となりと業績の紹介）

Trekking around Upper & Lower Dolpo：Sian & B. Gibbons 共著、Himalayan Map House.（ネパール北西部、いまなお未開に近いドルポ地方のトレッキングと僻地の紹介）

Great Himalaya Trail：G. Pauler 著、Baton Wicks（２０１２年、ネパール・ヒマラヤに沿って東から西まで１７００kmを歩いた50歳代女性の報告）。

The K2 Man and his Molluscs（the extraordinary life of Haversham Godwin-Austen）：C. Moorehead 著、Inn Pin（ゴドウィン・オースティンは１８６０年からたびたびカラコルムに入り、バルトロ氷河を探検し、Ｋ２へのアプローチを確認した。英国登山史の中で屈指の実績を残した人物伝）

Far, Far The Distant Peak The Life of Wilfrid Noyce, Mountaineer, Scholar, Poet：S. Hawkins 著、Curbans Books（インド生まれ、英国育ちのＷ・ノイスは１９５３年、英国エベレスト隊員としてサウス・コルへのルートを

開くなど、ヒマラヤで活躍した傑物。うらやましいような伝記）

8000 Metres Climbing the World's Highest Mountains：（会報「山」２０１４年3月20日、８２６号の図書紹介欄に掲載済み）など28冊の書評・紹介あり。

＊前記概要を記した書籍は、ＪＡＣ図書室に配架済み。

12. 追悼

13名の物故者名と入会年、内7名の写真入り追悼文あり。

13. 山岳会記録

２０１４年役員一覧表：1頁全面を使用して役職と担当者の紹介あり。新会長にはリンドセイ・グリフィンが就任。

ミック・ファウラー会長離任挨拶：3年前に比べて会員の20％増を実現し、会員数は１５００人を超えた。30歳以下の会員が８％となった、など。

ピオレ・ドール賞：リンドセイ・グリフィン新会長が、５つのノミネートされた顕著な初登頂・初登攀の業績が選考委員たちによってどのように評価され、Ｋ６西峰（７０４０ｍ）とアンナプルナ南壁の新ルート登攀の2点がなぜピオレ・ドール賞に選ばれたか、を興味深く解説している。

ステック氏とロパー氏とのランチ：アメリカのクライミング著述業界のゴッドファーザーと言われ、最初に『ヨセミテのガイドブック　キャンプ4』を書いたロパー氏（73歳）と、有名な『ヨセミテ・センチネル・ロック』の共著者ステック氏（88歳、会員）のいまなお元気な対談。

図書室報告：開催した写真展や資料展の報告。

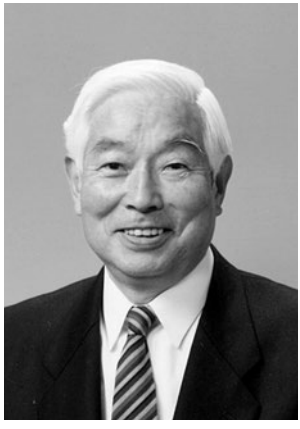
貢献者：世界の地域情報担当者の紹介と情報内容など。

索引：本号の登場人物と山名。2列で15頁あり、便利だ。

アメリカ山岳会の機関誌『The American Alpine Journal』2014については会報「山」２０１５年2月、８３７号の図書紹介で記したとおり、初登頂・初登攀に特化した感想を得た。本機関誌は前記のように最新の初登頂など登山情報はもちろんのこと、踏査行、登山界への論評、回顧録、科学、芸術、歴史、書評などにも誌面を大きく割き、広範囲で情報豊かな山の文化総合誌の印象が残った。

追　悼

古屋　学而さん



ふるや　がくじ
（1934～2014）
会員番号 5499

昨年（２０１４年）の４月22日、学而さんに訃報を知らせる電話を入れた。近況をやり取りするうち、話す声に少し張りがないのに気が付いた。「体調はどう?」と聞いたら「大丈夫、元気だ」と返ってきた。その９日後の５月１日に、学而さんが逝ったとの連絡を受けた。あまりに突然の別れに、しばらくは言葉を失った。

タラの芽を採りに行って斜面で転んで入院した。「元気だ」と言っていた場所が整形外科病院で、治療中に運悪く肺炎を発症して、あっと言う間にあの世に旅立ってしまった。人間の一生ははかなく、一寸先は分からない、と惜別の念が込み上げてくる。

学而さんは勝沼の旧家「原茂園」に生まれた。葡萄を手広く栽培している農家で、ワイン醸造も手がけていた。大学を卒業するとすぐに醸造業の構築に励み、今では「原茂ワイン」は国内品評会で毎年、優秀賞の金賞を受賞するほどになり、国内はもとより輸出もしている。山岳関係の懇親会や催しには必ず自慢のワインを持参し、皆に振る舞っていた。当然、自社ワイン以外は飲まないという徹底ぶりで、学而さんのモノ造りへの心意気を垣間見た。新酒の時期には自宅の観光葡萄園でパーティを開催し、山岳関係者も招いて賑やかに友好の場をつくったこともあった。栽培している葡萄はいずれも見事なでき映えで、時期には必ず、大きく甘いピオーネを我が家にも送ってくれた。

また多才な人で、登山界はもとよりスキー連盟、地元勝沼町のことと、多方面にまとめ役ぶりを発揮して大きな影響と足跡を残した。山梨県山岳連盟の副会長を５期10年間務めたり、スキー関係では山梨県スキー連盟の理事長、副会長を歴任、１９９４年からは全日本スキー連盟の監事を４期８年間務めた。そ

の間、コーカサスや韓国へ全日本の遠征隊長として派遣されたこともあり、スキー界でも多大な貢献をした。

学而さんの山歴は古く、日川高校在学中に山岳部に在籍した。卒業と同時に同校ＯＢを中心に昭和25（１９５０）年に結成されていた、からまつ山岳会に入会した。その後、会長を１９６３年から亡くなるときまで52年間も努めたのは、人望とまとめ役が買われたからだ。

１９６５年に山梨県山岳連盟初の海外遠征隊「訪華友好登山隊」を、からまつ山岳会の会員のみでなんとか編成し、隊長を引き受けたのも、まとめ役を自任した学而さんの心意気だった。1ヶ月にわたり南湖大山から中央尖山への北部山群縦走と、玉山を登頂して台湾山岳協会との友好を深めた。この遠征に寄せた県民の関心は高く、登山を通じての日華友好が評価され、多方面から支援を受けた。山梨岳連にとっては海外登山の先駆けとなった。

１９７０年に、からまつ山岳会が10年ぶりに発行した機関誌『からまつ』10号が手元にある。からまつ山岳会が最も活動していた時代で、すばらしい記録が載っている。いずれも厳冬期の登攀で、北岳バットレス、塩見岳北面、甲斐駒ヶ岳・摩利支天などが大変読み応えがある内容で、参考になった。この充実した成果を生んだのは、学而さんというまとめ役がいたからだと思う。その会報の末尾に「よこ顔」欄があり、会員たちを編者が紹介している。学而さんについて「山男と言うよりも、スキーの先生と言った方が、名がとおる男。ゴマシオ頭にあどけない笑顔、真っ白い歯がのぞくと、とてもイカス。――」とある。50年経ってゴマシオ頭は白髪に変ったが、雰囲気は少しも変らなかった。

日本山岳会の永年会員でもある学而さんは、山梨支部長を7期14年間と永く務めた。山梨支部は１９７３年ごろから１９８９年ごろまでの間、活動が全く停滞し、組織の体を成していない時代があった。１９９０年に学而さん、故岩間弘雄さん、故坂本桂さん、遠藤靖彦さんらを中心に支部再建がスタートして、１９９３年に瑞牆山で開催した全国支部大会が弾みになった。

１９９４年に支部長に就任した学而さんは、熱意ある委員たちのサポートを受けて次々と事業に取り組み、支部は大きな成果を上げていった。

１９９５年に日本山岳会創立90周年中部ブロック記念式典が甲府で開かれた。越後、信濃、静岡、山梨の各支部共催で、山岳フォーラム開催と記念登山が甲斐駒ヶ岳、仙丈ヶ岳で実施された。フォーラムは「南アルプスの山岳環境と登山の将来像」をテーマに貴重な講演や意見交換がなされたが、時間の関係でまとめまでは至らなかった。その後4回の支部フォーラムでの

討議を経てまとめ上げ、１９９７年８月、山梨県知事へ山小屋のトイレ改善や山岳総合センター設置など、６項目からなる「山梨県の山岳環境の将来像について」を提言した。

２００４年には１００周年記念事業の日本列島中央分水嶺踏査が実施され、支部の実働会員総動員で対応した。奥秩父の大弛峠で静岡支部から受け継ぎ、踏み跡不明の小川山から信州峠間も頑張って踏破し、小海線の最高地点で信濃支部に繋いだ。

支部独自の１００周年記念事業「山の博覧会」は毎年開催（05年～14年）して10回に及んだ。「山を知ろう、山へ行こう」をキャッチフレーズに、「山の日」や公益事業を先取りした企画で、毎回４００人以上の参加者で賑わった。

支部創立60周年式典は２００８年11月に、ぶどうの丘で開催した。挨拶で学而さんは「公益法人化の動きの中で、山梨支部の活動は本部からも高い評価を受けている。今後も支部会員とよく話し合いながら、一層の発展を図りたい」と述べた。まとめ役古屋支部長の果たした役割は大きく、山梨支部での活躍の道のりは、支部再建の歴史そのものと言える。

シーズンになると学而さんからたびたびスキー行きを誘われた。学而さんは国体に出場経験のある本格的な競技スキーの腕前なのに対して、私の山スキーは自己流で褒められた滑りではない。足手まといになるのは明白で、一緒に滑る機会はなかった。このようなことになってしまうと、白馬でも滑りたかったと残念で仕方がない。心からご冥福を祈ります。

合掌

１９３４年：山梨県甲州市勝沼に生まれる
１９５２年：日川高校卒業。山岳部に在席
　　卒業と同時に山岳部ＯＢ山岳会「からまつ山岳会」に入会
１９５６年：千葉大学園芸学部卒業
１９６２年：日本山岳会入会
１９６３年：からまつ山岳会会長に就任（～２０１４年）
１９９３年：山梨県山岳連盟副会長に就任（～２００２年）
１９９４年：日本山岳会山梨支部支部長に就任（～２０１０年）
１９９４年：全日本スキー連盟監事に就任（～２００２年）
２０１４年５月１日：逝去、享年80
からまつ山岳会会員、日本山岳会永年会員、山梨県山岳連盟評議員

（内藤　順造）

木下　是雄さん

きのした　これお
（1917〜2014）
会員番号 2563

木下先生の一周忌にあたり「『物理・山・ことば』を考える」と題する講演会が、２０１５年5月9日に学習院大学において開催された。企画・準備は大学の弟子筋、すなわち〈物理〉の分野の人間が行なった。『物理・山・ことば』（新樹社、１９８７年）は先生の古稀のお祝いに、先生の書かれたものをまとめた本の表題である。〈物理〉分野の人間でも、〈山〉と〈ことば〉の世界での先生の活躍を知らない者はいなかった。先生の著作をまとめて残そうという企画は喜寿のころさらに拡大し、木下是雄集1『物理の樹』、2『山・人・スキー』、3『日本人の言語環境を考える』（晶文社、１９９５〜96年）の3冊にまとめられた。先生の物理・山・ことばに対する考え方は、これらに集積されている。以下では、物理・山・ことばを行きつ戻りつしながら先生の生涯をたどる。なお、「括弧書き」は先生の書かれた文章からの引用である。

木下先生は１９１７年11月16日、岡山市に生まれた。「岡山市で生まれたが、同地の記憶はきわめて薄いので、訊かれればたいてい『東京生まれ』と答える」ために、東京生まれと紹介されることが多い。祖父、父とも医者の家で、１９３２年に父君が病没される前から、祖父（木下正中）の下で青年期を過ごされた。木下先生ご自身が「お世辞を言わない、言えない」、あるいは「ことばをかざることを忌避するのは往々にして非礼の域に入る」と表明されており、うなずかれる方も少なくないであろう。その性行は「祖父の影響をかなり強く受けている」ためと自己分析されている。

先生は子どものときから山が好きであったが、「自分の計画で、登山者としての意識をもって山歩きをはじめた」のは１９３３年。「１９３４年には、私の第一号の山靴を、当時神田駿河台下の交叉点にあった足利靴店でつくってもらった。第一号と書いたが、私はまだ第二号を手にしていない。第一号の、今年で二十四年目の古靴をはいて、昨夜新雪の乗鞍から帰ってきたところである。帰りに松本の竹内靴店に寄ったら、主人の平林

氏が『もうその靴は国宝として博物館に納めなさい。私が代りに一生涯はける靴をつくってあげる』という。寸法をとってくれたからいずれ第二号ができるだろう。しかしこの古靴への愛着は絶ちがたい。」（『山と高原』１９５９年1月号）　この山靴は、大学の先生の部屋の棚の奥に現在まで大切に保管されていた。中には１９６３年の古新聞が詰められていた。使わない物は捨てる徹底的合理主義者の先生でも、初めての山靴を捨てるのは忍びなかったものと想像する。同じ１９３４年春に三ツ峠でスキーの初体験をし、その年の暮れには菅平ですっかりスキーの虜になられたという。

１９３５年に旧制第一高等学校に入学し、「旅行部に入って山のぼりに専念した。」山歴の詳細は今となっては知る術がないが、先生の登山家としての実力はこの3年間に形成された。山行の傍ら寺田寅彦などを読み、将来の物理への進路を決められた時期でもあった。東京帝国大学理学部物理学科に１９３８年に入学し、「目標を物理にはっきり切りかえ」「こんどこそ勉強するんだ」と心に決められたようだが、「ときに抜けだして山にも出かけた」そうで、山との縁は切れていなかった。処女論文（１９３９年）となった吹雪・積雪の実験的研究は、一高旅行部の先輩で理化学研究所の黒田正夫先生の指導によるものであった。本業とは別と言うべきであるが、物理学者の目と頭で生涯にわたって続けられた雪とスキーに関わる研究は、このときに始まっていた。本来の卒業研究は焔の温度の分光学的な精密測定で、こちらは以後の本業の研究に繋がっていくことになった。

卒業研究の最中、１９４０年に起きた東大スキー山岳部の谷川岳・一ノ倉沢の遭難の救援に参加したことを機に、東大スキー山岳部に加わり、渡辺兵力、松丸秀夫、朝比奈菊雄、村山雅美などの各氏との交遊もこれ以後続くことになる。卒業と戦争を目前にして、当時建設されたばかりの東大の乗鞍の山小屋（銀鞍荘）を訪れ、その後も猪谷六合雄・千春父子、福島清喜（元安曇村村長）など乗鞍との交流を続けられた。東大卒業後、１９４１年に名古屋帝国大学理工学部応用物理学教室の講師となられた。後にナイロンザイル切断事件の渦中の人となる石岡（当時の姓は若山）繁雄が在学しており、山行を共にし、親交を深められた。ナイロンザイル事件に際して、石岡は木下先生に宛てて事件の詳細を手紙にしたため、相談を持ちかけている。

１９４２年から終戦まで豊川の海軍工廠光学部で軍務に就かれた後、名古屋大学に戻って、ガラスの表面の摩擦、ヤケ（変質層）、放電の分光学的研究を再開された。１９４９年に学習院大学物理学教室に移り、１９８５年の退職まで、固体表面、薄膜、真空蒸着膜などを対象として、分光学的手法、電子顕微鏡、偏光解析法などの実験技術を駆使して、それらの構造、成長過程、物性の研究を〈物理〉分野でのライフワークとされた。

その傍ら、仲良しの物理学者が集まってロゲルギストなる同人を結成し、身の回りの科学に関する珠玉のエッセイを１９５９年から4分の1世紀にわたって雑誌『自然』に連載された。これをまとめた『物理の散歩道』全5巻（岩波書店）と『新物理の散歩道』全5巻（中央公論社）は、物理を専門としない方々にもぜひ読んでいただきたい。学習院大学在職中には理学部長、大学長を務め、また、学外でも応用物理学会会長、各種の国際委員会の委員を務めるなどリーダーシップを発揮された。

一方、〈山・スキー〉の分野でも活発な活動を続けられた。１９５４年には『ペルケオ・スキー読本』（朋文堂）を上梓された。積雪の性質からスキーの力学、スキー道具に至るまでを物理学者の目と頭で分析、解説したものである。この研究はスキー科学研究会に発展し、成果は１９７３年の『スキーの科学』（中公新書）となってまとめられている。これらの研究を評価するならば、スキー初心者が読んで上達の助けになるかは疑わしいが、力学（物理）の素養をある程度身につけたスキーヤーを、この上なく楽しませる科学であると言って良いであろう。

１９５７～58年の国際地球観測年に日本から南極観測隊を送り出すに当たっては、舞台裏でその事業の二本柱であった永田武と西堀栄三郎両氏の仲を取り持つ重要な役目を果たされ、観測事業を成功に導かれた。当時のことを「狂瀾の時期であり、生涯でいちばん酒をのんだ時期」と回想されているが、いかなる酒であったのだろうか。ご自身は１９５６年に米国の観測隊にオブザーバーとして参加し、南極生活を体験された。本来の物理の研究活動とはまったく関係ないが、そのような時間を持てたのは悪いことではなかったと、また、後の国際的な場での活躍にも米国観測隊の中での体験が大いに役立った、と書き残されている。

１９５９年から12年間、学習院大学山岳部の部長を務められた。この間、大学の山岳部のあり方についていくつかの論考を残されている。大学に入ってから山を始める多くの学生を、4年間でどのようにどこまで登山者として育てれば良いのか、体力に差のある男子と女子の混在にどう対処すべきか、などである。これらの問題は現在でも大学山岳部の抱える悩みであり、まだ解決されてはいない。ちなみに先生は、女子部員だけを連れた山行を積極的に実践されていた。

〈ことば〉の分野での活動は、１９７０年代の半ばに始まった。それまでも学生のレポート、論文、研究発表の指導に悩んでいらしたことは想像に難くないのだが、「米国の教科書を見て言語技術教育に開眼」し、従来の日本の初等国語教育では世界で通用する表現能力を養えないと考えられたのであろう。すぐに学習院内に言語技術研究会を結成し、小学校で使う教科書の作成に乗り出された。同時に雑誌『自然』に「理科系の作文技術」の連載を始められた。１９８１年に『理科系の作文技術』（中公

新書）にまとめられ、ものを書く人ならば理科系でなくとも読むべき本として、現在も版を重ねるベストセラーとなっている。１９８５年に学習院大学を退職された後は「進路を物理から言語技術教育にすっぱり切りかえ」、大学の外に出て、通産省やＪＥＴＲＯなどが後押しする組織で、例えばマニュアル（機器の取扱説明書）の表現を分かりやすくするための方策、などの仕事に精力を注がれた。

大学退職後〈物理〉を離れて〈ことば〉に軸足を移されたものの、やめなかったものは、と言うよりそれまで以上に活発になったのが〈山〉であった。１９８６年のアンナプルナ内院探訪を皮切りに、ネパール、ブータン、フンザ、パタゴニア、パミール、アラスカ、雲南など、２００１年までの15年間に10度のトレッキングに出かけられている。それもお仕着せのツアーに参加したのではなく、ご自身で行き先を選び、計画を立て、隊員を選考されたのであった。後輩として見ていても、先生の面目躍如、痛快であり、大変うらやましくもあった。

写真は１９８８年のネパールでのひとコマである（撮影は小林康浩会員）。２００３年にはこれらの山旅を『ヒマラヤ・トレッキング』（新樹社）にまとめられている。その中に「山のぼりを人生の目的の一つに数えながら、私の心はいつも仕事―物理―の方に傾斜していた。私が久恋のヒマラヤの山々の間に足を踏み入れたのは、結局、１９８５年に退職して実験室と縁が切れてからである」とある。

記憶をたどるとき、目に浮かぶのは先生の笑顔である。楽しいとき、嬉しいときに先生はそれをそのまま顔に出された。先生は決してお世辞は言われなかったが、あの笑顔が周囲の人への最高のサービスであった。それ故に、物理・山・ことばそれぞれの分野で、多くの友人を持ち、先生を慕う後輩を生み出したのだと思う。晩年は認知症ゆえ往年の鋭さは陰を潜めていたが、床の上でいつもニコニコとされていたと伺っている。その笑顔を想像しつつお別れを申し上げる。

〈略歴〉

１９１７年：11月16日、益雄、篤子の長男として岡山市に生まれる
１９３５年：旧制第一高等学校に入学、旅行部に入部
１９３８年：東京帝国大学理学部物理学科入学
１９４０年：東京帝国大学スキー山岳部に入部
１９４１年：名古屋帝国大学物理学教室（１９４９年まで）
１９４２年：豊川海軍工廠光学部（１９４５年まで）
１９４７年：日本山岳会入会
１９４９年：学習院大学物理学教室（１９８５年まで）
１９５６年：米国南極観測隊に参加
１９５９年：学習院輔仁会山岳部部長（１９７１年まで）
１９６０年：日本山岳会理事（１９６５年まで）

1968年：応用物理学会会長（1970年まで）
1981年：学習院大学学長（1985年まで）
1985年：国際スキー安全学会苗場組織委員長
1987年：言語技術研究会（通産省）座長
1996年：日本山岳会名誉会員
2014年：5月12日、永眠

（荒川　一郎）

藤本　慶光さん

ふじもと　けいこう
（1936～2014）
会員番号 12660

藤本慶光君は1936年9月5日、高野山で生まれた。父君は高野山別格本山遍照光院住職藤本真光さんである。幼少の6歳のときに真光師が逝去、得度して後、2年間小坊主の修業を経て上京、3人の姉たちと暮らしつつ、東京都立千歳高校に転入し、1956年、東京大学文科Ⅱ類に入学した。そして、入学と同時にスキー山岳部に入部した。筆者の私も同年に入学し、入部して4年間を共に過ごした。以来58年間にわたり、藤本君は山登りにおいても私生活においても私の無二の親友であり、あらゆる面での良き助言者であり、範とすべき行動者であった。

高野山の僧院仕込みであろうか、なんにでもよく気が付き、誰よりも先に動き、手を抜かず、嫌なことも機嫌良く引き受け、しかも自慢せず、自己顕示せず、他人の話をよく聞き、相容れぬ意見でもすぐには反対せず、関西風のアクセントを付けてやんわりと反論する。人懐っこい童顔の笑顔と相まって、それは仕込まれたというよりは天性のものではなかろうか。1年目の新人時代を終わってみれば、いつの間にか同期の中のリーダー的存在になっていた。

東大の山岳部では1954年の富士山の雪崩で部員5名を失い、56年春に穂高で1名が遭難死をしていた。そこで部は安全を第一に、実力に応じた山登りをせよという方針を採った。直後の我々1年生はそういう指導の下で2年を過ごした。そのころはどこの大学でも部員が多く、57年、58年のころの新入部員

は30名を超えることすらあった。夏山合宿になるころには半数近くまで減少したが、それでも大学登山の全盛期のような観があったと思う。

3年生になったとき、藤本君は当然のようにチーフリーダーになった。部員が多ければ安全に気を遣う度合いが強くなる。その一方で、より困難なアルピニズムを追い求めたいという部員もいる。藤本君はその板挟みにあっていた。そして、冬山合宿では鹿島槍東尾根から五竜岳縦走、白馬・杓子岳東稜などの計画を立て、OBたちの厳しい質問に答えて実現を果たした。ただし、予測を超えた積雪その他で五竜への縦走と杓子岳登頂は成らなかった。

年を越して59年の3月、藤本リーダーの下、当時の東大としては最も野心的な春山登山に挑んだ。最終的な頂は剱岳。ルートは早月尾根、西大谷山から奥大日岳、黒部から北仙人尾根、そして赤谷尾根から大窓・小窓ノ頭と、4つのルートから剱の頂上に達するものであった。風雪の合間には春山特有の好天もあって、4ルートからの剱登頂はすべて成功した。酒匂秀介君によると奥大日岳と北仙人尾根の2ルートは、積雪期初登頂の記録だそうである。そして、これが藤本君率いる最後の学生時代の大登山となった。赤谷山から大窓、そしてその上へとルート工作とキャンプ設営の任を担当した私にとって忘れ得ぬ登山で、このような思い出を残す機会を与えてくれた藤本君には、ただただ感謝するばかりである。

その年の夏が過ぎ、秋にリーダーシップを3年生に譲った我々4年生は、卒論やら就職の準備やらに専念すべく山を離れた。そこへ10月18日の滝谷大遭難事件が起きて、ついこの間までの山仲間6名が死んでしまった。マスコミも大学山岳部のあり方に批判的な目を向け出した。反省会を重ねる我々の中心に藤本君がいた。そして、重い気分のまま我々は卒業し、藤本君は旭化成工業株式会社に就職した。

後年、藤本君は述懐しているが、彼の人生は仕事、山、高野山の3つが大きな柱であった。これらが時に別々に、時に繋がり合いつつ、彼のさまざまで、多岐にわたる超人的な活動を作り上げてきたように見える。

仕事では繊維部門を担当したが、いつもの熱心さで材料、工程、製品の特性などを徹底的に知り尽くす。おそらくすべての工程を実見し、それぞれの部署の担当者に次々と質問を重ねていったことであろう。さらに彼には革新志向があって、こうしたらもっと良くなる、衣類だけではなく家具に使ったらどうかなど、アイデアを出すことに優れていて、しかも、持ち前の実行力ですぐに動き出す。カラコルム遠征でも一部に自社製品を使って、製品の改善や用途拡大などに繋げていくことがあった。ドイツの3年間の駐在は、ヨーロッパ中を動き回り人と会う毎日だったが、会社の増益には大きく貢献したに違いない。そし

て、その間にマッターホルンに登ったりして山歩きもする。
帰国後も短い間ながら大阪に勤務したが、あっという間に関西地方にいる東大スキー山岳部のＯＢを糾合して関西の会を作ってしまう。延岡のスーパーの社長になると今度は百貨店関係者との親交を深め、また、旭化成の誇る陸上部の活動を支援したりする。57歳のとき、マッターホルンに再度登頂した。人の世の常、この間に何人もの山の先輩や仲間が他界している。僧侶としての読経の回数はいくつあったことか。さらに彼は遺族への配慮を後々まで尽くしてきた。もうひとつ書き加えるなら、涸沢ヒュッテの主人・小林銀一さんの叙勲祝賀会を実現させている。こうしたきめ細かい気配りは、藤本君の天賦の才とでも言おうか、余人の真似できることではない。
登山の関係で言うと、藤本君は１９６３年８月４日、カラコルムの未踏峰バルトロ・カンリ（７３１２ｍ）に初登頂した。そのとき私は南米ペルーの山の中、深い谷底で遺跡発掘をしていた。この快挙のことをどうして知り得たのか記憶にないが、早速、パキスタンへお祝いの手紙を送った。それが奇跡的にパキスタンのどこかで、下山途中で身体に変調を来した藤本君に届いたのであった。後に帰国してそのことを喜び合ったものだった。
２００７年の6月から7月、藤本君は3人の仲間と語らってカラコルム・トレッキングに挑んだ。政情が動乱の一歩手前に達していたパキスタンであったが、無事コンコルディアに達し、感涙に咽んだ。懐かしいバルトロ・カンリを眺め、カラコルムの核心をなす高峰の眺めを満喫してから石を積んで祭壇とし、日本から用意してきた塔婆を立てて、先に逝った山の仲間たちの法要を行なった。いささか恥ずかしいが、感傷的な言い方すれば、藤本君の読経の声は氷河の風に乗ってカラコルムの氷雪の頂上まで届いたと思いたい。
60歳を過ぎて東京へ転勤になったが、じっとしているわけがない。１９９７年、遅まきながら日本山岳会に入会した。会員番号は１２６６０番で、５４２４番という、今ではかなり古い番号を持っている私には頭が上がらないなと、冗談で恐縮して見せながら、その後たちまちのうちに本部の理事になり、委員長になり、ついには副会長にまでなってしまった。その仕事ぶり、見識、人格においていかに多くの人が信頼を寄せていたか、うかがい知るに十分である。そのころの藤本君については、現会長の森武昭氏が会報「山」８３１号に寄せた追悼文の中で書いておられるとおりで、日本山岳会創立１００周年の記念企画である中央分水嶺踏査や法人化問題で、立派に理事そして副会長の任を果たした。
２００９年、思いがけぬ重病が頑健でエネルギーの塊のような藤本君を襲った。骨髄性白血病であった。そして、輸血のためときおり入院をしなければならなくなった。その間にもいろ

いろな会合などに律儀に顔を出していた。そして、2013年の『山岳』108号には、「河口慧海を支えた財界人とその時代」という、綿密な調査結果をまとめた論文を発表している。慧海のスポンサーたちの因縁、そして最初の弟子のひとりに藤本君の父君がいたことなど、実に興味深く、さらなる広がりへと興味を誘い込む見事な論文である。

まだまだいろいろな面での活躍を期待されていたのに、2014年6月8日にこの世を去った。返す返すも無念であるが、受け入れねばならぬ定めであろう。

（大貫　良夫）

村井　葵さん

むらい　あおい
（1937～2014）
会員番号 6285

生駒山系の麓、東大阪市に住んでいた村井さんが、入退院を繰り返す長い闘病生活の末、亡くなりました。寂しくてなりません。山岳会の理事、会報「山」担当を務め終え、肺気腫を患って帰って来た父祖の地が東大阪です。京子夫人に支えられての晩年でした。

村井さん自身の言葉によれば「人間の生き死には、広大な宇宙からすれば、取るに足らぬことだ」となります。しかし、奥様の話ですと、病気になってから特に生きることへの強い執着を感じた、とのことでした。血中の酸素を喰うから、好きな酒は5勺で我慢したこと、チーズも5㎜を3㎜にして栄養のバランスに気を配っていたこと、寝込まないように足腰を鍛えていたなど――。何年もの間、24時間ボンベから酸素を吸いながら生活する日々。あたかも8000m峰を登るのと同じような、繊細な気配りをしていたということです。「生かされていることに感謝しつつ、自分らしく生きる努力をする」。命を大切にしていた村井さんでした。

私（米本）が早稲田大学に入り、山岳部の扉を叩いたのは昭和41年です。村井さんにとっては、ローツェ・シャールから帰って来た翌年の入部で、社会復帰に向けてリハビリに励んでいたころだったと思います。学生時代、一緒に山に登った記憶はほとんどありません。しかし、42年に発刊された早大山岳部の部報『リュックサック』の編集を成川隆顕さんが中心になって進

めていたころで、私も国文科生という理由からでしょう原稿集めや校正を手伝っていて、巻頭がローツェ・シャール登山の公式報告だったため、村井さんがどんな挑戦をし、極限のなかから生還したかは、よく知っていました。１９８１年、私が松浦輝夫さんを隊長とするＫ２登山隊に参加したのは、ヒマラヤの高峰を目指した一連の部の流れに沿ったものでした。

過日、先輩のひとりから『幻想のヒマラヤ』（１９６９年刊、冬樹社版）をいただいて再読しました。村井さんの顔を思い浮かべながら、じっくりページをめくるのは40年ぶりでした。その登山は、当時としてはまさに画期的な試みだったと思っている私ですが、知らない人の方が多いと思います。登山記録としてはもちろん、危機に直面した人間の生き様として読んでも興味深いと思うので、一読をお薦めします。

『幻想のヒマラヤ』は１９６５年のネパール・ヒマラヤ、ローツェ・シャール（８３８３ｍ）登山隊の個人的な記録です。頂上を踏むことを登山の成功とするならば、明らかに失敗の記録です。しかし、それでもなおこの敗北した登山に心を打たれるのは、学生を含む隊員たちが力の限り闘って、ひとりの命を、死から生の世界へと引き戻したと思うからです。それだけでなく、隊全体が傷だらけになりながら、最後まで頂上への意欲を失わなかった登山だったからです。

アクシデントは標高７０５０ｍの雪と氷の急斜面で起きます。成川隊員は１５０ｍほど転落しますが、確保用のザイルのおかげで止まります。急峻なルンゼの途中で気を失って、ザイルに絡まって逆様にぶら下がっていたといいます。２０００ｍ下は死の世界です。一緒に登っていた吉川尚郎隊長が、現場近くのキャンプに登って来た村井さんに急を知らせます。シェルパを加えても3人という少ない人数で、その日のうちに成川さんを引き上げるのは不可能でした。村井さんが付き添い、介抱しながら一晩を過ごすことになります。

《すぐ上に露出した岩があった。岩かげに避難所を作るのだ。（吉川隊長と）二人で岩の下の雪を除く作業にとりかかった。4本のハーケンを打ち、カラビナをかけザイルを通した。それにテントを結び、ぶら下げるように張った。――成川さんをその中に引きずり込んだ。意識を失った70キロは重かった。全身打撲と凍傷の苦痛に口はゆがんでいる。体温も相当低くなっているように思えた。万一に備えてアイゼンのままテントに入った。意識を失った成川さんは狭いテントで大きく暴れた。小さい私は身体がテントの入口から外にこぼれないように抱きとめているのが精一杯だった。シェルパを呼んだが返事はなかった。彼はこの場所から逃げてしまっていたのである。「しまった！」と思った。食料がない。――それよりも暖をとるべきマッチがない。だから、せっかくここまで運びおろしてきたガ

ス・ストーブに火をつけることができない。マイナス二十度。冷蔵庫のような狭いテントでシュラフも羽毛服もないまま、果たして一晩生きていてくれるだろうか》

《眠ったら二人とも死んでしまうぞと自分に言い聞かせた。私は成川さんに付き添ってじっとしている以外なにもできない。あとは神さまにおまかせするほかないのだ。「神さまお願いしますよ」私は声に出してつぶやいていた。雪崩が来た。雪の圧力がテントの屋根を通して身体に伝わった。それでなくても小さいテントが一層小さくなった》

《成川さんは新聞記者をやっていたのだ。右手の指はいわば生命である。どうしても残してあげなければ――。擦っているだけでは凍傷で指を失うことになる。火はない。親指と人差し指は夜通しくわえていよう。白くふくれあがった指は口に含むと氷のように冷たかった。闇を破るように2回目の雪崩が襲ってきた。静電気を起こしたテントがパチパチと音を立てた》

文字を追うだけで胸が締め付けられる村井さんの記述です。急峻なルンゼにチリ雪崩が何度も襲います。雪崩道のど真ん中にいるわけですから。わずかな岩陰でのビバークの苛酷さと恐怖は想像を絶するものだったに違いありません。

翌朝、夜を徹して下のキャンプから登って来た佐藤辰雄さんが単身、固定ザイルを伝って下りて来ます。同道した二人のシェルパは怖がって現場に下りようとしませんでした。「おーい、おーい」と声を掛けながら近づくと返事が聞こえ、テントの吹き流しの雪を払って村井さんの顔が覗いた――。「よく生きていましたね」佐藤さんの忘れられない瞬間です。その後救援隊が集結し、まる一日かけて第4キャンプに引き上げました。

それから第3キャンプに収容するまでの一週間が、苦難の連続でした。途中、怪我人が出ました。強風が吹き荒れ、テントから一歩も出られない日もありました。睡眠不足と過労が重なります。酸素が薄い高所。心肺能力は抜群の村井さんでしたが、ひとつ下のキャンプに下りたにもかかわらず動きが鈍くなり、平衡感覚に異常を感じるようになったと書いています。もちろん、ほかの隊員も疲れていました。

しかし、ローツェ・シャール登山隊の凄いところは、それでも登頂への意欲を持ち続けたことです。態勢を立て直して、アタックしようと試みたことです。

ここで誰も予測できなかった事態が発生します。登攀再開を決めたその2日後に、村井さんが倒れたのです。夜遅くまで新聞社に送る原稿を書いていて、急に意識を失ったのです。倒れる直前の自分について「ロウソクの明かりのもと原稿用紙に向かったが、やさしい漢字を思い出すのにずいぶん時間がかかった。どうにか原稿を書き終えテントの外へ出ようとして立ち上がった時、シュラフに足がからんだ。この時である。脳に鈍い

ショックを受けて（ビーンというような音がしたように思う）身体が暗黒の世界に沈んでいくのを覚えた」と村井さんは書いています。それ以後、眠り続ける村井さん。目覚めたかと思うとわけの分からないことをつぶやき、突拍子もない世界に遊ぶ幻想――。

正常な意識に戻り始めたのは、なんとそれから3週間以上経ってからのことです。シェルパに担がれてベースキャンプに下りてから3日目、村井さんが皆を喜ばせます。『幻想のヒマラヤ』の第4章「傷つける日々」で成川さんが書いています。

《その出来事は、村井がまともにうけ答えするだけでなく、ぼくたちと同じ次元に還りつつあることを証明した。村井の好物はかんづめの桃だった。山も終わりになると、桃のかんづめは貴重品である。病人以外の者が口にできるようなしろものではない。したがって、缶のふたがあけられ、皿に盛られ、村井のテントに届くまでには半分にも3分の1にも減っていた。「つまみ食いがすぎるぞ」とかなんとかいいながら、運搬にひと役かったぼくもひときれ口に入れた一人であった。「さあ」といって差し出した。どうせわかりっこないと思うが後ろめたい気もする。村井はしげしげと皿を見つめていた。そして「不正のにおいがする」といったのである。アッと驚いた。目の前にいるのは本物の村井だと思った。食糧係の目をごまかして食物をかすめたり、トランプでインチキをするとき、ぼくらが好んで使う大げさな言葉を、村井はいま、タイミングよく、鮮やかに使っている。村井はいま、ぼくらの仲間として戻ってきたのだ》

以上、引用が長くなりましたが、村井さん28歳、最も輝いていた時期の、その後の人生を決定づけた極限の登山を伝えたいと思いました。『幻想のヒマラヤ』に書かれた高所でのできごとは、限界への挑戦、仲間との友情、思いやりと優しさ、自然の大きさ、怖さ、人間の弱さ、それらすべてを素直に描写するなかで、人の志、精神性の高みの尊さを実感させてくれると思います。村井さんにそれを書かせたのは、「生」への執着と「記録」へのこだわりです。

担がれて山を下り、東京の病院で手当てを受け、退院してすぐ始めたのが、自分にとってのローツェ・シャール登山を書くこと、高所での稀有な体験を自身の筆によって〝記録〟として残すことでした。「今後ヒマラヤを登ろうとする人たちにひとつの資料を提供するつもりで書いた」と、『幻想のヒマラヤ』のあとがきにあります。一冊の本にまとめるまでの2年間、村井さんは自分を納得させるために、ヒマラヤで、なぜそうなったのかを問い続けました。高所への足取り、遭難救助の日の条件、酸素不足、過去のヒマラヤ登山の記録、高所順応、医学的な考察――。専門家に聞き、本を読み、考える日々だったと聞きます。その執念と研究者的な態度は、終生変わらぬものでした。

第6章《高所と生活の限界》にある「より厳しい自然条件に立ち向かう登山者であればあるほど、『人間に与える高度のおそろしさ』を深く認識し、高所医学の知識をマスターし、その登攀にもっともベストなタクティックスを組む必要があるのではなかろうか」は、半世紀近くたった今も、変わらず高所登山者に求められる基本的な姿勢だと思います。

脳にダメージを受けた村井さんは、昔の仲間やシェルパ、家族と夢のなかで会話を交わします。それは江の島の海であったり、自身の結婚式であったり。現実と幻想が自在に交差する、まさに夢うつつの世界です。同じ関西に住む後輩として、私はこの後も村井さんのさまざまな文章を読む機会を持つこととなりますが、それらと併せ読むとき、村井さんの感性そのものに一種特異なものを感じます。現実の世界から離れて、私たちがいうあの世の世界を覗き見る霊的な力を持っているのでは、と感じることがあります。

このヒマラヤ体験から45年を経過して、村井さんは交通事故に巻き込まれ大怪我をしました。地元の病院の集中治療室で、ローツェ・シャールでの登山がよみがえり、当時と同じような幻想の世界を見たそうです。一時は危篤状態に陥りましたが「臨死体験を語るためこの世に戻った」と語ります。退院された後、私は数々の不思議な世界を知ることになります。

当山岳会の会報「山」の編集人を務めたころの村井さんは、まじめ一本で前向きでした。８００号記念特集に《編集はあくまでもプラス思考でのぞみ、若者に創造する能力、冒険するチャレンジ精神を培養するように努めました》と記しています。故人の奈良原町子さんが、卓越した才能で編集を支えました。

その風貌から飄々とした感じも受けますが、登山とは何か、生きるとは何か、という重いテーマを誠実に背負い続けた一生だったと思います。独自の死生観を持ち、《方丈記や、良寛の生きざま、そして般若心経にあらわれるような伝統的な仏教観などが一体となって、天地人是一如の境地に至った。人体を構成している元素は恒星のなかで作られたものだ。細胞のもとになっている炭素、水素、窒素、酸素などの原子や分子は星の死によって宇宙空間にばらまかれた物質である。従って根源的には人は星屑だといえる》と書き残しています。

ローツェ・シャール以来の体験と溶け合うような精神世界でしょうか。晩年は地元の「生駒西麓自然と歴史の散歩道を作る会」の活動に加わり、山に残る道や街道をメモ帳を手に歩き、報告、資料を57号まで描き続けました。

長女の麗（うらら）さんが父への思いを語っています。《亡くなる何日か前、私はこれが最後になるかもしれないと感じ、「パパ、大好きだよ。ありがとう」と言いました。すると父は「何だよ、オレ死ぬみたいじゃないかよ」と返してきました。声はかすれて

いましたが父の目は鋭く、生を決してあきらめない凄みがあり、私は圧倒されました。生死の境を何度も見、自ら体験した父にとって、生きることへの思いは、常人のそれとは全く違うのだと知らされた一瞬でした》．

一家の長として尊敬され、愛される父であり、私にとっては、生と死に向き合って男はかく在るべしと得心する、山の先輩です。

〈略歴〉

1936年11月、大阪生まれ。61年、早大商学部卒。62年、ペルー・アンデス登山隊に加わり、アルパマヨなどに登る。登山用具業界で企画開発などに携わる傍ら、ローツェ・シャール登山以後もマッターホルン、キリマンジャロなどに登る。1997年7月から4年間、日本山岳会の会報「山」の編集人を務めた。2014年7月5日逝去、享年77。

著書に『幻想のヒマラヤ』（1969年）、『登山用具入門』（1979年）『高峰への挑戦』（同）、『アマの首飾り』（共著・1993年）など。

（米本　隆夫）

尾崎　徳郎さん

おざき　とくろう
（1917～2014）
会員番号 4170

尾崎徳郎さんは大正6年5月16日、東京帝国大学経済学部長・山崎覺次郎教授の6男として、東京都小石川区（現文京区）原町で生まれ、平成26（2014）年7月25日、静岡市にて98歳で永眠されました。

長寿を全うされたので昔の友人たちはすでに亡く、寂しい旅立ちであったと伺いましたが、これも人の世の定めであり、遅かれ早かれ、この世に別れを告げねばなりません。

尾崎（当時は山崎）さんは近くの東京高等師範学校附属小学校、同校附属中学校を経て郷里静岡の静岡高等学校に進学しま

した。年代的には附属中学時代の同期に南極の村山雅美さんも在籍したことになると思われますが、尾崎さんの口から村山さんに関する話は聞いていません。念の為にご家族にも確認しましたが、記憶にないとのことでした。体が頑健ではなかった尾崎さんは、中学の山の会には近づかなかったのかもしれないし、理系指向の尾崎さんと文系指向の村山さんとの違いがあったのかもしれません。村山さんは松本高等学校に進み、山岳部で活躍しました。村山さんは附属中学時代の想い出として、当時の英語教師であったオデール先生のことを詳しく書き残しています。

オデール先生は１９１４（大正３）年に始まったシャックルトンの英国南極大陸横断計画に参加し、船が氷塊に阻まれて１年８ヶ月間も漂流の末、全員奇跡的な生還を果たしたときの乗組員で、彼の几帳面さが全員の命を救うことに貢献したと称えられた退役海軍大佐でした。その後日本に来て英語教師を務め、後日、弘前高等学校でも松丸秀夫さんが英語を習っています。第２次大戦で日本人の奥方と女の子と共に追われるようにニュージーランドへ移住されました。

尾崎さんは静岡高等学校に入学後、山岳部紫岳会に在籍します。当時の部報『紫岳』第６号には、７月の南アルプス集散登山における「大無間山・光岳」と８月の「涸澤生活」の報告が見られ、名前は「山崎徳郎」と記されています。昭和11（１９３６）年10月、チーフリーダーに選出され、「積雪期南アルプスの徹底登攀と多角的研究」を標榜しました。

翌12年の『紫岳』第７号には、写真付きの報告「３月の聖岳・上河内岳」が見られます。昭和13年３月静岡高校卒業、同期に垣内政彦、神保常彦、井伊谷鋼一、川北朔三、根本守らがいました。

東京帝国大学理学部化学科に進学。スキー山岳部に所属し、松高出身の村山雅美さんと再会したことになります。村山さんらとの槍ヶ岳スキー山行の話は何度も聞かされましたが、身体強健な村山さんについて行くのは大変だった、ということでした。

静岡高校山岳部時代のエピソードとして家族に伝わっているのは、松本の料亭で宴会をやっていたとき、２階から降りてきたのがあの俳優のエノケンだったという話。このとき村山さんも同席していたのかもしれませんが、今となっては確認のしようもありません。

昭和16年12月東京帝国大学理学部卒業、翌17年１月海軍技術中尉任官、11月第一海軍燃料廠研究部。18年海軍技術大尉任官。24年６月静岡大学講師、36年教授、45年静岡大学退官。47年聖徳学園岐阜教育大学教授、62年聖徳学園岐阜教育大学退官。以後、山林経営に専念。

平成20年6月、ご子息の晶さんと共に編集された『日本海軍燃料事情』――元海軍技術士官による記録――を自費出版され、戦前から戦後に至る日本海軍における燃料事情に関する膨大な資料・記録を一冊にまとめられました。本書で先生が強い使命感で主張されているのは、「平和のための戦争なんてありえない。いかなる理由があろうとも、戦争は決して起こしてはならない」との思いです。

戦後六十余年を経過し、戦争を体験しない世代が人口の過半を占めるようになりました。昔、日本は米国と戦争をして負けた、という事実を知らない若者が多くなったことで、一般に戦争体験の風化が進み、〝過去の戦争〟に対する関心が著しく薄くなっています。紫岳会会員であった実弟孝治さんは、台湾で戦死しています。

〝戦争体験〟は一般的には苦難に満ちた、忌わしい記憶なので忘れたいと思うのが常ですが、戦争の実態を知らなければ、真の平和の姿も分かりません。戦争体験者の記憶が消えないうちに過去の体験を正確に記述して、戦争を知らない世代の人たちに伝える義務と責任があるという、強い使命感から生まれた著書だと思います。

戦後、静岡大学山岳部はキャンパスが大谷地区に統合されるまでは、学部単位の山岳部活動を継続していました。その間、尾崎先生は静岡地区の山岳部の顧問を引き受けておられました。

農学部の酒戸弥二郎先生の弟子であった私が初めて先生に面識を得たのは、昭和37年ごろから山岳部ＯＢの統合を意図して、幾多の関係者に相談や説明に歩いていたときでした。そのときにはすでに、オール静岡で実施するヒマラヤ計画を携えていました。

昭和39年に発足した静岡大学山岳会（初代会長・酒戸弥二郎）では副会長をお引き受けいただき、ヒマラヤ計画のキーマンとしてご支援をいただきました。即断即決型の酒戸先生と熟慮型の尾崎先生の絶妙のコンビで、海外登山計画は着実に実施に向けて動き出しました。静岡大学での長い教官生活から学内人脈に通じておられたし、静岡随一の名家でもあった関係で、静岡政財界に広い交流がありました。お陰で学内での隊長候補の推薦から資金集めの大半が尾崎先生の双肩に懸かっている状況でしたが、先生は一歩もたじろがずに、我々登り手のために動いて下さいました。

昭和42（１９６７）年のコロンビア・アンデス計画、１９７０年のネパール・ヒマラヤ、チューレン・ヒマール初登頂（このとき先生は山岳会会長でした）成功を大変喜んでいただきました。先生のご尽力がなければ、いずれの隊も日本を離れることはできませんでした。

さらに私には、忘れることのできない先生に関する想い出があります。それは、チューレン・ヒマールに初登頂して全員無事に帰国したとき、親しい会員がふと漏らした言葉でした。

「チューレンでもし誰かが遭難でもしたら、先生は自分の山を一つ売ってでもすぐに駆け付けるつもりだ、とおっしゃっていたよ」。私はそれを聞いて感動し、山岳会の責任者として先生が悲壮な覚悟をしておられたことを知って、一人感涙に咽んだことを終生忘れることはできません。

私は若くして自分の人生をヒマラヤ登山に賭けて、さまざまなものを犠牲にして歩んできました。時あたかも〝ヒマラヤ鉄の時代〟の幕開けでした。各大学は競って続々とヒマラヤを目指していました。しかし、静岡大学にはそれを支える体制はまだ整っていませんでした。でも、なんとかして我々も遅れをとらないようにしたい。

静岡大学の伝統である南アルプスで鍛えた力と情熱をヒマラヤ登山に示したい、と熱望していました。そんなとき、尾崎先生は常に我々の最大の支援者でした。その先生のご逝去により、創立80年を過ぎた今、紫岳会の一つの時代が終わりました。長い間ご指導賜り、ありがとうございました。ご冥福をお祈り申し上げます。

〈略歴〉

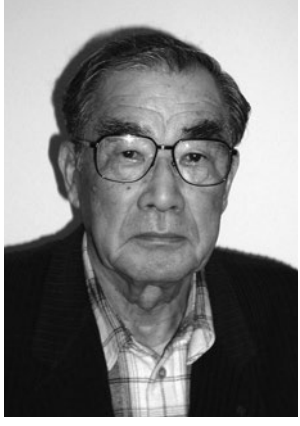
大正6年5月：東京都小石川区（現文京区）原町に生まれる
昭和10年：東京高等師範学校附属中学校卒業
昭和13年：静岡高等学校卒業
昭和16年：東京帝国大学理学部卒業
昭和17年：海軍技術中尉任官
昭和18年：海軍技術大尉任官
昭和20年：尾崎家と養子縁組し、尾崎孝一の長女孝子と結婚
昭和24年：静岡第一師範学校助教授
昭和36年：静岡大学文理学部教授
昭和38年：同教育学部教授
昭和45年：聖徳学園女子短期大学教授
昭和47年：聖徳学園岐阜教育大学教授
昭和62年：退官以後、林業経営に専念
平成26年7月25日：逝去（享年98）

〈主な役職と所属団体〉

静岡県林業会議所副会頭、日本ボーイスカウト静岡県連盟副理事長・名誉役員、
静岡大学名誉教授、聖徳学園岐阜教育大学名誉教授、静岡ロータリークラブ、静岡倶楽部、日本山岳会、静岡大学紫岳会、東京大学山の会、日本林業経営者協会、静岡市教育委員会

（山本　良三）

秦野　一彦さん



はたの　かずひこ
（1925～2014）
会員番号 4325

平成26年9月24日の「日本山岳会だより」の訃報欄で、元北九州支部長の秦野先生が9月10日に89歳で逝去されたとの報に接した。突然のニュースで、まさに青天の霹靂であった。あの偉丈夫な先生が突然他界されるとは、まったく想像すらできなかった。昨年末、支部忘年の集いに出席していただきたく、お誘いの電話をかけたのが最後の会話となった。

秦野先生は２００２年9月8日に開催された臨時総会で北九州支部の第2代支部長に選任され、新体制がスタートした。私もそのときから役員の一人として支部運営に関わることになった。支部長就任にあたって述べられた「山田二郎元会長の『生命を大切に、仲間を大切に、自然を大切に』という言葉に感銘し、この3つの基本原則を踏まえて新しい陣容で体制を整え、明るく楽しい和気藹々の支部にしたいと願っております」とのご挨拶が、その後の支部運営に如実に反映されたのではなかろうか。

２００５年に迎える日本山岳会創立１００周年記念事業の目玉である中央分水嶺踏査が、創立間もない北九州支部にとり果たして実行できるのか大いに疑問視された。特に担当地域の大半が山口県の分水嶺であり、北九州の会員にはなじみの薄い所であった。そのような状況下で、支部長は下関山岳会の伊藤会長にお会いし、事業達成のための助言をいただくなど率先して行動されたことが印象深い。

２００４年4月11日、山口県と島根県の県境に位置する仏峠からスタートした分水嶺踏査も、会員の熱心な取り組みが実を結び２００５年5月8日、いよいよ最後の区間である貫山～平尾台の踏査を残すのみとなり、当日、秦野支部長以下多数の会員が参加され、２２０㎞に及ぶ中央分水嶺踏査が完結した。午後から平尾台のキャンプ場で支部長出席の下、完結記念の野外パーティを行ない、60日に及ぶ踏査が無事終了したことを祝った。この中央分水嶺踏査をやり遂げたことが、支部会員の団結と絆を深め、その後の支部活動に大いに寄与したことを秦野支

部長は最も喜ばれていた。

また、２００５年の関西支部創立70周年記念の集いが高野山で開かれたときには、新門司から大阪南港まで夜行便のフェリーに乗り、２等船室で参加メンバーと車座になってお酒を酌み交わされるなど、ざっくばらんなお人柄が滲み出たお付き合いをいただいたことなど想い出が尽きない。普段は寡黙な高潔の士であったが、お酒が大好きで、酒席では学生時代の登山にまつわる武勇伝などをときどき語っていたことが懐かしく思い出される。

秦野先生は「漢方薬草」の権威で１９７７（昭和52）年、「セリ科植物の細胞遺伝学的研究」で九州大学より薬学博士の学位を授与された学者であり、九州大学薬学部講師として、漢方薬の本場である中国からの留学生の研究指導をされていた。高齢になり辞めたいと大学に申し出ているが、なかなか暇を出してもらえない、とぼやかれていたこともあった。

あるときは皿倉山の登山口から車道を登りながら携帯マイクを使って、車道の脇に生えている植物の中から薬草を探し出し、懇切丁寧に解説していただいたこともあった。頂上付近には八幡薬剤師会が管理する薬草園があり、ここでもいろいろな薬草を教えてもらった。

支部創立５周年（２００５年）の記念行事が英彦山の森の家で開催された折、本部から平山会長が来訪され、記念講演をしていただいた。その後、秦野支部長（当時80歳）は平山会長に同行し、林道経由で九重山の法華院温泉に入った。翌日、北千里へ登り諏蛾守（すがもり）越えをされたことが思い出深い。

秦野先生が支部長在任中には、支部の統治に関わるまったく予期せぬ出来事が発生したり、支部の舵取りでご苦労されたこともありましたが、北九州支部の発展にご尽力いただいたことに深く感謝し、心からご冥福をお祈り申し上げます。

合掌

〈略歴〉

１９２５（大正14）年１月21日：愛知県に生まれる
１９５３（昭和28）年：京都薬科大学卒
１９５５（昭和30）年10月：日本山岳会初回入会
１９９６（平成８）年９月：日本山岳会復活入会
２０１４（平成26）年９月10日：逝去（享年89）
北九州支部長在籍期間：２００２年～２００６年
本部評議員在籍期間：２００７年～２０１０年

（関口　興洋）

大西　保さん

おおにし　たもつ
（1942～2014）
会員番号 11919

来年、関西支部設立80周年記念事業の一環として実施する、ヒマラヤ登山隊の隊長に予定していた大西保さんが亡くなりました。２０１３（平成25）年の春以来、大西さんの作成した西ネパールの地図や、ここ数年足を運んだ東ネパールの山々の写真を見ながら目標の山を決め、６月には「関西支部設立80周年記念海外登山ＰＪ」を立ち上げ、月1回の例会を開始しました。ＰＪは、今回が初めてのヒマラヤ登山といったメンバーを中心としていましたので、大西さんの作成したパワーポイントの資料を見ながら質疑応答が行なわれ、終了後は山岳会事務所近くの居酒屋で盃を重ねたものです。登山目標を東ネパールのナンガマリ周辺とすることに決め、11月中旬には、偵察も兼ねて70回目くらいになるネパール訪問を予定されていました。

出発時期が近づいた10月下旬、関西空港の出発時間を確認するために入れた電話の先で、「今週末に入院する」という言葉に愕然としました。それでも「年明けにはネパールに行けるやろ」という大西さんの言葉に、詳細も聞かずに安堵したものです。しかし、食道癌、胃癌、大腸癌の摘出手術は20時間を超える苛酷なもので、術後しばらくして見舞うと、口を開くのも苦しいという様子でした。退院後は自宅療養となりましたが、年が明けてお宅にお伺いしたときも、奥様が「家から一歩も出ようとしないのよ」と言われるように、気力は著しく萎え、会話も途切れがちで、突然の大手術のショックが精神的にも肉体的にも、いかに大きかったかを物語っていました。

大西さんに最後にお会いしたのは、昨年の9月16日でした。1日にご子息の務君からメールをもらいました。「盆に体調が崩れ入院しました。何も食べずの状態で、ほとんど話もできず、身体も動けない状態になっていますが、日本山岳会や80周年のヒマラヤ登山のことを気にしています。」という文面に驚愕しましたが、4日から10日まで北海道出張、12日から14日は四国に行っていましたので、お見舞いは随分と遅くなってしまいました。11日には往年の遠征隊ドクターの「住吉仙也さんの米寿

を祝う会」が大阪市内で開催されました。住吉さんと辺境旅行などをご一緒された、老朋友の大西さんにも発起人として名前を連ねていただいたことと、「八海山」の大吟醸の差し入れのお礼を兼ねてお伺いしました。すでに酸素吸入をされていましたが、金色の装束に身を包み「八海山」を手にした満面の笑みの住吉さんの大きく引き伸ばした写真を見せると、大西さんも負けじと目を大きく開き、嬉しそうにニコリとされたことが今でも忘れられません。

大西さんの山登りは、中学生のころに兄弟で体験した、大阪近郊の箕面の山でのキャンプに端を発します。その後、日本アルプスにも足を運ぶようになり、高校生のときに、ヒマラヤ研究家・吉永定雄さん（D・スネルグローブ著『ヒマラヤ巡礼』の翻訳など）の在籍していた「大阪山の会」に入会されました。1966（昭和41）年に、7ヶ月にも及ぶ北米大陸縦断登山隊に参加してからの大西さんは、吉永さんや阿部和行さん、水谷弘治さんたちの影響もあってネパール・ヒマラヤの虜になっていったようです。20歳代で印刷会社を創業し、結婚・子育てという社会人生活を営みながら、その軸足は徐々にヒマラヤ研究へと移っていきます。67年、大阪山の会が行なった西ネパール遠征で眼前の大パノラマに魅せられ、その後、国境沿いの山々を極西北のナラカンカールまで跋渉。80年からはほぼ毎年、西ネパールに足を運ぶようになりました。近年は東ネパールにも足を運び、グレート・ヒマラヤ・トレイルも歩き通したネパール訪問は、43年間70回近くに及んだということです。

99、2003年には西北ネパールの禁断の地「トルボ」に入域し、1900（明治33）年に日本人で初めてチベットに入国した河口慧海がどの峠を越えたか、という調査が行なわれました。04年には、関西支部が70周年記念事業で派遣した「西チベット学術登山隊」の登山隊長として、若い隊員たちの先頭に立ってパチュムハム峰（6529m）北稜初登頂とギャンゾンカン（6123m）南東壁初登頂を成功に導かれました。学術隊（河口慧海足跡調査隊）は東海支部の和田豊司さんと広島支部の清水正弘さんが担当し、チベット側から慧海が入蔵した峠の解明にあたられました。直後に慧海直筆の日記（明治33年分）が見つかったこともあって、「慧海研究プロジェクト」が立ち上がり、「謎の越境ルート解明」がなされたことは周知のとおりです。大西さんも主要なメンバーの一人でした。ライフワークとされていたネパール・チベット国境地域の山座同定は、膨大な和書・洋書・地図の収集と渉猟がその源になっています。また、いち早くグーグル・アースなどの画像データを活用した同定の精度の高さは、ネパール政府の関係部局も一目置いていたようです。

大西さんは、ネパールだけではなく週末には韓国の岩場に通い、時には台湾の渓を遡行するなどして、古くから民間外交を続けておられました。加えてお酒が好きだった大西さん宅に

は、梁山泊のごとく老若男女を問わず多くの岳人が出入りし、その知見に目を輝かせ、刺激を受けてヒマラヤへと旅立っていきました。その証として9月23日、大阪狭山市内で執り行なわれた葬儀には日本全国から多くの岳人が駆けつけ、最後の別れを惜しみました。ブログ「台風日記」や、大阪山の会のホームページや著作で、ヒマラヤ辺境地域の情報を世界に発信し続け、長年にわたるヒマラヤ跋渉で、「日本のスウェン・ヘディン」と呼ばれ、東チベット研究の中村保さんと並ぶ西ネパール研究の第一人者を失った損失は計り知れません。大西さんのヒマラヤ研究の功績に対して、日本山岳協会は「第4回日本山岳グランプリ」を贈りました。

「そろそろネパール・ヒマラヤ踏査の集大成もせなあかんなぁ」と言っていた大西さんは、「頑張って静養します！　では、では――。」と、最後のブログに書き残したまま逝ってしまいました。

「光明院登岳保道居士」、山を愛し、人を愛し、酒を愛し、山を登り続けた、稀代の探検登山家にふさわしい戒名をいただいて――。

心よりお悔やみ申し上げます。

（重廣　恒夫）

大谷　一良さん

おおたに　かずよし
（1933～2014）
会員番号 4577

1953年5月23日、土曜日の早朝、東京外国語大学山岳部の創立記念・第1回谷川岳合宿が、私と大谷一良との初めての山行になった。彼はイスパニア語科で私はシャム語科だから、山岳部がなければ多分知り合う機会などなかったに違いない。さらに山岳部の初代部長に串田孫一先生を戴いたというのも、奇跡のような出会いになった。山は、山岳部は、若い私たちの人生を変えてくれたとしみじみ思う。

歴史のない山岳部にとって、疑似経験を与えてくれるリーダーが日本のモラリストの第一人者・串田孫一先生だったこと

が、初期の外語山岳部の基本性格となったことは言うまでもない。大谷一良も私も、その影響を十分過ぎるほど受けていった。もともと絵心のあった大谷君にとって、すでに詩人としての感性や独自の画風と画論で注目されていた串田先生との出会いは、隠れていた可能性を刺激するのに十分な衝撃だったと思う。

大谷一良は１９３３年に東京都八王子市で生まれた。多摩地方での名門・立川高校から昭和27（１９５２）年に東京外国語大学イスパニア語科に入学した。そこで倫理学、近代哲学史を教えていた串田孫一先生に出会ったのである。山岳部創設で先生と学生という垣根が薄れ、人間としての強い影響力を受ける日々が始まる。

その前後のことを彼は「『まいんべるく』のこと」という文章の中でこう書いている。「１９５５年の秋に私は肺湿潤と診断されたため一年学校を留年し、山登りは出来ず家で安静にする日々を送った。――その病もやがて癒え信州追分で一夏を過ごした。麦藁帽子をかぶり下駄を履き、追分が原をスケッチして歩いた。――帰宅後に串田さんに送った木版画の絵葉書を面白いねと言われた言葉が、繪を始める遠い契機になっている。木版画を始めた。」信州追分での静養というところで、彼の中の詩心を育んでいた堀辰雄や立原道造の影が伺えるようだ。

その種子の最初の萌芽は『まいんべるく』（昭和32年8月～昭和39年7月）という同人誌の形として現れてきた。東京外語山岳部の創立会員がＯＢとなり、自由な時間を失ってからの山恋いの想いをもてあました末の発露である。

その『まいんべるく』では出版だけでなく、東京近郊の山登りにもよく出かけていた。現役時代の合宿ではなぜか別行動に終始した私にとって、こんな気楽な山登りが大谷一良の山を見つめる良い機会になっていた。串田さんと並んでスケッチしている姿が、懐かしく思い出される。

やがて、昭和33年3月に山の芸術誌『アルプ』が創刊される。その表紙を串田孫一さんと隔月で担当することとなったのが、いわば大谷一良の第二の誕生となったと言っていいだろう。串田さんの線画と大谷の版画という『アルプ』の顔は、気ままなアマチュア気分だった『まいんべるく』の版画作りから、一気に妥協を許さないプロの版画家へのステップアップに繋がっていったのである。一流の総合商社の新入社員にとって、それは想像を絶する苦闘の始まりでもあったに違いない。しかし、そんな悩みなぞ微塵も感じさせず、表紙だけでなく本文のカットもすべて版画で作り続けてきたのは、素晴らしい快挙だった。

そんな彼の苦闘を慰めようと、串田先生が慰労の山登りを企画して下さったことがある。開田高原から御嶽山にでも行こうというのである。気ままにテントを張り、スケッチや写真を楽しもうという訳だ。地蔵峠を越え把の沢付近の流れのほとりにテントを張り、「スコットランドの丘」と名付けた辺りでそれぞ

れが愉しい時間を過ごした。翌日は開田口から御嶽山を往復し、スケッチブックも写真も大満足の山行きになった。矢立や水彩絵の具を使い、大谷作品が次々に生まれてくるのが眩しいくらいだった。

『アルプ』は順調に成長し、その間に知り合った山の版画家・畦地梅太郎さんに師事し、版画家として１９５９年に日本版画協会展に初入選、１９６０年には国画会展に初入選する成長ぶりであった。しかし会社勤めの辛さで、翌61年から海外駐在員の命を受け、バンコクへ赴任することになった。そんな海外赴任の最中も隔月の版画制作は続けられ、途絶えることがなかった。総合商社の社員としての手抜きもなく、それどころか、後には兼松豪州株式会社の社長にまで登り詰めているほどの優秀な社員だったことに驚かされる。１９６４年には深田久弥さんの『日本百名山』の表紙を飾り、『アルプ』『山と渓谷』などに精力的な仕事を展開していった

こんな二足の草鞋生活は25年続き、『アルプ』が３００号で終刊を迎えたとき、私はその努力と研鑽を讃え、「いつか『アルプ』３００号の功罪を問うときがあれば、その功の第一には無理強いに近い締め切り日を押しつけながら大谷版画の果実を採り続けたことが上げられるかもしれない。」と書いた。

日本に戻り、兼松油脂の社長を務め切ってようやく自由の身になってから、大谷一良は二足の草鞋から山の版画一筋の人生になる。若いころからの瑞々しい詩心も冴え渡り、大谷ワールドの完成に向かって精進していった。手刷り版画集の出版や多くの画廊での展覧会で、多くのファンが生まれ、美しくロマンに満ちた心の山の版画は、山好きだけでなく多くの人々を魅了していったものである。

山とは何か、なぜ山に登るのか、という疑問符に答える彼の想いが伝わってくる作品群が次々と生まれ、この次はどんな山の童話が生まれるかと期待する人々の夢がふくらむなか、２０１４年9月、順風満帆だった人生にピリオドを打ち、突然あの世へ旅立ってしまった。

後日行なわれた「大谷一良を偲ぶ会」には東京外語山岳部、立川高校同期会、アルプ、まいんべるく、大谷版画愛好家など１６０人ほどが集まって下さったが、いつもどんな集まりでも、会の終わりまでカップ片手に愉しげに歓談している彼の姿がないことが、なんとも寂しかった。新しい作品を見られないことは、さらに残念なことである。惜しい男が、また一人過ぎていった。

（三宅　修）

吉永　定雄さん

よしなが　さだお
（1932〜2014）
会員番号 6097

私たちにとってヒマラヤの大先輩である吉永定雄さんが亡くなりました。吉永さんは特にネパール・ヒマラヤの西ネパールに精通し、カンジロバ・ヒマールやトルボ地域の研究や文献、地図の作成について登山界ではよく知られています。かねてから体調を悪くして、日本山岳会をはじめ各種の集会からも少し遠ざかっておられましたが、昨年、その訃報に接し寂しい思いをいたしました。

吉永さんの山歴などを語るとき、まずは１９６６年、大阪山の会として初めての海外登山、カナダからメキシコまでアメリカ大陸を半年かけて登山活動を続けながら、自動車で縦断したことはあまり知られていません。５人のメンバーで、当時としては形破りの登山行動でした。カナディアン・ロッキー、ロブソンの登攀、アメリカではヨセミテのクライミング、中米のメキシコでは５０００ｍの火山を２山も登った記録が残っています。そして登山以外でも、そのときに知り合ったアメリカの著名なクライマー、ニコラス・クリンチ氏と親交を持ち、交流が続いていたと聞き、なかなか歴史を感じさせられます。

それ以後、吉永さんの海外登山の想いはヒマラヤへと向かい、その想いは次第に強くなっていったようです。中でも特に注目したのが西ネパールのカンジロバ・ヒマールでした。１９６０年代当時には、まだ地理的にもよく解明されていない山域であって、未知な要素が多くありました。イギリスの著明な登山家ジョン・タイスンなどの記録や地図などから、それを少しでも解明するために資料や書物（文献）を繙き、驚くほどよく研究されていました。また、同じイギリスの仏教学者、デビット・スネルグローブの足跡や紀行からの影響もあって、実行に移したのが１９７１年秋の、大阪府山岳連盟「西ネパール・カンジロバヒマール登山隊」だったのです。

このときの隊長は、一昨年に亡くなられた阿部和行関西支部長、副隊長が吉永さん。私も隊員として参加し、登山隊は未踏峰であるツォ・カルポ・カン（６５５６ｍ）に登頂することが

できました。（ツォ・カルポ・カンはチベット語で「白い湖の山」の意）。西ネパールのカンジロバ山群は、大阪市立大のカンジロバ・ヒマール主峰初登頂以後、吉永さんなどの研究もあってこのエリアが次第に解明され、その後は日本隊の活躍するところとなり、多くの初登頂の記録が残されていることはよく知られています。

そして、吉永さんの次なる想いは、そのときツォ・カルポ・カンの山頂から北方に望んだチベット国境へと広がる「憧憬の地・トルボ」へと移っていくことになります。トルボと言えば、先日亡くなった吉永さんの後輩、大西保さんと共に、河口慧海の研究なども含めて強い想いがある西ネパールの辺境の地です。「トルボ」に関することは、亡くなるまで吉永さんの頭から離れることはなかったと思われます。古来、トルボ地方は西ネパールの中でも外国人があまり入らなかった土地であり、チベット国境の地です。その範囲は、ベリ河の上流バルブン・コーラとカルナリ上流のラング・コーラにかかる地域で、訪れる人も少なくてあまり知られていません。１９５６年代、そのような地域を歩いた前述のイギリスの仏教学者、スネルグローブの『ヒマラヤ巡礼』の本を訳し、その足跡をたどろうとしたのが吉永さんのトルボへの関わりでした。１９５８年の川喜多隊の西北ネパール学術探検隊の入域の後、１９９０年から２０００年代にかけて、吉永さんと共に私たち大阪山の会のメンバーが、何度もトルボ地域を広く歩いて調査することとなりました。

トルボの詳しいことについては、大谷映芳さんの『ドルポ』の本に吉永さんが解説文を書いています（ドルポは英語読み、トルボはチベット読み）。「トルボというところ」「先蹤者」「トルボの歴史」「これから辿る道」そして河口慧海との関わりなどについて書かれていて、トルボを知らない人にもとても良く分かる解説文です。さらにほかの資料では、トルボ地方の宗教についても述べていて、チベット仏教ニンマ派とボン教の歴史的背景にまで触れておられ、その研究の広さと深さがよく分かり、とうてい我々の理解が及ぶところではありません。

１００年余り前、仏教の経典を求めてネパールからチベットへ入った禅宗の僧・河口慧海は、どの峠を越えたのかと詮索しながら、吉永さんや我々のメンバーはチベットの峠を何ヶ所も歩きました。いずれにしても、トルボへの研究の思いが私たちにも伝わって、その延長がムグ地方の山々の解明や登山に、またムスタン王国のローマンタン、さらにチェゾン・ゴンパの秘蔵の仏像との対面にも繋がっています。数年前に体調を悪くし、満足に行動ができなくなられましたが、吉永さんの頭の中にはいつも西ネパールの秘境、トルボのことが駆け巡っていたはずであると思います。

辺境の地、鳥葬で知られるツァルカ村、サルダンの有名なボン教の寺、サムリン・ゴンパの仏像と経典、チベット仏教の聖

地シェー・ゴンパと、紺碧の水を集めるポクスンド湖など、ゴラ（馬）に乗り、砂にまみれて歩き通した峠越えなど、吉永さんの足跡が数多く思い出されます。そんな中でも、時には苦労して登り詰めたトルボ入り口のトジェ・ラから、白いダウラギリやニルギリの鋭峰を仰いで和み、荒涼としたチベット国境に立てば果てしなく広がるチベット高原に感嘆し、憧憬するトルボは尽きることがなかったであろうと思います。

そして、もうひとつ加えなければならない吉永さんの業績は、ヒマラヤの地図作成です。西ネパールのカンジロバ山群、トルボやチベット国境地域などにあっては当時、ネパールの地図はほとんどなく、我々は吉永さんが作成したものを頼りに歩いたものでした。その中からたどった地域が増え、その詳細が明らかになるのは楽しい限りでした。

１９７７年に出版された学研の『世界山岳地図集成・ヒマラヤ編』という大きな地図集があります。この地図の作成に関係された方にはヒマラヤの大先輩も多く、吉永さんはカンジロバ山群とマナスル山群を担当されました。古い時代のヒマラヤ遠征の計画では、この地図がずいぶん役に立ったと記憶しています。今ではネパール全土にわたり5万分の1地図ができて、入手可能になっています。

ここで吉永さんのために、日本の山にも精力的に登っていたことを記したいと思います。若いときから岩登りには精通し登攀を重ねていて、１９６３年には南アルプス・北岳バットレス中央稜、厳冬期第3登の記録があり、前年の秋には中央稜や第2尾根逆三角形獨標ルートなど困難な岩場の登攀もしています。当時としては前穂高岳、笠ヶ岳・穴毛谷、錫杖岳など積雪期を含めて登攀記録が残るクライマーでもあり、また、関西でも近郊の未開な岩場の開拓にも精力を注いでおられました。パートナーとしていずれの登攀にもパーティを組んだ私には、当時の苦労と楽しさが思い出され感無量です。個人的には、登山以外の私的な面でもお世話になり、よき人生と登山の先輩でもありました。

謹んでご冥福をお祈りいたします。

〈略歴〉

１９３２年：徳島県生まれ

２０１４年9月28日：逝去

大阪山の会、日本山岳会、日本ネパール協会各会員

〈山歴〉

１９６６年：大阪山の会、カナダ～アメリカ～メキシコ縦断と登山活動（6ヶ月間）

１９７１年：大阪府山岳連盟、西ネパール・カンジロバヒマール登山隊、ツォ・カルポ・カン初登頂

１９７７年：大阪山の会、西ネパール・カンチュンネ登山隊隊長（未登頂）

1998年：西ネパール・トルボ地域の登山と踏査、カンティ・ヒマール～ムグ～シミコット
2000年：西ネパール・トルボ地域の登山と踏査、ナラカンカール～リミの谷～シミコット
2001年：ムスタン地域・ローマンタンの登山と踏査、ゲミ～ツァーラン～チェゾン・ゴンパ
2003年：西ネパール・トルボ地域、ツァルカ～サルダン～シェー・ゴンパ～チベット国境～クン・ラ

〈訳書ほか〉
『ヒマラヤ巡礼』デイヴィッド・スネルグローブ、1975年（白水社）
『わが山エベレスト』テンジン自伝、2010年（白水社）
『マウンテンワールド』ナショナルジオグラフィック編、1993年（同朋社出版）
『ヒドンピーク初登頂』ニコラス・クリンチ著、2010年〈共訳〉（ナカニシヤ出版）

〈解説・地図〉
『ドルポーネパールヒマラヤ最奥の聖地』大谷映芳著、2001年〈トルボの解説〉（七賢出版）
『世界山岳地図集成』ヒマラヤ編、1978年〈カンジロバ山群、マナスル山群の地図作成と解説を担当。「カンジロバのことども」「トルボ地方の宗教に付いて」などの解説がある〉（学習研究社）

＊その他、記念誌や会報への寄稿、地図作成など多数あり。

（水谷　弘治）

山田　二郎さん

やまだ　じろう
（1922～2014）
会員番号 3473

山田さんは、終戦時の日本陸軍の関東軍総司令官を務められた山田乙三さんの次男として生まれた。生粋の軍人であるお父さんは、なぜか息子2人を慶応大学に学ばせた。お兄さんの秀介さんも慶応に学び、山登りを山田さんはお兄さんの秀介さんと共に登ることで学んだ。

秀介さんは慶応の山岳部に入り、山田さんも同じく山岳部に進み、慶応大学山岳部から日本山岳会という流れの中で、多くの優れたアルピニストに学んだ。すでに慶応山岳部のとき、加藤喜一郎さんのリーダーの下に、厳冬期の槍ヶ岳・北鎌尾根の初完登をなしている。

大学を出て山田さんは日本陸軍の戦車隊に属し、終戦を迎えた。終戦の混乱の中で、山田さんは慶応山岳部の再建に全力を尽くした。終戦という大きな、厳しい変革の中で、山田さんにとって「生きる」ということの中心に山登りが強く在ったに違いない。山田さんの山登りに対する考え方の中に、原理原則に対する厳しい考え方の在ることを強く感じるのである。山田さんの日本山岳会年次晩餐会での話や、慶応山岳部の記録の中に「山岳部の伝統的な考え方」に関する姿勢が見られる。

山岳部の再建を終えて山田さんは日本山岳会に入り、学生部の活動を通して多くの優れた他校のＯＢと交流し、日本山岳会におけるヒマラヤへの動きの中核となっていった。

１９５３年、日本登山界初の本格的なヒマラヤへの挑戦として、三田幸夫さんをリーダーとするマナスル登山隊が送られることとなった。山田さんも加藤、村木、大塚、石坂ら多くの仲間と共に参加し、加藤・石坂隊員と一緒に最高到達点に登り、日本人クライマーのヒマラヤでの可能性を拓いた。

そして、山田さんは日本山岳会の仲間たちから慶応の仲間たちへとシフト、共にヒマラヤへの道を求めた。１９６０年、慶應義塾創立１００年を記念したヒマラヤの未踏峰ヒマルチュリ遠征隊を隊長として組織し、初登頂を成し遂げた。私もこの隊に参加したが、登山における原理原則を大切にする、古典的なリーダーシップに感銘を受けた。

その後の山田さんは日本山岳会会長を務め、さらに日本山岳会隊として未踏のナムチャバルワ遠征隊の総隊長を二度にわたって務め、初登頂の成果を挙げた。ナムチャバルワは、山田さんが以前より登ろうと心に決めていた山だったとのことである。

仕事面で主たるものは気化器メーカーの「ミクニ」での仕事で、「ミクニアメリカン」の社長、本社の専務まで務められた。恐らく仕事面でも山田流の原理原則があったと思われる。

こう書いてくると、山田さんは融通の利かない、頑固な仕事屋と思われるが、奥さんとのロマンスには山田さんの温かな人間味が表れており、奥さんに対する優しさも、山田さんの人間としての魅力を引き立てている。

あるとき、若い部員が私の所へ山田さん一家の集合写真を持って来た。山田さんが奥さんの膝に優しく手を載せていると言って騒いだ。

正に強くなければ男ではない。優しくなければ男ではない。

そんな山田さんは、もういない。

〈略歴〉

1922（大正11）年：4月16日、山田乙三・静子の次男として生まれる

1940（昭和15）年：東京府立第六中学校を卒業。兄秀介の後を追い慶応義塾大学に入学、同時に山岳部に入部

1942（昭和17）年：冬の槍ヶ岳・北鎌尾根を初完登する

1943（昭和18）年：日本陸軍の戦車隊に入隊

1945（昭和20）年：終戦のため復学、山岳部チーフリーダーとして部の再建に努める

1949（昭和24）年：日本山岳会に入会。同年、槇有恒を社長とする佐倉飼料に入社

1952（昭和27）年：結婚

1953（昭和28）年：第1次マナスル登山隊に参加、加藤・石坂隊員と共に最高到達点に登る。同年、㈱ミクニ入社

1954（昭和29）年：第2次マナスル登山隊に参加

1960（昭和35）年：慶應義塾創立100年記念ヒマルチュリ登山隊隊長としてヒマルチュリ（7854m）の初登頂に成功

1970（昭和45）年：㈱ミクニ取締役就任

1978（昭和53）年：ミクニアメリカン社長就任

1979（昭和54）年：㈱ミクニ専務就任

1989（昭和64）年：日本山岳会会長就任

1991（平成3）年：日本・中国合同ナムチャバルワ登山隊総隊長

1992（平成4）年：前年に引き続き総隊長を務め、同峰に初登頂する

1993（平成5）年：日本山岳会名誉会員に

2014（平成26）年：12月18日、病気のため92歳で永眠する

（田辺　壽）

池田　錦重さん

いけだ　かねしげ

（1938～2015）

会員番号 6031

池田錦重さんと私は5歳齢が離れているので、学生時代を一緒に過ごしてはいない。日大山岳部には、コーチ会という制度があって、若いOBが熱心に学生の面倒を見ていた。その中の一人が池田さんであった。

私が上級生になると、コーチ会から直接指導を受ける立場となって、池田さんと話す機会が多くなってきた。私は池田さんとの会話の中に、次第に池田さんに惹かれるものを感じるようになった。その中で印象的だったのは、「学生らしい山登りをしろ」と「訓練のための山登りはするな」であった。

あるとき、この「学生らしい山登り」の私なりの解釈を池田さんにぶつけてみた。「学生は休みの期間が長いので、これを大いに活用すること。大勢の部員が満足できる登山。オールラウンドに山と向き合う。短期の登山は卒業してからやれば良い。自分たちの技術や伝統を次の世代に伝えること。こんなことでしょうか」と言うと、池田さんは「まあ、そんなところだ」と頷いた。池田さんは自分がリーダーのときに、このお手本になるような山行を実践している。厳冬期の黒部源流にベースを設け、周辺の山々を登るというものである。一見大した計画とも思われないかも知れないが、20名を超す大部隊が1ヶ月以上も、豪雪で鳴る黒部の最深部で生活し、スキーを駆使し、あるいはアイゼンとピッケルで周辺の山々を思いのまま登るのである。これこそ学生だから可能な山登りなのである。

こうした指向は日大山岳部の伝統であって、今も脈々と受け継がれている。私の1年生の春山合宿が、毛勝山の大明神尾根から剱岳の初トレースであった。4年生のときの春の平ノ小屋生活。これは黒4ダムの堰堤からダム湖面を渡り、平ノ小屋をベースとして後立山の西面と周辺の山々を分散登攀し、後半は、3パーティに分かれて北アの縦走である。私は笠ヶ岳までのパーティのリーダーであった。今でも、ダム湖の上にまっすぐに延びたスキーのシュプールが、脳裡に鮮明に焼き付いている。

続く後輩たちも面白い記録をいっぱい残している。西穂高岳から宇奈月温泉までの積雪期の初縦走。積雪期の日高山脈全山縦走や知床半島の縦断。また、冬の越後三山全山の集中登山も渋い記録である。

決して派手さはないが、雪の山を縦横無尽に暴れまくる、いずれも学生にしか体験できない山登りで、〝雪の日大〟といわれる所以である。

もう一つ池田さんの言っている「訓練のための山登りはするな」である。日大山岳部は、昔から石やブロックをザックに入れたボッカ訓練などやったことは一度としてない。また、当時「しごき」という言葉が流行っていたが、日大では死語であった。技量や体力は実践の山で鍛え、お互いが切磋琢磨することによってレベルアップを図るのである。今にして思うと、日大山岳部は随分リベラルであったし、また、山と対峙する姿勢のス

トイックさには、かなり厳しいものがあったように思う。こうした合理的な部の運営指針は、伝統的に理系の学生が主流を占めていたことによる必然性なのである。

日大の海外登山にも池田さんの思想が色濃く反映している。１９６５（昭和40）年、日大はグリーンランドに登山隊を送った。グリーンランドの東海岸の奥地およそ50㎞に位置するグリーンランド第２の高峰・フォーレル峰（３３４０ｍ）の登頂である。隊長は宮原巍さんであったが、計画の中心は池田さんであった。ネパール政府は、１９６４（昭和39）年からのヒマラヤ登山禁止令を発した。印パ戦争の煽りである。ヒマラヤを目指していた多くの日本の登山家は、代替えの山を求めて世界に散った。アンデスやアルプス、コーカサスやヒンドゥ・クシュなどに、である。

日大も行先を模索した。そしてグリーンランドに目を付けたのである。フォーレル峰の麓にたどり着くだけで、氷床のソリ旅行が１５０㎞、30日間をも要するのである。しかも山の標高も高くない。誰も注目しない山である。池田さんはナンセンの古い記録を頼りにソリを試作。１人50kgを超す荷物を載せて、人曳きソリでフォーレル峰に向かう。時期が遅かったのと登攀ルートを見出せなかったことによって、フォーレル峰の登頂には失敗する。

池田さんは帰国するとただちに、翌年の１９６６（昭和41）年の２次隊の準備をスタートさせる。そしてその夏、フォーレル峰の第２登を果たす。普通ならここで一段落というところであるが、ここで終わらないのが池田さんの真骨頂である。続いて１９６８（昭和43）年には、日本人初のグリーンランド横断を成功させる。そして極め付けは、１９７８（昭和53）年に日本人北極点到達一番乗りを果たす。

日大は１９９５（平成７）年、チョモランマの北東稜に登山隊を送る。このチョモランマ北東稜は、過去に幾つもの登山隊が挑戦したが、ルートの長大さに阻まれて未踏のまま残っていた。このクラシック・ルートに末端から取り付き、初登攀に成功している。いかにも日大らしい山登りだといえよう。

池田さんには口癖がある。「しょんがらねぇ」である。「しょんがらねぇ」は横浜弁である。「仕方がない」という意味で、半ば諦めの気持ちが込められている。ところが、池田さんのそれは少々ニュアンスが違う。起きたことは仕方がない、それよりもその解決策を逸早く見出せ、ということなのである。

私が池田さんとグリーンランド行を共にしたときのことである。大変重大な危機に陥った。私はこれで遠征中止を覚悟した。「しょんがらねぇだろう。だったら、どうすればいいか考えろ」と言われた。右往左往するだけで、誰もがその答えを見出せないでいた。言うまでもなく、この危機は池田さんの機転で回避され、計画の続行が果たされたのである。遠征隊には、

こうした危機は常に伴う。池田さんはその都度、粘り強く、冷静に、決して諦めることなく、危機を回避してきたであろうことは、想像に難くない。

また、池田さんはあまり人を誉めることをしない人であった。その代わり人をけなすのも、ほとんど聞いたことがない。人は人、我は我。山登りについても、「山は、行きたい所へ行きたい奴が行けばいい」が持論であった。

池田さんは晩年もこのスタイルを崩さなかった。日大の同世代を中心に、シルバー・タートルというグループを自ら主宰して立ち上げている。好きな者同士が好きな山に行こう、という主旨であった。このシルバー・タートル隊は、８０００ｍ峰の幾つかにも足跡を残している。このグループの面白いところは、池田さんの主旨に賛同すれば誰でも仲間に加われたので、日大以外からも多くの登山家が集まった。渡辺玉枝さん、小西政継さん、石川富康さん、田部井淳子さん、堀井昌子さん、遠藤京子さんなどもそうである。

石川さんとは親しくしていたので知っているのだが、大変個性の強い人で、知らない人とは滅多に行動を共にしないのである。まさか池田さんと一緒に山を登っているなど、信じられなかった。その石川さんが私に「池田さんは素晴らしい、もっと早く知り合っていれば」と言っていた。小西政継さんも個性の強い人である。女性陣も多士済々で論客ぞろいである。そうした類の人たちをも魅了する包容力が、池田さんにはあるのである。

池田さんには、自己顕示欲というものが乏しい。目的の達成のためなら一歩も二歩も譲る。隊がスムーズに運営されるのなら、一兵卒でも構わないのである。

優れたリーダーの資質にカリスマ性が上げられる。池田さんは、カリスマではない。そういった点から考えると、珍しいタイプのリーダーだと言えよう。

要は、池田さんはシャイなのである。あまり人前には出たがらないし、華々しい場所も苦手であった。その代り闘志と執念は、並々ならぬものを胸の内に秘めている。これが人を惹き付ける「人間池田」の最大の魅力だといえよう。

もしもとか、仮にという言葉は歴史には無用であるが、敢えて言わせてもらう。もし池田さんが白瀬中尉であったとしたら、白瀬中尉は南極点旅行を1回で諦めているが、池田さんだったら2度も3度も挑んだであろう。そして、必ずやアムンゼン、スコットを出し抜いて偉業を成し遂げていたに違いない。池田さんを知る人なら大いに同調していただけよう。池田さんは、生きる時代を誤ったのかも知れない。

池田さんが体調不良で入院したとは聞いていたが、地方在住であることもあってお見舞いの機会を失ってしまった。亡くなる2日前に病床を見舞ったＯＢの山平靖さんが、池田さんと最

後に会話を交わしている。その話を聞いて、なおさら生前にもう一度会って話しておきたかったとの思いが募る。「俺もたくさん遠征に行ったが、一番面白かったのは、中島さんの隊長で神崎や尾上と行ったグリーンランドの2次隊だった」と、しっかりした口調で語っていたというのである。

日大山岳部の90年近い歴史の中で、池田さんの及ぼした影響はあまりにも大きい。まさに巨星墜つである。池田さんは、自分の死を「しょんがらねぇ」と悟ったのだろうか。私には「しょんがらねぇ」のひと言ではとても片付けられない、辛い別れなのである。

〈略歴〉

1938（昭和13）年：11月23日、横浜市中区に生まれる
1957（昭和32）年：日本大学日吉高校卒業
同年：日本大学理工学部建築学科入学。入学と同時に体育会山岳部に入部
1961（昭和36）年：同大学卒業
2015（平成27）年：5月22日、肝臓癌のため逝去。享年77

（尾上　昇）

会務報告

2014年（平成26年）4月～2015年（平成27年）3月
（◎総会　□理事会　◇人事　☆事業）

◇2014年度役員・評議員・支部長

会　　長　森　武昭
副　会　長　節田重節、黒川　惠、古野　淳
常務理事　高原三平、吉川正幸、佐藤　守
理　　事　勝山康雄、山田和人、野口いづみ、大槻利行、落合正治、川瀬恵一、山賀純一、直江俊弐
監　　事　吉永英明、浜崎一成

委員会の担当理事
【総務】高原、佐藤
【公益法人】直江
【財務】吉川
【デジタルメディア】佐藤
【図書】節田
【資料映像】勝山

会務報告
【山岳編集、会報編集、JAN】節田
【海外】川瀬
【YOUTH CLUB】古野、落合
【遭難対策】川瀬
【自然保護】山田
【科学】野口
【医療】野口
【山岳研究】大槻
【集会】勝山

評　議　員　＊田邊　壽、村井龍一、宮崎紘一、山本良三、成川隆顕、尾上　昇、神﨑忠男、橋本　清、小川　武、贄田統亜、今村千秋、内田　博、重廣恒夫、大谷　亮、南井英弘

支　部　長　（北海道）西山泰正・（青森）大久保勉・（岩手）菅原敏夫・（宮城）佐藤昭次郎・（秋田）今野昌雄・（山形）粕谷俊矩・（福島）小林正彦・（茨城）浅野勝己・（栃木）山野井武夫・（群馬）田中荘佶・（埼玉）大久保春美・（千葉）諏訪吉春・（東京多摩）竹中　彰・（越後）橋本正巳・（富山）山田信明・（石川）中川博人・（福井）森田信人・（山梨）深沢健三・（信濃）塚原賢勝・（岐阜）高木基揚・（静岡）大島康弘・（東海）小川　務・（京都・滋賀）田中昌二郎・（関西）重廣恒夫・（山陰）中井俊一・（広島）兼森

志郎・（四国）尾野益大・（福岡）中馬堇人・（北九州）伊藤久次郎・（熊本）松本莞爾・（東九州）加藤英彦・（宮崎）末永軍朗

□平成26年度第1回（4月度）理事会　4月9日　集会室

出席者　森会長、節田・黒川・古野各副会長、高原・吉川・佐藤各常務理事、大槻・落合・勝山・川瀬・直江・野口・山田各理事、吉永監事

欠席者　山賀理事・浜崎監事

議事に先立ち、森会長より「公益法人運営について、法令順守を順次徹底していくので協力願いたい」との、年度初めの挨拶があった。

【審議事項】

1. 会費納入に係わる制度変更および定款施行細則変更案の総会上程について（吉川）
　年度途中の入会者の年会費の割引制度導入に関し、別添資料により担当理事が説明し、詳細に検討された。〈承認〉
2. 秋田支部長の交代について（高原）
　秋田支部から支部長交代の答申が以下のとおりあり審議された。現支部長：佐々木民秀（5748）→新支部長候補者：今野昌雄（9492）〈承認〉
3. 110周年記念事業における旅行業者選定方法について（森）
　業者選定の公正さを期するため、「業者選定作業小委員会」を設置した。3月28日、第1回の当委員会を開催し、選定方法等の一定のルールを検討した。その内容について、別添資料により担当理事が説明し、詳細に検討された。〈承認〉
4. 会報「山」および機関誌『山岳』編集業務委嘱について（節田）
　平成26年年度の編集業務委嘱について、別添資料により担当理事が説明し、詳細に検討された。〈承認〉
5. 委員会規程改正について（高原）
　各委員会の業務を別表で明記することについて、別添資料により担当理事が説明し、詳細に検討された。〈承認〉
6. 入会希望者について（高原）
　44人の入会希望について別添資料により担当理事が説明し、詳細に検討された。〈承認〉

【報告事項】

1. 寄付金・助成金受入れ事前申請および受入れについて、14件の事前申請、21件の受入れがあった。（吉川）
2. 福島支部よりJACマーク使用許諾申請があり許可された。（高原）
3. 大町山岳博物館より当会所蔵資料の展示および解説書掲載許可申請があり許可された。（高原）
4. 五十嶋一晃会員より『山岳』の写真転載願いがあり許可された。（高原）
5. 神戸大学大学院人文学研究科より当会発行パンフの転載許可申請

があり許可された。（高原）

6. 春山（4月25日～5月9日）天気予報を前年同様に提供する。（古野）

7. 平成25年度事業報告書・決算に関する、内閣府提出までのスケジュールについて説明があった。（高原）

8. 「山の日」制定の動きについてプロジェクトチームから報告があった。（森）

9. 今年度予想される内閣府立入検査対応について、法令に沿った理事会運営等の重要性について説明があった。（吉川）

10. 第16回（平成26年度）秩父宮記念山岳賞推薦募集について、会報「山」4月号およびホームページに掲載する。（黒川）

11. 今年度の日中韓三国学生交流登山について（古野）
8月6日より12日まで韓国で実施される。参加希望の大学生を募集し、10～15人程度派遣する。

12. 会報「山」4月号の発行について報告があった。（節田）

【今後の予定】

1. 理事会5月14日、6月11日、常務理事会5月7日、6月4日

2. 評議員懇談会5月13日㈫

3. 監事監査5月14日㈬

4. 総会6月21日㈯

5. 内閣府へ平成25年度事業報告書、決算書提出6月27日

6. 山岳4団体懇談会7月16日㈬

報告

務

会

□平成26年度第2回（5月度）理事会　5月14日　集会室

出席者　森会長、節田・黒川・古野各副会長、高原・吉川・佐藤各常務理事、大槻・勝山・直江・野口・山田各理事、吉永・浜崎各監事

欠席者　落合・川瀬・山賀各理事

オブザーバー　柏編集人

【審議事項】

1. 平成25年度事業報告書・決算（案）について
平成25年度事業報告書・決算（案）について、別添資料により担当理事が説明し詳細に検討された。〈賛成12、反対なしで承認〉

2. 埼玉支部創立5周年記念ネパール遠征計画の旅費の取り扱いについて〈再審議〉
遠征計画における参加隊員の旅費については、手続き上での寄付の取り扱いは行なわないことを確認した（3月度理事会決定の一部を見直し変更）。〈賛成12、反対なしで承認〉

3. 支部事業補助申請（東京多摩支部）について
東京多摩支部からの初級登山教室運営およびリーダー育成に関する支部事業補助申請（別添資料）に対し、20万円の補助を行なう。〈賛成12、反対なしで承認〉

4. 秩父宮記念山岳賞審査委員からの辞任願について
秩父宮記念山岳賞審査委員1名からの辞任願および後任は平成

26年度配置しないことについて担当理事が説明し、詳細に検討された。〈賛成12、反対なしで承認〉

5. 入会希望者について
35人の入会希望について別添資料により担当理事が説明し、詳細に検討された。〈賛成12、反対なしで承認〉

6. 支部長交代について
支部長の交代答申が以下のとおりあり審議された。
〈信濃〉現：飯村富彦（8768）新：塚原賢勝（6473）、
〈山梨〉現：遠藤靖彦（6653）新：深沢健三（10920）、
〈熊本〉現：工藤文昭（8190）新：松本莞爾（8411）。
〈賛成12、反対なしで承認〉

【協議事項】

1. 日本山岳会への寄付制度などの検討について
日本山岳会が関係する海外登山隊の類型と参加者等の寄付の受け入れ基準等について協議を行ない、引き続き検討していくこととした。

2. 海外支部（ネパール）の設立と運営について
ネパール在住の本会会員から要望のあった海外支部設立について、国内支部との関係、設立、運営上の課題等について協議を行なった。

【報告事項】

1. 寄付金・助成金受け入れ事前申請および受け入れが各1件報告された。（吉川）

2. 口座振替制度導入に伴い、来年度（平成27年度）からの利用を勧奨する文書を、5月下旬に会員に送付する。（佐藤）

3. 110周年記念事業に関する旅行業者への説明会を4月21日実施し、参加5社に対し企画提案を提出するよう依頼した。（節田）

4. 110周年記念事業実行委員会内の支部海外登山、学術調査登山、極限探究登山、旅行業者募集企画の4部門に関して、企画審査を行なう小委員会を設置し、各部門リーダーを決定した旨の報告があった。（黒川）

5. 「山の日」制定に伴う「国民の祝日に関する法律の一部を改正する法律案」の国会審議日程等について報告された。（森）

6. YOUTH CLUBでガイドを雇用する際の選定内規について説明があった。（古野）

7. 上高地山岳研究所における平成26年度の管理人雇用契約と、平成27年度の管理人予定者について報告があった。（大槻）

8. 日本山岳会主催行事にかかる賠償責任保険の契約更改を行なう。（高原）

9. 「寄付のご案内」のパンフレットを作成し、会員・非会員を問わず寄付をお願いする。（吉川）

10. 第1回評議員懇談会を5月13日開催し、貴重な意見をいただいた。（高原）

11. 国土地理院から推薦依頼があった「電子国土賞2014」につき、

HP上で推薦の募集を行なう。（佐藤）

12. 「日本山岳会のしおり（2014年版）」を作成したので、新入会員オリエンテーション等で使用してもらいたい。（佐藤）

13. 東海支部から「第2回夏山フェスタ」名義後援申請があり承認した。（高原）

14. 日本山岳ガイド協会から公開講座「安全のための知識と技術」名義後援申請があり承認した。（高原）

15. 栃木県から山の日関連シンポジウムへの名義後援申請があり承認した。（高原）

16. 北海道支部のオホーツク・太平洋分水嶺踏査が完遂した。（高原）

17. 入会金の一部還元に用いる支部所属新入会員数について報告があった。（吉川）

18. 平成26年度末会費滞納除籍予定者リストを配布。（高原）

19. 会報「山」5月号の発行について報告があった。（柏）

【今後の予定】

1. 新入会員オリエンテーション　7月5日(土)13時～
2. 同好会連絡会　7月7日(月)19時～
3. 第30回東北・北海道地区集会（福島支部主管）　7月6日(日)～7日(月)
4. 上高地ウェストン祭　6月1日(日)
5. 内閣府へ平成25年度事業報告書・決算書提出　6月27日

□平成26年度第3回（6月度）理事会　6月11日　集会室

出席者　森会長、節田・黒川・古野各副会長、高原・吉川・佐藤各常務理事、勝山・山田・野口・大槻・落合・川瀬・山賀・直江各理事、浜崎監事

欠席者　吉永監事

【審議事項】

1. 東海支部からの110周年海外登山隊申請について

110周年記念事業委員会より推薦のあった標記申請につき、別添資料により詳細に検討し、110周年記念事業として実施すること及び助成金20万円を交付することについて審議した。〈賛成15、反対なしで承認〉

2. 上高地山岳研究所水道工事に係る契約締結と長期計画準備金取崩しについて

上高地山岳研究所の水道工事着手のため、地元水道事業組合と加入契約を締結し、工事着工のため工事業者との契約締結をし、それらの資金充当のために、長期計画準備金を取り崩すことについて、別添資料により、担当理事から詳細に説明があり審議した。工事請負契約書の不備部分（部分払いの時期の明確化、注文者の代表者の名前を記述する等）を「覚書」として締結することを条件とした。〈賛成15、反対なしで承認〉

3. トレイルラン事業への名義後援について

標記の是非について、一般登山者の安全、環境保全の観点等か

ら審議した結果、「トレイルラン自体を否定するものではないが、イベントとして実施される事業への本会の名義後援は行わない」ものとする。支部についても、この事情を支部合同会議で説明し理解を求める。〈賛成15、反対なしで承認〉

4. 入会希望者について（高原）
16人の入会希望者について審議された。〈賛成15、反対なしで承認〉

【協議事項】

1. 理事会の運営について
公益法人法制度に即した理事会運営を実現するため、理事会の招集手続き、議事運営、議事録の作成、業務執行理事の業務執行状況報告のあり方等について協議を行い、引き続き検討することとした。

【報告事項】

1. 本年5月以降の寄付金・助成金の受入れ8件について報告があった。また、今後は寄付者等を会報「山」に記載する（本会員の場合、氏名は記さない）旨の説明があった。（吉川）
2. 本年11月に東海支部が実施する「全国ボランティア登山（障害者支援登山）情報交換会」の開催について報告があった。（森）
3. 110周年記念事業として実施される海外登山等四部門の企画審査特別委員会メンバーが決定したことについて報告があった。（黒川）
4. 第2回全国安全登山実技指導講習会の実施日程及び国立登山研修所の後援名義申請等について報告があった。（古野）
5. 遭難対策委員会から、山行連絡及び事故連絡システムについて、検討状況の報告があった。（黒川、川瀬）
6. 年度途中の入会者の年会費の割引制度導入に伴う、新入会員の種別・入会月別会費額について報告があった。（吉川）
7. これまで進めてきた会員管理システムを、より当会の実情に合ったシステムに見直していく旨の報告があった。（高原）
8. 従来会員限定としてきた蔵書リストをHP上で一般公開することとし、合わせて公開並びに蔵書転載規程を見直すことについて報告があった。（節田）
9. 北大山岳部・山の会より「山岳」記事転載許可願いがあり承諾した。（節田）
10. 「山」6月号の発行について報告があった。（節田）

【今後の予定】

1. 総会　6月21日㈯　14時～
2. 支部合同会議　9月20日㈯～21日㈰
3. 山岳4団体懇談会　7月16日㈬19時～
4. 第10回山の博覧会（山梨支部）7月5日10時～

◎平成26年度通常総会

6月21日（土）　午後2時～

東京都千代田区六番町　主婦会館「プラザエフ」
出席者　１１３名、委任状出席者３３３８名（会員数５１０１名）
議　案　１．平成25年度事業報告案
２．平成25年度収支決算報告案
３．定款施行細則改定案
会は高原三平総務担当常務理事の司会で進行。審議はいずれも原案どおり、可決承認された。冒頭、森武昭会長は挨拶で、「山の日」に向けた当会のイベント実施予定であること、喫緊の課題として会員増強と時期リーダー育成が必要なこと、上高地の山岳研究所の飲用水確保の上水道工事計画などについて述べた。また、会員状況について、増加に転じたものの物故・退会者も多いために横ばい状況で、財政安定と新しい施策のためにはもうひと踏ん張りして６０００人規模の会員数に復活させたい、と決意表明した。

□平成26年度第４回（７月度）理事会　７月９日　集会室

出席者　森会長、黒川・古野各副会長、高原・吉川・佐藤各常務理事、勝山・山田・野口・大槻・落合・川瀬・直江各理事、吉永・浜崎各監事
欠席者　節田副会長・山賀理事

【審議事項】

１．平成26年度支部への運営交付金・事業助成金および新入会員報奨金の送金について
標記につき、別添議案により審議した。また、本年５月からの新入会員の会費月割り制度導入に伴い、次年度以降の支部への運営交付金・事業助成金の基準を３月末会員数とすることについて審議した。〈賛成13、反対なしで承認〉

２．平成26年度上期海外登山助成金審査について
標記審査委員会から別添議案のとおり５隊への海外登山助成申請（計60万円）があり審議した。〈賛成13、反対なしで承認〉

３．日本山岳会学生部女子ムスタン登山隊２０１４について
日本山岳会学生部が企画している女子ムスタン登山隊２０１４からの申請内容（募金を含め）について審議したが、１１０周年記念事業実行委員会での審査が未済のため、同委員会において日本山岳会として派遣すること、および助成金額・募金などが決定されればこれを追認することとした。なお、同隊に同行する予定のアドバイザーとの間で交わす覚書の文案については、法的に問題の起こらないよう精査し、訂正した上で承認することとした。〈賛成13、反対なしで承認〉

４．監査法人との財務に関しての指導・助言業務契約の継続について
標記につき、別添議案のとおり、前年度に引き続き太陽ＡＳＧ監査法人に対し年間１２０万円で業務を委託することについて審議した。〈賛成13、反対なしで承認〉

５．日本ブータン友好協会への法人会員としての加入について
標記につき、別添議案により審議した。〈賛成13、反対なしで承

認〉

6. C-8経理規程の改正について

標記につき別添議案により審議したが、一部文言等の指摘があったので、財務委員会の意見を聴いた上で、次回再審議することとした。〈保留〉

7. 組織および理事担当職務の変更について

標記につき、別添議案により審議した。〈賛成13、反対なしで承認〉

8. 茨城支部長の交代について標記につき答申があり審議された。

現：星埜由尚（13985）新：浅野勝己（12875）〈賛成13、反対なしで承認〉

9. 海外登山助成金審査委員会委員の1名追加について

標記につき、別添議案により審議した。〈賛成13、反対なしで承認〉

10. 7月度入会希望者について

標記につき、別添議案により18名の入会について審議した。〈賛成13、反対なしで承認〉

【協議事項】

1. リニア新幹線導入に関する意思表示について（静岡支部）南アルプスとリニアを考える市民ネットワーク静岡（準備会）から静岡県知事あて提出された「南アルプスを守るためにリニア新幹線の凍結を求める要望書」について、日本山岳会の採るべき立場等について意見交換を行なった。今後、静岡支部と協議しながら対応することを確認した。

【報告事項】

1. 本年6月以降の寄付金・助成金受入れ2件、事前申請2件について別紙により報告があった。（吉川）

2. 平成26年度通常総会の議事録および会員からの主な意見等について報告があった。（高原）

3. 平成26年6月29日、内閣府へ提出した平成25年度事業報告（決算含む）の概要について報告があった。（吉川）

4. 平成26年7月5日開催された新入会員オリエンテーションの概要および新入会員の参加者が前年比50％増（43名）と盛会であったとの報告があった。（高原）

5. 平成26年7月5日に同好会連絡会議が開催され、25同好会が出席し、活発な意見交換を行なったとの報告があった。（高原）

6. 支部活性化施策として、本年9月に支部登山指導者講習会（第1回、第2回）を開催するについて報告があった。（森）

7. 東海支部が協力して名古屋市で開催された「第2回夏山フェスタ」について、参加者数が前年比2000人増の6650人となり、活況であったとの報告があった。（森）

8. 東京新聞出版部から、当会蔵書『岩登り術』およびウェストン卿写真の再転載願いがあり許可したとの報告があった。（高原）

9. （公社）日本山岳協会から、平成26年11月に開催される「2014

アジア山岳連盟（ＵＡＡＡ）総会」・創立20周年記念式典への名義後援の許可申請があり、許可したとの報告があった（高原）

10. メールマガジン「日本山岳会だより」の第１００号発行を記念して、メールマガジンの利用拡大を図るため、読者への記念プレゼントを実施するとの報告があった。（佐藤）

11. 「公益認定等委員会だより」（８月１日発行）に日本山岳会の紹介記事が掲載されることについて報告があった。（高原）

12. 入会申し込みについて、入会申込み書は毎月末締め、翌月の理事会に諮る等の事務処理上の注意事項の報告があった。（高原）

13. ルーム清掃業者の入替について報告があった。（高原）

14. 事務局横内職員からの休暇願について報告があった。（高原）

【今後の予定】

1. 山岳４団体懇談会　７月16日㈬19時～

2. 第８回日中韓三国合同交龍登山（お　韓国）８月６日㈬～12ヒ㈫20日㈯～21日㈰

4. 評議員懇談会（案）　10月17日㈮16時～

5. 平成26年度全国支部懇談会（埼玉支部）10月18日㈯～19日㈰（８月度の常務理事会は開催するが、理事会は慣例により休みとする。）

■8月の理事会は夏休みのため休会。

□平成26年度第５回（９月度）理事会　９月10日　集会室

出席者　森会長、節田・古野各副会長、高原・吉川・佐藤各常務理事、勝山・山田・野口・大槻・落合・川瀬・山賀・直江各理事、吉永監事

欠席者　黒川副会長・浜崎監事

【審議事項】

1. 支部事業補助申請（山陰支部）について

山陰支部から国民の祝日制定記念第１回「山の日」を語る米子集会を企画し、これに合わせ親子登山、日本山岳会入会案内などの相談コーナーを設置するなど、支部活性化及び新入会員増強の起爆剤とするための支部事業補助申請があり、別添資料に基づき審議し、５万円を補助することとした。〈賛成14、反対なしで承認〉

2. 成川隆顕会員への会長特別表彰授与について

「山の日」制定の活動に６年前の提案当初から中核メンバーとして活躍し、制定への道筋をつけた成川隆顕会員の功績に対し、会長特別表彰を授与することについて審議した。〈賛成14、反対なしで承認〉

3. 日中韓三国学生交流登山の今後について

標記登山は、２０１５年度の第９回開催（開催国は中国）で最終回となる予定であるが、ＹＯＵＴＨＣＬＵＢ学生部から日本山岳会の１１０周年記念事業の一つとして、三国の合意の下、

２０１６年度に日本で開催したいとの答申があり、別添資料により審議した。〈賛成14、反対なしで承認〉

4. 「C-8経理規程」改正について

本会の会計処理と支出承認権限及び各事業を担当する理事、財務担当理事、会計担当者などの権限を明確に定めるための経理規程の改正について、別添資料に基づき審議した。〈賛成14、反対なしで承認〉

5. 寄付の顕彰の方針及び「C-23寄付受入及び管理規程」改正について

寄付者の氏名の公表や寄付者の顕彰について、これまで明確な方針や規程などはなかった。公益社団法人となり、寄付が増加する傾向にあることから、「寄付受入及び管理規程」を改正することについて、別添資料に基づき審議した。〈賛成14、反対なしで承認〉

6. 会員データ管理システムWGの事業計画書、予算書案について

新たに7月9日発足した「会員データ管理システムWG」からの、本年度の事業計画書及び予算書につき、別添資料に基づき審議した。〈賛成14、反対なしで承認〉

7. 入会希望者について

別添資料により、19人の入会希望者について審議した。〈賛成14、反対なしで承認〉

【報告事項】

1. 次期人事の基本方針について、現行の定款・定款細則に沿って行なうこと、また、会員の声をより反映できるよう書面による議決権行使書を導入することなど、別添により報告があった。（森）

2. 寄付金・助成金受入事前申請2件及び受入１０４件について別添により報告があった。（吉川）

3. １１０周年記念事業実行委員会から、現在までの各プロジェクトの進捗状況及び今後の予定などについて別添により報告があった。（吉野、佐藤）

4. 平成12年から平成25年の会員動向を基に、別添により、会員の高齢化、会員数の減少による収支悪化が指摘された。本会の収支健全化のためには、より一層のドラスティックな戦略が必要であるとの報告があった。（高原）

5. 遭難対策として、登山計画書の提出及び事故連絡について、別添資料により説明があり、本年下期より導入する旨の報告があった。（川瀬）

6. 平成26年度名誉会員候補者について、9月末までに理事及び評議員から推薦を受けるとの報告があった。（高原）

7. 第16回秩父宮記念山岳賞は、8月末までに4件の推薦があった。（高原）

8. 電子国土賞２０１４について、本会を推薦団体とする応募が1件あり、応募の要件を満たしているので、国土地理院に推薦する

との報告があった。（佐藤）

9. リニア中央新幹線工事に関する申し入れ書を、静岡支部など山岳4団体が連名で静岡県知事に提出したことの報告があった。（森）

10. 第8回日中韓学生交流登山が8月6日～12日にかけて韓国で開催され、日本から14名が参加し、交流を図ったとの報告があった。（落合）

11. 新版『日本三百名山登山ガイド』の印税を執筆した支部に支払うことについて報告があった。（節田）

12. 関西支部より、支部報への『山岳』（第１０９年）追悼の転載許可願いがあり許可した。（節田）

13. 明治大学博物館より企画展のための資料2点の貸し出し願いがあり、貸出を承認した。（節田）

14. 石川支部よりＪＡＣロゴマーク使用承認願いがあり、使用を承認した。（高原）

15. 「公益認定等委員会だより（第33号）」が発行され、当会の記事が掲載された。（高原）

16. 平成26年度全国支部懇談会（埼玉支部）に、森会長と節田副会長を派遣する。（高原）

17. 平成26年11月8～9日に東海支部で開催される全国ボランティア登山（障害者支援登山）情報交換

会の案内があった。（高原）

18. 第57回高頭祭（越後支部）が開催され、森会長、高原常務理事が出席した。（高原）

19. 公益財団法人公益法人協会と打ち合わせる機会があり、業務執行理事と理事、委員長などへの業務委任の考え方などをまとめたので参考にしてほしいとの報告があった。（吉川）

20. 『山岳』第１０９年の発行について報告があった。（節田）

21. 『山』9月号の発行について報告があった。（節田）

【今後の予定】

1. 支部合同会議　9月20日㈯～21日㈰
2. 評議員懇談会　10月17日㈮16時～
3. 支部長会議・年次晩餐会　12月6日㈯　於：京王プラザホテル

□平成26年度第6回（10月度）理事会　10月8日　集会室

出席者　森会長、節田・古野各副会長、高原・吉川・佐藤各常務理事、勝山・山田・野口・大槻・落合・川瀬・山賀・直江各理事、浜崎監事

欠席者　黒川副会長・吉永監事

【審議事項】

1. 「C-25遭難対策規程」の制定について

平成25年度10月度理事会から4回にわたり協議された「本会主催山行における山行連絡及び事故連絡フロー」について、規程として位置付けるため、別添資料に基づき審議した。〈賛成14、

反対なしで承認〉

2. 110周年記念事業・旅行業者選定及び発注書発行について

110周年記念事業における記念ツアーにかかる旅行業者の選定は、そのプロセスの法令順守、公平性の確保のため設置された業者選定作業小委員会（委員長：森会長）を2回開催し検討した。その結果、株式会社アトラストレック及びアルパインツアーサービス株式会社の2社を選定し、発注書を発行することとした。これらの経緯を記した別添議案により審議した。〈賛成14、反対なしで承認〉

3. 入会希望者について

標記について、別添議案により5名の入会について審議した。〈賛成14、反対なしで承認〉

【協議事項】

1. 新入会員オリエンテーションの刷新について（高原）

総務委員会から提案のあった、現在年1回開催している「新入会員オリエンテーション」を、入会希望者にも適用できる「説明会」に変更して開催することについて、別添資料により協議した。継続協議とする。

【報告事項】

1. 平成26年度名誉会員の推薦について（高原）9月末の期限までに推薦がなく、本年度は該当者なしとする。

2. 平成26年度新永年会員について（高原）

別添資料のとおり49名が新永年会員に該当する。

3. 次期役員等の選出について（高原）

任期等について定款及び規程類による確認が資料に基づきあった。

4. 「日本山岳会の財政問題（1）」について（吉川）

会員数減少及び会員の高年齢化等が及ぼす日本山岳会の財政への影響等について、別添資料により財務担当理事の立場から報告があった。

5. 寄付金・助成金の受入事前申請／報告／確認及び受入報告にいて（吉川）

寄付金・助成金の受入事前申請1件、受入報告6件について報告があった。

6. 110周年記念事業について（古野・佐藤）

現在の進捗状況の報告があった。学生部女子ムスタン登山隊による未踏峰登頂の状況等の報告があった。また、年次晩餐会の案内に、女子隊に併せて来年海外派遣予定の男子隊についての寄付金願いを同封することについて報告があった。

7. 日中韓三国学生交流登山の韓国での打合せ備忘録について（古野）

8月に韓国で開催された日中韓三国学生交流登山の際に各国団長の間で合意された2015年の中国開催、2016年の日本開催の備忘録について報告があった。

8. 上高地梓川右岸専用水道事業組合からの組合加入承認文書受領等

について（大槻）別添のとおり標記組合より承認文書が届いた。ついては、加入負担金１６０万円の支払いが発生した。その他、上高地山研のテラス工事の見積書を受領した。

9. ＹＯＵＴＨ ＣＬＵＢ全国安全登山実技指導講習会（剱岳）について（古野）
9月18日～23日の間、国立登山研修所剱沢夏山前進基地をベースに開催し、本部ＹＯＵＴＨ ＣＬＵＢと4支部合計32名の会員が参加した。登攀技術の向上及びリーダー育成に成果があった。

10. 電子国土賞の応募について（佐藤）
当会から推薦した1件が2次選考に進んでいるとの報告があった。

11. 平成26年度支部合同会議開催について（高原）
9月20日～21日に開催された標記会議の報告が別添のとおりあった。

12. Ｄ７「ＪＡＣマーク使用要領」制定について（高原）
当会が商標登録している「ＪＡＣマーク」の使用について、これまで明文化されていなかったことから、新たに標記要領を定めたとの報告があった。

13. 国立国会図書館から、同館が国立国会図書館法に基づき実施しているインターネット資料収集保存事業の一環として、当会のホームページを収集・保存の対象としたいとの申し出があり、これを許諾したとの報告があった。（佐藤）

14. 東京多摩支部から支部創立5周年の記念品として作成する日本手ぬぐいに「ＪＡＣマーク」を使用したいとの申請があり許可した。（高原）

15. ㈱プラネットライツから同社が発行する月刊誌『男の隠れ家』にウェストン卿の写真を掲載したいとの申請があり許可した。（節田）

16. 富山県立山博物館から『山岳』の写真・図を特別企画展等の展示パネル、解説図録に掲載したいとの申請があり許可した。（節田）

17. 「山」10月号の発行について報告があった。（節田）

【今後の予定】

1. 当会創立記念日　10月14日㈫ルーム休み
2. 平成26年度第2回評議員懇談会　10月17日㈮16時
3. 晩餐会
12月6日㈯　新宿・京王プラザホテル18時
4. 支部長会議　12月6日㈯10時30分～新宿・京王プラザホテル
5. 日本山岳協会「広島山岳平和祭」11月22日～26日　平和公園、宮島

□平成26年度第7回（11月度）理事会　11月12日　会室

出席者　森会長、節田・黒川・古野各副会長、高原・吉川・佐藤各常務理事、勝山・山田・野口・大槻・落合・川瀬・山賀・

直江各理事、吉永・浜崎各監事

【審議事項】・第16回（平成26年度）秩父宮記念山岳賞の授賞について

10月16日に開催された秩父宮記念山岳賞審査委員会において推薦された別添議案について審議した。

・受賞候補者：大澤雅彦（当会会員）

・業績：湿潤アジア山岳の垂直分布帯の成立と保全に関する生態学的研究〈賛成15、反対なしで承認〉

2．入会希望者について

標記について、別添議案により21名（1団体復活含む）の入会について審議した。〈賛成15、反対なしで承認〉

【協議事項】

1．海外支部（カトマンズ）について

カトマンズ在住の日本山岳会会員から要望のあった海外支部の設立に関し協議を行ない、支部に関する規程の適用は困難であることから、新たな位置付けについて引き続き検討することとした。

2．平成26年度支部長会議（12月6日）について

支部長会議における議題等について協議を行なった。

【報告事項】

1．110周年記念事業実行委員会（黒川）

10月7日に開催された第15回110周年記念事業実行委員会の模様について、別添資料に基づき報告があった。

2．会員増強・財政基盤検討PT（黒川）会員制度に関する検討を行なっていると、別添資料に基づき報告があった。

3．寄付金に関する事項について（吉川）

永年会員からの寄付金受入報告1件、学生部女子ムスタン登山隊への寄付金の受入等について、別添資料に基づき報告があった。

4．期中監査の実施（12月9日、10日）について（吉川）

監査法人による期中監査が監事同席で行なわれるとの報告があった。

5．第3期マッキンリー気象観測登山隊について（吉川）

2013年は現地事情により中断していたマッキンリーにおける高所気象観測が本年から再開され、観測機器の設置が完了したとの報告があった。

6．「日本山岳会主催山行に係わる登山計画書の提出及び事故連絡要領」制定について（川瀬）遭難対策委員会において決議した旨の報告があった（HP記載）。

7．雪崩講習会の実施について（古野）

YOUTH CLUB主催で平成27年1月17日㈯～18日㈰の間、国立登山研修所（富山県立山町）において開催するとの報告があった。

8．山岳遭難防止セミナーの開催について（川瀬）遭難対策委員会主催で平成26年11月25日㈫に長野県警山岳遭難救助隊から講師を

迎え、東京体育館で開催するとの報告があった。

9. 平成26年度上期海外登山助成金授与登山隊情報について（古野）
標記登山隊の登頂等の動向について報告があった。

10. 第30回全国支部懇談会（埼玉支部）の実施について（森）約２００名が参加し盛会であったとの報告があった。

11. 上高地山岳研究所利用状況等について（大槻）
２００５年以降10年間の説明があり、本年度の利用者数は、この期間では最高の８８２人であったとの報告があった。

12. ㈱アーベルソフト、㈱セールスフォースドットコムとの来年度契約解除について（高原）会員管理システムの更改に伴い、従来の契約は来年度以降更新しないこととするとの報告があった。

13. 「ＪＡＣ説明会」開設について（高原）
総務委員会から、入会希望者向けの説明会を、２０１５年２月以降実施することについて別添資料により報告があった。

14. 平成26、27年度決算・予算、事業報告・計画日程について（高原）
標記について説明があった。

15. 辻沢賢信氏から『山岳』第5年第1号の挿絵・写真を転載したいとの申し出があり許可した。（節田）

16. 黒部市長から展示のためのウェストン写真画像の提供依頼があり許可した。（節田）

17. 日本登山医学会からの第35回学術集会名義後援依頼があり許した。（野口）

18. ㈱スタイルゼロから登山用ＧＰＳに「三百名山ＪＡＣ選定」と表示することについての申請があり承諾した。（古野）

19. 会報「山」11月号について報告があった。（節田）

【今後の予定】

1. 晩餐会　12月6日㈯18時～
2. 支部長会議　12月6日㈯10時30分～
3. 海外遠征隊合同報告会　12月13日㈯10時～15時30分（於：法大58年館）
4. 集会委員会・赤倉温泉スキー1月18日㈰～20日㈫
5. 年末年始閉室　12月27日㈯～1月5日㈪

☆平成26年度年次晩餐会

12月7日、東京・新宿の京王プラザホテルで開催された。皇太子様も昨年に続いてご出席され、５１０人の会員が集い、賑やかに歓談した。冒頭、森武昭会長は御岳山噴火で自然災害の脅威を改めて認識させられたこと、一方明るい話題として「山の日」制定法案成立をよろこび、かつ当会の積極的な記念事業実施に賛意を表した。

物故会員72名への黙祷、新永年会員の発表、大澤雅彦氏へ秩父宮記念山岳賞の授与（「湿潤アジア山岳の垂直分布帯の成立と保全に関する生態学的研究」による）、成川隆顕会員へ会長特別賞の授与（「山の日」制定へのに尽力による）などが執り行われた。会食は皇太子様も参加した恒例の鏡開きの後に始まった。

晩餐会に先立ち、午後2時から海外登山の報告、秩父宮記念山岳賞の受賞記念講演会、展示会、図書交換会などが催された。また、翌日の懇親山行（山中湖東部の鉄砲木ノ頭）へは有志１００名が参加した。

□平成26年度第8回（12月度）理事会　12月10　会室

出席者　森会長、節田・黒川・古野各副会長、高原・吉川・佐藤各常務理事、勝山・山田・大槻・落合・川瀬・山賀・直江各理事、吉永監事

欠席者　野口理事、浜崎監事

【審議事項】

1. 支部事業補助金申請（北海道支部）について
標記につき、支部50周年記念事業「オホーツク圏地球環境生態系調査」について、別添資料により審議し、5万円を補助することとした。（賛成14名、反対なしで承認）

2. 関西支部設立80周年寄付金（募金）受入の事前申請承認について
標記記念事業の海外遠征等のため目標額を５００万円とする募金を実施したいとの申請があり、別添資料により審議した。（賛成14名、反対なしで承認）

3. C25「インターネットシステム運営規程」の制定について
日本山岳会が運営するＷｅｂサービスとメールサービスホームページの構築と運営に関する規程を制定することについて、別添資料により審議した。（賛成14名、反対なしで承認）

4. D6「会員からの旅費等の寄付に関する要領」の改正について
会員が日本山岳会の事業のために支出すると見込まれる旅費等に相当する現金を寄付する場合の金額を5万円以上から2万円以上に改めるとともに、現金の授受を伴わない場合の規定を削除することについて、別添資料により審議した。（賛成14名、反対なしで承認）

5. 入会希望者の承認について
13名の入会について、別添資料により審議した。（賛成14、反対なしで承認）

【協議事項】

1. 次期人事について（森）
標記について協議した。

【報告事項】

1. １１０周年記念事業委員会から、11月18日に開催された第16回委員会の議事録および事業計画の推進状況について、別添資料により報告があった。（黒川）

2. 会員増強・財政基盤検討ＰＴから、年会費の口座引落し申し込み状況についての報告のほか、会員制度のあり方、会員サービス増強のための各種割引制度等について検討を開始したことについて、別添資料により報告があった。（黒川）

3. 寄付金の受入れについて、事前申請1件、永年会員等からの寄付金受入報告3件について、別添資料により報告があった。（吉

川）

4. 「インターネットシステム運営規程」の制定に伴い、具体的取扱方法等を「D　4インターネットシステム運営要領」として定めたことについて報告があった。（佐藤）

5. アジア山岳連盟（UAAA）創立20周年記念式典が11月22・23日に広島市で開催され、森会長が出席し、その模様について報告があった。（森）

6. 自然保護全国集会が、アジア山岳連盟（UAAA）創立20出席し、その模様について報告があった。（森）

8. 平成27年度（第31回）全国支部懇談会および第3回小島烏水祭が、平成27年4月11日に高松市において開催されるとの報告があった。（高原）

9. 平成28年度（第32回）全国支部懇談会を越後支部において開催することが決定したとの報告があった。（高原）

10. 平成26年度年次晩餐会が、12月6日に京王プラザホテルにおいて開催され、会員510名が参加し盛会であったとの報告があった。（高原）

11. 晩餐会記念懇親山行が鉄砲木ノ頭・高指山で104名が参加し、順調に実施されたとの報告があった。（勝山）

12. 海外委員会から申請のあった富士山国際交流登山の日本山岳協会との共催については、手続き面での瑕疵があるほか、交流の実を上げるための実施方法等について検討する必要があることから、今回は見送ることとした。（黒川）

13. 山と溪谷社から『新版日本三百名山登山ガイド』をカシオ計算機株式会社製の電子辞書専用端末に搭載するコンテンツとして二次利用したいとの申請があり、これを承諾し別途契約を締結するとの報告があった。（節田）

14. 中央大学OB山岳会から『山岳』からの転載許可願いがあり許可した。（節田）

15. 学生部第3回クライミング大会、第51回マラソン大会開催の実施状況について、別添資料により詳細な報告があった。（落合）

16. 2014電子国土賞に当会が推薦団体となって推薦していた森田伸二氏が開発したソフト「Map Maker シリーズ」が電子国土功績賞を受賞したとの報告があった。（佐藤）

17. 秩父宮殿下例祭が平成27年1月4日に豊島岡で催され、森会長と秩父宮記念山岳賞審査委員会の竹内委員長が参列するとの報告があった。（森）

18. 会報『山』12月号の発行について報告があった。（節田）

19. 12月6日に開催の支部長会議で、日本山岳会の財務状況・会員増強に関して支部長から貴重な意見をいただいたとの報告があった。（佐藤）

20. 12月10日、本年度期中往査報告が監査法人よりあった旨の報告があった。（吉永監事）

21. 遭難対策委員会より、11月度の登山計画書の提出状況（25件あり、

内訳は支部23件、委員会2件）の報告があった。（川瀬）

22. 集会委員会より2015年海外トレッキングツアー（バルト三国）企画についての報告が別添資料によりあった。（勝山）

【今後の予定】

1. 平成26年度下期海外登山助成対象登山隊応募締切　12月31日、審査委員会1月開催

2. 平成27年度事業計画書・予算書提出依頼（各支部、各委員会）12月10日

3. 平成27年度事業計画書・予算書提出期限（各支部、各委員会）1月15日以上

□平成26年度第9回（1月度）理事会　1月14日　集会室

出席者　森会長、節田・黒川・古野各副会長、高原・吉川・佐藤各常務理事、勝山・山田・野口・大槻・落合・川瀬・山賀・直江各理事、浜崎監事

欠席者　吉永監事

議事に先立ち、会長から「現執行部体制は余すところ6ヶ月となった。課題を着実に解決していきたいので協力願いたい」との挨拶があった。また、来日中の韓国在住の曺チョウ東ドン植シク会員（1466）から挨拶があった。

【審議事項】

1. 「ガンガプルナ北稜登山隊2015」の110周年記念事業としての位置付けおよび同登山隊の募金開始の承認について（会長）

「ガンガプルナ北稜登山隊2015」から、同登山を日本山岳会110周年記念事業として実施することおよび募金（対象を限定したもの）を行なうことについて承認申請があった。別添資料により審議した結果、1月16日に開催予定の110周年記念事業実行委員会において、同計画が承認された場合は、これを追認することとした。なお、今回の登山ルートは難易度が高く危険度が高いことから、問題視する意見があった。（賛成14、棄権1で承認）

2. 入会希望者承認について（会長）

17名の入会について別添資料により審議した結果、16名について入会を承認し、1名は保留とした。（賛成15、反対なしで承認）

【協議事項】

1. 「C　2理事会運営規程」の改正および「C-27理事職務権限規程」の制定について（高原、吉川）

本会の理事および業務執行理事の権限等に関して、「理事会運営規程」の一部を改正するとともに「理事職務権限規程」を制定することについて別添資料により協議し、次回の理事会で審議することとした。

2. 規程類の管理責任者の改正について（高原）

規程類の管理責任者に関し、実態に即していない部分を改正することについて別添資料により協議した。

3. 次期人事について（森）
　標記について協議した。

【報告事項】

1. サントリー食品インターナショナル㈱から、同社南アルプス白州工場において展示するW・ウェストンの肖像写真の貸出依頼があり許可した。（節田）

2. （公社）日本山岳ガイド協会から「安全のための知識と技術公開講座」への後援名義使用について申請があり、これを承認した。（高原）

3. 東京多摩支部から、支部旗へのロゴマーク使用申請があり許可した。（高原）

4. 会員増強・財政基盤検討PTにおける検討状況について、別添資料のとおり報告があった。（黒川）

5. 「日本山岳会の財政問題」について別添資料により説明があり、「山」2月号に掲載する旨の報告があった。（吉川）

6. 助成金および寄付募金各1件の事前申請および寄付金7件の受け入れ報告が、別添資料によりあった。（吉川）

7. 全国「山の日」協議会から、「全国『山の日』フォーラム」を東京国際フォーラムで、平成27年3月28日～29日に開催する旨の案内があった。（山賀）

8. 平成26年度下期の海外登山助成対象登山隊の申し込みが2隊からあった。（古野）

9. 遭難対策委員会より、12月度の登山計画書の提出状況（17件あり、内訳は支部15件、委員会2件）の報告があった。（川瀬）

10. 平成26年1月～6月末までの日程計画について報告があった。（高原）

11. 「山」1月号発行について報告があった。（節田）

【今後の予定】

1. 平成27年度事業計画書・予算書提出期限（各支部、各委員会）1月15日

2. 平成26年度事業報告書・会計報告書提出依頼（各支部、各委員会）1月26日

3. 平成26年度事業報告書提出期限（各支部、各委員会）2月27日

4. 第1回JAC説明会2月27日（高原）

5. 平成26年度会計報告書提出期限（各支部、各委員会）3月31日

6. 平成27年度支部合同会議9月26日㈯～27日㈰以上

□平成26年度第10回（2月度）理事会　2月12日　集会室

出席者　森会長、節田・黒川・古野各副会長、高原・吉川・佐藤各常務理事、勝山・山田・野口・大槻・落合・川瀬・山賀・直江各理事、吉永監事

欠席者　浜崎監事

議事に先立ち、八ヶ岳で亡くなられた学生部・吉田周平委員長らに

黙祷を捧げた。

【審議事項】

1. 平成26年度（後期）海外登山助成金審査について
別添資料に示す海外登山助成審査委員会からの報告を受け、審議の上「神奈川大学タサルッェ峰遠征登山隊２０１５」に対し10万円助成する。（賛成14名、反対なし、棄権落合理事1名で承認）

2. 「C-2理事会運営規程」の改正及び「C-27理事職務権限規程」の制定について
公益社団法人への移行時に定められた「理事会運営規程」に、一般社団法人法で求められている理事及び業務執行理事の権限等に関し、不備があったため、その一部を改正、同時に「理事職務権限規程」を制定することについて、別添資料により審議した。（賛成15名、反対なしで承認）

3. 「C-5遭難対策規程」の改正について
「遭難対策規程」の内容の一部を「遭難対策運用要領」に移行し、規程全体を分かりやすく整理することについて、別添資料により審議した。（賛成15名、反対なしで承認）

4. 規程類の管理責任者の改正について
新たに制定された規程類の管理責任者を定めるとともに、既存の規程で実態と合っていない部分の管理責任者を変更することについて、別添資料により審議した。（賛成15名、反対なしで承認）

5. 入会希望者承認について
18名の入会（内1名は復活）について別添資料により審議した。（賛成15名、反対なしで承認）

【協議事項】

1. 平成27年度事業計画書・予算書骨子案について（高原・吉川）
別添資料に基づき、総務担当理事及び財務担当理事から説明を受け協議を行ない、次回理事会で審議することとなった。

2. １１０周年記念事業予算と海外登山基金の取崩しについて（黒川・吉川）
標記について、別添資料に基づき、１１０周年記念事業担当理事及び財務担当理事から説明を受け協議を行ない、次回理事会で審議することとなった。

3. 次期人事について（森）
標記について協議した。

【報告事項】

1. １１０周年記念事業実行委員会から、別添資料により１１０周年記念事業予算及び各プロジェクトの進行状況等について報告があった。（黒川）

2. 会員増強・財政基盤検討ＰＴから、別添資料により、準会員（仮称）制度、会員サービスのあり方等について検討しているとの報告があった。（黒川）

3. 日本山岳会の財政問題について、別添資料により、会費収入の減少により厳しい決算が続いているため、会員増加策、会員制度について早急に結論を出す必要があるとの報告があった。（吉川）
4. 会員データ管理システムの進行状況について、新年度から運用開始を予定していたが、諸般の事情で、2ヶ月くらい遅れるとの報告があった。（高原・山田）
5. 全国「山の日」フォーラムが、3月28日㈯・29日㈰に東京・丸の内の東京国際フォーラム会場で開催されること、および森会長が実行委員に就任したことについて報告があった。（森・山賀）
6. ㈱ネイチュアエンタープライズから『岳人』3月号に、当会所有のウェストンの写真を掲載したいとの許可願いがあり承認した。（節田）
7. 平成27年度広島支部総会、講演への出席依頼があり、節田副会長が出席することとした。（高原）8・平成26年度秩父宮記念山岳賞の授賞式の模様が「昭和」（昭和聖徳記念財団発行誌）に掲載された。（黒川）
9. 本会会員3名が、1月16日に山スキーで北アルプスに入山し、消息不明となっていることについて報告があった。（高原）
10. 学習院大学山岳部パーティが、八ヶ岳・阿弥陀岳で遭難したことについて報告があった。（古野）

【今後の予定】

1. 自然保護委員会主催講演会「平成26年度に起きた我が国の火山噴火に学ぶ」（東京工大講師・寺田暁彦氏）　3月31日㈫
2. 第9回日本山岳会森づくり連絡協議会　4月18日㈯～19日㈰
3. 第3回小島烏水祭・第31回全国支部懇談会（四国支部）4月11日㈯～12日㈰
4. 平成27年度第1回評議員懇談会　5月12日㈫16時～

□平成26年度第11回（3月度）理事会　3月11日　集会室

出席者　森会長、節田・黒川・古野各副会長、高原・吉川・佐藤各常務理事、勝山・山田・野口・大槻・落合・川瀬・山賀・直江各理事、吉永監事、浜崎監事（注　落合理事は所用のため審議事項1～4は欠席）

【審議事項】

1. 平成27年度事業計画書・予算書案について
平成27年度事業計画書・予算書案について、別添資料により審議し、文言の一部追加修正することとした。（賛成14名、反対なしで承認）
2. 「海外登山基金」の取崩しについて
日本山岳会110周年記念事業の内、平成26年度中に海外登山等への助成金として支給した資金に充てるため、海外登山基金から630万円を取り崩すことについて、別添資料により審議した。（賛成14名、反対なしで承認）

3. 北海道支部50周年記念募金承認願いについて
北海道支部から支部設立50周年記念事業のため、１２０万円を目標として募金を行なうことについて申請があり、別添資料により審議した。（賛成14名、反対なしで承認）

4. 「C−16　資料の貸出しに関する規程」の改正について
資料の貸出しについて、前回理事会で審議承認された「理事職務権限規程」により理事会から業務執行理事に権限が移されたことに伴い、規程の該当部分を改正することについて別添資料により審議した。（賛成14名、反対なしで承認）

5. 次期（平成27年度〜28年度）人事（理事）について
標記に関して、次に記す理事候補者について審議した。（賛成15名、反対なしで承認）

【理事候補者】
《再任》吉川正幸（７３４５）、勝山康雄（８７７２）、山田和人（９９０９）、野口いづみ（１２１０５）、大槻利行（１３０１９）、佐藤守（１３４３１）、落合正治（１３５１７）、山賀純一（１４６６０）、直江俊弐（１４７７５）　《新任》大久保春美（７２４９）、小林政志（７９１５）、神長幹雄（９７２２）、中山茂樹（１１３１９）、星征雅（１４８３７）、谷内剛（１４９５１）
以上15名

6. 入会希望者承認について
19名および1団体の入会について、別添資料により審議した。
（賛成15名、反対なしで承認）

【協議事項】
1. 日本山岳会の「日本山岳レスキュー協議会」への加盟について（黒川、川瀬）
遭難対策委員会担当理事から、別添資料に基づき説明を受け協議を行ない、同協議会の組織運営、当会が加入することのメリット等について、追加資料の提出を求め継続協議とした。

2. 集会委員会の名称変更について（勝山、高原）
集会委員会から名称を「山行委員会」に変更したいとの申請があり、名称変更に伴う委員会活動の目的・内容等について、継続協議とした。

【報告事項】
1. （公財）黒部市国際文化センターから、北陸新幹線開業記念特別展に使用する「冠松次郎」の資料について借用願があり許可した。（節田）

2. 富士吉田市教育委員会から、富士山にゆかりのある人物として、「冠松次郎」の肖像写真の貸出し申請があり許可した。（節田）

3. １１０周年記念事業委員会から、別添資料により各プロジェクトの進行状況、１１０周年記念事業予算について報告があった。（黒川、吉川）

4. 会員増強・財政基盤検討ＰＴから、別添資料により会員サービスのあり方、準会員（仮称）制度等の検討状況について、中間報

告があった。（黒川）

5. 募金、助成金等の事前申請3件、寄付金、助成金の受入れ7件について、別添資料により報告があった。（吉川）

6. 『日本三百名山登山ガイド』著作権使用料に関する㈱山と溪谷社との覚書締結について、別添資料により報告があった。（節田）

7. 平成27年度における新永年会員候補者について、別添資料により報告があった。（高原）

8. 会費滞納除籍対象者（53名）について、別添資料により報告があった。（高原）

9. 宮崎支部創立30周年記念誌刊行に伴い、会員からの募金を行なうことについて報告があった。（吉川）

10. 全国「山の日」協議会から示された、全国「山の日」フォーラム実行委員会に関わる規約、名簿等について、別添資料のとおり報告があった。（森）

11. 自然保護委員長が、近藤雅幸会員から川口章子会員に交代することについて報告があった。（佐藤、山田）

12. 第1回JAC説明会を2月27日に開催したことについて報告があった。（高原）

13. JACマークの使用願いが、関西支部、宮崎支部、科学委員会から提出され、許可したことについて報告があった。（高原）

14. 慶應義塾体育会山岳部創部百周年記念会参加の案内があり、森会長が参加するとの報告があった。（高原）

15. 会報「山」3月号について報告があった。（節田）

【今後の予定】

1. 宮崎支部創立30周年記念式典、交流登山および九州5支部集会7月11日～12日

2. 平成27年度通常総会　6月20日㈯14時～　主婦会館プラザエフ

支部の活動報告

■北海道支部

２０１４年度の活動で特筆すべきはやはり「オホーツク分水嶺踏査」の完了である。全長３５０キロに及ぶ長大な稜線上のトレースが８年の歳月をかけようやく一本につながった。また、50周年記念事業の助走の意味を込めプレ海外登山として「ロシア沿海地方オーブラチナヤ山生態観察登山」を実施、さらに、芦別市出身の探検家角幡唯介さんの講演会も50周年記念事業として開催し、好評を得た。このほか高山植物の盗掘防止パトロール、四季を通しての登山教室などを実施した。ただ「第15回自然児学校」は直前になって台風のため、やむを得ず中止になった。一方、共益事業では支部会員の登山技術向上や会員・会友の同士の交流を深めるため雪崩講習会、定例山行、沢登りおよび、岩登りの登山技術研修、山スキーなどの活動を展開した。また、年７回の支部通信、会報「ヌプリ」の発行、親睦のための集会等の開催などの事業・行事を企画、実施した。

《会議》

＊４月12日（土）　支部総会　２０１３年度事業報告、会計報告、２０１４年度事業計画、予算案、などについて審議、議案すべてを承認。出席１１０名（当日出席46名　委任状64名）。

＊定例の常任委員会　４月～３月毎月１回開催。10名～13名の常任委員出席。前月までの活動報告と今後の事業計画等の協議。

《山行・野外活動》

＊雪崩事故防止講習会等　○12月12日（金）ビーコン操作講習会　札幌・中島公園スポーツセンター周辺　13名参加（うち講師４名）○２０１５年１月24日（土）～25（日）函館地区雪崩講習会　森町道立森少年自然の家＆駒ケ岳周辺　23名参加（うち講師３名　会員外参加者16名）○２０１５年２月１日（土）～２（日）札幌地区雪崩講習会　札幌・りんゆうホール＆藻岩山スキー場　参加者24名（うち講師７名　うち会員外参加者１名　机上講習のみ受講５名）○２０１５年２月14日（土）～15（日）帯広・北網地区雪崩講習会　芽室町南地区コミュニティーセンター＆メムロスキー場周辺　参加者19名（うち講師４名　会員外参加者10名　机上講習のみ参加１名）

＊岩登り研修　５月20日（火）小樽・赤岩　講師２名　参加者

8名　6月20日（金）小樽・赤岩トビラ　講師1名　参加者5名　9月9日（火）小樽・赤岩　講師1名アシスタント2名　参加者6名　10月7日（火）小樽・赤岩西壁　講師1名アシスタント2名　参加者9名

＊沢登り研修　6月11日（水）札幌近郊・神威岳木挽沢（定例山行兼）・参加者11名

＊定例山行（夏山）

5月31日（土）～6月1日（日）芦別岳本谷　10名参加、6月11日（水）札幌近郊・神威岳木挽沢（沢登り研修会兼）11名参加、7月5日（土）～6（日）狩場山茂津多コース　8名参加、8月30日（土）～31（日）東大雪・丸山噴泉塔・12名参加、月6日（土）～7（日）北大雪・平山　※中止、9月28日（日）増毛山道　20名参加（「増毛山道の会」会員1名含む）、10月25日（土）～26日（日）お月見山行　道南・恵山および蝦夷松山～雁皮山縦走　29名参加。

＊定例山行（山スキー）

2015年1月15日（木）旭川・カムイスキーリンクス　ネイチャーゾーン　15名参加、2015年2月4日（水）熊見無名峰　15名参加、2015年2月18日（水）～19日（木）ニセコアンヌプリ　16名参加・ニトヌプリ17名参加、2015年2月28日（土）～3月1日（日）富良野スキー場　12名参加・富良野岳ジャイアント尾根　7名参加、2015年3月7日（土）札幌国際スキー場～朝里岳～白井岳（※悪天候のため朝里岳から引き返し）　13名参加。

＊NHK登山教室

5月～10月「日曜ゆっくり登山教室」有珠山、尻別岳、赤岳、サホロ岳、シャクナゲ岳、函館山～駒ヶ岳・5月～10月「水曜ゆっくり登山教室」イチャンコッペ山、喜茂別岳、黒岳～武華山、三国山、銭函天狗山、ニセコアンヌプリ・5月～10月「週末は山ガール教室」小天狗岳、黄金山、三段山、徳舜瞥山、旭岳、目国内岳・2015年1月～3月「スノーシュー教室」小樽・穴滝、美唄・東明公園、栗山町・お大師山、留寿都村・本貫気別山、小樽・赤岩、札幌市南区・四ツ峰　※毎回支部会員が講師・スタッフとして参加。

《プロジェクト・地域活動》

＊オホーツク分水嶺踏査

4月23日（水）～25日（金）知床峠～co1230mポコ　2・2km・7名、4月23日（水）～25日（金）羅臼岳南西稜　0・9km・2名、4月26日（土）～28日（月）羅臼岳～1351m（二つ池）　4・96km・7名　※この山行で踏査完了、6月19日（木）「オホーツク分水嶺完全踏査　報告会」ロイトン札幌「万里」41名＋東海支部山田明美副支部長、2015年2月23日（月）「第8回オホーツク分水嶺推進委員会」ルーム白石　14名。

＊第15回自然児学校
２０１４年８月10日（日）～12日（火）　国立日高青少年自然の家からまつキャンプ場で23名の子供たちが参加して実施予定だったが、台風11号の北海道直撃が予想されたため、２日前の８日に中止を決定した。自然児学校の中止は初めて。
＊高山植物盗掘防止パトロール　（花パト）
５月23日（金）自然保護研修会　札幌エルプラザで開催　23名参加。
６月１日（日）～10月10日（金）　30名延べ１４０回パトロール。
６月28日（土）官民合同パトロール◇上川総合振興局　十勝連峰富良野岳～上富良野岳をパトロール６名参加　◇十勝総合振興局　ニペソツ山登山口でパンフレット配布　１名参加。
＊日高山脈幌尻岳清掃登山、幌尻山荘排泄物人力運搬
９月13日（土）～15日（月）総勢22名うち支部会員４名参加（うち１名日帰り）。
＊支笏湖復興の森づくり
７月６日（日）下草刈り作業６名参加、10月５日（日）森林生長量の調７月６日。
《広報・出版活動》
＊支部通信　年７回発行　会員会友へ郵送またはメール送信で配布（約３００部）。
９月に創刊１００号達成。
＊北海道支部会報「ヌプリ」の２０１５年４月１日発行　山の関する紀行文、エッセイ、山の歴史・評論などを掲載。
《その他行事・集会》
＊各種集会
８月23日（土）夏季交流会　会員会友合計29名出席、プレ海外登山「ロシア沿海州・オーブラチナヤ山遠征」の報告会もビデオ上映を交え同時開催、12月13日（土）　北海道支部年次晩餐会　ロイトン札幌　55名出席、２０１５年１月14日（水）新年交流会　ルーム白石　27名。
11月６日（木）北海道内山岳団体交流会　ロイトン札幌「万里」で開催。今回から「山のトイレを考える会」が加わって参加団体は９団体になり、総勢44名出席、参加団体：北海道山岳連盟、日本山岳会北海道支部、札幌山岳連盟、北海道山岳ガイド協会、日本ヒマラヤ協会、ＨＡＴ－Ｊ北海道支部、北海道道央地区勤労者山岳連盟、北海道勤労者山岳連盟、山のトイレを考える会。

（藤木　俊三）

■青森支部

平成26年度は、計画された山行について参加者が少なかった

ものの、すべて事故なく終了する事ができた。また、地域社会に貢献できる活動として、白神山地ブナ林再生事業、北八甲田登山道維持活動、高山植物盗掘防止パトロール、八甲田スキーコースポール立てなどにも参加し、公益社団法人としての一定の役割を果たしたといえる。課題であった支部会員の獲得は、転入が1名あっただけで、引き続き課題が残った。

《会議・その他》

＊5月17日（土）　通常総会（平成25年度事業・決算報告・会計監査報告、平成26年度事業計画・予算案）　青森市アラスカ会館　出席32名（当日出席11名、委任状数21名）。

＊11月15日（土）　支部年次晩餐会　青森市ワシントンホテル　参加6名。

《山行・野外活動》

＊4月26日（土）～28日（月）支部春山山行（南八甲田山連峰酸ヶ湯駐車場上テント設営）　参加6名。

＊7月6日（日）～7日（月）第30回東北・北海道地区集会（猪苗代町）　参加7名。

＊7月13日（日）八甲田山の日　参加7名。

＊7月15日（水）菅江真澄古道整備調査（西目屋村）　参加3名。

＊11月22日（土）～23日（日）　支部晩秋山行　北八甲田（仙人岱小屋）　参加3名。

＊1月10日（土）～11日（日）　山岳スキー研修（鰺ヶ沢竹越会員山荘）　参加17名。

《プロジェクト・地域振興活動》

＊6月28日（土）～29日（日）　春季白神山地ブナ林再生事業　参加7名。

＊7月6日（日）青森ウエストン祭（新郷村）　参加3名。

＊7月6日（日）高山植物盗掘防止パトロール（八甲田山連峰）　参加3名。

＊7月17日（土）北八甲田山登山道維持活動　参加6名。

＊10月4日（土）～5日（日）　秋季白神山地ブナ林再生事業　参加7名。

＊2月24日（火）～25日（水）　八甲田山スキーコースポール立て　参加6名。

＊3月26日（木）～27日（金）　八甲田山スキーコースポール立て　参加7名。

（須々田秀美）

■岩手支部

公益事業の一環として試行して来た山岳パトロールも3年目を迎え、平成26年度は山行規模、展望さらには交通の便がよい姫神山を選定して4回実施した。大きな花崗岩に、白い歯を見

せながらよじ登る子供と相好を崩す親、休日には家族連れで賑わう人気の山である。危険行為やマナー違反もなく、腕章を付けた我々を見かけると登山者は更なる緊張感を持って歩いていくように見受けられた。

県内団体との連携では、雪の裏岩手連峰開山祭に5名参加し、実行委員長はじめ三ッ石山の登山リーダなどを分担した。登山経験の少ない参加者もいてリーダの歩行技術や自然観察の解説を熱心に聞き入る姿が見られた。岩手山では荷上げ、山小屋管理に協力、はるばる全国から参集した登山者の案内や宿泊の世話にあたった。かたや、28年度開催予定の岩手国体に向けた準備や研修にも力を注いでいる。

これらの活動とは別に月例山行を実施している。26年度は東根山と岩手山に県外在住の支部会員が参加した。岩手の山で旧交を温め、若い仲間と交流し、ともすると惰性に流れがちな登山に活力がもたらされた。全国に張り巡らされているＪＡＣの組織の広がりを再認識した年でもあった。

北上市の登山愛好者がグループで月例山行に参加した事例も紹介したい。古参支部会員が育ててきたグループである。若い女性の笑いざわめきが登山路を縮め疲れを半減させ、会を活性化したといってもいい。継続的な参加でやがて組織強化に繋がればこのうえない喜びである。

《会議》

＊4月5日（土）支部総会　平成25年度事業報告・決算報告、26年度事業計画・予算案などを審議。（出席者17名、委任状38名）。

＊12月13日（土）支部全員協議会　平成27年度山行計画　参加12名。

＊支部事務局会議・2回実施、　委員会・1回実施

《山行・野外活動》

＊4月27日（土）「東根山」4月例会山行　参加8名。

＊5月24日（土）「西岳～高森高原清掃登山」5月例会山行・公益　参加7名。

＊6月14日（土）「仙人峠自然観察会」6月例会山行・公益　参加7名。

＊6月21日（土）「姫神山パトロール」公益。

＊6月22日（土）「残雪の裏岩手連峰開山祭」後援・公益　参加5名。

＊7月1日（火）「岩手山山開き」参加1名。

＊7月6日（土）～7日（日）「一切経登山兼第30回東北・北海道地区集会参加」7月例会山行・公益　参加6名。

＊7月19日（土）「姫神山パトロール」公益　参加8名。

＊8月2日（土）～3日（日）「岩手山八合目避難小屋管理」参加8名。

＊8月23日（土）「姫神山パトロール」公益　参加2名。

＊9月6日（土）「南本内岳自然観察会」9月例会山行・公益参加13名。
＊9月27日（金）「姫神山パトロール」公益　参加2名。
＊10月11日（土）「三森山」10月例会山行　参加18名。
＊11月8日（土）「鯨山」11月例会山行　参加10名。
＊12月14日（日）「鯨山」忘年山行　荒天中止。
＊1月11日（土）「高洞山」1月例会山行　参加5名。
＊2月21日（土）「安比スキー」2月例会山行　中止。
＊3月14日（土）「お月山」3月例会山行　中止。
《広報・出版活動》
＊「支部通信」　9月・3月の2回発行。
《その他の行事・懇親会》
＊4月5日（土）支部懇親会　16名参加。
＊12月13日（土）支部晩餐会（忘年会）　参加12名。

（菅原　敏夫）

■宮城支部

今年度の活動は4月5日に仙台市内の里山「蕃山」で開催された山行総会でスタートした。この定期総会においては平成25年度の事業報告及び収支決算報告、平成26年度の事業計画及び予算案、「支部友」制度の発足に伴う支部会則の改正案並びに「支部友会」の会則案が異議なく承認された。

昨年度まで一般公募登山に参加したメンバーに対して支部友会への加入を働きかけた結果、4月14日までに12名が参加を表明し、「支部友」制度が名実ともに正式にスタートした。なおその後支部友にはこれまで以上に日本山岳会への加入を働きかけた結果、26年11月に1名が日本山岳会に加入した。

今年度は、従来の支部報「宮城山岳」の隔年発行年に当たったため12月に第21号を発行し、併せてこれを補完する情報誌「宮城山岳通信」第3号と第4号を6月と12月に発行した。

また、自然保護活動の一環として、昨年度に引き続き東日本大震災による福島第一原子力発電所の事故に伴う放射能放出の影響を把握するため、県内山岳地域において空間放射線量の測定事業を行った。

さらに日本山岳会からの協力要請に基づき「親子登山おすすめコース」の作成に参加し、今年度は「戸神山」と「達居森」の2座を対象に取材作業等を行った。この結果は平成27年2月に日本山岳会のウエブサイト「親子で楽しむ山登り」に掲載された。

《会議》
＊4月5日（土）山行総会　仙台市内「蕃山」　事業報告・計画、決算・予算、会則改正案・「支部友会」会則案などを審議。出席47名（当日出席⑯名、委任状31名）。

＊定例役員会　4月18日(金)4月定例役員会　仙台市シルバーセンター　支部長、副支部長、各種委員会委員長、委員、事務局等の役員20名中8名出席。以降、毎月原則第3金曜日に午後6時半から同一会場で開催　延べ134名出席。

＊5月12日（月）臨時役員会　執行部体制の在り方について検討　14名出席。

＊山行・集会委員会、会報・編集出版員会などを随時開催　特に会報・編集出版委員会は支部報『宮城山岳』第21号と情報誌『宮城山岳通信』の第3号・第4号の編集・発行作業を精力的に実施した。

《山行・野外活動》

＊一般公募登山（公益事業）3回実施　延べ45名（会員・支部友を含む）参加。

第1回＝5月25日（日）水引入道・16名参加、第2回＝7月26、27日（土・日）八幡平裏岩手縦走　14名参加、第3回＝10月26日（日）氷上山（陸前高田市）・15名参加。

＊月例山行　5月、7月及び10月は一般公募登山を兼ねて実施。4月20日（日）支部友歓迎山行　達居森　17名参加。9月21日（日）長月山行　阿武隈山地（疣石山～小斉峠縦走）　6名参加。11月23日（日）霜月山行　三方倉山　12名参加。1月25日（土）睦月山行　雁戸山　6名参加、2月22日（日）厳冬期山行　南面白山　8名参加。3月22日（日）弥生山行　水引入道　4名参加。

＊沢登り　8月24日（日）柳小屋沢　5名参加。

＊「山の日」記念清掃登山　8月17日（日）泉ヶ岳。

＊元旦登山　正月元旦（木）泉ヶ岳　参加有志。

＊世界谷地湿原保全対策事業（公益事業）　8月1日（金）宮城県環境生活部が主催する事業に会員5名を派遣。

＊仙台市立愛子小学校5年生の泉ヶ岳登山支援（公益事業）9月8日（月）仙台市立愛子小学校から5年生の校外活動である泉ヶ岳登山の支援要請があり、登山の専門家として会員4名と支部友1名を派遣。

《プロジェクト・地域振興活動》

＊宮城県内山岳地域の空間放射線量測定事業（公益事業）今年度は昨年度実施した測定結果を報告書に取りまとめ、6月30日にマスコミに公表するとともに、7月中に宮城支部会員・支部友、宮城県、県内市町村、日本山岳会（本部、各支部）、日本勤労者山岳連盟（本部）及び県内各山岳団体に送付した。また、昨年度の補完調査として北上山地と築館丘陵及び磐井丘陵で詳細な測定を行った。その後昨年度と今年度の調査結果を総括的に取りまとめ、11月22日に開催された日本山岳会自然保護全国集会において柴崎徹自然保護・科学委員長が報告した。当該報告の概要については自然保護委員会の機関誌『木の芽草の芽』第114号に掲載された。

＊親子登山おすすめコース作成事業　昨年度に引き続き本部からウェブサイト『親子で楽しむ山登り』の「親子登山おすすめコース作成」を依頼され、当支部においては仙台市の「戸神山」と大衡村の「達居森」を選定し、8月から9月にかけて紹介記事の執筆、地図作成、写真撮影等を行なった。この結果は平成27年2月にウェブサイトに掲載された。

《広報・出版活動》

＊支部報「宮城山岳」及び情報誌「宮城山岳通信」の発行

今年度は支部報の隔年発行年となり、支部報「宮城山岳」第21号を12月に、情報誌「宮城山岳通信」第3号と第4号を6月と12月に発行して支部会員・支部友、日本山岳会（本部・各支部）に送付した。

＊ホームページの掲載：本部のウェブサイトを活用してホームページを掲載しているが、今年度は制作担当者のパソコンに不具合が発生したため適時の更新はできなかった。

《その他の行事、懇親会》

＊ビールパーティ　7月31日（木）ホテルＪＡＬシティ仙台　14名参加。

＊支部晩餐会（望年会）　12月13日（土）仙台市茂庭荘　静岡支部の大島支部長をゲストに迎え「ひとり分水嶺を繋ぎあるく」と題する記念講演を拝聴しながら懇親を深めた。18名参加。

（富塚　和衛）

■　秋田支部

今年度は役員改選の年であり、総会で承認された新しい執行体制でスタート。また、秋田支部の設立五十五周年であり、その記念行事として、「秋田県内の山五十五座ラリー」を行うなど、会員相互の交流を主とした。

支部活動の活性化を目指し、岩崎元朗氏の講演会を後援する等、日本山岳会入会案内を行ない、会員増を目指した。

《会議》

※4月5日(土)　通常総会　平成25年度事業報告、決算の承認。26年度事業計画、26年度予算案の審議。出席52名（当日出席23名、委任状29名）。

※4月26日（土）　役員会　五十五周年事業について協議。

※9月24日（水）　役員会　岩崎元朗「健康登山　ｉｎ　秋田」講演会について協議。

※11月15日（土）　秋田支部設立五十五周年記念祝賀会開催30名出席。

※12月18日（木）　役員会　本会創立百十周年記念事業新日本山岳誌執筆について協議。

※2月26日（木）　27年度通常総会に提出する議案の審議。12名出席。

《山行・野外活動》

※5月25日（日）　春の里山山行　七座山（287m）　参加者17名（内会員外5名）。
※7月19日（土）～22日（火）支部設立五十五周年記念事業県外山行　黒姫山（2053m）　戸隠山（1904m）　飯綱山（1917m）　参加者9名。
※7月31日（木）　支部設立五十五周年記念県内標高55番目の山・横長根（1200m）参加者18名（内会員外5名）。
※10月26日（日）　秋の里山山行　日住山（605m）　竜馬山（378m）参加者16名（内会員外4名）。
《プロジェクト・地域振興活動》
※6月8日（日）　太平山山開き市民登山に協力・公益（登山振興）　秋田市からの一般参加者33名をサポート。支部会員参加者12名。
※11月8日（土）　太平山・前岳にベンチを設置し、前岳までの歩道刈り払い・公益（登山振興）参加者15名（会員10名　太平山県立自然公園管理員1名　会員外4名）。
※「自然学習センターまんたらめ」でおこなう自然観察会等に協力、4月～10月。
※11月22日（土）　岩崎元朗「健康登山 in 秋田」講演会を後援し、周知等に協力、参加者約180名　公益（登山振興）。
《広報・出版活動》
※支部会報「秋田山岳」第93号～96号まで4回発行。
広報活動として、支部会員及び各支部、他山岳会や公民館等に配布。
《その他の行事、懇親会》
※4月5日（土）　通常総会終了後懇親会を開催。出席者23名。
※7月6日（日）～7日（月）　第30回東北・北海道地区集会に4名参加。
※10月18日（土）～19日（日）　全国支部懇談会埼玉大会に6名参加。
※12月7日（土）　年次晩餐会に5名参加。
※9月～10月　川島会員捜索　部名垂沢。
支部関係捜索者11名（会員8名　会員外3名）。

（鈴木　裕子）

■山形支部

会員総数　60名。
《総会および役員会》
＊総会　4月19日（土）山形ビッグウイングにて開催。
役員会　年3回（6月6日、10月11日、3月7日）開催。
《山行》年6回計画し、5回実施
＊第1回山行　5月10日（土）蔵王山系瀧山（1362m）晴天に恵まれ、ロープウエイ鳥兜駅から瀧山まで縦走し、蔵王

温泉に下山した。

＊第2回山行　8月23、24日（土、日）、焼石岳の予定だったが豪雨のため中止した。

＊第3回山行　10月5日（日）甑山（981m）。山形・秋田県境の甑山は低いながらも急峻でスリリングな登山を楽しんだ。

＊第4回山行　11月8日（土）白鷹山（994m）。支部晩餐会当日の軽い山行。

＊第5回山行　2015年1月16日～18日（金～日蔵王スキー場で「樹氷原を滑る会」。5名の支部会員のほかに他支部2名、アルパインスキークラブ2名の参加。

＊第6回山行　3月14日～16日（土～月）鳥海山スキー登山。山雪荘をベースにして活動。参加者5名。

《一般公募登山（公益目的事業）》2回実施

＊第1回公募登山　7月27日（日）鳥海山。秋田県側の鉾立からお浜・鳥海湖、千畳河原を経て滝の小屋に下る鳥海山中腹横断しながら高山の花を楽しむ予定だった。しかし、ガスと強風のためお浜から鉾立に引き返した。（一般参加者17名支部会員11名）。

＊第2回公募登山　10月26日（日）月山。志津・ネイチャーセンターから石跳川を上り、湯殿山神社に下る。晴天に恵まれ、装束場で木村会員による月山についてのレクチャーがあった。志津に戻り、寒河江市の歴史学者那須恒吉氏の案内で最近発見された行者の修行場の遺構を見学した。玄海付近にはまだ発見されない修行場の遺構があるらしい（一般参加者17名、支部会員12名）。

《講演会（公益目的事業）》

＊8月31日（日）山形テルサ1F（山形市）

演題「南極の自然と観測隊の生活」

講師　石沢賢二氏（山形市出身）国立極地研究所職員

参加者　80名

南極の氷や観測隊員の装備等の展示、DVD上映。講演後活発な質疑応答があり、予定時間をオーバーする盛会だった。支部としては初めての企画だった。

《行事・懇親会》

＊支部晩餐会　11月8日（土）寒河江市チェリーパーク・ホテルにて。22名参加。日本山書の会会員新井守氏のご厚意により、山書即売会を実施した。

《自然保護関連事業》

＊9月28日（日）「鳥海山ワシタカ研究会」（会長　角田氏）の会員とともに鳥海山南麓の観測基地にてイヌワシの動向調査を行なう。猛禽類センターにて同会事務局長佐藤淳志氏（元支部長）によるイヌワシの生態、観察方法についての講話があった。今後、山形支部は同研究会の活動に積極的に参加す

る方針である。

《課題》

1　支部活動に参加する会員が固定化する傾向がある。

2　新会員の拡大が思うように進まなかった。

3　会報の発行を予定していたが実現できなかった。

4　「山の日」に向けて、魅力ある企画を立てて、会員の参画意識を高めるたい。

（粕谷　俊矩）

■福島支部

年度当初は、7月6日（日）開催の「東北・北海道地区集会」の担当支部としてこれの成功に向け取り組みを優先させた。この結果、地区集会は森武昭会長をはじめ、44名の参加で成功裏に終了した。

公益事業では、東日本大震災・原発事故発生から丸3年となるが、県内山岳地域の放射線測定を継続して実施、その推移を記録・集約している。さらに、県内主要山岳登山道整備、一般公募による「岩登り講習会」を開催し、魅力ある支部づくりに努めた。その中で、支部活動が一部会員に限られ、会員拡大も成果を得られなかったことが反省点として上げられ今後の課題でもある。

《会議》

4月13日（日）支部総会　事業報告、計画、決算、予算、など原案通り満場一致で可決　当日出席67名（当日出席19名、委任状48名）。

＊6月30日（月）第2回支部役員会　7月開催の東北・北海道地区集会の諸準備と打合せ　出席10名。

＊11月14日（金）第3回支部役員会　平成26年度の中間事業総括と年度後半の取り組み協議　出席9名。

《山行・野外活動》

＊5月28日（水）「第1回岩登り講習会（公益）」　地元紙に行事内容を提供　会員10名＋非会員8名＝18名参加、基本技術と実技習得。

＊10月8日（水）、9日（木）上高地「山岳研究所」ベースの蝶が岳登山　参加6名。

＊　11月20日（木）～22日（土）　冬山恒例登山　合戦尾根・燕岳往復燕山荘泊　参加9名。

《プロジェクト・地域振興活動》

＊4月上旬～11月山岳地域放射線測定（公益）吾妻、安達太良、那須甲子を選定　山頂、登山道の定点測定実施。

＊6月21（土）吾妻山植生復元作業（公益）地元自然保護団体と共同　参加9名。

＊9月7日（日）登山道整備・復元作業　悪天候のため6月、

7月の計画が中止となり、最後の公益事業として2名参加。

《広報、出版》

＊10月末　支部機関誌「やまなみ第4号」発行。

＊7月、10月、1月　支部広報紙「支部会報1～3号」発行。

《その他の行事、懇親会》

＊2月7日（土）支部新年会　郡山市内　参加19名。

（渡部　展雄）

■茨城支部

当支部は2007年6月に21名の会員で発足し、8年近く経過した現在、会員39名、支部友12名。隔月の支部定例会議、講演会、月1～2回の支部山行、支部報の発行、懇親会等を通じてクラブライフの充実を図っている。

公益事業としては、上記の講演会開催の他に、数年前から茨城県自閉症協会への登山支援に取り組み、今年度は第13回～第14回の山行を実施した。

《会議》

6月22日（日）支部総会　2013年度の事業報告、会計報告、2014年度の事業計画、予算案、支部役員改選、年間山行計画、「茨城の山事典・改訂版」発行等を審議、議案の全てを承認。

支部定例会議をほぼ隔月実施し活動報告、事業計画等を協議。

《講演会》

公益事業として、支部総会、支部定例会議の当日、会議の前に一般市民にも公開した約2時間の講演会を開催している。

＊4月12日（土）第35回「虫ささされの予防と治療」茨城支部支部友（薬剤師、土浦の自然を守る会会長）奥井登美子氏。会員16名、一般16名参加。

＊6月22日（日）第36回「カラコルムとパミールの間、シムシャール谷の自然と人々」日本ヒマラヤ協会理事長　伊藤満氏。会員19名、一般9名参加。

＊9月7日（日）第37回「遥かなりヒマラヤ」ヒマラヤ皇冠峰遠征静岡大隊前隊長　山本良三氏。会員19名、一般13名参加。

＊11月23日（日）第38回「噴火災害の脅威・熱雲と火砕流」元気象大学校長　河村まこと氏。会員21名、一般14名参加。

＊1月23日（金）第39回「カラコルムの測量・地図作成小史と最近のカラコルム登山事情」茨城支部会員（国土地理院客員研究員）長岡正利氏。会員19名、一般13名参加。

《支部山行》

＊4月26日（土）観音山、東山、妙見山　4名参加。

＊4月29日（火）宝篋山　6名参加。

＊5月11日（日）館岸山～加賀田山　8名参加。

＊6月5日（木）～6日（金）信夫山と吾妻連峰微温湯　4名参

加。

＊7月4日（金）～6日（日）朝日連峰　大朝日岳　4名参加。

＊8月17日（日）高尾山　4名参加。

＊8月22日（金）～25日（月）剱岳　7名参加。

＊8月31日（日）筑波山古道歩き　7名参加。

＊9月4日（木）～6日（土）甲斐駒ヶ岳～仙丈岳　2名参加。

＊9月23日（火）～25日（木）西丸震哉を偲んで蓮華温泉等3名参加。

＊12月10日（水）～11日（木）忘年山行・鍋足山　14名参加。

＊2月14日（土）湯河原　城山　6名参加。

＊3月22日（日）宝篋山　8名参加。

右記の他に、2017年度の支部創立10周年記念誌として予定している「茨城の山事典・改訂版」発行に向けて、会員有志が数名づつ分担して、茨城県内の登山道の無いヤブ山の調査山行を実施している。

《交流山行》

＊10月18日（土）～19日（日）全国支部懇談会（埼玉支部主催）両神山、武甲山、羊山の3コース。茨城支部7名参加。

＊2月7日（土）～8日（日）4支部（栃木、千葉、茨城、群馬）合同懇談会（千葉支部主催）房ノ大山、館山ファミリーパークの2コース。茨城支部6名参加。

＊2月19日（木）～20日（金）来年の4支部合同懇談会（茨城支部主催）の大洗周辺コース下見　10名参加。

《特別山行》茨城県自閉症協会への協力登山

＊6月29日（日）第13回　安達太良山下見登山　会員5名参加。

＊8月2日（土）～3日（日）第14回　安達太良山　会員6名、ボランティア3名、自閉症協会25名、計34名参加。

《広報・出版活動》

＊5月1日（木）「茨城支部報」を発行。

《その他の行事・懇親会》

＊8月10（日）ビアパーティ開催（牛久シャトー）17名参加。

（西川　元禧）

■栃木支部

栃木支部は設立して8年目を迎え、設立当時34名で始まった会員数は現在50名である。いずこも同じ悩みを抱えているが、新入会員は微増しているものの高齢による退会者もそれと同じようにあるため、会員増の取り組みもなかなか功を奏しないでいる。若者対策として昨年度からＹＯＵＴＨ 栃木を支部内の委員会に位置づけ四季折々の登山活動を始めている。高校山岳部との関わりも持つようにしており、中期的な視点で会員増の取り組みに努力している。クラブ・ライフのさらなる充実のた

めに、次年度は平日の山行の取り組みとしてマスターズクラブを立ち上げ、中高年齢会員の登山活動の充実を図りたい。

公益事業については、公益社団法人としての使命を十分に果たすべく、一昨年から登山の振興と安全登山教育を目的に「親子登山教室」を開催している。今年は3年目となり、奥日光の名峰を会場に充実した活動ができており、本会のＨＰにも紹介されている。

《会議》

＊4月26日（土）通常総会　事業報告・計画、決算・予算など原案通り満場一致で可決、その後懇親会を実施。出席26名。

＊4月5日（土）第1回役員会、4月26日（土）第2回役員会、6月28日（土）第3回役員会、8月23日（土）第4回役員会、11月29日（土）第5回役員会、1月24日（土）第6回役員会、3月28日（土）第7回役員会、支部役員11名と事業委員7名が集まり、支部運営や事業について協議。

《山行・野外活動》

＊4月12日（土）～13日（日）　春山山行・谷川岳・虹芝寮　参加20名。

＊8月23日（土）～24日（日）　夏山山行と懇親会　奥鬼怒・加仁湯温泉・於呂倶羅山　参加19名。

＊9月13日（土）～15日（月）　秋山山行・立山・国立登山研修所　参加26名。

＊1月24日（土）～25日（日）　冬山山行と新年会　湯元温泉・高山　参加14名。

＊上記の支部山行の他、ＹＯＵＴＨ栃木の山行として、春山・平ヶ岳、夏山・槍ヶ岳（高校山岳部合宿サポート）、秋山・古賀志山、冬山・那須岳での山行を行った。

《プロジェクト・地域振興活動》

＊7月6日（日）　日光清掃登山　栃木県山岳連盟との共催　参加約２００名（内本支部関係者8名）。

＊7月19日（土）～20日（日）　親子登山教室　栃木県山岳連盟との共催　奥日光の光徳・女峰山・小真名子山で開催、公募による登山教室で、学習院山桜会の協力を得て実施。参加親子20名。

＊9月7日（日）　那須岳クリーンキャンペーン　栃木県山岳連盟との共催　参加約80名（内本支部関係者6名）。

《広報・出版活動》

＊4月1日（日）　栃木支部報7号を発行。

《講演会》

＊6月28日（土）　第7回山岳映画の夕べ　「白き氷河の果てに」（１９７７年日本山岳協会Ｋ２登山隊）の映画を鑑賞し　講師坂口三郎氏による当時の登山界の状況に関する講演会を開催、講演会後に講師を囲んでの懇親会を実施。参加90名　（故羽田栄治氏の恒例追悼行事として実施）。

＊11月29日（土）第6回山ヒマラヤの集い「群馬のヒマラヤ登山」講師八木原圀明氏　講演会後に講師を囲んでの懇親会を実施。参加100名。
＊12月14日（日）第8回「山」の講演会「奥日光からシベリアへ　アムールトラを追って」講師福田俊司氏　講演会後に講師を囲んでの懇親会を実施、参加71名。
《その他》
＊5月27日（火）に「山の日をつくろう！」シンポジウムを宇都宮市で開催。記念講演は三浦雄一郎氏。主催は本支部も構成員となっている「山の日」をつくろう栃木県連絡協議会。

（渡邉　雄二）

■群馬支部

群馬支部は目出度く2年目を終えるにあたり、会員も発足時より10人増え、今後の見通しもたち胸をなで下ろしている。「山の日」が平成28年8月から正式に祝日になればさらに山が賑やかになるであろうことを期待したい。
《会議》
＊5月14日（水）第4回例会（平成26年度支部総会）「前橋市総合福祉会館」出席者13名　委任9名　ショートスピーチ：小野里節司「私の山行―アイランドピーク他」。
＊7月23日（水）第5回例会「前橋市総合福祉会館」出席者12名　ショートスピーチ：黛　利信「私の山行―日本300名山他」。
＊9月17日（水）第6回例会「前橋市総合福祉会館」出席者8名　ショートスピーチ：大竹誼長「我が家の山のお宝」。
＊11月19日（水）第7回例会「群馬県生涯学習センター」出席者16名　ショートスピーチ：北原秀介「私の山行」。
＊平成27年1月21日（水）第8回例会（新年会）「うたや」（前橋市）出席者14名。
＊3月18日（水）第9回例会「前橋市総合福祉会館」出席者10名　ショートスピーチ：中山達也「私の山行―山と無線を中心に」。
《活動》
＊6月21日（土）群馬岳連の「ジュニアチャレンジキッズプロジェクト」（JCKP）への協力　谷川岳山麓の谷川岳山岳資料館（土合）から芝倉沢出合いの成蹊学園の「虹芝寮」往復ハイク　参加ジュニア10名　支部会員の協力者1名。
＊8月11日（月）群馬県みなかみ町の「山の日」制定記念登山に協力　谷川岳の西黒尾根登山に参加、支部会員の協力者1名。
＊8月24日（日）群馬岳連の「JCKP」への協力　谷川岳一ノ倉沢遡行　湯檜曽川への合流点、出合いから一ノ倉沢を遡

行し危険地区の始まる一ノ沢出合いまで遡る　参加ジュニア7名　支部会員の協力者1名。

＊9月19日（土）～21日（月）第1回上州武尊山スカイビューウルトラトレイル（山田昇杯としては24回目のトレイルンニング大会、参加者（3コース）：約2200名）への協力、支部会員の協力者2名。

＊9月28日（日）群馬岳連の「JCKP」への協力　谷川岳マチガ沢大滝登攀　参加ジュニア13名　支部会員の協力者1名。

＊平成27年3月14日（土）、15日（日）群馬岳連の「JCKP」への協力　谷川岳湯檜曽川スノーシュートレッキングの協力　ジュニア参加者8名　支部会員の協力者1名。

《広報・出版》

＊11月30日（日）支部報創刊　平成27年度から年2回発行を予定。

《その他》

＊8月26日（火）吉田恭一会員病気のため逝去。葬儀告別式は28日に挙行された。

＊平成27年2月28日（土）～3月24日（火）まで会員八木原圀明は映画「エヴェレスト　神々の山嶺（いただき）」のヒマラヤ登山撮影協力のためネパールへ。エヴェレスト街道をカラパタールまで。

（八木原　圀明）

■埼玉支部

埼玉支部は設立5年を経過し、公益社団法人としての支部活動の活性化を図るために委員会活動を重点的に活動してきた。社会貢献委員会の障がい者支援として障がい者とその家族とのふれあい登山活動を企画して埼玉支部会員が参加をした。今年スポーツ協会からその実績を評価され「功労賞」を受理した。山行・集会委員会は年4回の四季の山行毎月の埼玉100山の山行と創立5周年記念事業としてヒマラヤ山行を4月19日から5月11日にチュルー登山とトレッキングを実施した。3月12日本部理事会で当会110周年記念事業の一環として承認されている。

安全登山委員会は山行時の安全登山と事故対策としてハイキングレスキューを県岳連遭難対策　瀬籐委員長に山行中の事故において現場で対応する研修と実技を行った。講演会は埼玉県山岳救助隊飯田副隊長による事例報告等の講演で支部会員や多くの一般参加を得た。支部会員の講師による読図講習や事故時の対応としての心肺蘇生法とAED使用方法の講習を行った。

自然保護委員会は緑の森づくり、シカ害調査、埼玉の自然を知るためのシンポジウや大高取山自然観察会で越生町の教育委員

会の後援で町民も参加して実施できた。

《会議》

＊総会　4月12日（土）　平成26年度総会は現在会員１３６名中で出席者40名、委任状は64名で開催し、大久保支部長を議長に選出し、平成25年度事業報告及び収支決算報告、平成26年事業計画及び収支予算案および役員人事が承認された。

＊埼玉支部委員会　毎月開催　支部長・支部委員・会計・監査・事務局が出席して各委員会の事業報告や計画の立案と推進を行った。

《行事・講演会・講習会・シンポジウム・支部新年懇談会》

＊4月6日（日）　ふれあい登山を小川町の仙元山と里山歩きを実施。参加者は障がい者48名、家族45名、山岳関係者30名、スポーツ協会2名総計１２６名になった。

＊4月19日（土）から5月11日（日）　支部創立5周年事業としてネパール・チュルー最東峯登山隊に古川隊長以下9名とトレッキング隊5名の遠征を行った。

＊6月8日（日）　加須げんきプラザで埼玉県岳連盟　遭難対策委員長の瀬藤武氏を講師に「ハイキングレスキュー」を10名の参加で実施した。

＊9月28日（日）　自然保護委員が埼玉緑の博物館で関係団体と合同で下草刈りを実施した。

＊10月28日（火）　支部会員講師により読図机上講習14名参加。11月8日現地講習には7名が参加し、地図の基本と実施により読図の理解ができた。

＊11月30日（日）　越生町教育委員会後援の大高取山自然観察会は参加者40名で、地元町民10名と他の団体11名埼玉支部19名が参加した。

＊２０１５年1月15日（木）「第4回埼玉の自然を知ろう！シンポジウム」参加数20名。

＊1月17日（土）　新年支部懇談会を20名参加で関八州見晴台の登山後、飯能市の「暖らん」で20名の参加で開催し、年頭の挨拶と各委員会委員長による２０１５年度の事業計画について説明した。

＊1月24日（土）　第10回安全登山講習会「油断と過信が・その思いが命取り」埼玉県山岳救助隊飯田副隊長による事例報告。参加者は54名（会員28名　一般参加26名）。

＊2月21日　心肺蘇生法及びＡＥＤ使用法についての日赤渡邉講師による講習会を実施。

《山行・集会》

＊4月13日（日）　総会記念山行として武甲山に24名が登山。

＊6月7日（土）8日（日）　東京多摩支部・山梨支部・埼玉支部3支部の合同登山が山梨支部主催で開催され、講演と懇親で、8日には富士山の旧道を5合目まで登山。

＊7月5日（土）・6日（日）　四季の山行で平標山と巻機山に

15名が登山。

＊8月2日（土）・3日（日）　四季の夏山行は甲武信ヶ岳を中心に埼玉100山の6峰を11名が登山。

＊9月27日（土）　全国支部懇談会の記念登山コースの両神山白井差コースで下見登山。

＊11月1日（土）・2日（日）　四季の山　秋の谷川岳は悪天候で登山を断念して一ノ倉沢を見て六日町・気龍泊。2日は八海山を11名が昨年のリベンジを果した。

＊12月13日（土）　忘年山行は13日に秩父の二子山清掃に27名が登山後、名栗げんきプラザでネパール・チュルー最東峰の登山とトレッキング報告に35名参加。14日（日）は大持山の清掃登山に35名が登山。

＊2月14日（土）・15日（日）　四季の山行冬山は八ヶ岳東天狗岳に14名が登山。

＊全国支部懇談会　2014年10月18日（土）・19日（日）開催の全国支部懇談会は森会長をはじめ全国の24支部と首都圏会員199名が一堂に会し秩父市ナチュラルファームシティ農園ホテルで開催された。

《埼玉支部報の発行及びホームページ》

＊7月に埼玉支部報12号、10月に13号、2月に14号を発行した。

＊ホームページの山行・行事の情報の更新と支部委員会短信の掲載している。

（冨樫　信樹）

■――千葉支部

平成26年5月17日、千葉市において定例総会を開催し、平成25年度の事業報告及び決算報告、平成26年度の事業計画案及び予算案が提案通り承認された。今年度も会員・会友間の親睦を第一義とした各種山行や懇親会を実施した。公益目的事業活動としては昨年度完了した「房総半島分水嶺踏査」事業に引き続き、「房総半島郡界尾根踏査」事業を開始、児童養護施設の野外活動支援(引率登山)、各種講演会および自然観察会を実施した。年度末会員数は135名（含会友38名）。

主な活動は次の通りである。

《山行》

＊4月6日　木ノ根峠　参加16名。

＊5月24日～25日　大菩薩北尾根下降　参加4名。

＊6月21日　市川半日散策　参加9名。

＊7月5日～6日　上高地散策　参加13名。

＊7月12日　佐原「夏の大祭」散策　参加9名。

＊8月2日　鳴虫山　参加16名。

＊10月7日～12日　海外山行　玉山（台湾）参加12名。

＊11月8日　自然観察会・富山（千葉県）参加14名。

＊年11月15日～16日　荒船山　参加15名。
＊1月10日　新年山行・大坪山・東京湾観音　参加18名。
＊1月17日　手賀沼散策　参加14名。
＊3月1日　自然観察会　軍荼利山　参加16名。
＊3月7日～9日　高峰・黒斑山　参加8名。
《房総半島郡界尾根踏査事業（公益目的事業）》
＊11月29日　参加16名。
＊12月21日　参加6名。
＊1月24日　参加9名。
＊3月15日　参加9名。
《青少年野外活動支援（公益目的事業）　社会福祉法人「晴香園」児童引率登山》
＊9月20日　切込湖・刈込湖　参加17名（内 児童7名）。
＊2月21日　陣馬山　参加16名（内 児童6名）。
《懇談会等》
＊8月9日　ビールパーティー　会場：サッポロビール千葉ビール園（船橋市）　参加18名。
＊10月18日～19日　全国支部懇談会（埼玉支部主管）　会場：ナチュラルファームシティ農園ホテル（埼玉県秩父市）　参加10名。
＊2月7日～8日　四支部合同懇談会（千葉支部主催）　会場：ホテル「川端」（館山市）　参加37名。
《講演会》
＊5月17日　支部総会記念講演会「私のヒマラヤ」　講師：南井英弘会員　参加31名。
＊6月29日　シンポジウム「房総の山の魅力と富士山を語る集い」　会場：千葉県立中央博物館。
《刊行物》
＊『房総半島分水嶺踏査報告書』
＊「千葉支部だより」年4回（6、9、12、3月）発行、PDF版を支部HPにて公開。
《会議》
＊支部定例役員会　毎月第4火曜日に開催。
＊支部総会　5月17日。
《本部および他支部行事参加》
＊自然保護全国集会、全国支部懇談会、四支部合同懇談会、支部長会議、事務局担当者会議、年次晩餐会　等。
《その他》
千葉支部域を3つのエリアに分けてそれぞれサテライト懇親会を随時開催している。

（谷内　剛）

■東京多摩支部

今年度の新入会員は30名。設立時２０２名であった会員数はこの5年間で86名増え、２８８名となった。3年前に始めた登山教室が公益事業の大きな柱に育ってきた。今年度は立川市と共催の第3回初心者登山教室とその卒業生を対象とした第2期及び第3期初級登山教室を実施し、第2期修了生7名を送り出した。3名が即入会手続きをとった。昨年3月修了の第1期生からは10名が入会し、新入会員入会の教育機関となってきた。登山教室の継続にはリーダー育成が急務となり、本部の支部活性化事業委員会から支部事業補助を受け登山実習下見山行兼リーダー研修と合宿研修を実施し、登山教室教育指導マニュアル作成に至った。

平成27年2月に5周年を迎えるにあたり、5周年記念事業ＰＴで検討された多摩百山選定、記念誌発行、記念山行、記念晩餐会・講演会、奥多摩ＢＣ設置、記念品配布等の事業が推進された。今年度は記念晩餐会、記念講演会、記念山行、記念品配布の実施まで終了したが、来年度4月には奥多摩ＢＣが開設され東京多摩支部会員のみならず日本山岳会会員に利用供与する。記念誌も4月には発行され、多摩百山選定はガイドブック制作に入った。ガイドブック制作後、多摩地域住民を引率して多摩百山を登る一般公募登山計画もスタートする。

《会議》

＊5月11日（土）通常総会　25年度事業報告・収支決算案、26年度事業計画・予算案などを審議。出席１６８名（当日出席59名、委任状１０９名）。

＊幹事会　毎月第3火曜日開催　幹事・委員長が延べ１７９名出席。予算・決算・プロジェクト事業等の審議・活動報告　総務、財務、広報、ＩＴ、山行、集会、自然保護、安全の8つの委員会と登山教室、山の日制定、多摩百山、5周年記念誌発行、奥多摩ＢＣ開設の5つのプロジェクトチームが毎月委員会開催。

《山行・野外活動》

＊定例山行　7回実施　延べ99名参加。4月12日（土）杓子・鹿留山6名参加、5月31日（土）茅ヶ岳11名参加、7月12・13日（土・日）尾瀬・燧ヶ岳15名参加、9月23日（火）北奥千丈岳23名参加、10月4・5日（土・日）乗鞍岳・上高地22名参加、12月13日（土）本仁田山9名参加、2月14日（土）宝登山13名参加。

＊平日山行　毎月第3木曜日、8回実施　延べ70名参加。4月17日矢平山8名参加、7月17日尾白川渓谷6名参加、9月18日馬頭刈山9名参加、10月16日鹿倉山11名参加、11月20日高畑山・倉岳山11名参加、12月18日能岳10名参加、2月19日九鬼山10名参加、3月19日高松山5名参加。

＊4月6日（日）奥多摩山開き20名参加．
＊4月6日（日）新入会員交歓散策・栃寄り森の家27名参加。
＊4月22日（火）戸倉三山とノラボウ菜収穫10名参加。
＊5月21・22（水・木）雲取山石積み登山道整備8名参加。
＊6月1日（日）高尾山「山の日の集い」30名参加。
＊6月7・8日（土・日）三支部合同懇親山行「富士緑の休暇村」7名参加。
＊6月26・27日（木・金）三ツ峠アツモリソウ保護活動6名参加。
＊8月21日（木）御岳山レンゲショウマ観察会　一般29名、会員9名参加。
＊9月30日（火）国立四小高尾山観察ハイキング一般21名、会員5名参加。
＊11月19日（水）奥多摩川苔山清掃活動　9名参加。
＊1月7日（水）高尾山シモバシラ観察会　一般21名、会員12名参加。
《プロジェクト・地域振興活動》
＊4月～3月第2期初級登山教室　受講生14名。
＊4月～6月立川市と共催で初心者登山教室　受講生32名。
＊7月～3月第3期初級登山教室　受講生25名。
＊登山教室リーダー育成事業として登山実習下見兼リーダー育成研修（4回実施、延べ34名参加）と合宿研修（2回実施、延べ34名参加）を行った。
＊5周年記念事業として、多摩百山PT、記念誌PT、奥多摩BC設置PTが設置された。
《広報・出版活動》
＊支部報／4月、7月、10月、1月の4回発行。
＊7月平成26年度版アニュアルレポート発行。
＊ホームページ100回以上更新、メールマガジン60回配信。
＊メールマガジン配信者数は194名。
《講演会》
＊10月27日（月）「山岳遭難は誰にも起きる」羽根田治講師　一般89名、会員31名参加。
＊11月26日（水）安全啓蒙登山講演会　秋葉久夫講師　会員14名参加。
＊12月1日（月）「高尾の森に棲息する動物達」山崎勇講師　会員29名参加。
＊2月1日（日）5周年記念講演会「世界の山々を旅して」山野井泰史講師　一般341名、会員79名参加。
《その他の行事・懇親会》
＊8月29日（金）安全講習会「筋肉トレーニングとボディケア」21名参加。
＊9月30日（火）安全講習会「山行で使えるツボを教えます」28名参加。

＊1月12日（月）雪山登山机上講習会　27名参加。
＊1月24日（土）雪山実地講習会　21名参加。
＊2月1日（日）5周年記念晩餐会　ネパール大使夫妻を含め118名出席。
＊3月14日（土）5周年記念山行「大塚山鍋山行」41名参加。
＊スキー同好会　5回開催延べ39名参加。
＊沢登り同好会　12回開催延べ49名参加。
＊クライミング同好会　7回開催延べ17名参加。
＊4地区サテライト・サロン　延べ17回開催　254名参加。

（山本　憲一）

■越後支部

《前文》

公益社団法人への移行に伴い、昨年度の活動を反省し公益・共益事業の強化を念頭に改善を進めてきたが、大きな盛り上がりを感じており越後支部の活性化に向け動き出してきたと思っている。

公益事業について特筆すべきは、越後支部創設者で初代支部長である故藤島玄所有の「藤島蔵書」が関川村に寄贈されたが、それらの図書整理作業が6月から12月までに合計8回実施された。この8回の作業は、支部図書委員会（五十嵐力委員長）が主体となり延べ150名近いメンバーが手弁当・無報酬で協力していただいた。お陰さまで膨大な資料・蔵書が関川村旧川北小学校の書棚に整備することができ、藤島蔵書の今後の活用が大いに期待される。次に、高頭祭は過去最高の80名以上の参加者があり、年々盛り上がりを見せていると思う。今年度から事業委員会が主体となり開始した公募登山では、6月と9月に信越トレイル、10月銀の道と年3回実施して多数の一般参加者があり好評を博したが、今後も継続して行く体制を固めて行きたい。さらに今年度から6月第1日曜に行われる「海のウエストン祭」（糸魚川カタクリクラブ主催）は、新潟県の「山の日」記念行事として開催され、越後支部協力事業として多数の会員が参加して大いに盛り上げることができた。

共益事業について、「越後スノートレッキング同好会」が4月に数名で上越青田南葉山への山行を行った。「越後フォト・スケッチ同好会」は、11月に上越市などで県山岳協会と合同の写真展を開催した。5月の支部総会・記念講演・懇親会・親睦登山、12月の支部年次晩餐会・記念講演などにも多くの参加者が集うようになってきたと思う。

越後支部会員の減少や高齢化が進むため、将来への組織体制固めと基盤確立の対策として、会員勧誘強化運動を展開している。今年度は新入会員7名が加わりさらに入会申請中3名となっているが、物故会員3名と退会会員5名となってしまった。

今後も支部会員増加を継続強化して行くつもりである。そのために魅力ある越後支部の共益活動として、支部会員が参加して親睦できる山行計画を立案して行く方針である。

《会議》

＊4月13日（土）　平成25年度分支部会計監査
場所：長岡市ゲストハウス坂井邸　参加者：本間副支部長、森監事、遠藤（俊）監事、桐生事務局長。

＊5月24日（土）　11：00～13：00　第1回支部役員会　場　所：胎内市夏井1191-1　胎内アウレッツ館　出席者：22人
議案内容：平成25年度事業報告・会計報告、会計監査報告
平成26年度事業計画・予算計画等説明　14：00～16：00　平成26年度支部年次総会　場所：胎内市夏井1191-1　胎内アウレッツ館　出席者：55名　委任状135名　（有効議決率87％）議案内容：平成25年度事業報告・会計報告、平成26年度事業計画・予算計画が審議可決された。

＊6月29日（日）　第1回三役・委員長会議　長岡市ゲストハウス「坂井邸」出席者9人。

＊9月27日（土）　第2回三役・委員長会議　長岡市ゲストハウス「坂井邸」出席者8人。

＊10月11日（土）　臨時三役会議　長岡市ゲストハウス「坂井邸」出席者4人。

＊10月15日（水）　事業委員会　新潟市成海宅　出席者4名。

＊11月10日（月）　事業委員会　新潟市成海宅　出席者4名。

＊11月23日（日）　総務委員会　新潟市東映ホテル　出席者5人。

＊12月10日（水）　事業委員会　新潟市成海宅　出席者4名。

＊12月13日（土）　第2回役員会　新潟市東映ホテル　出席者21人。

＊2月22日（日）　第3回三役・委員長会議　長岡市ゲストハウス「坂井邸」出席者10人。

《山行・野外活動》

＊5月17日（土）～18日（日）　中部ブロック4支部交流会（静岡支部主催、伊豆天城山で開催）に参加。　支部参加者13名。

＊5月25日（日）　支部親睦登山　櫛形山脈白鳥山（298m）～鳥坂山（438・5m）～ユズリハノ峰（385m）を実施。支部参加者41名　（会報「山」№818に報告掲載）。

＊6月1日（日）　山の日制定記念事業として、海のウエストン祭（糸魚川市親不知）での協力を行う。支部参加者約20名。その後、坂田峠より白鳥山（1287m）へ故小野健氏追悼登山に。越後支部参加者15名。

＊6月8日（日）　第1回公募登山として、信越トレイル（関田峠～伏野峠）の踏査を行った。参加者17名。9：40関田峠出発し、16：30伏野峠到着した。

＊7月25日（金）　第57回高頭祭を開催した。参加者は過去最

高の80名で、来賓として日本山岳会森武昭会長・高原三平常務理事をお迎えした。また、日本山岳協会神﨑忠男会長（日本山岳会評議員）も昨年に引き続き主宰されている「軽登山靴倶楽部」のメンバー20数名とともに参加していただいた。14：30より寿像前で玉櫛奉奠等の神事を行った後、弥彦山頂奥之院までの登山道ゴミ拾いを実施した。17：00より新潟県登山祭に参加し、18：30に山頂からの松明登山祭に参加し、弥彦駅までの市中行進を行ない20：45に終了した。（会報「山」№.832に報告掲載）

＊9月7日（日）　第2回公募登山として、信越トレイル（伏野峠～天水山）の踏査を行なった。参加者15名。10：00伏野峠を出　発し、16：30天水山登山口に到着した。

＊10月5日（日）　第3回公募登山として、銀の道（銀山平～駒の湯）の踏査を行なった。参加者28名。9：00銀山平石抱橋を出発し、14：00駒の湯に到着した。

《プロジェクト・地域振興活動》

＊5月25日（日）　櫛形山脈鳥坂山（438・5m）の清掃登山　支部参加者41名。

＊6月1日（日）　山の日制定記念事業として、海のウエストン祭（糸魚川市親不知）への協力。坂田峠より白鳥山（1287m）へ故小野健氏追悼登山。越後支部参加者15名。

＊6月8日（日）　信越トレイル（関田峠～伏野峠）清掃登山　支部参加者10名。

＊6月12日（木）　藤島蔵書整理作業打ち合わせ会（関川村）。

＊6月15日（日）　新潟県山岳協会岩登り講習会（新発田市杉滝岩）支部より講師派遣。

＊6月24日（火）　第1回藤島蔵書整理作業実施（関川村）　参加者15名（越後支部5名）。

＊7月10日（木）　第2回藤島蔵書整理作業実施（関川村）　参加者22名（越後支部10名）。

＊7月17日（木）　第3回藤島蔵書整理作業実施（関川村）　参加者20名（越後支部10名）。

＊7月25日（金）　弥彦山（634m）の清掃登山　支部参加者80名。

＊8月28日（木）　第4回藤島蔵書整理作業実施（関川村）　参加者13名（越後支部8名）。

＊9月5日（日）　信越トレイル（伏野峠～天水山）清掃登山　支部参加者10名。

＊10月2日（木）　第5回藤島蔵書整理作業実施（関川村）　参加者20名（越後支部12名）。

＊10月5日（日）　銀の道（石滝橋～駒の湯）清掃登山　支部参加者15名。

＊10月23日（木）　第6回藤島蔵書整理作業実施（関川村）　参加者13名（越後支部9名）。

＊11月13日（木）　第7回藤島蔵書整理作業実施（関川村）　参加者21名（越後支部10名）。
＊12月1日（月）　第8回藤島蔵書整理作業実施及び慰労会（関川村）参加者20名（越後支部8名）。
＊11月22日・23日（日）　日本山岳会自然保護全国集会（広島市）に越後支部より七澤恭四郎支部自然保護委員長と吉田理一支部自然保護副委員長が参加。
＊2月22日（土）～23日（日）　新潟県山岳協会冬山講習会（新発田俎倉山）支部より講師派遣。
＊3月21日（土）　新潟県山岳協会安全登山講習会（五泉市・白山）越後支部より講師を派遣。

《広報・出版活動》

＊5月24日　越後支部報（第10号）発行。
＊9月24日　越後支部報（第11号）発行。
＊2月1日　越後支部報（第12号）発行。

《その他の行事、懇親会》

＊4月19日（土）　新潟県山岳協会評議委員会及び懇親会出席（長岡市）　参加者：目崎県山協委員長、他越後支部関係者20名。
＊5月17日（土）～18日（日）　中部ブロック四支部交流会（静岡支部主催）伊豆天城山で実施。越後支部より13名参加した。
＊5月24日（土）　①講演会：五十嵐力氏（越後支部役員）から「飯豊・櫛形山脈の見どころ」と題して、過去の貴重な夏山および冬山記録映像をＤＶＤにまとめた登山記録を紹介していただいた。また櫛形山脈は総延長13㎞日本一短い山脈であることから、総延長７０００ｍの世界一長いヒマラヤ山脈のエベレスト街道トレッキングの映像をも紹介していただいた。参む加者55名。②支部懇談会（胎内アウレッツ館）　参加者44名。
＊6月21日（土）　本部総会に橋本支部長出席。
＊7月25日（金）　15：00～15：30　高頭祭記念講演会（弥彦山大平園地）森武昭日本山岳会会長より、「祝日山の日の制定と今後の活動」と題し講演していただいた。参加者80名（支部参加者60名）。
＊7月25日（金）　17：30～18：00　新潟県登山祭記念講演（弥彦山頂）神崎忠男日本山岳協会会長より、「地球の3極（北極、南極、エベレスト）」と題し講演していただいた。参加者１００名（支部参加者50名）。
＊9月20（土）・21日（日）　全国支部合同会議に橋本支部長と桐生事務局長が参加。
＊12月6日（土）　全国支部長会議に橋本支部長出席。同日の本部年次晩餐会に越後支部より16名参加した。永年会員として越後支部より3名（河村勝、平田大六、山口寿證）が発表された。

＊12月13日（土）　①記念講演会（新潟市東映ホテル）櫻井昭吉支部会員より「尾瀬について」と玉木大二朗支部会員より「本年度の新潟県山岳遭難の発生状況と遭難事例」と題し記念講演を行った。参加者支部会員79名と一般10名。
②支部年次晩餐会（新潟市東映ホテル）　渡辺欣次支部会員の瑞宝双光章受章、七澤恭四郎支部会員の藍綬褒章受章、櫻井昭吉支部会員の環境大臣賞受賞のお祝いを兼ねて盛大に行われた。　参加者79名（会報「山」№８３７に報告掲載）。

（桐生　恒治）

■富山支部

平成26年度は、昨年の支部創立65周年の記念事業も終わり、年間の行事も通常のものとなった。公益事業として実施している恒例の「播隆祭」も第29回を数えるに至った。播隆上人生誕の地である富山県旧大山町河内村は、何年も前にすでに廃村となった地である。「河内」とは山間地において河川の両側に展開する細長い平らな地のことを言う。中部山岳国立公園の「上高地」もかつては、「神河内」。播隆上人は18歳まで、この地に生を受けて育ったが、その後修行へと旅立ち再び故郷へ帰ることはなかったという。この播隆上人の遺徳を忍び昭和58年5月に富山支部が生家跡地に顕頌碑を建立、以後毎年播隆祭を行っている。

9月27～28日にかけて、富山支部、石川支部、福井支部、岐阜支部京都・志賀支部合同の懇親山行が、富山支部の主催で南砺市五箇山の人形山において開催された。

今年は、『新版日本三百名山登山ガイド』（山と渓谷社）の刊行と並行して富山県山岳連盟が選定した『富山の百山』の刊行も同時進行で進められて、北日本新聞社から8月に発刊された。どちらも支部会員が一部の原稿執筆を担当した。北日本新聞社から8月に発刊された。どちらも支部会員が一部の原稿執筆を担当した。『富山の百山』は県内でも大きな反響を呼び、山への関心の高まりに寄与している。富山支部主催の第6回山岳講演会では「『越中の百山』から『富山の百山』へ」と題して山田支部長から選定理由の解説や発刊までの経緯等について講演を行った。今後の支部活動の更なる活性化へ繋げていく契機とする方向で進めている。

《会議》

＊4月19日（土）　支部総会　事業報告及び収支決算報告、事業計画及び予算案、役員案を承認。記念講演「20年越のリベンジ・キリマンジャロ」本郷会員。富山電気ビル　出席者22名。
＊1月20日（火）　親睦会総会、新年会　立山国際ホテル　出席者14名。
＊役員会　8回開催（5月、6月、8月、9月、10月、12月、

1月、2月）。

《山行・野外活動》

＊9月27日（土）～28日（日）　五支部合同懇親山行　富山支部担当　五箇山荘、人形山　47名参加。

＊10月18日（土）～19日（日）　全国支部懇談会　埼玉支部担当　武甲山　4名参加。

＊10月26日（日）　例会山行　追悼登山　中山　参加者12名。

＊1月21日（水）　例会山行　大品山、瀬戸蔵山　参加者10名。

＊2月28日（土）～3月1日（日）　五支部合同スキー山行　福井支部担当　白峰温泉の里御前荘　参加者10名（護摩堂山は中止）。

《プロジェクト・地域振興活動》

＊5月31日（土）　高頭山登山道整備　（公益）　参加者11名。

＊6月8日（日）　第29回播隆祭　（公益）　式典参加者40名　記念登山（高頭山）　参加者　10名。

《広報・出版活動》

＊6月23日　「富山支部会報」第96号。

＊10月29日　「富山支部会報」第97号。

＊3月5日　「富山支部会報」第98号。

＊2月24日（火）　第6回山岳講演会　「越中の百山」から「富山の百山」へ　講師　富山支部長　山田信明　とやま市民交流館　88名参加。

《その他の行事、懇親会》

＊8月11日（月）　例会　講話「東北の山について」　山田支部長（早池峰山・姫神山）　渋谷副支部長（岩手山・くらかけ山・森吉山）　とやま市民交流館　懇親会参加　20名。

＊12月12日（金）　例会　講話「モンゴル紀行」鍛冶会員　とやま市民交流館　懇親会　参加17名。

（河合　義則）

■石川支部

平成26年度石川支部の会員数は前年度より2名減の42名でこのうち、女性会員は3名である。平均年齢も68歳と年々アップし若手会員の入会勧奨が急務であるが、女性会員も少ないことから、これらの増強が喫緊の課題となっている。平成26年度の主な事業は、長年の懸案事項であった支部ホームページの立ち上げが、樽矢導章会員の尽力により漸く開設の運びとなったことは喜ばしい限りである。

また平成22年に、廃道を登山道として復旧し、新たにネーミングした「浅犀みくまりの道」については、その魅力を一層高めたいとの強い意志により西嶋錬太郎会員が中心となって周回コースを伐採・整備し、完成させたことも大きな成果である。その他、新日本山岳誌改訂に伴う一連の作業では、現地調査や

情報提供等、それぞれの会員の熱意と協力により、改版原稿を予定どおり作成・提出できたことも特筆すべき成果である。

《会議》

＊4月19日（土）支部定期総会　参加者41名（出席20名　委任状21名）　前年度の事業及び会計報告と今年度事業（案）が審議され原案通り承認。その後部屋を移し宿泊懇親会を実施し更なるコミュニケーションの充実を図った。

＊9月17日（水）第1回役員会議（議題）支部ＨＰ立ち上げ　浅犀みくまりの道周回道開設　次回5支部懇親山行候補地他　参加11名。

＊12月16日（火）第二回役員会議（議題）平成27年度支部事業計画　改訂新日本山岳誌　他。

《山行・野外活動》

＊4月12日（土）春山山行　富山１００名山　細蔵山　参加5名　劔岳池ノ谷を真向かいに拝し、その迫力に酔う。

＊7月19日（土）～21日（月）夏山登山　笠ケ岳～双六岳～奥丸山　参加4名　ロングコースを全員で踏破し満喫。

＊7月26日（土）～27日（日）上高地山岳研究所　十石山、徳本峠、岳沢　参加21名　例年体力に応じたコースを用意。

＊10月3日（金）～4日（土）紅葉山行　涸沢～奥穂～岳沢　参加4名　時季少雨で涸沢の紅葉が今一つで残念。

＊3月14日（土）カンジキ山行　奥医王山　参加3名　春山の雪尾根を縦横無尽に闊歩。

＊3月22日（日）福寿草の山　藤原岳　参加7名　雪解けの山肌を彩る福寿草とセツブンソウは春の天使。

《プロジェクト・地域振興活動》

＊4月27日（日）不惑新道整備　富士写ケ岳～火燈山　参加11名。

＊5月24日（土）浅犀みくまりの道整備　奥高尾山～順尾山　参加15名。

＊5月31日（土）安全登山教室　ロープワーク　確保術　参加12名。

＊6月7日（土）杉峠道整備　三ッ谷～杉峠　参加14名。

＊6月15日（土）石川県安全登山の集い　高倉山　参加7名。

＊6月29日（日）清掃登山　医王山　参加10名。

＊9月6日（土）～7日（日）白山大汝避難小屋清掃登山　参加5名。

＊11月9日（土）自然観察会　石動山　参加11名。

〈広報・出版活動〉

＊支部報「峰」を季刊発行（6月、9月、12月、3月）。

《その他の行事》

＊5月3日（土）～5日（月）ＮＨＫＴＶ「幻の百名山笈ケ岳」取材協力　中川支部長　八十嶋会員（ＮＨＫ金沢カメラマン）。

＊11月29日（土）～30日（日）　山祭り（支部忘年会）参加16名。

（前川　陽）

■福井支部

《会議》

＊4月13日（日）通常総会　泰澄の杜にて、平成25年度事業報告決算報告および監査報告が承認され、26年度事業計画案・予算案が提案され承認された。出席者54名（当日出席25名・委任状29名）。

＊3月14日（土）役員会　参加8名。27年度の事業計画や活動等の意見交換を行った。

《野外活動》

＊5月6日（火・祭）越知山木の実谷コース登山道整備。越知山は泰澄大師が最初に修行された山。主に使われた登山道は「行者コース」と呼ばれ修験者用だったが明治期までは一般の人は通ることが出来なかった。そのため「木の実コース」が造られた。コースは、四～五合目の間で「行者コース」と合流する。昔の人が親しんだ道を復活したが、傾斜がきついため、階段（50段）ロープ（50ｍ）を取付ける作業をした。参加8名・オブザーバー8名。

＊5月25日（日）泰澄祭・泰澄ウォーク

泰澄ウォークの折、出来たての「木の実コース」（中級コース）を下山に使った。参加9名・一般参加１００余名。

＊6月8日（日）六所山祠上げ

泰澄大師の修行の場所の一つ、六所山山頂の聖観音像が野ざらしになっていたため、元丹生郡森林組合の代表の方が観音堂を用意し、日本山岳会、泰澄塾と県内の登山愛好者や一般の人からも協力者を募り（60余名）重さ６００kg（高さ約２ｍ20㎝・幅１ｍ70㎝・奥行き約２ｍ）の祠を林道終点から人力で搬送・設置し、聖観音像を安置・供養した。

《里山づくり》

＊4月・5月・6月・7月・9月・10月・11月各月の1日　現地で作業をした。

《支部山行》

＊4月13日（日）六所山（総会前山行）。

＊5月18日（日）白山釈迦岳　参加6名。

＊6月15日（日）経ヶ岳　参加10名。

＊6月28日（土）三ノ峰　参加9名・オブザーバー5名。

＊7月5日（土）～6日（日）燕岳　参加6名。

＊8月3日（日）白山　参加4名。

＊8月23日（土）～24日（日）甲斐甲駒ヶ岳　参加9名。

＊9月6日（土）～7日（日）双六岳～笠ヶ岳　参加4名。

＊9月27日（日）大門山・奈良岳　参加10名。

＊9月27日（土）～28日（日）まんなか5支部合同山行（富山支部主管）人形山　11名参加。
＊10月18日（日）～19日（土）全国支部懇談会（千埼玉支部主管）参加9名。
＊10月26日（日）横山岳　参加8名。
＊12月6日（土）～7日（日）本部晩餐会・鉄砲木ノ頭・高指山参加7名。
＊12月14日（日）～15日（月）日野山・支部晩餐会　参加23名。
＊1月18日（日）西方ヶ岳　参加11名・オブザーバー2名。
＊2月11日（水）武奈ヶ岳　参加8名。
＊2月22日（日）護摩堂山　参加10名。
＊2月28日（土）～3月1日　参加16名（福井支部主管）。
＊6支部合同冬山行、富山・石川・岐阜・京都滋賀・関西支部より参加総数49名。
＊3月15日（日）銀杏峰　参加8名。
《支部報出版活動》
＊2月にNo.28を発行。

（船田　洋子）

■山梨支部

公益事業のうち登山振興事業として、第33回深田祭、第10回山の博覧会、第55回木暮祭、機関誌『甲斐山岳』第7号発行、山岳環境保全事業として山岳レインジャー活動を行なった。共益事業として、支部山行、第4回中部ブロック（越後・信濃・山梨・静岡支部）交流会、第3回3支部（東京多摩・埼玉・山梨支部）交流登山、『山梨二百山』出版準備などを実施した。なお、入会者は6名、物故者が1名であった。今後とも新規会員募集に尽力して支部活動の活性化を図っていきたい。
《会議》
＊4月～3月　毎月1回第2水曜日委員会のほか役員会1回開催　甲府市・田原屋。
＊4月13日（日）定時総会　事業報告・決算、役員改選（新任支部長　深沢健三、同副支部長　北原孝浩）事業計画・予算ほか承認　出席60名（当日出席30名、委任状30名）。
《山行・野外活動》
＊4月13日（日）定例支部山行　身延町・醍醐山　参加12名。
＊5月17日（土）～18日（日）第4回中部ブロック交流会（静岡支部担当）天城山万三郎岳・遠笠山　参加15名。
＊6月7日（土）～8日（日）第3回3支部交流登山（山梨支部担当）富士北麓、吉田口登山道・青木ヶ原樹海　参加山梨支部17名。
＊6月～9月　山梨県山岳レインジャー活動5回延べ8日間大蔵高丸、黒岳、甲斐駒ヶ岳・仙丈ヶ岳、北岳、鳳凰三山　参

加延べ11名。
＊12月19日（日）定例支部山行　甲府市・茶道峠　参加10名。
＊2月8日（日）定例支部山行　甲州市・大鹿峠　参加10名。
《プロジェクト・地域振興活動》
＊4月20日（日）第33回深田祭　韮崎市・茅ヶ岳および深田記念公園　参加全200名　故深田久弥氏の遺徳を偲ぶ。
＊7月5日（土）第10回山の博覧会・ファイナル特集　甲府市・山梨学院メモリアルホール　参加460名（一般430名、会員30名）山の日関連プロジェクトとして作曲家船村徹氏ほかの講演会を実施した。
＊10月19日（日）、20日（月）第55回木暮祭　北杜市・金山平参加50名（一般30名、会員20名）当会第3代会長木暮理太郎氏の遺徳を偲ぶ。木暮理太郎の生地群馬県太田市から「木暮理太郎翁の足跡を語り継ぐ会」服部佳郎会長をはじめ会員が駆けつけてくれた。20日は記念登山を北杜市・横尾山で実施し、8名参加した。
《広報・出版活動》
＊3月31日（火）機関誌「甲斐山岳」第7号150部発行。
《その他行事、懇親会》
＊9月15日（祝日）小宮山稔会員が山梨県体育功労賞受賞。
＊5月　遠山若枝会員「水彩画展」（甲府・ハーパーズミル。）
＊9月　鈴木勝彦会員「全日本山岳写真展」（池袋・東京芸術劇場）。
＊9月　北原孝浩会員「アルパインフォトクラブ写真展」（四谷・ポートレートギャラリー）。
＊1月　遠山若枝会員・保坂照行会員「ブータンの風景と花写真と絵画展示会」（甲府・エルク）。
＊4月13日（日）懇親会　甲府市・甲府駅ビル　参加30名。
＊12月19日（金）忘年会　甲府市・田原屋　参加17名。
＊1月22日（水）新年会　甲府市・古名屋ホテル　参加29名。

（古屋　寿隆）

■信濃支部

1947（昭和22）年6月、戦時下の混乱を避けて取り外されていたウェストン碑が再び上高地・梓川畔に架けられたのを機に始まった上高地ウエストン祭も、本年で68回を迎えた。一般参加者150名を数える徳本峠越記念山行を安全に行うための島々谷の登山道整備をはじめ、多くの準備作業が支部会員の尽力と松本市をはじめとする関係団体の協力を得て行なわれ、無事開催することができた。また、記念講演では、我が国を代表するクライマーのひとり花谷泰広氏に、多くの聴衆を前に山に挑む心の高揚を語って頂いた。

全国的な傾向と同様、高齢化が顕著で、活性化という大課題

があるが、役員会ではこの問題について熱心な論議が交わされ、具体策を次年度計画に反映させるよう方向付けがされた。また、新しい発想や企画と共に、従来からの活動基盤である支部山行を充実させる必要もある。本年は支部として年間12回の山行を計画したが、天候等により7回の実施となり参加者も低調で課題を残した。しかし、例年続けてきた海外山行はベトナム、ファンシーバン（3128m）で実施することができ、全員無事登頂した。新・転入会員として6名を迎え入れたが、物故・退会を差し引く純増は2名に終わった。

《主な会議》

＊4月26日（土）　役員会　松本市内。

＊4月26日（土）　通常総会　松本市内。

事業並びに収支の報告と新年度計画の承認と役員の改選。

本人出席34名　委任状出席73名　計107名。

＊10月24日（金）役員会　松本市内

支部活性化、会員増強対策、全国支部合同会議の内容等。

＊1月18日（日）　役員会　松本東急イン

各委員会報告、当面の行事、費用支出の報告。

《主管行事》

＊5月31日（土）　ウェストン祭記念山行　島々谷より徳本峠越。

＊6月1日（日）　第68回ウェストン祭　上高地ウエストン広場。安曇小学校児童の合唱など。記念講演・花谷泰広氏。支部会員32名。

本部9名、東海11名、四国5名、千葉3名、北九州10名。

《その他参加行事》

＊5月17日（日）～18日（月）　中部ブロック4支部交流会（静岡支部主催）伊豆天城山　7名参加。

＊11月29日（土）～30日（日）　岳都松本・山岳フォーラム　松本市民芸術館。シンポジウム、各種展示、コンサート、安全登山セミナーなど。

《支部懇親等》

＊1月18日（日）　支部新年会　松本東急イン　出席者39名。

《広報・出版》

＊12月　信濃支部報第61号発行。

《支部山行》

＊5月31日（日）　徳本峠越（ウエストン祭）一般含め約150名。

＊7月26日（土）～27日（日）　針ノ木岳～七倉岳　3名。

＊10月9日（日）　経ケ岳　2名。

＊11月8日（日）　四阿山　2名。

＊2月1日（日）～8日（日）　ベトナム、ファンシーバン　6名。

＊2月14日（土）～15日（日）　スキー　乗鞍高原スキー　9名。

＊3月14日（土）～15日（日）　北八ヶ岳　2名。

（米倉　逸生）

■岐阜支部

「山情報交換会」が開催されてから次年度の山行希望が増え、要望の全てを事業に反映された。増えすぎて参加者が集まらず中止になったり、雨に祟られ延期されて次の計画と重なったりして沢山の山行が中止となった。27年度は絞り込んだ計画で進めている。以下は26年度の主な活動報告である。

《会議》

＊4月12日（土）定時総会　事業報告・計画、決算・予算など原案どおり満場一致で可決。その後懇親会を実施。出席34名。

＊5月～2015年3月　毎月第2木曜日に役員会を11回開催。支部役員14名ほどが集まり、支部運営や事業について協議。

《公益事業》

＊山岳講演会11月14日（金）「山小屋から見た日本のエネルギー問題＋「山の日」」（日本山岳会会長　森　武昭）聴講者86名。

＊権現の森林づくり4月6日（日）～11月23日（日）　14回　参加　101名。植樹（ミズナラ・ブナ）300本、植栽地の下刈・地栫え・整備、登山道・遊歩道整備、マイマイガの毛虫駆除、道具小屋の整備をおこなった。

＊写真展12月1日（月）～28日（日）岐阜市長良　喫茶パウゼ。1月7日（水）～31日（土）山県市大桑　香り会館　作品29点出展者　13名。

《共益事業》

＊月例山行

4月13日（日）春期懇親山行／堂塚山　参加24名。
5月25日（日）今西錦司記念登山／鍋尻山　参加10名。
6月8日（日）例会／高木山・富士山　参加10名。
7月13日（日）白山禅定道探索／中州宿　参加10名。
9月14日（日）行きたくない山／壁上　参加4名。
11月16日（日）例会／オゾウゾ山　参加5名。
12月14日（日）例会／御殿山・平木山　参加13名。
1月18日（日）例会／菩提山・明神山　参加17名。

＊講習会

5月11日（日）初級岩登り／御在所岳　参加6名。
11月2日（日）岩登り／金華山岩戸公園　参加10名。

＊自然観察会

7月4日（土）～6日（日）自然観察と地図の読み方／金草岳・冠山　参加12名。
10月18日（土）～19日（日）自然観察と地図の読み方／徳山富

士　参加9名。

＊医学調査

8月22日（金）～23日（土）北アルプス／樅沢岳　参加6名。

＊雪山山行

1月25日（日）例会／赤樽山　参加10名。

2月15日（日）例会／高倉山　参加5名。

3月21日（土）～21日（日）冬期山行／美濃俣丸・笹ヶ峰　参加　4名。

＊他支部主管山行

9月27日（土）～28日（日）五支部合同懇親山行／人形山　参加8名。

10月18日（土）～19日（日）全国支部懇談会／両神山・武甲山　参加13名。

2月28日（土）～3月1日（日）五支部スキー山行／護摩堂山　参加5名。

＊懇親会

12月12日（金）理事会・忘年会　参加　15名。

1月24日（土）新春懇談会　岐阜キャスルイン　参加　24名。

《会報》

9月30日（火）「岐阜山岳　第76号」発行。

3月31日（火）「岐阜山岳　第77号」発行。

（今峰　正利）

■静岡支部

2014年はいくつかイレギュラー、飛び入りのこともあった（リニア中央新幹線に関すること、山のグレーディングに関することなど）が、会員山行や定例会等は例年並みであった。定例会の出席者は多少増加している。

この年度の大きなことは、中部4支部ブロック集会を静岡支部で担当し1日目の5月17日、伊東市内のホテルで講演会と懇親会を行い2日目の18日には天城山と遠笠山コースに分かれて登山を行ったことである。越後支部13名、信濃支部9名、山梨支部15名と静岡支部から33名の参加であった。両日とも好天に恵まれ申し分なかった。

《会議》

4月9日通常総会、40名出席。会議後、懇親会を31名で行なった。

＊定例会、5月14日　28名、6月11日　20名、7月9日　18名、9月10日　21名、10月8日　20名、12月10日　21名、27年2月11日　22名、3月11日　20名。9月、2月、3月には会議の後会員講話の場を設けた。照内豊、青島秀夫の永年会員と若い西川卯一会員が講話を行なった。

＊リニア中央新幹線が南アルプスの自然に与える与える影響についての会議を山岳4団体で行い静岡県知事、静岡市長に申

し入れなどを行なった。

＊山のグレーディングについての会議を県の主催で山岳4団体の関係者が県庁に集まり3度行い大筋の合意を得た。近々に発表されることとなった。

《山行》

会員山行は4四分ブロック集会の5月の天城山、遠笠山の他、11月8日に南アルプス、奥大井県立自然公園の山犬ノ段の町営小屋泊まり、9日に登山を行った。高塚山までの予定であったが雨予報で蕎麦粒山までとした。16名が参加した。12月21日安倍奥の込岳～二王山の周回コースで行った。10名が参加した。27年1月31日、2月1日に安倍奥・山伏登山を行なった。1日目に山頂まで一部が登り、一部は避難小屋へ直行し全員が市営山伏小屋へ泊まった。大いに寒かった。翌日全員で山頂へ登って下山した。6名が参加した。2月14日菅平スキーを楽しみ、15日に根子岳スキー登山の予定であったが天候不良のため富士見パノラマスキー場へ移動して入笠山スキー登山を行った。5名が参加した。

＊公益事業のハイキングセミナーを3回行った。

第1回目を4月19日、南ア・寸又峡温泉「光（テカり）山荘」泊まりで読図などの座学を行った。20日、実技で沢口山登山を行った。1日目は会員含め7名の参加、2日目は当日参加も認めたので会員含め17名の参加となった。第2回目は実技のみで、6月8日に安倍奥・八紘嶺で行った。18名と会員講師7名で行った。第3回も実技のみで、10月26日に安倍奥・大谷嶺で行った。29名と会員講師6名で行った。26年は宿泊座学、第2・第3回はマイクロバスの利用など計費が多くかかった。幸い天候にも恵まれ事故もなく、成功した。

《会報》

6月に会報「不盡」75号、12月に76号を発行した。

《懇親行事》

8月13日に、夏の懇親会を静岡駅南のホテル・センチュリー静岡「パティオ」で行い18名が参加した。1月11日、新年会を新静岡駅南のホテル・シィティオ静岡で開催した。47名の参加があった。

《その他》

公益事業として親子登山のコースを3本選定し、調査、執筆等を行なった。

110周年記念事業の『日本三百名山』には10名が14コースを調査執筆して協力した。同じく110周年記念事業の「改訂新日本山岳誌」の原稿見直しには19名が協力した。また、8月25日には「中華民国山岳協会訪問団歓迎会」にも代表が参加した。これは、同年2月の「富士山・玉山友好山提携調印」を受けてのものであった。窓口は静岡・山梨で構成する「富士山協会」である。

（有元　利通）

■東海支部

東海支部は平成26年度に支部設立53周年を迎えたが、50周年の平成23年度前後からいろいろな改革が進められており、支部の活性化も一層図られつつある。折しも日本山岳会も平成24年4月1日から公益社団法人として再出発しており、支部全体も新たな気持ちで、若い世代の活躍、ボランティア活動や登山教室の充実など積極的な活動を続ける中で、新しい流れへの対応なども進められた。

《会議》

＊支部通常総会

5月17日（土）平成26年度東海支部通常総会が東海支部に隣接する高砂殿で開催された。委任状を含めた178名の出席を得て開催された。総会終了後第12次インドヒマラヤ登山隊の壮行会が開かれた。

＊常務委員会

毎月第4水曜日に支部長、副支部長、各委員長が参加して開催され、支部運営の基本事項について審議が行われた。

＊各委員会

支部活動の基本的組織である委員会が毎月開催され活発な意見交換が行われた。

《山行・野外活動》

＊東海支部第12次インドヒマラヤ登山隊の派遣

隊員3名からなる登山隊は6090m無名峰に7月4日午前8時30分に全員登頂を果たし、ピアクシー峰と命名した。

＊登山教室の充実

登山教室は従来から中日新聞、朝日新聞、NHKの各文化センターに設置され、誰でも入会できる講座を設け、講師を派遣していた。このような中で、若い人の山への関心の高まりに伴い、従来からの山ガール講座を山ボーイも加えた講座に変更し活動している。

＊東海YOUTHの活躍

山ガール講座の発足にともない、その卒業生の受け皿、さらに東海学生山岳連盟の活発な活動に伴い、若手の育成を組織的に行う必要があるとの観点から「東海YOUTH」が活動している。入会資格は、向上心のある40歳未満の登山初心者で、男女を問わず、東海支部が関係する登山教室で一定期間受講した者、もしくは登山教室委員会で承認された者、としている。在籍期間は2年間とした。

＊支部友会の改革

東海支部独自の制度である支部友会は登山教室の卒業生の受け皿として発足して20年以上が経過した。組織活性化の一環として、在籍期間を3年間として、その間に日本山岳会に入会するか、自らの責任で活動するかの選択をすることとし

た。現在、組織変更に伴う諸問題への対応を進めている。

＊ボランティア活動

従来から障がい者支援登山を行ってきたが、各支部との情報交換・連携を深めるため、全国ボランティア登山情報交換会を11月8日（土）・9日（日）に東海支部で開催し、本部、埼玉支部、京都・滋賀支部、東海支部から22名が参加した。

＊ゴザフェス２０１４の開催

東海学生連盟主催による第5回御在所フェスティバルが9月25日（土）、26日に御在所山で開かれ東海地区6校に加え、東京理科大からの参加も得て33名の若き岳人が集まった。

＊同好会の活躍

同好会とは、東海支部会員が同好の士と本支部の事業目的に沿った多様な活動を通じて有意義なクラブライフを享受しようする集りで現在8組織があり、活発に活動している。

＊猿投の森づくりの会

猿投の森づくりは継続的に進めているが、猿投の森の隣接地、約1万５０００㎡の山林の寄贈を受けることができた（「ＪＡＣ猿投の森」と命名）。この森の林床に十分陽が入るように整備して、ヤマザクラを始めとする落葉樹の種類を増やし、それらに依存する昆虫や動物が生息する多様性のある森づくりを目指す。この活動は、猿投の森づくりの会と名古屋大須ロータリークラブの協働プロジェクトとして展開している。

《プロジェクト・地域振興活動》

＊第2回夏山フェスタの開催

6月7日（土）・8日（日）に名古屋ウインクあいち5階、8階にて開催された。主催者である中部経済新聞社より東海支部に協力依頼の要請があり、それに応えて全面的に支援した。24の山小屋をはじめ、登山用品メーカー、自治体など多数の出展者を得て開催され、2日間で６６５０名の参加を得た。

（佐野　忠則）

■京都・滋賀支部

京都・滋賀支部では、２０１４年度も例会山行をはじめ、多彩な活動を行った。

当年度からの新たな取組みとして、公益社団法人としての公益的観点から野外活動の楽しみを啓発するため、「親子登山教室」を開始した。

なお、前年度から引き続き、自治体主催の「トレッキング講座」の講師を受託し、安全登山の普及に当たった。

この他にも、支部活動活性化対策として勧誘チラシを作成し、友の会会員を含めた若手会員の入会促進に取り組んだ。

当支部は2016年3月に設立30周年を迎えることから、8月に記念事業推進のプロジェクトチームを設置し、準備に当たっている。

《会議》

＊4月19日（土）通常総会（於）鴨沂会館（出席者34名）議事終了後講演会（小谷紘平会員　演題「積雪期知床縦走」）、懇親会を実施した。

＊毎月第1水曜日に定例役員会を実施したほか、8月27日には臨時役員会（30周年記念事業協議）を開催した。

＊「今西錦司レリーフを守る会」「今西錦司賞選考委員会」「機関紙編集委員会」「自然保護部会」等を適宜開催した。

《山行・野外活動》

＊「定例山行」を、春の自然観察会を皮切りにクライミング講習、夏山、沢登り、秋山、スケッチ、初詣、歴史探訪、スキー等例年どおり多彩な内容で実施した（15回　参加者延べ133名）。

＊「平日例会山行」を、湖北の高時、余呉両河川源流の山域を主体に実施した（9回　参加者延べ54名）。

＊「山歩会山行」を、京都北山を主体に実施した（8回　参加者延べ77名）。

＊「海外山行」を、11月22日（土）～29日（土）にベトナムの最高峰ファンシーパン登山として実施した（参加者6名）。

《講演会・顕彰行事》

＊山水会講演会　10月15日（水）　上西勝也会員　演題「伊能忠敬は愛宕山に登ったか」。

＊山水会講演会　11月19日（水）　奥宮清人会員　演題「高所適応の民族史」。

《プロジェクト・地域振興活動》

＊「親子登山教室」を5月と11月に開催した（参加者延べ49名。8月と2月は、天候不良で中止）。

＊京丹後市教育委員会主催の「トレッキング講座」において講師を務めた（2月～3月　座学3回現地講習1回　参加者延べ49名）。

＊比良八雲が原、美山のベニバナヤマシャクヤク等の保全活動を適宜行った。

《その他行事・懇親会》

＊11月　「森の勉強会」（関西・東海・京都滋賀支部合同　参加者3名）。

＊1月　支部新年会（参加者57名）。

＊2月　五支部スキー山行（参加者9名）。

《広報》

＊機関紙「支部だより」№115～118号を発行した。

（福田　文夫）

■関西支部

平成27年、関西支部は設立80周年を迎える。26年度は80周年記念式典の成功をめざし、『日本山岳会関西支部八十年史』・『近畿分水嶺踏査』の発行準備、「関西支部県境縦走」、「80周年記念海外登山」などの事業計画を推進した。

公益目的を対象とする事業では「登山教室（初級・中級・上級）」を実施し、延べ36回154名が参加した講習会を行った。山の日関連事業の「わんぱく探検」は6月1日に開催、22名の参加があった。自然保護事業においては「本山寺山森林づくりの会」が活動主体となり、自然環境の維持、回復を目指した活動を積極的に推進している。「東お多福山草原復元活動」では草原保全再生研究と現地での作業を重ね、着実に成果を上げている。

共益活動として、山行委員会は難易度の高い「4000山グランプリ」、健康登山をモットーとする「ゆるやか山行」を企画・実施した。図書委員会は著者と語る会の講演会、蔵書を読む会などの文化的活動に力を入れた。支部報編集委員会においては支部報に加えて『阿部和行前支部長追悼号（№157号）』を発行したほか、『八十年史』『近畿分水嶺踏査』の編集に携わった。

《会議》

＊4月23日（水）通常総会　ホテルグリーンプラザ大阪・アネックス（当日参加者45名）。事業報告・事業計画・決算報告・予算などの原案を満場一致で可決。終了後懇親会実施。

＊委員会　5月、7月、5月、11月、12月、1月、2月、3月の8回実施し、延べ162名が出席。

＊総務委員会　6月、8月、10月、12月に開催。拡大総務委員会12月。

＊山行委員会　6月に開催。

＊支部報編集委員会　5月、8月、10月、11月、2月に開催。

＊八十年史編集会議　4月、5月2回、6月、8月、9月、10月2回、1月に開催。

＊近畿分水嶺踏査報告書編集会議　随時開催。

＊80周年記念行事PJ　4月、5月、10月開催。

＊80周年記念海外登山PJ　6月、7月、8月、10月、11月、1月、2月4回、3月開催。

＊募金委員会　1月、2月、3月開催。

《山行》

＊関西支部県境縦走　3月に日本海側久美浜から縦走を開始し、約200kmを踏査して京都・大阪・兵庫の府県境を通過した。毎月の開催で、延べ日数24日、延べ参加人員214名（会友20名・会員外16名）。

＊4000山グランプリ（テント山行）　延べ日数24日、延べ158名（会友2名・会員外20名）。

＊ゆるやか山行（里山探訪＝歴史と文化を訪ねる）10回実施延べ参加人数222名（会友61名・会員外18名）。

＊山の日関連行事「わんぱく探検」6月1日（日）むろ池園地　22名（子供10名、親9名、サポート3名）。

＊海外登山　5月13日(火)～18日(日)　ロンボク島　リンジャニ山（3725m）9名（会友1名、会員外3名）。

＊沢登り　8月30日（土）四国　吉野川源流　名野川　5名（四国支部3名）。

＊レスキュー講座　座学1月13日（火）16名、岩場研修1月17日（土）蓬莱峡　15名（会友2名、会員外5名）。

《安全登山啓発》

＊登山教室　初級　座学3回・実技9回（六甲山系）実施、延べ65名。

中級　座学3回・実技9回（六甲山系の沢歩き）実施、延べ49名。

上級　座学3回・実技9回（岩登りの初歩＝蓬莱峡・百丈岩・不動岩、沢登りの初歩＝金剛山　妙見谷・京都北山　毘沙門谷・武田尾　西ノ谷、積雪期＝比良蓬莱山2回・比良堂満岳1ルンゼ）で実施、延べ40名。

《プロジェクト》

＊本山寺山の森林づくり

1月26日（日）京都大阪森林管理事務所、2月10日（月）箕面森林事務所と打ち合わせを行い、「社会貢献の森」における森林整備などの活動に関する協定更希望を申請、近畿中国森林管理局長と締結更新（平成27年4月1日～平成32年3月31日）がなった。

4月1日（日）森林・山村多面的機能発揮交付金申請。4月15日（日）「本山寺山森林づくりの会」総会　参加10名。12月21日（日）納山会　参加11名。

森林整備　活動日12日　延べ　114名、人工林　林床整備　活動日　5日　延べ37名、森林観察会・植生調査　活動日3日　延べ25名、天然林除伐　活動日2日　延べ18名、物置設置　活動日4日　延べ27名。

＊東お多福山草原復元活動　東お多福山草原保全・再生研究会（8団体の協働活動）。4月～11月までの5回植生調査と整備作業を実施。延べ11名。

＊観察会ほか

6月2日（月）森林観察会　本山寺山の森　11名。6月9日（月）～12日（木）春の上高地自然観察会　13名。12月13日（土）森林観察会　本山寺山の森　13名。6月2日（月）大台ケ原周回歩道補修現地検討会　大台ケ原　1名。8月24日（日）大台ケ原自然再生10周年シンポジウム　奈良教育大学1名。2月19日（水）大台ケ原利用に関する協議会　川上村役場　1名。6月25日(水)富士山ガイダンス　梅田センター

ビル　1名。1月12日（月）本山寺自然環境保全地域を考える協議会　本山寺可笑院　4名。11月8日（土）～9日（日）第18回森の勉強会（京都・滋賀、東海、関西　各支部自然保護委員会共催）6名。11月22日（土）全国自然保護集会　広島　1名。11月23日（日）山岳平和祭　国際自然フォーラム　1名。

《講演会、懇親会その他の行事》

＊8月27日（水）夏期懇談会「南極とヒマラヤで学んだこと」講師＝横山宏太郎会員（№8626　岐阜支部）ホテルグリーンプラザ大阪・アネックス　53名（会員外6名）。

＊9月28日（日）第25回藤木祭　芦屋・高座の滝前（大阪府、兵庫県山岳連盟共催）150名。

＊11月15日（土）著者と語る会「沢登りの地平線-日本の谷から世界の谷へ」講師＝成瀬陽一氏（海綿充血隊・海外遡行同人会員）　大阪府立中央図書館　25名（会員外2名）。

＊1月28日（水）梅田大東洋　47名（会員外3名）。

＊水曜会　6月、7月、8月、9月、10月、11月、12月、1月、2月、3月開催。

＊スケッチ同好会　9月、11月、3月開催

《広報》

＊支部報発行　155号（6月）、156号（9月）157号「阿部和行前支部長追悼号」（11月）、158号（12月）159号（3月）発行。

＊ホームページ「四国分水嶺踏査報告」、「四国分水嶺踏査報告2」、「近畿分水嶺踏査報告」、「続近畿分水嶺踏査報告」、「関西支部県境縦走踏査報告」、「関西支部県境縦走踏査報告2」を掲載。

（重廣　恒夫）

■山陰支部

秀峰大山を中心に中国山地の自然豊かな環境に恵まれた中で、山登りに親しんでいる私たちは、国民の祝日【山の日】を記念して、第1回米子集会を全国に先駆けて開催した。この集会には、鳥取県知事や中四国地方環境事務所さんを来賓に、入場者約280人の参加を得て盛大に開催。この模様をビデオ制作家の協力を得て、収録した記録を中海テレビで放映していただき、沢山の人にアピールできた。また地元紙の日本海新聞や山陰中央信報等で報道され、支部の活動を広く紹介できた。

本部事業との連携では、本部からの要請で、2014年の「親子で楽しむ山登り」の制作依頼を受けて、島根県の山　三瓶山と、岡山県の山　蒜山を本部に報告した。

また、支部交流事業として、広島支部、四国部、当支部の3支部で交流会を実施。初年度は四国支部が担当で、四国の三嶺（1

８９３ｍ）の山行を行った。

来年度は、当支部が担当して平成27年10月下旬頃に伯耆大山を中心に親交登山を実施し、夜の交流会には、山陰を代表する紅ズアイ蟹を準備するなどの計画している。２０２０年に支部創立70周年を迎えることから、記念事業として島根県東部の出雲地方と鳥取県西部地方の山々を古事記に絡めて踏査し、『雲伯の山々（仮題）』の発刊を企画している。対象となる山を月例山行に組み込み、現在出雲地方では三郡山、琴引山、比婆山、鼻高山を、伯耆地方では船通山、船上山、高霊山などの登山を行なっている。会の活性化と合わせ実施している。

《会議》

＊月例会の開催　米子市公会堂会議室で第４週の土曜日に開催。

＊４月26日（土）　通常総会　米子市文化ホール　出席者25名。平成25年度事業報告　会計監査報告、平成26年度事業計画、創立70周年記念事業プロジェクトチーム編成、平成26年度予算を審議、執行部提案を満場一致で承認。会場を『魚鮮水産』に移し盛大に懇親会を開催した。

＊12月14日（土）　山陰支部年次晩餐会　米子ワシントンホテル　出席者22名。

《山行・野外活動》

＊５月５日（月）～18日（日）県外遠征　北海道　利尻山遠征４名参加。

＊５月24日（土）～26日（月）山陰支部・広島支部・四国支部交流会。四国支部主催で三嶺（１８９３ｍ）交流登山　５名参加。

＊６月20日（金）月例山行　考麗山（７５１ｍ）　４名参加。

＊９月11日（木）月例山行　比婆山（１２６４ｍ）　３名参加。

＊10月27日（金）月例山行　鼻高山（５３６ｍ）　４名参加。

《プロジェクト地域振興活動》

＊８月８日（金）国民の祝日「山の日」を記念して、第１回米子集会開催。

＊２月11日（水）「大山冬山パトロール」冬山安全登山指導、公益事業　参加者　４名。

＊３月14日（土）～15日（日）「大山冬山パトロール」冬山安全登山指導、公益事業　参加者４名。

（中井　俊一）

■　広　島　支　部

８月20日の広島土砂災害など相つぐ異常気象で支部例会山行や他支部間交流会が中止となった。11月アジア山岳連盟創立20周年総会「広島山岳平和祭」が開かれた。国内外から４２０名の来訪者を迎え支部も全面的に支援した。残念なことは名越實

会員の逝去。広島山岳会の例会山行中、横尾尾根で遭難、半年後に遺体発見。会員数は、期首１６４名、入会19名、退会６名、期末１７７名。支部友会員・会友を含む期末総数は２１６名。

《会議》

＊通常総会　４月５日（土）ホテルＪＡＬシティ広島事案は組織変更、役員人事など。出席１３６名（当日出席66名、委任状70名）。

＊役員会　６月12日（木）１月22日（木）３月12日（木）。拡大役員会10月23日（木）。いずれも支部ルーム。

＊総務本部役員会12回　総務委員会１回　支部ルーム。

＊名誉役員会議　11月12日（水）名誉役員４名出席　支部ルーム。

＊新入会員オリエンテーション　５月15日（月）新入会員17名出席。支部ルーム。

＊規程類改正　自動車同乗者の燃料代金等の利用者負担について。

＊支部ルームの活用状況　４月～２月（11ヵ月間）４７１件（42・８件／月）２２２８名（２０３名／月）。前年度19・８名→今年度20・７名（＋５％）。例会、ミーティング、役員会・委員会、山楽サロンなど。

《山行・野外活動》

＊第１山行委員会例会山行　13回　延べ参加者３３２名。主に県内。県外では和気アルプス、西穂高岳、奥穂高岳。

＊第２山行委員会例会山行　12回　延べ参加者２００名。立山、槍・穂高岳、黒部源流、朝日岳、蝶ヶ岳、八ヶ岳。

＊広島支部アルパインチーム（ＨＡＴ）　年間28回　延べ参加者２０５名。

＊支部友委員会例会山行　年４回　延べ参加者63名。古道・街道巡り２回　延べ参加者45名。

＊第２回小島烏水祭（四国支部主管）４月13日（日）　広島支部３名。

＊第１回山陰・広島・四国支部交流会　５月24日（土）～26日（月）徳島県三嶺　広島支部参加者22名　総勢46名。

＊第30回全国支部懇談会（埼玉支部主管）10月18日（土）19日（日）　広島支部参加者６名。記念登山・両神山。

＊年次晩餐会　12月６日（土）京王プラザ　参加者広島支部５名。

《プロジェクト・地域振興活動》

＊11年目の中国新聞文化センター登山講座〔公益事業〕講師派遣（広島・呉・福山・岩国の４地区５教室で「里山ハイキング」「初級登山講座」「中級登山講座」計９クラスを運営）。受講者延べ１０９２名、派遣講師延べ２１６名。

＊八幡高原・霧ヶ谷湿原再生化事業」４月20日（日）広島支部23名。

＊第13回ひろしま「山の日」県民の集い〔公益事業〕「八幡高原・霧ヶ谷湿原再生化事業」　5月31日（土）広島支部参加者22名。同日シンポジウム・広島支部参加者3名。6月1日　初心者のための登山教室（安芸太田、北広島、東広島会場）広島支部参加者10名。

＊西中国山地・高岳&聖山山頂整備〔公益事業〕「聖山山頂」11月29日（土）広島支部6名。「高岳山頂」同日広島支部18名。

＊アジア山岳連盟総会11月22日（土）～26日（水）広島県山岳連盟主管。参加者　海外15ヵ国70名、国内350名、合計420名。JAC自然保護全国集会　11月22日（土）広島支部参加者18名。広島山岳平和祭　同参加者39名。

＊ジュニア・ユースの育成〔公益事業〕①ジュニアクラブ（小学生）2回　参加者21名。②中・高クラブ（中高生）5回サポート。③学生クラブ（大学生）9回　19名。④ユースクラブ（成人39才以下）36回。安全登山講習会受講　9月・1月計10名。雪崩研修会実施　2月11日（水）10名。赤十字救急法講習会3月14日（土）40名参加。

《広報・文化活動》

＊広島支部報「JAC Hiroshima」　4／1、7／1、10／1、1／1号（通算54号）の発行。

＊山楽（さんがく）サロンの開催　⑪6月25日（水）佐藤高晴「南極大陸の自然と観測活動」19名参加⑫9月18日（木）国枝忠幹「漫画家手塚治虫を語る」17名参加⑬11月27日（木）川端広大准教授「東広島天文台見学」28名⑭3月5日（木）本井伝義則「ルマン24時間耐久レースへの挑戦」28名参加。

《その他の行事・懇親会》

＊忘年会　11月29日（土）斎山荘　参加者15名。

＊新年会　1月4日（土）宮島大元公園　参加者36名。

（国枝　忠幹）

■ 四国支部

全国の会員有志、一般からの寄付金で香川県高松市峰山公園に建立した「小島烏水」顕彰碑前で開催した「小島烏水祭」は、平成26度からは本部主催、四国支部主管となった。4月13日に開いた第2回小島烏水祭には、小島烏水の子孫の方々7人も参加された。式典後は支部会員と地元山岳会の有志が協力して、参加者に「讃岐うどん」を振る舞った。

初心者向け登山教室は3年目になり、開催場所を徳島県から香川県に移した。活発に行われたため、新たな会員獲得に繋がった。26年度は12人の新入会員を得て支部会員数は71人となり、支部発足時の2倍を超えた。

また近隣の関西支部との登山のほか、新たに山陰支部、広島支部との交流会を始めるなど登山や行事を通じて一層交流が深

まった。

《会議》

＊5月17日（土）　通常総会　徳島市「四国支部ルーム」　25年度の事業、決算報告、26年度の事業、予算計画を審議。　会員総数のうち、出席者45人、委任状21人。

＊毎月1回　会員有志の情報交換会　支部ルーム　延べ参加105人。

《山行、野外活動》

＊5月18日（日）　雲早山～高丸山（徳島県）　参加10人。

＊5月25日（日）　三嶺（徳島県）　山陰支部、広島支部との三支部交流登山　参加46人。

＊6月8日（日）　鷹ノ巣山（愛媛県）　参加12人。

＊7月12日（土）、13日（日）　塩塚峰、中津山、丸笹山、赤帽子山（徳島県）　関西支部と合同　参加13人。

＊9月13日（土）、14日（日）　高縄山、楢原山、近見山、国見山（愛媛県、徳島県）　関西支部と合同　参加13人。

＊11月8日（土）、9日（日）　明神山、太竜寺山（徳島県）　関西支部と合同　参加18人。

＊12月13日（日）　笠形山（香川県）　参加5人。

＊1月18日（日）　白山（香川県、干支の山）　参加8人。

＊2月7日（土）、8日（日）　一ノ森～剣山～次郎笈（徳島県）　参加11人。

＊3月14日（日）　千本山（高知県）　参加者4人

《広報・出版活動》

＊3月1日（日）　四国支部報「四国山岳二号」発行。

《プロジェクト・地域振興活動》

＊4月13日（日）　第2回小島烏水祭　高松市峰山公園　小島烏水顕彰碑前で記念式典、森武昭会長講演会。終了後、同公園内で「讃岐うどん」の接待。参加者110人。

＊毎月1回（6月～2月）　初心者対象の登山教室　救急対応、読図、ロープワーク、雪山の野外講習を実施。参加者延べ142人。

＊9月14日（土）～15日（日）　子ども登山学校　徳島県ボーイスカウト連盟との共催行事。14日は菅生ロッジでキャンプ、15日は剣山登山。参加者36人。

《その他の行事・懇親会》

＊4月12日（土）　小島烏水祭前夜祭　高松市「花樹海」　参加者103人。翌日希望者のみ三嶺登山　参加者7人。

＊5月17日（土）　通常総会後、支部ルームで懇親会。

＊5月24日（土）～25日（日）　菅生ロッジで山陰支部、広島支部との三支部交流会　参加者46人。

＊7月19日（土）～20日（日）本部ユースクラブとの共催で石鎚山登山、滑床渓谷雪輪沢の沢登り　参加者11人。

（小林　京子）

■福岡支部

《会議》

「平成26年度（２０１４年度）通常総会」を２０１４年５月25日（日）に福岡市中央区の「中央市民センター」にて開催した。出席32名、委任状30名、計62名。中馬菫人支部長挨拶につづき、平成25度事業報告、平成25年度会計報告、役員改選、平成26年度事業計画、平成26年度会計予算等が審議され承認された。

新役員については以下のとおりで承認された。支部長：中馬菫人（６２２２）、副支部長：高木荘輔（１２９２０）、委員（総務）：渡部秀樹（９８２６）、（会計）：副島勝人（８１２５）、佐々木耕二（１１９９４）、（支部報）：辻和毅（７６９８）、倉知清司（７１３０）、（自然保護）：山本博（１２３１２）、井上晋（１２５４０）、（事業）：酒匂輝昌（１０７９７）、淀川雅之（１２９８９）、監事：浦一美（９５０６）、中嶋正一（９９４９）、顧問：深田泰三（８１３６）、事務局：渡部秀樹。

総会後、記念講演として松尾良彦氏「九州登山史　九州の〈山と人〉の記録」を開催した。懇親会は会場を赤坂の「みくに」に移して開催され31名が出席した。

役員会は例年通り各月第２火曜日に開催した。

《プロジェクト・地域振興活動》

「パハルフェスタ･ｉｎ坊がつる」４月26日（土）～27日（日）、大分県九重山法華院温泉山荘にて開催。主催：パハルフェスタ実行委員会、後援：日本山岳会福岡支部、東九州支部、他。参加者：50名。福岡支部は登山講座講師派遣と自然観察会等をボランティアで担当した。

「岳人のつどい・山の映画会」２月１日（日）に太宰府市太宰府館まほろばホールで開催。映画「盲目のクライマー」上映と渡部秀樹氏がヒマラヤ・トレッキング・スライドとトークを行なった。参加者約１３０名。また同会場にて懇親会を開催した（参加者45名）。

自然観察登山「イズモコバイモ観察と出雲の里山歴史紀行」３月23日（月）～25日（水）に開催。17名が参加し福岡支部が講師役として案内した。

《山行・野外活動》

５月18日（日）四王寺清掃登山（９名参加）。６月１日（日）～２日（日）花のくじゅう、指山・平治岳（10名参加）。７月29日（火）～８月１日（金）南アルプス北岳と白峰三山（13名参加）。９月30日（火）～10月４日（土）北アルプス涸沢・穂高岳（12名参加）。12月12日（日）忘年登山・高良山（32名参加）。１月４日（日）新年登山・油山（25名参加）。

《広報・出版活動》

支部報№28を３月15日（日）に発行した。

主な内容：１．「支部長２期目の取組みについて（中馬菫人）」、

2．地域に根ざした山への想い「筑紫丘高校山岳部60年の歩み（中嶋正一）」、「山への想い（加藤昌隆）」、「里山の自然保護に想う（松隈茂）」、3．福岡支部の山行活動「中国四川省四姑娘山群遠征記２０１０年～２０１４年（米澤弘夫）」、「中国チベット・カンリガルポ山群再訪２０１４年（渡部秀樹）」、「ネパール・親子道中記（中馬董人）」、「北岳とキタダケソウ（小野サツキ）」、「秋の北アルプス山行・涸沢から奥穂高岳をたずねて（高木荘輔）」、「自然観察会・万福山と由布岳登山（副島勝人）」、4．支部活動・事務局報告（高木荘輔・淀川雅之・渡部秀樹）。

（渡部　秀樹）

■　北九州支部

本年度は5月より当支部の園川顧問（日本体育協会公認の山岳マスター上級コーチ）の指導により、当支部独自の山岳指導員養成講座を立ち上げた。

本年度は第1期生となった8名の受講者を対象に諸試験、研修の結果、各個人の山岳指導員としてのランク（B級、C級）が判定されたので、平成27年4月19日の支部総会で支部長より指導員認定書を交付する予定だ。

また、来年度は第2期生を募集し、引き続き山岳指導員を養成していく方針。

《会議等》

＊4月26日（土）第15回通常総会を小倉リーセントホテルで開催。出席者35人、委任状提出者22人計57人にて会員総数74人に対し過半数に達しており、この総会は成立。

伊藤支部長が議長に選出され、平成25年度の事業報告、収支決算、監査報告が承認され引き続き平成26年度の役員退任と補充役員の選任（案）、事業計画（案）、収支予算（案）、支部規約改正（案）が審議され、承認可決された。

なお、総会に先立ち、偉大なマラソンランナーである君原健二氏により「ゴール無限」のテーマで記念講演が行われた。

《役員会》

＊臨時役員会：4月2日（水）

＊定例役員会：5月7日（水）、7月2日（水）、9月3日（水）、＊11月5日（水）1月7日（水）、3月4日（水）

《行事・野外活動》

＊4月6日（日）英彦山清掃活動、参加19人、回収のゴミはトイレ建設業者が搬送。

＊5月13日（火）・20日（木）さいわい幼稚園児約50人の風師山ハイキングのサポート。

＊5月25日（日）第49回英彦山山開き、参加21人。

＊5月30日（金）～6月3日（火）ウェストン祭及び焼岳、参加9人。

＊6月10日（火）～12日（木）久住山～大船山　北海道支部との交流会（北海道支部5人、北九州支部6人）。
＊8月11日（月）風師山～矢筈山「山の日」記念登山　参加一般12人、北九州支部会員12人、計24人。
＊10月18日（土）～19日（日）第30回全国支部懇談会が埼玉支部主管で開催、出席5人。
＊10月20日（月）アフター山行　谷川岳　参加5人。
＊11月2日（日）～3日（月）宮崎ウェストン祭及び比叡山、参加13人。
＊11月22日（土）～23日（日）自然保護全国集会が広島で開催、参加2人。
＊12月13日（土）プレ山行　竜王山　参加19人。
＊12月13日（土）「年忘れの集い」（下関シーモールパレス）参加35人。
＊3月17日（火）さいわい幼稚園のデイキャンプサポート、参加6人。

《支部山行》

＊4月12日（土）～13日（日）皿倉山　安全登山講習会　参加21人。
＊4月29日（火）冠山～寂地山　参加27人。
＊5月11日（日）皿倉山　安全登山講習会　参加16人。
＊5月18日（日）平尾台　唐手岩（岩登り教室）参加16人。
＊5月21日（日）皿倉山　安全登山講習会　参加16人。
＊6月8日（日）犬が岳　参加8人。
＊6月14日（土）内住峡　沢登り　参加7人。
＊7月19日（土）～20日（日）久住山～稲星山～鳴子山　参加13人。
＊7月29日（火）井原山　参加11人。
＊9月7日（土）大日岳～釈迦ケ岳　参加15人。
＊9月27日（火）平尾台（唐手岩）（岩登り教室）参加11人。
＊10月19日（日）陶ケ岳（岩登り教室）参加10人。
＊11月6日（木）城井ノ上城跡　参加16人。
＊11月16日（日）孔大寺山～湯川山　参加7人。
＊12月2日（火）宝満山～三郡山　参加9人。
＊12月21日（日）北浦スカイライン縦走　参加16人。
＊1月11日（日）英彦山冬山訓練　参加7人。
＊1月11日（日）～12日（月）伯耆大山　参加4人。
＊1月18日（日）足立山～戸ノ上山縦走　参加16人。
＊2月7日（土）～10日（日）八ヶ岳　参加4人。
＊2月19日（木）～20日（金）九重スキー場　参加7人。
＊2月22日（日）皿倉山　指導員研修会　参加6人。
＊3月21日（土）～22日（日）皿倉山～採銅所縦走　参加11人。

《広報・出版活動》

＊4月10日「JAC北九だより」No.68

＊7月9日「JAC北九だより」No.69
＊10月8日「JAC北九だより」No.70
＊1月19日「JAC北九だより」No.71

《同好会活動》

①習会

2月19日（木）～20日（金）　九重スキー場　参加7人

＊版画教室

伊藤支部長の指導を仰ぎ、生徒5人がルームにて8月より月3回のペースで。今年度は20回実施した。

《その他行事》

小倉サロン（毎月第4水曜日）月例山行のビデオ（伊藤支部長撮影）の観賞および、ロープワークの講習等で11回開催。

博多サロン（3ケ月毎第1木曜日）情報交換で4回開催。

（伊藤　久次郎）

■熊本支部

日本山岳会110周年になり、その歴史の深さに感銘を受けるものだが、熊本支部も半世紀遅れで創設され、平成29年度には60周年を迎える。当時の支部創設に係った諸先輩は、ほとんどが亡くなり、昔の想い出を聞く機会が無くなってしまった。支部では10年ごとの節目には、記念事業や式典などを実施してきたが、中でも「県境の山」踏査は5年がかりの大仕事であった。その後JACの中央分水嶺踏査など手がけている。平成29年度には創立6周年を迎えることになり、その記念事業の計画と実施を考えて支部の活動は、会員の増強と活性化に重みを置き、活動しているが、この5年間ほど登山教室や登山研修会を実施し、支部の仲間の協力を得ながら活動を展開している。

26年度は役員の改選があり、支部長、事務局が交代し、新たなスタッフで支部事業を運営することになった。この数年月1回毎の支部事業に加え、九州5支部の交流集会、宮崎支部との交流登山など支部会員の参加を促してきているが、なかなか全員の参加とはならない悩みがある。会員40数名の弱小支部では、これが限界なのか役員会では良案が出ない状況である。

そんな中、支部の年間行事は担当役員が、計画から実施までリーダーシップを発揮し、支部の活動としては立派な成果を挙げている。特に6年前から実施している一般を対象にした「登山教室」はくじゅう連山・泉水山の縦走登山には26名の参加があり、好天に恵まれイワカガミやマイズルソウなどの山野草を十分に堪能し、参加者からは感謝された。また6月にはオオヤマレンゲの鑑賞登山を実施、これも参加者が多く、楽しく登山を終了した。7月にはこれも3年前から実施した「勤労青少年登山教室」は熊本市の協力を得ながら「座学」と「実技」を実施、これは若い人たちの登山への誘いを念頭に、初めて登山を

したい若者を対象とした事業で、若い登山愛好家の啓蒙を目指している。26年度は30数名の受講者があり、座学は「山のリスクとマネージメント」と題して講義を実施。実技は阿蘇外輪山「鞍岳」（1118m）への登山を実施講評を得た。3年ほど前から実施している「登山研修会」は支部会員の技術向上とリーダー養成を目的として夏の沢登りと冬の雪山研修を実施しているが、今年度は台風のため、沢登りが中止となった。冬の研修は、九州脊梁山脈の向坂山でのスノーシュー訓練を主に研修を行った。初めての参加者もいたが、好天に恵まれたこともあり好評であった。　また今年度は地域山岳会「秋津山の会」から指導を依頼され、役員が2名づつ参加し、帯同登山を実施。内容は講師という立場でアドバイスをしたり、技術の講習を行った

昨年から「森づくり」の一環として熊本市の「水資源の森づくりボランティ活動」に参加し、枝打ちや下草狩り、植樹に述べ32名が参加した。その他、自然保護委員会の事業として年に2回、森林保全巡視登山を実施している。今年は阿蘇高岳の清掃登山と目丸山の清掃登山を実施したが、阿蘇中岳の火山活動で活動範囲が狭くなった。

支部活性化の一環として会員の入会を誘っているが、年間の入会者は2～3名にとどまり、今後、課題として、会員獲得の方策を練り直さなければならないと考えている。以下年間の実施事業を掲載する。

＊4月20日　平成26年度支部総会　29名（共益事業）。
＊4月26日　第14回森林保全巡視（清掃）登山「目丸山」　12名（公益事業）。
＊5月12日　第12回登山教室「泉水・黒岩山」（一般募集）　22名（公益事業）。
＊6月8日　山野草を見る会「猟師岳」　32名（公益事業）。
＊7月6日　第1回熊本市森づくりボランティア育成事業　8名（公益事業）。
＊7月12日　第2回勤労青少年登山教室（座学）　26名（公益事業）。
＊7月27日　第2回勤労青少年登山教室（実技）鞍岳　20名（公益事業）。
＊7月31日　JAC主管「親子登山」HP作成実地調査（飯田山・長崎郡山）　5名（共益事業）。
＊8月24日　第3回SOアスリート登山教室　地蔵峠～冠岳　32名（公益事業）。
＊8月30日　夏期例会（ビールパーティー）　23名（共益事業）。
＊9月7日　第2回熊本市森づくりボランティア育成事業　7名（公益事業）。
＊9月4日　第13回登山教室南外輪山清水峠～駒返し　25名

（公益事業）。
＊9月28日～29日　第7回脊梁山脈トレイルラン　12名（共益事業）。
＊10月4日　第14回森林保全巡視登山　高岳　8名（公益事業）。
＊11月1日～2日　第28回宮崎ウエストン祭　比叡山　7名（共益事業）。
＊11月17日　第3回熊本市森づくりボランティア育成事業　5名（公益事業）。
＊12月14日　海外登山報告会（宇都宮）　8名（公益事業）。
＊12月6日～23日　山の写真展　約500名（公益事業）。
＊1月17日　新年晩餐会　29名（共益事業）。
＊1月27日　全国事務局長会議　2名（共益事業）。
＊1月31日～1日　第12回登山研修会（冬山初級編）小川岳・向坂山　13名（公益事業）。
＊2月14日～15日　宮崎との交流登山　1泊2日　10名（共益事業）。
＊2月21日　NPO法人「アスリート熊本」より「感謝状」贈呈　2名（公益事業）。
＊2月28日　第4回熊本市森づくりボランティア育成事業　13名（公益事業）。
＊支部報発刊　32号・33号・34号（共益事業）。
＊毎月第2火曜日　熊本支部役員会「熊本市東公民館」　毎月第3水曜日　13回。

《その他》
＊平成27年度会計監査
＊日本山岳会主管「親子登山」HP原稿編さん（郡岳・飯田山）5名（公益事業）。
＊9月11日　秋津山の会帯同登山（講師）霧島「矢岳」（公益事業）。
＊9月11日　秋津山の会第1回登山講習会（講師）報告（公益事業）。
第1回講習会　テーピングの基本、三角布の基本（公益事業）。
＊9月29日　秋津山の会「新百姓山」帯同登山（公益事業）。
＊3月19日　秋津山の会　第2回講習会「セルフレスキュー」（公益事業）。

（松本　莞爾）

■東九州支部

公益事業は3年目を迎える一般初心者を対象とした座学四回講座・実践講座2回講座で構成する「登山入門教室」の開講をはじめ、13回目を数える、小中学校生から一般初心者までを対象とした「青少年体験登山大会」の実施など、地域での登山普

及に力をおく活動を重視した。また、山の環境保護活動としてスズタケ枯死とシカの食害の実態調査や清掃登山などを取り組んだ。共益事業では会員の山行活動基点に位置づける月例山行や合宿山行・研修山行、忘年山行と忘年会など、会員相互の交流と親睦とを中心にした登山活動を展開した。また、岳人交流として10年目、交流登山を開始して9回目のる韓国山岳会蔚山支部との相互訪問交流登山は、今年度は当方が日本に迎え入れて実施の番で、祖母山で実施し、初日の登山は実地できたが2日目はあいにく台風19号の九州上陸により中止となったものの、互いに親睦と交流を深めた。

《会議》

4月13日（土）定期総会　大分市「コンパルホール」で開催。会員・会友75名出席（うち委任状34名）。平成25年度事業報告、平成25年度会計決算報告、監査報告、平成26年度事業計画、平成26年度会計予算等を承認・決定。

5月14日（水）第1回役員会（コンパルホール）26年度事業の具体的実施ほか。

6月25日（水）第2回役員会（コンパルホール）登山入門教室の実施計画ほか。

8月9日（水）第3回役員会（コンパルホール）青少年体験登山大会ほか。

9月24日（水）第4回役員会（コンパルホール）韓国蔚山支部との交流登山ほか。

11月19日（水）第5回役員会（コンパルホール）登山入門教室実践講座ほか。

1月9日（金）第6回役員会（コンパルホール）平成27年度事業計画ほか。

3月5日（木）第7回役員会（コンパルホール）定期総会の議案審議ほか。

《公益事業》

＊13回青少年登山大会…9月23日（火）牧ノ戸峠から久住山64参加。

＊登山入門教室…一般対象受講者34名、座学…4回8講座（8月27（水）、9月10（水）、9月24（水）、10月8（水））場所…大分市「ホルトホール」実践講座…第1回　11月15（土）16日（日）横岳キャンプ場と鋸山、第2回　12月20（土）21日（日）九重ヒュッテと泉水山、三俣山。

＊清掃登山・九重山…10月25（土）大曲～三俣山～坊ガツル、26日（日）坊ガツル～雨ヶ池越～指山自然観察路～長者原）参加者8名。

＊山の安全を祈る集い…8月3日（日）荒天のため会場を法華院の観音堂に移して実施　参加者21名。

＊スズタケ枯死とシカの食害調査…6月7日（土）及び10月4日（土）本谷山の西稜線の定点観測場所（大分植物研究会と

共同作業）。

《共益事業》

月例山行　テーマ「九州の名山を登る」

＊5月18日（日）貫山（711・6m）（福岡県）　11名参加。

＊6月15日（日）釈迦ヶ岳（1231m）、御前岳（1209m）大分県・福岡県　9名参加。

＊7月20日（土）鳴子川沢登り（九重山）　6名参加。

＊8月30日（土）福智山（900・5m）福岡県　8名参加。

＊9月13日（土）鞍岳（1117・8m）ツームシ山（1064m）熊本県　18名参加。

＊10月12日（日）祖母山（1756・4m）韓国交流登山。

＊10月31日（金）～11月3日（火）宮之浦岳（1936m）永田岳、黒味岳、モッチョム岳、愛子岳　6名参加。

＊1月18日（日）俵山（1095・0m）熊本県　16名参加。

＊2月21日（土）22日（日）仰烏帽子山（1301・7m）熊本県　13名参加。

＊3月15日（日）丹助岳（815m）、鏡山（645m）宮崎県　8名参加。

＊10月25（土）26（日）（坊ガツル・あせび小屋　合宿）参加者8名。

＊韓国山岳会蔚山支部との交流登山…10月11日（土）～13日（月）交流会…11日（土）場所：荻の里温泉　山行…12（日）祖母山（13日予定の越敷岳、緩木山は台風により中止）参加者…30名　韓国よりの参加15名（通訳1名含）。

＊忘年山行及び忘年会…　12月13日（土）・桑原山（1408・0m）（矢立峠と奥ヶ迫双方から交差縦走）14日（日）・椿山（659・0m）、佩楯山（753・8m）忘年会…13日（土）：直川村「旅館やまもと」　31名参加。

《支部協賛事業》

＊尾瀬…時期　5月31日（土）～6月2日（月）　6名参加。

＊ネパール・ゴーキョピーク…時期…10月8日（水）～26日（日）7名参加。

《広報活動》

＊支部報の発行…4月25日・65号、7月25日・66号、10月25日・67号、1月25日・84号。

支部は全支部の中でも平均年齢がもっとも若い支部となっているが、26年度は19歳1名を含む40歳代以下の会員3名を迎えることができた。また、現在支部青壮年部を立ち上げるため準備中で、これを機に若年会員の奮闘を大いに期待したい。

（飯田　勝之）

■宮崎支部

《概況と総括》

平成26年度は、支部の年間事業計画に基づきほぼ順調に活動を推進することができた。

平成27年7月には支部創立30周年を迎えるため、式典＝記念山行・記念誌発行などの諸準備を進めるとともに定例山行、こども登山教室、一般登山愛好者との交流登山や支部森づくり活動、地域と市民活動創出活性化などの公益事業に積極的に取り組み、支部の活性化に努めた。

《会議》

＊4月12日（土）通常総会　出席57名（当日出席45名、委任状12名）。

＊毎月第1木曜日役員・委員長等会議（出席延べ106名）。

＊毎月第1木曜日定例登山研究会（出席延べ377名）。

＊支部30周年記念事業実行委員会（4回開催延べ出席37名）。

《定例山行》

＊4月17日（木）追悼登山・玄武山　参加23名。

＊4月26日（土）・27日（日）新入歓迎登山・市房山・天包山　参加22名。

＊5月10（土）五葉岳　参加22名。

＊5月18（日）第3回「ときめき宮崎の山歩き in 釈迦ヶ岳」一般参加30名・会員18名（公益）。

＊6月8日（日）高千穂峰　参加26名。

＊7月5日（土）新百姓山　参加26名。

＊8月19日（火）～20日（水）第17回こども登山教室　鹿児島県稲尾岳

参加生徒17名・会員13名（公益）。

＊9月7日（日）古祖母　参加16名。

＊10月18日（土）刀剣山　参加4名。

＊10月18日（土）・19日（日）第30回全国支部懇談会　参加11名。

＊11月1日（土）～2日（日）第30回宮崎ウエストン祭　高千穂町三秀台　参加宮崎支部22名、一般参加約100名。

記念登山比叡山　参加宮崎支部20名（公益）。

＊12月13日（土）清掃登山・双石山　参加21名（公益）。

＊1月10日（土）荒平山・丸目山　参加22名。

＊2月14日（土）・15日（日）第8回宮崎・熊本支部交流登山小松山、

飫肥城跡など見学・散策　参加36名。

＊2月28日（土）米の山　参加13名。

＊3月1日（日）諸塚山山開き　参加13名（一般参加400名）

＊支部30周年に向けての記念事業（県内神話にゆかりのある30山座の踏査）。

《自然保護環境保全事業（公益）》

＊5月25日（土）わくわくの森づくりⅢ下草払い（支部団体会員）参加5名。
＊7月21日（日）宮崎支部田野の森下草払い　参加9名。
＊9月8日（日）宮崎支部田野の森下草払い　参加11名。
＊9月29日（日）わくわくの森づくりⅢ下草払い（支部団体会員）参加3名。
＊3月9日（日）わくわくの森づくりⅢ　補植（支部団体会員）参加4名。
《支部活動写真パネル展示及び山の日制定ＰＲ（公益）》
＊11月29日（土）・30日（日）第20回宮崎市中央公民館まつり会場展示　参加26名（一般参加延べ１００８名）。
＊3月21日（土）地域と市民活動「来てみないよ！みんなで輪っしょい！みやざき」会場パネル展示　参加10名（一般参加約１９００名）。
《出版》
＊宮崎支部報　4回発行。
＊4月1日48号、7月1日49号、10月1日50号、1月1日51号発行　各Ａ4判・8ページ２００部。

（末永　軍朗）

委員会の活動報告

■総務委員会

毎月第1・第3の月曜日に定例の委員会を開催し、そのほかに各行事の打ち合わせや事前準備のために年十数回、臨時の委員会や作業日を設け、担当する業務を15名の委員で分担をしながら取り組んでいる。

公益社団法人としてⅢ年目を迎え、業務や手続きについてもだいぶ整備されてきたが、まだ改善しなければならない課題も残されている。総務委員会は、本会の運営と管理部門を担当する部門として個々の事業に対応しつつも、組織の質的充実と円滑化を図るために、存在するいくつかの問題に対し根本的な解決を目指し取り組んだ。

本年度は、従来曖昧であった総務委員会と本部事務局の役割分担を明確にし、主管する年次晩餐会、新入会員オリエンテーション、説明会、同好会関連の業務に主体的に取り組むとともに、事務局主管の業務である総会、支部長会議、支部合同会議についても円滑な会議運営ができるよう事務局を補佐した。

本年度取り組んだ主な活動を以下に挙げる。

1　新入会員オリエンテーション　7月5日（土）参加者41名

新入会員に対し日本山岳会の組織と活動、山岳傷害保険、ルームや図書室、上高地の山岳研究所の利用方法、ホームページの活用、各委員会や同好会の説明をし、日本山岳会について理解し充実したクラブライフを過ごしてもらう為に毎年行っている行事で、本年度は入会者の多い時期に合わせ開催したことで、出席者も多く入会から間を持たずに説明を行えたことで大きな効果をあげることができた。

2　同好会連絡会　7月7日（月）19同好会出席、6同好会欠席

同好会の活発な活動を促すとともに、業務上必要な事項の連絡、意見交換等を行なうために同好会代表者による連絡会で、ルームの使用ルール、新しいコピー機の使い方等を説明した。各同好会の問題点についての意見交換がなされ、高齢化とメンバー減少、活動の不活発化の問題が明らかになった。

3　ＪＡＣオリジナルグッズの製作と販売

会員からのアンケート等の結果も踏まえ、要望の多いダウンジャケット、ダンベスト、バンダナ、帽子、ワッペン、クラブタイ等を製作し販売した。また、在庫の管理方法の改善をした。

4　支部合同会議　9月20日（土）、21（日）プラザエフ（四ッ谷）

従来、年頭に支部の事務局担当者を集め行ってきた「事務局担

当者会議」と通常総会当日の「支部長会議」を「支部合同会議」として再構成し、各支部の支部長、事務局長が参加する会議とした。支部長31名、事務局長32名の他、本部から会長、副会長、常務理事会メンバーら7名と総務委員の計88名が参加した。「会務報告」「各支部の活動報告」の他、「支部活性化」や「支部友制度」に関して事例が報告され、その報告をもとに活発な議論を行うことができた。来年度以降も同様の形態で行う予定である。

5　平成26年度年次晩餐会　12月6日(土)　京王プラザホテル[新宿]

510名出席

会員の要望等も踏まえ昨年までと会場を変更した。そのために事前調整や会場整備に入念な準備を必要としたが例年よりも出席者が増加したにもかかわらず滞りなく円滑に運営することができた。秩父宮記念山岳賞受賞者、海外遠征隊（学生部女子ムスタン登山隊2014）による講演会、図書交換会、アルパインスケッチクラブとプロ画家による山岳絵画展示会を併催した。

6　支部長会議　12月6日（土）　京王プラザホテル　47階会議室

年次晩餐会当日の10：30より開催し、会務報告、次年度の全国支部懇談会の案内（四国支部）、会員制度及び安全登山についての意見交換等を行った。

7　説明会　2月27日　出席者13名

入会希望者に本会の活動や仕組みを知ってもらい入会を勧めるため、また、新入会員が短期間で充実したクラブライフを送れるようにすることを目的として本年度より隔月で開催することにした。支部やクラブのパンフレットを配布する等、今後更に充実をはかってゆく。

（今田　明子）

■図書委員会

まずこの機会に、日本山岳会の図書室の蔵書（閲覧が自由な本）について、おおまかな説明から始めたい。

図書室の本は予算の関係もあって、とくに和書についてはほとんど寄贈に依存しているのが実情である。では「この本は、ぜひ図書室に」という本が、出版社から寄贈されてこない場合はどうするか。「会員に薦めたい本ですから、寄贈してください」という依頼を出すのである。たとえ一般受けはしない本でも、山岳図書館として所蔵し後世に残す必要があると思われる本を見逃さないよう、委員会としては日頃から新刊本へのアンテナを磨いておかなければならない。

また、図書室の棚に毎月（または季節ごとに）並ぶ山岳雑誌も、出版社の好意で代々、寄贈し続けてもらっているものである。主な雑誌では『山と溪谷』『ROCK & SNOW』（以上、山と溪谷社）、『新ハイキング』（新ハイキング社）、『山の本』（白山書房）が継続的に、そして『岳人』は東京新聞から新しい版元のモンベルへ依頼をし直して棚に並んでいる。若い会員むけに枡出版社からの『PEAKS』と『ランドネ』の寄贈もはじまったので、ぜひ活用してもらいたい。

日々届く、これらの本や雑誌を分類しデータ化して図書室に収める作業は、基本的には事務局が行っており、図書室の蔵書は長い間のその積み重ねから成り立っている。ちなみに雑誌の場合は、散逸しないように年度ごとに合本して保管してあり、一部をのぞいては創刊号から、自由に手にとって読むことができる利点がある。

さて、以上の基本的な事務局の作業をベースとして、図書委員会では月例の委員会を開催し、次の点を主な議題としている。

1　図書室や蔵書についての事務局からの報告

新刊本の受入れ状況や利用状況を中心とした報告を、事務局から受けている。日常で発生するさまざまな問題点も、この場で議題にあがる。

2　会報『山』の「図書紹介」図書の選定

新刊本の中から、紹介する本と執筆者を選定し、その後に執筆依頼から入稿までを行う。原則として、毎号3点の掲載を予定しており、会報編集委員会との連携が欠かせない。

3　行事の企画・検討

2014年度の図書委員会の行事は左記の3企画であった。

1　第41回・山岳史懇談会

「編集長・辰野勇氏が語る―新生『岳人』がめざすもの」

9月19日（金）開催。

2　第43回山岳図書を語る夕べ

「探検家・角幡唯介さんが語る―〝探検〟と〝本〟」

10月3日（金）開催。

3　第32回・図書交換会

年次晩餐会での開催も3年目となって定着した。出品本は350冊、ほとんど完売。12月6日（土）開催。

（三好　まき子）

■『山岳』編集委員会

本会の機関誌『山岳』第百九年（2014年）は、昨年同様のスタッフで編集作業が行なわれ、7月下旬に刊行された。

表紙は3年目となる塚本静雄さんの版画「菜種搾りの風景」だったが、真に残念なことに塚本さんは6月、今号をご覧になることなくご逝去された。わずか3回だけのご登場だったが、心より御礼申し上げ、ご冥福をお祈りしたい。

「記録」欄は、久しぶりに未踏峰の初登頂記録を掲載することができた。青山学院大学山岳部隊による、南西壁からのアウトライアー（ジャナク・チュリ）東峰初登頂で、同大学の執念が実った登山だった。一方、中国四川省・横断山脈の未踏の岩峰群で、かつてのザイル仲間たちが3つのチームを組み、気ままにクライミングを楽しんだのが慶應義塾山岳部の登山隊。それぞれ隊の性格は異なるが、同じ釜の飯を食った仲間たちのチームだからこそ醸し出される雰囲気が伝わってきて、楽しさを共有できた読者が多かったことだろう。

「調査・研究」欄では、地元在住の安間荘会員により、富士山におけるスラッシュ雪崩と積雪のスラッシュ化に起因する山岳遭難事故の恐ろしさについてレポートしていただいた。これにより24名もの命が奪われた１９７２年春の、日本近現代史上最大の山岳遭難事故の真相があらわになり、改めてその危険が実感されたことであった。

また、児玉茂・元『山岳』編集長による70ページもの労作「木暮理太郎と『山岳』編集」は、創刊号から前年号までの表紙とともに『山岳』におけるＪＡＣの登山の流れを俯瞰し、近代登山史上におけるその存在の大きさを解説していただいた。ＹＯＵＴＨ　ＣＬＵＢを中心に若い会員が増えている今日、ぜひとも味読していただきたい一文。

そのほか南井英弘会員による「憧憬のヒマラヤ登山」や緑爽会シンポジウム「高橋健治と妻ローゼ・レッサの生涯」など、読み応えのある構成であったと自負している。今後とも内容の充実に努め、会員の皆さんに楽しみ、学んでいただける『山岳』にしていきたい。

なお、昨年度の製作費総額は４５９万７００９円で、前年比１０５万２６６６円増となっている。これは２０１３年と比べ１４４頁も増頁となっていることと、印刷・製本費のほか特に発送費が大幅にアップしているのが主原因である。内訳は製作費３０８万４２０円、発送費88万３５１９円、封筒代24万４８７４円、編集費32万４０００円、その他経費６万４１９６円。印刷部数は５４００部である。

（節田　重節）

■会報編集委員会

昨年度もこれまで同様、毎月20日に20ページの会報を発行してきた。総会報告を掲載する7月号と晩餐会の報告をする12月号については、例年通り24ページに増やしたほか、話題の多かった1月号と10月号も24ページとした。

公益社団法人として新たに会が取り組んでいるプロジェクトや、若手会員を増やし活動を充実させているＹＯＵＴＨ　ＣＬＵＢなどの話題に多くページを割いた。またここ数年深刻化している財政問題についても、3号に渡って連載し、問題がどこにあるのか、また今後の解決策案を示してもらった。また、大学山岳部やワンダーフォーゲル部の現状に関して、2号に渡って巻頭記事を作った。その際には、全国の大学の部にアンケートの協力もしてもらっている。部活動の低迷が指摘されて長いが、大学によってはとても活発な活動をしていることもわかり、今後の日本山岳会、ひいては日本の登山社会の若返りにも希望が持てるように思えた。

一方で、登山社会全般にわたるテーマ、時事性のあるもの、今日の日本の登山社会の現象などに踏み込む機会が少なかったことが、反省である。とくに御嶽山噴火後に、火山に関する話題をとりあげる期を逸してしまった。

連載は、資料委員会による「日本山岳会所蔵資料紹介」と医療委員会による「Climbing & Medixine」があったが、資料委員会の連載は８

２４号で終了。このような文化的な読み物が少ないだけに残念であったので、これに続くようなテーマを探したいと考えている。

今年度は、会内部の話題だけでなく、広く登山全般の話題を扱えるように努力したい。

編集作業にあたっているのは、編集人の柏澄子と原邦三、担当理事の節田重節副会長の2名。委員は10人で構成されており、2月に委員会を開催し、今年度を振り返り、次年度以降の展望について話し合った。

なお、昨年度の製作費総額は８８０万５２８６円で、前年比６７万５６４３円の増加となっている。これは4頁増の月が数ヶ月あったことと、発送費の値上がりによるもの。内訳は製作費３１８万２４２９円、発送費３６９万１５８８円、発送作業費１０１万５６７６円、帯封代１６万２６７２円、編集費７２万７５６円、その他経費３万２１６５円。毎月の平均印刷部数は５６００部である。収入は表２・３と月平均13枠の記事中広告によるもので、年に数回、単発で記事中広告が入ることもある。

（柏　澄子）

■――YOUTH　CLUB

YOUTH　CLUBとは２０１２年に発足した委員会で、現役の大学山岳部員やワンゲル部員とその指導者で構成される学生部。登攀志向が強い39歳以下の若手会員で構成され、リーダー養成を目的とする青年部。59歳以下の会員で構成され、登攀以外の各種登山を展開するワンダーフォーゲル部。またこれらを統括運営するボードグループからなる。発足の目的は当会の高齢化および会員減少化に対応したものだったが、高齢化に伴う財政悪化が顕在化し、対処できていない状態である。また、運営の自立化は、構成員の大半が学業や仕事を抱えて時間的あるいは経済的に制約され、帰属意識もそれほどないことから、次なる方策が必要とされている。

YOUTH　CLUB全体としては一般向けに講習会を実施している。年間を通して行う初級の「登山講習会」（机上・実地）と中級クラスを対象にした冬季の「雪山入門教室」である。前者は机上延べ２１２人、実地延べ85人だった。参加希望者が多く、早く締め切ってしまうことが何度かあった。

【学生部】

現在約20の団体が加盟している。毎年11月にマラソン大会とクライミング大会。6月にセルフ・レスキュー講習会。2月にアイスクライミング講習会を実施した。

特記すべきことは、9月23日に当会の１１０周年記念事業の一環として、学生部女子ムスタン登山隊がマンセイル峰（６２４２ｍ）の初登頂に成功したことだ。井上（武蔵野大）、長谷川（創価大）、中村（筑波大）、三島（弘前大）各会員、アドバイザー谷口会員の編成だった。２０１５年度も部員の少ない学校が集まって「連合軍」で秋にヒマラ

ヤ遠征の予定がある。

最後になるが、学生部の委員長だった学習院大の吉田さんおよび土山さんを2月に事故で失ったことは哀惜の念に堪えない。あわせて報告しておきたい。

【青年部】

現在35名が在籍していて、新しい社会人山岳会として若手登山者の育成を進めている。国立登山研修所の後援を得て、シルバーウィークに剱沢で「全国安全登山普及講習会」を実施している。全国から集まる中堅・若手会員とともに剱岳東面のバリエーション・ルートを登りながら、ともに登山の技量、判断力を高めながら、地方支部ＹＯＵＴＨとの交流を行っている。四国支部を訪問し、石鎚山登山や沢登りで交流を深めた。２０１５年度は広島支部訪問を計画している。

冬季は国立登山研修所本館を借用し、「全国雪崩講習会」を実施したり、「雪山入門教室」のリーダー・マネージャーとしても活動している。そのほか、毎週のように登攀、縦走、山スキー、沢登り等活発に活動している。

【ワンダーフォーゲル部】

現在１００名弱が在籍している。例会に加え、月例山行、ステップアップ講習会が2系統、個人山行などが毎月行われている。月例山行は経験を積むために担当を交替して行い、北海道、岩手、白馬、奥日光などの山へ登った。ステップアップ講習会は青年部へのステップアップを図るものとリーダーに向けて技術の習得を図るものがあり、それぞれ数名がステップアップを果たしている。また同好会を作る動きも出ており、バックカントリークラブ（ＢＣＣ）が正式に同好会登録を行なったのをはじめ、現在複数のグループがまとまりつつある。

なお、これまで例会でミニ講習会を行ってきたが、時間的な制約があるため、２０１５年度からは毎月アースプラザ（ＩＣＩ石井スポーツ）でワンゲル部対象の講習会を行なうことにした。

ワンゲル部は若手会員増強のための橋頭堡となり、新入会員の受け皿となっている。今後はさらに部員を増やすことが要請されているが、運営人員が圧倒的に不足しており、退会者を抑えることが喫緊の課題となっている。

（野澤　誠司・永田　弘太郎）

■　自然保護委員会

トピックは二つ。

一つは広島でアジア・国内の他団体と行った広島山岳平和祭への参加、その中で日本山岳会の自然保護全国集会を開催したことである。アジアを含めた他団体とコラボレーションして行事を開催することは、これまでしばらくなかったことであり、運営企画段階から考えてもいなかったような問題が出てくるなど苦労も多かったが、当会だけでなく他団体と一緒になって大きな行事を開催できたことは、得難い経験となったに違いない。

もう一つは南アルプスにおけるリニア中央新幹線工事の関連であ

る。長野県大鹿村在住の佐藤明穂会員による問題提起がなされたあと、静岡支部が他団体と合同で静岡県、静岡市に意見書を提出するなど、久しぶりに大規模開発による自然破壊が取りざたされた。予想される大井川水域の水量の大幅な減少、二軒小屋の上流に廃棄される予定の残土処理の問題、さらに長野県側における工事用道路。他に電磁気による影響はないのかなど、この工事はこれまでの大規模開発問題とは違った形で自然保護とはどうあるべきかを考えさせてくれる。今後も自然保護委員会として注視していくことが必要だろう。

「自然保護全国集会の開催」

広島で２０１４年アジア山岳連盟総会・創立20周年記念式典と併せて広島山岳平和祭が行われるのに合わせ、11月22日（土）に鶴学園広島校舎で行われた。参加者はおよそ80名、ＮＨＫチーフプロデューサー・井上恭介氏による「里山資本主義　里山が宝の山にかわる瞬間」と題する基調講演のあと、宮城支部柴崎会員から「宮城県の山地および丘陵における放射線量測定結果」、静岡支部白鳥会員からは「リニア中央新幹線工事の南アルプス自然環境に与える影響」が発表され、参加していた会員にそれぞれの問題を訴えた。夕方は広島市文化交流会館に場所を移し、アジア各国および日本国内の他山岳団体の会員たちと交流を深めた。

翌日は他山岳団体と合同で広島山岳平和祭に出席し、原爆慰霊碑に花束を手向け、午後はアステールプラザ中ホールで登山と自然保護をテーマとする国際山岳フォーラムに参加。

3日目となる11月24日は広島支部会員の案内で広島は宮島主峰、弥山を歩き、解散となった。これまで経験のなかった他山岳団体とのコラボレーション行事だったため、企画運営では苦労が絶えなかったが、終わってみると非常に良い行事が行えたと感じる。

「機関紙「木の目草の芽」の発行」

隔月刊で１１０～１１５号を発行。テーマは自然保護全国集会の案内と報告、リニアで注目が集まっている南アルプスの自然保護など。

「山岳写真データベース」

高山植生の昔の記録を保存するため、過去に撮影した写真を集めたうえで整理・公開し、新旧写真の比較から高山帯の植生変化の実態を明らかにするデータベース。写真や位置情報等のデータ募集や整理を進めるため、委員会内部だけでなく山岳会内部や他山岳団体に対しても協力要請を行っている。

「山岳団体自然環境連絡会」

日本山岳協会、東京都山岳連盟、日本勤労者山岳連盟、ＨＡＴ―Ｊ、山のエコー、日本山岳ガイド協会、日本山岳会の自然保護担当者が月一回、情報交換を行なっている。

会議には外部の自然保護関係者も出席し、環境省国立公園課の課長・職員と「国立公園内でのトレランの取り扱い」などについて意見交換を行なった。

（近藤　雅幸）

■ 科学委員会

1　委員会内の役割分担と委員の増減

２０１４年度の委員会内の役割分担は２０１３年度の体制を継続した。藤本慶光委員が逝去され、新たに長岡正利、稲垣哲郎両委員が就任された。

2　科学委員会ホームページ（ウェブサイト）の強化

委員の老齢化すなわち、新委員が増えない原因の一つとして、山岳会会員への委員会活動の広報不足が指摘されている。２０１４年度も前年度に引き続き、科学委員会ホームページ（ウェブサイト）の強化を行なった。本委員会の目的である科学的登山（山の多面的理解とそれによる安全登山）の啓蒙に結び付けばと願っている。

3　共益事業としての活動

①　例会

年間の通常活動としては月1回第3木曜日にルームで例会を行っている。内容は委員会の課題、事業内容の準備・反省、本部からの要請等の検討を中心として行った。２０１４年度から登山の科学についてのセミナーも定例化した。

②　「暑気払いの会」及び「新年会」

8月の例会は、「暑気払いの会」として日比谷高校の同窓会館（星陵会館）で開催。会に先立って日枝神社の植物の見学を行った。

1月には「新年会」を夏と同じ星陵会館で行った。

③　研修山行

11月30日（土）に探索山行の下見を兼ねて、入笠山で実施。地形、地質を中心とした観察を行った。

4　公益目的事業

①　探索山行

6月14、15日（土・日）に「活火山浅間山の噴火歴を訪ねる」として実施。一般参加者を含め39名が参加。活火山浅間山の噴火歴、噴火現象を理解する目的で、噴出物を直接観察（特に１７８３年噴火）し、黒斑山と小浅間山に登頂。火口周辺規制中の浅間山本峰を間近から観察した。火山の専門家である福岡委員による説明と宿でのセミナーは好評であった（山行の詳細は会報「山」２０１４年7月号に掲載の報告を参照ください）。

②　フォーラム「登山を楽しくする科学（Ⅶ）」

3月14日（土）にフォーラム「登山を楽しくする科学（Ⅶ）」を立正大学品川校舎で開催。長岡正利氏（国土地理院）の「白山を歩いて、その花々、火山と地質、白山信仰と山麓での暮らし」、安田昌弘氏（日本気象協会）の「天気予報と異常気象」、福岡孝昭委員の「活火山の登山」の3つの話題に一般参加者を含め１３０名が聴き入った。最後の「活火山の登山」は9月の御嶽山の噴火後であったこともあって、特に好評であった。

5　その他

上記の活動により、委員の増強が進み、山岳会の会員増にも寄与できることを期待している。

科学委員会では、活動の一環として支部活動における登山の科学に関連する講演会等に講師の派遣協力を考えている。遠慮なくご相談賜りたい。

（福岡　孝昭）

■医療委員会

医療委員会の目的は医学の知識の不足から起こる遭難について啓発活動を行ない、遭難を未然に防ぐことである。

楽しく安全な山登りをするためには、山ではどのように身体に負担がかかるか、どのような病気やケガが起こるか、どのようにそれらに対処したらよいかを知る必要がある．委員会のメンバーは日本登山医学会や日本山岳文化学会山岳医学医療分科会の会員である。

委員会の主な活動は、一般社団法人日本登山医学会の支援、日本山岳文化学会山岳医学医療分科会支援、会報「山」の医療コラム（Climbing&Medicine）の執筆である。山岳会員の山登りを医学的にサポートする。

1　第34回一般社団法人日本登山医学会学術集会報告

平成26年5月31日-6月1日、自由学園明日館（東京都豊島区）で夏井正明学術集会長のもとで開催された。学術集会のテーマは、「登山者の安全・安心を支える」－ビギナーからトップクライマーまで、で夏井正明会長が会報「山」8月号（No.831）に報告した。

2　第35回日本登山医学会学術集会支援

臼杵尚志学術集会長のもとで、会期平成27年5月23日-24日、テーマ「その向こうを見る」として開催される。学術集会の内容は、次年度に報告する。

3　会報 Climbing&Medicine に関して

1）会報 Climbing&Medicine・62　マダニが媒介する新たな感染症の発生　秦　和寿　会報5月号（No.828）

2）会報 Climbing&Medicine・63　山での心肺蘇生　齋藤　繁　会報7月（No.830）

3）会報 Climbing&Medicine・64　登山と睡眠薬　村上和子　会報9月号（No.832）

4）会報 Climbing&Medicine・65　蚊が媒介するデング熱　秦　和寿　会報12月号（No.835）

5）会報 Climbing&Medicine・66　登山と温泉のすすめ　村上和子　会報2月号（No.837）

4　その他：医療委員会開催時のテーマ

平成26年9月6日開催

1）第34回日本登山医学会学術集会の報告

2）海外高所登山隊の携行医薬品の紹介

3）医療委員会として、110周年記念山岳医療シンポジウムの開催に関して

4）その他：

（1）神尾委員の近況活動の資料が送付されたので、紹介した。

（2）秦和寿委員が、〝衛生動物標本〟を回覧し、標本の内容を解説した。〝デング熱〟に関する話題提供があった。

平成26年11月27日開催

1）特別参加していただいた山本良三氏から日本山岳会医療委員会の沿革について紹介していただいた。

2）110周年記念シンポの進捗状況

3）出席者の近況報告

5　今期の委員：担当理事・野口いづみ、委員長・浜口欣一、委員・大野秀樹、稲村道子、神尾重則、藤枝和夫、村上和子、小清水敏昌、秦　和寿、上小牧憲寛、梶谷　博、斎藤　繁、角田　元、植木貞一郎、山内佳奈

（浜口　欣一）

■集会委員会

1　委員会の使命について

周知の通り、日本山岳会は所定の目的を達成すべく、国内外の山に登ることをその事業の大きな柱としています。

集会委員会の使命は、理事会の指導のもと、この「国内外の登山の企画、実施」を行い、会員相互の交流、懇親等を図るとともに、会員一人一人の登山技術の習得、向上を目指すことにあると考えています。日本山岳会の本部委員会にあって、最も日本山岳会らしい委員会のひとつであると自負しております。

そのなかで、「集会」委員会の名称は、委員会の使命及び活動実態とはそぐわないものとなっているため、平成27年度からは名称を「山行」委員会と変更することとしています。

引き続き、「山行委員会」は、「会員のお役に立つ、会員のためになる委員会」を目指し、国内・海外の山行、講習会、懇話会等の企画、運営、実施に取り組んでいきます。

2　活動方針

右記使命と会員ニーズを踏まえ、当面の活動方針を以下の通り定めています。

（1）全国の会員が自由に参加でき、かつ楽しく有意義な山行を企画。山行にあたっては、何よりも「安全」に最大限配慮します。

（2）会員の圧倒的多数は、60歳代70歳代の会員です。その大多数の中高年会員を主な対象とした山行を実施します。山行以外にも安全登山に資する講習会等を企画します。

（3）軽いハイキングから日本アルプス縦走までの幅広い、積雪期も含めたオールラウンドな山行をおこないます。会員ニーズに応えた、日本山岳会らしいユニークな海外トレッキング・ツアーを企画します。

（4）何よりも「山を楽しむ」ことを最優先し、単に山に登るだけに留まらない、楽しい「プラスワン（植物、地形、文化、温泉等）の山行」を目指します。

（5）全国の支部、他の委員会等とも行事内容によっては、可能な限りコラボレーションを図っていきます。

3　活動内容

平成26年度の活動内容は以下の通りです。

6月　「登山リーダーのための救急救助講習会」　惠会員を講師に迎え、登山リーダーに求められるレスキュー技術の実技講習を実施」参加者21名。

6月　「フィンランド&スェーデンの最高峰登頂／驚異の海洋アルプスを訪ねる」

理事会のご承認を頂き、日本山岳会らしい海外山行を実施。スェーデンの最高峰に登頂。　参加者15名　11泊12日。

7月　「中央分水嶺の山旅」　霧ヶ峰～鉢伏山への縦走、ニッコウキスゲや八島湿原の花を楽しむ。　参加者9名　1泊2日。

8月　「立山カルデラ展望と立山氷河眺望ツアー」　氷河地形、立山カルデラの実際等を地元の学芸員の案内のもと具に確認ができ、学ぶところの多い山行となった。参加者19名　2泊3日。

9月　「北アルプス縦走第5回：裏銀座～笠岳」　水晶、鷲羽も含め予定した全ての山の頂を踏むことができ、参加者全員が満足の山行。　参加者10名　4泊5日。

9月　「南アルプス縦走第2回：聖岳～上河内岳～光岳」　天候にも恵まれ、南ア南部の稜線漫歩を満喫した。　参加者15名　4泊5日。

11月　「集会委員会研修会」　伊香保温泉で実施。1年の振り返りと年間計画の作成を策定した。2日目は、掃部ヶ岳・榛名富士ハイクを実施した。

12月　「晩餐会記念懇親山行」　山中湖畔の鉄砲木の頭～高指山ハイクを楽しむ。好天に恵まれ富士山の絶景を堪能した。参加者１０１名　バス利用日帰り。

1月　「スキー懇親会」　赤倉スキー場で実施。2泊3日　参加者21名。

2月　「高峰高原スノートレック」　黒斑山、高峰山へのスノートレックを楽しむ。間近に迫る浅間山が雄大。1泊2日　参加者11名。

3月　「編笠山冬山山行」　天候には恵まれなかったが、雪を踏みしめ編笠山に全員登頂を果たす。1泊2日　参加者9名。

以上10回の山行等を企画、実施した。総参加者は、２３１名。

右記月次別山行等の他、毎月第一水曜日、ルームにて月例ミーティングを担当理事にご出席を頂き、実施しています。なお、各山行等の詳細については日本山岳会ホームページの「集会委員会」の項をご覧ください。

（清登　緑郎）

■山岳研究所運営委員会

平成26年度における委員会活動のトピックスとして、前年度より手掛けている上水道敷設プロジェクトについて、その進捗状況を報告する。

旧来、上高地山岳研究所（以下、山研と略す）では、上水道設備を持たず飲料水ほか生活用水を善六沢の水源から得ていたが、平成18年7月に上高地で記録的な豪雨となった際、善六沢の上流で土石流が発生し、その影響で山研の水事情が一変した。毎年の雪融けシーズンや大雨により沢の水が濁りやすくなったため、その都度取水制限を余儀なくされ、山研利用者の多い7月に2週間に亘り断水となったこともある。

また、山研から約５００ｍ上流にある水源設備（取水口、サージタンク）や浄水槽への砂の堆積量も増加したことから、管理人が頻繁に一人で山に入り除去作業を行わなければならなくなった。利用者の不便はともかく、管理人の安全管理の面で問題があるため、上水道設備の整備について具体的な検討を行うこととなった。

当初、敷地内に井戸を設置する案と上高地梓川右岸専用水道事業組合（以下、水道組合と略す）より供給を受ける案の2案で検討を開始したが、長期的な保守性の観点のほか、予算確保（水道組合加入、給水管敷設工事）の目処が立ったことにより、後者で計画を進める方針とした。

上高地・河童橋での測量

山研まで水道を引くためには、最寄りの既設給水管まで新たに給水管を埋設し迎えに行く必要があるが、山研周辺に既設給水管は無く、最も近い接続ポイントは河童橋の袂付近で山研から約３１０ｍの距離がある。上高地で工事を行う場合、①環境省への許可申請（自然公園法、国有財産法）、②文化庁への許可申請（文化財保護法）、③林野庁への許可申請（森林法）が必須。さらに既設埋設物（電力・電話・光ケーブルおよび下水管等）について、所有者（管理者）への確認と場合によっては工事の際の立会い依頼も必要である。

水道組合への加入相談からスタートし、各官庁への事前相談、上高地町会総会での工事概要説明、現地測量、各種許可申請書の作成、許可書の受領および工事業者との契約等を経て漸く着工に漕ぎ着けたのが平成26年12月。給水管埋設ルートの大半が遊歩道上にあり上高地開山期間中の工事は不可能なため、積雪の状況を見ながら平成27年４月下旬の開山前に山研の敷地手前まで埋設を終わらせている。

現在、山研敷地部分（約40ｍ）の作業許可を林野庁に申請しており、敷地内は許可が下りれば開山期間中の工事が可能とのことなので、６月中の完工を目指している。

（柴山　信夫）

ロングトレイルはじめました。	根津貴央	誠文堂新光社	1600	A5	191p
我が山と南極の生涯	平山善吉	茗溪堂	4000	A5	363p
和気アルプス他登山詳細図　全32	守屋益男	吉備人出版	500	685 × 1000	1p
我、遠遊の志あり－笹森儀助風霜録	松田修一	ゆまに書房	2200	四六判	374p

ヤマケイ新書　山の名作読み歩き	大森久雄/編	山と溪谷社	880	新書判	301p
ヤマケイ文庫　大イワナの滝壺	白石勝彦	山と溪谷社	910	文庫判	315p
ヤマケイ文庫　おれたちの頂－復刻版　※漫画	堀内夏子	山と溪谷社	1000	文庫判	397p
ヤマケイ文庫　K2に憑かれた男たち	本田靖春	山と溪谷社	1000	文庫判	432p
ヤマケイ文庫　ザイルを結ぶとき	奥山　章	山と溪谷社	900	文庫判	445p
ヤマケイ文庫　第十四世マタギ松橋時幸一代記	甲斐崎　圭	山と溪谷社	910	文庫判	315p
ヤマケイ文庫　定本日本の秘境	岡田喜秋	山と溪谷社	950	文庫判	384p
ヤマケイ文庫　なんで山登るねん	高田直樹	山と溪谷社	880	文庫判	365p
ヤマケイ文庫　ふたりのアキラ	平塚晶人	山と溪谷社	880	文庫判	421p
ヤマケイ文庫　北極圏1万2000キロ	植村直己	山と溪谷社	1000	文庫判	453p
ヤマケイ文庫　「槍・穂高」名峰誕生のミステリー	原山　智	山と溪谷社	1000	文庫判	349p
山小屋の主人を訪ねて	高桑信一	東京新聞	1600	A5	255p
山、楽しんでますか？	鈴木みき	講談社	1200	A5	158p
山と妖怪－ドイツ山岳伝説考	吉田孝夫	八坂書房	4500	A5	382p
山に遊ぶ 山を想う	正津　勉	茗溪堂	1800	四六判	281p
山に登る前に読む本	能勢　博	講談社	800	新書判	190p
山のエマージェンシー	木元康晴	山と溪谷社	1000	四六判	123p
山のおつまみレシピ100	山と溪谷社ワンダーフォーゲル編集部/編	山と溪谷社	1000	四六判	128p
山のことば辞典	豊田和弘	河出書房新社	1500	四六判	191p
山の天気リスクマネジメント	猪熊隆之・廣田勇介	山と溪谷社	1000	四六判	127p
山の文芸誌「アルプ」と串田孫一	中村　誠	青弓社	3000	四六判	318p
山登りスタートBOOK	枻出版社/編	枻出版社	1000	B5	128p
山登りトラブル回避＆対処マニュアル	野口いづみ	大泉書店	1200	新書判	143p
山ふたり－鈴鹿・大峰・四国・山陰編	三輪敏広・三輪和恵	春風社	2000	A5	229p
山もよう 人もよう	荒井正人	白山書房	1600	四六判	267p
山よお前は美しすぎる　第二界　※写真集	川口邦雄	日本カメラ社	3500	258 × 214	
遊牧・移牧・定牧	稲村哲也	ナカニシヤ出版	3500	A5	406p
悠々山歩き―中海圏域からの日帰りコース	安藤哲夫	山陰中央新報社	1300	A5	133p
雪山入門	山と溪谷社ワンダーフォーゲル編集部/編	山と溪谷社	1000	四六判	128p
RISHIRI　※写真集	本間晶子	山と溪谷社	3500	A4	86p
六甲全山バイブル－山頂・三角点編	東　充	東　充	3000	A4	
六甲全山バイブル－登山道編	東　充	東　充	3500	A4	

秘景「黒部」―黒部渓谷と雲ノ平を取り巻く山々　※写真集	中村成勝	山と溪谷社	2520	B5	91p
福岡県の低山歩き　上	谷　正之	海鳥社	1500	A5	117p
富士山信仰と修験道	大高康正	岩田書院	9500	A5	473p
富士山大事典　188 のなぞとふしぎ　※児童書	富士学会/監	くもん出版	5000	280	143p
富士山の自然	富士山自然保護センター/編	ほおずき書籍	900	150 × 210	64p
富士山の自然史	貝塚爽平	講談社	800	文庫判	218p
富士山の光と影	渡辺豊博	清流出版	1600	四六判	197p
富士山バードウォッチングガイド	BIRDER 編集部/編	文一総合出版	1400	B5	96p
富士山を知る見るハイキングガイド	伊藤フミヒロ	パウダーガイド社	1580	A5	151p
不二之山　※写真集	井賀　孝	亜紀書房	3600	240 × 290	108p
富士の山旅	服部文祥	河出書房新社	760	文庫判	292p
芙蓉の人　新装版	新田次郎	文藝春秋	510	文庫判	283p
ふるさと富士名鑑	山と溪谷社/編	山と溪谷社	2200	A5	224p
ぼくは冒険案内人	近藤謙司	山と溪谷社	1400	四六判	237p
北海道スノーハイキング　最新版	北海道の山メーリングリスト/編	北海道新聞社	1800	四六判	239p
北海道登山口情報 350	全国登山口調査会/編	北海道新聞社	2000	A5	343p
北海道夏山ガイド３　東・北大雪、十勝連峰の山々	梅沢　俊	北海道新聞社	2300	四六判	287p
北海道山の花図鑑　新版－利尻島・礼文島	梅沢　俊	北海道新聞社	2000	四六判	231p
水と大気の科学－富士山頂の観測から	土器屋由紀子	NHK 出版	930	A5	159p
南アルプス詳細ルートガイド	枻出版社/編	枻出版社	1200	B5	141p
もっと登れる山の食料計画	芳須　勲	山と溪谷社	1000	四六判	127p
矢掛の山 登山詳細図	吉備人出版/編	吉備人出版	500	112 × 235	1p
焼岳小屋・小屋開け小屋締め	焼岳叢書制作委員会	三月社	1250	四六判	56p
八ヶ岳・北八ヶ岳 ベスト	JTB パブリッシング/編	JTB パブリッシング	1300	B5	127p
山男－畦地梅太郎版画集	畦地梅太郎	山と溪谷社	1500	四六判	91p
山グルメ	小雀陣二	枻出版社	1000	四六判	144p
ヤマケイ新書　アルピニズムと死	山野井泰史	山と溪谷社	760	新書判	188p
ヤマケイ新書　今そこにある山の危機	岩崎元郎	山と溪谷社	760	新書判	189p
ヤマケイ新書　「体の力」が登山を変える	齋藤　繁	山と溪谷社	800	新書判	203p
ヤマケイ新書　体験的山道具考	笹原芳樹	山と溪谷社	800	新書判	285p
ヤマケイ新書　ドキュメント御嶽山大噴火	山と溪谷社/編	山と溪谷社	800	新書判	237p
ヤマケイ新書　モンベル７つの決断	辰野　勇	山と溪谷社	760	新書判	189p
ヤマケイ新書　山の常識釈問百答	釈　由美子	山と溪谷社	880	新書判	230p

東北の山スキー特選ガイド	松澤節夫/編	白山書房	1850	A5	178p
富山の百山	富山県山岳連盟/編	北日本新聞社	2500	A5	259p
名もなき山へ	深田久弥	幻戯書房	2600	四六判	317p
奈良名山案内	エスカルゴ山の会関西支部	ナカニシヤ出版	2000	A5	207p
南極観測隊のしごと	国立極地研究所南極観測センター/編	成山堂書店	2400	四六判	244p
南極日和－極地を「仕事」にする人たち	『南極日和』制作班	実業之日本社	1700	四六判	197p
西上州の山ベスト 100 ルート	佐藤　明	白山書房	1900	A5	223p
日本三百名山登山ガイド　新版 上	日本山岳会/編	山と溪谷社	2300	B5	215p
日本三百名山登山ガイド　新版 中	日本山岳会/編	山と溪谷社	2300	B5	199p
日本三百名山登山ガイド　新版 下	日本山岳会/編	山と溪谷社	2300	B5	223p
日本湿原紀行	日野　東	信濃毎日新聞社	1700	A5	223p
日本探検	梅棹忠夫	講談社	1330	文庫判	441p
日本 200 名山を登る　101～200 の山々　上巻	昭文社編集部/編	昭文社	1500	A5	142p
日本 200 名山を登る　101～200 の山々　下巻	昭文社編集部/編	昭文社	1500	A5	142p
日本のクマゲラ	藤井忠志	北海道大学出版会	2800	A5	188p
日本の森 100	日本森林インストラクター協会	山と溪谷社	1980	A5	223p
日本の山 究極の絶景ガイド	西田省三	山と溪谷社	1800	B5	135p
日本の霊山読み解き事典	西海賢二・時枝務・久野俊彦/編	柏書房	3800	四六判	619p
日本百名山を登る　上巻	昭文社編集部/編	昭文社	1500	A5	174p
日本百名山を登る　下巻	昭文社編集部/編	昭文社	1500	A5	175p
日本百名山登頂記	池田　和	日本図書刊行会	1850	四六判	321p
日本ボルダリングエリア　上	北山　真	山と溪谷社	2000	A5	143p
日本ボルダリングエリア　下	北山　真	山と溪谷社	2000	A5	156p
日本名山花紀行	坂口壯一	長崎文献社	1600	A5	163p
日本ロングトレイルガイドブック	アウトドア編集部/編	山と溪谷社	2300	A5	175p
野反湖 花と散策ガイド	中村一雄	ほおずき書籍	1000	四六判	103p
野の花写して三十年	安原修次	ほおずき書籍	1500	四六判	193p
ハイキングを楽しむ本　関西版	京阪神エルマガジン社/編	京阪神エルマガジン社	820	B5	119p
はじめてのさっぽろ山ガール	バビシェ・マウンテン・クラブ	北海道新聞社	1500	A5	157p
はじめよう親子登山	戸高雅史	山と溪谷社	1000	四六判	128p
8000 メートルの 6 座へ	河野千鶴子	桐書房	1500	四六判	182p
春を背負って　※小説	笹本稜平	文藝春秋	590	文庫判	361p
播隆入門	黒野こうき	まつお出版	1200	A5	127p
日帰り山あるきベスト 130　関東周辺	JTB パブリッシング/編	JTB パブリッシング	1900	A5	319p

鈴木みきの山の足あと	鈴木みき	山と溪谷社	1200	A5	127p
ずっこけ中年ハイカー、槍ヶ岳を目指す	トランピン編集部/編	地球丸	1500	A5	160p
スピードハイク入門	片山貴晴	山と溪谷社	1600	A5	159p
すべての山を登れ。	井賀　孝	淡交社	1700	四六判	255p
世界遺産にされて富士山は泣いている	野口　健	PHP 研究所	760	新書判	232p
世界遺産富士山を行く！	藤井勝彦	メイツ出版	1600	B5	128p
世界最高峰を見る一人旅	山下倫一	遊人工房	2500	170 × 190	59p
世界自然環境大百科９　北極・南極・高山・孤立系	大澤雅彦/総監訳	朝倉書店	28000	A4	481p
世界文化遺産・富士山に登ろう	村上壽久	新風書房	880	四六判	85p
絶景山岳写真入門	園部大輔	玄光社	1500	A5	146p
絶景山　※写真集	ピーピーエス通信社/編	パイインターナショナル	1500	200 × 200	107p
宣教師ウェストンの観た日本	ウォルター・ウェストン/著　山本秀峰/訳	露蘭堂	3200	A5	231p
タープの張り方火の熾し方	高桑信一	山と溪谷社	2400	A5	238p
大雪山－わが心の山　※写真集	市根井孝悦	山と溪谷社	3800	250 × 310	107p
高橋庄太郎の北アルプス縦走記	高橋庄太郎	枻出版社	1200	A4	144p
高みへ－大人の山岳部	笹倉孝昭	東京新聞	1800	B5	190p
だからこそ、自分にフェアでなければならない。―プロ登山家・竹内洋岳のルール	小林紀晴	幻冬舎	1300	四六判	185p
達人が教える山旅に行こう。―Sports Graphic Number Do	文藝春秋/編	文藝春秋	850	A4	121p
愉しき山談義－深田久弥対話集	深田久弥・ほか	幻戯書房	2600	四六判	285p
単独行の TIPS100	山と溪谷社ワンダーフォーゲル編集部/編	山と溪谷社	1000	四六判	127p
地図のない場所で眠りたい	高野秀行・角幡唯介	講談社	1500	四六判	293p
地図読み はじめの一歩	平塚晶人	山と溪谷社	1000	四六判	127p
チャキの償い―新田次郎、藤原ていの娘に生まれて	藤原咲子	山と溪谷社	1600	四六判	221p
頂上を目指さない富士山さんぽ	鈴木　渉	ポプラ社	1300	A5	79 p
ツアー事故はなぜ起こるのか	吉田春生	平凡社	760	新書判	198p
強く美しい体をつくる登山エクササイズ	西田育弘・須藤律子/監	誠文堂新光社	1800	A5	191p
剱　※写真集	志水哲也	山と溪谷社	3700	250 × 310	95p
剱沢幻視行―山恋いの記	和田城志	東京新聞	1700	A5	365p
テッペン！　死ぬまでに見たい、富士山頂からの絶景　※写真集	小野庄一	講談社	1500	170 × 190	95p
テント泊の山道具	枻出版社/編	枻出版社	1200	A4	144p
東海日帰りハイキング パーフェクトガイド	愛知山歩きの会	メイツ出版	1600	A5	128p
東京近郊トレッキング BEST コースガイド	昭文社/編	昭文社	1200	A5	143p
東京周辺お泊まりゆる登山	西野淑子	実業之日本社	1300	A5	124p

黒部の山賊・定本	伊藤正一	山と溪谷社	1200	四六判	221p
県境の山々－船形連峰、二口・面白山山塊の自然と人	篠崎隆夫	創栄出版	1300	A5	155p
厳選雪山登山ルート集	西田省三	山と溪谷社	2300	B5	168p
ここが見どころ日本の山	小泉武栄	文一総合出版	2200	四六版	223p
心に映る山	中村好至惠	白山書房	1800	230	113p
小島烏水－山の風流使者伝　下	近藤信行	平凡社	1700	ＨＬ判	385p
後藤伍長は立つていたか－八甲田山“雪中行軍”の真相を追う	川口泰英	北方新社	2000	四六判	295p
子どもとはじめる日帰りハイキング	森田秀巳	JTB パブリッシング	1300	A5	160p
最新山道具メンテナンスBOOK	枻出版社/編	枻出版社	1200	B5	144p
サバイバル登山入門	服部文祥	デコ	2900	四六判	287p
サロベツ湿原と稚咲内砂丘林帯湖沼群	冨士田裕子	北海道大学出版会	4180	B5	252p
山麓から登る世界文化遺産富士山	佐々木　亨	山と溪谷社	1800	A5	119p
四国の山歩きベスト50	日本山岳会四国支部/監	高知新聞社	1600	A5	150p
四国の山歩き61山	日本山岳会四国支部/監	愛媛新聞社	1600	A5	150p
四国遍路と山岳信仰	中国地域史研究連絡協議会/編	岩田書院	1600	A5	131p
実践テクを極める！ボルダリングレベルアップのコツ	渡邉数馬/監	メイツ出版	1800	B5	144p
湿原の博物誌	高田雅之/編　辻井達一/著	北海道大学出版会	3400	A5	341p
湿地への招待－ウェットランド北海道	北海道ラムサールネットワーク/編	北海道新聞社	1500	四六判	271p
弱者の勇気	栗城史多	学研パブリッシング	1390	四六判	243p
写真記録富士山　復刻	武田久吉	日本ブックエース	27500	A4	390p
写真でみる山と日本人　復刻	田中義広	日本図書センター	32000	A4	385p
写真と年表で見る九州登山史	松尾良彦	櫂歌書房	1900	B5	192p
週末登山詳細ルートガイド	枻出版社/編	枻出版社	1200	B5	141p
春夏秋冬ハイキング	アウトドア編集部/編	山と溪谷社	2000	A5	237p
白神山地マタギ伝－鈴木忠勝の生涯	根深　誠	七つ森書館	2800	四六判	274p
知るほどに訪ねたくなる歴史の百名山	武田櫂太郎	大和書房	680	文庫判	285p
白い山	川畑正紀	北國新聞社	1000	四六版	155p
白馬岳　彩りの瞬間　※写真集	中西俊明	山と溪谷社	1800	A5	92p
新釈日本百名山	樋口一郎	東京新聞	1700	A5	319p
信州山歩き地図　中信編・南信編	中嶋　豊	信濃毎日新聞社	2000	A4	168p
新ルート　岡山の山百選　※改訂版	福田明夫/編	吉備人出版	2500	240	227p

今西錦司伝－「すみわけ」から自然学へ	斎藤清明	ミネルヴァ書房	4500	A5	396p
いま「山の日」制定－「山の日」祝日化の論点　第２版	衛藤征士郎・丸川珠代・務台俊介/監	書苑新社	1800	A5	151p
彩りを感じて　※写真集	山岳写真同人四季	東京新聞	2750	250 × 260	95p
岩木山を科学する	「岩木山を科学する」刊行会/編	北方新社	2000	B5	219p
インドア・ボルダリング練習帖	ROCK & SNOW 編集部/編	山と溪谷社	1600	B5	111p
インド・ラダック－チベット仏教への道　※写真集	杉本　基/撮影　近藤誠宏/監	岐阜新聞社	2500	220 × 250	131p
ウェストンが来る前から、山はそこにあった	菊地俊朗	信濃毎日新聞社	1300	四六判	272p
植村直己・夢の軌跡	湯川　豊	文藝春秋	1500	四六判	261p
美しい山を旅して	ＫＩＫＩ	平凡社	1500	A5	124p
駅からハイキング　関西	加藤芳樹	山と溪谷社	1500	A5	127p
駅から山登り　関東 55 コース	石丸哲也	山と溪谷社	1800	A5	127p
ＮＨＫ「にっぽん百名山」もう一度見たい名山 10 選	ＮＨＫ「にっぽん百名山」制作班	宝島社	1100	A4	127p
エベレスト、登れます。	近藤謙司	産業編集センター	1300	四六判	327p
大谷光瑞とスヴェン・ヘディン	白須淨眞	勉誠出版	6500	230	448p
奥多摩登山詳細図（西編）全 112 コース	守屋二郎	吉備人出版	880	685 × 1000	1p
尾瀬の博物誌	大山昌克	世界文化社	3000	A5	191p
乙女の山登り　春夏秋冬	山と溪谷社アウトドア出版部/編	山と溪谷社	1560	A5	143p
想い出の山日記　富嶽 48 景	村田信典	文芸社	1500	四六判	111p
俺山 その後	浜村　信	書苑新社	1500	四六判	214p
海外トレイルランニング	鏑木　毅/監	誠文堂新光社	1600	A5	191p
関西トレッキング BEST コースガイド	昭文社/編	昭文社	1200	A5	143p
簡単にできる！山のファーストエイド	悳　秀彦	山と溪谷社	1600	A5	127p
関東の名山ベスト 100　決定版	JTB パブリッシング/編	JTB パブリッシング	1600	A5	255p
奇跡	辰野　勇	ネイチュアエンタープライズ	2000	A5	265p
北アルプス北部ベスト	JTB パブリッシング/編	JTB パブリッシング	1300	B5	127p
北アルプス南部・中央アルプス・御嶽山ベスト	JTB パブリッシング/編	JTB パブリッシング	1300	B5	111p
吉備路の山全山縦走図　全４コース	守屋益男	吉備人出版	400	343 × 685	1p
京の絶景と名所旧跡めぐり	京都府山岳連盟/監	淡交社	1600	A5	127p
極北の大地に住む　※児童書	関野吉晴	ほるぷ出版	1800	230 × 240	59p
草津白根山　花と自然ガイド	湯田六男	ほおずき書籍	1000	四六判	103p
熊山登山詳細図　全 55 コース　※改訂版	守屋益男/編	吉備人出版	500	230 × 112	1p
雲の上に住む人―富士山須走口七合目の山小屋から	関　次廣	静山社	1600	四六判	124p

山岳図書目録（2014 年）

日本山岳会図書委員会

登山ブームの再来と言われているなか、「山の日」の祝日化も決定しました。それに伴ない、特に初心者向けの入門書や山道具の案内本の出版が増えています。これはここ数年間の傾向で、「こんな入門書やガイドブック、ファッションや山道具のカタログを、山岳書として目録に掲載する必要があるのだろうか」と疑問を持ちながらのリストアップでした。

しかし、この出版の現状は、今の時代の登山状況を如実に反映しています。時代を表すひとつの資料として後世に残すことも『山岳』の使命ではないかと思い、2014 年の目録を作成しました。

実際にはかなりのムック本を最終段階で削ったため、掲載数は昨年とあまり変わりませんが、山の本の出版点数は増えているようです。

また、価格は継続して本体価格を掲載しています。消費税が導入されてから税率だけではなく、内税になったり外税になったりの繰り返しのなか、本体価格を掲載し続けてきたことは評価できると自負しています。

＊判型が数字で表示されているものの単位は mm（天地×左右）、価格は原則として本体価格ですが、ごく一部税込みになっています。

山岳図書目録

書　名	著者名	発行所	価格	判型	ページ数
【あ】					
アウトドアで使うためのアクティブ動画カメラ入門	河原塚英信	山と溪谷社	1200	四六判	119p
あこがれの名山　ルート＆難所ガイド	中田真二	学研パブリッシング	1900	B5	191p
あこがれの名山　北アルプス完全ガイド	中田真二	学研パブリッシング	1900	B5	159p
天晴れ！ニッポン山風景　※写真集	隔月刊『風景写真』編集部/編	風景写真出版社	1850	190 × 260	87p
アメリカ国立公園しぶしぶトレッキング旅	鹿野美絵	幻冬舎ルネッサンス	1200	四六判	207p
アルプス交番からのメッセージ	谷口凱夫	山と溪谷社	1600	四六判	301p
いい山いい宿いい温泉	日本秘湯を守る会/監	山と溪谷社	1700	A5	221p
泉山登山詳細図　全 19 コース	守屋益男	吉備人出版	500	230 × 115	1p
いつまでも山に登れる山筋ゴーゴー体操	石田良恵	桐書房	1500	A5	95p
伊吹山 花散歩	橋本　猛	サンライズ出版	2400	200 × 210	232p

― 掲載広告一覧 ―

カモシカスポーツ（表２）

山と溪谷社

㈱モンベル

アルパインツアーサービス㈱

アライテント

槍ヶ岳山荘ほか

立山室堂山荘

早月小屋

雷鳥沢ヒュッテ・ロッジ立山連峰

㈱好日山荘

カシオ＜ PRO TREK ＞

㈱アトラストレック（表３）

山と自然を、より豊かに楽しむために
登山者必読の山の知識を新書で提供

ヤマケイ新書

アルピニズムと死 山野井泰史
僕が登り続けてこられた理由 YS001

モンベル7つの決断 辰野勇
アウトドアビジネスの舞台裏 YS002

山の名作読み歩き 大森久雄 編
読んで味わう山の楽しみ YS003

体験的山道具考 笹原芳樹
プロが教える使いこなしのコツ YS004

今そこにある山の危険 岩崎元郎
山の危機管理と安心登山のヒント YS005

「体の力」が登山を変える 齋藤繁
ここまで伸ばせる健康能力 YS006

狩猟始めました 安藤啓一・上田泰正
新しい自然派ハンターの世界へ YS007

ベニテングタケの話 堀博美
魅惑的なベニテングタケの謎に迫る YS008

ドキュメント御嶽山大噴火 山と溪谷社 編
証言と研究から大災害の現場を分析 YS009

現代ヒマラヤ登攀史 池田常道
8000メートル峰の歴史と未来 YS010

山の常識 釈問百答 釈由美子
教えて！山の超基本 YS011

唱歌「ふるさと」の生態学 高槻成紀
ウサギはなぜいなくなったのか？ YS012

山岳遭難の教訓 羽根田治
実例に学ぶ生還の条件 YS013

明解日本登山史 布川欣一
エピソードで読む日本人の登山 YS014

もう道に迷わない 野村仁
道迷い遭難を防ぐ登山技術 YS015

日本の森列伝 米倉久邦
自然と人が織りなす物語 YS016

山のパズル 山と溪谷社 編
脳トレで山の知識が身につく YS017

香料商が語る東西香り秘話 相良嘉美
香水、バラ、調香師―香りの歴史を辿る YS018

木を知る・木に学ぶ 石井誠治
なぜ日本のサクラは美しいのか？ YS019

日本の山はすごい！ 山と溪谷社 編
「山の日」に考える豊かな国土 YS020

日本の山を数えてみた 武内正・石丸哲也
データで読み解く山の秘密 YS021

山と溪谷社 〒101-0073 東京都千代田区神田神保町1丁目105番地
カスタマーセンター☎03-6837-5018／http://www.yamakei.co.jp

ラップランドブーツ

日帰りハイキングや富士登山など
幅広く活躍する全天候型フットウエア。
軽量で柔らかな履き心地ながら、
適度な剛性のシャンクプレートがねじれを防ぎ
スムーズな足入れと優れたフィット感を実現。
フィールドでの軽やかなフットワークを
サポートします。

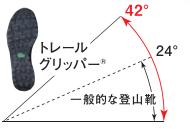
GUARANTEED TO KEEP YOU DRY GORE-TEX

TRAIL GRIPPER

＃1129348
ラップランドブーツ Men's
税抜き価格 ¥14,800（+税）
重　　量：424g（25.5cm・片足）
サ イ ズ：24.0～29.0cm（0.5cm刻み）

抜群のグリップ力を発揮
トレールグリッパー®（アウトソール）

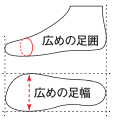
独自の高機能ソールを採用することで、湿潤状態の急傾斜（42°）でも滑らない驚異的なフリクション性能を発揮します。
※自社調べ



一般的な登山靴との
傾斜角の比較

日本人のための靴作り
独自開発のラスト（靴の木型）

日本人の足形に合わせて、靴の要となるラストを独自開発することで、抜群のフィット感を実現。足なじみが良く、快適な歩行をサポートします。



日本人の足に
合わせたラスト

Photo:Kennan Harvey

株式会社モンベル【お問い合わせ】モンベル・カスタマー・サービス 0088-22-0031／TEL.06-6536-5740
※フリーコールは携帯・IP電話からはご利用いただけません。
www.montbell.jp

クムジュンからタムセルクを仰ぎ見る（ネパール・エベレスト街道）

オリジナルツアーを企画してみませんか。

山岳会、ハイキング・クラブ、山のお仲間などで企画するオーダーメイドの山旅を承ります。ぜひ、お気軽にお申し付けください。

山旅の出張説明会も承ります。

山のお仲間がお集まりの時に、世界の山旅に精通したスタッフが資料や映像をお持ちして皆さまの元へご説明にお伺いします。

ツアーカタログをご請求ください。

世界中の山旅を掲載したカタログを無料でお送りいたします。お電話またはEメールにてお気軽にお申し付けください。ホームページでも最新のツアー情報をご覧いただけます。

世界の山旅・辺境の旅を手がけて46年の実績

日帰りハイキング

トレッキング

登頂ツアー

ネイチャリングツアー

旅行企画・実施

観光庁長官登録旅行業第490号／一般社団法人 日本旅行業協会 正会員

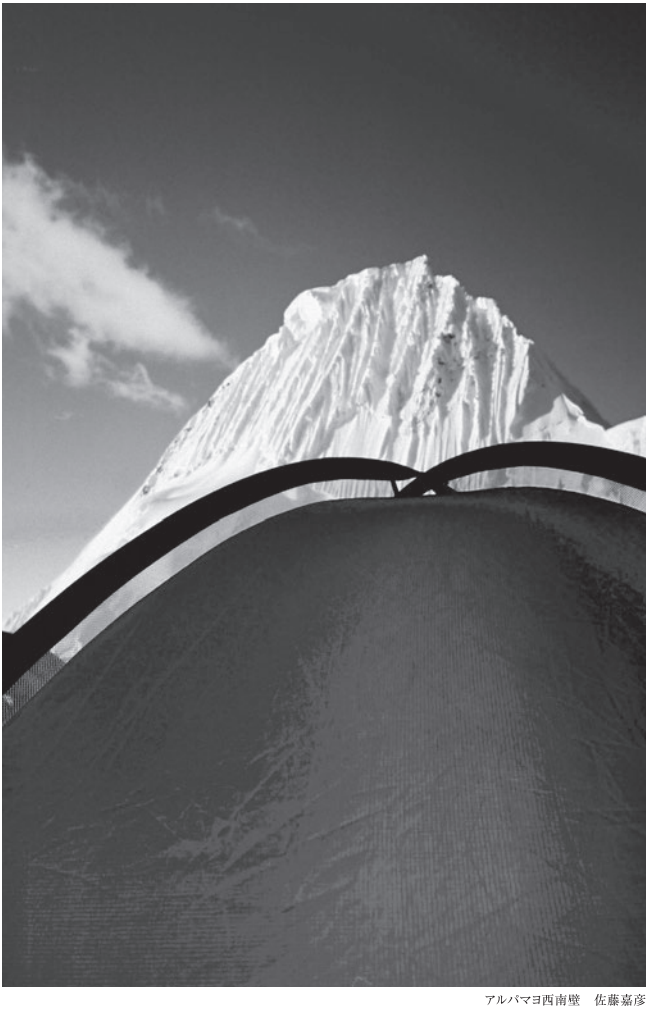
アルパイン ツアーサービス 株式会社

本社／〒105-0003 東京都港区西新橋2-8-11（第7東洋海事ビル4階）

東京／☎03(3503)1911　大阪／☎06(6444)3033
名古屋／☎052(581)3211　福岡／☎092(715)1557
札幌／☎011(711)7106（㈱りんゆう観光）　仙台／☎022(265)4611（転送）
広島／☎082(542)1660（転送）

アルパインツアー　検索　ツアーカタログをご請求ください。　●営業時間・平日9:30～18:30 土日祝/定休

HP www.alpine-tour.com　info@alpine-tour.com



アルパマヨ西南壁　佐藤嘉彦

ウラヤマでも、ヒマラヤでも

Made in JAPAN

ARAI TENT

www.arai-tent.co.jp | 04-2944-5855

槍ヶ岳山荘
☎090-2641-1911

槍沢ロッヂ
☎0263-95-2626

南岳小屋
☎090-4524-9448

大天井ヒュッテ
☎090-1401-7884

岳沢小屋
☎090-2546-2100

[事務所]
〒390-0813
長野県松本市埋橋1-7-2
TEL.(0263)35-7200
FAX.(0263)35-0637

◆ バスターミナルより徒歩10分

立山室堂山荘
TEL 076-463-1228
http://www.murodou.co.jp

◆ 馬場島から一直線 早月尾根は立派な立山杉や多くのお花も楽しめる尾根で、花の百名山にも載っています。

早月小屋 [シーズン中] TEL.090-7740-9233
[メール予約可] hayatsuki@ma.net3-tv.net
http://www.net3-tv.net/~hayatsuki/ 〒930-1406 富山県中新川郡立山町芦峅寺63-2 佐伯謙一

奥大日岳をバックに隣接するヒュッテ(左)とロッジ

雷鳥沢温泉 ◆ 湯量豊富な登山とハイキングの宿

雷鳥沢ヒュッテ
[シーズン中] TEL.076-463-1753

ロッジ立山連峰
[シーズン中] TEL.076-463-6004

事務所 TEL.076-482-1617（FAX兼） http://www.raichozawa.net

登山・アウトドア用品　好日山荘

北海道	サッポロファクトリー店：011-522-5513
北海道	グラビティリサーチ札幌：011-206-1323
関東	川崎ダイス店：044-272-7717
関東	横浜西口店：045-317-1049
関東	ららぽーと横浜店：045-933-9100
関東	さいか屋横須賀店：046-854-5501
関東	さいか屋藤沢店：0466-24-1977
関東	千葉パルコ店：043-301-2380
関東	MAMMUT&MILLET 店：043-301-5444
関東	伊勢丹松戸店：047-710-3552
関東	ららぽーと TOKYO-BAY 店：047-402-2590
関東	LALA ガーデンつくば店：029-850-1265
関東	宇都宮パルコ店：028-678-2940
関東	浦和パルコ店：048-764-9701
東京	銀座 好日山荘：03-6228-5018
東京	ロックランズ店：03-5659-0808
東京	玉川ガーデンアイランド店：03-3700-2550
東京	新宿東口店：03-6380-1515
東京	池袋西口店　：03-5958-4315
東京	調布パルコ店：042-426-8055
東京	瑞穂店：042-568-7913
東京	イオンモール東久留米店：042-497-4101
	町田店：042-739-7017
信越・北陸	松本パルコ店：0263-31-0580
信越・北陸	白馬店：0261-85-2560
信越・北陸	福井北四ツ居店：0776-52-7015
信越・北陸	金沢西インター大通り店：076-292-8020
信越・北陸	富山豊田東店：076-426-1001
信越・北陸	マリエとやま店：076-471-7005
信越・北陸	新潟亀田店　：025-378-5123
東海	静岡パルコ店：054-275-0018
東海	浜松メイワン店：053-482-7805
東海	名古屋駅前店：052-414-7100
東海	名古屋栄店：052-269-1821
東海	春日井店：0568-86-0051
東海	イオンモール各務原店：058-380-0014
東海	四日市店：059-329-7500
近畿	大津パルコ店：077-514-8758
近畿	京都店：075-708-5178
近畿	FOOTWEAR 店 :075-353-6880
近畿	北大路ビブレ店：075-366-6552
近畿	LoFT＆好日山荘 京都ロフト店：075-708-5812
近畿	ならファミリー近鉄百貨店奈良店：0742-93-4555
近畿	紀三井寺店：073-448-2001
近畿	神戸本店：078-265-2045
近畿	有馬アウトレット店：078-958-5150
近畿	Web プラス店：078-954-8006
近畿	川西店：072-744-0315
近畿	イオンタウン姫路店：079-280-5520
近畿	明石大久保店：078-938-2010
大阪	グランフロント大阪店：06-6485-7230
大阪	なんば店：06-6645-0630
大阪	近鉄あべのハルカス店：06-6616-7811
中国	岡山駅前店：086-801-3133
中国	広島ゼロゲート店：082-569-6031
九州	アイム小倉店：093-512-3455
九州	福岡パルコ店：092-791-6654
九州	Mt GEAR 大名：092-406-7850
九州	福岡トリアスアウトレット店：092-410-9390
九州	太宰府インター店：092-513-0030
九州	熊本パルコ店：096-288-3652
九州	マルヤガーデンズ鹿児島店：099-805-0124

常圧低酸素室稼動中
銀座 好日山荘
グランフロント大阪店
瑞穂店
※詳しくは直接店舗までお問い合わせください。

クライミングジム　グラビティリサーチ

【GRAVITY RESEARCH SAPPORO】TEL：011-206-1323
北海道札幌市中央区北二条東 4 丁目　サッポロファクトリー 1 条館 1F
【GRAVITY RESEARCH NIIGATA】TEL：025-378-5123
新潟県新潟市江南区五月町 2-7-22
【GRAVITY RESEARCH TOKYO-BAY】TEL：047-404-8961
千葉県船橋市浜町 2-1-1　ららぽーと TOKYO-BAY 南館 3F
【GRAVITY RESEARCH MIE】TEL：059-329-7777
三重県四日市市諏訪栄町 6-4　スターアイランド 3F
【GRAVITY RESEARCH UMEDA】TEL：06-6485-7363
大阪大阪市北区大深町 3-1　グランフロント大阪ナレッジキャピタル 6F
【GRAVITY RESEARCH NAMBA】TEL：06-6645-0631
大阪府大阪市中央区難波千日前 12ー35　スイングヨシモトビル 3F、 4F
【GRAVITY RESEARCH KOBE】TEL：078-855-8043
兵庫県神戸市中央区磯上通 4-3-10　IPSX EAST 1F
【GRAVITY RESEARCH AKASHI】TEL：078-938-2010
兵庫県明石市大久保町ゆりのき通 2-3-1
イオン明石ショッピングセンター 2 番街 2 階
【GRAVITY RESEARCH OKAYAMA】TEL：086-801-3133
岡山県岡山市北区本町 6-36　第一セントラルビル1・2F

好日山荘は、全国60店舗。お近くの店舗情報はウェブサイトをご覧ください。　www.kojitusanso.jp　好日山荘
好日山荘WebShop本店も営業中　http://www.kojitusanso.com/　旬の登山情報をお届けします。 facebook 好日山荘

CASIO

PRO TREK
Feel the field

冒険心バージョンアップ。

PRW-6000Y-1JF
¥64,000＋税

［最新のトリプルセンサーVer.3］

方位
高度
気圧

自然の変化を素早く感知するトリプルセンサーVer.3搭載。
アナログで直感的に、デジタルで正確な情報認識が可能に。

電波ソーラー プロトレック PRW-6000

回しやすく、誤操作も防ぐ
大型簡易ロックリューズ

丈夫さと装着性を両立した
カーボンファイバーインサートバンド

道具としての美しさを求めた
デュアルレイヤードベゼル

- ○タフソーラー
- ○マルチバンド6（世界6局の標準電波に対応）
- ○気圧傾向インフォメーションアラーム
- ○10気圧防水
- ○ダブルLEDライト
- ○針退避機能

protrek.jp

公益社団法人　日本山岳会
The Japanese Alpine　Club
――1905(明治 38)年設立――
住所：〒 102-0081　東京都千代田区四番町 5-4　サンビューハイツ四番町

2014 年度役員・評議員・支部長名簿

会　　長	森　武昭			
副 会 長	節田　重節	黒川　　惠	古野　　淳	
常務理事	高原　三平	吉川　正幸	佐藤　　守	
理　　事	勝山　康雄	山田　和人	野口　いづみ	
	大槻　利行	落合　正治	川瀬　恵一	
	山賀　純一	直江　俊弐		
監　　事	吉永　英明	浜崎　一成		
評 議 員	田邊　　壽	村井　龍一	宮崎　紘一	
	山本　良三	成川　隆顕	尾上　　昇	
	神﨑　忠男	橋本　　清	小川　　武	
	贄田　統亜	今村　千秋	内田　　博	
	重廣　恒夫	大谷　　亮	南井　英弘	

支部長	北海道＝西山　泰正	青　森＝大久保　勉	岩　手＝菅原　敏夫
	宮　城＝佐藤昭次郎	秋　田＝今野　昌雄	山　形＝粕谷　敏矩
	福　島＝小林　正彦	茨　城＝浅野　勝己	栃　木＝山野井武夫
	群　馬＝田中　壮吉	埼　玉＝大久保春美	千　葉＝諏訪　吉春
	東京多摩＝竹中　　彰	越　後＝橋本　正巳	富　山＝山田　信明
	石　川＝中川　博人	福　井＝森田　信人	山　梨＝深沢　健三
	信　濃＝塚原　賢勝	岐　阜＝高木　基揚	静　岡＝大島　康弘
	東　海＝小川　　務	京都・滋賀＝田中昌二郎	関　西＝重廣　恒夫
	山　陰＝中井　俊一	広　島＝兼森　志郎	四　国＝尾野　益大
	福　岡＝中馬　董人	北九州＝伊藤久次郎	熊　本＝松本　莞爾
	東九州＝加藤　英彦	宮　崎＝末永　軍朗	

編集後記

お待たせしました。『山岳』第百十年（２０１５年）号をお届けします。日本山岳会創立１１０周年にふさわしい、盛りだくさんな号となりました。当初、例年どおり６月下旬の刊行を予定しておりましたが、１１０周年記念出版の『改訂　新日本山岳誌』の重版作業も手掛けておりまして、同時進行となってしまいました。刊行が遅れましたこと、心よりお詫び申し上げます。

さて、今号ですが「記録」欄は本当に久しぶりに２つの国内記録を載せることができました。１つは厳冬期の黒部川を横断したのち剱岳・八ツ峰主稜を縦走、早月尾根を下降したもので、中島健郎カメラマンのカラー口絵とともにお楽しみください。もう１本は北海道支部のオホーツク分水嶺完全踏査の記録で、同支部が総力を挙げて取り組んだプロジェクトのレポートです。

海外の記録では、第９回ピオレドール・アジアを受賞された谷口けい会員の、アラスカ・ルース氷河における38日間に及ぶクライミング・レポートと写真を掲載しました。谷口会員は、その後に続く学生部ムスタン女子登山隊でもアドバイザーとして参加していただき、大活躍の１年でした。

その学生たちによる登山報告は、学習院大学隊のザンスカール、東京農業大学隊のムスターグ・アタ、女子隊のムスタン、そして法政大学隊のアマダブラムをまとめて掲載しました。４隊とも海外登山助成金を交付された隊で、特に女子隊は多くのマスコミにも取り上げられ、明るい話題を提供してくれました。いずれにしても、対象の山のレベルはともかくとして、学生たちが海外の山に積極的に出かけて行って経験を積んでくることは、若いリーダーが不足している日本山岳会にとって、力強い限りです。

「調査・研究」では、宮城支部に異色のレポートをお送りいただきました。４年前の東日本大震災により発生した福島第１原子力発電所の放射能汚染の実態を克明に調査したもので、正に公益法人にふさわしい活動であると考えます。大変なご苦労であったと思いますが、福島県内の山々も含め、今後も継続して諸々ウォッチしていっていただきたいものです。

「読物」欄では、芳賀孝郎元副会長から「伝説のピッケル」にまつわる物語をお送りいただきました。この物語に関してはいろいろな所で紹介されておりますが、アルバータ峰初登頂90周年という節目の年にあたり、改めてまとめていただきました。

また、緑爽会・松本恒廣代表らのご要望により、昨年９月にご逝去された、元日本山岳会評議員で日本山岳協会事務局長などを務められた國見利夫会員の、緑爽会における講演を再録しました。戦中から戦後にかけての登山界の事情を知る人が少なくなってきている今日、山に情熱を傾けてきた、ある山男の軌跡を若い会員たちにも踏み締めていただければ、と考えております。

今号から表紙絵をお借りしたのは、岐阜県下呂市在住の田立泰彦会員（会員番号９２３３）です。岐阜県職員を定年退職後、武蔵野美術学園油絵本科に入学、若い学生たちと一緒になって絵を学ばれた方で、山の絵はもちろん、岐阜県内の古民家や全国の木造駅舎をスケッチ行脚されています。

（節田　重節）

〈訂正〉『山岳』第百九年号において誤りがありました。次のように訂正させていただきます。「スイス人岳友の自然回帰――その生涯」の文中、２７６頁下段の末尾から９行目「１９７６年」→「１９６３年」、同４行目「採録」→「再録」

『山岳』編集委員会
担当理事／委員長　　節田重節
委員　　成川隆顕、永田弘太郎、萩原浩司、小泉弘

山岳　第百十年（通巻一六八号）
二〇一五年八月三十一日発行

価三五〇〇円

発行所　公益社団法人　日本山岳会
東京都千代田区四番町五―四
サンビューハイツ四番町
（〒一〇二―〇〇八一）
電話　〇三―三二六一―四四三三
振替口座　〇〇一三〇―一―四八二九

発行人　森　武昭
編集人　節田重節

印刷所　株式会社　東京印刷

発売所　株式会社　茗溪堂
東京都千代田区三崎町三―二―一三
電話　〇三―三二二一―一八七〇
振替口座　〇〇一八〇―二―二四七二三

本誌掲載の記事、写真および地図の無断転載を禁じます。